

京都府遺跡調査概報

第 93 冊

国営農地(丹後東部地区)関係遺跡

- (1) 浅後谷南遺跡
- (2) 墓ノ谷古墳群第2次
- (3) 吉沢城跡

2 0 0 0

財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター

巻頭図版 1 浅後谷南遺跡



浅後谷南遺跡遠景（上空南から日本海を望む）



(1)浄水施設 1 検出状況 (東から)



(2)浄水施設 2 検出状況 (西から)

序

財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センターでは、京都府内の公共事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査を行ってまいりました。この間、当センターの業務の遂行にあたりましては、皆様方のご協力を賜り、厚く御礼申し上げます。

さて、発掘調査については、その内容を出来るだけ早く公表する必要があり、それに対応するために三種の刊行物を出しております。すなわち、発掘調査の速報と職員の論考等を『京都府埋蔵文化財情報』によって、発掘調査成果の概要報告を『京都府遺跡調査概報』によって公表しております。そして、特に著しい成果のあったものについては、『京都府遺跡調査報告書』を刊行しております。

本書は、『京都府遺跡調査概報』として、平成9～11年度に実施した発掘調査のうち、農林水産省近畿農政局の依頼を受けて行った浅後谷南遺跡・墓ノ谷古墳群第2次・吉沢城跡に関する発掘調査概要を取めたものであります。本書が学術研究の資料として、また、地域の埋蔵文化財への関心と理解を深める上で、何がしかのお役にたてば幸いです。

おわりに、発掘調査を依頼された各機関をはじめ、網野町教育委員会・弥栄町教育委員会などの各関係諸機関、ならびに調査に参加、協力いただきました多くの方々に厚く御礼申し上げます。

平成12年3月

財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター

理事長 樋口隆康

凡 例

1. 本書に収めた概要は、下記のとおりである。

国営農地(丹後東部地区)関係遺跡

- (1) 浅後谷南遺跡 (2) 墓ノ谷古墳群第2次
(3) 吉沢城跡

2. 遺跡の所在地、調査期間、経費負担者及び概要の執筆者は下表のとおりである。

	遺跡名	所在地	調査期間	経費負担者	執筆者
	国営農地(丹後東部地区)関係遺跡			農林水産省近畿農政局	
(1)	浅後谷南遺跡	竹野郡網野町公庄	平9.10.2～平10.2.26 平10.4.26～11.6	〃	石崎 善久 黒坪 一樹 福島 孝行
(2)	墓の谷古墳群第2次	竹野郡弥栄町鳥取	平10.5.11～5.28	〃	石崎 善久
(3)	吉沢城跡	竹野郡弥栄町字吉沢小字墓ノ谷	平11.5.18～9.29	〃	石尾 政信

3. 本書で使用している座標は、国土座標第6座標系による。

4. 本書の編集は、調査第1課資料係が当たった。

本文目次

国営農地(丹後東部地区)関係遺跡平成11年度発掘調査概要-----	1
(1)浅後谷南遺跡-----	3
(2)墓ノ谷古墳群第2次-----	187
(3)吉沢城跡-----	188

挿図目次

(1)浅後谷南遺跡

第1図 調査地分布図-----	1
第2図 調査地周辺遺跡分布図-----	4
第3図 平成9・10年度トレンチ配置-----	5
第4図 第2トレンチ平面図-----	6
第5図 第2トレンチ出土土器実測図-----	7
第6図 第3トレンチ平面図-----	8
第7図 第3トレンチ出土土器実測図(1)-----	9
第8図 第3トレンチ出土土器実測図(2)-----	10
第9図 第3トレンチ出土土器実測図(3)-----	11
第10図 第3トレンチ出土土器実測図(4)-----	12
第11図 第3トレンチ出土土器実測図(5)-----	13
第12図 第3トレンチ出土土器実測図(6)-----	13
第13図 第2・3・4トレンチ出土木器実測図-----	14
第14図 第4トレンチ平面図-----	15
第15図 出土土器実測図-----	15
第16図 第7トレンチ平面図-----	16
第17図 浄水施設1実測図-----	17
第18図 S D2012第1次調査出土土器実測図(1)-----	18
第19図 S D2012第1次調査出土土器実測図(2)-----	19
第20図 第7トレンチ出土木製品実測図-----	22

第21図	第2・7トレンチ出土木製品実測図-----	23
第22図	第7トレンチ浄水施設構成部材実測図-----	24
第23図	第8トレンチ平面図-----	25
第24図	第8トレンチ出土遺物実測図-----	26
第25図	A地区各土層断面図-----	29
第26図	下層遺構配置図-----	30
第27図	竪穴式住居跡SH01および出土遺物実測図-----	31
第28図	竪穴式住居跡SH02および出土遺物実測図-----	33
第29図	竪穴式住居跡SH18および出土遺物実測図-----	34
第30図	竪穴式住居跡SH19および出土土器実測図-----	35
第31図	竪穴状土坑SK2004実測図-----	36
第32図	竪穴状土坑SK2004出土遺物実測図-----	37
第33図	溝SD2010(新・古)・2011・2013実測図および溝SD2010(新・古)土層断面図-----	39
第34図	溝SD2010(新)・護岸施設2・堰状施設2実測図-----	40
第35図	溝SD2010(新)出土土器実測図(1)-----	41
第36図	溝SD2010(新)出土土器実測図(2)-----	42
第37図	溝SD2010(新)出土土器実測図(3)-----	43
第38図	溝SD2010(新)出土木製品実測図(1)-----	45
第39図	溝SD2010(新)出土木製品実測図(2)-----	46
第40図	溝SD2010(新)出土木製品実測図(3)-----	47
第41図	溝SD2010(新)出土木製品実測図(4)-----	48
第42図	溝SD2010(新)出土木製品実測図(5)-----	49
第43図	溝SD2010(新)出土木製品実測図(6)-----	50
第44図	溝SD2010(新)出土木製品実測図(7)-----	51
第45図	溝SD2010(新)出土木製品実測図(8)-----	53
第46図	溝SD2010(新)出土木製品実測図(9)-----	54
第47図	溝SD2010(新)出土木製品実測図(10)-----	55
第48図	溝SD2010(新)出土木製品実測図(11)-----	56
第49図	溝SD2010(新)出土木製品実測図(12)-----	57
第50図	溝SD2010(新)出土木製品実測図(13)-----	58
第51図	溝SD2010(新)出土木製品実測図(14)-----	59
第52図	溝SD2010(新)出土木製品実測図(15)-----	60
第53図	溝SD2010(新)出土木製品実測図(16)-----	61
第54図	溝SD2010(新)出土木製品実測図(17)-----	62
第55図	溝SD2010(新)出土装身具実測図-----	63

第56図	溝 S D2010(古)出土土器実測図	64
第57図	溝 S D2010(古)出土木製品実測図	65
第58図	溝 S D2011出土木製品実測図(1)	67
第59図	溝 S D2011出土木製品実測図(2)	68
第60図	溝 S D2011出土木製品実測図(3)	69
第61図	溝 S D2013遺物出土状況および出土遺物実測図	71
第62図	溝 S D2012・2011(古)・2015実測図および溝 S D2012土層断面図	73
第63図	溝 S D2012浄水施設 2 実測図	74
第64図	溝 S D2012出土土器実測図(1)	75
第65図	溝 S D2012出土土器実測図(2)	76
第66図	溝 S D2012出土木製品実測図(1)	80
第67図	溝 S D2012出土木製品実測図(2)	81
第68図	溝 S D2012出土木製品実測図(3)	83
第69図	溝 S D2011(古)出土土器実測図	84
第70図	S K2003遺物出土状況実測図	85
第71図	S K2003出土遺物実測図(1)	86
第72図	S K2003出土遺物実測図(2)	87
第73図	S K2003出土遺物実測図(3)	88
第74図	S K2003出土遺物実測図(4)	90
第75図	S K2003出土遺物実測図(5)	91
第76図	土器溜まり N 出土土器実測図(1)	96
第77図	土器溜まり N 出土土器実測図(2)	97
第78図	土器溜まり N 出土土器実測図(3)	98
第79図	土器溜まり N 出土土器実測図(4)	99
第80図	土器溜まり N 出土土器実測図(5)	100
第81図	土器溜まり N 出土土器実測図(6)	101
第82図	溝 S D2015出土遺物実測図	103
第83図	溝 S D2016(新)実測図	104
第84図	溝 S D2016(新)出土土器実測図(1)	105
第85図	溝 S D2016(新)出土土器実測図(2)	106
第86図	溝 S D2016(新)出土土器実測図(3)	107
第87図	溝 S D2016(新)出土土器実測図(4)	108
第88図	溝 S D2016(新)出土木製品実測図	109
第89図	溝 S D2016(古)・2017実測図	111
第90図	溝 S D2016(古)堰状施設実測図および土層断面図	112

第91図	溝 S D 2016(古)出土土器実測図(1)	-----	113
第92図	溝 S D 2016(古)出土土器実測図(2)	-----	114
第93図	溝 S D 2016(古)出土土器実測図(3)	-----	115
第94図	溝 S D 2016(古)出土土器実測図(4)	-----	116
第95図	溝 S D 2016(古)出土木製品実測図(1)	-----	117
第96図	溝 S D 2016(古)出土木製品実測図(2)	-----	118
第97図	溝 S D 2017出土土器実測図(1)	-----	119
第98図	溝 S D 2017出土土器実測図(2)	-----	120
第99図	溝 S D 2017出土木製品実測図	-----	121
第100図	包含層出土木製品実測図(1)	-----	123
第101図	包含層出土木製品実測図(2)	-----	124
第102図	包含層出土木製品実測図(3)	-----	125
第103図	包含層出土木製品実測図(4)	-----	126
第104図	包含層出土木製品実測図(5)	-----	127
第105図	包含層出土木製品実測図(6)	-----	128
第106図	包含層出土木製品実測図(7)	-----	129
第107図	包含層出土木製品実測図(8)	-----	130
第108図	上層遺構配置図	-----	131
第109図	掘立柱建物跡 S B 2001実測図	-----	132
第110図	掘立柱建物跡 S B 2002実測図	-----	133
第111図	掘立柱建物跡 S B 2003・2004および掘立柱建物跡 A 群出土遺物実測図	-----	134
第112図	掘立柱建物跡 S B 2005および出土遺物・土坑 S K 2001および出土遺物実測図	-----	135
第113図	掘立柱建物跡 S B 2006および出土遺物実測図	-----	136
第114図	掘立柱建物跡 S B 2007実測図	-----	137
第115図	掘立柱建物跡 S B 2008および出土遺物・掘立柱建物跡 S B 2009・2010実測図	-----	138
第116図	掘立柱建物跡 S B 2011・2012実測図	-----	139
第117図	段状遺構 S H 03および出土遺物実測図	-----	141
第118図	溝 S D 2001出土土器実測図	-----	142
第119図	溝 S D 2001出土木製品実測図	-----	143
第120図	各溝および包含層出土遺物実測図	-----	145
第121図	トレンチ北壁土層断面図	-----	147
第122図	遺構配置図	-----	148
第123図	S H 01平面・断面図、出土遺物実測図	-----	149
第124図	掘立柱建物跡配置図	-----	150
第125図	S B 01平面・断面図	-----	151

第126図	S B 02・03平面・断面図	151
第127図	S B 04・05平面・断面図	152
第128図	S D 02平面・断面図	153
第129図	S D 08平面・断面図	154
第130図	S D 08出土遺物実測図	156
第131図	S D 08出土遺物実測図	157
第132図	S D 08出土遺物実測図	158
第133図	S D 09およびN R 01第3遺構面遺構配置図	159
第134図	遺物出土状況図	159
第135図	S D 09出土遺物実測図	160
第136図	S D 09出土遺物実測図	161
第137図	S D 09出土遺物実測図	162
第138図	N R 01第1遺構面平面・断面図	164
第139図	N R 01第2遺構面平面図	165
第140図	N R 01出土遺物実測図	166
第141図	N R 01出土遺物実測図	167
第142図	出土遺物実測図	168
第143図	N R 01出土木製品実測図	172
第144図	N R 01・02出土木製品実測図	173
第145図	N R 01出土石製品・S D 06出土遺物実測図	175
第146図	S K 01・02・07平面・断面図	176
第147図	その他の遺構出土遺物	177

(2) 墓ノ谷古墳群

第148図	墓ノ谷古墳群トレンチ配置図	187
-------	---------------	-----

(3) 吉沢城跡

第149図	調査地および周辺遺跡分布図	189
第150図	土層断面図	190
第151図	遺構平面図	192
第152図	テラス状遺構S X 07実測図	193
第153図	土坑S K 10・01・08実測図	194
第154図	土坑S K 20実測図	194
第155図	出土遺物実測図・土器類	195
第156図	出土古銭拓影	196

第157図	出土遺物実測図(鉄器)-----	196
第158図	出土遺物実測図(石製品)-----	197
第159図	吉沢城跡縄張り推定図-----	198

付 表 目 次

国営農地(丹後東部地区)関係遺跡平成11年度発掘調査概要

第1表	平成11年度調査および所収遺跡一覧-----	2
(1)浅後谷南遺跡		
第2表	溝SD2012第1次調査出土土器観察表(1)-----	20
第3表	溝SD2012第1次調査出土土器観察表(2)-----	21
第4表	竪穴式住居跡SH01出土土器観察表-----	32
第5表	竪穴式住居跡SH02出土土器観察表-----	33
第6表	竪穴式住居跡SH19出土土器観察表-----	35
第7表	竪穴状土坑SK2004出土土器観察表-----	37
第8表	溝SD2012出土土器観察表(1)-----	77
第9表	溝SD2012出土土器観察表(2)-----	78
第10表	土坑SK2003出土土器観察表(1)-----	92
第11表	土坑SK2003出土土器観察表(2)-----	93
第12表	土坑SK2003出土土器観察表(3)-----	94
第13表	土坑SK2003出土土器観察表(4)-----	95
第14表	溝SD2015出土遺物観察表-----	103
第15表	NR01出土鍛冶関係遺物一覧表(1)-----	170
第16表	NR01出土鍛冶関係遺物一覧表(2)-----	171

図 版 目 次

(1)浅後谷南遺跡

図版第1	浅後谷南遺跡遠景(上空南から日本海を臨む)
------	-----------------------

- 図版第2 浅後谷南遺跡試掘トレンチ全景(垂直空中写真・上が北)
- 図版第3 (1) 1 トレンチ掘削状況(東から)
(2) 2 トレンチ溝 S D01 検出状況(南東から)
- 図版第4 (1) 2 トレンチ溝 S D01 検出状況(南西から)
(2) 2 トレンチ下層板材出土状況(南西から)
(3) 2 トレンチ下層矢板杭出土状況(南西から)模倣
- 図版第5 (1) 3 トレンチ溝 S D01 検出状況(北から)
(2) 3 トレンチ土器溜まり検出状況(北東から)
- 図版第6 (1) 4 トレンチ全景(南から)
(2) 4 トレンチ溝・柱穴痕検出状況(南東から)
- 図版第7 (1) 7 トレンチ全景(南から) (2) 7 トレンチ作業風景(南から)
(3) 7 トレンチ浄水施設 1 (東から)
- 図版第8 (1) 浄水施設 1 検出状況(7 トレンチ、東から) (2) 浄水施設 1 堰状施設(東から)
- 図版第9 (1) 導水管出水部(北東から) (2) 導水管入水部(北から)
- 図版第10 (1) 導水管入水部付近(北西から) (2) 導水管入水部付近(西から)
- 図版第11 (1) 導水管槽状部(南から) (2) 導水管設置用部材(北から)
- 図版第12 試掘調査出土遺物(1)
- 図版第13 試掘調査出土遺物(2)
- 図版第14 試掘調査出土遺物(3)
- 図版第15 試掘調査出土遺物(4)
- 図版第16 (1) A 地区上層遺構全景(上空から・上が東)
(2) A 地区下層遺構全景(上空から・上が東)
- 図版第17 (1) 浅後谷南遺跡遠景(東から) (2) A 地区谷部土層断面(西から)
(3) A 地区谷部土層断面(北西から)
- 図版第18 (1) A 地区谷部土層断面(溝 S D2010(古・新) 西から)
(2) A 地区谷部土層断面(溝 S D2012 西から)
(3) A 地区北壁土層断面(南から)
- 図版第19 (1) 溝 S D2018完掘状況(南西から) (2) 溝 S D2018作業風景(南西から)
(3) 竪穴式住居跡 S H01・02全景(南西から)
- 図版第20 (1) 竪穴式住居跡 S H06全景(南西から)
(2) 竪穴式住居跡 S H08・09全景(南西から)
(3) 竪穴式住居跡 S H10・11全景(南から)
- 図版第21 (1) 竪穴状土坑 S K2004全景(西から)
(2) 竪穴状土坑上面土器検出状況(南から)
(3) 溝 S D2010(新)検出状況(南東から)

- 図版第22 (1)溝 S D 2010(新)上層木製品検出状況全景(西から)
 (2)溝 S D 2010(新)上層木製品検出状況全景(北西から)
 (3)溝 S D 2010(新)・S D 2011木製品検出状況(北西から)
- 図版第23 (1)溝 S D 2010(新)上層木製品検出状況細部 1 (西から)
 (2)溝 S D 2010(新)上層木製品検出状況細部 2 (北西から)
 (3)溝 S D 2010(新)上層木製品検出状況細部 3 (北西から)
- 図版第24 (1)溝 S D 2010(新)上層木製品検出状況細部 4 (北から)
 (2)溝 S D 2010(新)上層木製品検出状況細部 5 (北から)
 (3)溝 S D 2010(新)鋤検出状況(南から)
- 図版第25 (1)溝 S D 2010(新)木錘検出状況(西から)
 (2)溝 S D 2010(新)杵未製品・木槌検出状況(北から)
 (3)溝 S D 2010(新)把手付槽検出状況(南から)
- 図版第26 (1)溝 S D 2010(新)鋤未製品検出状況 1 (東から)
 (2)溝 S D 2010(新)鋤未製品検出状況 2 (北東から)
 (3)溝 S D 2010(新)竪櫛検出状況(西から)
- 図版第27 (1)溝 S D 2010(新)完掘状況(北西から)
 (2)溝 S D 2010(新)堰状施設 1 検出状況(南東から)
 (3)溝 S D 2010(新)堰状施設 2 検出状況 1 (南から)
- 図版第28 (1)溝 S D 2010(新)堰状施設 2 検出状況 2 (西から)
 (2)溝 S D 2010(新)堰状施設 2 細部 1 (南から)
 (3)溝 S D 2010(新)堰状施設 2 細部 2 (東から)
- 図版第29 (1)溝 S D 2010(新)護岸施設 1 検出状況(北西から)
 (2)溝 S D 2010(新)護岸施設 1 線刻板検出状況(南西から)
 (3)溝 S D 2010(新・古)土層断面(西から)
- 図版第30 (1)溝 S D 2010(古)土師器検出状況(北西から)
 (2)溝 S D 2012全景(西から) (3)溝 S D 2012浄水施設 2 付近全景(西から)
- 図版第31 (1)溝 S D 2012浄水施設 2 近景 1 (西から)
 (2)溝 S D 2012浄水施設 2 近景 2 (南東から)
 (3)溝 S D 2012浄水施設 2 細部 1 (北から)
- 図版第32 (1)溝 S D 2012浄水施設 2 細部 2 (北から)
 (2)溝 S D 2012浄水施設 2 細部 3 (東から)
 (3)溝 S D 2012浄水施設 2 梯子検出状況(西から)
- 図版第33 (1)溝 S D 2012浄水施設 2 付近遺物検出状況(南から)
 (2)溝 S D 2012浄水施設 2 付近大形槽検出状況(西から)
 (3)溝 S D 2012浄水施設 2 付近円盤状木製品検出状況(南から)

- 図版第34 (1)溝 S D 2012浄水施設 2 復原状況(西から)
 (2)溝 S D 2012土層断面(B断面 西から)
 (3)溝 S D 2012土層断面(A断面 西から)
- 図版第35 (1)溝 S D 2013全景(北西から) (2)溝 S D 2013遺物検出状況(南から)
 (3)溝 S D 2015全景(東から)
- 図版第36 (1)土坑 S K 2003検出状況 1 (東から) (2)土坑 S K 2003検出状況 2 (西から)
 (3)土坑 S K 2003土師器検出状況細部 1 (東から)
- 図版第37 (1)土坑 S K 2003土師器検出状況細部 2 (西から)
 (2)土坑 S K 2003下部土師器検出状況(東から)
 (3)土坑 S K 2003土層断面(東から)
- 図版第38 (1)土坑 S K 2003完掘状況(東から)
 (2)溝 S D 2016(新)堰状施設検出状況(東から)
 (3)溝 S D 2016(新)護岸施設検出状況(南から)
- 図版第39 (1)溝 S D 2016(新)桶検出状況(東から)
 (2)溝 S D 2016(古)・溝 S D 2017検出状況(東から)
 (3)溝 S D 2016(古)堰状施設検出状況 1 (東から)
- 図版第40 (1)溝 S D 2016(古)堰状施設検出状況 2 (西から)
 (2)溝 S D 2016(古)堰状施設落水部下部遺物検出状況(東から)
 (3)溝 S D 2016(新・古)土層断面(西から)
- 図版第41 (1)溝 S D 2017堰状施設検出状況 1 (東から)
 (2)溝 S D 2017堰状施設検出状況 2 (北東から)
 (3)溝 S D 2017鋳未製品検出状況(北から)
- 図版第42 (1)包含層木製品検出状況(東から) (2)包含層弓検出状況(西から)
 (3)包含層剣形木製品検出状況(西から)
- 図版第43 (1)包含層舟形槽検出状況(西から) (2)包含層部材検出状況(西から)
 (3)包含層箱材検出状況(西から)
- 図版第44 (1)上層柱穴群検出状況 1 (南から) (2)上層柱穴群検出状況 2 (北東から)
 (3)上層柱穴群検出状況 3 (南東から)
- 図版第45 (1)掘立柱建物跡 S B 2001検出状況(北から)
 (2)段状遺構 S H 03検出状況(南西から)
 (3)土坑 S K 2001鏡および木箱痕跡検出状況(北から)
- 図版第46 (1)土坑 S K 2001木箱内土層断面(南から)
 (2)土坑 S K 2001木箱完掘状況(南から)
 (3)土坑 S K 2001完掘状況(南から)
- 図版第47 (1)溝 S D 2001全景(西から)

(2) 溝 S D 2001 集石検出状況(南西から)

(3) 溝 S D 2001 刀形木製品検出状況(南から)

図版第48 A地区出土遺物(1)

図版第49 A地区出土遺物(2)

図版第50 A地区出土遺物(3)

図版第51 A地区出土遺物(4)

図版第52 A地区出土遺物(5)

図版第53 A地区出土遺物(6)

図版第54 A地区出土遺物(7)

図版第55 A地区出土遺物(8)

図版第56 A地区出土遺物(9)

図版第57 A地区出土遺物(10)

図版第58 A地区出土遺物(11)

図版第59 A地区出土遺物(12)

図版第60 A地区出土遺物(13)

図版第61 A地区出土遺物(14)

図版第62 A地区出土遺物(15)

図版第63 A地区出土遺物(16)

図版第64 A地区出土遺物(17)

図版第65 A地区出土遺物(18)

図版第66 A地区出土遺物(19)

図版第67 A地区出土遺物(20)

図版第68 A地区出土遺物(21)

図版第69 A地区出土遺物(22)

図版第70 A地区出土遺物(23)

図版第71 (1) B地区土層断面(南から)

(2) B地区トレンチ全景(南から)

(3) S D 08完掘状況(南から)

図版第72 (1) S H 01完掘状況(南から)

(2) S D 09竪出土状況(西から)

(3) S K 07完掘状況(北から)

図版第73 (1) N R 01土層断面(北部・西から)

(2) N R 01土層断面(中央部・西から)

(3) N R 01土層断面(南部・西から)

図版第74 (1) N R 01第1遺構面完掘状況(東から)

(2) NR01第2遺構面完掘状況(東から)

(3) NR01第3遺構面完掘状況(東から)

図版第75 B地区出土遺物(1)

図版第76 B地区出土遺物(2)

図版第77 B地区出土遺物(3)

図版第78 B地区出土遺物(4)

図版第79 B地区出土遺物(5)

(2) 墓の谷古墳群

図版第80 (1) 9号墳調査前全景(南から) (2) 9号墳調査後全景(南から)

(3) 11号墳調査前全景(北東から) (4) 11号墳調査後全景(北東から)

(3) 吉沢城跡

図版第81 (1) 調査前全景(北から) (2) 調査前風景(東から)

(3) 試掘調査風景(南東から)

図版第82 (1) 試掘トレンチ谷筋流路跡北壁土層断面(南西から)

(2) 試掘トレンチ谷筋流路北壁土層断面(南東から)

(3) 試掘トレンチ中央部南壁土層断面(北西から)

図版第83 (1) 東側平坦地全景(南から) (2) 東側平坦地全景(北方から)

(3) 東側平坦地テラス状遺構SX07(西から)

図版第84 (1) 西側平坦地全景(北から) (2) 西側平坦地北部全景柵列SA18ほか(北方から)

(3) 西側平坦地中央部テラス状遺構SX17(東から)

図版第85 (1) 西側平坦地テラス状遺構SX17(北から)

(2) 西側平坦地排水溝SD23と柱穴群(北から)

(3) 西側平坦地南部土坑群(SK20~22)(北から)

図版第86 (1) 土坑SK20完掘状況(東から) (2) 土坑SK20完掘状況(北から)

(3) 土坑SK11鉄鎌出土状況(東から)

図版第87 (1) 出土遺物(1) (2) 出土遺物(2)

図版第88 出土遺物(3)

国営農地(丹後東部地区)関係遺跡 平成11年度発掘調査概要

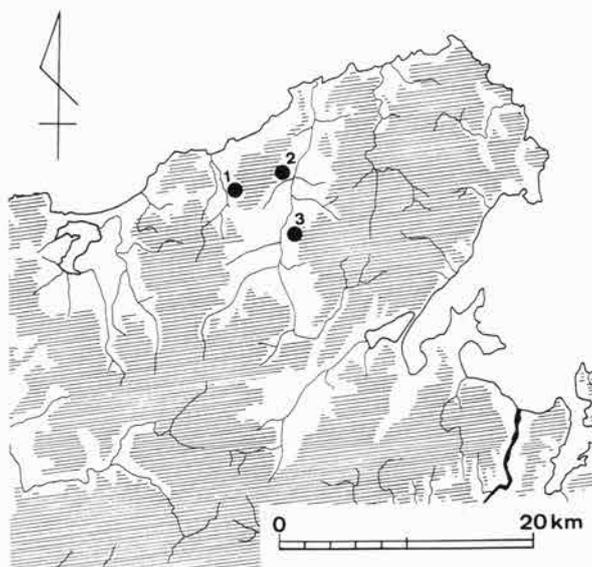
はじめに

本概要報告は、農林水産省近畿農政局が計画・推進している、丹後国営農地開発事業(東部地区)に伴い、平成9・10年度に調査を実施した浅後谷南遺跡および平成11年度に発掘調査を実施した遺跡の調査概要である。

丹後半島は京都府の最北端に位置し、国営農地開発事業をはじめとする開発事業に伴い多大な考古学的成果があがっている。近年の考古学的な成果に注目してみると、縄文時代では丹後町平遺跡で前期から後期にかけての充実した資料が得られている。弥生時代では弥栄町奈具・奈具岡遺跡で中期の玉作り工房群が検出された。ここでは碧玉製玉類以外に、水晶・ガラス製玉類が生産され、鉄製工具・素材が共伴し弥生時代の生産遺跡を考える上で欠かせないものとなった。墳墓の調査では、中期の貼石墓である弥栄町奈具遺跡の後背丘陵から方形台状墓群が検出され、当時の社会構造をうかがう格好の資料となった。後期では豊富な副葬品を伴う墳墓が多数調査されている。いくつか例を挙げるならば、大宮町左坂墳墓群・三坂神社墳墓群、岩滝町大風呂南墳墓群などがある。多数の玉類・鉄製品の副葬が確認され、丹後半島は北部九州と並んで豊富な副葬品をもつ地域として注目を集めている。そうした中、平成11年、一辺40m級の方形墳丘墓である峰山町赤坂今井墳丘墓が発見され、丹後地域の王墓として報道されたのは記憶に新しい。

古墳時代では、丹後半島は日本海最大の規模をもつ前方後円墳、網野銚子山古墳をはじめ、200m級の巨大前方後円墳の存在する地域として古くから注目されてきた。近年の調査

でこうした前方後円墳に先行する首長墓として、弥栄町大田南2号墳・5号墳が調査された。この2基の古墳には舶載鏡が副葬され、大田南5号墳では青龍三年の紀年銘鏡が出土し、大陸との独自交流の可能性さえも考えられる。中期以降、丹後半島では巨大前方後円墳は築かれなくなり、大型円・方墳へと首長墓は移り変わって行くが、弥栄町奈具岡北1号墳は葺石・埴輪こそもないものの前方後円墳であることが確認され、出土した初期須恵器・陶質土器から



第1図 調査地分布図(番号は付表と同じ)

第1表 平成11年度調査および所収遺跡一覧

番号	遺跡名	所在地	面積(m ²)	調査期間	担当者
1	浅後谷南遺跡	京都府竹野郡網野町公庄	640	平成9年10月2日～ 平成10年2月26日	調査第1係長 伊野近富 主査調査員 黒坪一樹
			3,100	平成10年4月20日～ 平成10年11月6日	課長補佐兼 調査第1係長 水谷壽克 主査調査員 黒坪一樹 主査調査員 竹井治雄 調査員 石崎善久 調査員 福島孝行
2	墓ノ谷古墳群	京都府竹野郡弥栄町鳥取	140	平成11年5月11日～ 平成11年5月28日	課長補佐兼 調査第1係長 水谷壽克 調査員 石崎善久
3	吉沢城跡	京都府竹野郡弥栄町吉沢	800	平成11年5月18日～ 平成11年9月29日	課長補佐兼 調査第1係長 水谷壽克 主査調査員 石尾政信

朝鮮半島との関連をうかがうことができる。この他、前・中期の群小古墳は100基以上が調査され、社会構造を復原する充実した資料となっている。後期古墳では北部九州の竪穴系横口式石室と類似する要素をもつ遠所1号墳などの初期横穴式石室をはじめ、金銅装双竜環頭大刀をもつ丹後町高山12号墳、巨大横穴式石室をもつ丹後町上野2号墳などの調査が注目される。同時に近畿北部で盛行する墓制である横穴墓の調査も、大宮町太田ヶ鼻横穴群・左坂横穴群・里ヶ谷横穴群などで実施された。このような墳墓の調査の進展に比して集落遺跡の調査は少なく、拠点集落として峰山町古殿遺跡・大宮町裏陰遺跡などしか知られていない状況であった。今回報告する網野町浅後谷南遺跡は新たに確認された拠点集落のひとつである。歴史時代では奈良・平安時代を中心とする生産遺跡の調査が実施されてきた。大宮町阿婆田窯跡群は国分寺造営と関連づけて評価された。同時期に活動の中心をもつ、弥栄町遠所遺跡群・黒部遺跡群などの製鉄関連遺跡が大規模に展開する状況も、こうした動向とは無関係ではあるまい。また、多数の輸入陶磁器を出土した網野町横枕遺跡・浅後谷南遺跡など、公的施設の可能性を示唆する遺跡も増加しつつある。

中世以降では、山城についても考古学的調査が実施されるようになってきている。弥栄町シミズ谷城跡や矢田城跡、また、今回報告する弥栄町吉沢城跡も戦国期山城の貴重な調査例である。

こうした考古学的状況の中、平成11年度の国営農地関係の遺跡の調査を農林水産省近畿農政局丹後開拓建設事業所の依頼を受けて、当調査研究センターが実施した。発掘調査を実施した遺跡は、竹野郡弥栄町に所在する墓ノ谷古墳群・吉沢城跡の2か所である。また、平成9・10年度に発掘調査を実施した竹野郡網野町浅後谷南遺跡の整理作業も併行して実施した。調査期間・調査面積等については第1表に記すとおりである。

現地調査・整理作業には作業員・補助員・整理員として多数の方々に参加していただき、また、調査に際しては京都府教育庁指導部文化財保護課・網野町教育委員会・弥栄町教育委員会をはじめとする関係諸機関にご協力いただき、多くの方々から、御指導・御教示を賜った。^(注1)改めて感謝の意を表したい。なお、調査に係る経費は、全額農林水産省近畿農政局が負担した。

(石崎善久)

(1) 浅後谷南遺跡

1. 遺跡の立地と歴史的環境

浅後谷南遺跡は京都府竹野郡網野町字公庄に所在する。遺跡は女布権現山付近を源流に、日本海へ注ぐ福田川中流域東岸の丘陵裾部を中心に立地しており、現河口域まで約4kmを測る。福田川流域は狭小な谷地形を呈しており、肥沃な沖積地が形成されていない点もこの流域の特色といえる。

遺跡の立地する丘陵裾部は、複雑に谷地形が入り組み、谷状地形と微高地が連続した地形を形成している。微高地は調査対象地よりさらに南側あるいは西側へのびており、遺跡の範囲自体はさらに広範であるものとする。なお遺跡周辺の標高はおおむね海拔22m前後を測る。

現在でこそ福田川河口域は埋め立てが行われ、市街地化しているが、昭和初期には現北近畿タンゴ鉄道網野駅近辺まで潟が形成されていたと伝えられ、弥生時代から近代に至るまで天然の良港として機能していたものと推測される。浅後谷南遺跡から北近畿タンゴ鉄道網野駅まで、は直線距離で約1.2kmであり、遺跡から肉眼で望むことができる。かつては遺跡からも福田川河口域に形成された潟湖が眼下に望まれたと考える。

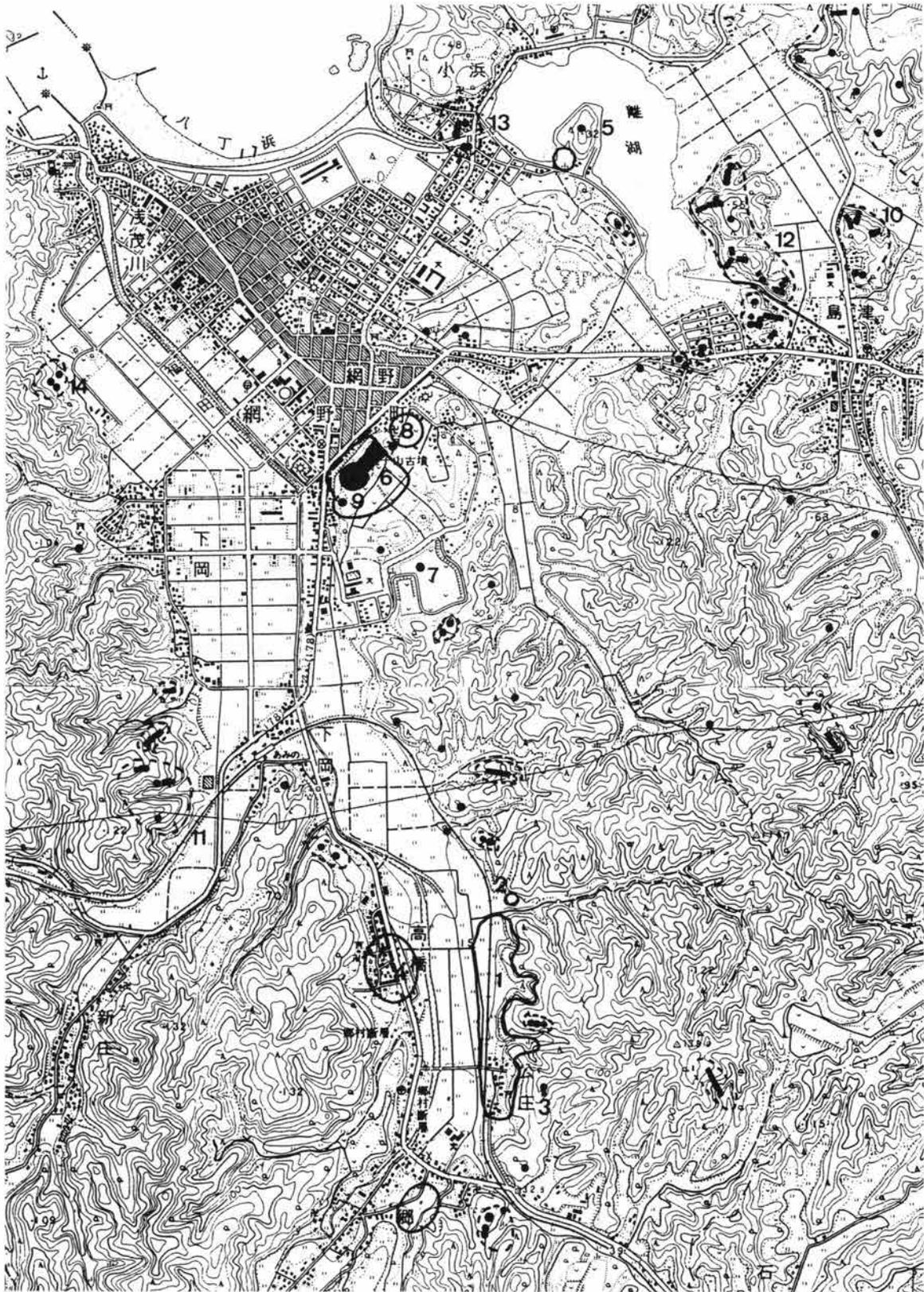
一方、内陸部の方に目を向けてみると、峰山町赤坂周辺の谷間を抜け、中郡盆地の丹波あるいは矢田周辺へと抜けていくことが可能である。現在の北近畿タンゴ鉄道もこのルートを抜けており、古来主要陸路として機能していたものと推測される。

福田川流域の遺跡の分布状況に目を向けてみると、河口部東岸には網野銚子山古墳(前期末)とその陪塚である小銚子山古墳・寛平法皇陵古墳が存在し、周辺にはスガ町古墳群(前～中期)、妹古墳(前期)など、小・中規模古墳群が少数ながら築造されている。また、集落遺跡としては浅後谷南遺跡の対岸に弥生時代中期とされる高橋遺跡のほか、古墳時代から中世にかけての三宅遺跡、林遺跡などが知られている。浅後谷南遺跡の背後丘陵には弥生後期の浅後谷南墳墓、時期は不詳であるが前方後円墳と考えられる公庄小谷古墳などの墳墓が築造されている。浅後谷南遺跡の墓域と考えることができよう。

先ほど述べた陸路に目を向けると、中郡盆地へ抜ける狭小な谷間には一辺35mを測る弥生墳丘墓である赤坂今井墳丘墓が存在し、古墳時代後期の装飾付須恵器を出土した大耳尾古墳群を経て、中郡盆地へ抜けたところには大田南古墳群・湧田山古墳群、あるいは古殿遺跡といった丹後半島でも主要な遺跡が点在している。

浅後谷南遺跡も、このような遺跡との関係の中で成立した集落遺跡のひとつであると考えられる。

以上のように、福田川流域の遺跡は丹後半島全体の中でも分布密度の比較的低い状況を示しているといえるが、これはこれまでの開発に伴う発掘調査の粗密とも関連しており、さらに遺跡数は増加するものと判断される。



第2図 調査地周辺遺跡分布図 (1/25,000)

- | | | | | |
|---------------------------|-------------|-----------|-----------|------------|
| 1. 浅後谷南遺跡 | 2. 浅後谷南墳墓群 | 3. 公庄小谷古墳 | 4. 高橋遺跡 | 5. 離湖・離山古墳 |
| 6. 網野銚子山古墳・子銚子山古墳・寛平法皇陵古墳 | 7. 妹古墳 | 8. 林遺跡 | | |
| 9. 三宅遺跡 | 10. 島津遠所古墳群 | 11. 暮谷古墳群 | 12. 谷崎古墳群 | 13. 岡古墳群 |
| 14. 二村古墳群 | | | | |

2. 調査の経過と調査区の設定

浅後谷南遺跡は平成9年度に試掘調査を実施した。調査は遺跡の範囲および内容の把握を目的に広範な地域を対象として実施した。そのためトレンチを8か所設定し、各地区で弥生時代後期から平安時代に至る各時期の遺構が検出された。中でも第3トレンチではコンテナ100箱にも及ぶ弥生土器・土師器が出土し、第7トレンチからは木樋を使用した浄水施設^(注2)が検出され、同時に多くの土器群も検出された。

平成10年度はこの試掘調査の成果を受け、農地開発により遺跡が損壊する部分を中心に面的調査を実施することとなった。

そこで第7トレンチを中心に、約1,900m²のトレンチを設定してA地区とし、第3トレンチ高位側に相当する部分を中心に、約1,000m²のトレンチを設定してB地区とした。また、平成9年度に諸般の事情により試掘を実施できなかった最も北側の部分についてC地区として新たに3か所の試掘トレンチを設け調査を実施した。

C地区では平安時代を中心とするピット群を検出し、協議の結果、京都府教育庁指導部文化財保護課によって立会調査が実施されたため、今回の報告からは割愛することとした。

(石崎善久)



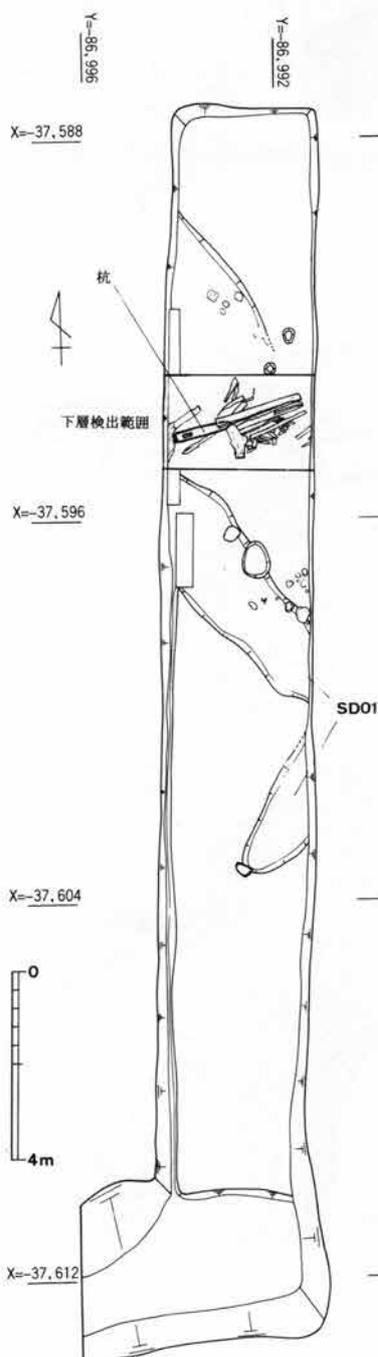
第3図 平成9・10年度トレンチ配置図

3. 平成9年度の調査

平成9年度の試掘調査について概要を記したい。試掘調査では8本のトレンチを設定し、広範な浅後谷南遺跡の遺構・遺物の包蔵範囲を把握することに努めた(第3図)。以下、北から順に概観する。

①第1トレンチ

調査対象地の最も北側に設定した長さ25m・幅2.5mのトレンチである。暗黄褐色細砂のベ-



第4図 第2トレンチ平面図

ス面から掘り込まれた溝状遺構(幅4m・深さ40cm)を検出した。遺物の出土量は僅少であり、溝状遺構出土遺物には時期を明確にできるものはない。時期の判明するものとして、包含層から出土した弥生土器・土師器・平安時代に属する須恵器杯B等がある。当該期の遺構面がこのトレンチまで存在していることを示すものとする。

②第2トレンチ

南北方向で谷に直行するように設定した長さ26.5m・幅3mのトレンチである。基本的な層序は上層から、第1層：表土、第2層：黄褐色シルト混じり中粒砂、第3層：暗黒灰色シルト混じり中粒砂、第4層：淡灰褐色シルト混じり中粒砂、第5層：暗黒褐色シルト、第6層：暗青灰色粗砂である。

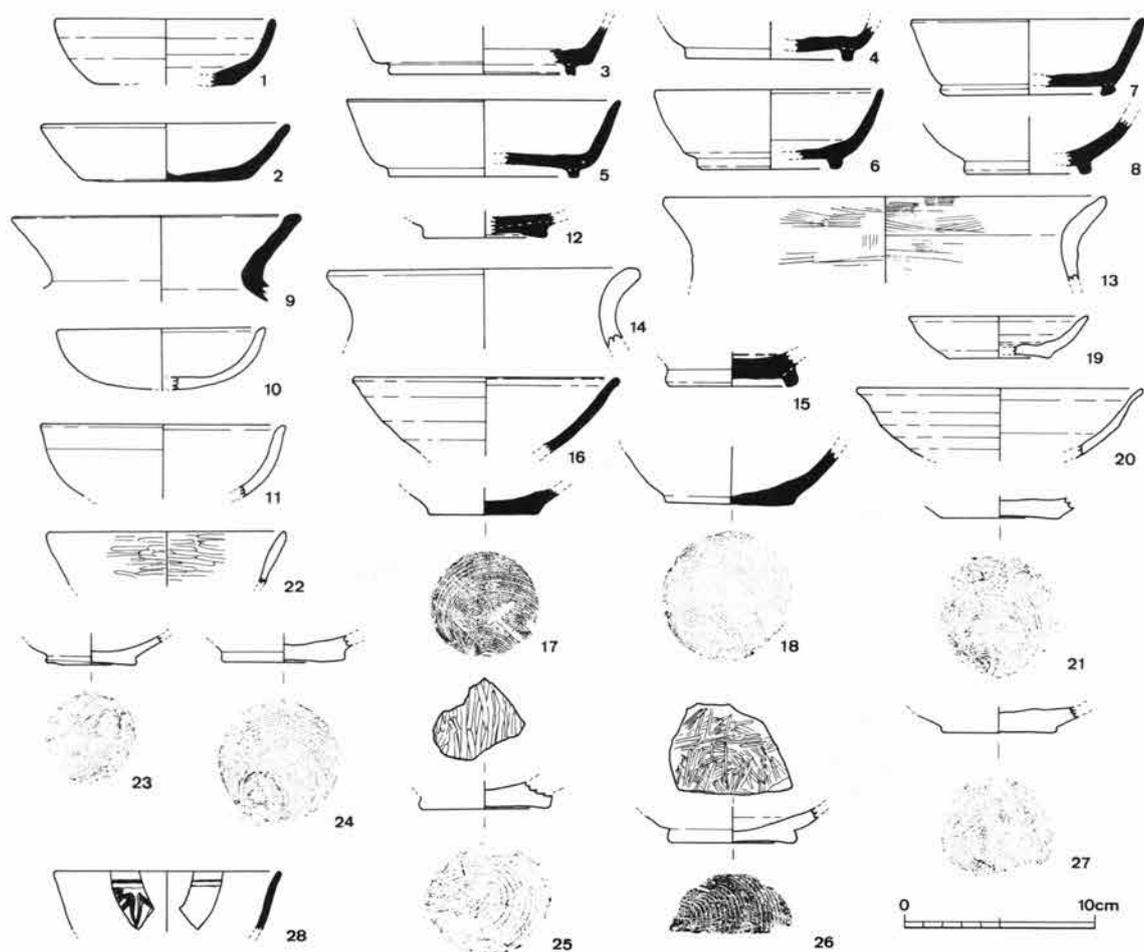
遺構はトレンチ中央部を斜行する幅2m・深さ30cmの溝(SD01)、さらにその北側で小規模な柱穴群を検出した。柱穴の埋土は暗褐色系である。中には比較的大きな柱穴もあるが、掘立柱建物を復元するには至らなかった。溝SD01は、埋土の状況から、屈曲するものと判断した。この溝から南側は徐々に傾斜し、小さな谷地形を形成している。これらの遺構の時期は埋土中および検出面で平安時代に属するものが出土しているため、所属時期を平安時代と考える。

このトレンチでは部分的な断ち割りにより平安時代の遺構面から約40cm下(第6層上面)で多量の板材および木製品を検出した。木製品には矢板(第21図1)・板材(第13図1)などがあり、周辺部からは樹皮を残す薄い板材が投棄されたような状況で確認された。また板材の多くは火を受け焼けこげている。これら木製品の所属時期を示す土器は少ないが、弥生時代後期～古墳時代と思われる高杯片が共伴している。

出土遺物にはトレンチ北側の遺構・遺構面から出土したもの(第5図)、および下層から出土した木製品(第21図1、第

13図1)がある。土器には須恵器・土師器・灰釉陶器・黒色土器・染め付けがある。1～7は須恵器杯である。杯Bの高台の付き方からみると、3・4は奈良時代末頃と考えられるが、他のものはおおむね平安時代に属するものと判断される。12は灰釉陶器の底部片である。13は土師器鍋である。口径23cmを測り、内外面に粗いハケを残す。体部から口縁にかけて緩やかに立ち上がる。11世紀後半から12世紀初頭の時期であろう。14は土師器の中型の甕である。15は須恵器壺の底部である。8・16～18は須恵器碗である。8は輪高台をもつ。17・18は僅かに平高台をもち、底部には糸切り痕がみられる。19は底部糸切りの土師器皿である。20は土師器碗である。体部はやや稜線が形成されるほどに削られ、口縁部は緩やかに外反する。21～27は黒色土器碗である。いずれも底部に糸切り痕が観察される。いくつかの形態の差異はあるが、おおむね11世紀中葉～12世紀初頭の時期に収まるものである。28は染め付け碗である。表土層に近い包含層から出土した。18～19世紀にはいるものである。

木製品には下層から出土した矢板・板材がある。21図1は矢板である。全長1.21m・幅20cm・厚さ5.5cmの大きさである。表面中間やや上寄りに方形の大きな穿孔がみられる。また片側先端部は尖らせている。もともとは何かの部材であったものを矢板に転用したようである。第13図1は板材である。長さ29cm・幅2.8cm・厚さ1.2cmを測る。体部中間軸に沿って斜め方向に2つの小

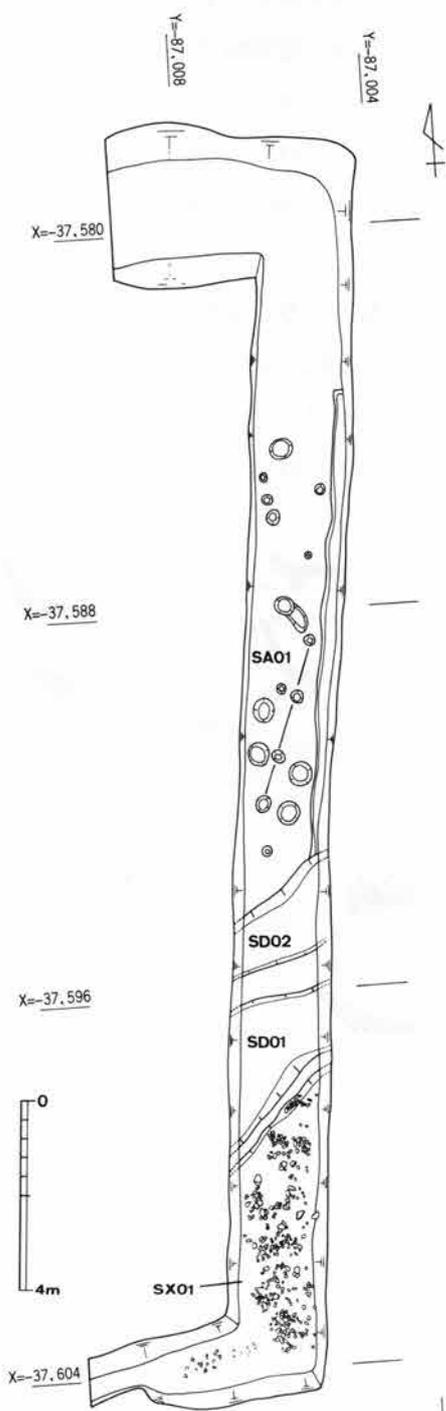


第5図 第2トレンチ出土土器実測図

さな目釘穴を通してゐる。

③第3トレンチ

第2トレンチの西側に平行して設定した、長さ27m・幅2mのトレンチである。基本的な層序は、上から、第1層：表土(水田床土含む)、第2層：暗黄褐色シルト混じり中粒砂、第3層：暗灰色シルト混じり中粒砂、第4層：暗灰褐色細砂、第5層：暗灰色粗砂(氾濫原を形成)となっている。



第6図 第3トレンチ平面図

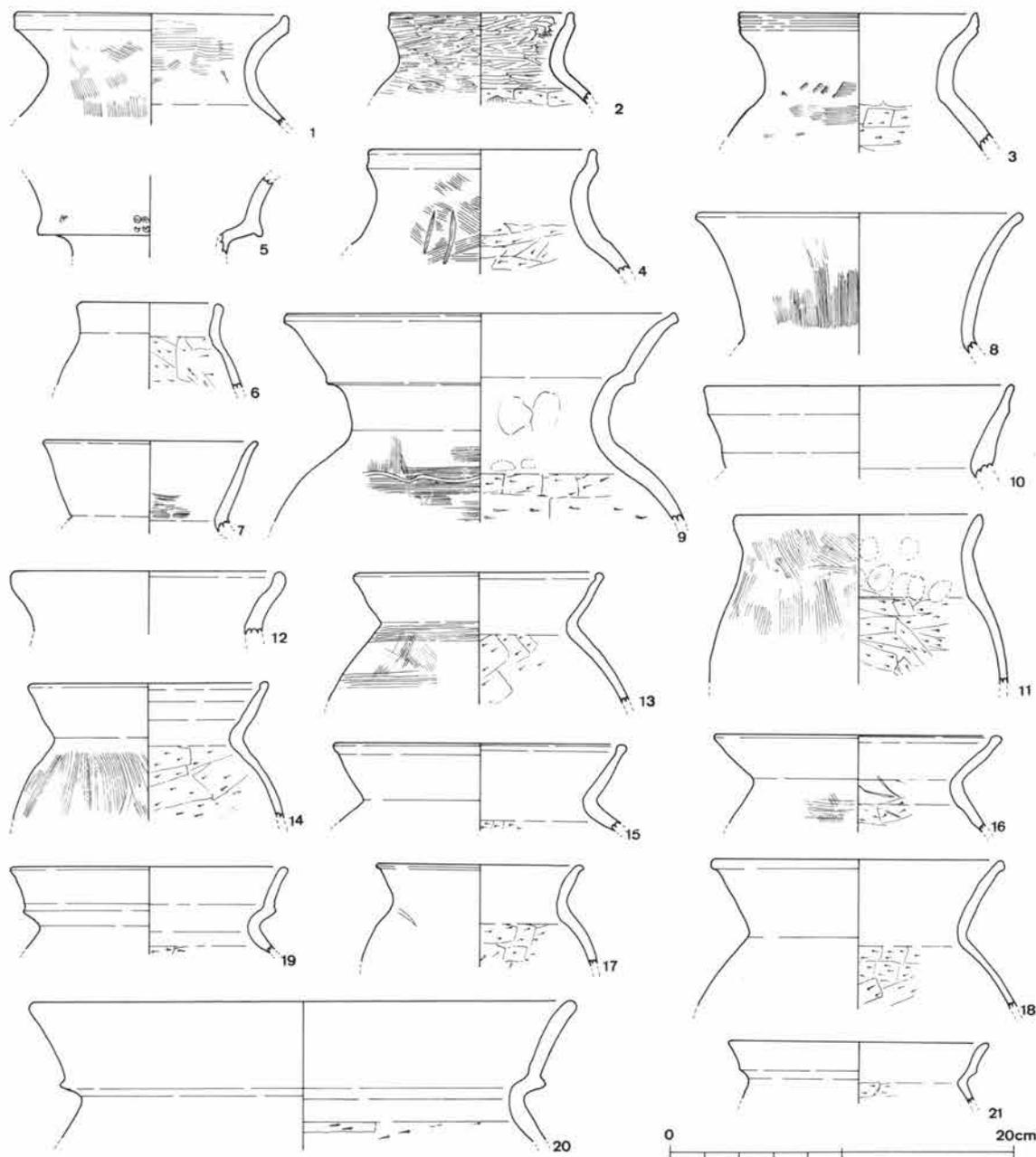
いる。

遺構は第4層から掘り込まれた北東～南北方向にはしる黒灰色砂質土の堆積する流路あるいは沼地状の落込みを検出した(SX01)。規模は幅6m以上・深さ30～40cmを測る。埋土中からは多量の弥生時代後期～古墳時代前期の土器がぎっしりと詰まって出土した。狭い調査範囲のため遺構の全体像は不明であるが、この遺構の北肩部は幅3.5mにわたり削平を受けているようであり、遺物の密度は北よりも南の方が高い。土器の他にここからは鉄斧の柄と考えられる木製品(第13図5)が出土した。なお、このSX01を掘り切った下の5層中からも古墳時代前期を上限とする土器群が出土している。

SX01の北側からは平安時代を中心とする時期の溝SD02を検出した。この溝からは古墳時代～平安時代の土器(第12図)や棒状木製品(第13図2・3)、火鑽臼(第13図4)などが出土した。この溝の北側では平安時代の柱穴群を検出した。いずれも直径20cmほどの小規模なものである。一直線に並ぶもの(柵SA01)もあるが、掘立柱建物を復元するには至らなかった。

出土遺物について概観する。第7～11図にはSX01およびその下層包含層(第5層)のものを掲載した。

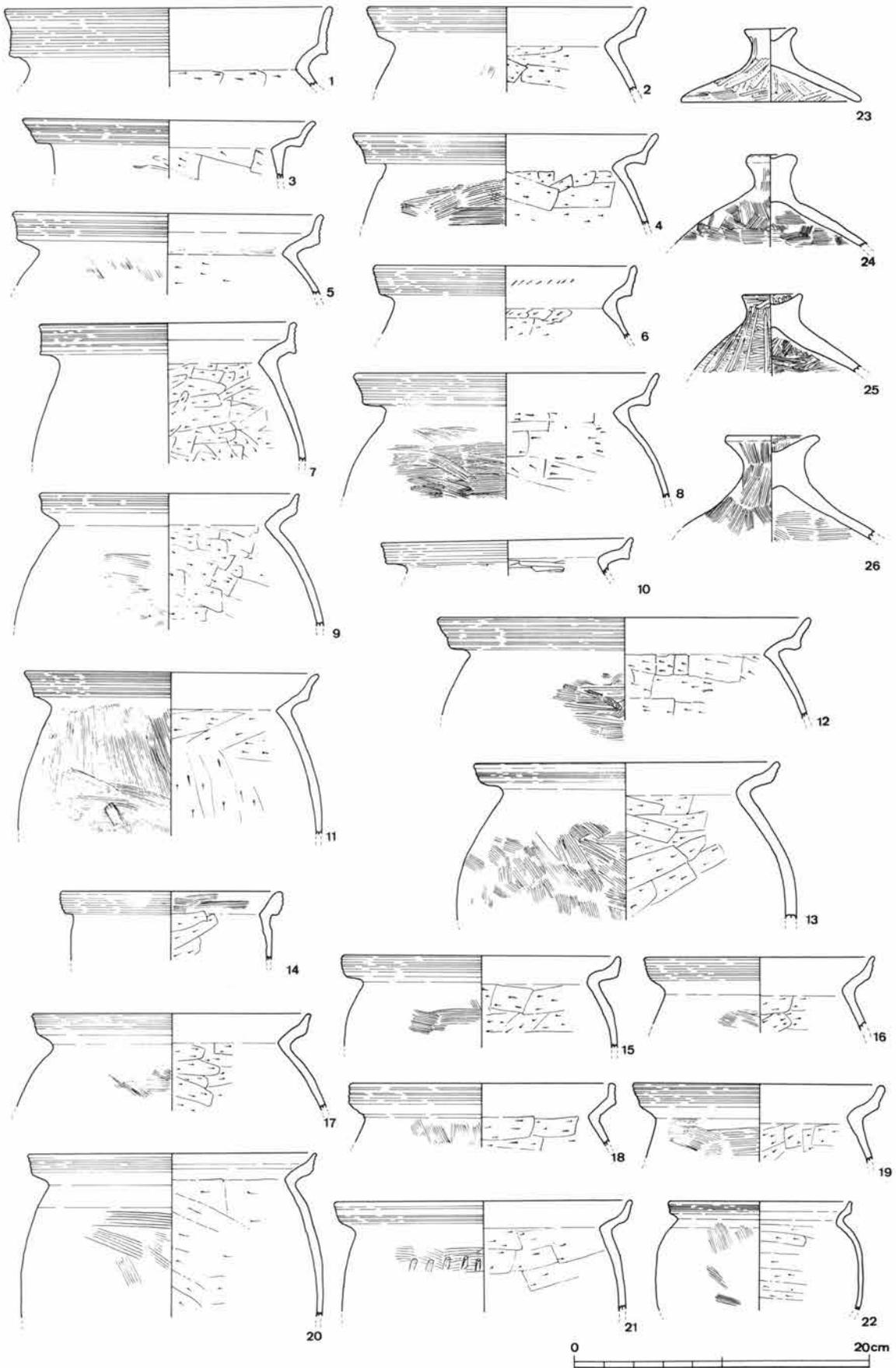
第7図1～9は壺である。1～4は口縁部が上方に短く立ち上がる。2は内外面とも細かいミガキにより調整し、1は短い単位の手直し調整を留める。3は口縁外側に擬凹線を施す。5は頸部から2段に屈曲し、口縁が垂直近くに立ち上がるものである。半截竹管文により加飾される。6は短く直立する口縁部をもつ。7・8は広口壺である。9は二重口縁



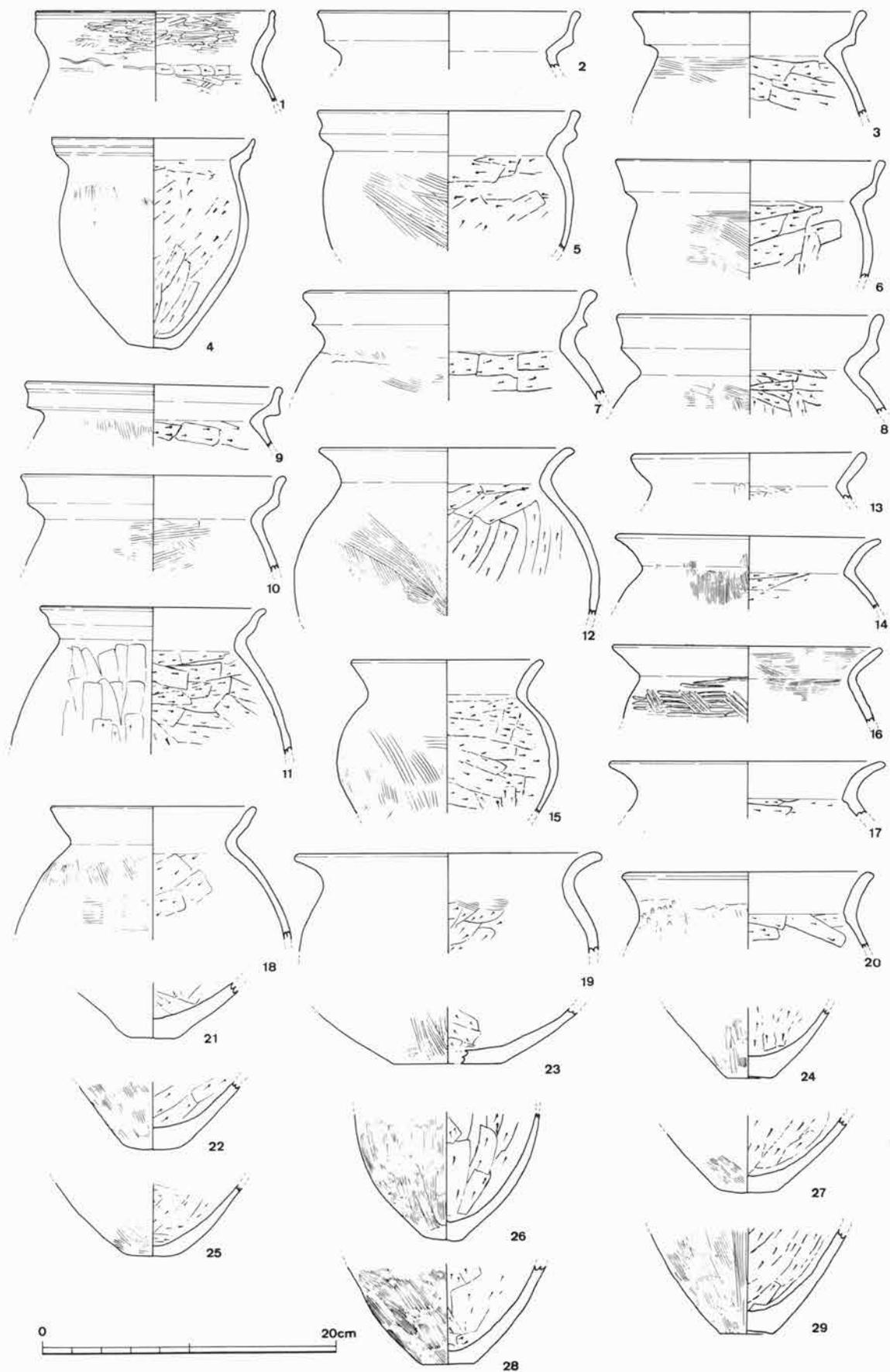
第7図 第3トレンチ出土土器実測図(1)

壺である。10~20は甕である。10は口縁端部を薄く作るもの、12は外反する口縁をもち端部を内湾気味に仕上げる。11は肩が張らずに緩やかに外反する口縁を付す。13~18は内湾気味の口縁をもち、端部を内または外側に肥厚させるものでいわゆる布留式甕と呼称されるものである。19~21はいわゆる山陰系の複合口縁甕である。口縁下端に強いナデがみられる。第7図1・3~5・7・12・21はS X01から、その他は第5層から出土したものである。

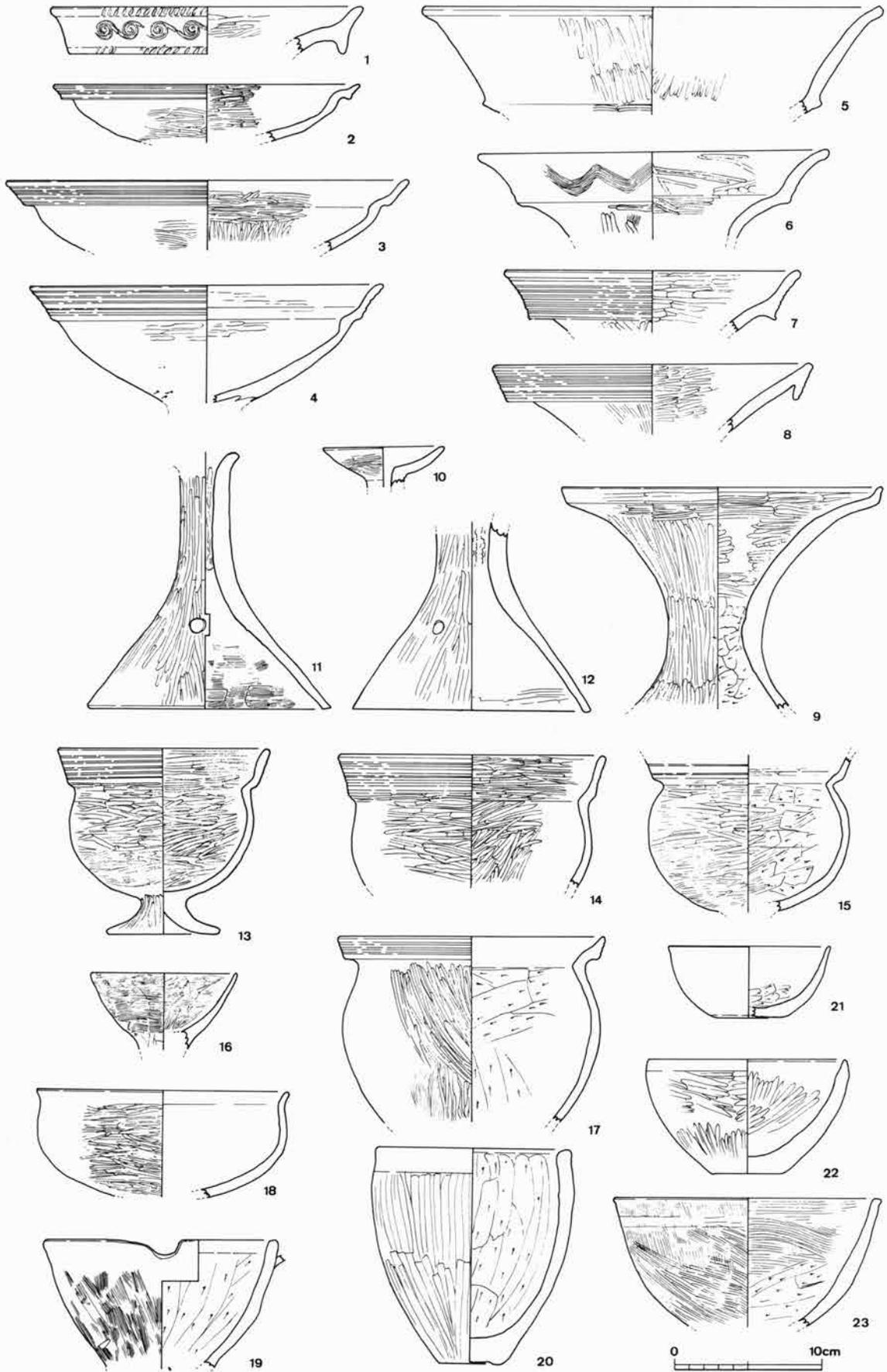
第8図は擬凹線の明確に施された甕、ならびに蓋である。甕はいずれも口縁が短く立ち上がる複合口縁をなす。口縁外側面下端部が垂下するものや、口縁外側面をやや大きめに拡張するものが認められる。内面はヘラケズリにより調整され、頸部屈曲部の直下まで及ぶものが多い。なお、1・6などは、北陸の月影式の影響を認めることができる個体である。23~26は蓋である。23・25は細かなミガキ調整を施し、26はハケメ調整を留める。第8図2・4・10・11・13~16・18・



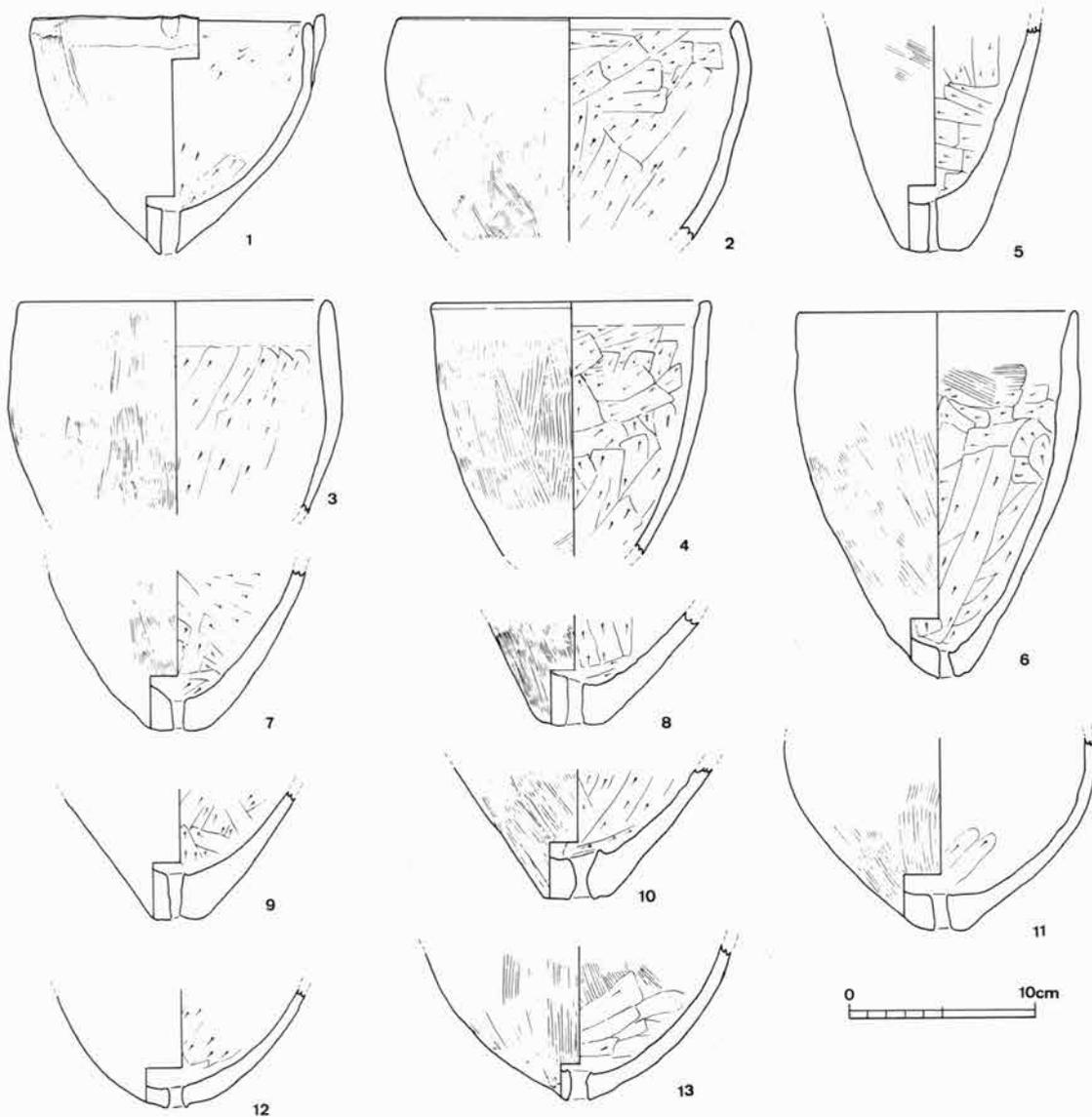
第8図 第3トレンチ出土土器実測図(2)



第9図 第3トレンチ出土土器実測図(3)



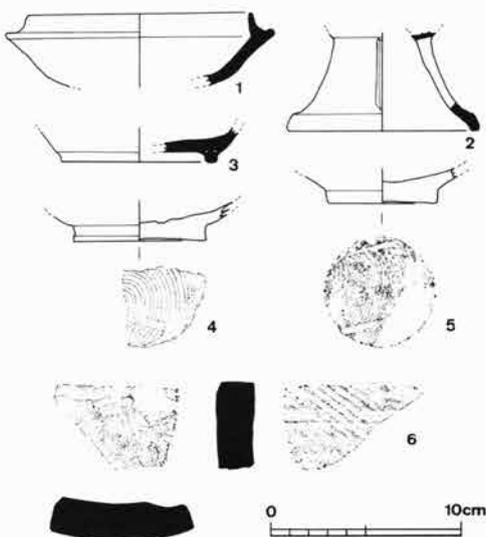
第10図 第3トレンチ出土土器実測図(4)



第11図 第3トレンチ出土土器実測図(5)

19・21・23・26はS X01から、その他のものは第5層から出土したものである。

第9図1はゆるやかに開く口縁部の端部をやや内傾させ、そこに擬凹線を施す壺である。4・9は複合口縁をもち、擬凹線が明確に確認できない甕、2・3・5・8・10・11は同じく擬凹線がなくナデにより調整される甕である。12~20は「く」の字状口縁をもつ甕である。21~29は壺もしくは甕の底部である。第9図2~4・6・7・10~14・16・17・19・20・22・24~26・28はS X01から、その他のものは第5層から出土したものである。



第12図 第3トレンチ出土土器実測図(6)

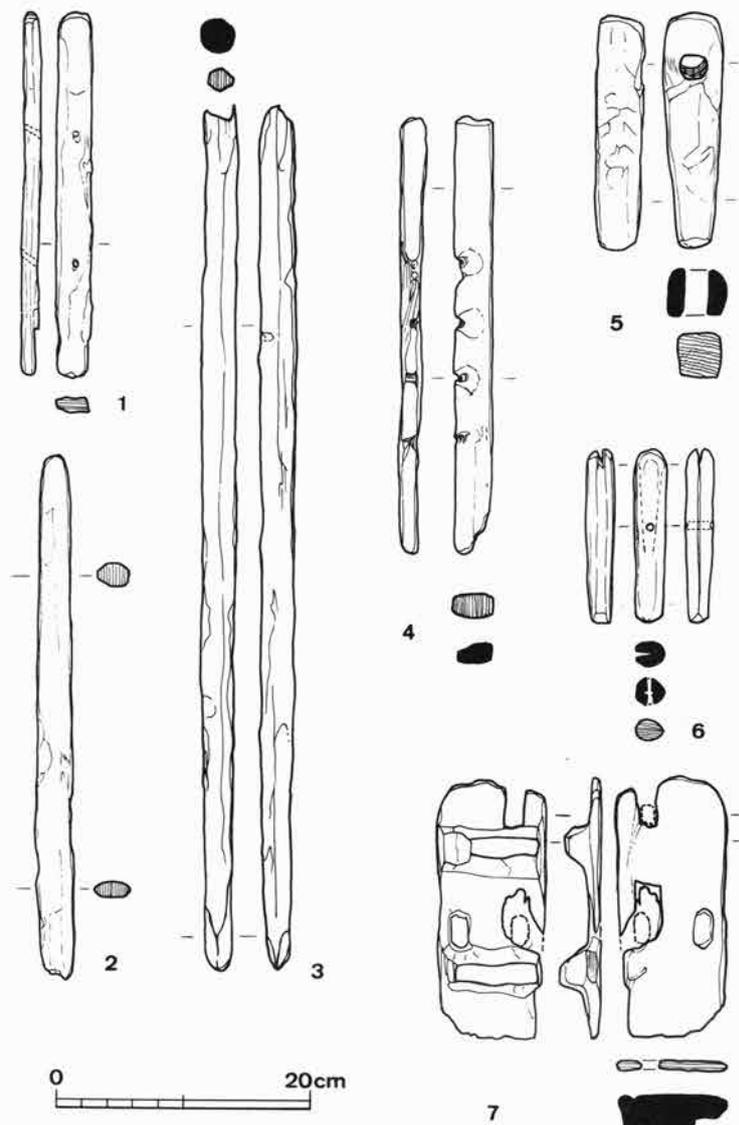
第10図2~4・11・12は高杯である。杯部はいず

れも大きく内湾する。口縁は複合口縁を呈する。2は3・4に比べ口縁の立ち上がりが短い。いずれも口縁外側に擬凹線を施す。胎土は砂粒が少なく精製品と考える。脚部は高く内湾気味の脚に中空の脚柱部が取り付く。5・6は複合口縁の壺である。5は大きく外反する口縁下端部に突出する稜をもつ。6は口縁外側に櫛描波状文による加飾を施す。1・7～10は器台である。大形品の1・7～9と小形の10に分類できる。1～7・8はいずれも口縁下端部を垂下させる。1は外側に渦巻き状のスタンプ文が施され、口縁上端・下端それぞれに刻目をもつ装飾性の強い個体である。7・8には擬凹線文が施される。9は大きく開く受け部から、口縁を短く外方に立ち上げる。わずかに擬凹線が認められる。10は小形の器台で、赤色の胎土をもち、やや内湾する椀状の杯部をもつ。13～15は台付鉢である。13・14は擬凹線を細かく施した幅広の口縁を持つ。月影式の影響を伺うことができる。17は擬凹線をもつ複合口縁の鉢である。16は口縁部がやや内湾する小形の鉢である。破断面から脚部の付く可能性がある。18は椀状杯部をもつ高杯であり、

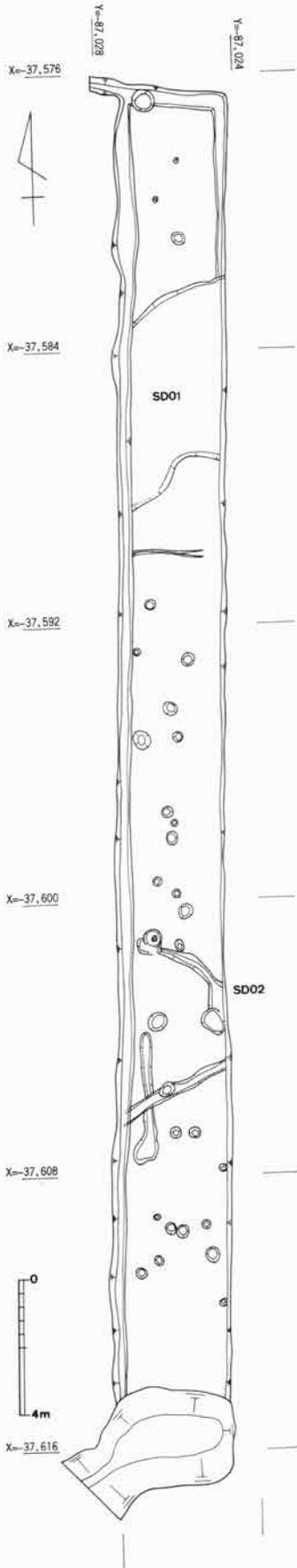
口縁端部をわずかに外反させる。調整は細かいヘラミガキにより行われる。19は片口直口口縁をもつ椀形の鉢である。20は砲弾形の体部をもち、口縁はほぼ直立する。21～23は椀形の鉢である。第10図1・3・4・6・7・9・11・13～16・18・19・21・23・26はSX01から、その他のものは第5層から出土している。

第11図は砲弾形の体部をもつ鉢である。口縁部が直立するもの、やや内湾するものがある。1・5～13は有孔鉢である。第11図1・3～5・12はSX01から、その他のものは第5層から出土した。

第12図はトレンチ北側の遺構面から出土した遺物である。1・2は古墳時代の須恵器坏・高杯である。杯は6世紀末頃(TK43～209型式併行期)とみられる。高杯は短脚1段



第13図 第2・3・4トレンチ出土木製品実測図



第14図 第4トレンチ平面図

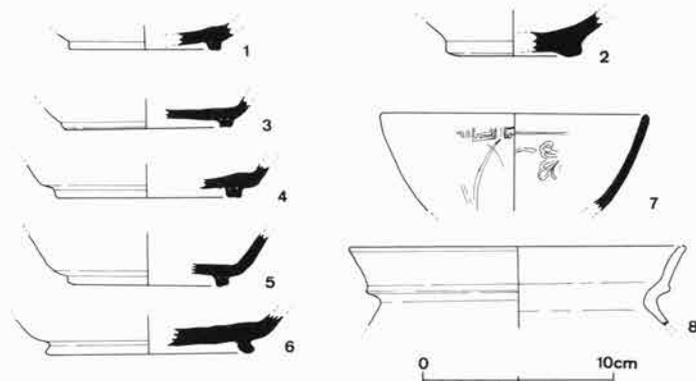
透かしをもち6世紀前半(MT15型式併行期)のものとする。3は平安時代の杯Bの破片である。4・5は黒色土器碗の底部である。11世紀中葉～12世紀初頭のものであろう。6は須恵質瓦片である。どのような性格の遺構に伴っていたかは不明であるが、瓦葺建物の存在を示唆する資料である。

第13図2～6が第3トレンチから出土した木製品である。5がS X01北側から出土している以外は全て溝SD02から出土したものである。2は両端を丸く仕上げる棒状木製品で、長さ42cm・幅2.5cm・厚さ21.2cmを測る。3は先端に面取り痕を形成している棒状木製品である。残存長68cm・軸の直径2.6cmを測る。2・3の棒状木製品の用途は不明である。4は火鑽白である。5は組織の密な広葉樹を素材としており、鉄斧の柄の部材と考える。先端部が徐々に幅を減じていることからここに袋状鉄斧を装着したものと思われる。柄を通したと考えられる円孔は斜め方向に穿孔される。長さ18.8cm・幅4.6cm・厚さ3.6cmを測り、断面は方形を呈する。6は一木を削り抜いて仕上げられた短刀もしくは刀子の柄と考える。長さ13.5cm・幅2.5cm・厚さ2cmを測る。中軸ラインの中心に目釘穴を穿孔している。

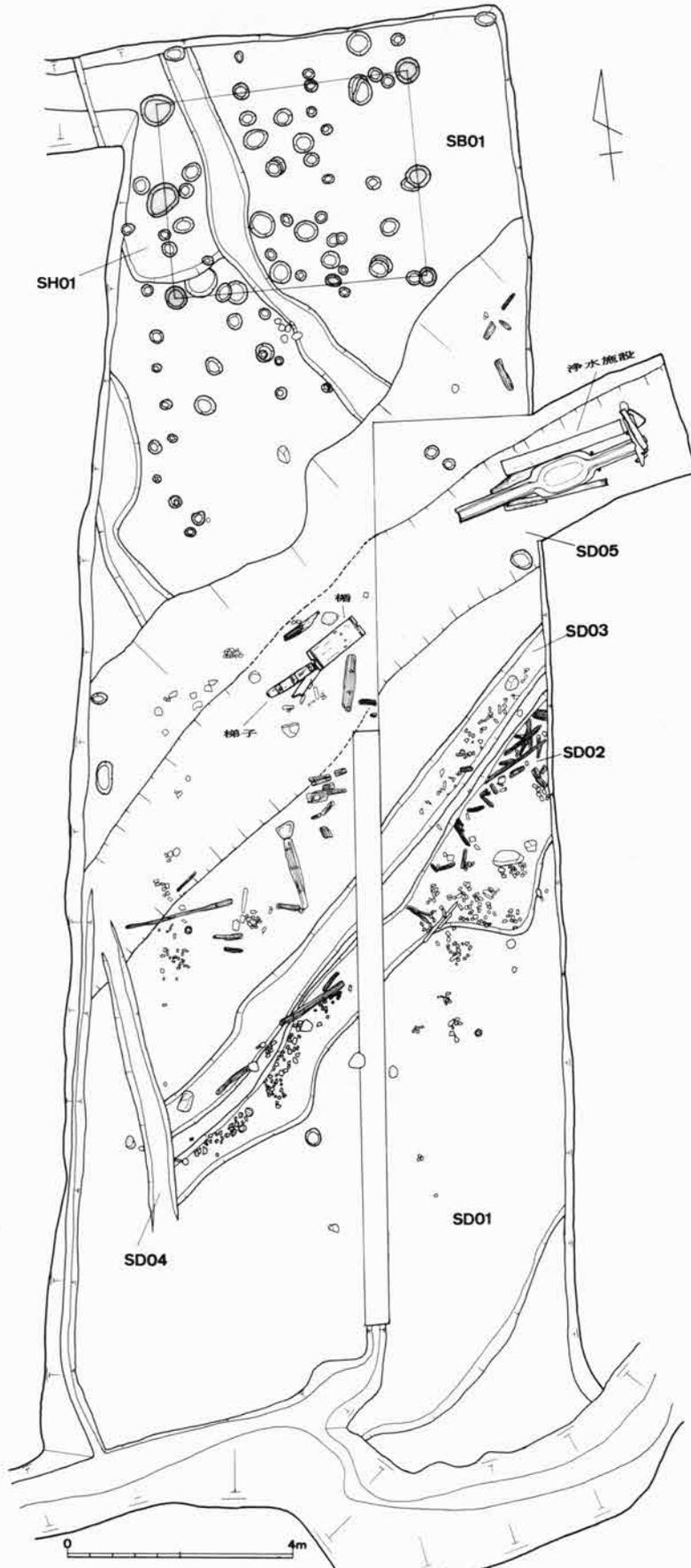
④第4トレンチ

第3トレンチのさらに西側に設定した長さ40m・幅3mのトレンチである。土層の基本的層序は第1層：表土(水田床土含む)、第2層：暗灰褐色シルト混じり中粒砂、第3層：橙褐色中粒砂、第4層：暗灰褐色粗砂である。

遺構は第4層上面で柱穴群を検出した。その他に、幅約4.5mを測る浅い溝状遺構SD01、小規模な溝SD02・04を検出



第15図 出土土器実測図(1・2：4トレンチ 3～8：6トレンチ)



第16図 第7トレンチ平面図

した。包含層中以外の出土遺物は少ない。時期は奈良時代後半～平安時代のものである。付近に小規模ながら、建物群の存在が想定され、集落が広がっていたものと推定される。

出土遺物は遺構検出面からの須恵器杯B(第15図1)、包含層中出土の白磁碗底部(第15図2)を図示した。木製品は溝SD02出土の下駄(第13図7)がある。

⑤第5トレンチ

調査対象地の2つの大きな谷の中間部に設定した長さ27m・幅3mを測るトレンチである。谷からの集水地点に当たるため生活面は検出されず、暗黒褐色シルト層の厚い堆積がみられ、さらにその下層は扇状地状堆積とみられる淡黄褐色細砂層がさらに厚く堆積していた。遺構の検出はできなかった。遺物には須恵器・土師器の破片があるが所属時期の分かるものはない。

⑥第6トレンチ

浅後谷南遺跡の南側の谷の入り口付近に設定し

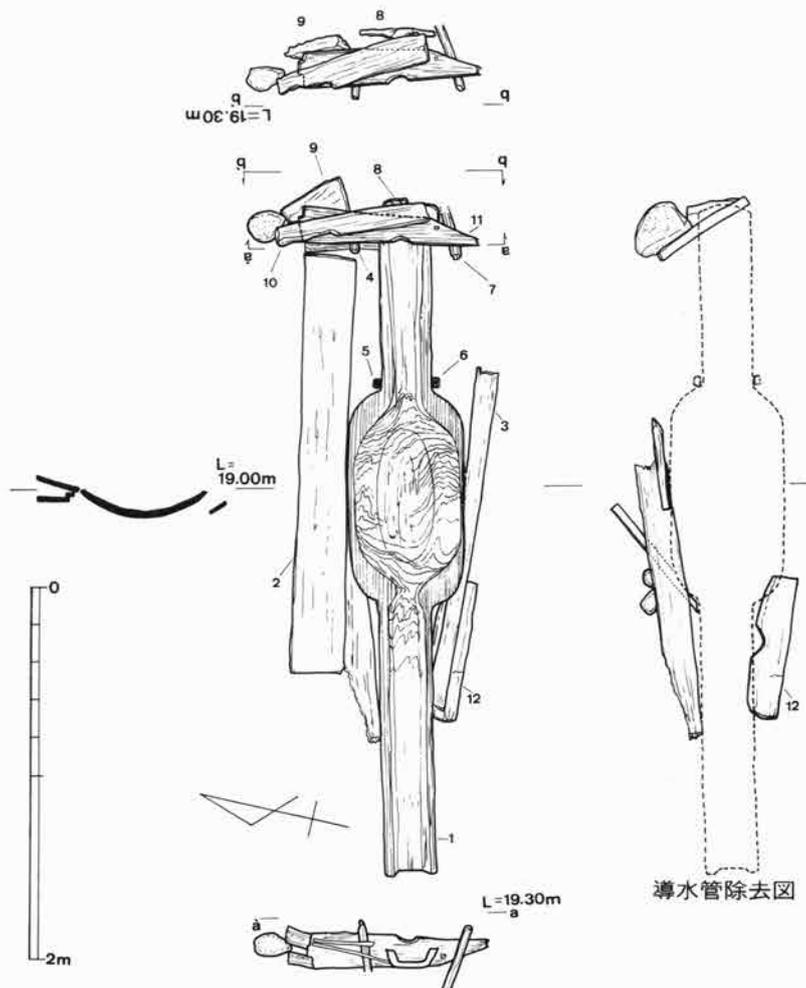
た長さ22m・幅3mのトレンチである。谷奥から流れてくる大小の河川の北側に形成された丘陵裾のテラス部に相当する。本トレンチは平成10年度に実施した面的調査のA地区に含まれるため、詳述は避ける。検出した遺構には柱穴群があり、出土遺物には須恵器杯Bの破片(第15図3～6)、体部外面に雷文が描かれている龍泉窯系の陶磁器碗(第15図7)、複合口縁を呈する山陰系土器の甕(第15図8)などがある。須恵器杯Bは奈良時代後半～平安時代前半、陶磁器碗は14～15世紀にかかるものといえる。

⑦第7トレンチ

浅後谷南遺跡の南側谷部分に相当する部分に設定した長さ26m・幅8mのトレンチである。幾筋もの溝により運ばれた土砂が厚く堆積しており、これらの溝の中から出土した古墳時代前～中期の遺構・遺物にとりわけ重要なものが多い。トレンチ内の土層は、北側の遺構面(古墳時代～平安時代)のマンガンを含む黄褐色砂礫層より南側は複雑に切り合う溝群の黒色系土砂の堆積である。調査区北側は平安時代の掘立柱建物跡S B01(2間×3間)・溝・古墳時代の竪穴式住居の一部などが検出された。古墳時代～平安時代の遺構面の南側は、北東から南東方向へ流れる弥生時代～古墳時代の溝(S D01～S D05)が検出された。

溝S D01は、弥生時代後期からの大規模な溝であり、幅12m・深さ1m以上を測る。試掘調査では溝底部まで確認することができなかったが、平成10年度の調査で断ち割りを実施した結果、弥生中期と考えられる大規模な溝(S D2018)が埋没し、再掘削を行ったものと判断した。北側の肩部付近で梯子(第21図2)と盾状木製品(第21図3)が出土した。この溝が時代が下るにつれ徐々に埋没していく過程で溝(S D02～S D05)が形成されてきたものと判断された。

溝S D02は、深さ20cmほどで古墳時代中期のもの



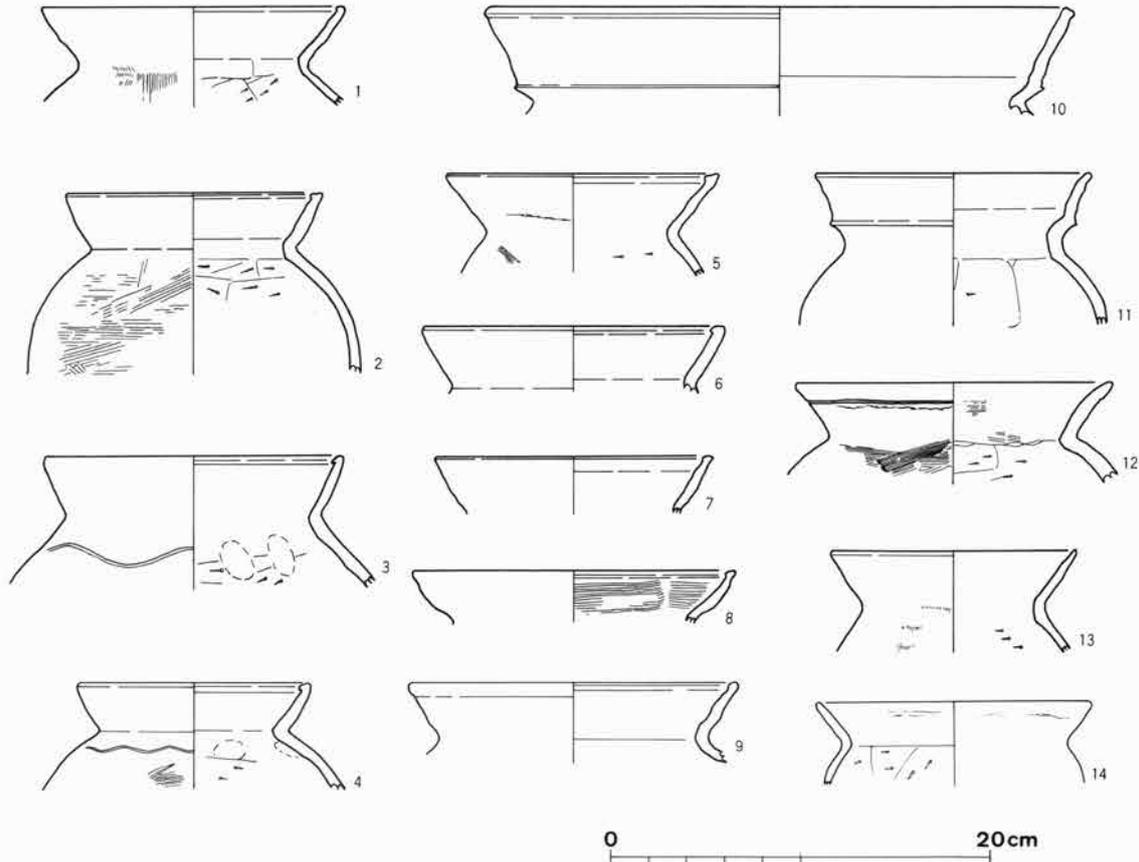
第17図 浄水施設1 実測図(番号は第22図に対応)

のである。肩部から多量の土師器(高杯・小型丸底壺など)や木製品が出土した。平成10年度調査の溝S D2010(古)の下流部に相当する。

溝S D03は深さ25cmほどで、古墳時代中期のものとみられる。ここからも土師器や木製品が出土している。平成10年度調査の溝S D2010(新)の下流部に相当する。

溝S D05は幅2m・深さ40cmを測り、平成10年度調査の溝S D2012の下流部に相当する。ここからは古墳時代前期の浄水施設が検出された。ここでは浄水施設1として解説を加える。

浄水施設1は特殊な構造をとる一木造りの導水管(長さ3.5m・幅1.1m)と上流側に構成された水を堰き止めるための堰状施設からなる。導水管本体は細い杭2本を上流側に打ち込むことにより固定する。そして上流側の水の取り入れ口に杭と板材を用い簡便な堰状施設を作り水の流れを調節している。上流側の導水管木樋部分に直行する堰状施設は横板材の上辺に「U」字状の切り込みをいれあふれてくる水がうまく樋部分に落ちるように、下流側にやや傾かせ、角度などを考慮して組み上げられている。水は木樋部分を伝って導水管中央の楕円形の槽状部分(長さ1.1m・幅60cm)に導かれ溜まる。導水管槽状部分の出水口は底が少し盛り上がり、なおかつ木樋部分の幅が滑らかな造作でしぼられ若干狭くなっているのが特徴である。また導水管本体の北側のみ足場にしたと考えられる板材(長さ2.4m・幅50cm)が据えられていた。導水管の木樋・槽状部分を含めた溝内の埋土は灰褐色粗砂を主体とする砂礫により埋没していた。出土遺物は浄水施設1の周辺では土器の出土が少なかったが、モモ果核が大量に出土した。なお、浄水施設周辺部は丹念

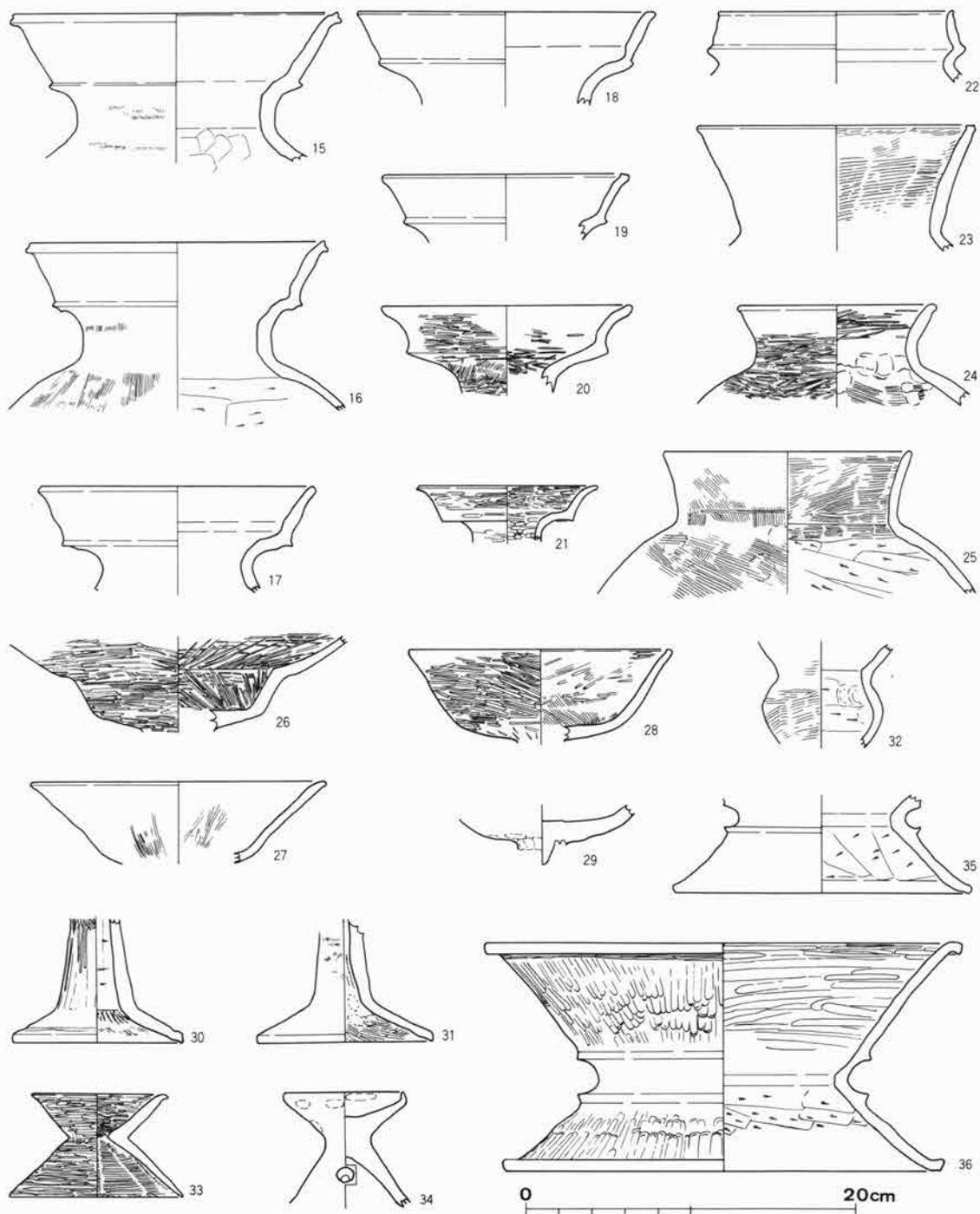


第18図 S D2012第1次調査出土土器実測図(1)

に精査したが柱穴等は検出されず上屋構造を復元するのは困難である。

(黒坪一樹)

溝S D05出土遺物には土器・木製品がある。ここでは、出土土器について概要を述べる。出土土器を整理するに際しては、浄水施設1周辺では遺構が複雑に切り合っていることが平成10年度の断面観察の結果明らかになった。また、下層の包含層をも切り込んで掘削してしまっているため、下層遺物の混入が著しく、時期を示すものあるいは共伴遺物の特定が困難である。そこで、



第19図 S D2012第1次調査出土土器実測図(2)

第2表 溝S D2012第1次調査出土土器観察表(1)

番号	器種	法量			調整		胎土					色調	残存率	備考
		口径 (cm)	器高 (cm)	最大径 (cm)	内面	外面	高温 石英	石英	長石	雲母	他			
1	甕				ケズリ	ナデ		○	○	○		黄褐	細片	煤付着
2	甕	13.3			ケズリ	ハケ	○		○			灰褐	25	煤付着
3	甕	15.5			ケズリ	ナデ	○		○			橙褐	20	匏描波状文
4	甕	12.0			ケズリ	ハケ後 ナデ	○	○	○			橙褐	25	刺突紋匏描 波状文
5	甕	14.2			ケズリ	ハケ後 ナデ	○		○			灰褐	20	
6	甕	15.0			ナデ	ナデ	○	○	○			灰褐	15	
7	甕	14.3			ナデ	ナデ		○	○			黄褐	12	
8	甕	16.8			ハケ後 ナデ	ナデ	○		○			黄褐	25	
9		17.0			ナデ	ナデ		○	○	○		灰褐	25	
10	甕	30.0			ナデ	ナデ	○	○	○			橙褐	10	
11	甕	13.9			ケズリ	ナデ	○		○			橙褐	20	刺突紋摩耗
12	甕	16.0			ケズリ	ハケ		○	○			黄褐	25	摩耗
13	甕	12.7			ケズリ	ハケ後 ナデ		○	○			灰褐	10	
14	壺	12.4			ケズリ	ナデ	○	○	○					
15	壺	19.5			ケズリ 後ナデ	ハケ後 ナデ		○	○			灰白	25	
16	壺	17.2			ケズリ	ハケ		○	○			橙褐	20	
17	壺	16.4			ケズリ	ナデ	○		○			灰褐	15	
18	壺	16.2			ナデ	ナデ		○	○			橙褐	25	
19	壺				ナデ	ナデ		○	○			黄褐	細片	摩耗
20	壺	14.0			ナデ	ナデ		○	○			黄褐	15	
21	壺	10.5			ミガキ	ミガキ	○		○			黄褐	25	
22	壺	14.0			ナデ	ナデ		○	○			灰褐	13	
23	壺	15.6			ハケ後 ナデ	ナデ		○	○			灰褐	70	
24	壺	11.5			ハケ	ミガキ		○	○			灰白	40	
25	壺	14.7			ケズリ	ハケ	○	○	○			橙褐	25	
26	高杯				ミガキ	ミガキ		○	○			橙褐	20	暗文
27	高杯	17.2			ミガキ	ミガキ		○	○			橙褐	15	摩耗
28	高杯	15.4			ハケ後 ミガキ	ミガキ	○	○	○			灰褐	30	
29	高杯				ナデ	ナデ		○	○			橙褐	20	
30	高杯				ケズリ ハケ	ミガキ		○	○	○		灰褐	90	スカシ無し
31	高杯				ハケ	ハケ後 ナデ		○	○			橙褐	40	スカシ無し

第3表 溝S D2012第1次調査出土土器観察表(2)

番号	器種	法量			調整		胎土					色調	残存率	備考
		口径 (cm)	器高 (cm)	最大径 (cm)	内面	外面	高温 石英	石英	長石	雲母	他			
32	小型丸 底壺			7.8	ケズリ	ハケ	○		○			黄褐	35	
33	器台	8.3	6.6		ミガキ ハケ	ミガキ		○	○			黄褐	95	底径10.4
34	器台	7.1			ナデ	ナデ		○	○			黄褐		スカシ4
35	鼓形器 台				ケズリ	ナデ		○	○			橙褐	20	底径17.8
36	鼓形器 台	23.3	14.1		ミガキ ケズリ	ミガキ		○	○			橙褐	40	底径26.2

今回の整理に際しては浄水施設1調査時の土層観察用畦から出土層位の特定できるものを中心に図化する事とした。

出土土器は全て土師器であり、出土層位は注記から判断すると以下のようになる。

木樋取り上げ下：導水管設置以前の土器.... 1・19・29

木樋器畦内：木樋槽状部分内の埋土.... 33・15・3・35・28・4・2・

樋の部分：木樋周辺溝埋土.... 30・18・17・6・27

木樋周辺：木樋周辺溝埋土.... 12・34・32・8・25・16・36・21

暗青灰色砂層：浄水施設1廃絶後溝埋土.... 5・7・20・14・13・26・24・10・22・31・9

1～14は甕である。1～9のように口縁内端面を肥厚させる布留式甕の特徴を備えたものが大部分である。3・4のように篋描波状文を施すものが存在する。体部の確認できるものでは横方向のハケによる調整が顕著である。

10・11は山陰系の複合口縁甕である。1次調査出土資料全体を通じてみても非常に少ない。

12は口縁が「く」の字状を呈する甕である。2次調査出土のものに比して口縁はやや直立気味である。

13は口縁をやや内湾させる甕である。1～9のバリエーションとして捉えることができる。

15～25は壺である。複合口縁壺の他に広口壺が確認できる。

15～20は中型の複合口縁壺である。いわゆる畿内系二重口縁壺といわれるものである。

21は小型精製品の二重口縁壺である。ていねいなヘラミガキにより調整される。

22は口縁を内傾させる複合口縁壺である。

23～25は直線的な口縁をもつ広口壺である。

26～31は高杯である。

26はいわゆる庄内系高杯と呼称されるものである。1点のみ存在している。ていねいなヘラミガキによって調整され、内外面に暗文を施している。

27・28は深手の杯部をもつ。いずれもヘラミガキにより調整される。

29は高杯杯底部のみ残存している。口縁部の剥離部分の状況から27・28と同様の形態をとるものと判断する。円盤充填法により底部を作っている。

30・31は高杯脚部である。細く長い脚柱部をもつ。スカシはない。

32は小型丸底壺である。作りは粗雑である。口径が体部最大径を越える。

33～35は器台である。33・34は小型精製品、35・36は鼓形器台である。全容の判明する36は大型品であるが、口径に対して器高の低い扁平なプロポーションを呈している。

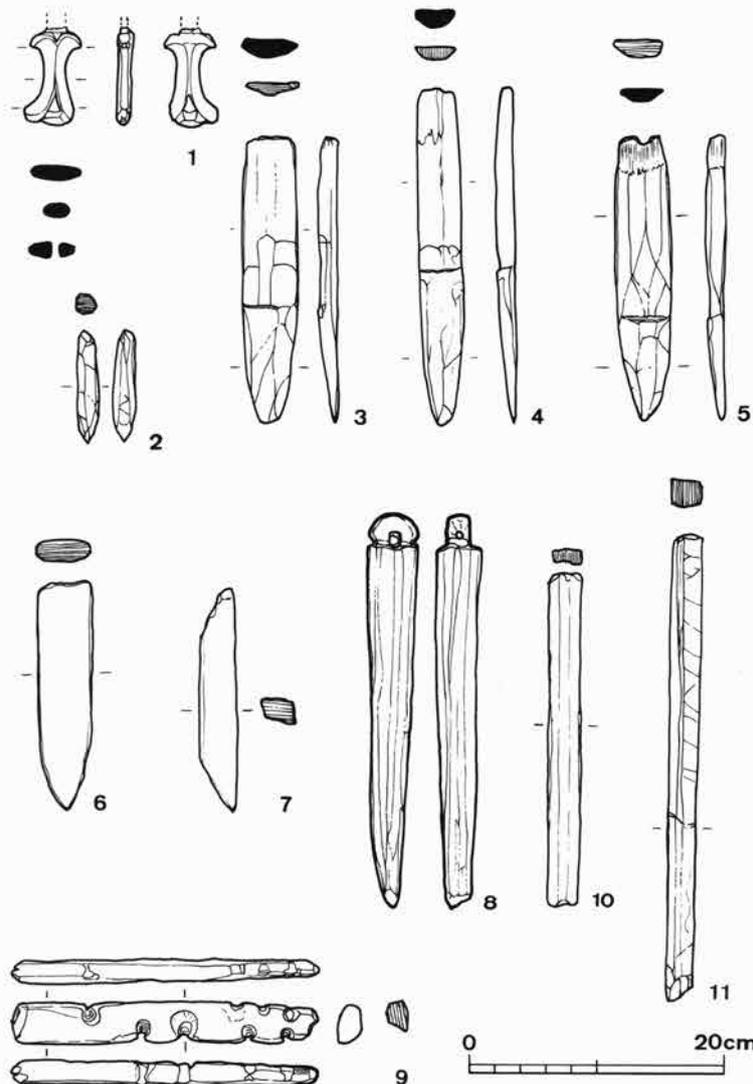
以上、溝S D05出土土器の概要を記した。2次調査溝S D2012の出土土器と比べると、壺の比率が高く、精製品も多い。しかしながら浄水施設1廃絶後の土器群はS D2012浄水施設2上流部出土の土器群と型的な差を認めることはできず浄水施設1と浄水施設2は土器の様相から見ても共存していたと考えることができる。溝埋没時の時期を示す土器群はないがこれは溝の検出レベルが低いためであると考えられる。

また、木樋槽状部分出土の土器とその上層である暗青灰色砂層の土器群内にも大きな形式差が認められないことはこの浄水施設1が長期間恒常的に使用されていたものではなく。短期間の内

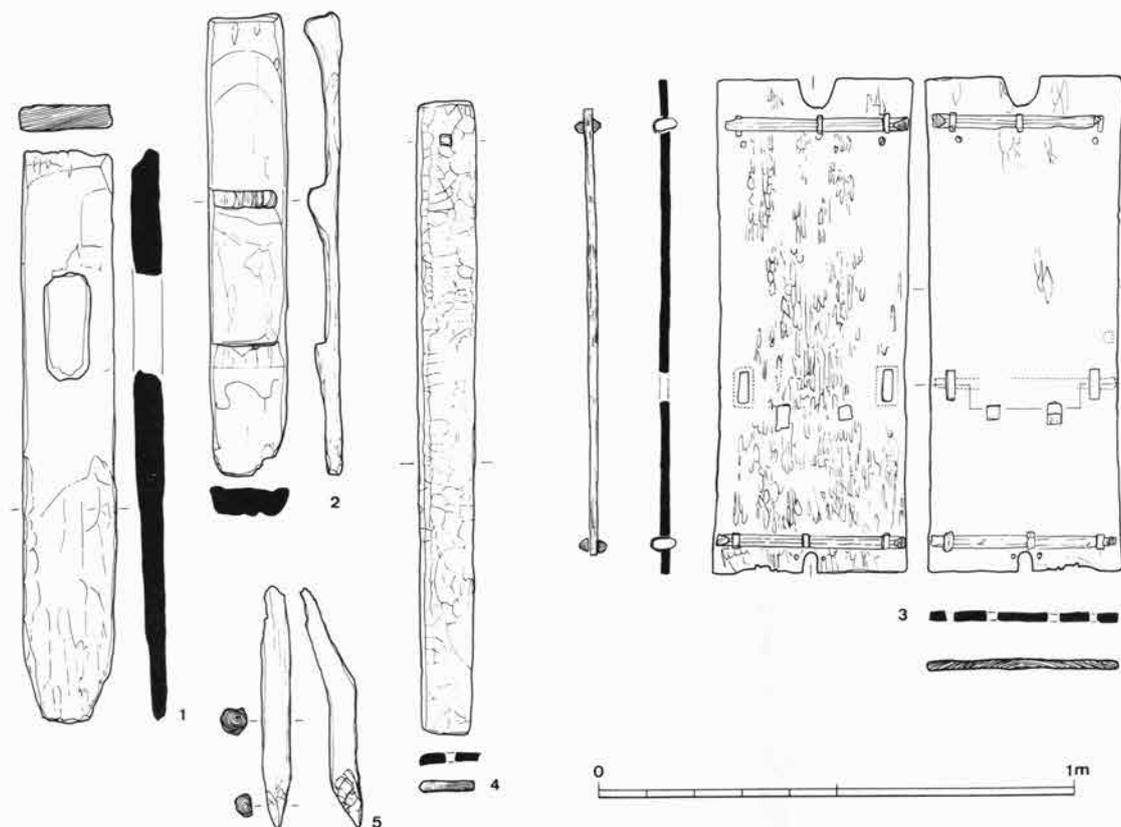
にその機能を失っていることを示すものと考えられ、浄水施設1の性格を考える上で重要な点であるといえる。

(石崎善久)

第7トレンチでは土器の他に各溝から木製品が出土している。ここでは木製品の概要を述べる。まず、浄水施設1以外のものからみていく。第18図1は透かしが入った精巧な造りで、表面には丹塗りが施される。性格は不明であるが、模造剣の柄もしくは儀仗などの先端の可能性はある。溝SD05より上層の黒色包含層中からの出土で古墳時代中期のものといえる。2は小型の杭状の木製品である。木釘などの用途が推定される。溝S D03から出土した。3～5も溝S D03からの出土である。



第20図 第7トレンチ出土木製品実測図

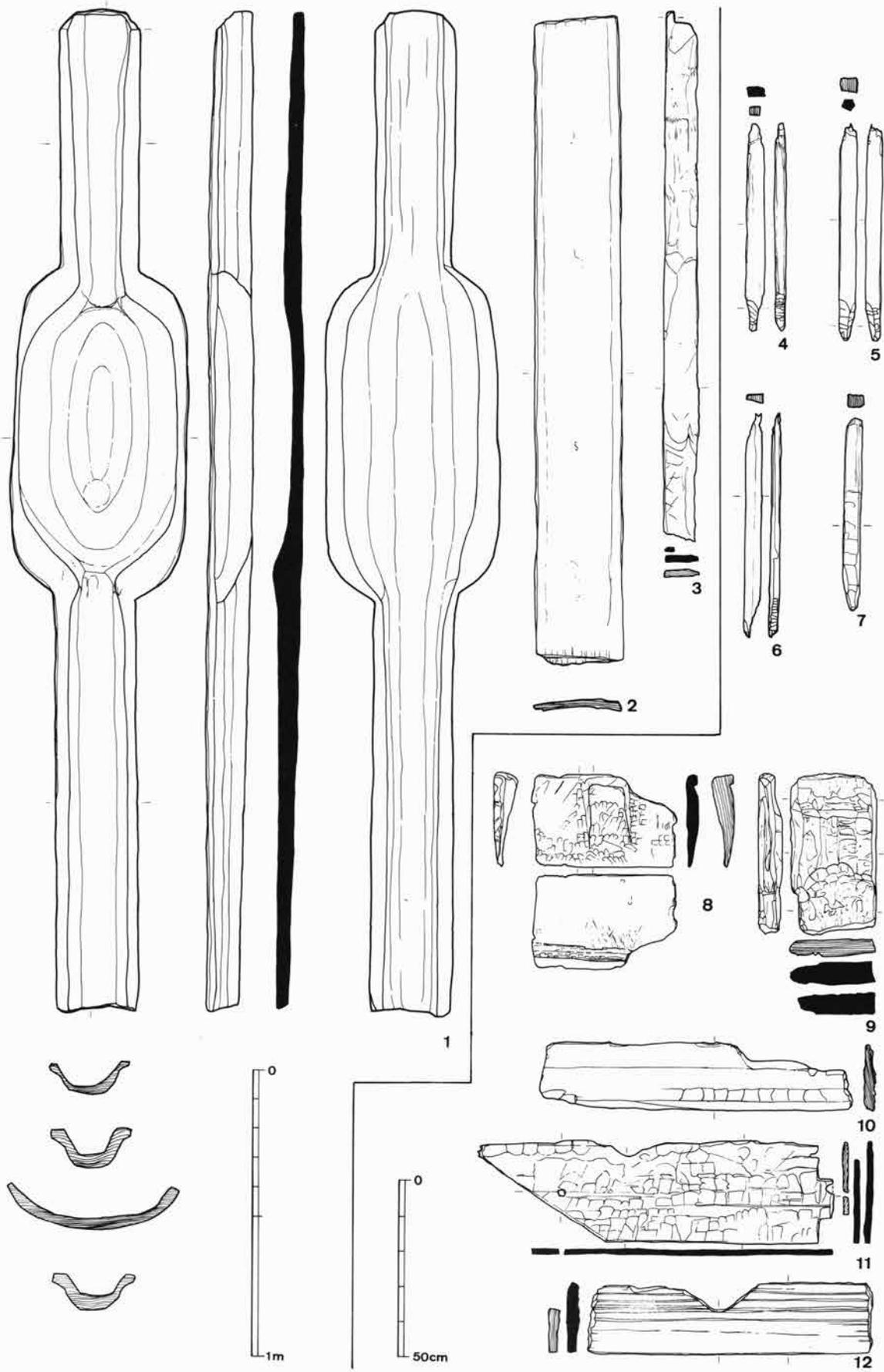


第21図 第2・7トレンチ出土木製品実測図

柄もしくは鞘に入った刀を模した形代と考えられる。溝を堰き止めるかのように3本並んで出土した。8は棒状の部材の一端に円孔をもつ円形の突出部を削り出している。模造剣と思われる。溝S D05の下層から出土した。6・7は杭状に加工された部材である。溝S D01の下層から出土した。9はよく使用された火鑽臼である。溝S D03の下層から出土。10・11は棒状の角材で、これらは浄水施設1導水管本体の底を安定させるために使用されたものである。

第21図2・3は溝S D01出土の梯子と楯状木製品である。2点接しての出土である。弥生時代後期のものと考えている。楯状木製品(3)は長さ1m・幅50cm・厚さ3cmを測り、短辺中央に「U」字形の切り込みと小さな2つずつの穿孔がみられる。さらに短辺の両端および中間部やや下に四角の柄穴を開け、表裏両側に栈木を渡してサクラ樹皮で固定している。手の込んだものといえる。4は先端部に四角の穿孔を持つ長い板材である。溝S D01から出土した。5はS D01から出土した杭である。

第22図は導水管本体および浄水施設として使用された主要な部材である。主にスギ材が使われている。1は導水管(木樋)である。滑らかに整形された楕円形の槽の部分から、両側にのびる直線的な樋部をもつ特異な形態である。全長約3.5m、槽部の長さ1.1m・幅約60cm・深さ約12cm、樋の幅約20cm弱を測る。上流側の樋の端部は斜めにカットされている。2は木樋に沿って設置された長い板材である。左側長辺の縁辺部はわずかに顎が形成され、同様の板材が交互に組み合わされていたようである。3は木樋を水平に設置するために使用された部材である。先端部に柄がみられ建築部材の転用であろう。4～7は角杭である。4と5が木樋の固定に、6・7は塞き止



第22図 第7トレンチ浄水施設構成部材実測図

め施設のもたせかけに使用されたものである。8・9は止水施設の基礎(台)に使用されていた。8・9とも直柄平鍬の未製品と考える。8は柄装着部および泥除け装着部まで粗く削り出されている。10は止水板材のひとつである。12も止水板材である。一長辺の中間部に浅い「U」字形の切り込みがはいる。左側先端が急角度で截断され、四角の穿孔がみられること、右側も組合せを示すように突起部を形成していることから、何らかの部材とみられる。12は木樋の下から出土したもので、「V」字形の切り込みがみられることから、別地点の止水施設に使用されていた止水板であろう。

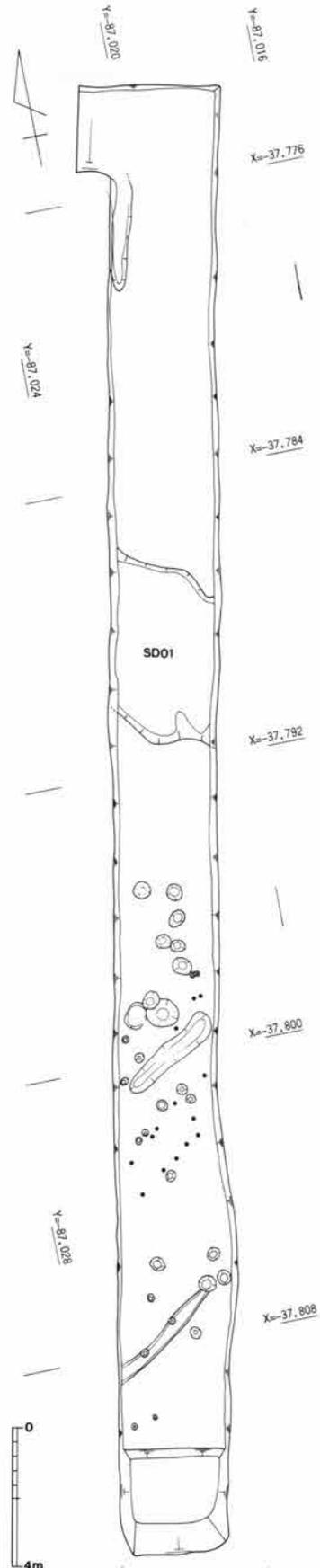
⑧ 8 トレンチ

7 トレンチの西側に設定した幅42m・長さ3mのトレンチである。トレンチ中央付近に幅4m・深さ30cmを測る溝状遺構(SD01)を、その南側に柱穴群を検出した。淡褐色の遺構面で、SD01の北側は、ゆるやかに傾斜し小谷地形を呈する柱穴痕はまばらで、掘立柱建物跡の抽出はできない。柱穴群は平安時代頃のものと考えられる。また小規模な溝に平行して北東～南西方向にはしる柵(しがらみ)状の杭列を確認した。

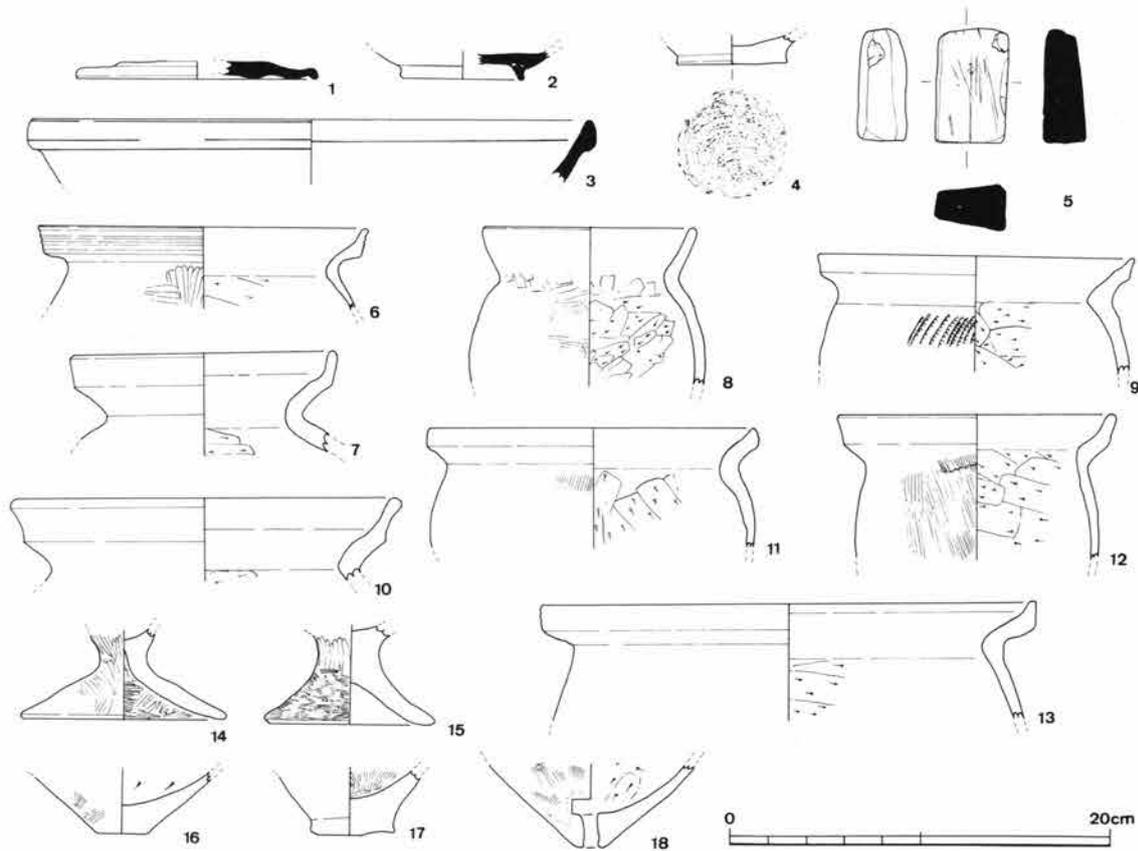
流路(SD01)からは弥生時代後期末頃の土器群がまとまって出土した。

出土遺物についてみる(第24図)。1～5は南半部の平安時代の遺構面から出土したものである。1は須恵器の杯蓋で口径12.8cmを測る。2は須恵器碗の底部、3は須恵器鉢の口縁部である。4は黒色土器の糸切り痕をもつ底部である。5は板状砥石である。線状の研磨痕が観察される。6・8～13は甕である。

6～18は弥生時代後期末～古墳時代前期にかけての土器群である。6・8～13は甕である。6は「く」の字状に屈曲する口縁部で、短く外反して立ち上がる端部をもつものである。端部外面は擬凹線が施される。7は壺である。「く」の字状に屈曲する頸部をもち、口縁中間部から端部を垂直に拡張させているものである。8は比較的ゆるやかに内湾する口縁部をもつもの。古墳時代前期のものと思われる。9・10・12・13は、短く外反して立ちあがる口縁端部が二重口縁を志向し拡張されているもの。11は「く」の字状に開く口縁端部の内



第23図 第8トレンチ平面図
(ドットは杭列)



第24図 第8トレンチ出土遺物実測図

側がやや内湾している。端部外面はナデ調整である。

14は甕の蓋であろう。15は脚台である。16・17は甕および壺の底部である。18はおそらく砲弾形の鉢で底部は穿孔される。

小結

合計8本のトレンチにおける浅後谷南遺跡の遺構・遺物の包蔵状況についてみてきた。その結果、いずれのトレンチからも遺構または遺物を検出した。こうした谷地形に位置する遺跡の重要性を改めて考えさせるものとなった。各トレンチの成果概要をふりかえり、事実報告を終えたい。

第1トレンチでは時期は不明ながら溝が検出され、包含層中から弥生土器や古墳時代の土師器高杯、さらに平安時代の須恵器などが出土した。北側すぐに浅後谷南墳墓が存在し、このあたりまで弥生～平安時代の生活面が続いていることをうかがわせるものとなった。

第2トレンチでは平安時代の溝・柱穴痕、下層の弥生時代の木材廃棄地点などを検出した。

第3トレンチからは大量の弥生時代後期末～古墳時代初頭の土器が出土した。厚さ40cmほどの黒灰色砂質土の詰まった沼地状落込み遺構(SX01)からのものである。本トレンチの谷の奥に集落の存在を考慮すべきものといえる。本トレンチから上位の第2トレンチにおいてSX01の続きはのびていなかった。

第4トレンチでは平安時代の溝および柱穴群を検出した。時代が下ってくると、このあたりまで集落としての土地利用がすすんでくるのであろう。

第5トレンチは、谷部の土砂の流れこみが顕著で、唯一遺構の検出が認められなかったトレンチである。浅後谷南遺跡の東側の2つの谷の中間部にあっており、河川の水が常に供給されていた地点であったとみられる。

第6トレンチは、本格調査のA地区に含まれた。平安時代の多くの柱穴痕が検出された。南側の谷から上がった縁辺部に位置している。

第7トレンチは最も顕著な遺構・遺物の検出をみた。弥生時代後期～古墳時代中期にかけての溝跡が複雑に交差している。なかでも、古墳時代前期の浄水施設の検出は、特異な形態の木樋に象徴されるごとく、非常に貴重なものである。そのため、周辺部の十分な調査がなんとしても必要とされたわけである。流れる水を塞ぎ止めて、いわゆる「浄水」を一木造りの木樋に溜めるこのような施設は、畿内では奈良県纏向遺跡・同南郷大東遺跡、滋賀県服部遺跡、大阪府神並・西ノ辻遺跡などで報告されている。いずれも集落の中心部から離れて発見される。農耕儀礼にともなう祭祀遺構のほか、産屋遺構にともなうトイレ施設とみる考えなどもある。

第8トレンチは古墳時代前期の浄水施設の検出された第7トレンチの西側に設けたものである。古墳時代における人工的な施設の存在は検出されなかった。中央に溜り状になった自然流路内から、弥生～古墳時代の土器が出土した。また、南半部で平安時代の柱穴群・溝・柵(シガラミ)などが検出され、遺跡の確実な広がりを捉えることができた。

(黒坪一樹)

4. A地区の調査

a. 調査概要

①概要

A地区は遺跡の南側に位置し、調査区中央部分が谷地形を呈し、この谷地形を挟んだ南北部分が各々安定した地盤をもつ微高地上を呈している。この微高地上では柱穴群や竪穴式住居跡などが検出され、谷地形部分では複雑に切り合う溝群を検出することができた。なお調査区の南側に位置する微高地は、ほとんどが調査区外となっており、遺構がさらに広がることは明確であるが詳細については不明である。

②基本土層

A地区では土層の観察をトレンチ各断面で実施した。本概要ではそのうち、トレンチ谷部分の南北軸土層断面およびトレンチ北壁微高地上の土層断面を示している。

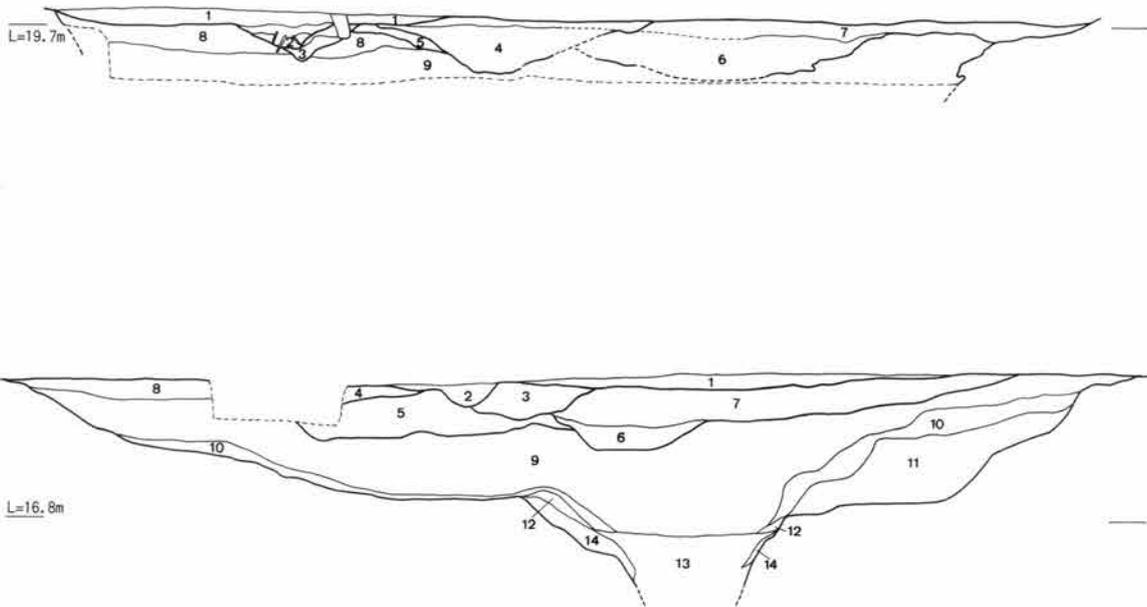
谷部分は複雑な土層の堆積状況を示しているが、これは、溝が掘削、埋没を繰り返しているためと判断された。

もっとも古い溝(S D2018)は、部分的にしか調査を実施していないため、詳細は不明であるが幅4m・深さ3m以上を測る大規模なものである。出土する土器片は全てローリングを受けており、時期の判明するものはないが、調査区内で出土する遺物のうち最も古い弥生中期(IV様式)に相当する可能性が高いものと考えられる。

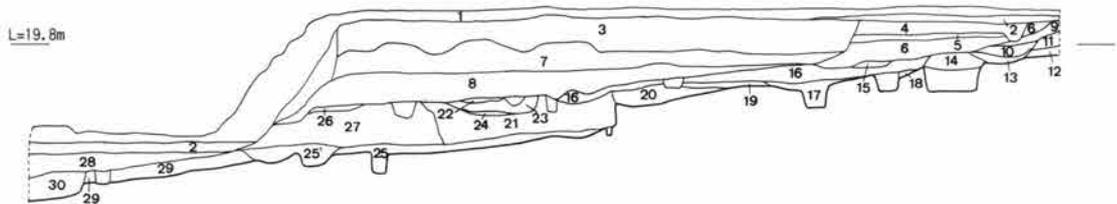
溝S D2018の埋没後に弥生後期の土器を包含する堆積層(8・9層)が形成され、この包含層上面から弥生後期末～古墳時代中期の各溝が切り合い関係を持ちつつ掘り込まれていったものと判断される。これらの溝の内、最も新しい溝S D2010埋没後に、植物遺体を多量に含む腐植土層(T K47～209型式併行期の須恵器を包含)が形成され、谷部分は一時湿地化し、土地利用のなされなかった時期があるものと考えられる。この腐植土層を切り込んで、平安時代の溝S D2001が掘り込まれている。この上の層は耕作土・表土が形成されている。

微高地上トレンチ北壁では、基本的に地山である花崗岩風化土、その上にいくつかの層が堆積しており、各層からピットなどが掘り込まれている状況が把握された。そのさらに上層は植林などに伴う近世の盛土層である。また、調査区内では地山上の堆積層が形成されずに耕作土直下が地山となっている地点も認められた。

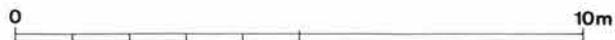
以上、調査区北側微高地上には複数面の遺構面が存在することが明らかとなったが、遺跡が緩斜面に立地しているという点もあったため、実際には各層ごとに正確に掘削・遺構を検出するという作業ができなかった。そこで、おおむね第27層上で検出した上層遺構群と地山面まで掘削した段階で検出した下層遺構群の2面の遺構として把握することとした。また、上層遺構検出後の掘削作業中に検出されたピット群は、その都度記録し、最終的には上層の遺構との関連を検討するという作業を行い、掘立柱建物跡等の復原を行うこととした。なお、微高地上上層の遺構群はおおむね飛鳥時代から中世、下層の遺構群は、弥生時代後期末から古墳時代後期にかけてのものである。



- | | |
|-------------------------------------|-------------------------------|
| 1 : 暗褐色粘質土
(有機物堆積層・木製品を多量に含む包含層) | 8 : 暗灰色粘質土(弥生後期包含層) |
| 2 : 灰褐色粗砂・暗灰色シルト(SD2010(新)埋土) | 9 : 暗灰白色細砂(弥生後期包含層) |
| 3 : 灰色シルト・暗灰白色粗砂(SD2010(古)埋土) | 10 : 黒褐色粘質土(旧表土) |
| 4 : 黒灰色粘質土・黄灰色中～粗砂互層(SD2012埋土) | 11 : 青灰色シルト・粗砂 |
| 5 : 暗灰色中粒砂(SD2017埋土) | 12 : 青灰色シルト |
| 6 : 黒色シルト・暗灰褐色粗砂互層(SD2016埋土) | 13 : 黄褐色粗砂・暗褐色シルト互層(SD2018埋土) |
| 7 : 黒灰色粘質土 | 14 : 黒褐色粘質土(旧表土) |



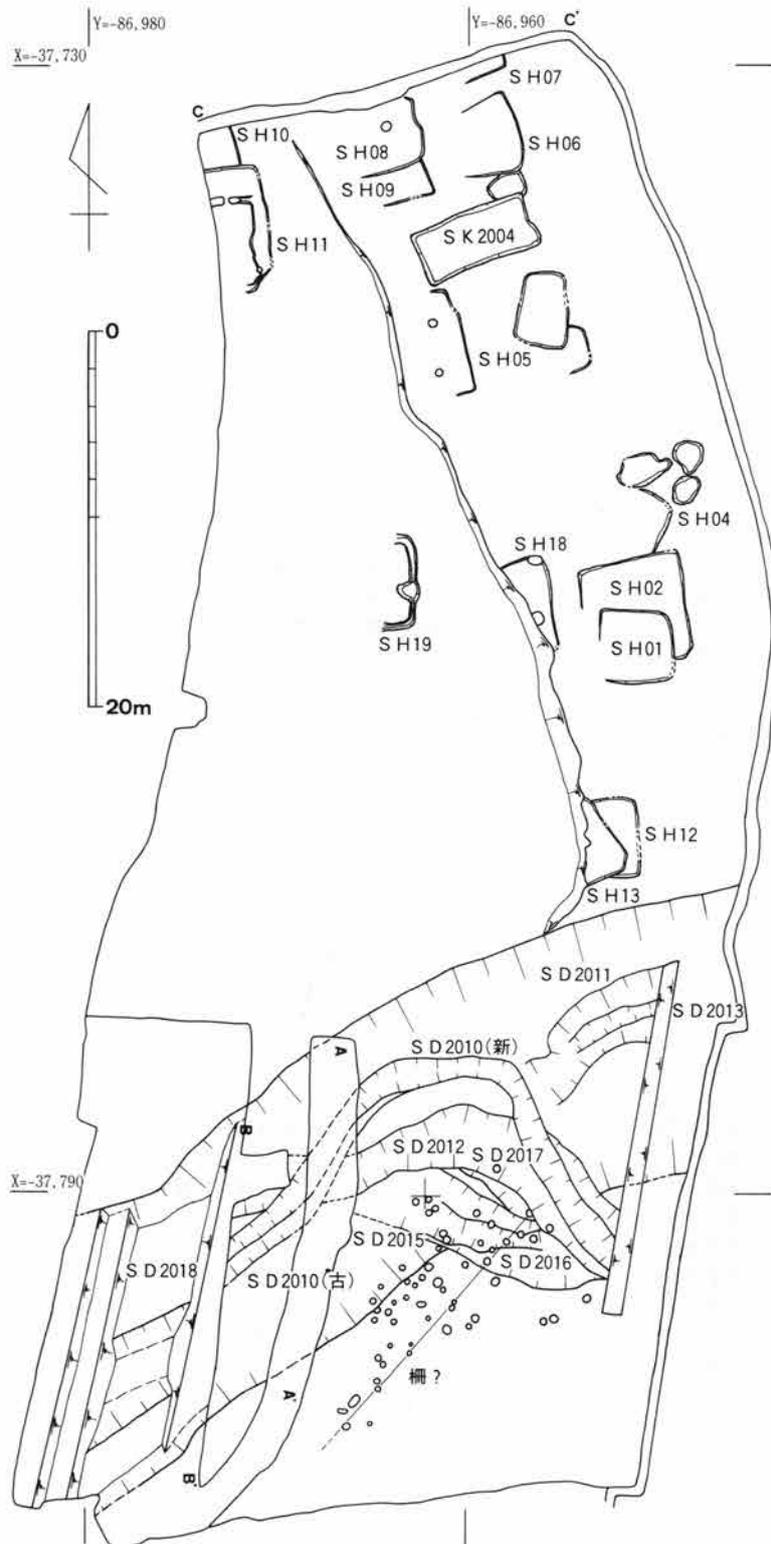
- | | | |
|-----------------------|----------------------------|---------------------|
| 1 : 表土 | 21 : 暗灰褐色中～粗砂 | 11 : 明黄橙色中～細砂 |
| 2 : 明黄灰褐色粘質土(床土) | 22 : 暗灰色粘質土 | 12 : 暗灰褐色粘質土 |
| 3 : 暗燈灰褐色中粒砂(客土) | 23 : 暗燈褐色粘質土 | 13 : 暗灰褐色粘質土 |
| 4 : 暗黄灰褐色中粒砂(旧耕作土) | 24 : 暗灰褐色粘質土 | (地山ブロック・炭・焼土含む) |
| 5 : 淡灰褐色シルト混じり中粒砂(床土) | 25 : 暗黒褐色シルト混じり細～中粒砂 | 14 : 明黄灰色粘質土混じり中～粗砂 |
| 6 : 暗黄褐色中粒砂(整地土) | 26 : 黒褐色細砂 | 15 : 暗灰色粘質土 |
| 7 : 淡灰褐色中粒砂 | 27 : 暗燈灰色中粒砂 | 16 : 暗灰色粘質土混じり中粒砂 |
| 8 : 暗黄褐色中粒砂 | 28 : 暗灰色中～細砂 | 17 : 黄褐色粘質土 |
| 9 : 暗黄灰褐色中粒砂 | 29 : 暗黄灰色細～中粒砂 | 18 : 黒褐色粘質土 |
| 10 : 暗黄橙色シルト混じり中粒砂 | 30 : 灰色シルト混じり中粒砂(竪穴式住居跡埋土) | 19 : 黄灰色粘質土混じり中粒砂 |
| | | 20 : 淡灰褐色粘質土混じり中粒砂 |



第25図 A地区各土層断面図

b. 古墳時代の遺構・遺物

古墳時代に属する遺構には、北側微高地上下層で検出したピット群・竪穴式住居跡・土坑、谷部分で検出した溝群がある。南側微高地でも古墳時代のものと考えられるピット群を検出して



第26図 下層遺構配置図 (1/400)

いる。ピット群は掘立柱建物跡になる可能性も考えられるが十分な検討を行うことができなかった。

また、竪穴式住居跡の周壁溝残欠と考えられる細い溝も複数検出しているが、竪穴式住居跡と判断する根拠に乏しいため、今回は割愛する。従って、確実に竪穴式住居跡と考えられるものは総数14基となる。

なお、各遺構出土土器に関する詳細はできる限り観察表を添えることとしたので併せて参照願いたい。

以下、主要な各遺構・遺物について概観する。

①竪穴式住居跡 S H 01

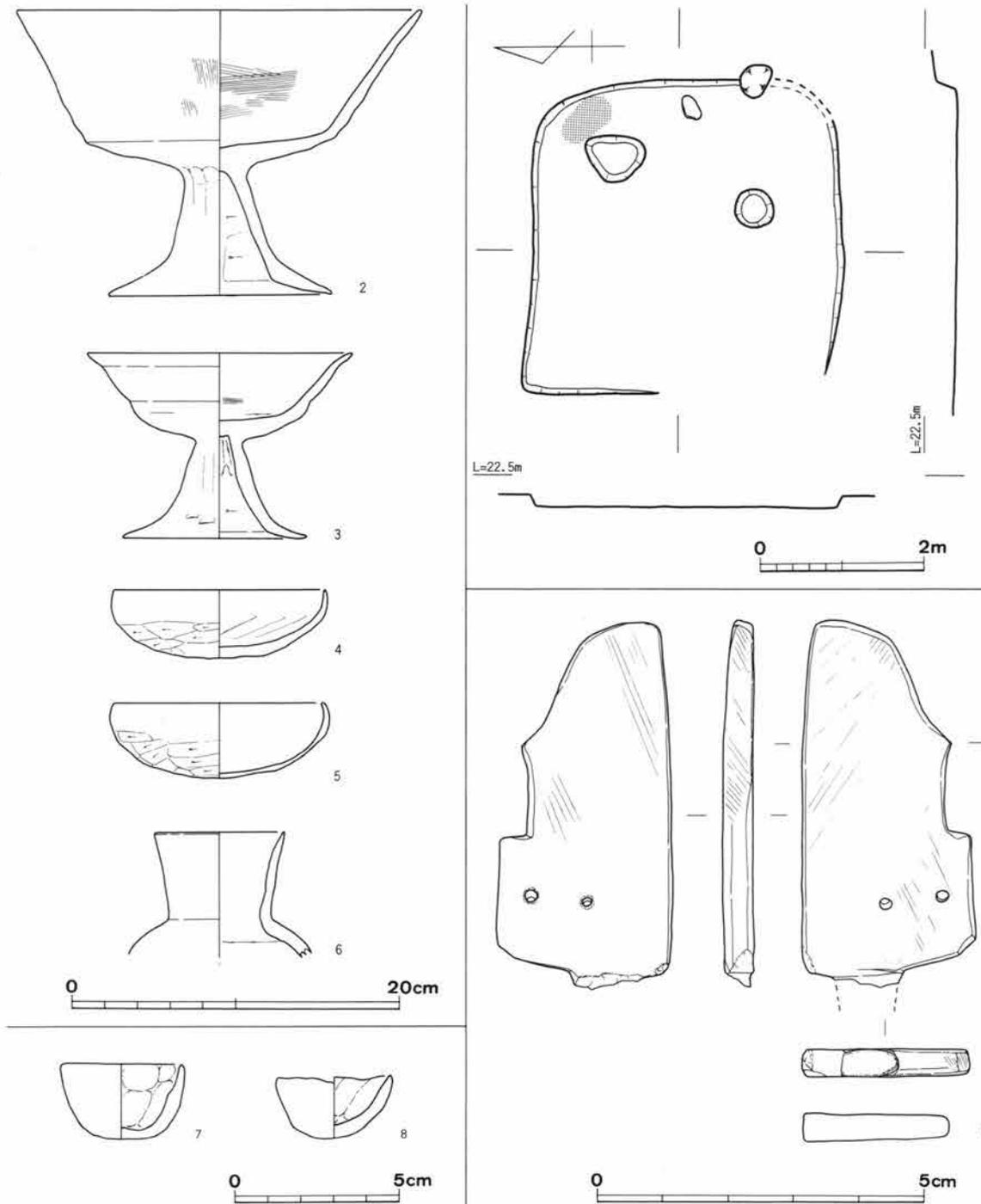
遺構 北側微高地南端に位置する竪穴式住居跡である。掘形平面形は隅丸方形を呈し、規模は南北3.8m・東西3.8m・深さ0.2mを測る。埋土はほぼ単層であるが、焼土塊が多量に認められた。

床面上では2か所のピットを検出したが、明確な柱穴については確認できなかった。炉・竈跡、周壁溝は確認されなかった。

遺物は埋土中から、須恵器・土師器片が出土したほか、北東床面から若干遊離した状態で、土器の集積を検出した。この土器集積内には完形個体に近い土師器や滑石製刀子が含まれ、出土状況から見て一括性の高いものとする。

遺物 SH01出土遺物には須恵器・土師器・滑石製刀子がある。そのうち、北東部土器集積のものを図示した。

1は滑石製刀子である。残存長5.6cm・幅2.6cm・最大厚0.45cmを測る。なお、峰部分より刃部



第27図 竪穴式住居跡SH01および出土遺物実測図

第4表 竪穴式住居跡SH01出土土器観察表

番号	器種	法量			調整		胎土				色調	残存率	備考	
		口径 (cm)	器高 (cm)	最大径 (cm)	内面	外面	高温 石英	石英	長石	雲母				他
2	高杯	24.6	17.5		ハケ	ナデ		○	○			橙褐	60	
3	高杯	16.0	11.4		ハケ後 ナデ	ナデ		○	○			橙褐	50	
4	杯	12.8	4.2	13.2	ナデ	ケズリ		○	○			橙褐	70	内面 工具痕
5	杯	12.6	4.7	13.4	ナデ	ケズリ		○	○			橙褐	75	
6	壺	7.8						○	○	赤色 砂粒		橙褐	30	摩耗
7	手づくね	3.6	2.3		ユビ	ナデ		○	○			橙褐	30	
8	手づくね	3.4	2.0		ユビ	ナデ		○	○			橙褐	100	

の方が若干薄く仕上げられている。その形態から革袋に納められた刀子を模したものと判断されるが、革を綴じるような表現はなされていない。穿孔は長軸に対し、直行する形で2か所認められる。両者とも片面穿孔である。茎部分は不注意にも調査時に欠損してしまい、失われているが、破断面から刃部は丸く、峰部は直線的に仕上げられていたものと判断される。全体に研磨痕が残されている。

土器は土師器のみを図示した。

2・3は高杯である。2は口径24.6cmを測る大型品である。杯部は直線的に立ち上がる。全体的に角張ったプロポーションを呈する。内面は横方向のハケ調整である。3は2に比べると小型である。脚部の形態は両者とも共通する。

4・5は杯である。浅い椀状を呈し、口縁部が内湾するため、体部最大径が口径より大きくなるタイプである。両者とも底部外面はヘラケズリにより仕上げられる。5は内面に板状工具による調整痕が認められる。

6は直線的な長い頸部を有する直口壺である。体部内面に粘土の接合痕が明瞭に残っている。

7・8はミニチュア土器である。同様の形態のものが、少なくとも、もう2個体存在する。内面は指押サエ、外面はナデにより調整されている。

この他に図示していないが、須恵器甕・壺と考えられる細片が共伴している。須恵器はいずれも小片であり明確な型式の判明するものはない。しかしながら、甕体部片の内面がいずれもスリケシ技法が認められる点から、TK23ないしTK47に併行する段階のものと考えられる。

これらの出土遺物中で注目されるのは、滑石製刀子の存在であり、丹後半島で初の出土例となった。共伴する遺物中に、ミニチュア土器が4個体以上含まれることから見ても、この住居に伴う祭祀に関係する遺物として考えることができる。なかでも、2次的な被熱の観察される個体が存在する点は、祭祀に際し、火が用いられていたことを示唆している。ただし、これが住居使用時の祭祀か、住居廃絶時の祭祀かという判断はできない。

② 竪穴式住居跡 S H02

遺構 竪穴式住居跡 S H02は調査区微高地上南に位置する。S H01に切られる。残存部分から、平面隅丸方形を呈すると考えられる。規模は東西5.5m・南北5.6m・深さ0.3mを測る。

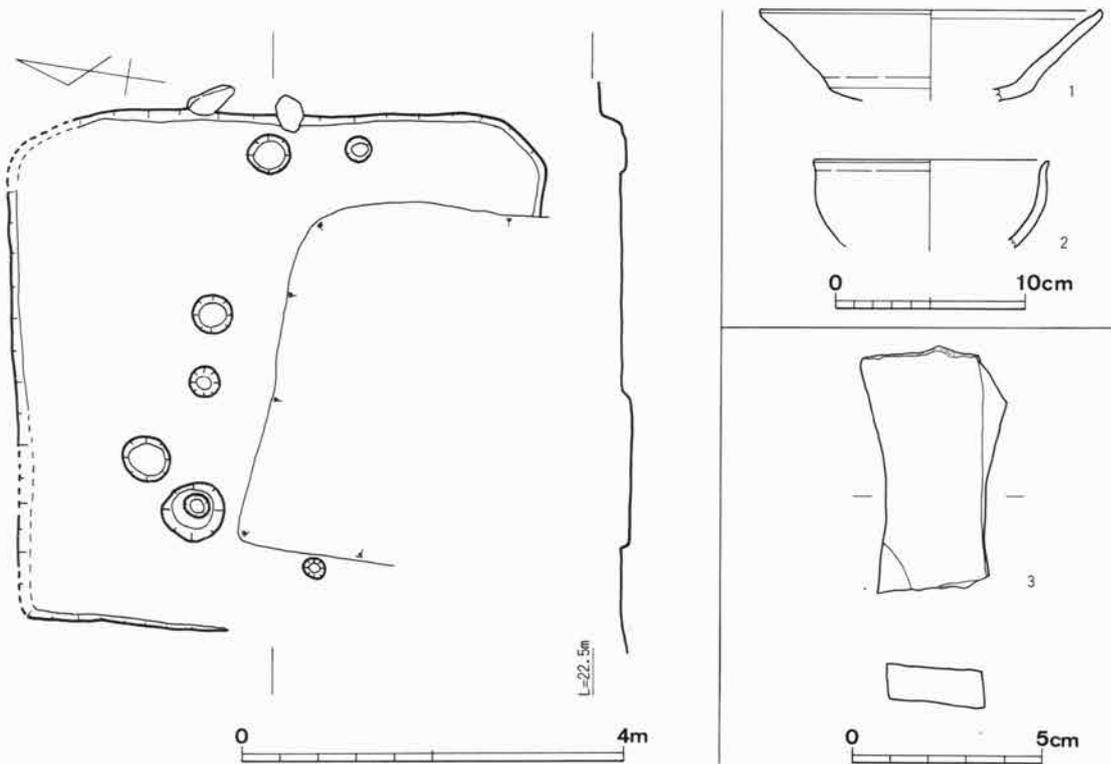
住居床面上からは、複数のピットを検出したが、主柱穴の特定はできなかった。また、炉・竈・周壁溝などの屋内施設は確認できなかった。遺物は埋土中から細片化した土器・砥石が出土したが、使用状況の判断できるものはない。

遺物 出土遺物には須恵器・土師器・砥石がある。須恵器には杯・壺・甕があるが細片化しており図化できなかった。甕内面はスリ消し技法が用いられている。図化し得たのは3点である。

1は土師器高杯である。鈍い段を有し、端部はやや内湾する。

2は土師器杯である。深いプロポーションを呈し、端部を外方につまみ出す。

3は砥石である。長軸方向の4面をよく使い込んでいる。材質は砂岩と思われる。



第28図 竪穴式住居跡 S H02および出土遺物実測図

第5表 竪穴式住居跡 S H02出土土器観察表

番号	器種	法量			調整		胎土					色調	残存率	備考
		口径 (cm)	器高 (cm)	最大径 (cm)	内面	外面	高温 石英	石英	長石	雲母	他			
1	高杯	17.8			ナデ			○	○		赤色 砂粒	橙褐	10	摩耗
2	杯	17.8			ナデ	ナデ						橙褐	25	摩耗 精製品

③ 竪穴式住居跡 S H18

遺構 微高地上南端で確認された竪穴式住居跡である。西半部分は削平されており詳細は不明。残存部分から判断すると、平面隅丸方形になるものと考ええる。残存長は南北4.8m・東西2.4mを測る。床面上の施設として、柱穴および土坑を各々1基検出した。周壁溝および炉・竈はない。

遺物 土坑中に投棄されていた一括性の高いものを図示した。

1は須恵器杯蓋である。小片ではあるが、天井部は低く口径がやや大きい。MT15型式に併行するものと考ええる。

2～4は土師器甕である。2・3は端部内面がわずかに凹面をなす。

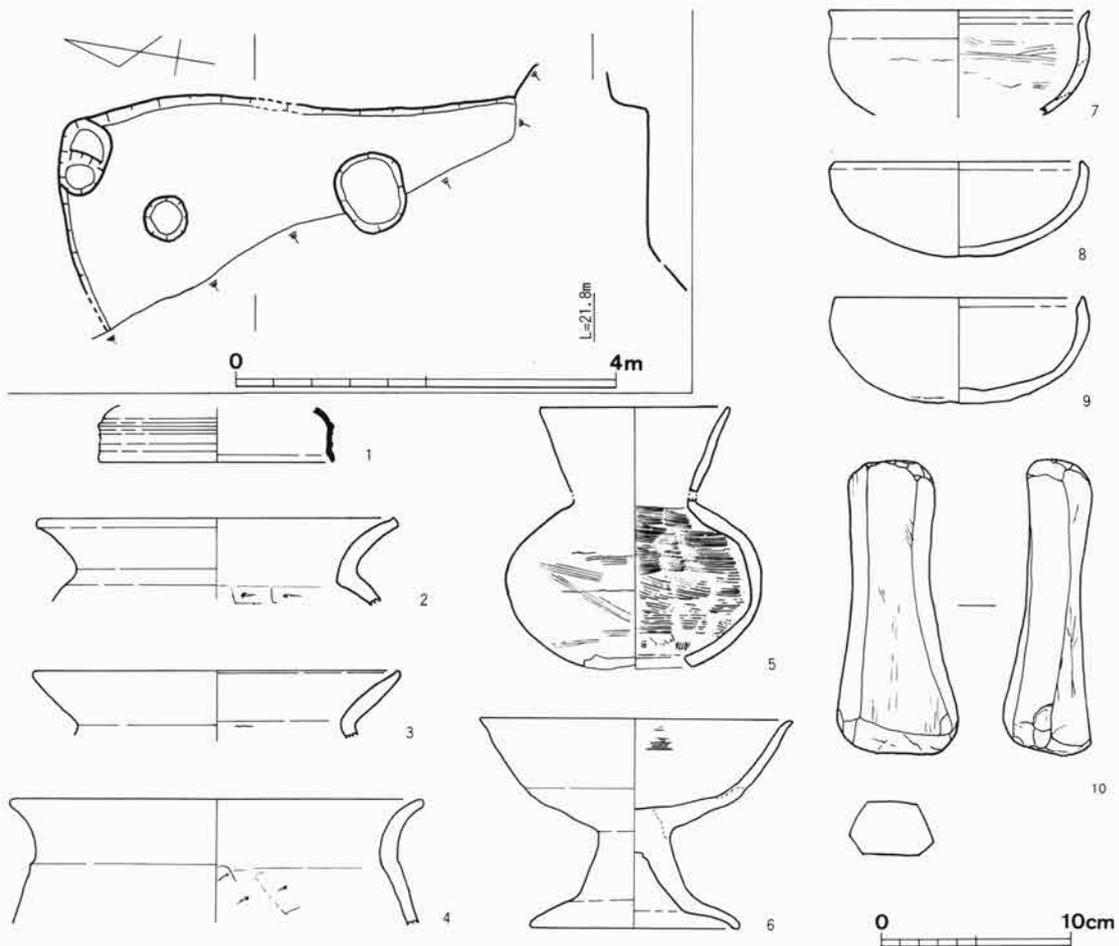
5は土師器直口壺である。楕円形の体部を有し、内外面ともハケにより調整される。底部は焼成後穿孔されている。

6は土師器高杯である。有稜の深手の杯部をもち、器高は低い。

7～9は土師器杯である。7は端部をわずかに外反させる。8・9はともに深手の杯である。

10は砥石である。長軸方向の6面を使用している。材質は砂岩と推定される。

以上、S H16土坑内出土遺物はMT15型式併行期の一括性の高い土器群として評価される。



第29図 竪穴式住居跡 S H18および出土遺物実測図

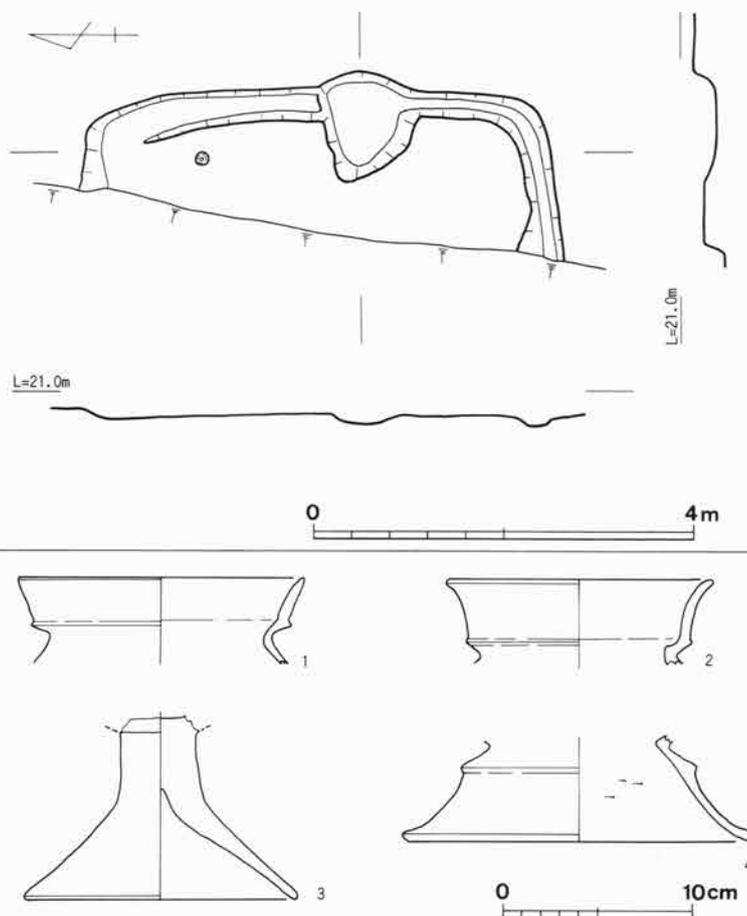
④ 竪穴式住居跡 S H19

遺構 調査地微高地上中央部分で検出した竪穴式住居跡である。平面は方形を呈し規模は南北5m・検出面からの深さ10cmを測る。西側部分については削平を受けており詳細不明である。

住居に伴う施設として、周壁溝・土坑を検出した。周壁溝は住居掘形壁面に沿って設けられるが、完周せず住居北辺では途切れる。土坑は住居東辺の中央からやや南寄りに掘削され、東西1.2m・南北0.9mの不整形円形を呈する。周壁溝との切り合い関係は認められず両者とも共存していたものと判断される。

遺物は住居床面から器台4が正位置で、土坑内・周壁溝内から土師器細片が検出された。

遺物 1・3は土坑内、2は周壁溝内、4は床面直上から出土している。他の資料を観察した結果、全体として高温石英を胎土に含む個体は少ない。甕・壺は複合口縁を呈する。高杯は中実の短い脚柱部に「ハ」の字に開く脚部が取り付け、スカシはない。器台は鼓形器台である稜はやや鈍い。



第30図 竪穴式住居跡 S H19および出土土器実測図

⑤ 竪穴状土坑 S K 2004

遺構 微高地上調査区北側で

第6表 竪穴式住居跡 S H19出土土器観察表

番号	器種	法量			調整		胎土					色調	残存率	備考
		口径 (cm)	器高 (cm)	最大径 (cm)	内面	外面	高温 石英	石英	長石	雲母	他			
1	甕	14.8			ケズリ		○	○	○			灰褐	20	摩耗
2	甕	13.6			ナデ	ナデ		○	○		黒色砂粒 赤色砂粒	灰白	13	
3	高杯							○	○		チャート?	橙褐	90	摩耗
4	器台				ケズリ			○	○		赤色砂粒	橙褐	90	摩耗

検出した長方形の土坑である。規模は上面で東西6.0m・南北2.9m・検出面からの深さ0.3mを測る。

検出当初、方形のコーナー部分等を確認したため、竪穴式住居跡の可能性が考えられたが、調査の結果、床面が水平でない点・主柱穴などの施設が検出できなかった点などから、竪穴式住居跡ではないものと判断した。

埋土はほぼ単層であるが、土坑北辺に沿って炭などが検出面上で堆積した部分を確認した。これは、この土坑がある程度埋没した段階で堆積した土層と考えられるが、同時に多量の土器がこの炭とともに集中して検出されている点から、炭とともに土器を最終的に廃棄したものと判断され、この土坑自体が人為的に埋め戻された可能性を考えることができる。

遺物は先述の通り、北辺部分検出面で2か所、炭とともに集中して検出された。東側の方を土器溜まり1、西側の方を土器溜まり2として取り上げた。土器溜まり1には手づくね土器が含まれている点から、土坑を埋め戻す段階での祭祀行為に伴い廃棄された土器群であると考ええる。

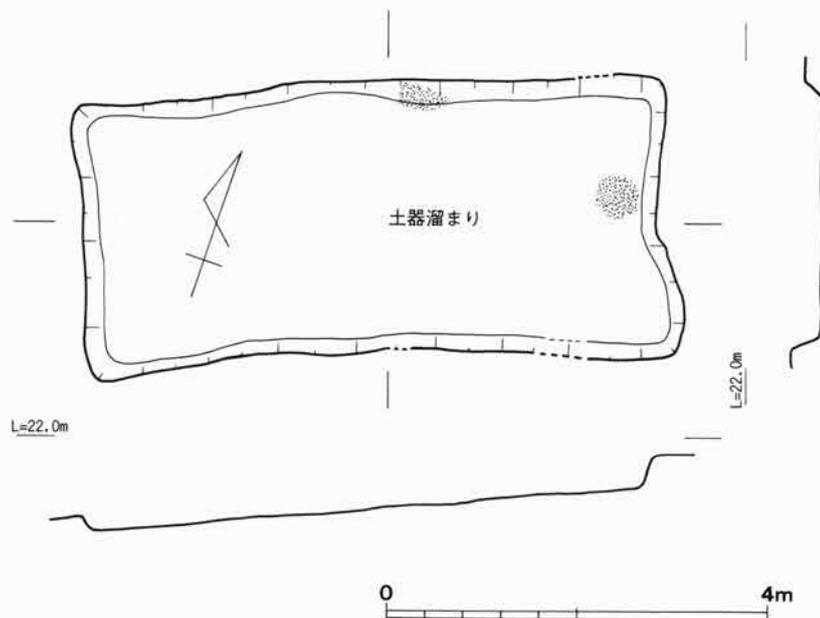
遺物 遺物は上面の土器溜まり1・土器溜まり2から出土した土師器が全てであり、埋土中からは1点の遺物も出土していない。そのうちの12点を図示した。そのうち1・2・4・7・10～12が土器溜まり1から出土し、その他のものは土器溜まり2から出土している。土器の遺存状況は悪く、細片化あるいは器壁が摩耗しているものが大部分である。

器種には甕・高杯・壺・小型丸底壺・低脚杯・手づくね土器が認められる。また「く」字状口縁を持つ甕も含まれているが図示し得なかった。

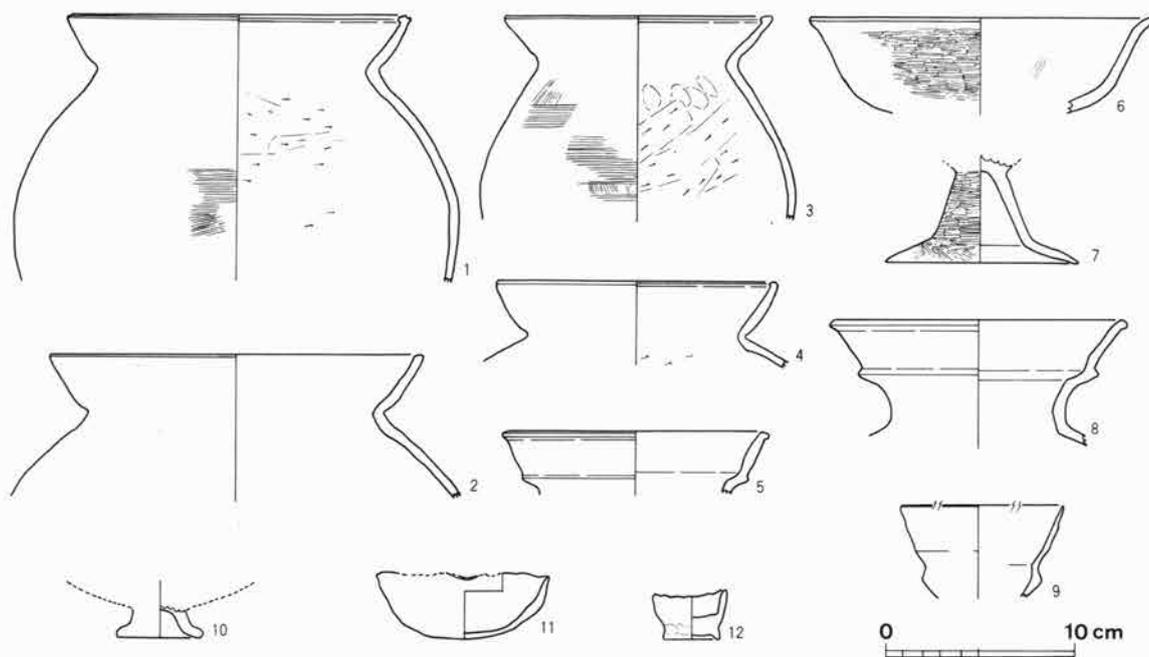
高温石英を含む胎土を持つものは3・8・9・12の4点であるが、他の細片資料を観察した結果、高温石英を含むものは全体の1割程度と少ない。

甕は口径18cm前後の大型のもの、口径14cm前後の中型のもの2者が認められる。このうち

1～4は内湾する口縁をもつものである。2は内端面の肥厚が認められない。3は下膨れの体部をもつ。調整は摩耗が著しいため観察できる個体が限られるが、体部上半の横方向のハケメが顕著に認められる。5は複合口縁甕である。高杯は深い鉢



第31図 竪穴状土坑 S K 2004実測図 (1/80)



第32図 竪穴状土坑 S K 2004出土遺物実測図

第7表 竪穴状土坑 S K 2004出土土器観察表

番号	器種	法量			調整		胎土					色調	残存率	備考
		口径 (cm)	器高 (cm)	最大径 (cm)	内面	外面	高温 石英	石英	長石	雲母	他			
1	甕	17.4		23.4	ケズリ	ハケ		○	○			橙褐	50	摩耗
2	甕	19.4						○	○			橙褐	10	摩耗
3	甕	13.8		10.9	ケズリ	ハケ	○		○			橙褐	15	使用痕
4	甕	14.6			ケズリ			○	○		赤色 砂粒	黄褐	30	摩耗
5	甕	13.2			ナデ	ナデ		○	○	○		灰白	25	
6	高杯	17.7			ミガキ	ミガキ		○	○			橙褐	30	摩耗
7	高杯				ナデ	ミガキ		○	○	○	赤色 砂粒	橙褐	60	
8	壺	15.0						○	○	○		灰褐	25	摩耗
9	小型丸底壺							○		○		橙褐	細片	摩耗
10	低脚杯							○	○			橙褐	60	摩耗
11	手づくね	3.8	2.7					○	○	○		灰褐	70	
12	手づくね	9.0	3.5					○	○	○		橙褐	80	摩耗

状の杯部を持つものと、短い脚部を持つものを図示した。両者とも横方向の微細なヘラミガキによって調整される精製品である。壺は二重口縁壺である。小型丸底壺は口径が体部最大径を超えるタイプのものである。10は低脚杯の脚部である。手づくね土器は2個体を確認した。11は薄く作り上げられ、口縁端部の一端を片口の鉢状につまみ出している。12は高台状の脚部を持つ。

以上、竪穴状土坑 S K 2004出土土器群は、S D 2012出土土器と同時期の特徴をもつ段階のものと理解されるが、高杯の杯部の深い点などは S D 2012出土土器でも古相のものに近い。

⑥溝 S D 2010(新)

遺構 谷部分南東側から北西へ向かい、トレンチ中央部で大きく屈曲し、南西側へ流れる幅

0.7m・深さ0.4mを測る溝である。S D03の上流に相当する断面は、ゆるい弧状を呈する素掘りの形態をとるが、下流部分では一部2段に掘り込まれている。この溝では2か所の護岸施設、2か所の堰状施設を検出した。上流側のものを護岸施設1・堰状施設1、下流側のものを護岸施設2・堰状施設2とする。護岸材の認められない部分でも両岸に複数の杭が打ち込まれていた。

埋土は、上層(1層)と下層(2・3層)の大きく2層に大別される。下流部分ではS D2010(新)に先行する溝S D2010(古)の存在を確認した。この、溝S D2010(古)は上流部分では、堰状施設2までしか切り合い関係をもたず、それより上流部分では一体化しているものと判断された。したがって、溝S D2010(新)は溝S D2010(古)を再掘削したものと理解できる。

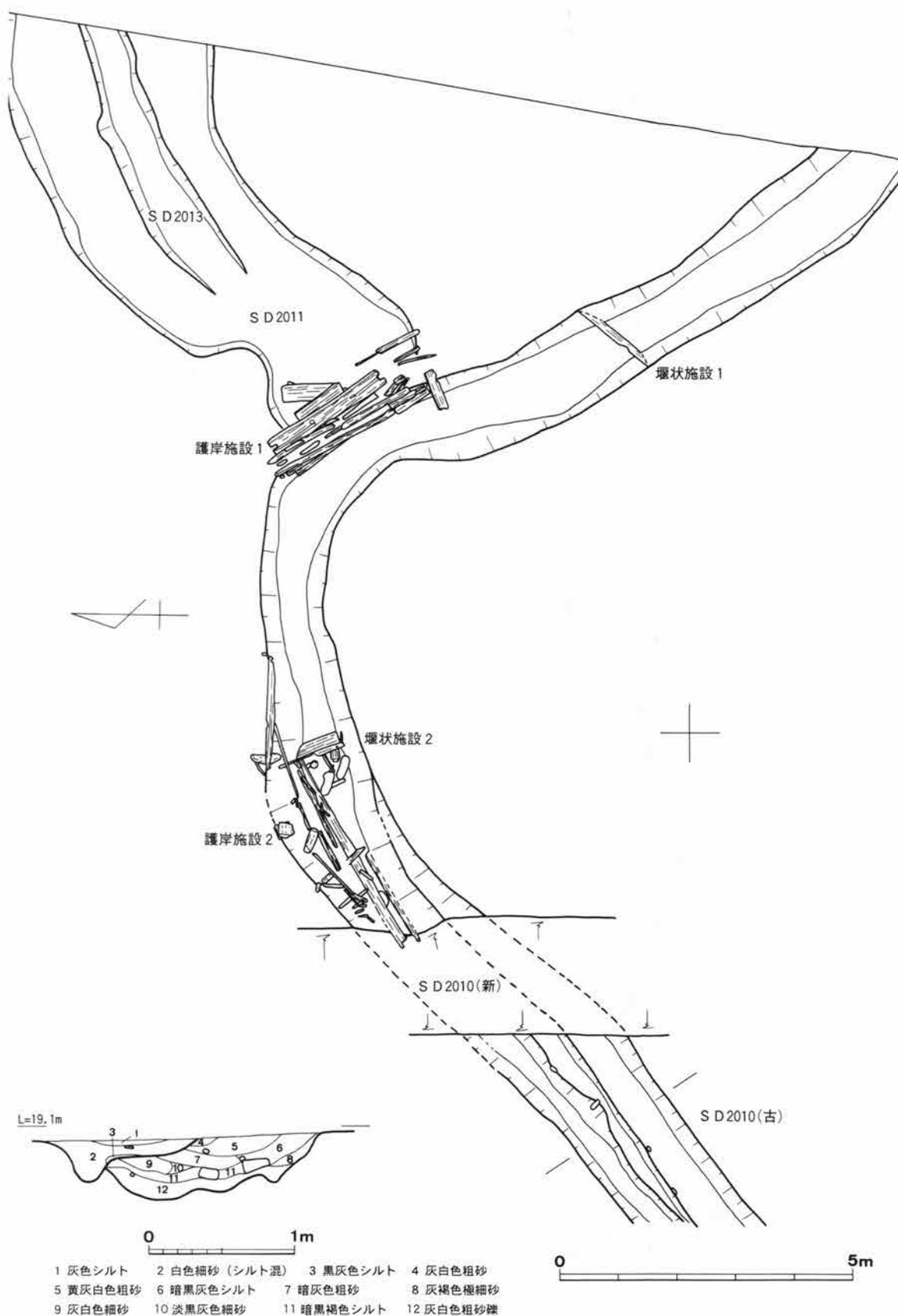
護岸施設1は、複数の大形建築部材の長軸方向を溝主軸に平行にし、数段積み重ね、杭で固定し、その隙間に小形の部材を詰める構造をとる。下段部分は乱雑に建築部材が重ねられているような状況であった。この部分は溝の屈曲部に相当し、水流による崩壊を防ぐためのものと判断される。護岸施設に使用された建築部材は、高床建物の部材が多く、敷居・扉・柱などが確認された。なお、敷居が最も上に用いられていた。この部分は溝S D2011との合流点に当たり、常に水が流れていたと考えられ、護岸のみの機能ではなく、木道としての機能を有していたのではないかと考える。歩行するのに都合のいい敷居が最も上に用いられていた点は、この推測を裏付けるものである。

堰状施設1は、後述する溝S D2012浄水施設の堰状部分を再利用したものであり、部材の刳り込み部分が露出していた。この点から見て、溝S D2012の埋没時期からさほど時間差のないうちにS D2010は掘削されたものと判断される。また、堰状施設1の部材上流部溝最下層からミニチュア土器(第37図71)が出土しており、この地点が祭祀の対象となっていたことを伺わせる。

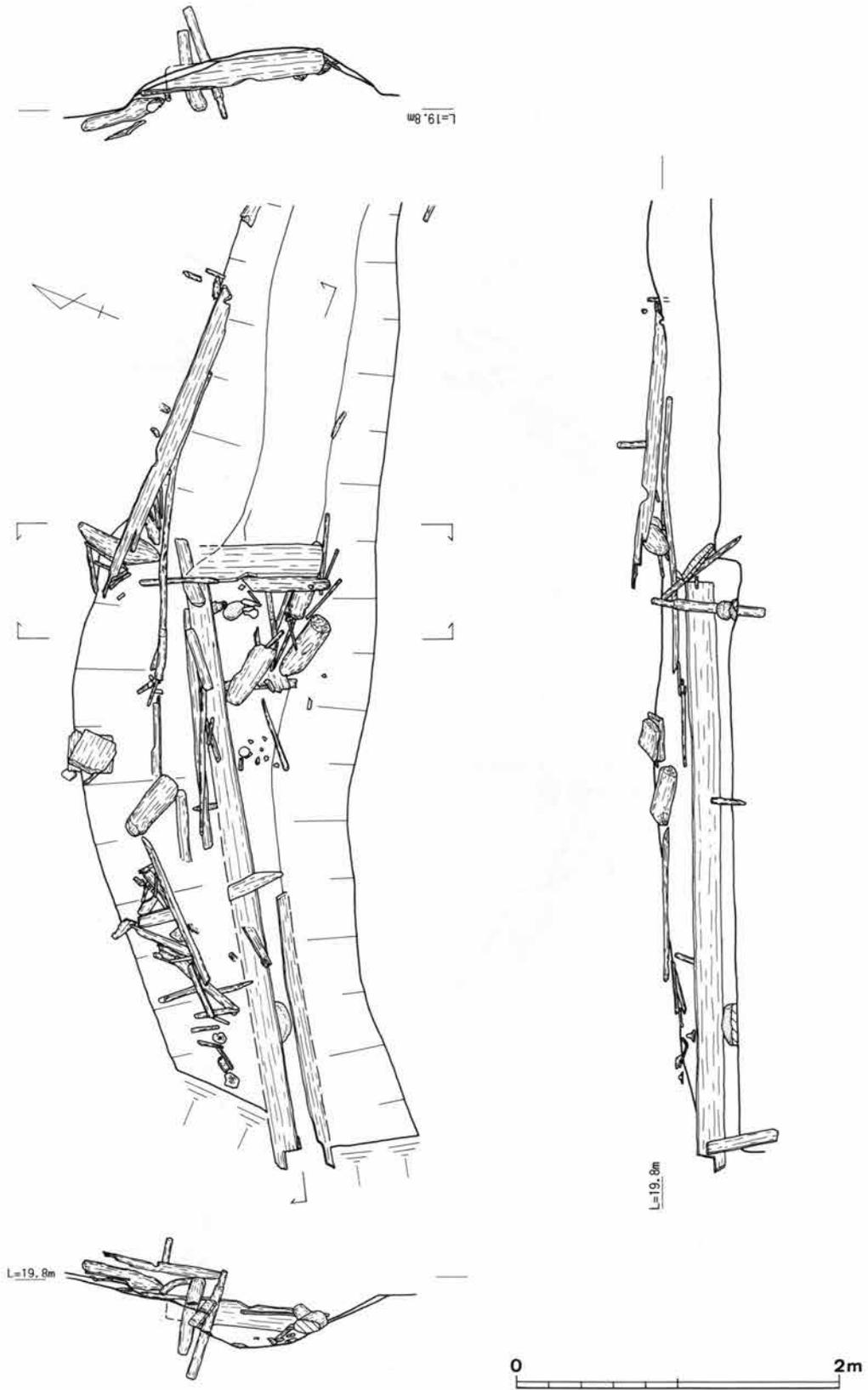
護岸施設2は堰状施設2と一体化して構築されている(第33図)。護岸は溝の両岸に長い板材を杭で固定し、さらに、暗灰色シルトにより裏込めを行うことにより強度を確保したものと判断される。堰状施設2は板材を横わたしにし、水をせき止める構造をとる。板材の固定は、下流側に杭を2本打ち込み、さらに板材を護岸材にもたせかけることにより安定を図っている。板材上辺は、杭を斜めに打ち込むことにより、下流側に傾いている。板材には水流を調整するための水の流れ口が切り込まれている。この部位に使用されている板材は、建築部材を再利用したものと考えられ、柄穴が認められた。この部材は部分的に壊れたものを修復して使用されており、刳り込み部分の北側が損壊したものを別の部材を転用することにより、補修を行っている。

遺物は、多量の木製品が出土した(図版第21～26)。主に上層の最終埋没土内から出土しており、ほぼ、溝幅いっぱい木製品が堆積していた。これらの木製品は溝廃絶段階に、多量に投棄されたものが遺存していたものとする。また、堰状施設2の下流部分からは農工具未製品(第38図76・78・80・82)および竪櫛(第55図280)がまとまって出土しており、未製品の貯蔵場所としての機能を有していた可能性がある。また、植物遺体として、モモの種子・シイ果実などが多量に出土している。

遺物 S D2010(新)出土遺物には、土器・木製品がある。出土状況を見ると上層に堆積した木



第33図 溝SD2010(新・古)・2011・2013実測図および溝SD2010(新・古)土層断面図



第34図 溝S D2010(新)・護岸施設2・堰状施設2実測図

器群と伴出した土器群と、下層の砂層から出土したものに分けられるが、人為的に投棄されたようなものではなく、また、型式的に大きな差はないため、ここでは一括して報告する。

土器 SD2010(新)出土土器には土師器・須恵器がある。須恵器は量的には非常に少なく、図示できたのは4点である。図示した以外に内面スリ消し技法による甕体部片が出土している。

1は須恵器壺の口縁である。シャープな突帯を口縁下端部にもつ。

2は須恵器短脚高杯である。円形のスカシ孔を2か所もつ。

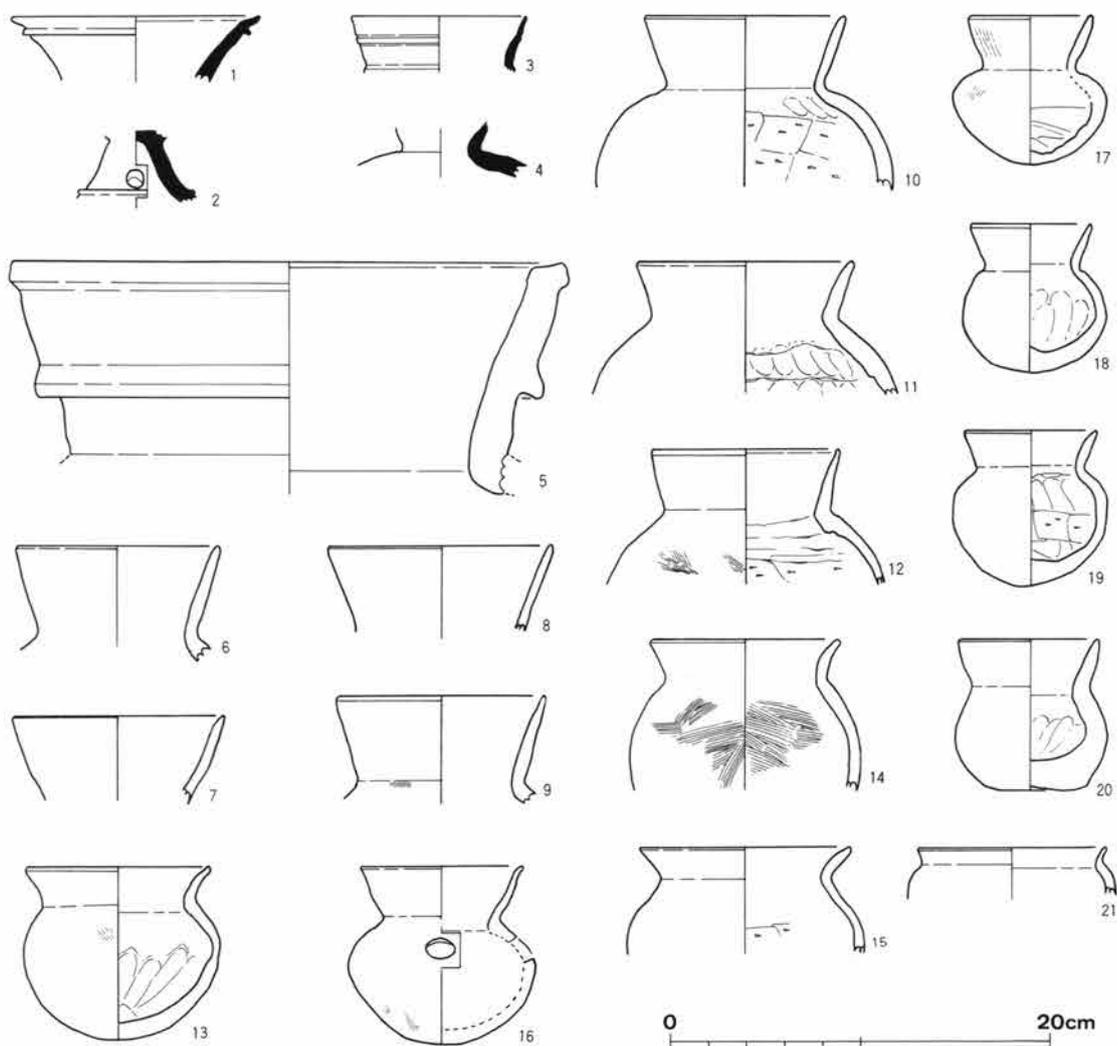
3・4は須恵器壺である。3の口縁は直立し、薄く作られる。

5～21は土師器壺である。壺には大型壺・直口壺・広口壺・甕・小型丸底壺・短頸壺が認められる。小型品を除いて完形個体はなく、胎土に高温石英を含むものもない。

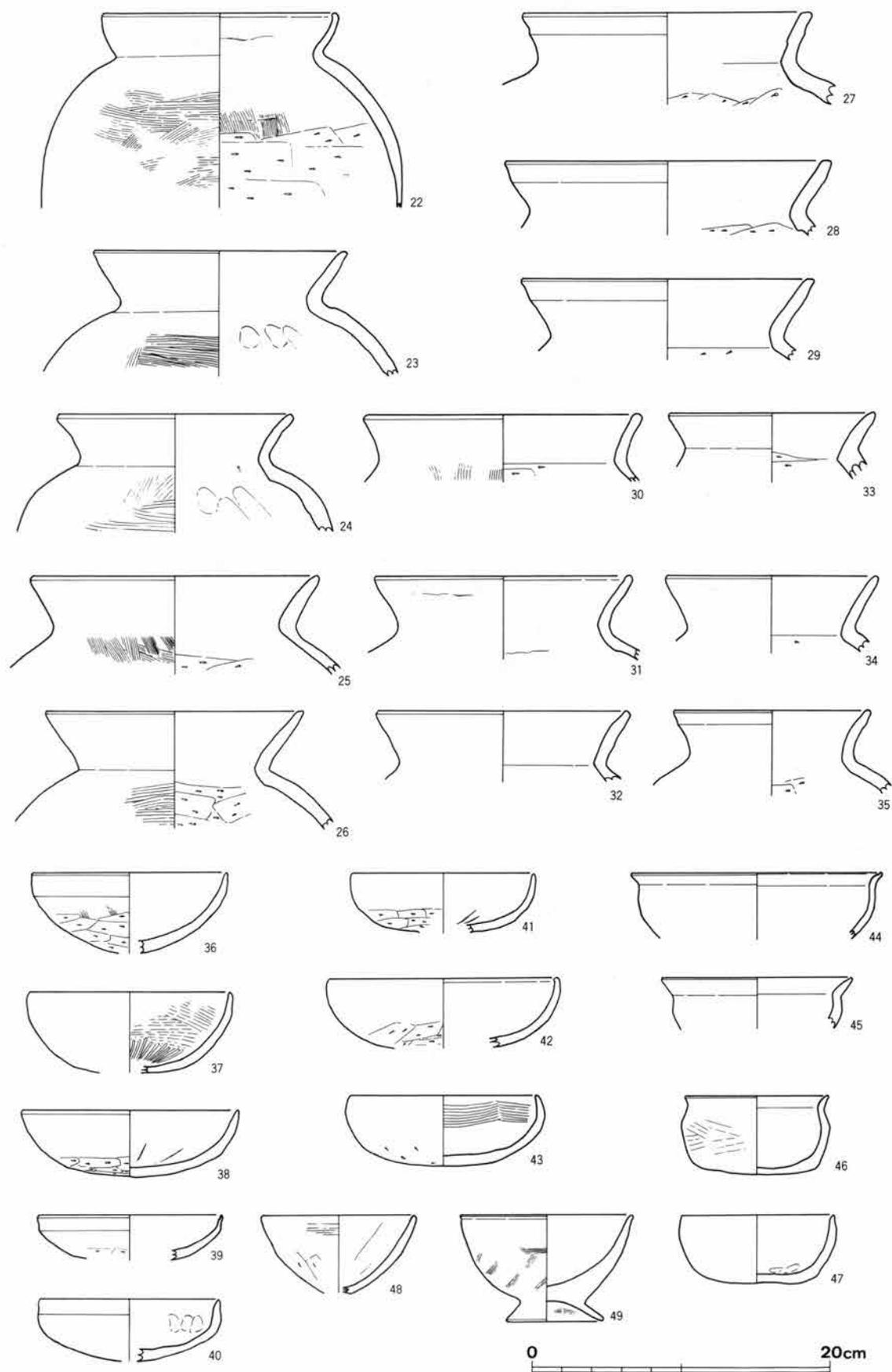
5は大型壺である。直立する口縁に1条の突帯をもつ。複合口縁壺を模した可能性がある。

6～12は直口壺である。口縁は薄く作られ、体部は丸みを帯びる。

13～15は広口壺である。球形の体部に短く外反する口縁が付く。外面はハケもしくはナデ調整である。



第35図 溝SD2010(新)出土土器実測図(1)



第36図 溝S D 2010(新)出土土器実測図(2)

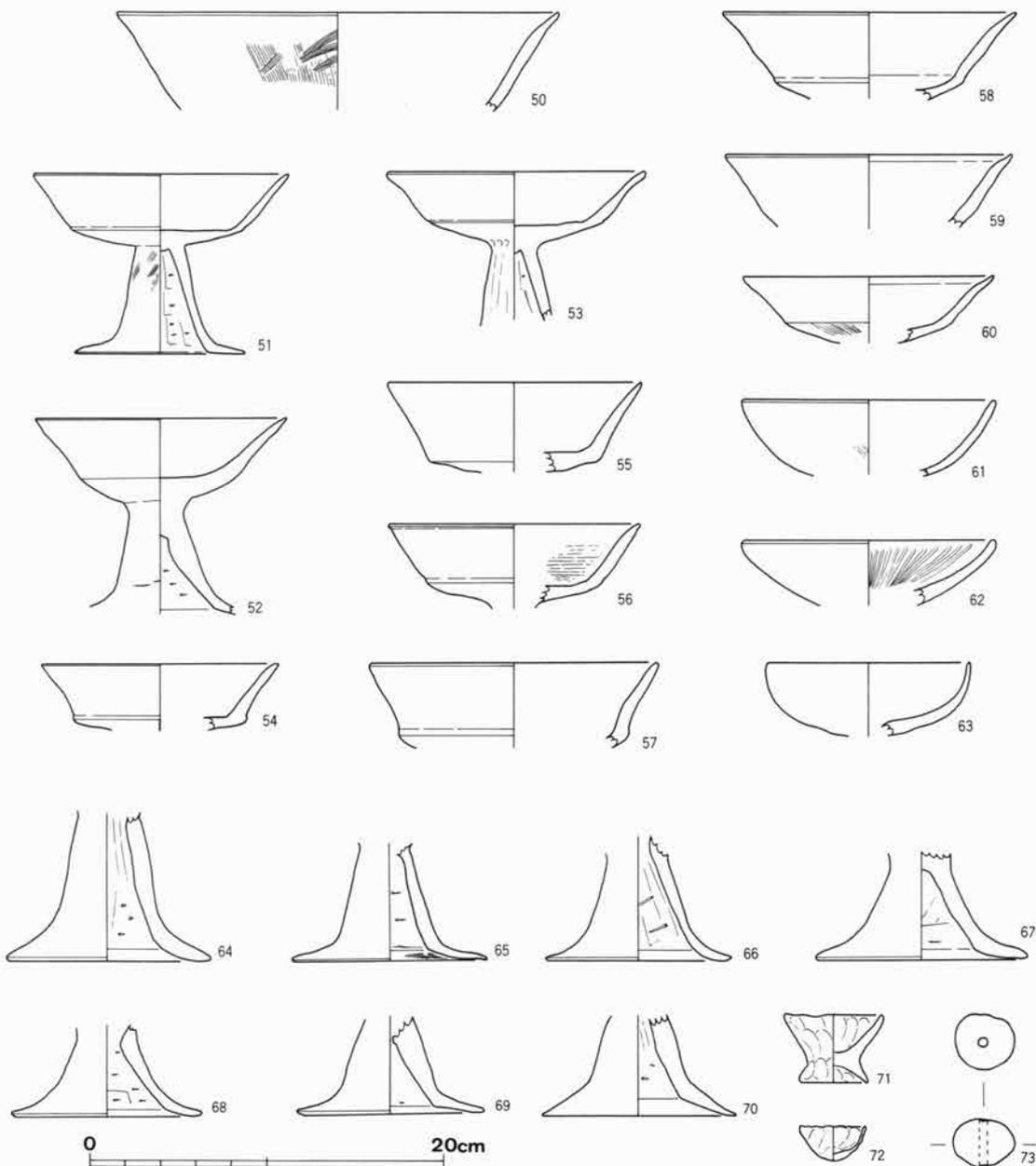
16は甗である。須恵器を模倣したものと考えられる。

17～20は小型丸底壺である。口縁部が長い17・18と、口縁部の短い19の2タイプが存在する。
20は器壁が厚く、粗雑な作りであり平底ではあるが小型丸底壺の模倣品と考える。

21は短頸壺である。短く外反する口縁をもつ。胎土は精製されたものである。

22～35は甗である。法量から口径21cm前後の大型品、口径18cm前後の中型品、口径14cm前後の小型品の3つに分類することができる。口縁の形態に注目すると、内湾する口縁をもつもの、口縁端部内面が凹面をなすもの、口縁端部に面をなすもの、丸く収めるものが存在する。

36～45は杯である。深手のものと浅手のものの両者が存在する。また、口縁部の外反するものとやや内湾するものの2者に分類できる。



第37図 溝S D 2010(新)出土土器実測図(3)

46～49は鉢である。46・47は平底を呈し、48・49は底部からやや内湾気味に立ち上がる体部をもつ。49は脚を付す。

50～70は高杯である。50の大型高杯を除けば、杯部は有稜系のものと、碗状のもの2者に分類できる。有稜系のはさらに口縁部がやや外反するものと、内湾するもの2者に細分が可能である。脚部はスカシをもつものはなく、長脚のものと短脚のもの2者が存在する。

71・72はミニチュア土器である。71は鉢、72は杯を模倣したものと考えられる。

73は土錘である。直径35cmを測る球形を呈する。

木製品 S D 2010新段階出土の木製品は量的に多く、また器種的にも豊富であり、中期後半(T K 23～47型式併行期)に埋没している点から、同時期の木製品の構成を知る上で重要である。また、後述する包含層出土木製品も、S D 2010埋没段階のものとする。S D 2010新段階出土木製品は、大別して、農工具・容器・形代・部材・建築部材・その他雑具に分かれる^(注3)。

74は泥除けである。全幅55cm・全高25cm・厚さ2.5cmを測る。上端面には幅1.5cm・深さ0.5cmを測る「V」字形の溝が設けられている。また、上端両端には1辺約1.5cmの方孔がそれぞれ穿たれている。

75は直柄横鋏である。全幅45.7cm・全高16.5cm・厚さ3.6cmを測る。74と近接して出土している。上端両端には方孔が穿たれ、その上辺は浅い溝状をなしている。背面には泥除けを装着するための突帯が削り出されている。

仮に74と75が組み合わされたものであれば、泥除け上端面に設けられた溝を横鋏の上端面突出部分にかませ、さらに各々の上端両脇の方孔に紐あるいは樹皮などを通して結合したものと考えられる。横鋏の方孔上辺は浅い溝状をなしていることから樹皮であった可能性が高いと判断される。図示していないが、この溝内からはサクラの樹皮が多く出土していることを付記しておく。

76は小型の直柄平鋏である。全幅22.5cm・全高13.2cm・厚さ3.6cmを測る。背面には溝が彫られ、泥除けを装着するための突帯が削り出されているが、全体に整形が甘く未製品と考える。また、火切杵により穿たれた小孔が1か所確認できる。

78～81は鋏未製品である。いずれも直柄横鋏と考えられ、柄装着部まで粗く削り出している。材質は広葉樹と思われる。

82は形態から78～81の前段階の未製品と考えられ、鋏は1個体ずつ生産されていた可能性が考えられる。材質は広葉樹と思われる。

83～87は曲柄鋏である。いずれも又鋏と判断され、ある程度全容の把握できる83・84・86の刃部は二又になるものと判断される。笠の下部からやや内湾しつつ幅を増し、刃部の側面は直線的に仕上げられている。材質はいずれも広葉樹と思われる。

87は未製品であるが、形態からみて鉄製鋏先を伴う曲柄鋏の未製品と考える。材質は広葉樹と思われる。

88～91は農工具の柄になるものと判断した。88・89・91は先端を太く削り出し、握りとしている。88・89は直柄であり、90はゆるやかに屈曲していることから曲柄鋏の柄と考える。88は径3

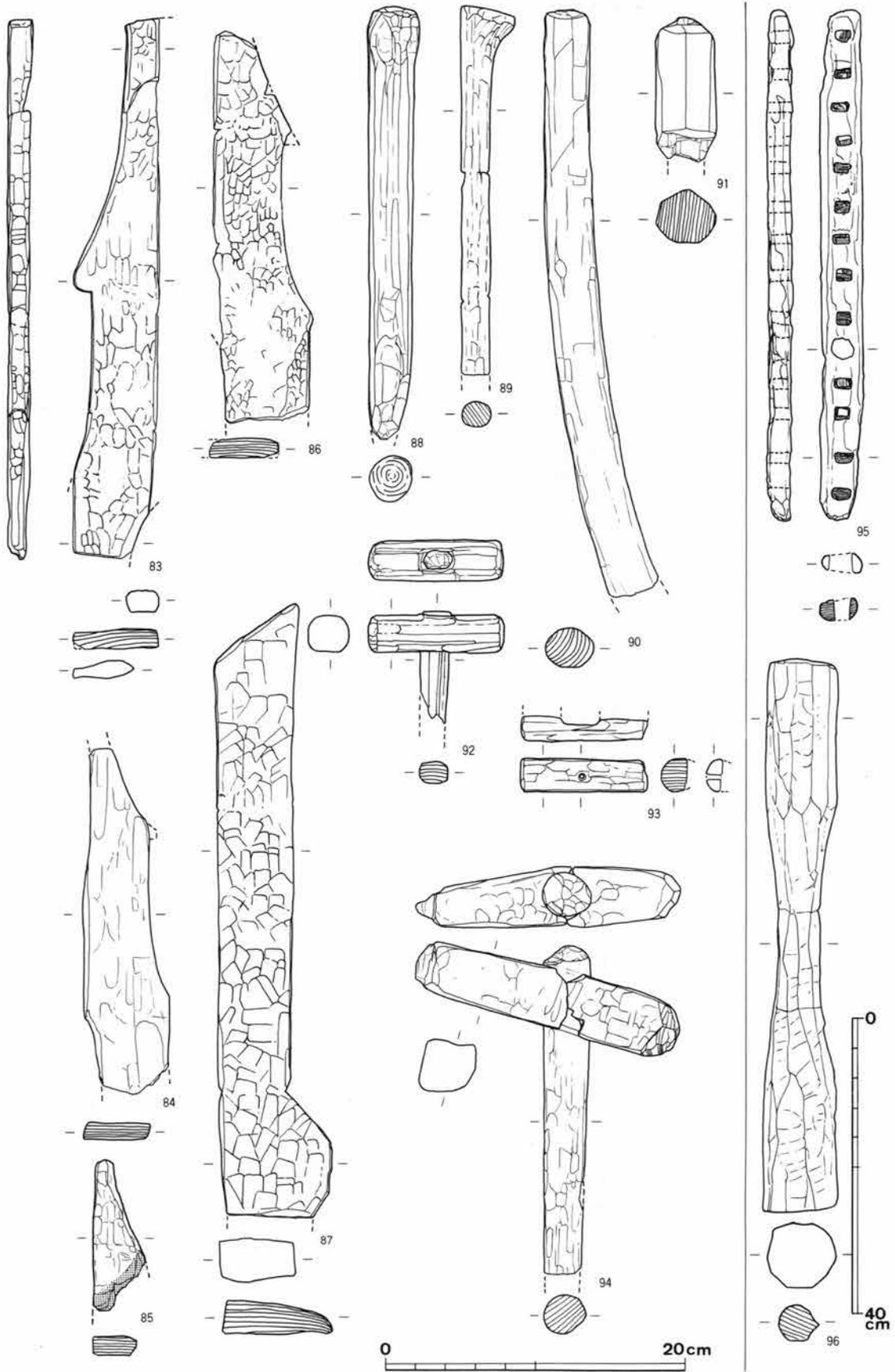
cm、89は径2.2cm、90は径3.5cmを各々測る。

92・93は木槌と考える。93は側面に目釘を通すための孔が穿たれている。

94は袋状鉄斧の柄および装着部である。残念ながら出土時に柄と装着部が分離してしまい、後ほど実測段階で接合したため、柄と刃部の角度が鋭角であったのか鈍角であったのか定かでない。装着部は先端が徐々に幅を減じている。



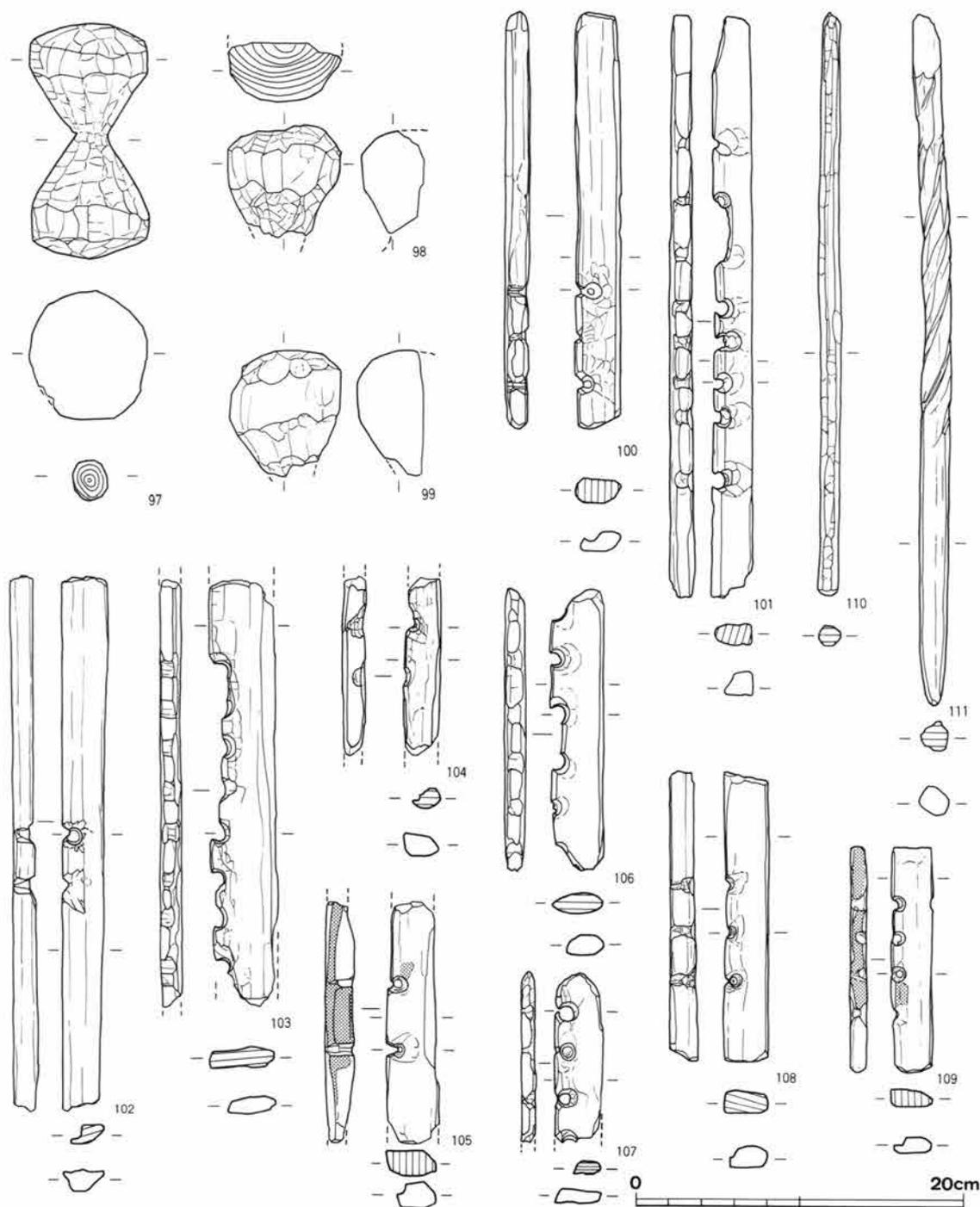
第38図 溝S D2010(新)出土木製品実測図(1)



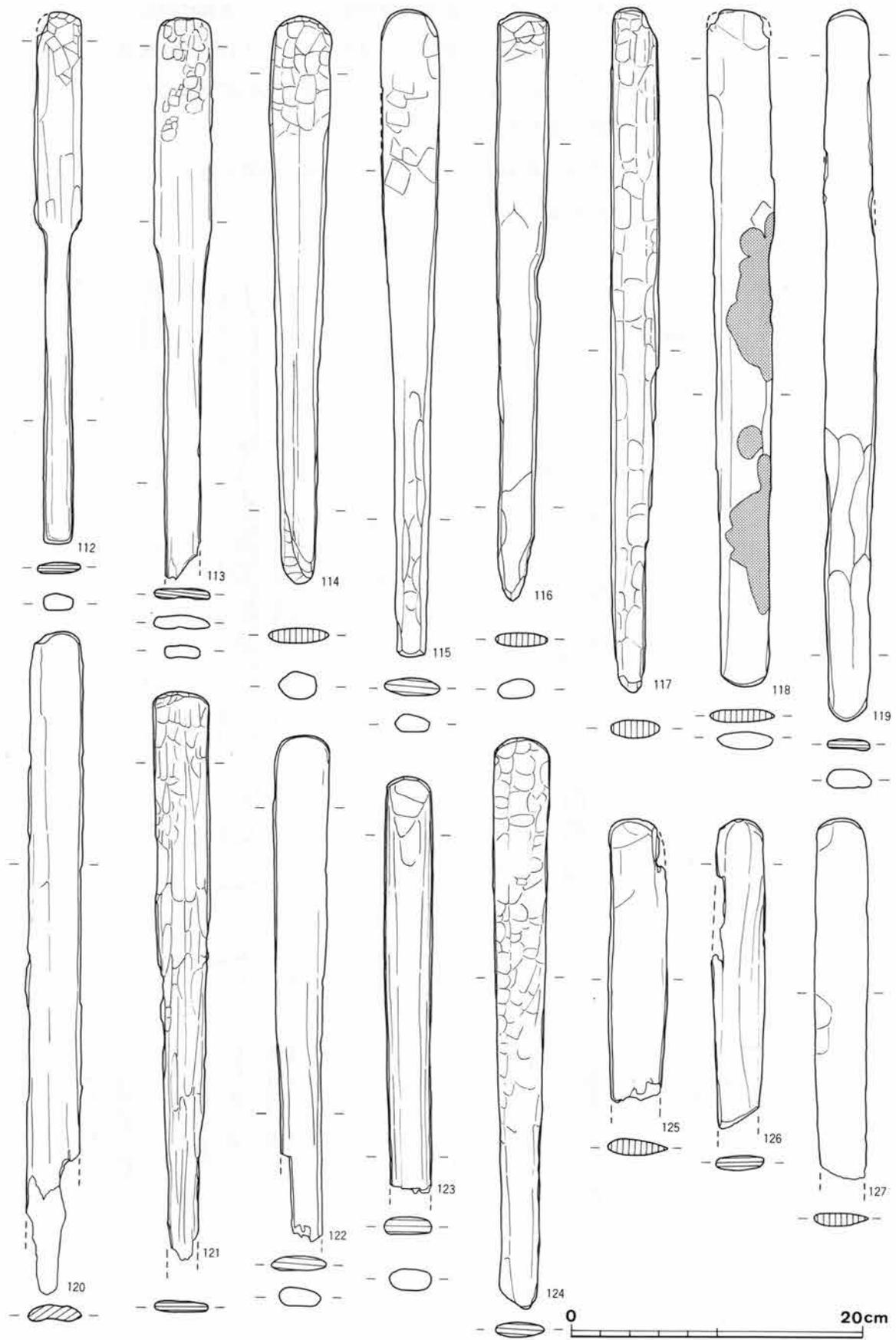
第39図 溝S D 2010(新)出土木製品実測図(2)

95は出土当初は馬鍬ではないかと考えたが、各々の歯が貧弱なこと、各歯の間隔が狭いことなどから棒型の田下駄と判断した。残存長69cmを測る。1辺約2.5cmの方孔が13か所確認され、装着された棒状部材の破片が残存している。1か所のみ径約3cmを測る円孔が穿たれており、引手を装着したものと思われる。全体に火を受けている。

96は竪杵未製品である。全長75cm・最大径9.6cmを測る。全体に手斧と考えられる工具痕が残されている。材質は広葉樹と思われる。



第40図 溝S D2010(新)出土木製品実測図(3)



第41図 溝S D 2010(新)出土木製品実測図(4)

97～99は木錘である。ほぼ同型同大になるものと思われる。97は全長25cm・径8cmを測る。

100～109は火鑽臼である。いずれも扁平な棒材を用いている。

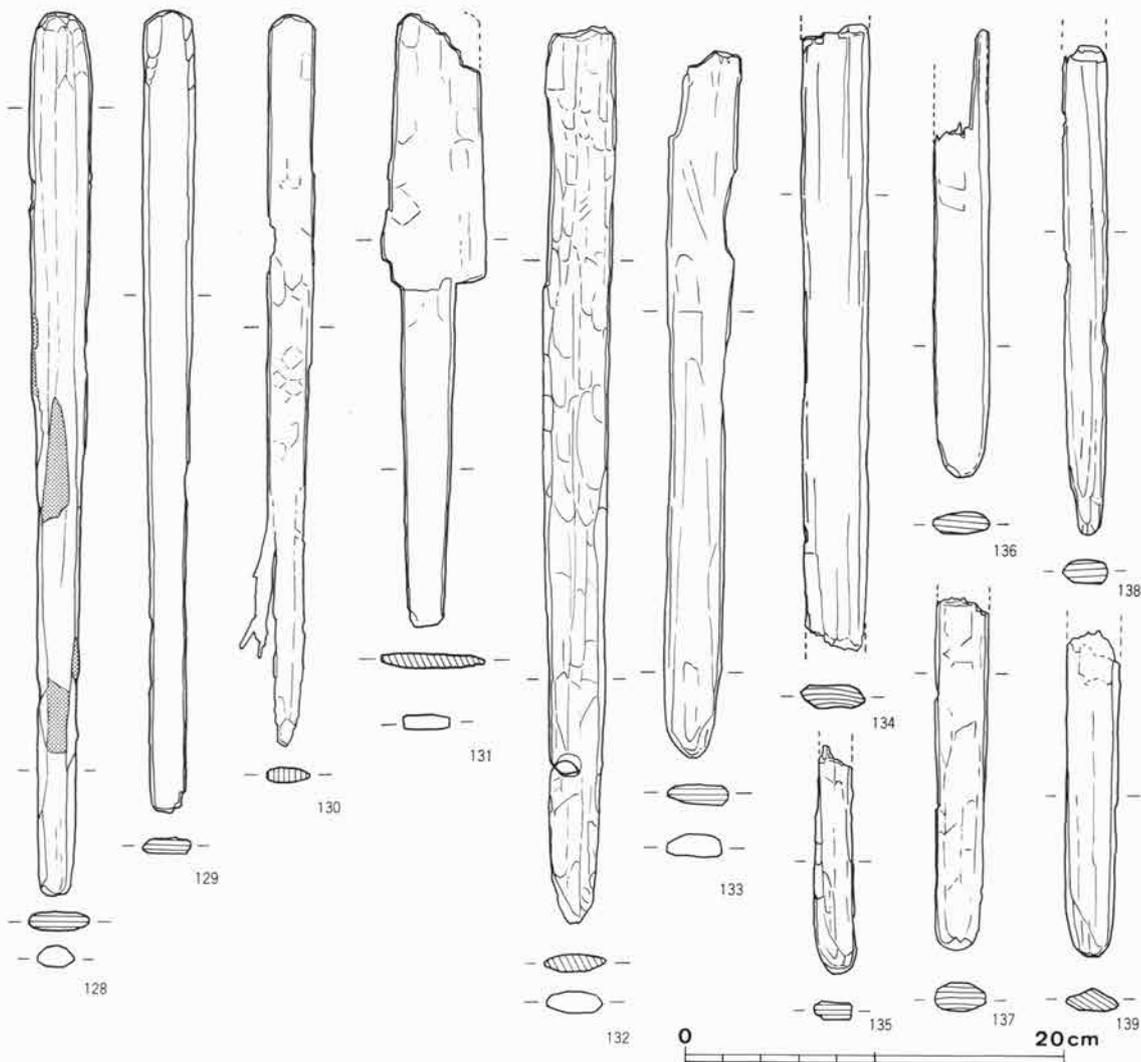
110は火切杵である。全長36cm・径1.5cmを測る棒材であるが、先端部が摩擦のため研磨され丸みを帯び、さらに焦げている点からみて火切杵とみて間違いない。

111も火切杵の可能性を考えているが、本来の用途は不明である。全長43.5cm・径1.8cmを測る棒材の一端を尖らせ、軸には二重のらせんを描く溝を彫っている。

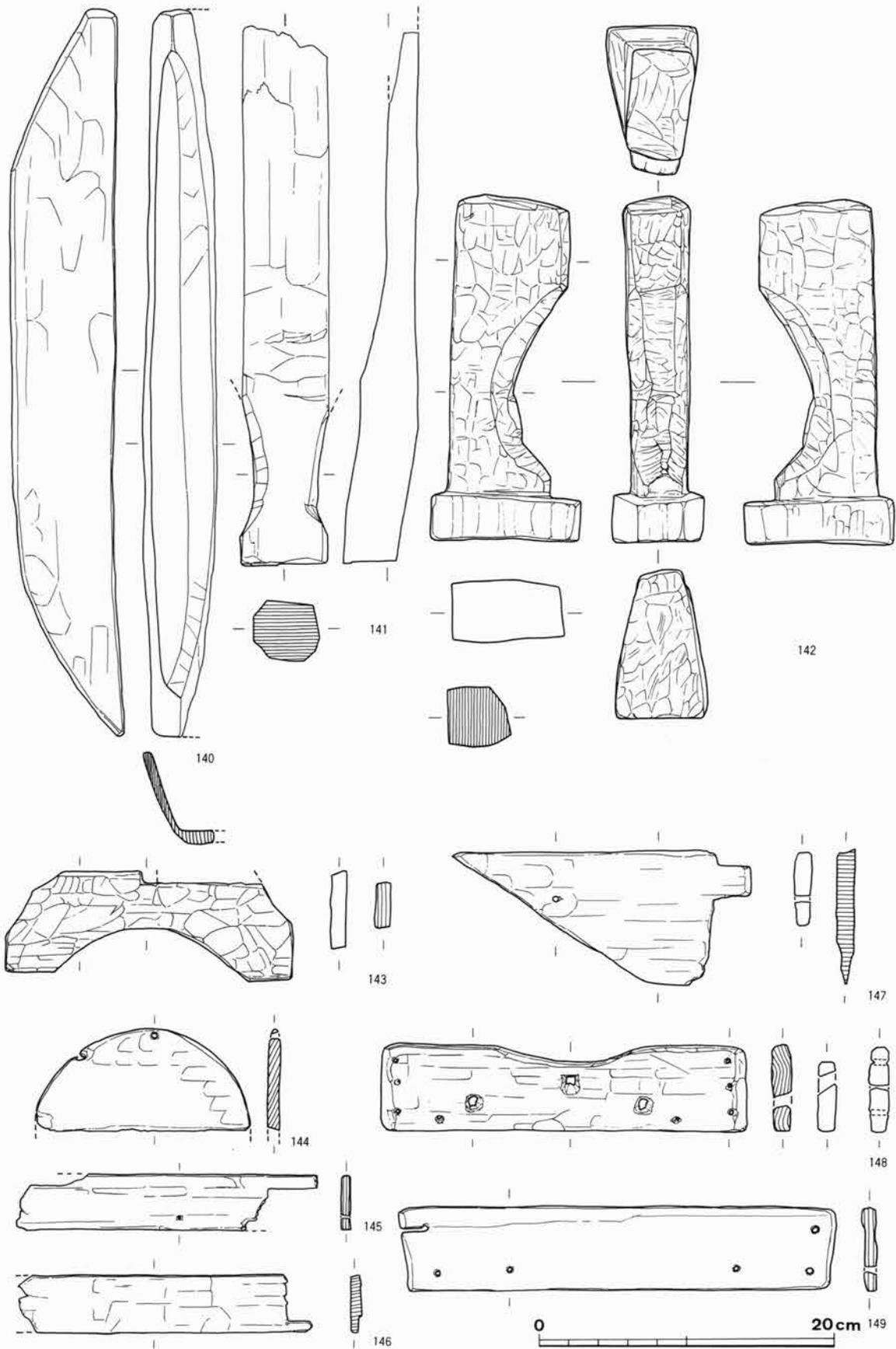
112～139はヘラ状木製品である。調理の際の攪拌具と考えられている。ヘラ状木製品の数是非常に多い。全長36.8～48cm・最大幅3～4cm前後を測る。いずれも柄断面がやや丸く、頭部が扁平に作られている。頭部と柄の境の明瞭なものと、不明瞭なもの2者に大別される。また、131のように、大きく作り出された頭部を有するものもある。調整は鉋もしくは刀子状のもで行われているものと判断される。柄の先端部が焦げているものが多い。

140～149は容器と考えられる部材である。容器は刳抜式の槽と組合式の箱に大別される。

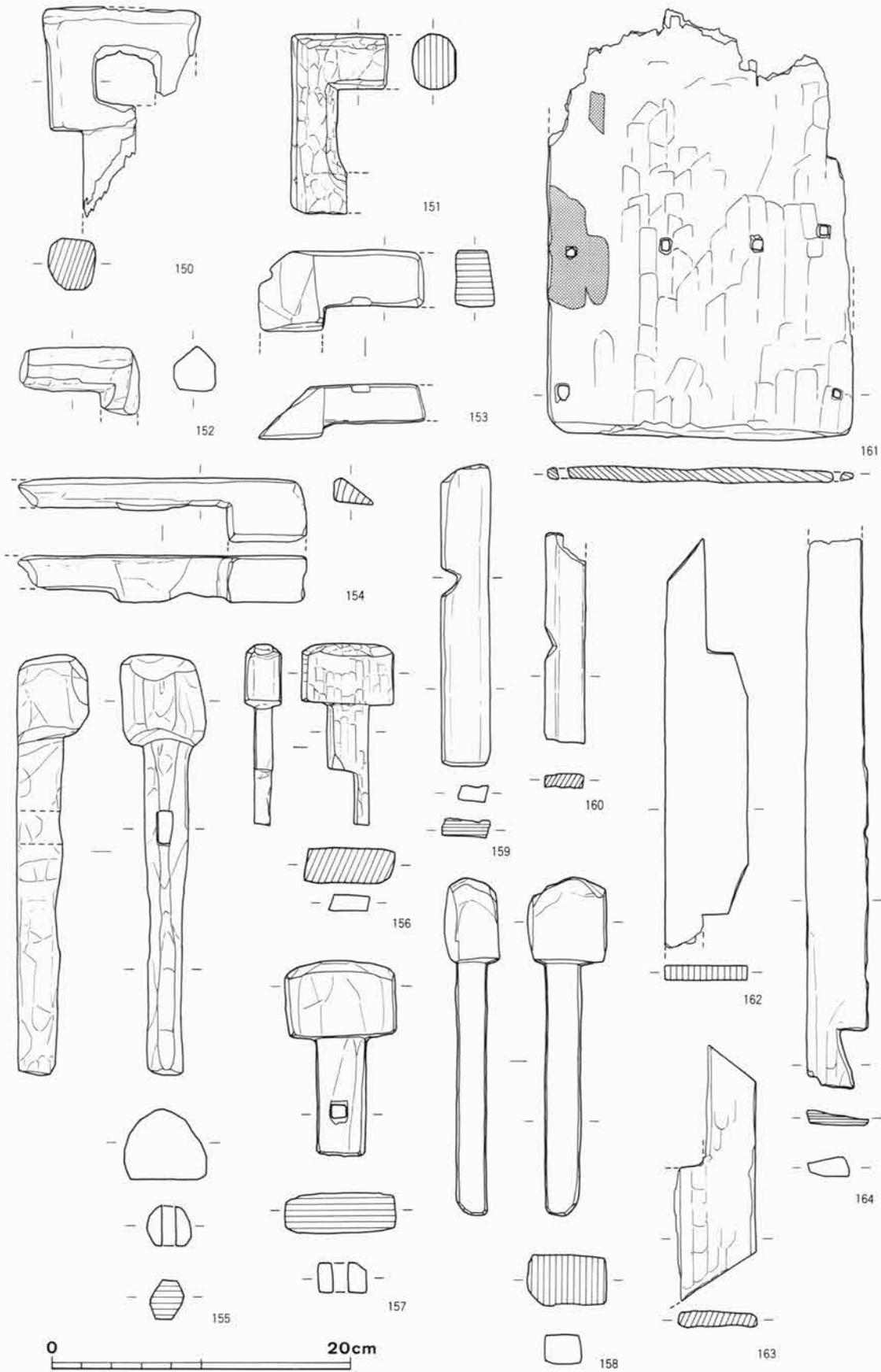
140は槽の破片である。全長50cm・全高7cmの平面方形の刳抜式に復原される。木口部分は斜



第42図 溝S D2010(新)出土木製品実測図(5)



第43図 溝 S D 2010出土木製品実測図(6)



第44図 溝S D 2010(新)出土木製品実測図(7)

めに立ち上がり、内外面ともていねいに調整されている。

141は把手付槽の破片である。残存している部分から判断して、槽は浅いものと思われる。

142は案の脚もしくは刀剣柄の未製品と考える。全体に手斧で粗く整形されている。全長23.5cmを測る。材質は広葉樹と思われる。

143は腰掛脚としては貧弱なため槽の脚と考える。上辺中央に方形の切り込みが存在する。

144は蓋もしくは容器の底板と考えられる。円形の板材に2か所の小孔が穿たれている。

145～148は箱の部材と考えられる。146のように柄で組み合わせるものと、148・149のように小孔を穿ち、木釘で組み合わせられたものの2者が存在する。145・147は両方の技法を併用する。

150～189は部材である。他のものと組み合わせる機能のものを部材としておく。そのため全体像は不明なものが多い。なお、大型の建築部材とは区別しておく。

150～154は把手状の木製品である。77は方形の把手部と、柄穴に装着させるための棒状部分から構成される。用途としては扉などの把手の可能性はある。154は本来別造りのものではなく、槽などに削り出された持ち手の可能性がある。

155～158は方形の頭部と柄穴に装着するための棒状部分からなる栓状の部材である。155～157は棒状部分にさらに柄穴が設けられ、棒状の部材を挿し込み安定を図ったものとする。

161～164は板状の部材である。161のように複数の小孔を穿つものや、159～164のように切り込みを設けることにより、他の部材と組み合わせたものと考えられるものがある。

165～186は棒状の部材を一括した。

165～173はいわゆる有頭棒である。残存長12～45cmを測る。頭部は周辺全体を溝状に切り込むものと、両側面のみを切り込むものに大別され、172のように、頭部のみを方形に削り残すものも存在する。断面形からは板状のものと棒状のもの2者に分類できる。

174～176は串状の棒材である。174・175は部材としては非常に貧弱であり、他のものと組み合わせられたというより、単体で使用された可能性がある。

182は中央部分に2条の溝を掘り込み、中心を球形に作り出している。

183は一端に方形の切り込みを設けている。天秤棒の可能性はある。

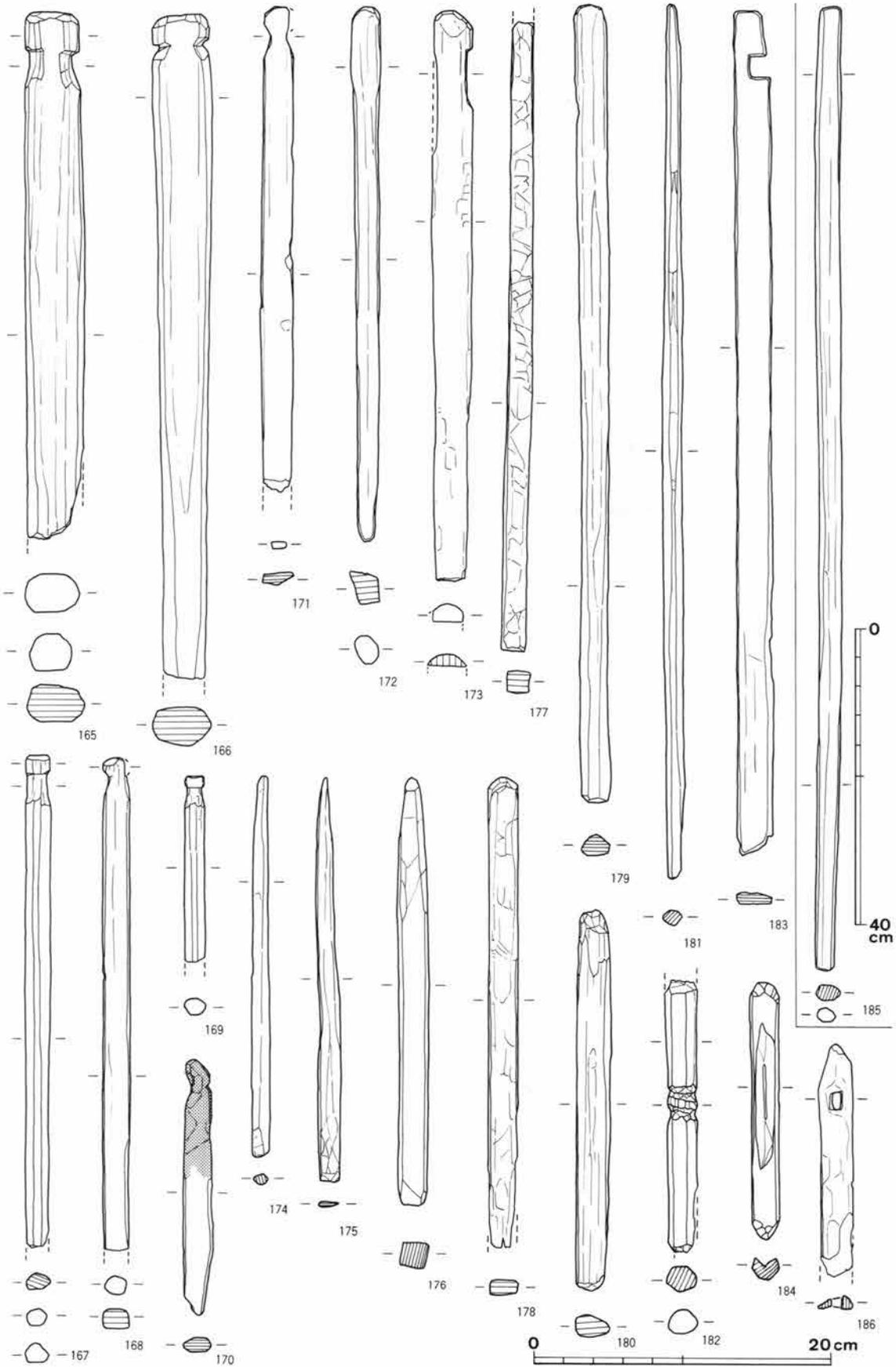
184は側面に「V」字状の切り込みをもつ。完形品である。

186は一端に方形の小孔をもつ。

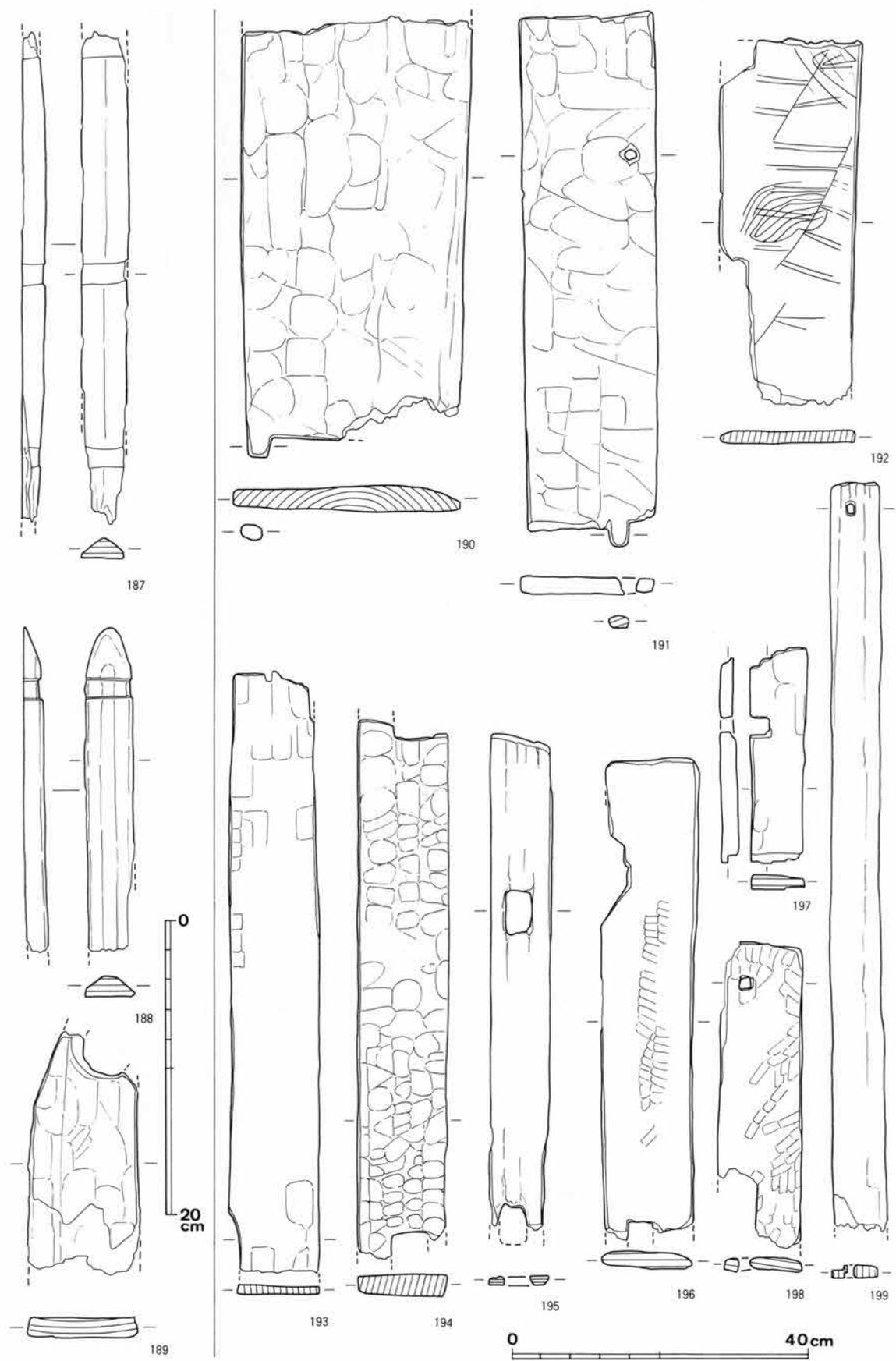
187・188は半円形の断面をもち、溝を側面にもつ。平成9年度S D08出土盾状木製品の部材同様、樹皮により、他の部材と固定したのと考えられる。

189は一端に円孔を穿っている板材である。窓の軸受けの可能性はある。

190～239は建築部材と考えられる大型部材群である。建築部材には高床式建物を構成していたと考えられる部材が多数認められる。中でも護岸材1を構成していた一群は1棟の高床式建物を廃棄したのちに転用された部材と考えられ、一括性の高いものである。なお、この護岸材を構成する部材の内、線刻を有する板材(第46図192)については奈良国立文化財研究所光谷拓実氏に年輪年代の測定を実施していただき、A. D. 438年伐採との結果をいただいている。S D2010出土



第45図 溝S D2010(新)出土木製品実測図(8)



第46図 溝 S D 2010(新)出土木製品実測図(9)

土器との年代観にも齟齬をきたすことがないため、この高床建物は5世紀中葉頃に建築され、後半には廃棄・護岸材として再利用されたものと考ええる。

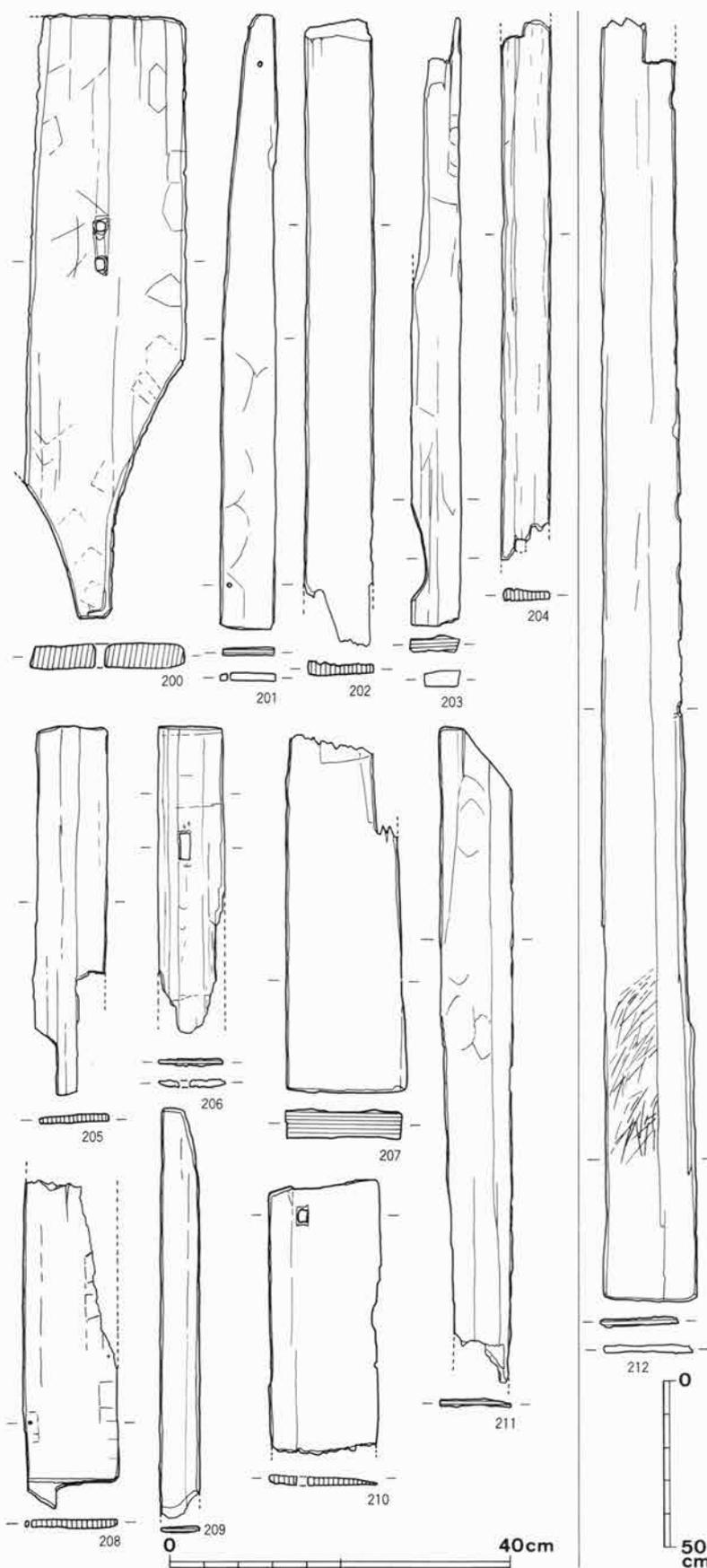
部材には敷居・扉・柱・壁もしくは床板材・その他用途不明部材が存在する。

190は軸をもつことから扉材と判断される。

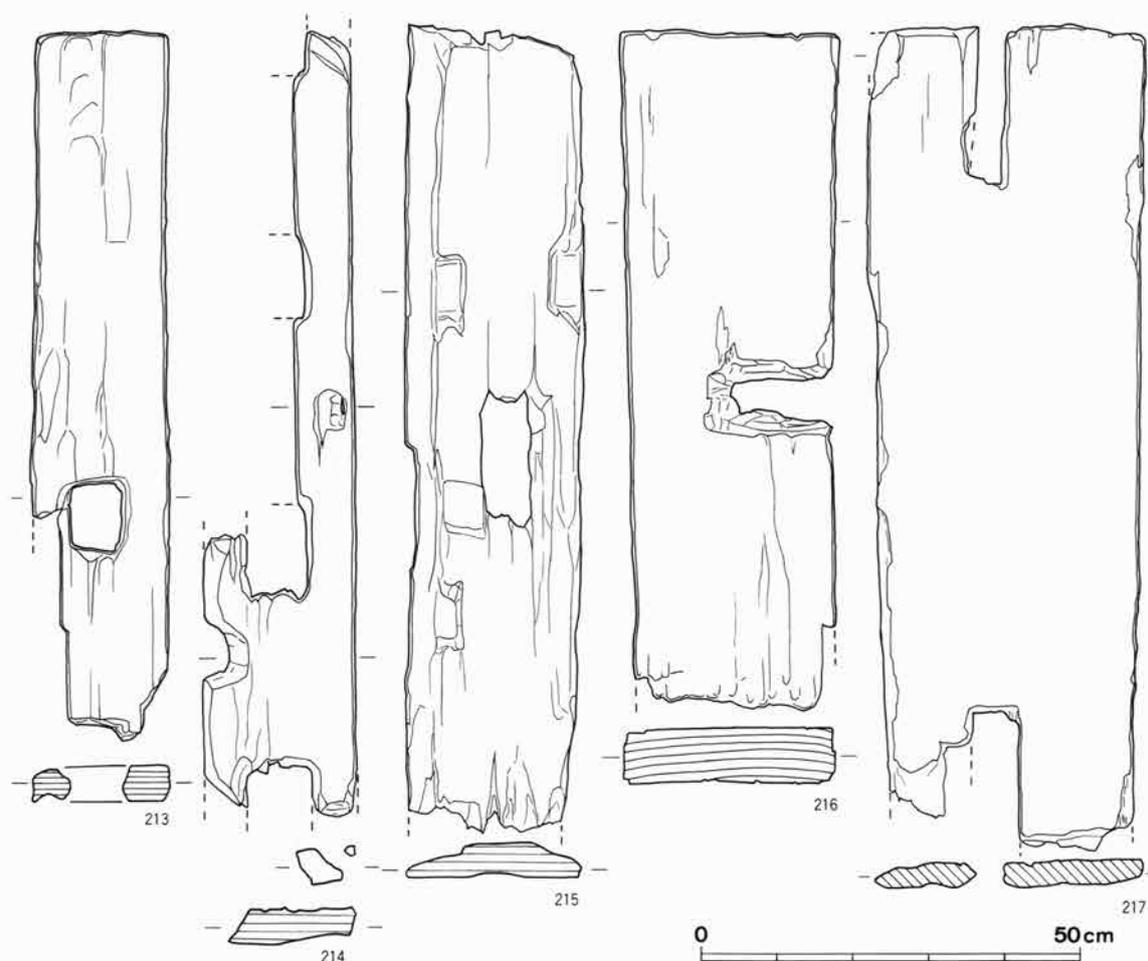
191は片開きの扉とした場合側面が引かかるため、窓材の可能性を考えたい。軸線上に円孔が認められる。

192～212は板材である。用途としては壁材・床材に使用されたと考えられるが、用途の不明なものも多数ある。中でも線刻を持つ192は退化した直弧文と考えられる線刻が施されており、建物の外面を飾っていたものと思われる。板材の内、最大のもの(212)は幅26cm・長さ3.8m以上を測る長大なものである。

213～217は厚手の板材である。213は方孔が穿たれる。214は遺存状況が悪いものの、連続する方孔と、互い違いに穿たれる棧穴をもつ部材に復原される。215は渡腮仕口の構造をとり、他の部材とかまされていたものと判断される。216は長辺側に1か所・



第47図 溝S D2010(新)出土木製品実測図(10)



第48図 溝S D 2010(新)出土木製品実測図(11)

217は両短辺側に1か所ずつ方形の切り込みをもつ。

218~228は柱材と考える。断面方形のものと円形のものがある。218は側面に1条の溝をもち、壁材が装着されたものと判断される。また、1か所棧穴が認められる。219は一方を柄として他の部材に装着したものである。大引材の可能性はある。

221は桁材と考える。合欠仕口の構造をとり、さらに内側を一段掘り窪めている。また、反対の長辺には2か所の柄穴が認められる。

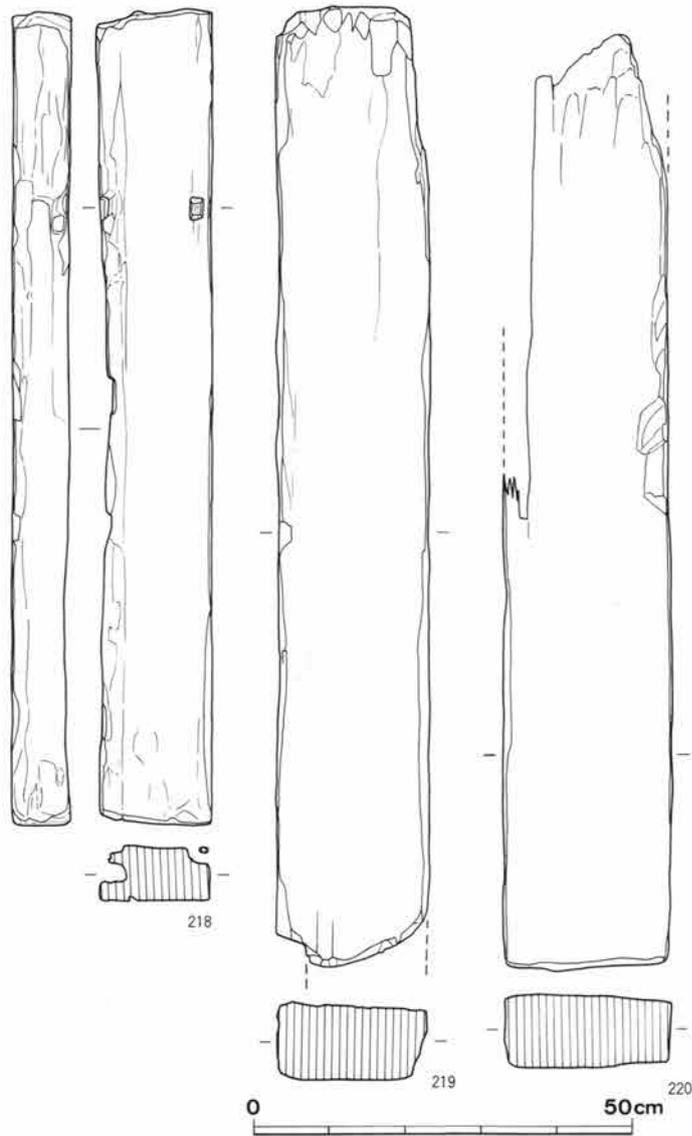
222は棟木と考える。底辺13cm・高さ8cmの断面三角形を呈し、1か所方形の柄穴を確認することができる。また、両側辺には約20cm間隔で棧穴が穿たれている。この側面に垂木がほぼ密着して結わえられたと考えた場合、屋根の傾斜角度は約45°となる。柄穴には主柱が接合されたものと判断され、主柱は柱頭部に柄を造り出した型式のものとして推定される。

227は主柱と考えられる部材である。この材は痛みが激しいが、直径約20cmの丸太材に少なくとも2か所の貫穴、1か所の柄穴が確認される。この柱材には壁材を装着したものと判断され、貫穴の規模は幅5cm・長さ25cmを測る。おそらく柄をもつ壁材が横方向に装着されたものであろう。下部の柄穴は上部のものに比して大きく、大引材を柄差しするためのものと考えられる。

228はもっとも長い柱材であり、残存長2.7m・径11cmを測る。痛みが激しいが、特に杢穴等の加工は認められない。

225・226は杭状に再加工されているが、本来は柱材であったものとする。225には杢穴が、226は柱頭部に柄が認められる。

229は敷居である。護岸材1の部材として転用されていた。全長2.2m・幅31cm・厚さ12cmを測る。扉を装着する軸受けの円孔と方立および壁材を建てるための溝が彫り込まれている。敷居から復原される扉施設の構造は、片開きの扉であり、扉の幅は80cm前後と考える。また軸受けと対称となる部分には方形の杢穴が設けられており、何らかの部材が装着されていたものと判断される。敷居の両端は柱材を受けするための杢穴が切り込まれている。この部材から、この建物は1間2.2mの規模を有していたものとする。



第49図 溝S D 2010(新)出土木製品実測図(12)

230～239は棒状の部材である。一端を細く加工するものや、くびれを造り出しているものが多い。棟木や桁材にくくりつけられた垂木であったと考える。最大のものは残存長1.8mを測る。

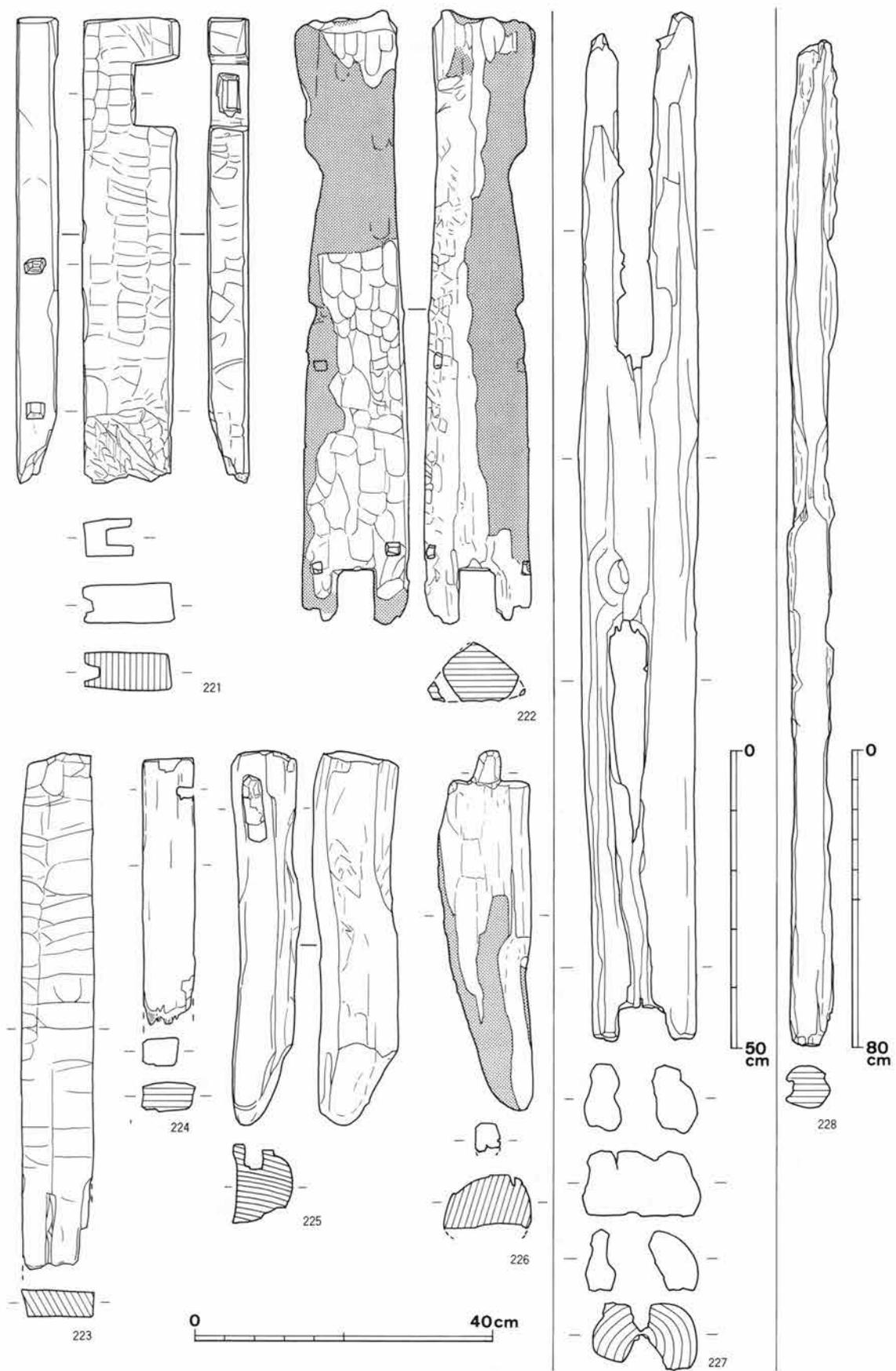
240～259は杭である。一端を鋭利に加工したもの他、反対側に細工を施すものがある。断面形からは円形のもの、方形のもの、板状のもの3タイプに分類することができる。

260は矢板である。幅10cm・長さ42cmを測り、一端を鋭利に加工する。

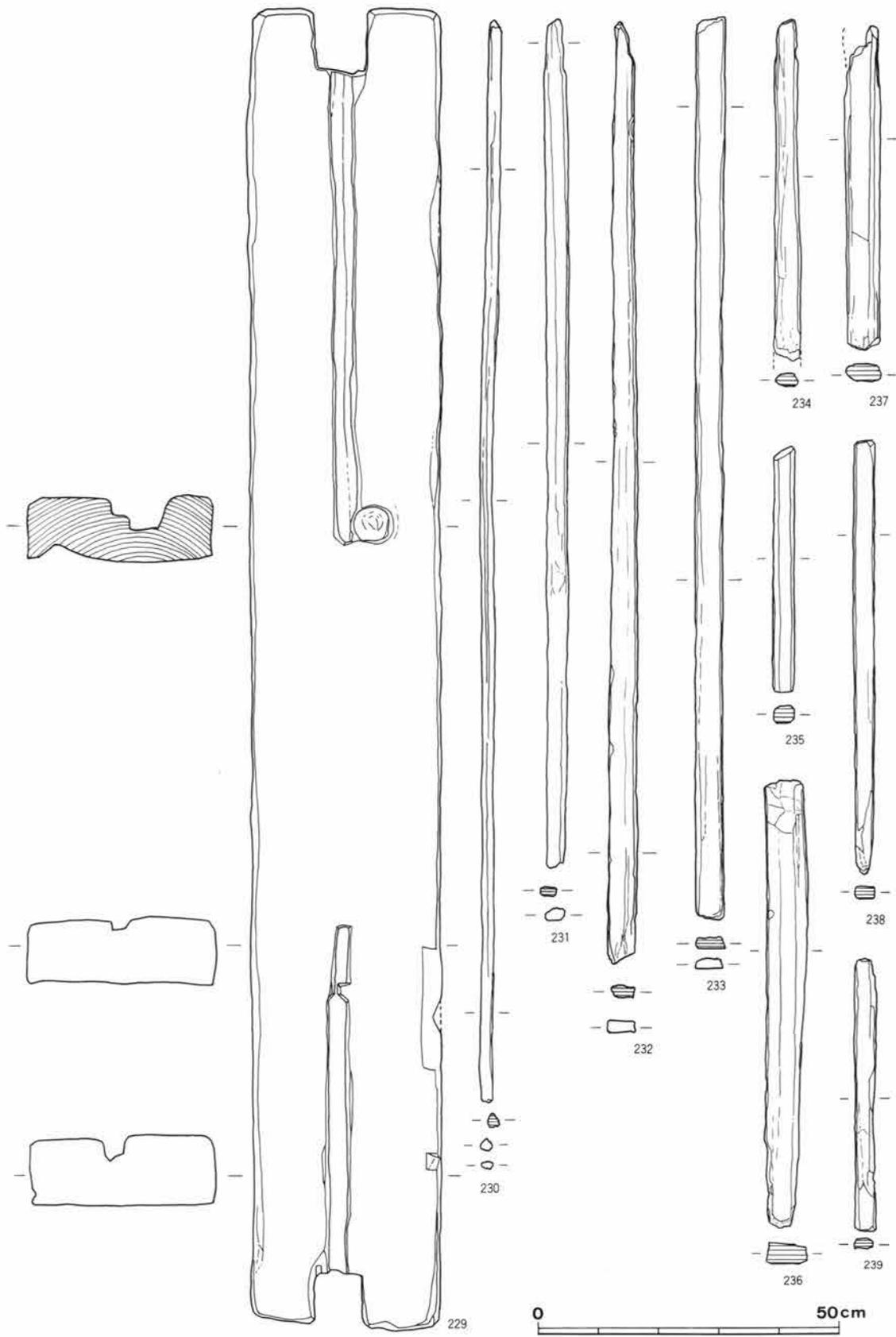
261は木樋である。護岸材2の部材として転用されていた。残存する部分から断面逆台形を呈していたものと推定される。長辺側に1か所台形の切り込みを施し、また底面に円孔が1か所確認できる。部分的に火を受けている。

262～273は形代である。舟形・武器形・串形などがある。

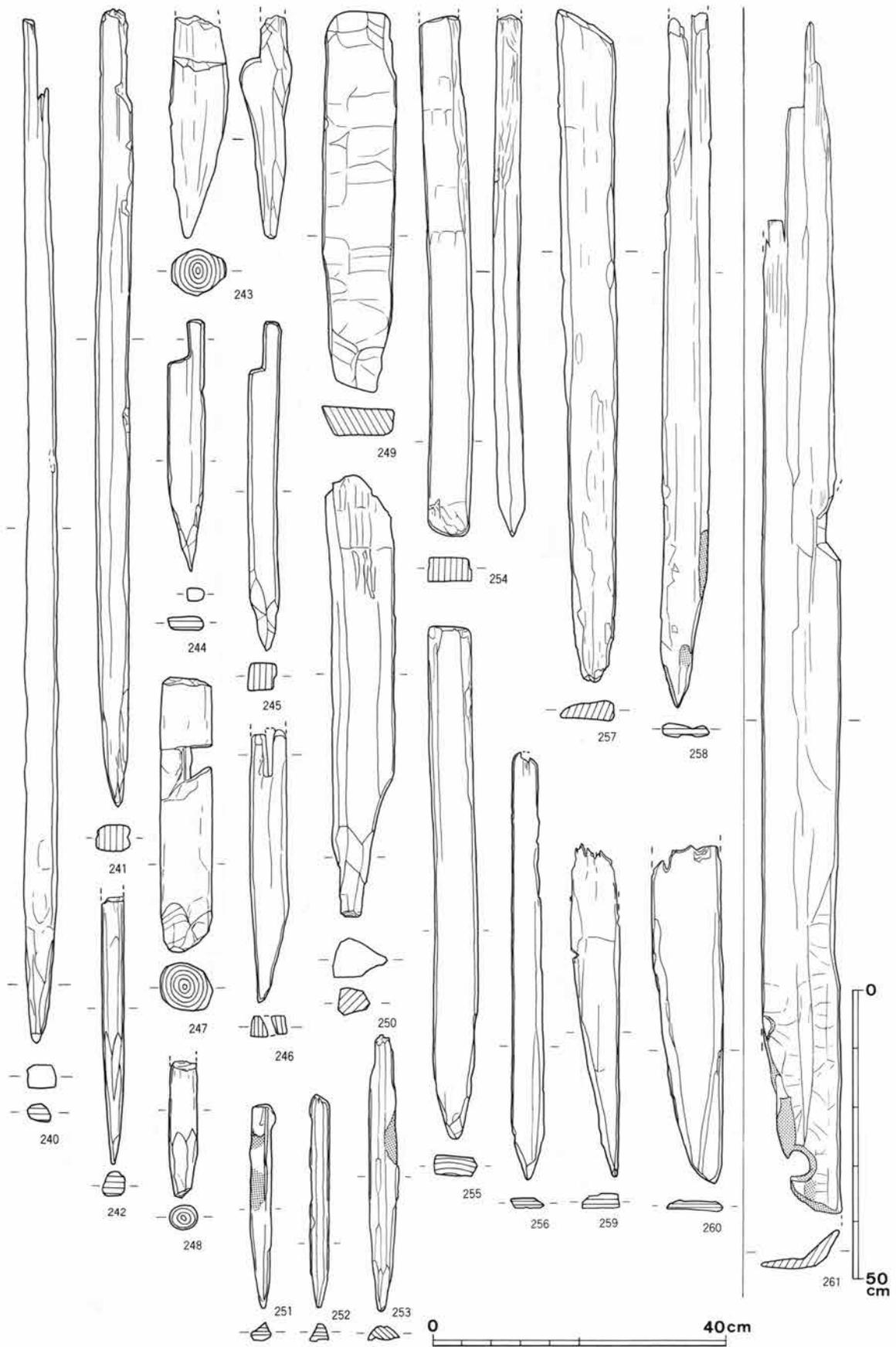
262・263は舟形である。両者とも準構造船を模したものと考えられる。262は全長31cm、263は全長14.2cmを測る。丸木船状のものは認められない。



第50図 溝 S D 2010(新)出土木製品実測図(13)



第51図 溝 S D 2010(新)出土木製品実測図(14)



第52図 溝 S D 2010(新)出土木製品実測図(15)

264～266は刀・刀子を模したものと考えられる。264は先端部が剣状に作られているが、断面形から刀と判断した。265は刃部を薄く作らず断面円形を呈している。266は柄部分のみ遺存する。

267は刀の形代の可能性もあるが何を模したものか判断できない。複数の刻目を施し、一方の面には放射状の線刻を施している。残存長18.9cmを測る。

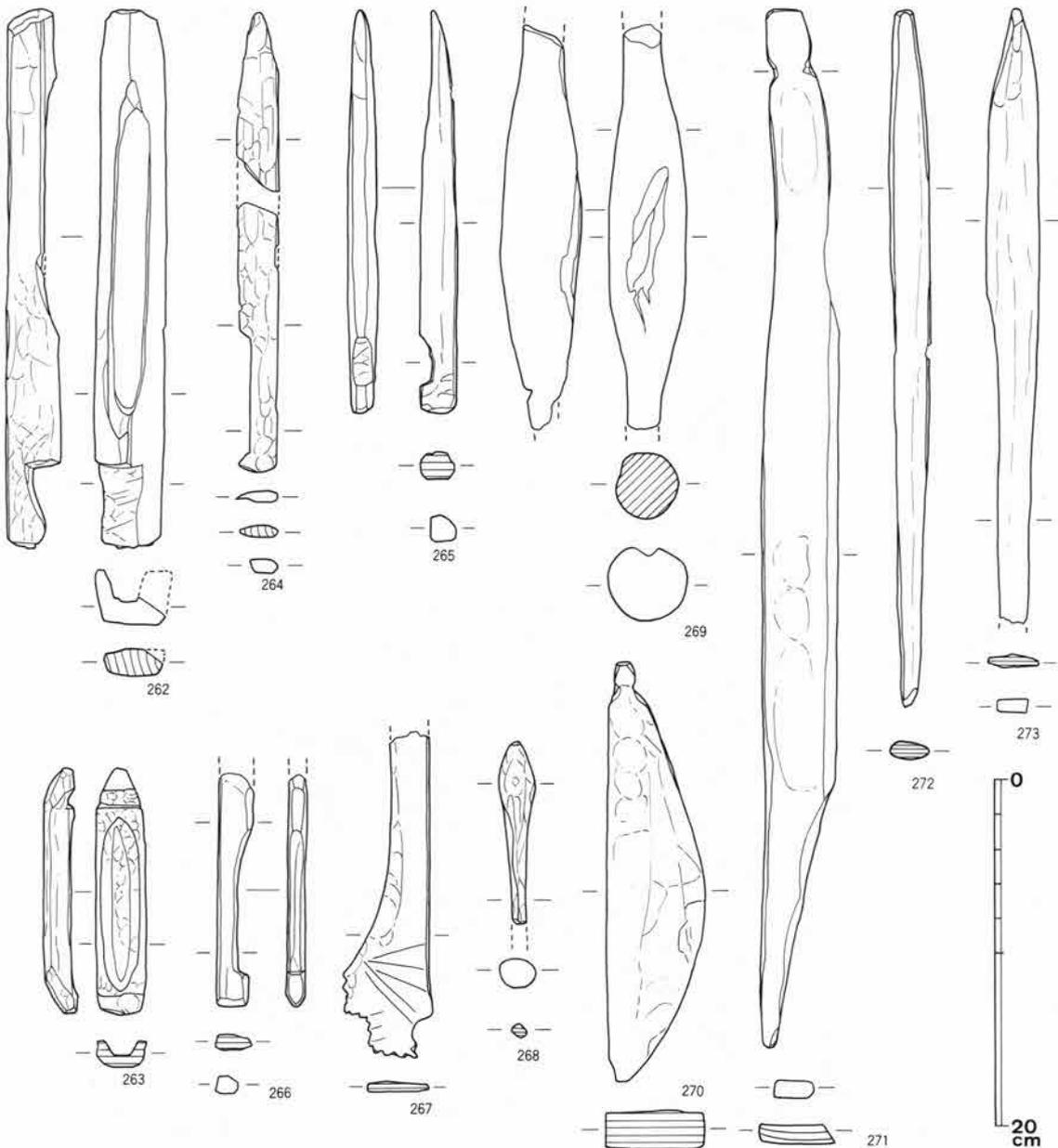
268は鎌形である。残存長8.6cmを測り、断面は円形を呈する。

269・270は用途不明であるが、一応形代とした。可能性としては鳥形が考えられる。

271～273は串状の形代である。271は頭部を有頭棒状に造り出す。

274・275は堰状施設2に用いられていた部材である。275は274の欠損部分を補うために後から別づくりされたものと考えられる。

276・277は護岸材1の最下部に2本並べられて置かれていた。ほぼ同形同大の方柱状を呈して



第53図 溝S D2010(新)出土木製品実測図(16)

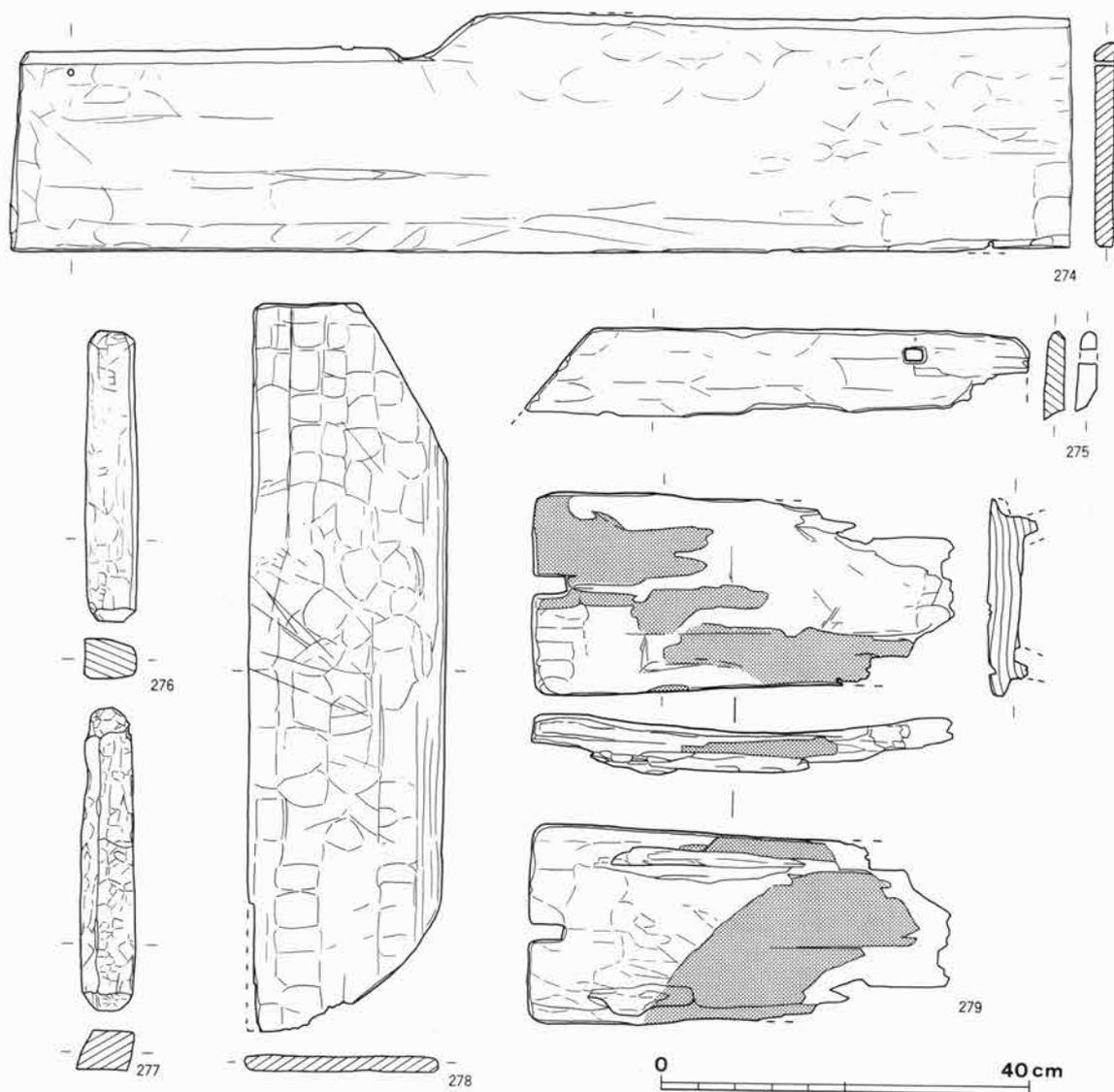
いる。材質は広葉樹である。性格については不明。

278はていねいに加工された板材である。一方を丸みを帯びさせ、反対側をやや角張って作る。全長80cm・幅22cm・厚さ1.8cmを測る。表面には刀子あるいは鉈の切先により生じたと思われる傷が多数観察される。他の部材が作業台として転用されたと考える。

279は腰掛と考えられる部材である。座板とともに脚部も一木から造り出される刳物である。全体に火を受けており、遺存状況は悪い。とくに脚部はほとんど失われているが、2脚の形態をとるものとする。座板端面に柄穴が設けられていることから、何らかの部材がはめ込まれていたと想定される。座板上面部は端面から中央に向けゆるやかに湾曲している。

その他 溝S D 2010(新)からは土器・木製品の他に装身具が出土している(第55図)。

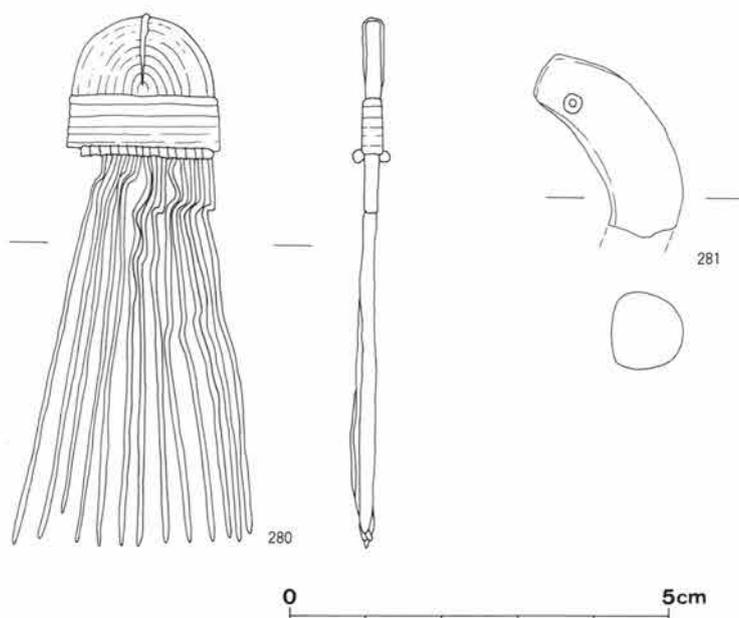
280は竪櫛である。歯が若干土圧により変形しているものの、残りは非常に良く、ほぼ完形に近い状態である。ムネ幅2.0cmを測り、歯の先端までの長さは約7cmである。歯は13本が確認さ



第54図 溝S D 2010(新)出土木製品実測図(17)

れるが、ムネに残された痕跡から本来は16本であったものと判断できる。歯の固定は細い糸で横方向に緊縛した後、最下端をやや太い糸で縛っている。この太い糸は縦方向に細い糸を通すことによって強固に固定されている。黒漆は頭部にのみ塗布されている。

281は土製勾玉である。棒状の粘土を曲げることにより勾玉としている。腹部はやや平坦であり、頭部は扁平である。穿孔は焼成前に両面から行っている。



第55図 溝S D2010(新)出土装身具実測図

⑦溝S D2010(古)

遺構 溝S D2010(古)は溝S D2010(新)に切られる素掘りの溝である。平成9年度第7トレンチで検出された溝S D02の上流部に相当する。規模は幅1.5m・深さ0.5mを測る。埋土は粗砂が堆積し、かなり短期間の内に埋没したものと考える。また、S D2010(新)堰状遺構2の下流部でしか検出されず、S D2010(新)は溝S D2010(古)埋没後に掘り直されたものと判断された。

遺物 出土遺物には土器・土製品・木製品がある。検出した総延長が2.2mと短く、量的には多くないが、大型の破片が多い。

土器 全て土師器である。須恵器は含まれない。器種として壺・甕・高杯・鉢がある。胎土の点では高温石英を含むものは少数である。

1・2は甕口縁部である。端部をわずかに外反させる。いわゆる布留式甕は含まれない。

3～10は高杯である。長脚のもののみで構成され、短脚のものはない。また、スカシをもつものも存在しない。

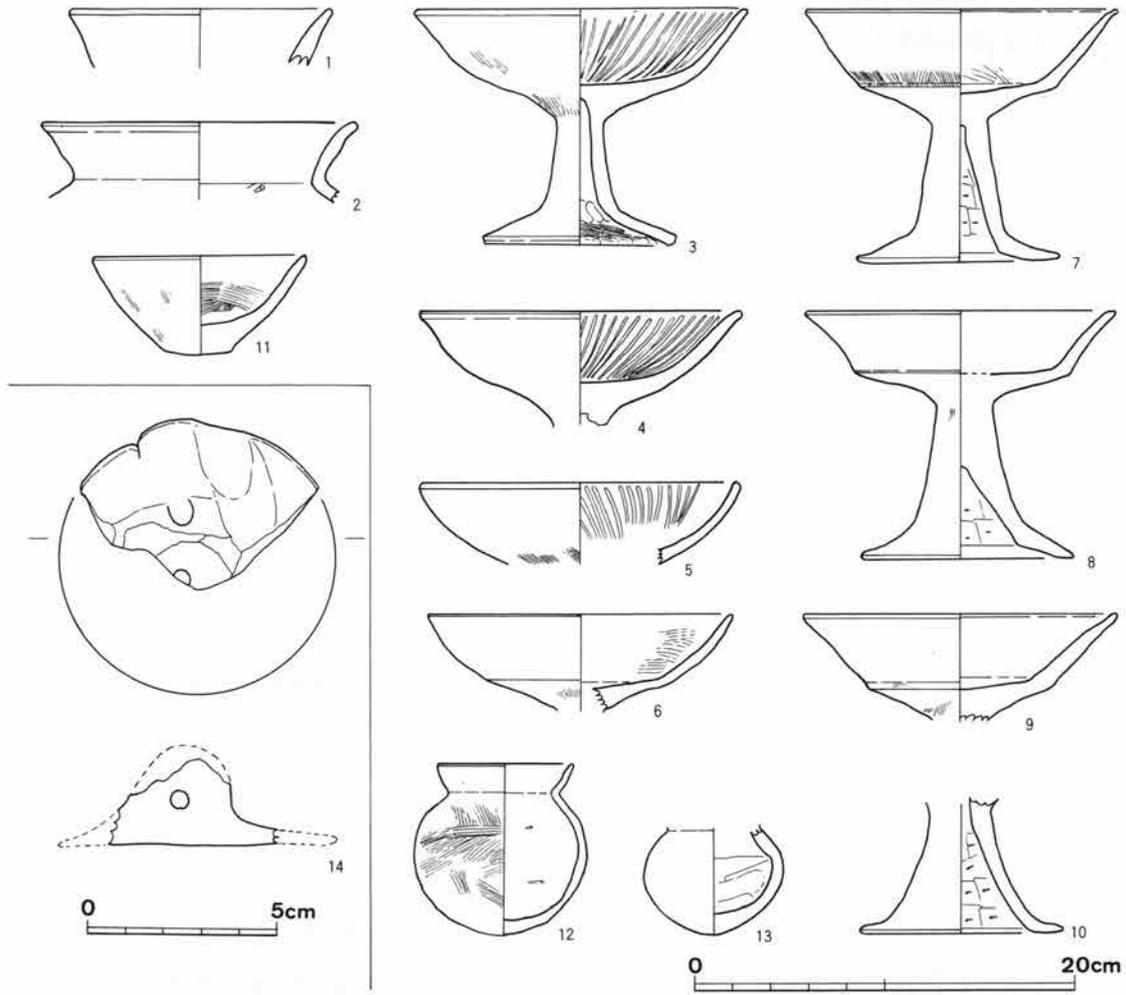
3～6は椀状杯部をもつ。3～5のように暗文をもつ個体が多い。

7～9は有稜系の杯部をもつ。口縁端部は7・8のように外反させるものと、9のようにやや内湾させるものの2者が存在する。

11は小型の鉢である。底部は平底である。

12・13は壺である。12は小型の広口壺、13は小型丸底壺である。両者とも外面はハケにより調整され、精製品とは言い難い。

14は鏡形土製品である。面径7.3cm前後に復原される。造りは雑である。



第56図 溝S D2010(古)出土土器実測図

木製品 木製品には農工具・容器・雑具・建築部材がある。

15は曲柄平鍬の未製品である。形態から鉄製鍬先を伴うものと判断され、「U」字状鍬先を装着するものであろう。刃部装着部と軸部は段をなしている。材質は広葉樹と思われる。

16は把手付槽の把手部分である。槽部分は浅い形態のものと推測される。

17・18はヘラ状木製品である。17は先端部を薄く仕上げている。

19は棒状部材である。1端を細く削っている。

20は箱材である。両端に柄をもつ。全長67.5cm・高さ10.7cmを測る大型品である。

21は腰掛である。脚の痕跡がなく座板と脚部が別造りとなる組合式のものである。座板端面に柄穴が設けられていることからこの部分に脚部が装着されたものと判断される。座板上部は、端面から中央に向けゆるやかに湾曲している。残存長41.5cmを測る。

22は原木を小割にしたもので、何らかの未製品と考える。

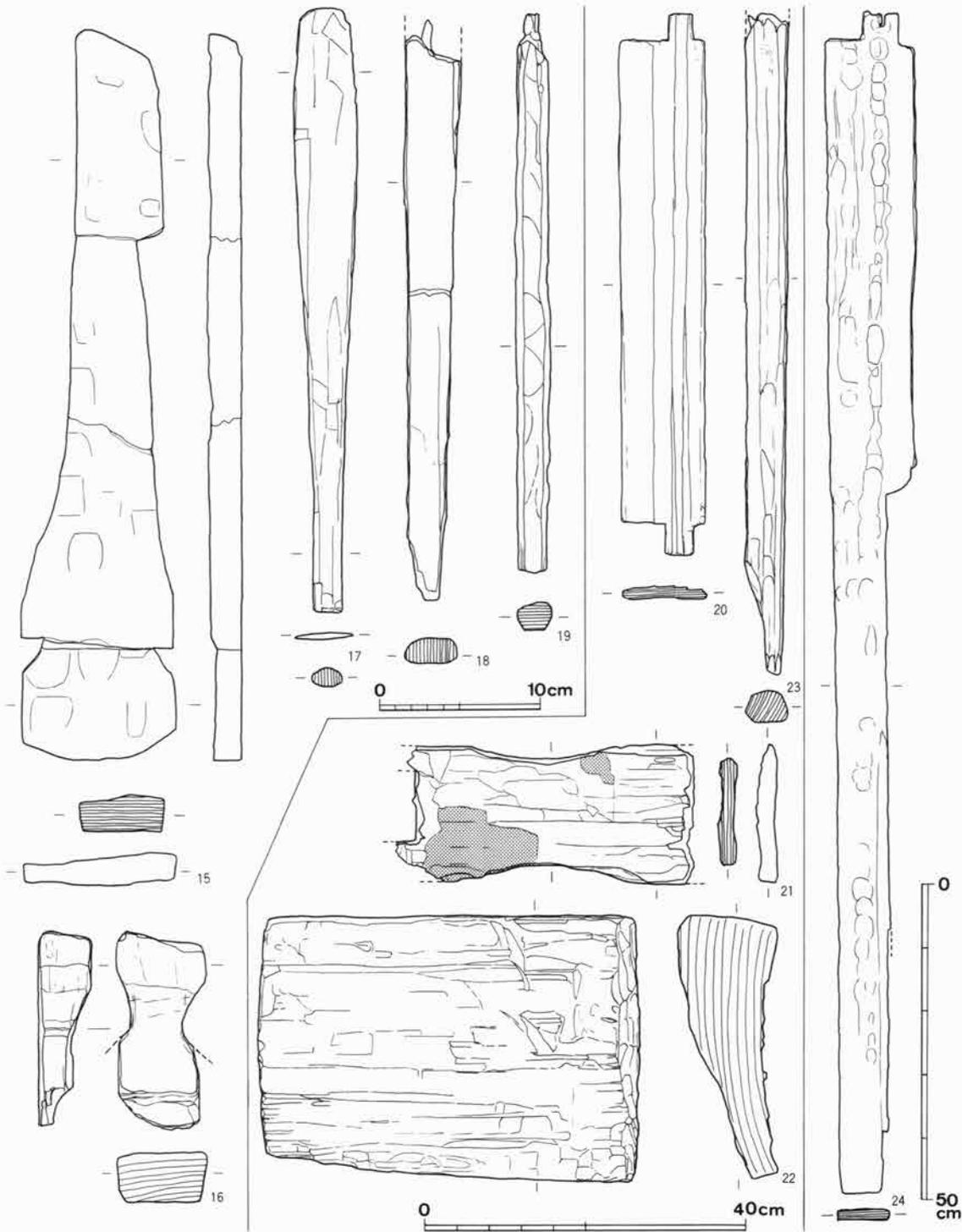
23は杭である。一端の側面のみを削り出す。

24は一方に柄をもつ部材である。柄が存在することから、他の部材に装着されていたことは間違いない。中間に二段の彫り込みによる装飾を施している。鉋もしくは刀子により表面をていね

いに調整されている。縁台あるいはベッドなどの手すりの可能性を考えておきたい。

⑧溝S D2011

遺構 溝S D2010の北東側で検出した幅3m・深さ10cmを測る溝である。人為的に掘削された溝と考えるよりも、先行する溝S D2013やS D2011(古)が埋没しきらない段階で残されていた溝状の窪地とみた方が妥当である。木製品が良好に遺存していることから考えて、水道として流水



第57図 溝S D2010(古)出土木製品実測図

があったものと推測される。埋土は暗灰色シルトの単層である。この層は、溝SD2010(新)上層に対応するため、溝SD2011は溝SD2010(新)と同時期に埋没しているものと判断される。

遺物 出土遺物には土師器・須恵器・木製品がある。須恵器は内面スリ消し技法を用いる甕体部が含まれているため、TK23・47併行期と考える。また先述のように、埋没時期は溝SD2010(新)と同時期と考えられるため、これらの出土遺物はSD2010(新)を補完するものと考えられる。須恵器・土師器は細片が多く、図示しうるものがないため木製品のみ図示した。

木製品には容器・部材・建築部材・雑具が認められるが、農具はない。

1～5は箱材と考えられる部材である。1～3・5は木釘を通すための小孔が設けられる。1・2はほぼ同形同大であり、中央にやや大きな方孔を穿ち、長辺側に2つの小孔を設ける。3・5は一端を斜めに切り、中央よりの部分に小孔を穿つ。4は両端に柄を削り出す。

6は平面台形の板材の一端に三角形の切り欠きを施す。容器か腰掛の脚の可能性もある。

7は木槌である可能性が高い。残存部分から判断して断面「コ」字状を呈するものと判断される。全長35cmを測る。材質は針葉樹と考える。

8は削り抜き式の槽である。小口部分のみが残存している。小口部分は斜めに立ち上がる。

9・10は断面「U」字状を呈する木槌状の部材である。9は中央と一端を、10は一方の端に削り込みをめぐらし、有頭棒状に仕上げている。可能性としては網杵部材が考えられる。

11は加工痕を残す板材である。中央部分に木葉状の加工痕を残している。加工痕は、周辺部分は深く、中央部分は浅い。加工には鉋もしくは刀子が使用されたと考える。

12・13は火鑽臼である。各々5か所の火口をもつ。

14は栓状の部材である。方形の頭部と棒状部分からなり、他の部材に装着されたものと考えられる。棒状部分には1か所の柄穴があり、先端部には方形の削り込みを設ける。

15は断面半円形の部材である。2か所の方形の切り込みをもつ。サクラの樹皮などを用いて他の部材と固定するものかと推測される。

16・17は板状の部材である。16には2か所の切り欠きが認められる。

18～21は有頭棒である。18は両端を有頭状に仕上げるが、さらに中位側にも削り込みを施している。19は板状の棒材の両端を削り頭部としたものである。21は一方の側辺にのみ削り込みを施して有頭状に仕上げている。

22は両端を削る板状の部材である。

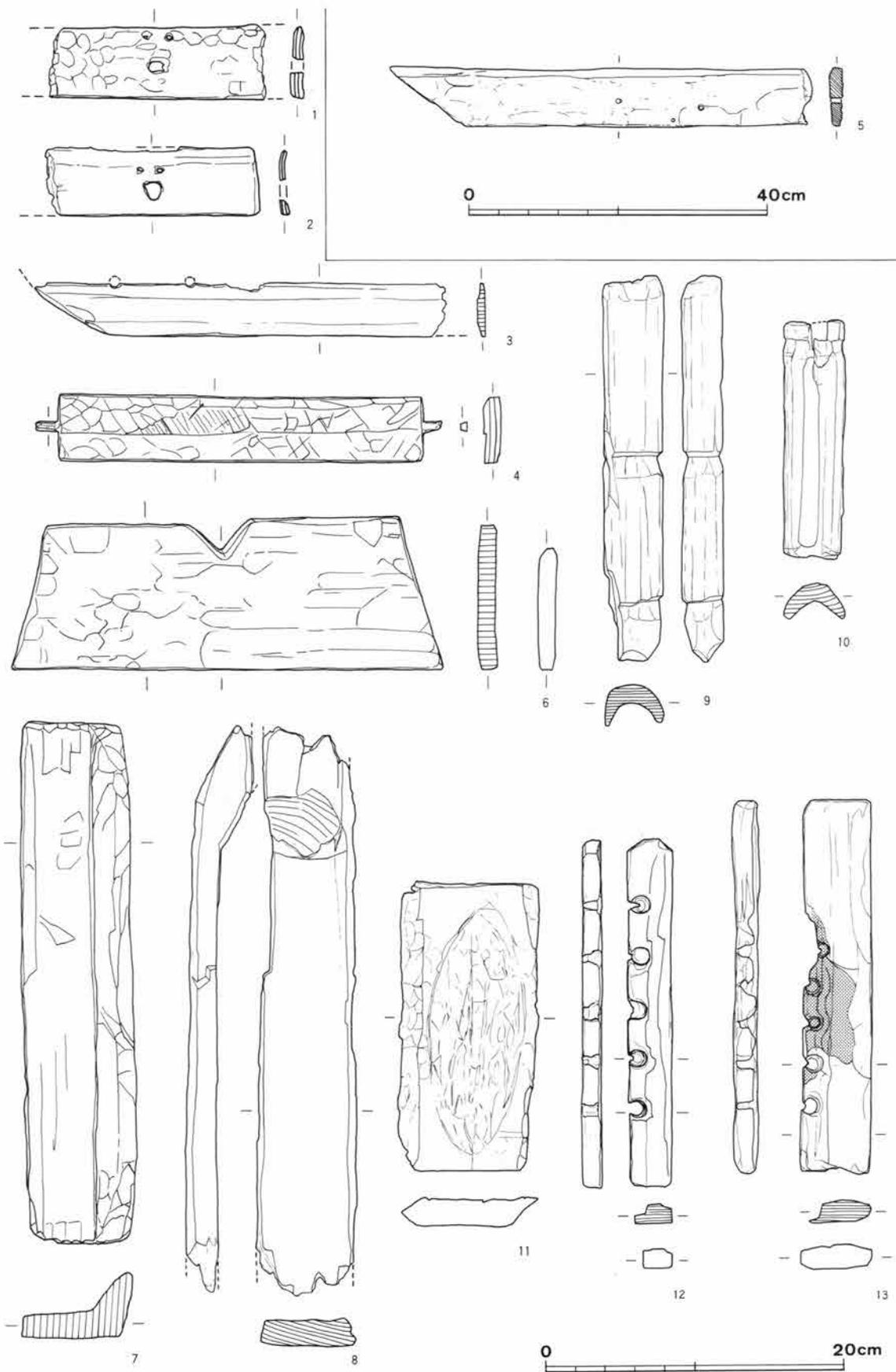
23は串状の部材である。先端を鋭利に加工する。他の部材と組み合わせるには貧弱であり、単独で使用された可能性がある。残存長32cmを測る。

24～26は細身の棒材である。25・26のように短いものは木釘として利用された可能性がある。

27～29は天秤棒状の木製品である。一方の側辺先端側に三角形の切り込みを入れる。27・29はわずかに反りをもつ棒材を使用している。

30は角柱材である。一方は鋭利に削られ、側面には手斧と考えられる整形痕が残る。

31は両端を細く削り、中央をやや膨らみをもつように仕上げる板材である。先端部分は一方を



第58図 溝 S D2011出土木製品実測図(1)

鋭利に、一方を直角に加工する。鳥形の可能性もあるが、性格は不明である。全長41cmを測る。

32は中央にくびれをもつ角材である。紐などが括られた可能性がある。

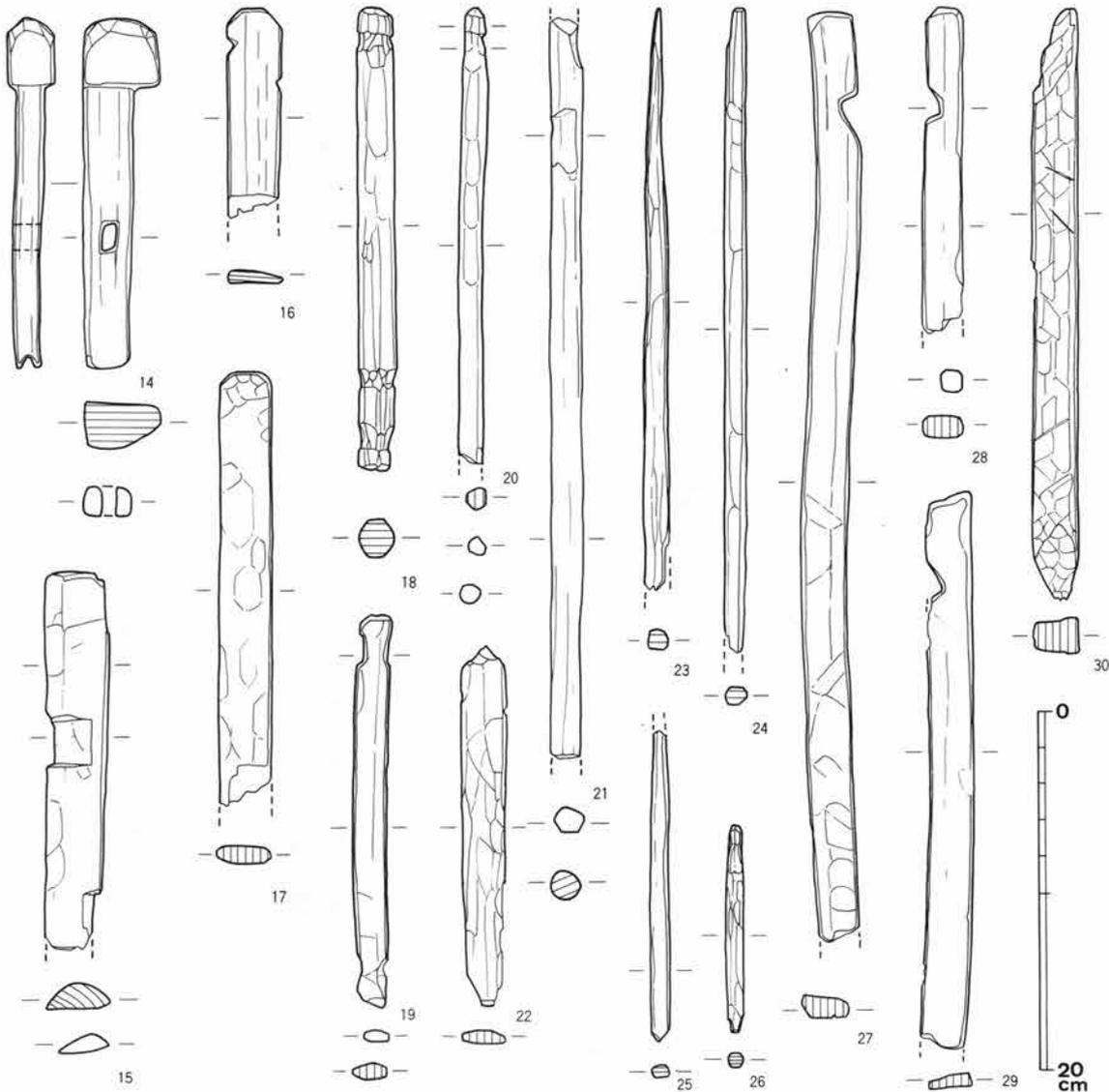
33～36はヘラ状木製品である。細片が多いが、頭部と柄の境の不明瞭なもののみが確認でき、頭部と柄の境の明瞭なものは確認できない。33は唯一の完形品であり、全長42.8cm・幅3cmを測る。先端部はやや丸みを持つように仕上げられる。

37は方形の削り込みをもつ角材である。

38・39・43は建築部材と考えられる大形部材である。

38は1か所の方孔をもつ細長い板材である。全長96cm・幅9.4cmを測る。表面の整形は刀子もしくは鉋で行われていると考えられ、ていねいに仕上げられている。使用部位を特定することはできない。

39は柱材である。直径約16cm・長さ32cmを測る。両端に斧の痕跡が残されており、建物解体時



第59図 溝 S D 2011出土木製品実測図(2)

に切断したものと判断する。材質は針葉樹と思われる。

43は垂木と考えられる断面方形の棒材である。先端部分は段をもつように加工されている。この部分にはさらに溝状の彫り込みが設けられ、棟木あるいは桁材と紐を併用して組み合わせられたものと思われる。残存長170cm・幅5.5cm・厚さ2.7cmを測る。

40~42は杭である。

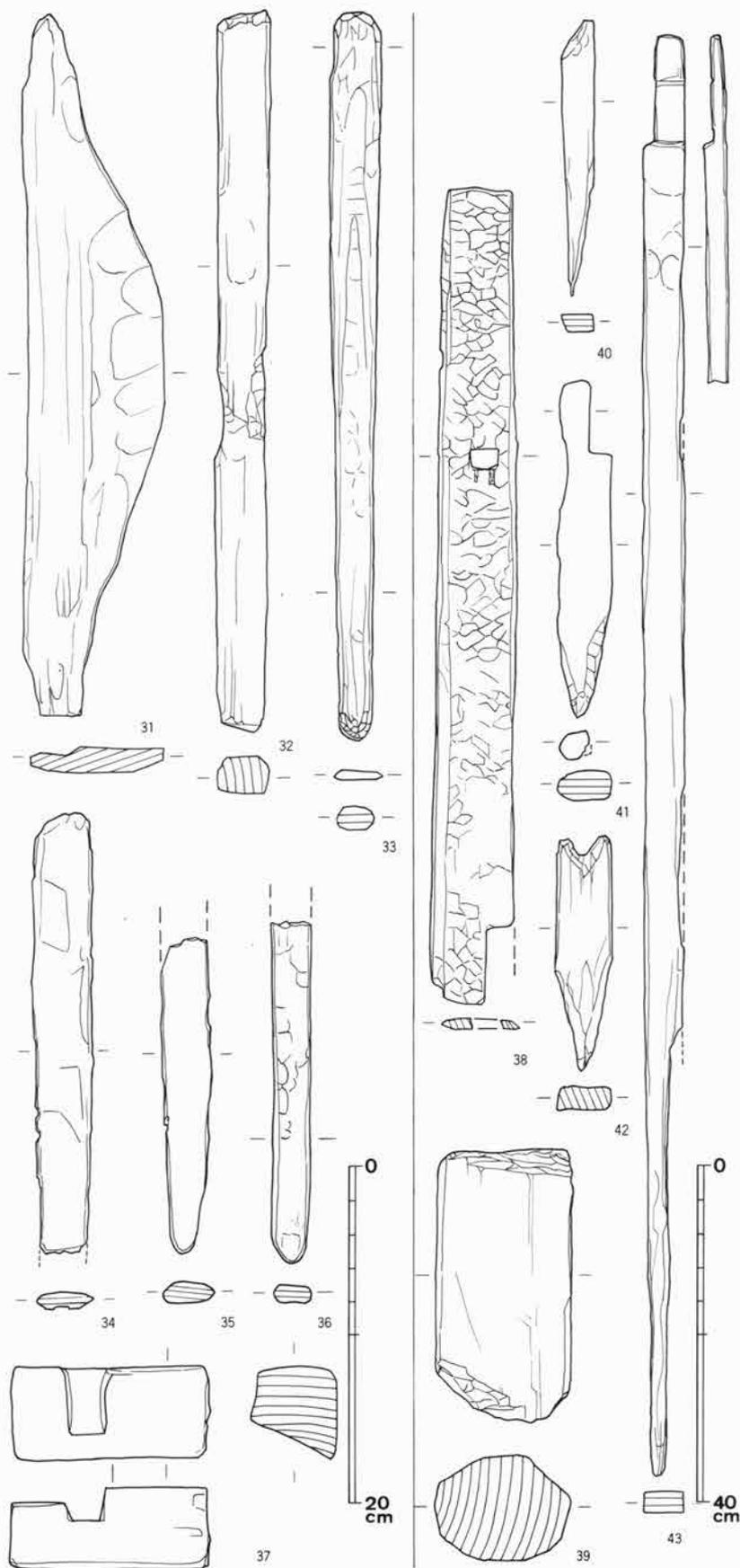
40は断面方形の棒材の一端を加工することにより杭として仕上げている。長さ32.7cmを測る。

41は頭部の一端が断面方形の棒状に加工されている。長さ39.5cmを測る。

42は頭部に「V」字状の切り込みを入れる。長さ27.5cmを測る。

⑨溝S D 2013

遺構 溝S D 2010の北側に位置し、東から南へ流れる溝である。遺構の残存状況は悪く、西側部分では削平され、その痕跡を認めることができなかった。埋土は黄褐色粗砂の単層である。なお、S D 2011の下層から検出



第60図 溝S D 2011出土木製品実測図(3)

されたため、時期的にはS D2010(新)およびS D2011(上層)に先行するものとする。

遺物は溝底部から完形個体の土師器が複数出土している。その出土状況(第61図)から一括投棄されたものと考えられる。

遺物 S D2013出土遺物には土師器・木製品がある。須恵器は含まれない。

土師器 出土状況から一括性が高いと考えられる完形もしくは大破片の個体のみを図示している。器種には甕・壺・高杯・鉢が認められる。

1は口径14.6cmを測る大型の甕である。口縁は内湾気味に立ち上がり、端部は内面に肥厚することなく、斜めに面をもつ。体部は球形に近いものと推定される。調整は外面ハケメ、内面はヘラケズリにより行われる。

2は複合口縁の甕である。擬口縁と口縁外端面が一体化している。外面ハケ調整、内面はヘラケズリにより調整される。口径12.6cmを測る。

3～8は小型の甕である。口径8.5cm前後・器高11.5cm前後・体部最大径11.6～13.6cmを測る。中でも、4～7はやや下膨れ気味の体部をもつ同型同大のものである。口縁はユビによりつまみ出される粗製の甕である。外面はハケ調整、内面はヘラケズリで調整される。体部外面に煤が多量に付着するものが多く、煮沸具として使用されたものとする。

9～12は小型の壺である。9・10は広口壺、11～13は小型丸底壺と考えられる。外面はハケにより調整される粗製のものであり、精製品はない。

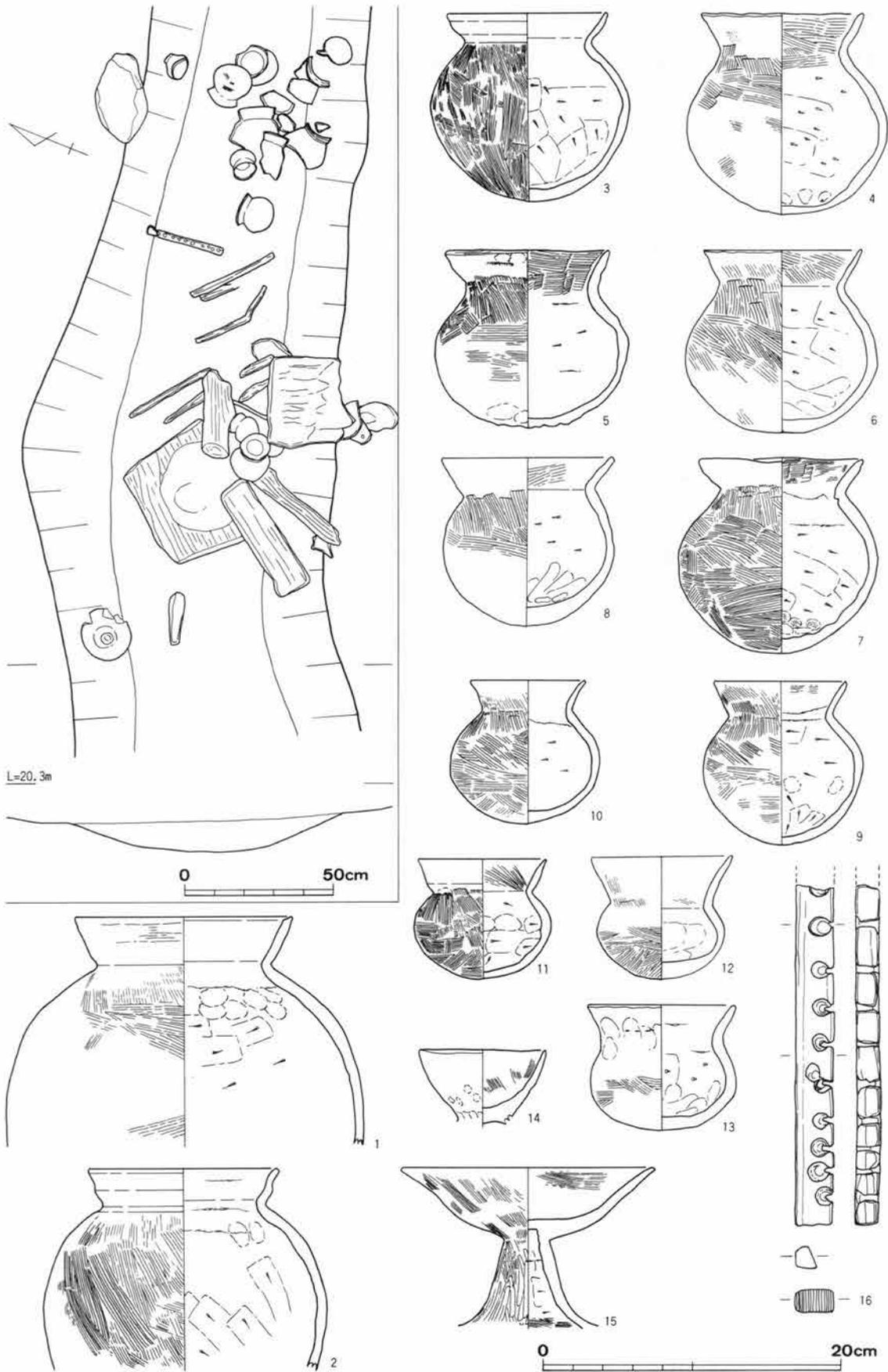
14は小型の鉢である。椀形の杯部に高台状の脚部を持つものとする。内面はハケ調整後ナデにより、外面はナデにより調整される。

15は高杯である。浅い杯部を持ち、脚部はやや短く脚柱部は膨らみ気味である。口径 \approx cmを測る。調整は内外面とも杯部はハケにより、脚柱部は外面ヘラミガキ、内面ヘラケズリである。

以上、S D2013出土土器について概観した。1はいわゆる布留式甕の系譜上で考えることができる。また、壺と甕の形態上の差が少なくなり区分しがたくなっている。また、胎土の点では高温石英を含むものは14のみである。形式的には溝S D2010(新)出土土器と溝S D2012出土土器の中間相を示している。ただし、出土状態からみて4～7の粗製の甕は祭祀のために生産・使用・廃棄された可能性があり、日常に使用されている土器群とは異なっている可能性がある。

木製品 木製品は少なく、火鑽臼が1点存在するのみである。その他、板材・棒材等も出土しているが図示していない。

16は火鑽臼である。残存長21cm・幅2.5cm・厚さ1.7cmを測る断面方形の棒材を使用している。火口が11か所確認できる。



第61図 溝 S D 2013遺物出土状況および出土遺物実測図

⑩溝 S D 2012

遺構 溝 S D 2012は調査地谷部分を東から西へ向け流れる溝である。平成9年度に検出した溝 S D 08はこの溝の下流部に相当するものと断面から判断した。

溝本体は、最大幅4m・最大深さ0.5mを測り、断面はゆるい弧状を呈している。この溝からは、平成9年度に検出したものを含め、2か所の浄水施設を検出した。下流側を浄水施設1・上流側を浄水施設2として説明を加える。溝内の埋土の状況は、浄水施設2の上流側と下流側とは異なっており、上流側では水平堆積を示し、下流側では周辺からの流入土が斜め方向に堆積することにより埋没している。これは浄水施設2の上流側が滞水しているのに対し、下流側では常に水が流れていた状況を示しているものと理解する。

浄水施設2(第63図)は、板材を溝に対し直行させ、水をせき止めるための堰状施設とそれに直行する板材を下部に設けることにより構成されている。板材の固定は4本の杭を斜めに打ち込むことにより行われる。そのため、堰状施設の部材1上辺は下流側に対し傾斜することとなる。また、板材の上流側最下端は檜皮と考えられる樹皮を敷き、その上を粘質土で覆うことにより水が板材の下から漏れるのを防いでいる。部材1は上辺中央部分に切り込みを設け、この部分から水が流れ落ちるように加工されている。

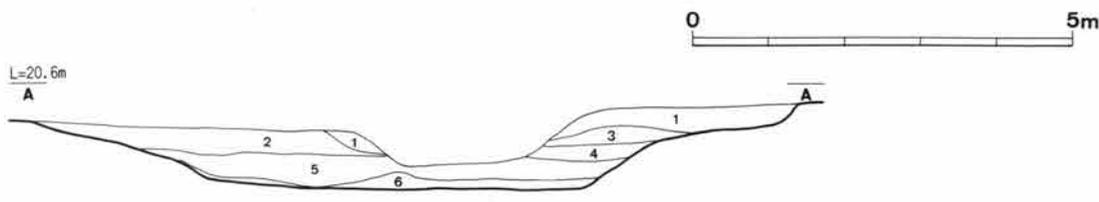
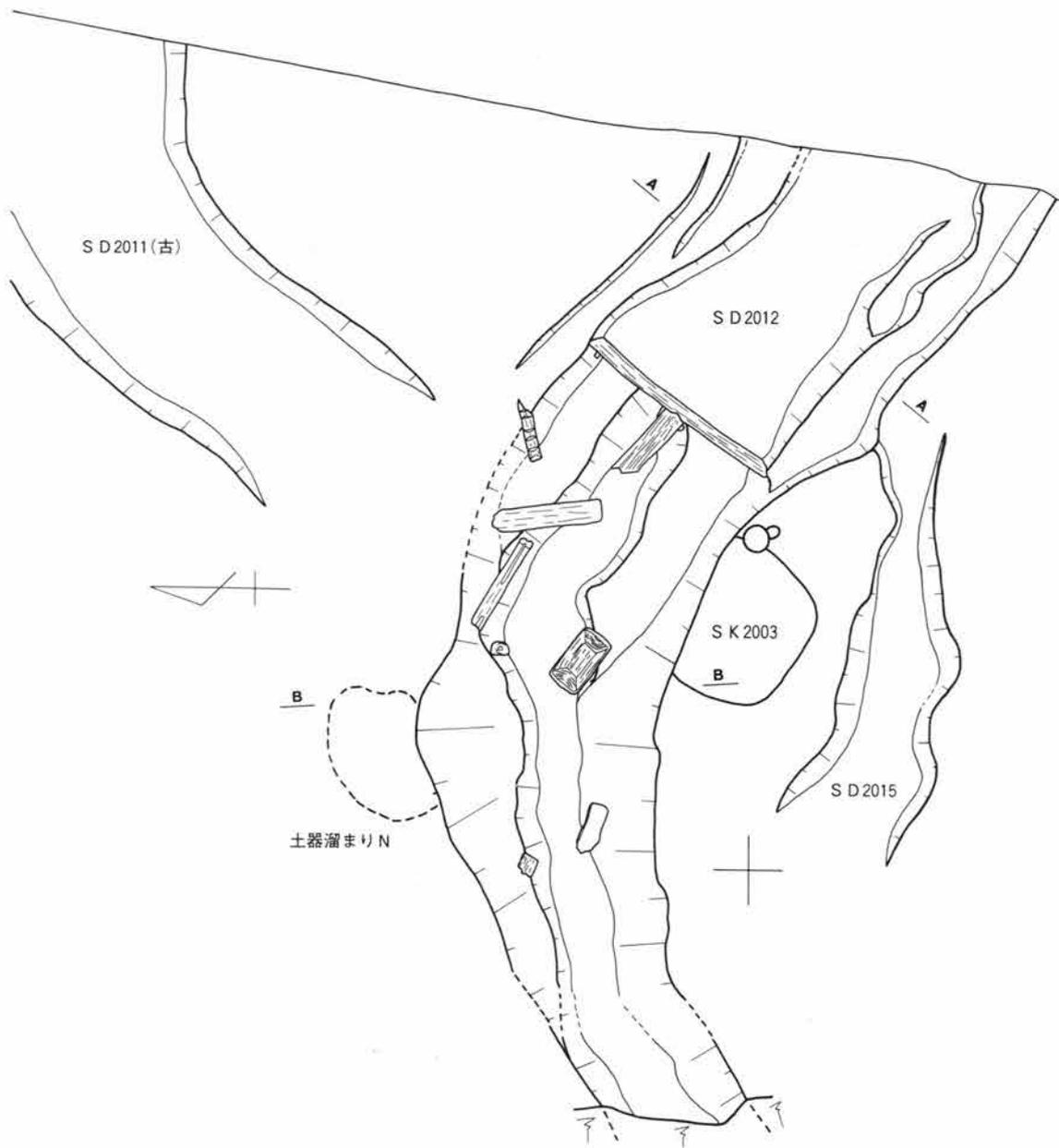
部材2には堰状施設から流れ落ちた水が当たることによりうがたれたと見られる窪みが確認された。北岸には梯子が据え付けられた状況で検出された。

この他に、周辺からは2次的な移動を受けていると思われる部材や大形槽が出土しているため、その出土状況を元に復原を行いたい。

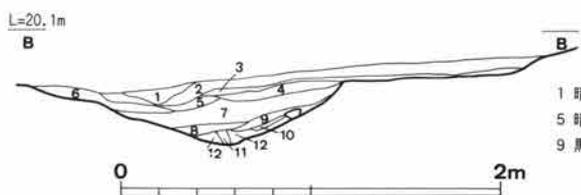
まず、部材2であるが、これは部材3との接合関係が明確である。この部材もまた上方にくり込みを持つ板材である。この板材は溝底面より浮いている。板材の下部に、鋳未製品を挟み込んで高さを調整している点からも、この部材は溝底面から浮くように設計されたものと思われる。しかしながら、この状態では、部材2・3を中空に浮いた状態で固定することは困難であると判断される。部材3の下流側から検出された部材4は、建築部材を転用したものであるが、これは特に固定されたものではなく、やはり2次的な移動を受けている。水流の方向を考えた場合、この部材は北側の一点を支点として、南側に力の掛かった結果、移動したものと思われ、本来は溝に対し直行する状況であったと考える。

以上のように、各部材の原位置を検討した結果、部材4の上に部材3の西端がのる橋状の施設として復原することができる。大型槽については、これが水を溜めるための容器であったと考えた場合、部材1から流れ落ちる水を受ける場所に設置されたと見るのが妥当であろう。梯子はここで得られた水を汲むための昇降に使用されたものと判断される。

なお、橋状施設として使用されていた部材2・3であるが、これは調整痕を明瞭に残しており、実際に堰状施設に使用されていた部材とは考えにくい。一方、堰状施設に使用されている部材1には柄穴を穿つため刀子もしくは鉋で引かれた計画線が観察される。つまり、部材1は本来この浄水施設に使用されるものではなく、建築部材として加工が行われていたものと判断できる。以



- 1 暗灰褐色粗砂 (シルト・黄灰色粗砂混)
- 2 淡橙灰色中粒砂 (シルト混)
- 3 暗灰白色粗砂
- 4 暗灰褐色粗砂 (シルト混)
- 5 暗灰白色細・極細砂
- 6 暗灰褐色シルト (植物遺体含む)



- 1 暗灰色細砂
- 2 暗灰褐色粗砂
- 3 暗青灰色シルト
- 4 灰褐色中粒砂
- 5 暗灰褐色中粒砂
- 6 黒褐色シルト
- 7 灰褐色中粒砂
- 8 暗灰褐色細砂
- 9 黒褐色シルト
- 10 灰褐色中粒砂
- 11 淡灰褐色中粒砂
- 12 黒褐色粘質土

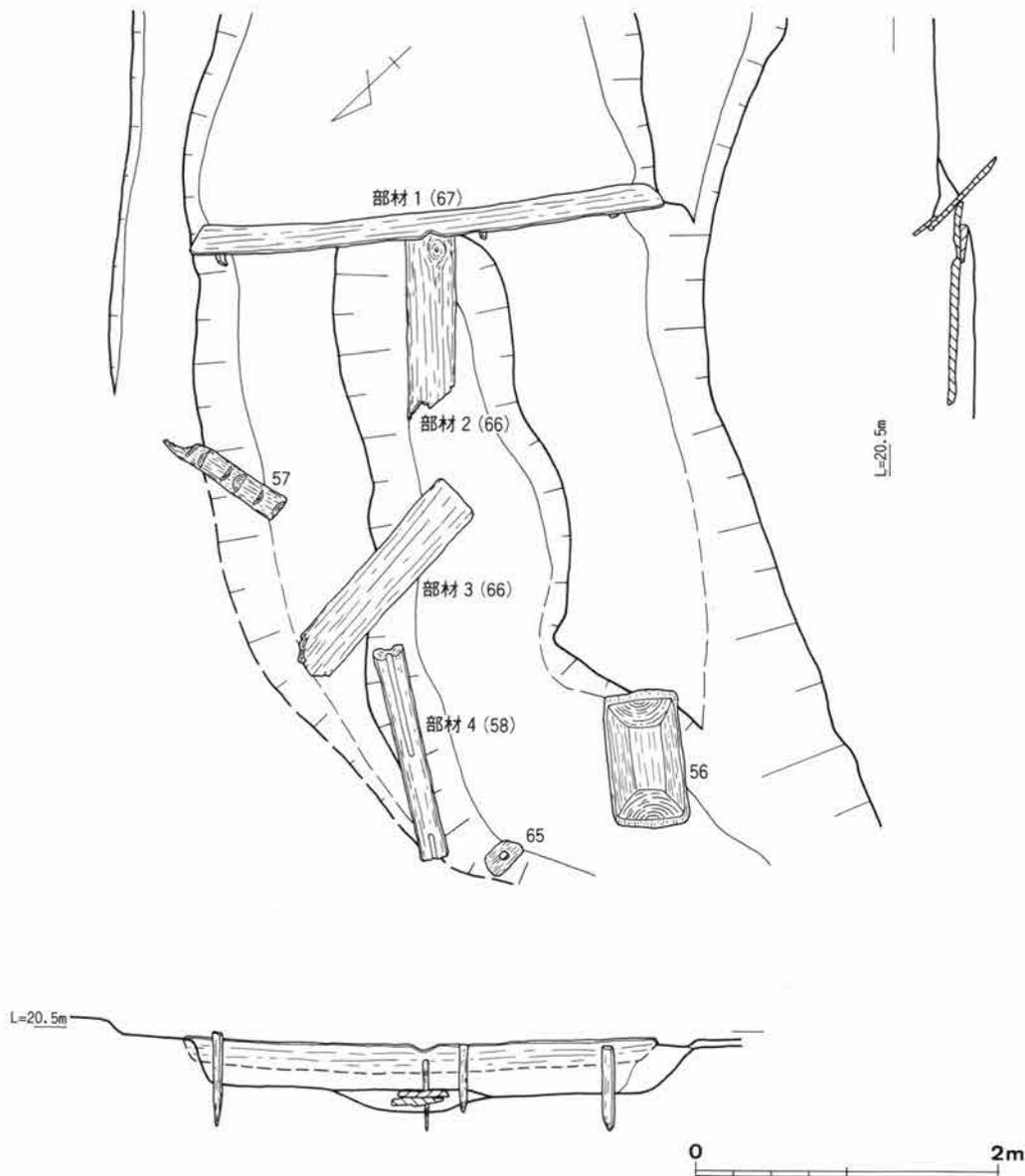
第62図 溝 S D 2012・2011(古)・2015実測図および溝 S D 2012土層断面図

上の点から、部材2・3が本来、この浄水施設に使用されるべく加工された部材であり、何らかの理由(おそらく、溝幅にあわなかったため)により急遽、建築部材として加工されつつあった部材1を堰状施設に転用したものと考える。

このように、形態こそ浄水施設1とは異なるものの、流水をせき止めることにより貯水・沈殿を行い、上澄みを槽に貯めるという機能的な点では浄水施設1・2とも同様である。

出土遺物は全体的に少なく、土器群のほか、剣刀装具・円盤状木製状品(鏡形木製品?)などの木製品が出土した。下流側ではこの他に、鳥形木製品・舟形木製品が出土している。また、モモの種子が多く出土し、浄水施設2の上流側ではトチの実の集積が認められた。

なお、この溝S D2012では埋土の寄生虫卵分析を実施した。サンプルとして提出した土壌は第62図の畦の各層と部材3の下に堆積していた土壌である。詳細は附載に譲るが、いずれの層からも寄生虫卵は全く検出されず、トイレ遺構として安易に認識することはできないと思われる。



第63図 溝S D2012浄水施設2 実測図

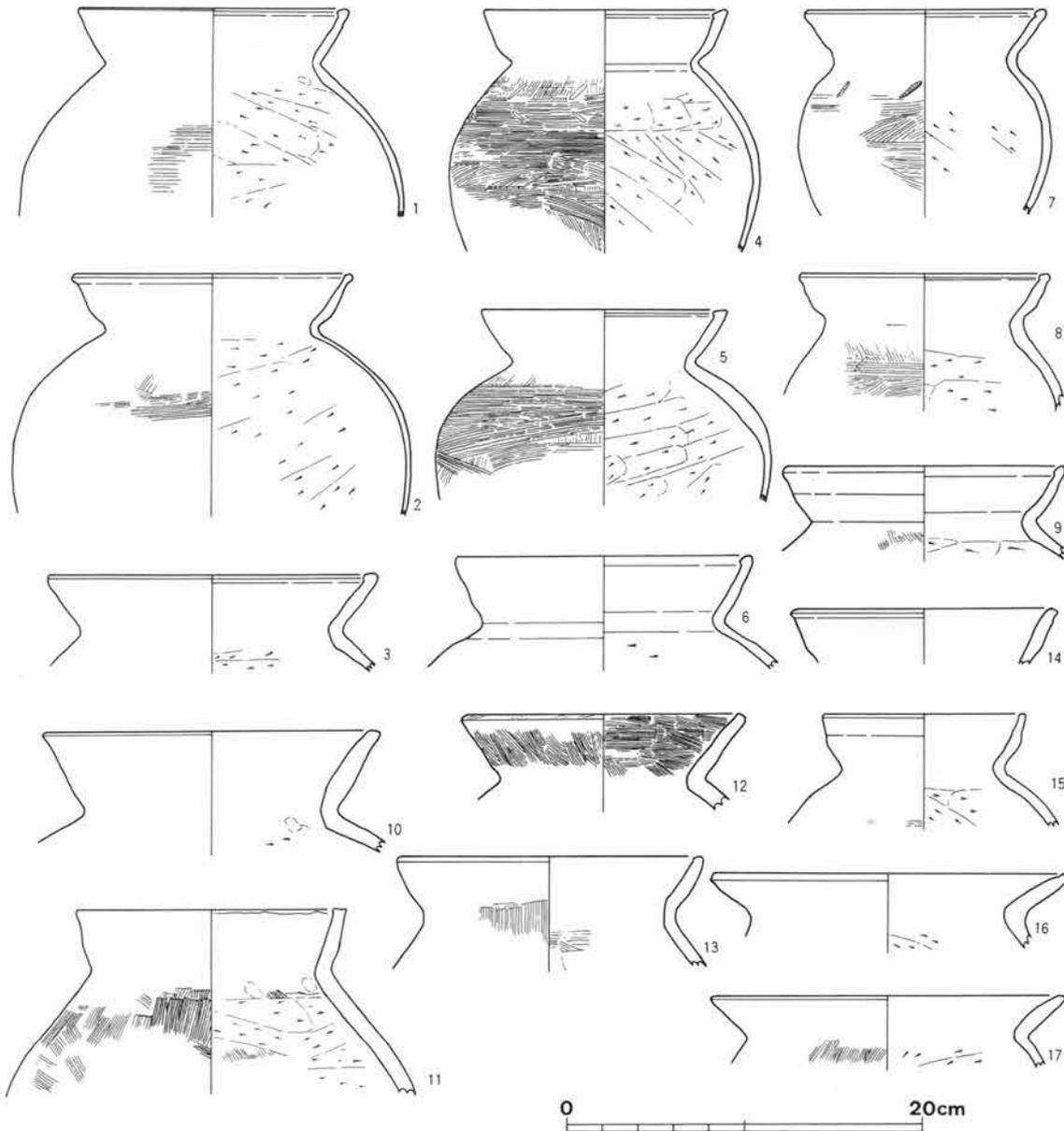
遺物 S D2012出土遺物には、土器・木器がある。

土器 S D2012出土土器は全て土師器であり、須恵器は含まない。出土遺物の大半は細片であるが、浄水施設2の上流部からは2・4・5・17・19・32・33・41・42がまとめて出土した。出土層位の状況から、浄水施設2が一定埋没した段階で投棄されたものと判断する。

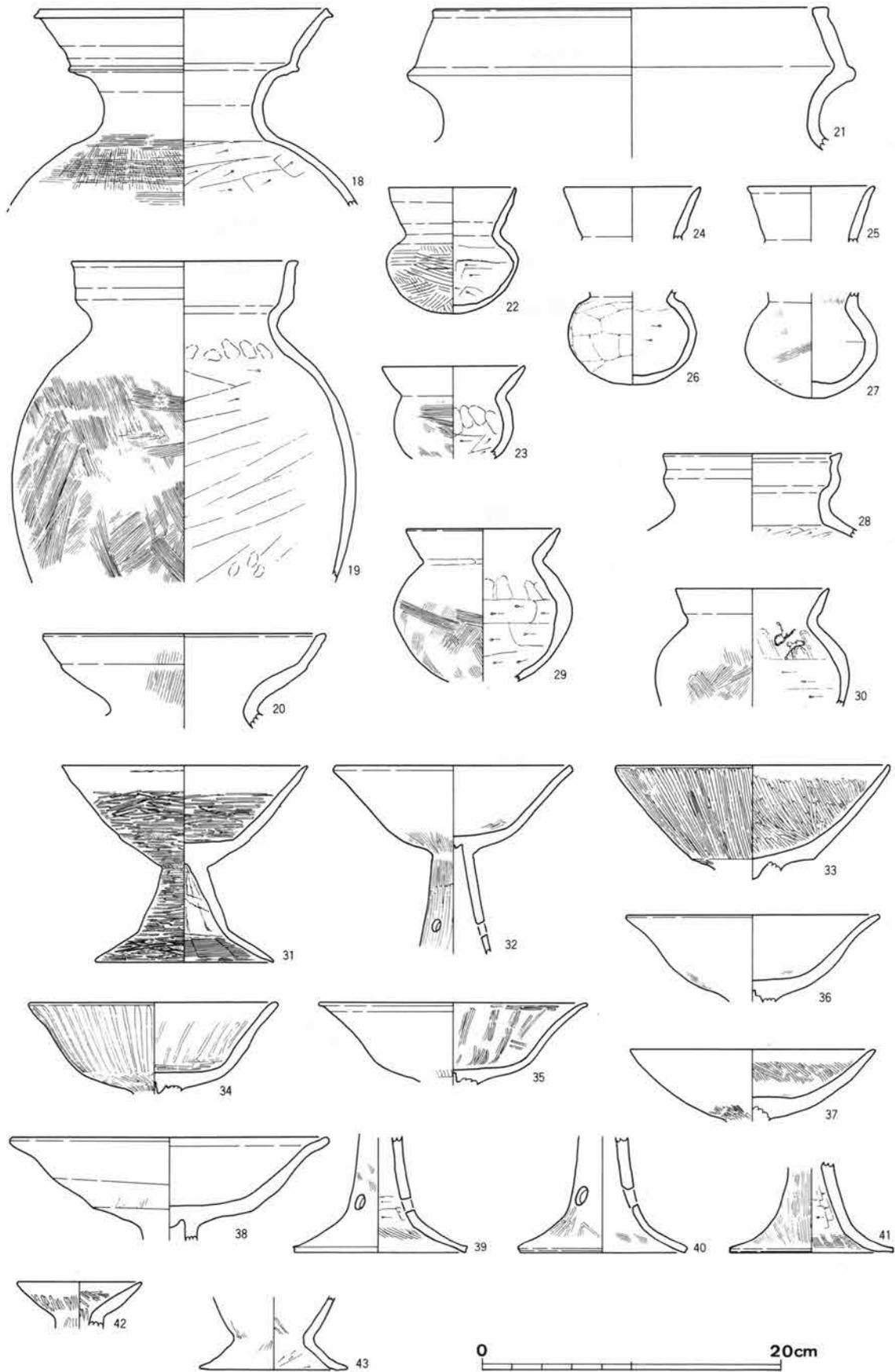
1～17は甕である。

1～9・14はいわゆる布留式甕の系譜を引くものと考えられ、内湾する口縁に肥厚する口縁端部をもつものが多い。また、肩部に刺突紋を有する個体が存在する。体部は球形に近く、体部上半の横方向のハケが顕著である。口縁端部の肥厚しないものも内湾する口縁をもつ。

10～13・15は口縁端部を肥厚させずにゆるい凹面を口縁内端面にもつ。器壁の厚いもので構成されている。



第64図 S D2012出土土器実測図(1)



第65図 溝S D 2012出土土器実測図(2)

第8表 溝S D2012出土土器観察表(1)

番号	器種	法量			調整		胎土					色調	残存率	備考
		口径 (cm)	器高 (cm)	最大径 (cm)	内面	外面	高温 石英	石英	長石	雲母	他			
1	甕	15.0		21.6	ケズリ	ハケ	○		○			灰褐	40	煤付着
2	甕	15.6		22.4	ケズリ	ハケ	○		○			橙褐	20	煤付着
3	甕	18.2			ケズリ	ナデ		○	○	○		灰褐	30	
4	甕	13.5		17.4	ケズリ	ハケ	○	○	○		赤色 砂粒	黄褐	30	煤付着 刺突紋
5	甕	13.6		19.0	ケズリ	ハケ	○	○	○			橙褐	30	煤付着
6	甕	16.1			ケズリ	ナデ		○	○			橙褐	20	
7	甕	13.2		14.2	ケズリ	ハケ	○	○	○			灰褐	20	使用痕 刺突紋
8	甕	13.6			ケズリ	ハケ	○	○	○			灰褐	40	煤付着 刺突紋
9	甕	15.6			ケズリ	ナデ		○	○			灰褐	20	煤付着
10	甕	14.2			ナデ	ナデ	○	○	○			灰褐	20	
11	甕	18.0			ナデ	ケズリ		○	○			灰褐	20	
12	甕	15.0			ハケ後 ケズリ	ハケ	○	○	○			灰褐	80	
13	甕	15.2			ハケ	ハケ		○	○	○		灰褐	35	
14	甕	16.8			ハケ後 ケズリ	ハケ		○	○	○		灰褐	20	
15	甕	11.2			ケズリ	ハケ	○		○			灰褐	20	
16	甕	19.6			ケズリ	ナデ	○	○	○			橙褐	20	
17	甕	19.4			ケズリ	ハケ		○	○			灰褐	25	
18	壺	19.2			ケズリ	ハケ		○	○	○	黒色 砂粒	灰褐	20	
19	壺	15.0		23.0	ケズリ	ハケ	○	○	○			灰褐	40	
20	壺	18.8			ナデ	ハケ		○	○		赤色 砂粒	灰褐	10	
21	壺	26.0			ナデ	ナデ		○	○			灰褐	15	
22	壺	8.4	8.5	8.9	ケズリ	ハケ		○	○	○		灰褐	60	
23	壺	9.5		8.0	ケズリ	ハケ		○	○			灰褐	20	
24	壺	9.0			ナデ	ナデ		○	○	○		橙褐	25	
25	壺	8.4			ナデ	ナデ		○	○	○		橙褐	25	
26	壺			8.6	ケズリ	ナデ		○	○	○		灰褐	100	
27	壺			8.9	ナデ	ハケ後 ナデ		○	○	○		黄褐	100	
28	壺	11.8			ケズリ	ハケ後 ナデ		○	○			灰褐	50	
29	壺	10.2		12.0	ケズリ ナデ	ハケ		○	○	○		橙褐	30	
30	壺	10.2		13.0	ケズリ ナデ	ハケ		○	○			橙褐	15	
31	高杯	16.4	13.2		ミガキ	ミガキ		○	○			灰褐	50	底径 11.8
32	高杯	15.6			ミガキ	ミガキ		○	○	○		灰褐	40	摩耗

第9表 溝S D2012出土土器観察表(2)

番号	器種	法量			調整		胎土					色調	残存率	備考
		口径 (cm)	器高 (cm)	最大径 (cm)	内面	外面	高温 石英	石英	長石	雲母	他			
33	高杯	18.1			ミガキ	ミガキ	○	○	○			橙褐	60	
34	高杯	16.4			ハケ後 ミガキ	ミガキ		○	○	○		灰褐	80	暗文
35	高杯	17.7			ミガキ	ナデ		○	○			灰褐	40	暗文
36	高杯	16.8			ハケ後 ナデ	ハケ後 ナデ		○	○			灰白	30	
37	高杯	16.3			ハケ後 ミガキ	ハケ		○	○		赤色 砂粒	橙褐	98	
38	高杯													
39	高杯				ケズリ 後ハケ	ハケ後 ナデ		○	○	○		黄褐	40	底径 11.4
40	高杯				ハケ	ミガキ		○	○		赤色 砂粒	橙褐	100	底径 11.0
41	高杯				ケズリ 後ハケ	ケズリ ハケ	○	○	○			灰褐	100	底径 10.8
42	器台	8.2			ミガキ	ミガキ		○	○	○		灰褐	100	
43	器台				ミガキ	ミガキ		○	○		赤色 砂粒	橙褐	25	底径 10.0

16・17は「く」の字状口縁を呈する。下層からの混入品の可能性がある。また、全体を通じてみても同形式の甕は極めて少ない。このため、この溝の機能していた段階にはすでに消滅していたか、あるいは存在してもその比率は極めて低かったものと判断される。

この他、図示していないが、山陰系の複合口縁甕の細片も存在する。下層の混入遺物の可能性もあり、確実にこの溝に伴うかどうか疑問であるが、個体数はきわめて少ない。

18～20は中型壺である。全て複合口縁をもつが、各個体ごとの差が大きい。

21は大型の複合口縁壺である。内傾する口縁部を有する。

22～27は小型丸底壺である。精製品はなく外面はハケもしくはナデにより調整される。6は口径が体部最大径を越える。

28は2を小型化した複合口縁壺である。浄水施設2の部材4の柄に挟まって出土した。

29・30は丸底壺である。短い口縁部に球形の体部をもつ。精製品はない。

31～41は高杯である。高杯には複数の形式が存在する。

31は浄水施設2の上流部のほぼ溝底面から出土しており、浄水施設2の構築時期にもっとも近い時期のものとする。鈍い稜を有する杯部に短い中空の脚部が付く。調整は横方向の微細なミガキによって行われる精製品である。

33は稜をもつ深手の杯部をもつ。縦方向のヘラミガキにより仕上げられる。

32・34～36はやや深い椀状の杯部をもち、32では細く長い脚部が付されている。また、34・35のように暗文状のヘラミガキを施すものもある。

36は非常に浅い皿状の杯部を有している。

37は最上層から検出した。最終埋没の時期を示す土器と考える。口径は大きく、杯部は浅い。

38～41は脚部である。いずれも中空であり、スカシの確認できるものは3方向にスカシをもつ。脚柱部内面をヘラケズリしている。41は脚高が低くスカシを持たない。

42・43は器台である。両者とも小型精製品である。26は鼓形器台を模したような形態をとる。

以上、SD2012の土器について概観したが、この遺構出土土器の特徴として、内湾する口縁に肥厚する端部を持つ甕が主体となっている点があげられる。畿内の編年観に照らし合わせれば、若干の時期幅を与えることが可能と考える。

木製品 溝SD2012出土の木製品には形代・刀装具・建築部材・ヘラ状木製品などがある。

44は鳥形である。側面に2か所の円孔を持っていることから羽が取り付けられたものと思われる。目の表現は浅い掘り込みによって行われている。

45は円盤状木製品である。側面を斜めに削り落としているため、実用品である蓋あるいは桶の底とは考えがたい。出土位置も考えると鏡を模した形代である可能性を考えておきたい。径8.5cm・厚さ1.2cmを測る。

46は剣の刀装具の一部と考えられる。形態からみて剣の柄の一部を構成するものであろう。側面に木釘を1か所確認できる。また、側面には木目が縞状に現れており、装飾的な効果も考えて木取りが行われているものとする。

47は杭状の木製品である。長さ24.8cm・幅3.3cm・厚さ1.6cmと小型のものである。

48～51はヘラ状木製品である。48のように頭部と柄が明瞭に分かれるものと、49～51のように頭部と柄の境が不明瞭なもの両者が存在する。握り手先端部分が焦げているものが多い。

52は舟形と考える。全長52.8cm・幅16.6cm・高さ7.7cmを測る。大きさから実用品の槽である可能性も否定しきれないが、作りからみて形代と考えた方が妥当であろう。内側は方形に削り抜かれているが、調整は粗雑であり、手斧の痕跡を残している。

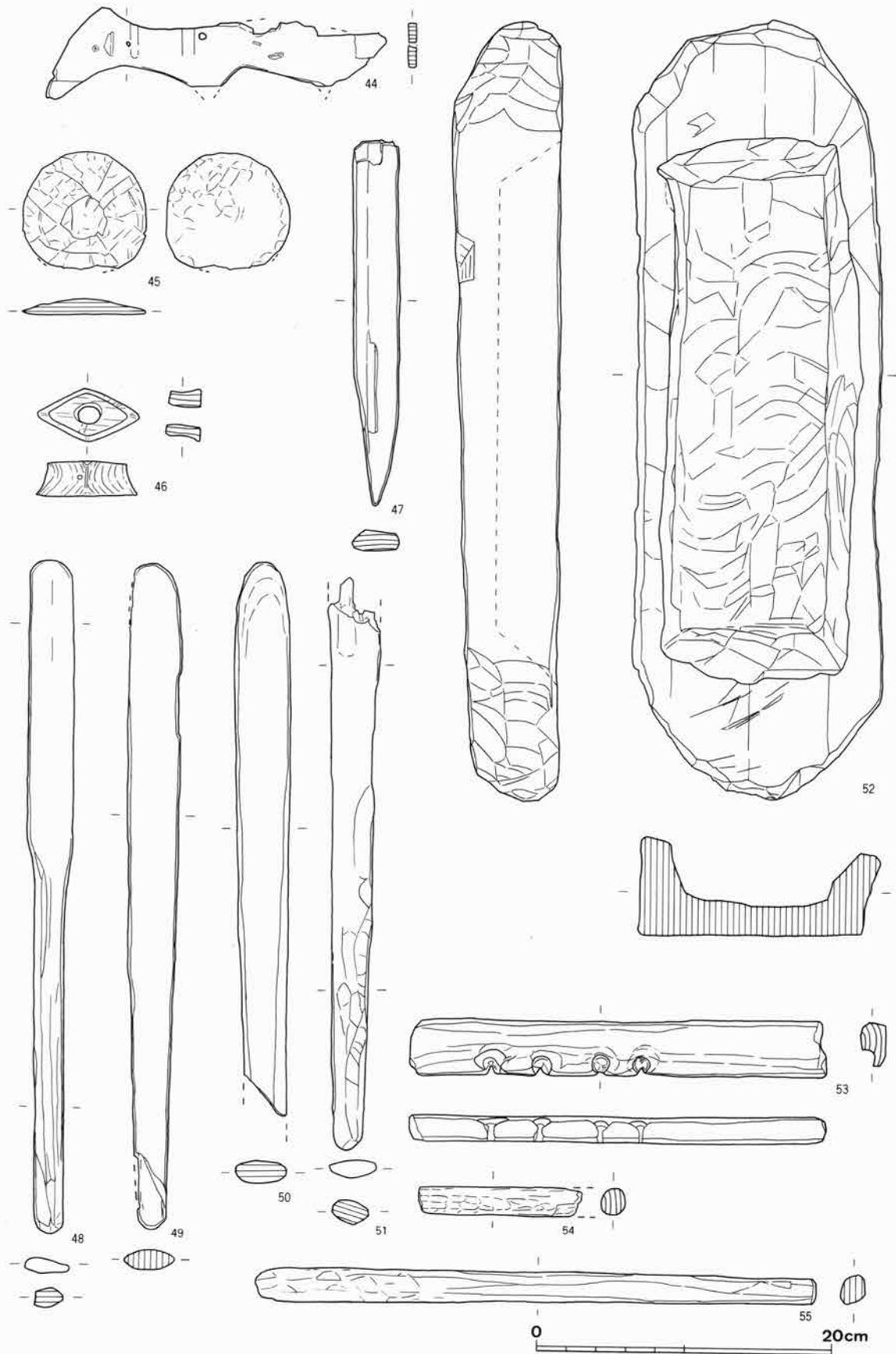
53は火鑕臼である。4か所の火口をもつ。

54・55は棒材である。径約2.5cmを測る。用途は不明である。

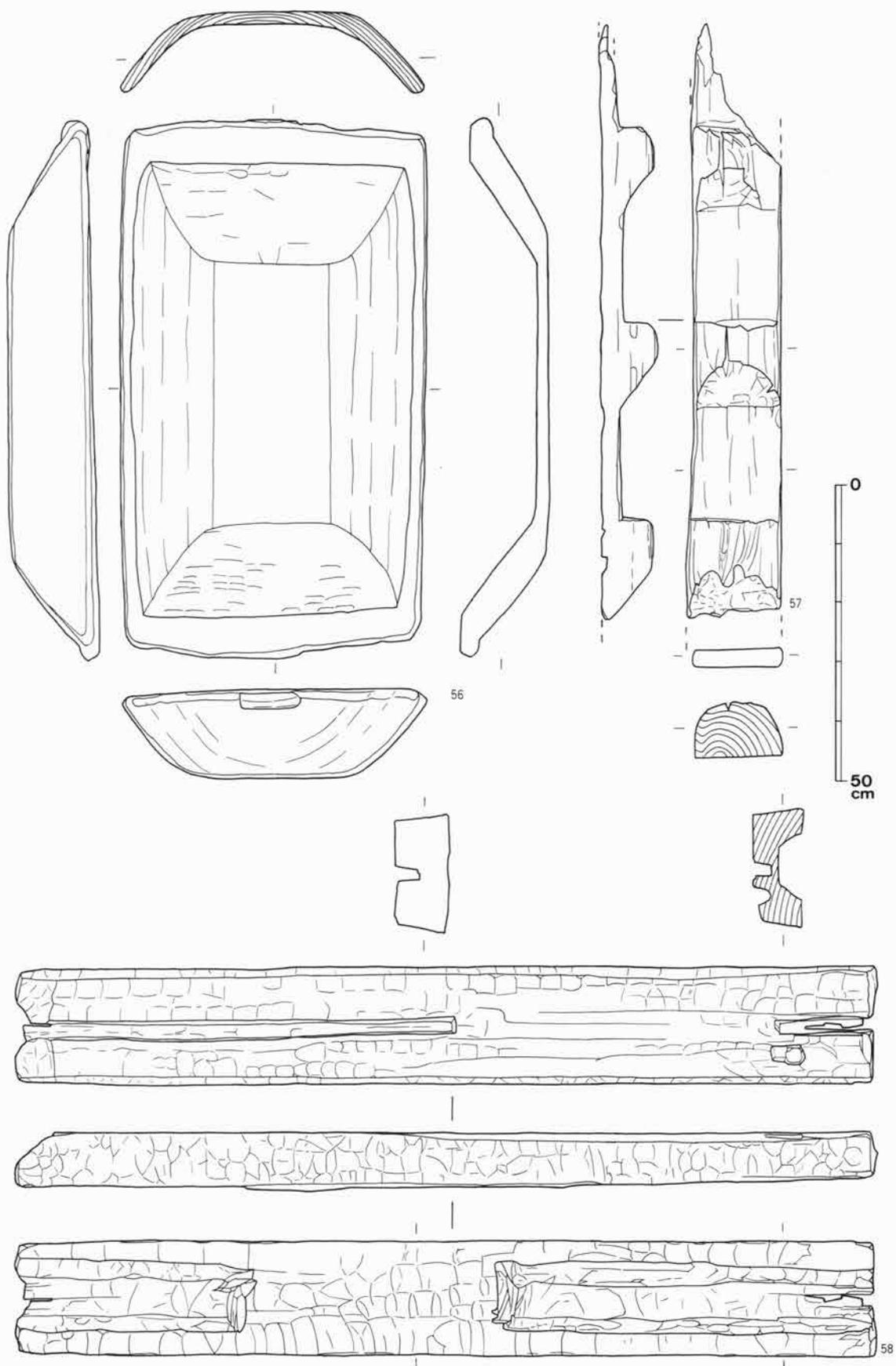
56は大型把手付槽である。長さ91cm・幅51.4cm・高さ14.7cmを測る。半截した丸太材の内側を削り抜くことにより作られている。底面は平らに、両側面は丸みを帯び、直線的に削られた両小口には把手が削り出されている。調整痕は内面にわずかに手斧と考えられる痕跡が認められる。

57は梯子である。半截した丸太材を用いている。3段分遺存している。先端部分は斜めに切り落としたのみで、特に加工はされていない。

58は建築部材と考える。具体的な建物内における位置は不明である。表側に壁板を受けるためと思われる溝2条と柄穴を1か所もつ。溝と溝の間隔は27cmしかないため、敷居あるいは鴨居などの扉施設を構成する部材とは考えがたい。裏面には断面台形の大きな溝が2か所掘られており、他の部材と組み合わせられていたものとする。なお、浄水施設2の一部に転用されていたため、小口部分については転用の際に再加工されている可能性がある。調整は全体に手斧と考えられる



第66図 溝S D2012出土木製品実測図(1)



第67図 溝 S D 2012出土木製品実測図(2)

工具痕が残されている。全長141cm・幅21cm・厚さ10cmを測る。

59～62は、浄水施設2の堰状施設の板材を固定するために使用されていた杭である。いずれも角材を素材として用いている。

59は最も北側に用いられていたもので、全長95cm・幅5.8cm・厚さ2.4cmを測る。

60はほぼ中央に用いられていたもので、全長65.7cm・幅5.4cm・厚さ2.4cmを測る。この杭のみが、有頭棒状の頭部を有している。

61は60の南側に用いられていたもので、全長65cm・幅6.1cm・厚さ2.5cmを測る。

62は最も南側に用いられていたもので、全長80cm・幅5.9cm・厚さ3.4cmを測る。

以上4本の杭は、中央に特殊な形態を用いる点、両端に長い杭を用いている点が特徴といえる。

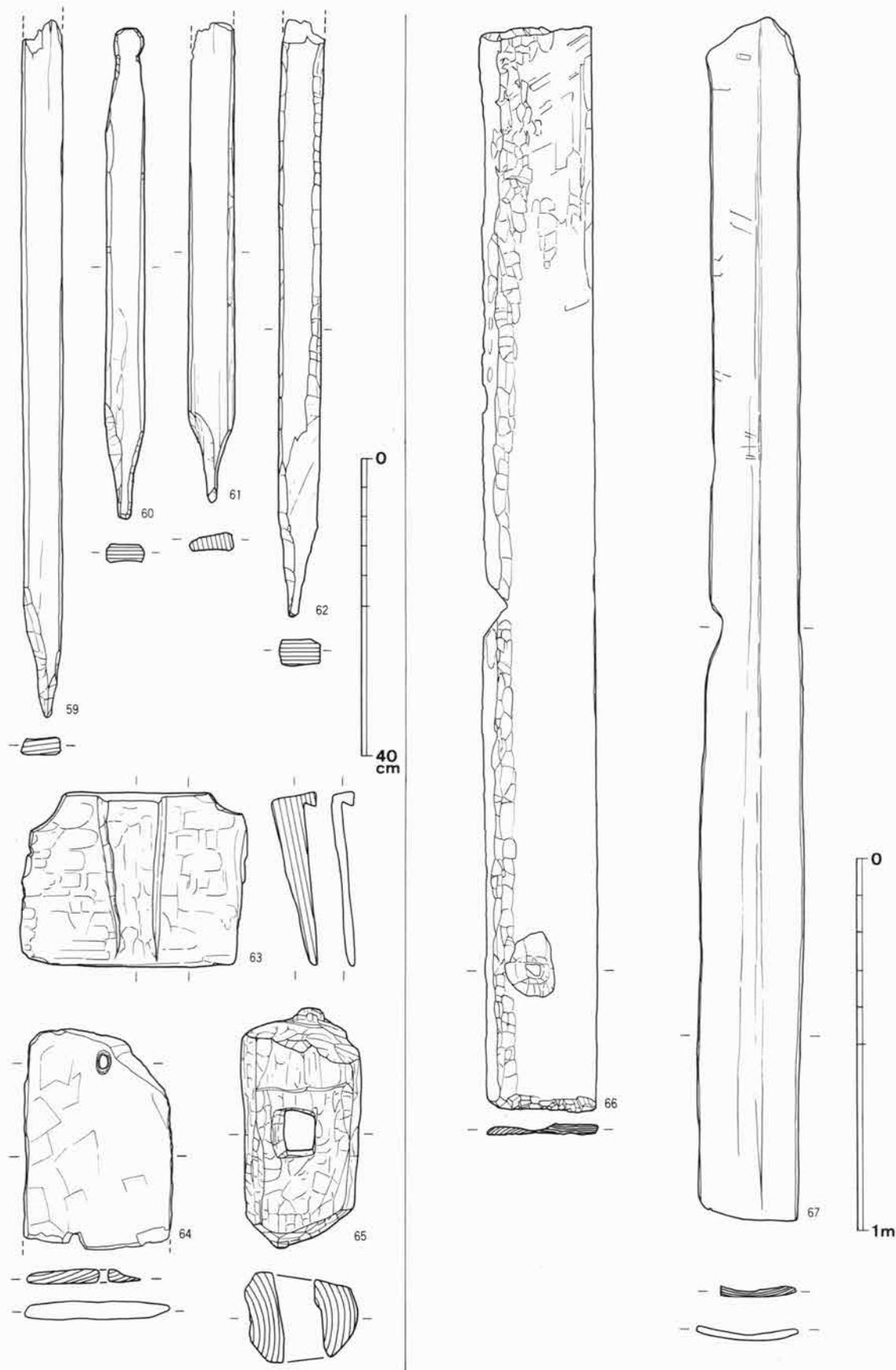
63は浄水施設2の橋状施設の部材2の下に用いられていた鋏未製品である。平鋏の未製品と考えられ、幅30cm・長さ23.5cm・厚さ4cmを測る。柄の装着部位は粗く削り出され、泥除けを装着する装置が突帯状に作り出されている。材質は広葉樹と思われる。

64は溝SD2012の検出面で確認した。1か所の円孔をもつ幅19.5cmを測る板材である。大きさからみて建築部材と思われる。

65は浄水施設の下流側で検出された。1か所の柄穴を側面にもつ。また、柄穴周辺は平坦に加工されている。頂部には柄を削り出している。下端部は粗く削られている。これは、柱状の部材を再利用する際に切断したためと考える。以上の点からこの木製品は、柱材の一部であると考えられる。柄穴は周辺が平坦に仕上げられている点から方形の角材(1片6cm前後)が装着されたものと推定される。

66は浄水施設2の橋状施設2の部材2である。浄水施設2の復原の項でも述べたように、2つの部材に分かれて出土した。全長2.9m・幅0.3m・厚さ2.6cmを測る板材の側辺に、幅16cm・長さ6cmの鋭い三角形の掘り込みを設け、水の流れる口を作り出している。板材は丸太の外側近くを用いており、樹皮の残る部分もある。調整は粗く、手斧の痕跡が明瞭に残されている。一方の小口部分(浄水施設2の水が落下する地点)には丸い播鉢状の窪みがあるが、この部分は明瞭な成形痕が見受けられず、人為的に彫ったものと判断するには至らなかった。むしろ、自然に水が落ちることにより穿たれたものの可能性が高いと考える。この部材は水の流れ口の存在から、転用部材であると判断される。材質は針葉樹と思われる。

67は浄水施設2の堰状施設に使用されていた板材である。全長3.2m・幅0.28m・厚さ2.7cmを測る板材の側辺に、幅15cm・長さ35cmの鈍い三角形の掘り込みを設け、水の流れる口を作り出している。加工痕は全体的に表面の痛みが進行しており、観察しにくいだが、わずかに手斧の刃部の痕跡と考えられるものが観察される。また、板材の一方の小口付近(図の上側)には刀子状の工具で刻んだ方形の線刻が認められる。この線刻は本来柄穴を開ける位置を示した設計線と考えられ、この部材が他の用途(建築部材か)に使用されるところであったものを、加工の途中で急遽浄水施設2の部材として使用することになったものと考えられる。材質は針葉樹と思われる。



第68図 溝 S D 2012出土木製品実測図(3)

①溝S D2011(古)

遺構 溝S D2011(古)は溝S D2011・溝S D2013の下層から検出された、幅1.6m・深さ0.3mを測る浅い素掘り溝である。肩部は溝S D2011と共有する。護岸施設や堰状施設等は検出されなかった。埋土は暗灰色シルト層の単層である。この溝の変遷を整理しておくると、溝S D2011(古)→溝S D2013→溝S D2011の順となり、最終的に溝S D2010(新)と同時期に埋没したと考える。

遺物 出土遺物は全て土師器であり、木製品は認められなかった。上層・下層からの遺物の混入が著しく、安定した土器資料とは言い難い。

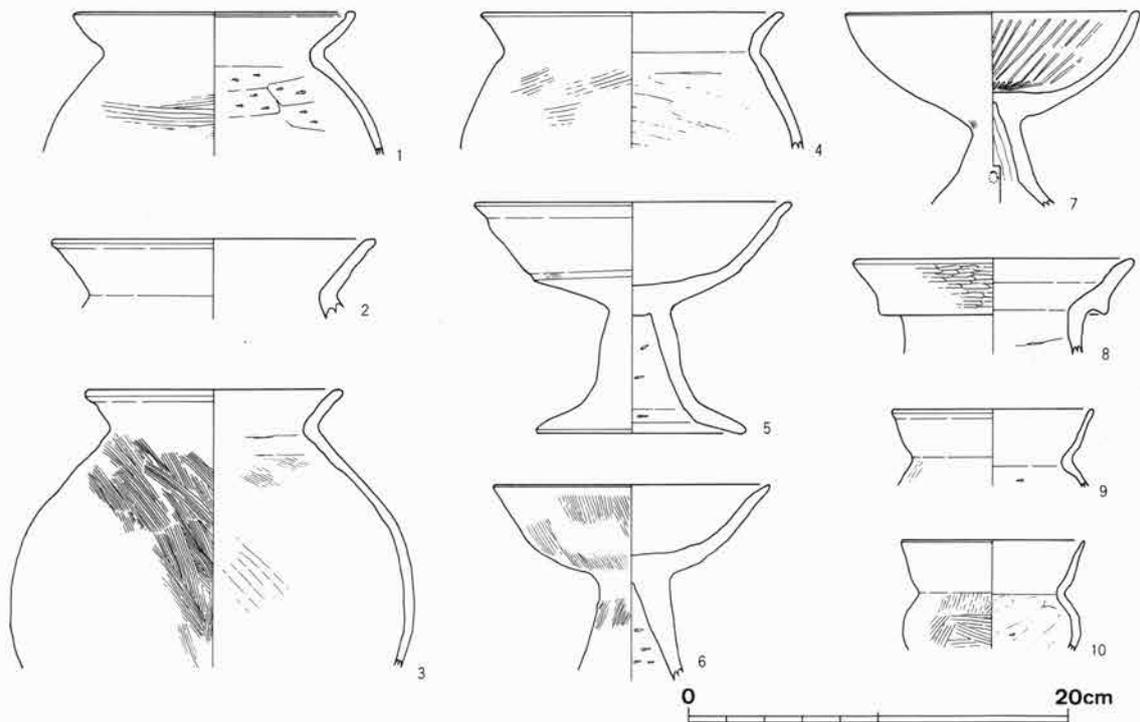
1～4は甕である。1は口縁端部内面を肥厚させるいわゆる布留式甕である。肩部に横方向のハケがめぐる。2は口縁をわずかに外反させる。3・4は「く」の字状口縁をもつものであり、下層包含層の混入品であると判断される。

5～7は高杯である。5は有稜系の杯部をもち、脚部は短脚気味である。6・7は内湾気味に立ち上がる杯部をもつ。7は内面に暗文状のヘラミガキを施す。6は長脚とみられるが、7は短脚傾向を示す。スカシ穴を脚部にもつものはない。

8～9は広口壺である。8は口縁部を上下に拡張するものであり、下層からの混入品と判断する。9は口縁はやや内湾気味に立ち上がり、器壁は薄く仕上げられる精製品である。

10は小形丸底壺である。口縁は長くやや内湾気味に立ち上がる。体部最大径と口径はほぼ一致する。体部外面はハケ、内面はヘラケズリにより調整される。

胎土に注目すると、3・4は高温石英を含むものの、その他のものには含まれない。遺物相からみて溝S D2012と同時期に機能していた可能性がある。



第69図 溝S D2011(古)出土土器実測図

⑫土坑 S K 2003

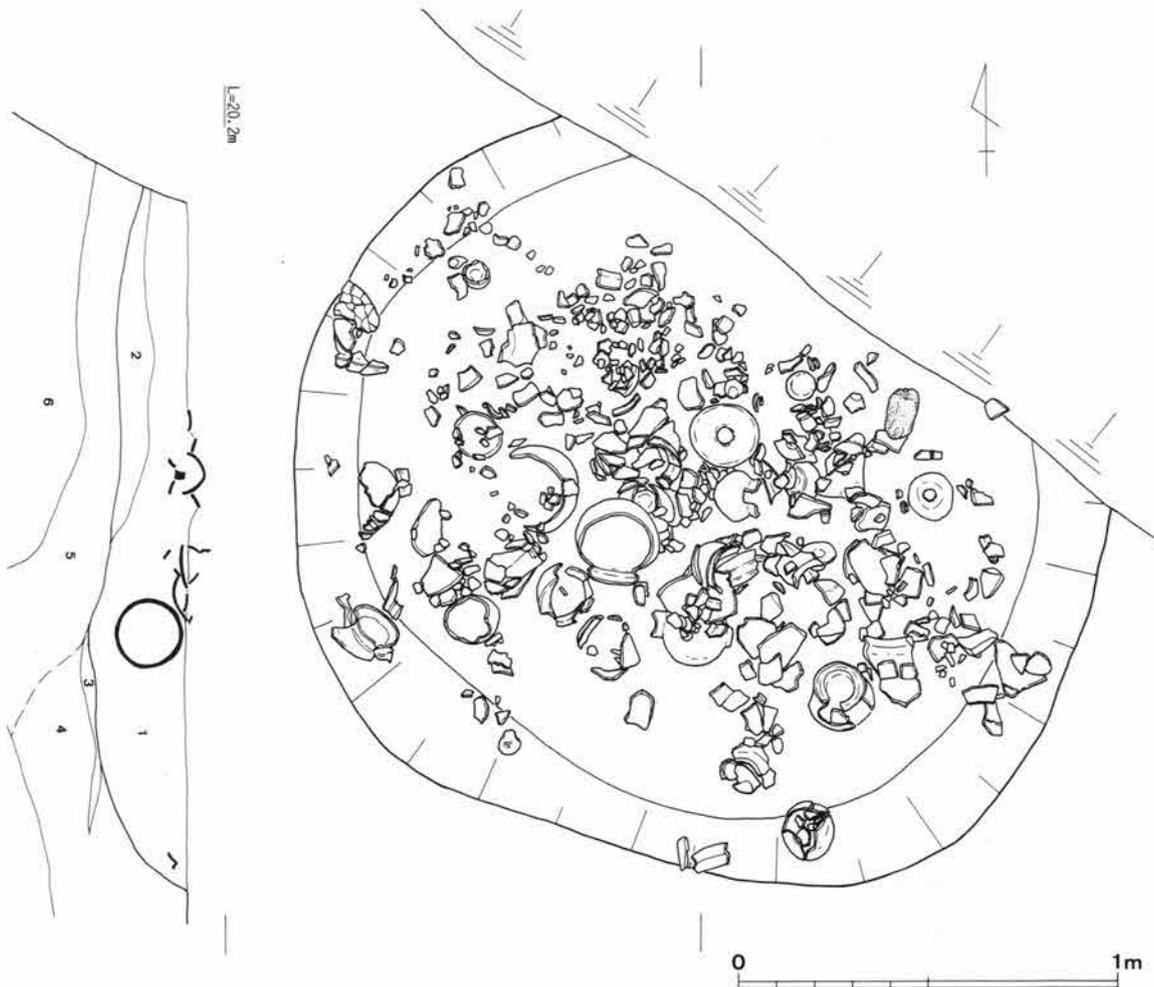
遺構 S D 2012により北半部分を削平されているため、全体の状況は不明であるが、復原径約2.2m・深さ0.3mを測る不整形の土坑である。底面は水平ではなくわずかに掘り鉢状を呈している。また、S D 2016埋没後に掘削されていることは明らかであるが、S D 2015との前後関係は切り合い関係がなく不明である。

埋土は大きく2層に大別され、上層には暗黄灰色中・粗砂(1層)が、底面には暗青灰色粘質土(2層)が薄く堆積しており、一時滞水していたものと考え、素掘り井戸である可能性がある。なお、3～6層は下層の溝S D 2016の埋土である。また、最初に検出した段階で常に湧水のあったことを付記しておく。

遺物は多量の土器がまとまって出土した。完形個体やミニチュア土器が含まれており、土坑廃絶時の祭祀に伴うと考える。以上の点から一括性の高い遺物群として取り扱うことができる。

遺物 土坑S K 2003出土遺物は全て土師器である。器種構成は甕・壺・高杯・器台・ミニチュア土器など多様である。なお、出土遺物は下層の溝S D 2016の混入遺物を除くため、特殊なものを除いて、口縁の25%以上残存している個体のみ図示している。

壺は個体数が少なく、また、口縁の形状の判明するものもほとんどない。1は「く」の字状口



第70図 S K 2003遺物出土状況実測図

縁を持つ甕と同形態であるが、体部外面が磨かれていること、胎土が精良である点から壺とした。体部最大径をほぼ中位にもち、底部はやや尖り気味である。2は突出底をもつ広口壺である。3は複合口縁を呈する壺である。4・5は大型壺の底部であり、いずれも突出底をもつ。

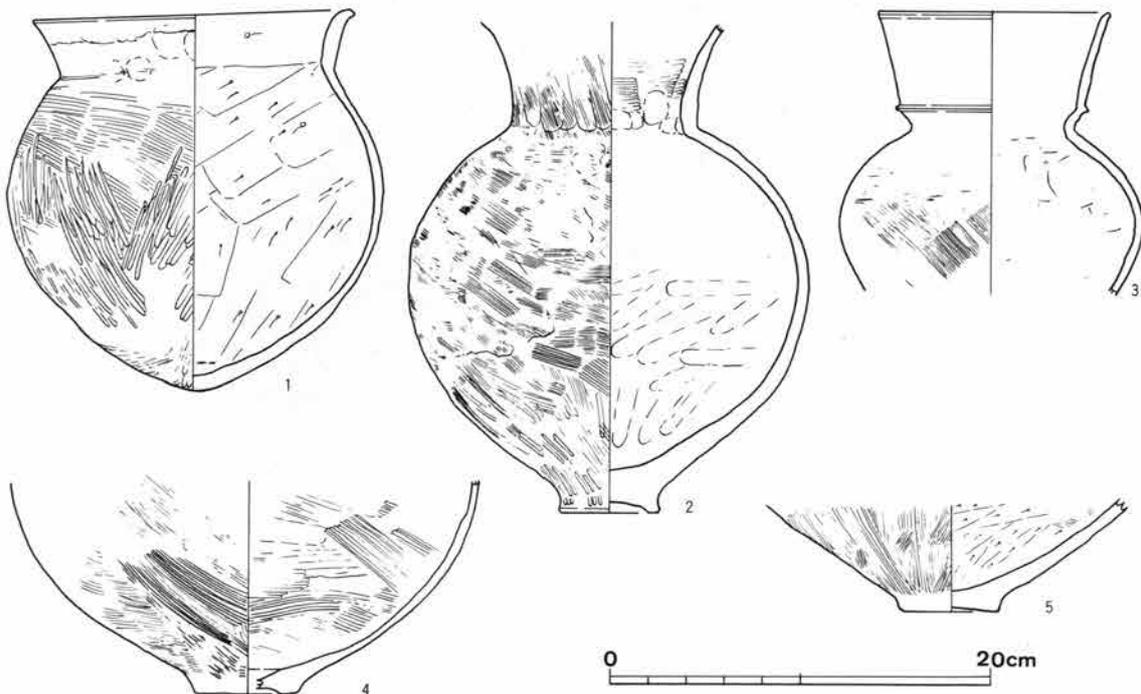
甕は大きく複合口縁を持つものと、「く」の字状口縁をもつものに大別される。複合口縁をもつ甕はさらに、擬口縁部が突出する稜をもつものと、擬口縁と口縁下端面が一体化したものの2者に細分することができる。

6～15はいずれも、口縁下端面に突出した稜をもつもので、いわゆる山陰系甕と呼称されるものである。口縁端部は外方に若干突出させるものと外反させたまま納めるものが存在する。6・7は平底に近い扁平なプロポーションを呈する。体部の形状の判明するものとして、12・14のように倒卵形を呈すると考えられる個体が存在する。外面の調整に体部上半に横方向のハケを施すものが顕著である。また、13・14のように肩部に櫛描波状文を施す個体も存在する。

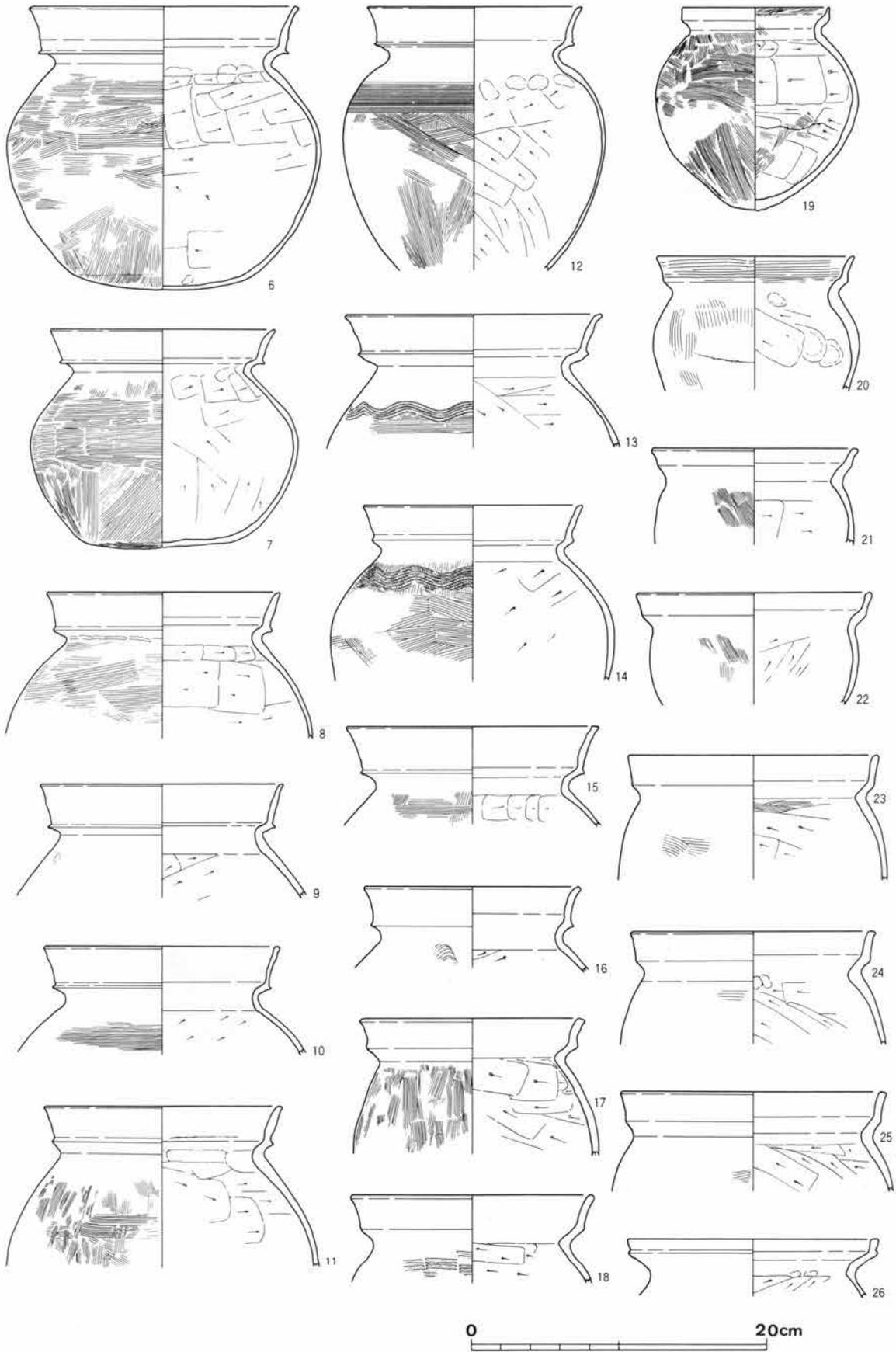
16～25は明瞭な稜を作り出さず、口縁外端面と擬口縁端面が一体となっているものである。体部上半は縦方向のハケにより調整されるものが大部分であり、6～15とは系譜を異にするものであろう。16は肩部分に櫛描波状文による加飾をもつ。19は口縁外面にハケによる擬凹線状の施文を施している。

26・27は鈍い稜をもつものの、口縁の立ち上がりが短く数量的にも少ない。26は口縁上半部がやや内湾気味に短く立ち上がり、27は外方に開く短い口縁をもつ。

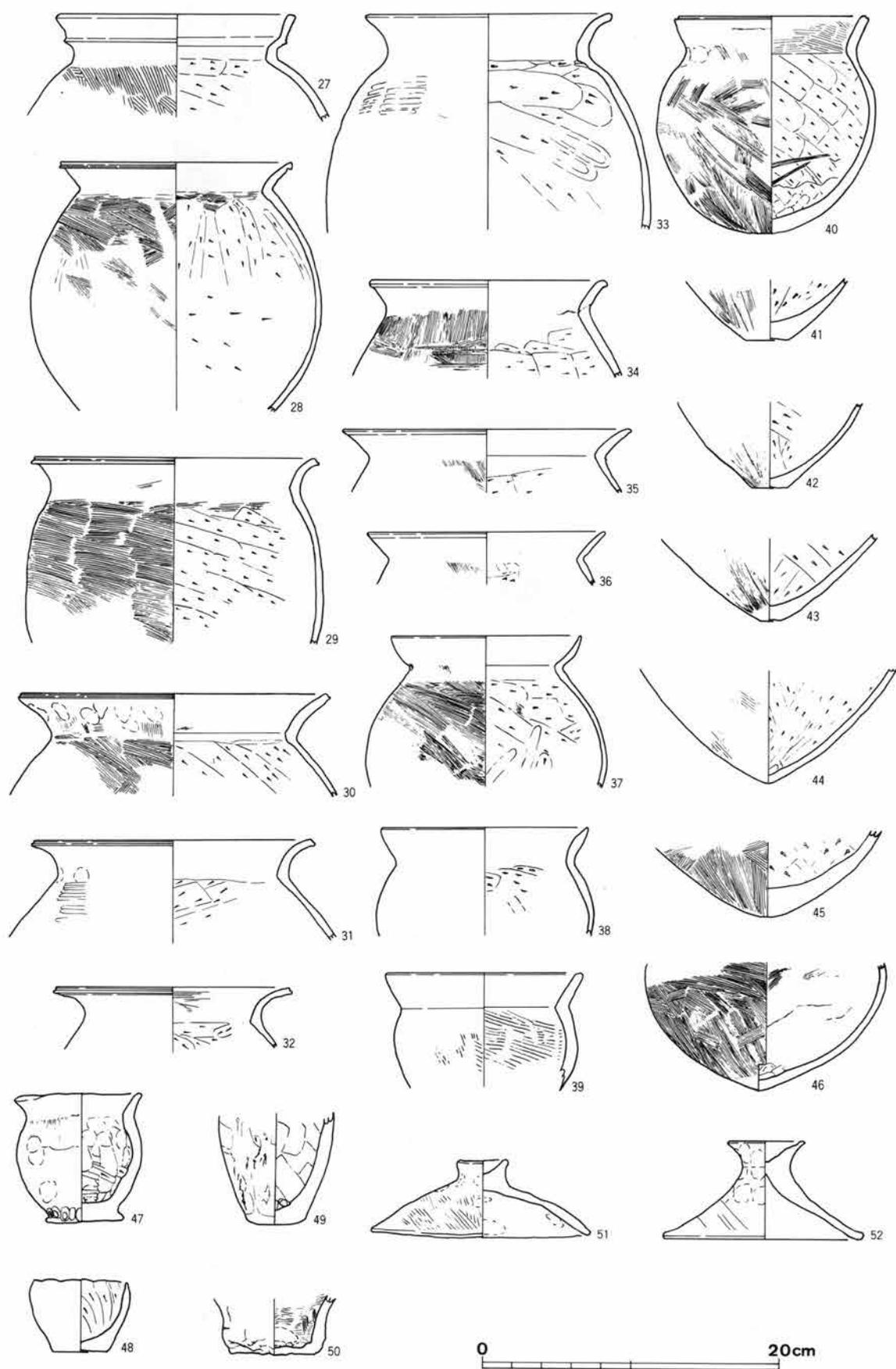
28～39は「く」の字状口縁を有する甕である。体部外面の調整は縦もしくは斜め方向のハケによるものが圧倒的に多いが、中には少数ではあるが、1次調整にタタキの技法を用いる個体も見



第71図 S K 2003出土遺物実測図(1)



第72図 S K 2003出土遺物実測図(2)



第73図 S K 2003出土遺物実測図(3)

受けられる。タタキを外面に残す個体は存在しない。

28～32は「く」の字に外反する口縁をもち、端部が面をなす個体である。端面は口縁端部を内外面とも摘みながらなでるためか、擬凹線状の凹線が1条めぐる。プロポーションには28のように球形に近い個体の他、29のように長胴気味になる個体が存在する。外面調整のハケは斜め方向のものが顕著である。また、31のようにタタキの後なでることにより仕上げる個体も存在する。

33・34は、端部を丸く収めている。32では外面の調整に、タタキの後ナデを施す技法を用いている。

35・36は直線的に外方にのびる口縁を薄くシャープに作り出す。

37は器壁・口縁とも薄い。口縁は内湾気味であり、端部はシャープに作る。

38～40は小型の甕と考えられ、口縁の作りはやや厚く直線的に外方にのびる。体部と口縁部の境の屈曲はやや甘い。40は丸底を呈する。

41～46には底部を図示している。わずかに平底傾向を示す41～43のほか、尖り底の44、丸底傾向の45・46などが認められる。

ミニチュア土器はいずれも手づくねである。47・49は甕のミニチュア、48は鉢のミニチュアと考えられる。

蓋は数が非常に少ない。51は扁平なプロポーションを、52はやや高いプロポーションを呈している。つまみはともに貧弱である。

鉢は非常に多い器種である、特に有孔鉢になるものが大部分と判断される。また、個体ごとのプロポーションの差が大きく非常にバラエティーに富んだ構成となっている。

53は外方に大きく広がる口縁をもち、平底である。煮沸具として使用された痕跡がある。

54は口縁部をわずかに外方につまみ出す。

55～57は体部最大径が口径を上回り、やや扁平なプロポーションを呈する。

58は大型の鉢であり、やや内湾気味の体部をもつ。底部は平底である。

59は大型の有孔鉢である。底部は尖り底を呈する。

60～62は砲弾状を呈する有孔鉢であり、体部最大径が口径より大きい。

63は直線的に外方にのびる体部をもつ。

64は杯状の体部をもつ。穿孔は焼成後の可能性がある。

65～67は台付鉢である。65は複合口縁をもち、体部は球形に近い。

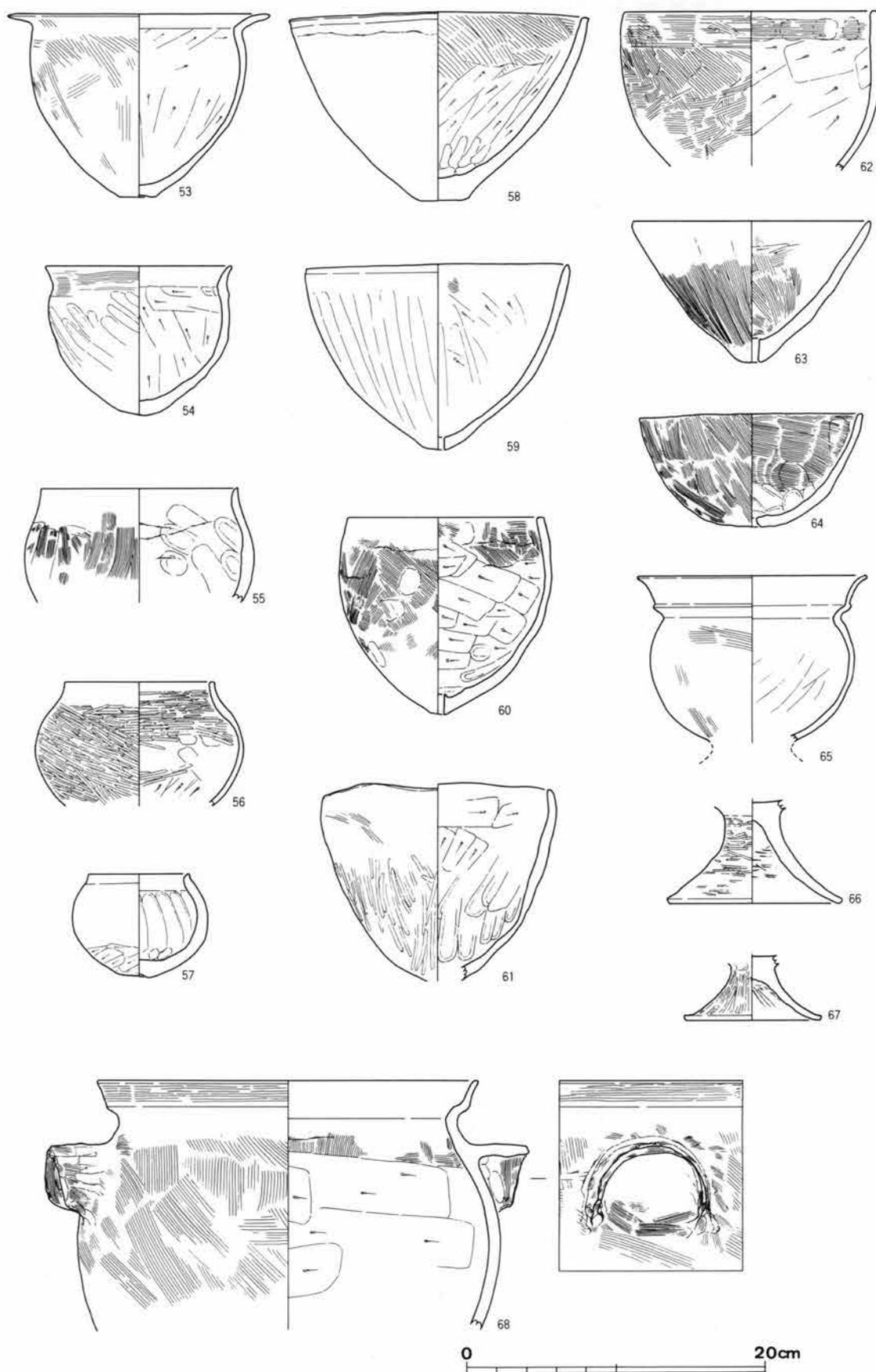
68は大型把手付鉢である。複合口縁の外面にはハケによる擬凹線状の施文がなされている。把手部分は粘土板を半円形に折り曲げたものを接合している。

器台は量的に多い器種である。

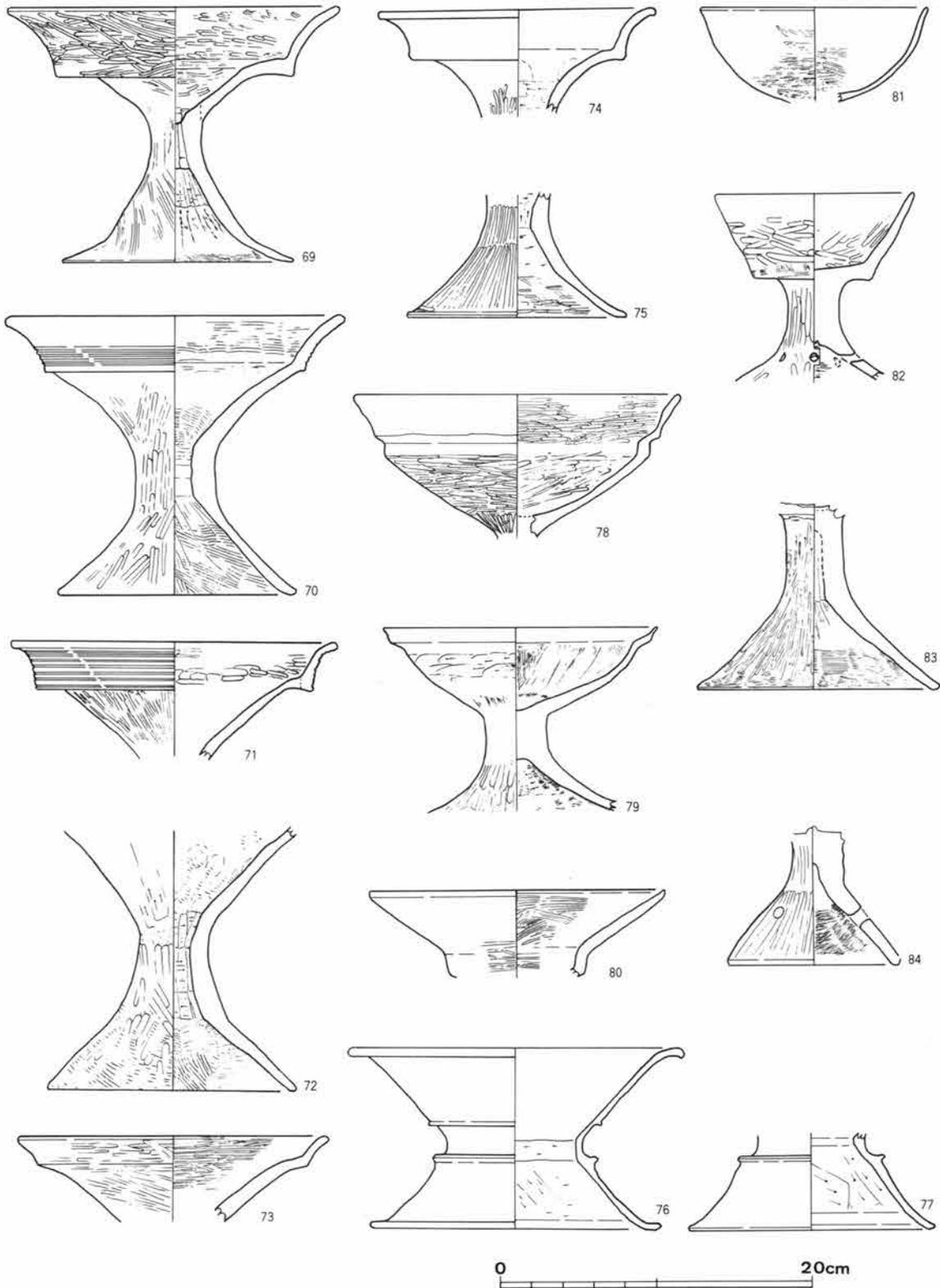
69～72・74は複合口縁をもつ器台で、口縁外面を広く作り出し、70・71は雑な擬凹線を持つ。

76・77は鼓形器台である。両者ともシャープな稜をもち稜の間隔は広くとられている。

73は弥生時代的要素の強い器台であるが、口縁下方への拡張はなされず、また、口縁外面は無文である。



第74図 S K 2003出土遺物実測図(4)



第75図 S K 2003出土遺物実測図(5)

第10表 土坑S K2003出土土器観察表(1)

番号	器種	法量			調整		胎土					色調	残存率	備考
		口径 (cm)	器高 (cm)	最大径 (cm)	内面	外面	高温 石英	石英	長石	雲母	他			
1	壺	16.3	19.7	19.6	ケズリ	ハケ後 ミガキ	○		○			橙褐	85	
2	壺			21.0	ナデ	ハケ	○		○			黄褐	95	底部ケズリ
3	壺	11.8			ケズリ	ハケ		○	○			黄褐	50	
4	壺				ハケ	ハケ	○		○			黄褐	50	
5	壺				ハケ後 ケズリ	ハケ	○	○	○			灰褐	100	底部ケズリ
6	甕	17.8	19.3	21.3	ケズリ 後ナデ	ハケ	○	○	○			橙褐	75	煤付着
7	甕	15.2	15.0	18.1	ケズリ	ハケ	○	○	○			黄褐	90	煤付着
8	甕	15.6			ケズリ	ハケ	○		○		赤色 砂粒	灰褐	50	煤付着
9	甕	16.4			ケズリ	ハケ後 ナデ		○	○		赤色 砂粒	灰褐	35	
10	甕	17.6			ケズリ	ハケ	○		○			灰白	23	煤付着
11	甕	15.6			ケズリ	ハケ		○	○		赤色 砂粒	黄褐	100	
12	甕	14.4		17.8	ケズリ	ハケ	○	○	○		赤色 砂粒	橙褐	60	煤付着
13	甕	17.2			ケズリ	ハケ		○	○			黄褐	20	櫛描波状文
14	甕	14.6		19.2	ケズリ	ハケ		○	○			黄褐	30	煤付着櫛描波状文
15	甕	16.1			ケズリ	ハケ		○	○			灰褐	50	煤付着
16	甕	14.2			ケズリ	ハケ後 ナデ	○		○			灰褐	30	使用痕櫛描波状文
17	甕	15.1			ケズリ	ハケ		○	○			橙褐	100	使用痕
18	甕	16.4			ケズリ	タタキ 後ナデ	○		○			橙褐	70	使用痕
19	甕	9.8	13.8	13.8	ケズリ 後ハケ	ハケ	○		○			黄褐	95	煤付着
20	甕	13.2		13.9	ケズリ	ハケ	○	○	○			橙褐	80	使用痕
21	甕	13.6		13.5	ケズリ	ハケ		○	○			橙褐	20	煤付着
22	甕	15.6		14.2	ケズリ	ハケ	○	○	○			黄褐	50	使用痕
23	甕	16.6			ハケ後 ケズリ	ハケ後 ナデ	○	○	○			黄褐	20	使用痕
24	甕	16.0			ケズリ	ハケ後 ナデ	○	○	○			黄褐	60	
25	甕	17.4			ケズリ	ハケ後 ナデ	○		○			黄褐	25	

第11表 土坑S K2003出土土器観察表(2)

番号	器種	法量			調整		胎土					色調	残存率	備考
		口径 (cm)	器高 (cm)	最大径 (cm)	内面	外面	高温 石英	石英	長石	雲母	他			
26	甕	16.7			ケズリ	ナデ	○		○			黄褐	30	
27	甕	15.4			ケズリ	ハケ	○	○	○			灰褐	100	
28	甕	15.8		19.8	ハケ後 ケズリ	ハケ	○	○	○			橙褐	60	煤付着
29	甕	18.7		29.0	ハケ後 ケズリ	ハケ	○	○	○			黄褐	27	
30	甕	20.3			ケズリ	ハケ	○	○	○			灰褐	23	
31	甕	18.6			ケズリ	タタキ 後ナデ	○	○	○			黄褐	30	
32	甕	15.6			ケズリ	ナデ	○		○			黄褐	25	
33	甕	16.0		21.8	ケズリ	タタキ 後ナデ	○		○			黄褐	100	
34	甕	15.6			ケズリ	ハケ	○		○			黄褐	25	
35	甕	19.0			ケズリ	ハケ	○		○			灰褐	25	
36	甕	15.8			ケズリ	ハケ	○	○	○			黄褐	60	煤付着
37	甕	12.8		16.2	ケズリ	ハケ	○		○			灰褐	40	
38	甕	13.8		14.6	ケズリ		○		○			灰褐	25	煤付着
39	甕	13.0		12.2	ハケ	ハケ後 ナデ	○		○			黄褐	100	使用痕
40	甕	12.4	14.6	14.7	ケズリ	ハケ	○		○			黄褐	90	煤付着
41	甕				ケズリ	ハケ	○	○	○			灰褐	100	使用痕底 部ケズリ
42	甕				ケズリ	ハケ	○		○			灰褐	70	底部ケズ リ
43	甕				ケズリ	ハケ		○	○			黄褐	100	煤付着底 部ケズリ
44	甕				ケズリ 指オサ エ	ハケ	○		○			灰褐	60	
45	甕				ケズリ	ハケ	○		○			灰褐	100	使用痕
46	甕			16.2	ハケ指 オサエ	ハケ	○		○			黄褐	60	煤付着
47	手づくね (甕)	8.2	8.6	8.4	ナデ	ハケ後 ナデ		○	○			黄褐	98	
48	手づくね (鉢)	6.2	4.9	6.8	ナデ	ナデ		○	○			灰褐	70	
49	手づくね (鉢)	7.0?	7.8?	7.8	ケズリ 後ナデ	ナデ	○		○			黄褐	80	
50	手づくね				ハケ	ハケ		○				灰褐	40	
51	蓋	14.5	5.4		ケズリ 後ナデ	ハケ後 ナデ	○		○			灰褐	100	
52	蓋	13.0	6.8		ナデ	ナデ	○		○			灰褐	99	
53	鉢	17.0	12.3	14.5	ケズリ 後ナデ	ハケ後 ナデ	○		○			灰褐	97	使用痕

第12表 土坑 S K 2003出土土器観察表(3)

番号	器種	法量			調整		胎土					色調	残存率	備考
		口径 (cm)	器高 (cm)	最大径 (cm)	内面	外面	高温 石英	石英	長石	雲母	他			
54	鉢	12.0	10.0	12.0	ケズリ 後ナデ	ナデ		○	○			黄褐	97	
55	鉢	13.3		15.4	ナデ	ハケ	○		○		赤色 砂粒	黄褐	30	
56	鉢	10.0		14.0	ケズリ 後ナデ 後ミガキ	ミガキ	○		○			黄褐	30	
57	鉢	6.6	7.0	9.1	ナデ	ケズリ 後ナデ	○	○	○			黄褐	100	
58	鉢	19.4	12.6		ハケ後 ケズリ 指オサ エ	ケズリ 後ナデ	○	○	○			黄褐	100	
59	有孔鉢	17.5	12.4		ハケ後 ケズリ 後ナデ	ナデ	○	○	○			灰褐	99	
60	有孔鉢	12.5	13.2	14.2	ハケ後 ケズリ	ハケ	○		○		チャ ー ト?	黄褐	90	
61	有孔鉢	15.0			ハケ後 ミガキ	ケズリ 後ナデ	○		○			橙褐	93	
62	鉢	15.5			ケズリ	ハケ	○		○			黄褐	100	
63	有孔鉢	15.7	9.6		ケズリ 後ハケ	ハケ	○		○			黄褐	25	
64	有孔鉢	14.5	7.7		ハケ ナデ	ハケ	○		○			黄褐	98	焼成後穿 孔
65	台付鉢	15.1		13.6	ケズリ 後ナデ	ハケ	○	○	○			橙褐	25	摩耗
66	台付鉢				ナデ	ミガキ	○		○			灰褐	100	
67	台付鉢				ミガキ	ミガキ	○		○			黄褐	100	
68	把手付鉢	25.0		28.3	ハケ後 ケズリ	ハケ	○		○			橙褐	40	煤付着
69	器台	21.0	18.0		ハケ ナデ	ミガキ		○	○			橙褐	80	
70	器台	21.0	18.0		ハケ	ミガキ		○	○			橙褐	80	擬凹線 5
71	器台	20.5			ミガキ	ミガキ	○		○			橙褐	25	擬凹線 7
72	器台				ハケ後 ナデ	ハケ後 ミガキ	○	○	○			橙褐	70	
73	器台	19.6			ミガキ	ミガキ		○	○			灰褐	20	
74	器台	17.3			ケズリ	ミガキ	○		○			黄褐	80	
75	器台				ハケ後 ミガキ	ミガキ	○		○			灰褐	100	
76	鼓形器台	20.1	11.6		ナデ ケズリ	ナデ		○	○	○		灰褐	70	底径18.1

第13表 土坑S K2003出土土器観察表(4)

番号	器種	法量			調整		胎土					色調	残存率	備考
		口径 (cm)	器高 (cm)	最大径 (cm)	内面	外面	高温 石英	石英	長石	雲母	他			
77	鼓形器台				ケズリ	ナデ		○	○			灰褐	20	底径15.3
78	高杯	20.6			ミガキ	ミガキ	○		○			黄褐	30	
79	高杯	17.4			ハケ	ケズリ 後ハケ ミガキ	○		○		チャ ー ト?	灰褐	80	
80	高杯	19.0			ハケ後 ミガキ	ミガキ		○	○			橙褐	10	
81	高杯	14.4			ミガキ	ミガキ	○		○			灰褐	20	
82	高杯	12.7			ミガキ	ハケ後 ミガキ	○		○			黄褐	70	スカシ4
83	高杯				ハケ	ハケ後 ミガキ	○		○			黄褐	100	
84	高杯				ハケ	ミガキ		○	○			灰褐	100	スカシ3

78・79は複合口縁を有する高杯である。78は口縁外面を広く作り出すのに対し、79はわずかにつまみ上げることにより複合口縁としている。

80はいわゆる庄内系高杯とされる有段口縁の高杯である。口縁端面を上方に摘み上げている。

81は椀状の杯をもつ。

82は直線的な口縁をもち、脚柱部は短く中実である。

以上、土坑S K2003出土土器の概要を記した。個体数が多く図示できなかつたものも多い。この他に細片のため図示していないが低脚杯も出土している。

この土器群で特徴的なのは、器台以外からの擬凹線の衰退、あるいは他地域の影響下で成立したと考えられる器台・高杯など器形に多様性が認められる点である。その主要な地域は北陸(若狭)・山陰であり、両地域に挟まれた丹後地域の性格をよく表しているといえることができる。

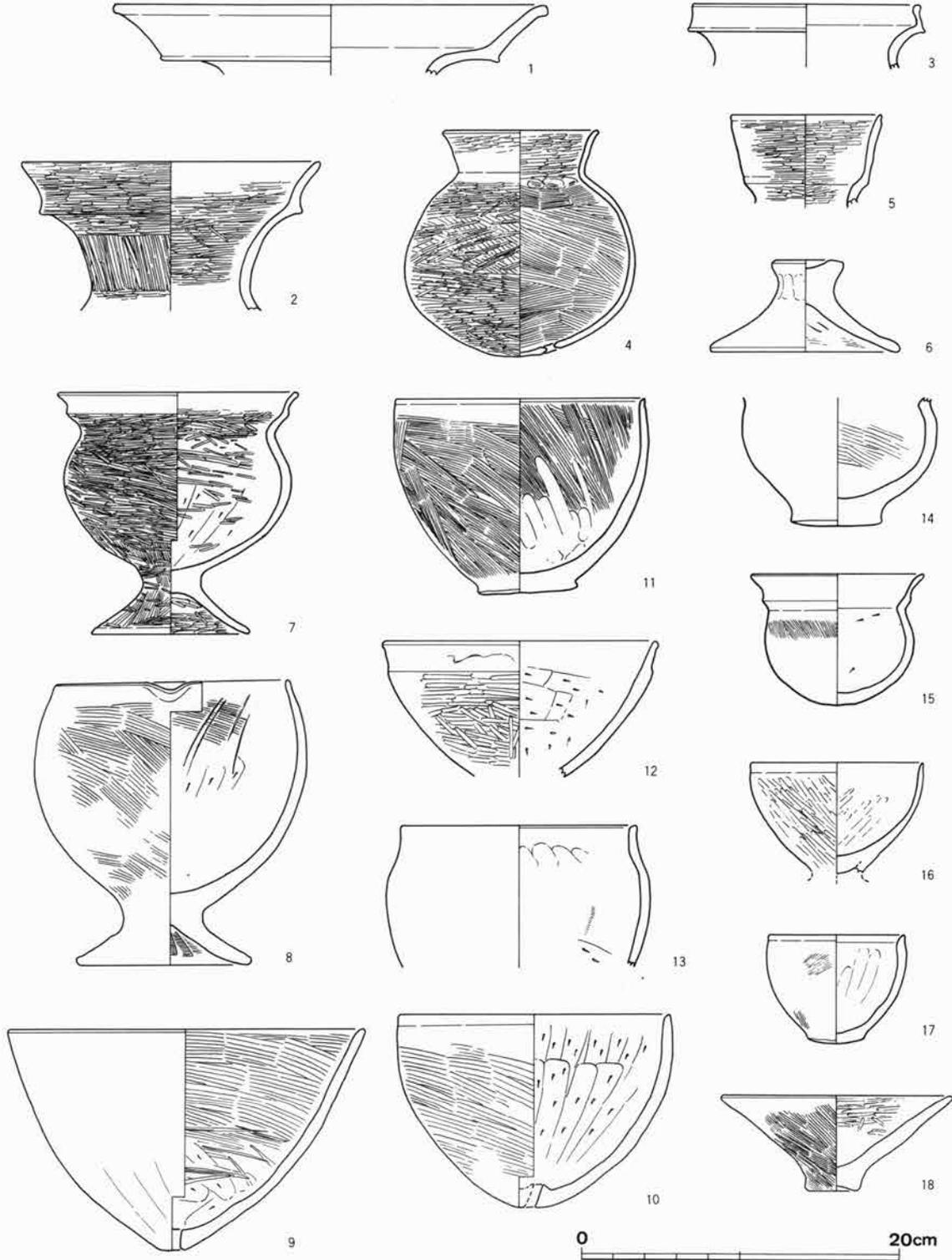
甕類ではシャープな稜を持つ複合口縁甕、擬口縁と口縁の一体化した複合口縁甕、「く」の字状口縁を呈する甕の比率がほぼ同率であり、短い口縁部をもつ複合口縁甕はきわめて少ない。

胎土では自形の高温石英を多量に胎土に含むものに注目したい。^(注4)高温石英は網野町小浜以西の海岸沿いで多くみられ、竹野川流域あるいは野田川流域にはみられない鉱石である。河川ごとの産出地については分布調査を行っていないため不明であるが、福田川(浅茂川)河口域でも採集することができる。以上の点からこの胎土をもつものを、浅後谷南遺跡周辺で採集された砂礫を含むものと考え、当遺跡周辺での生産が行われた在地産の土器と考えたい。

高温石英を胎土に含む土器は非常に多く、土坑出土土器全体の7割程度に達している。他地域の様相を呈する土器も高温石英を含む胎土によって作られていることは、さまざまな器種がこの地で生産されたことを物語っているといえよう。

⑬土器溜まりN

遺構 溝SD2012北肩部で検出された東西1m・南北0.8mの範囲に及ぶ土器集積である。溝SD2012のベースとなる黒色シルト層上に形成されていた。掘形などは不明瞭であり、遺構として認識するには至らなかったが、完形個体・大破片を多数含んでいることから、一括投棄されたものと判断する。他の遺構との関係は、溝SD2012より古いことは明らかであるが、土坑SK

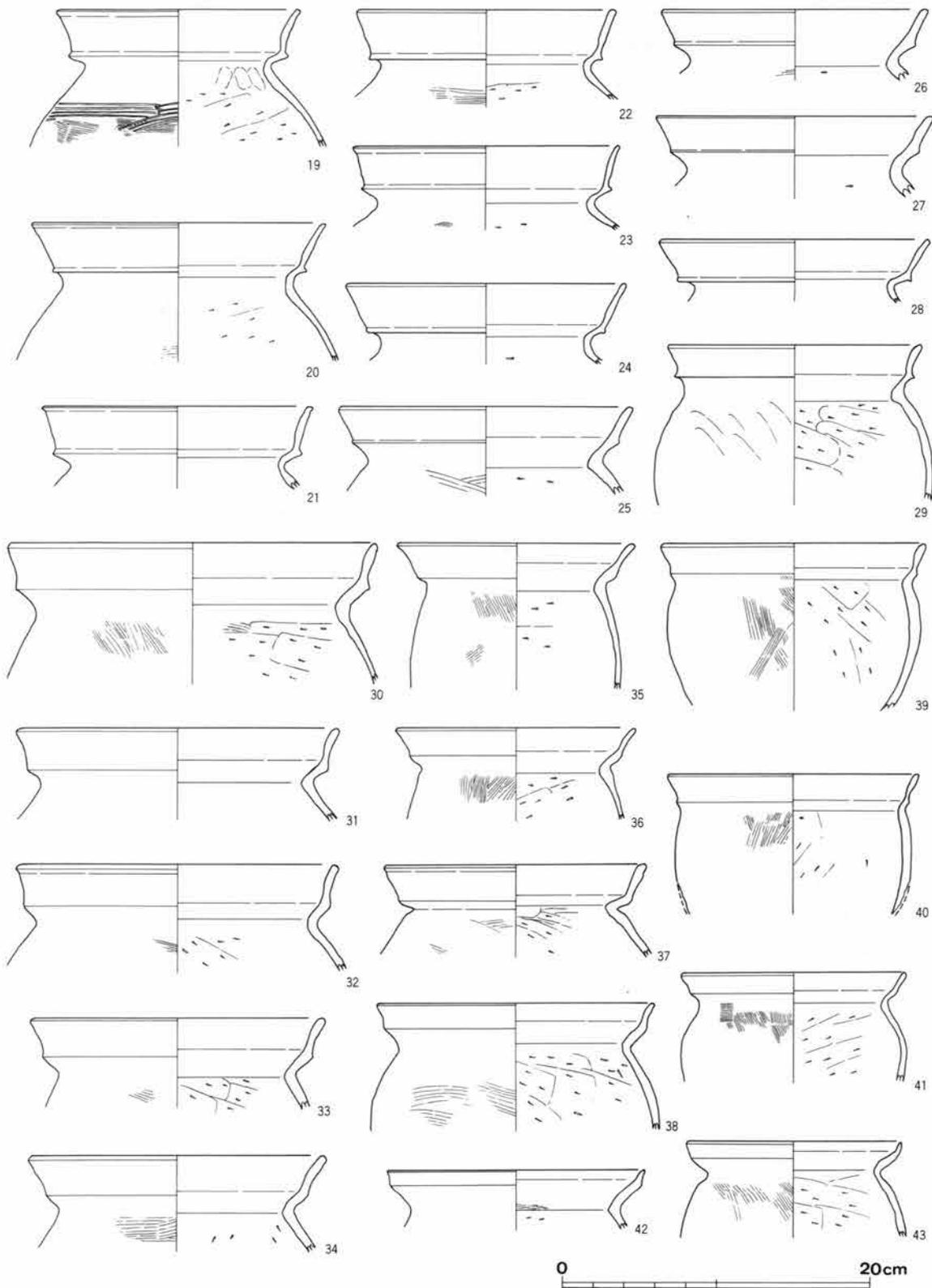


第76図 土器溜まりN出土土器実測図(1)

2003・溝SDF2017との関係については不明である。

遺物 出土遺物は全て土師器である。器種には壺・鉢・蓋・高杯・器台が認められる。

1～5は壺である。壺は個体数が非常に少なく、また、個体ごとのバリエーションが多い。1



第77図 土器溜まりN出土土器実測図(2)

～3は複合口縁壺である。1は大きく外反する口縁をもち、口縁下端面は突出する稜を形成する。2は長い頸部をもち、擬口縁と口縁が一体化している。3は内傾する口縁をもつ。4は広口壺である。体部はやや下膨れであり、口縁は直立気味に立ち上がり端部はわずかに外反する。底部には焼成後の穿孔が認められる。5は直口壺である。長い口縁部をもち、口縁下端面は稜をなす。

6は蓋である。口径11.4cmを測る小形品であり、器高と口径がほぼ一致する。

7～18は鉢である。鉢は個体数も多く、また、バリエーションに富む器種である。法量からみると、7～13の大形品と、14～18の小形品に分かれる。

7は複合口縁をもつ台付鉢である。口縁の立ち上がりは短く、体部のほぼ中位に最大径をもつ。脚部は「ハ」の字に広がり脚高は低い。内外面とも精緻なヘラミガキにより調整される。

8は片口直口口縁をもつ台付鉢である。口径は体部最大径よりも小さい。脚部は「ハ」の字に広がり脚高は低い。内外面はハケにより調整される。

9・10は有孔鉢である。9は底部から口縁にかけ直線的に立ち上がる体部をもち、10はやや内湾気味に立ち上がる。底部は両者とも尖底気味である。

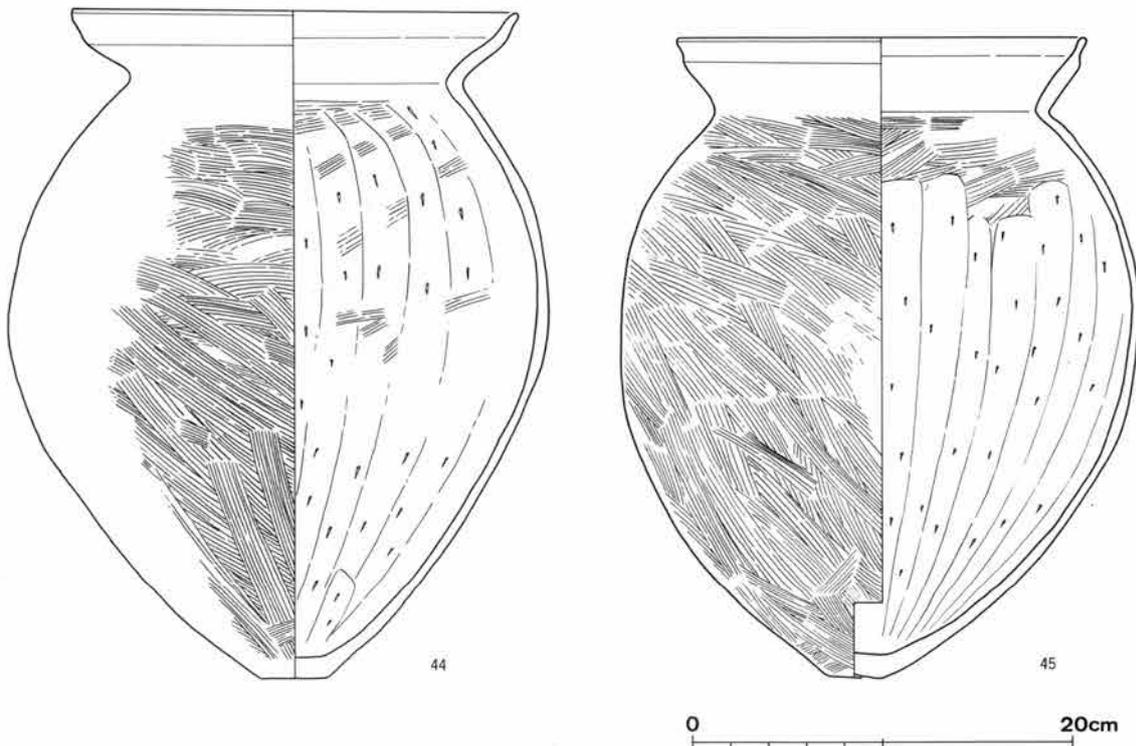
11は平底をもつ鉢である。体部は10と同様のつくりである。

12は底部からやや内湾気味に立ち上がる体部をもち、口縁部をわずかに外反させる。外面をヘラミガキで調整しており、精製品と考える。

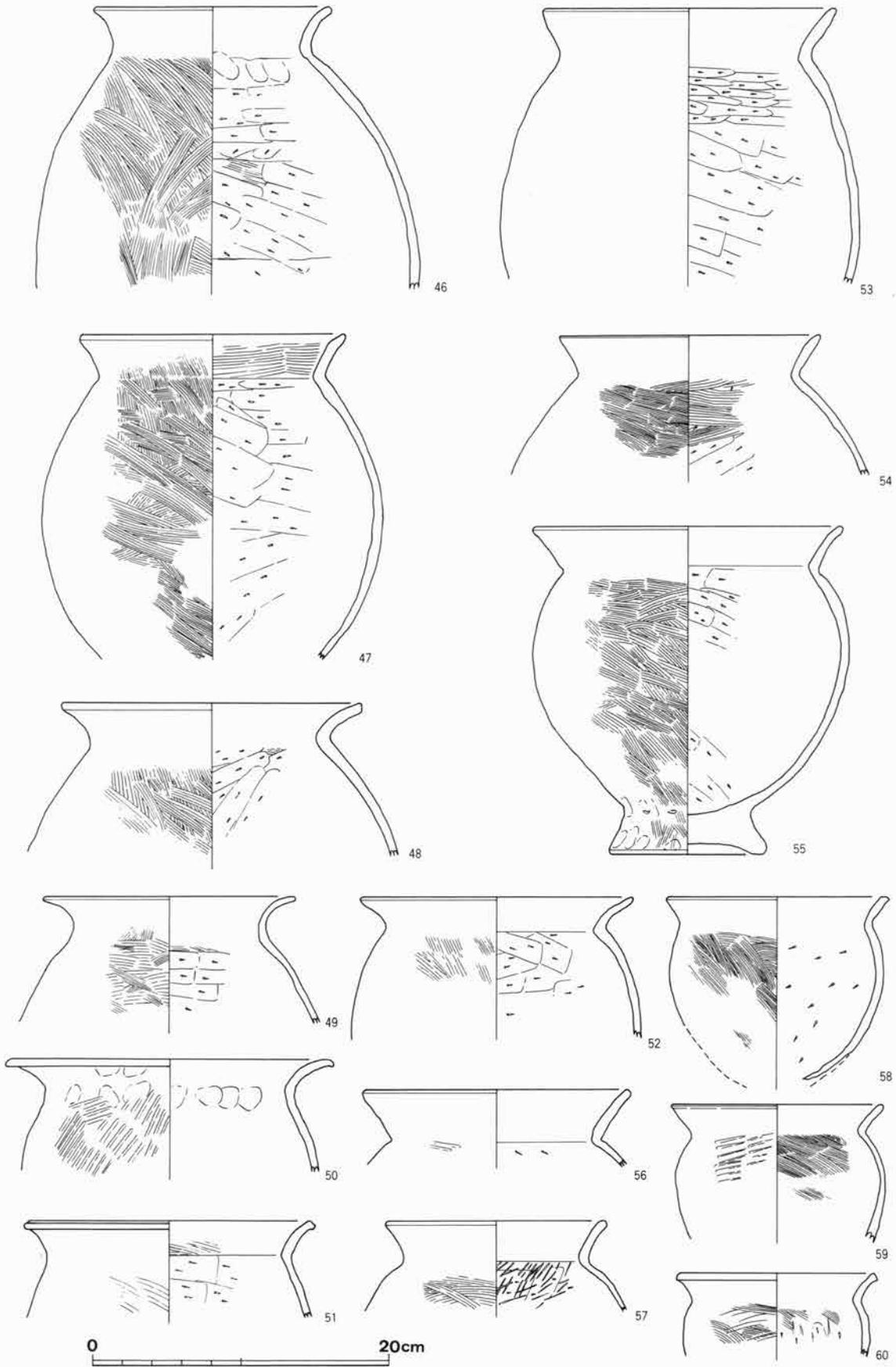
13は内湾する体部から直立する口縁部をもつ。

14は突出底をもつ小形鉢であり、外反する口縁をもつものと思われる。

15は複合口縁をもつ。底部はヘラケズリによりいびつな丸底に仕上げられる。



第78図 土器溜まりN出土土器実測図(3)



第79図 土器溜まりN出土土器実測図(4)

16は小形の台付鉢である。体部のつくりは12と同形態をとる。

17は11を小型化したものであり、底部は平底傾向を示す。

18は杯状の鉢である。蓋の可能性も考えられたが、内面をヘラミガキで調整しているため、鉢と判断した。底部は突出気味である。

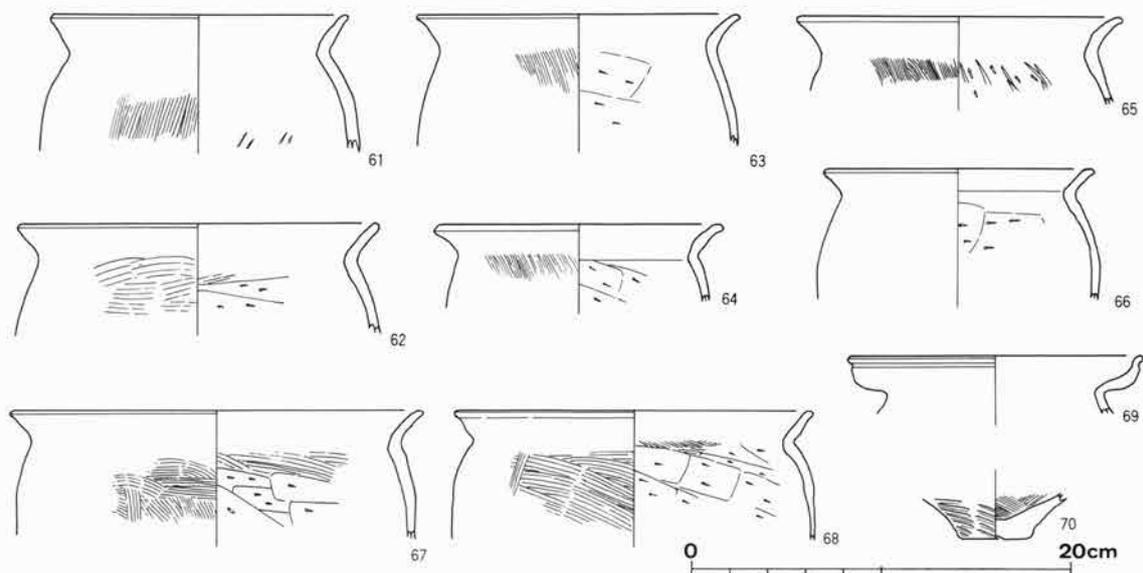
19～68・70は甕である。甕は口縁部の形態から、大きく、複合口縁をもつもの、内湾する口縁をもつもの、「く」の字状口縁をもつもの、それ以外のものの4タイプに分類できる。

複合口縁をもつ甕は、さらに、擬口縁部が突出する稜をもつものと、擬口縁と口縁下端面が一体化したものの2者に細分することができる。

19～29は、擬口縁端部が突出する稜を形成するいわゆる山陰系甕とされるものである。土器溜まりN出土甕全体の約2割を占める。19～23のように、口縁部の立ち上がりが長く、直立気味のものと、24～29のように口縁部の立ち上がりがやや短く外傾気味のものの2者が存在する。また、19のように肩部に櫛描き直線紋を施す個体も存在する。調整の確認できるものでは体部上半の横方向のハケ調整が顕著に認められる。内面はヘラケズリにより仕上げられる。胎土の点では、高温石英を含むものも多数存在し、在地での生産が考えられる。

30～41は擬口縁と口縁下端面が一体化する複合口縁甕である。土器溜まりN出土甕全体の約2割を占める。30のように鋭い稜を形成する個体もあるが、大部分のものは擬口縁と口縁部の接合部が丸みを帯びている。体部外面の調整は縦もしくは斜め方向のハケが主体的である。胎土の点では高温石英を含むものが大部分である。

42～45は内湾気味に立ち上がる口縁をもつ甕である。土器溜まりN出土甕全体の中で占める割合はきわめて少ない。42・45のように口縁上半をやや外反させるものと、43・44のように内湾気味に納めるものの2者が存在する。42・43はほぼ完形に近い状態に復元できた個体であり、両者とも体部はほぼ中位に最大径をもち、小さな平底を有している。外面は縦方向のハケ、内面はハ



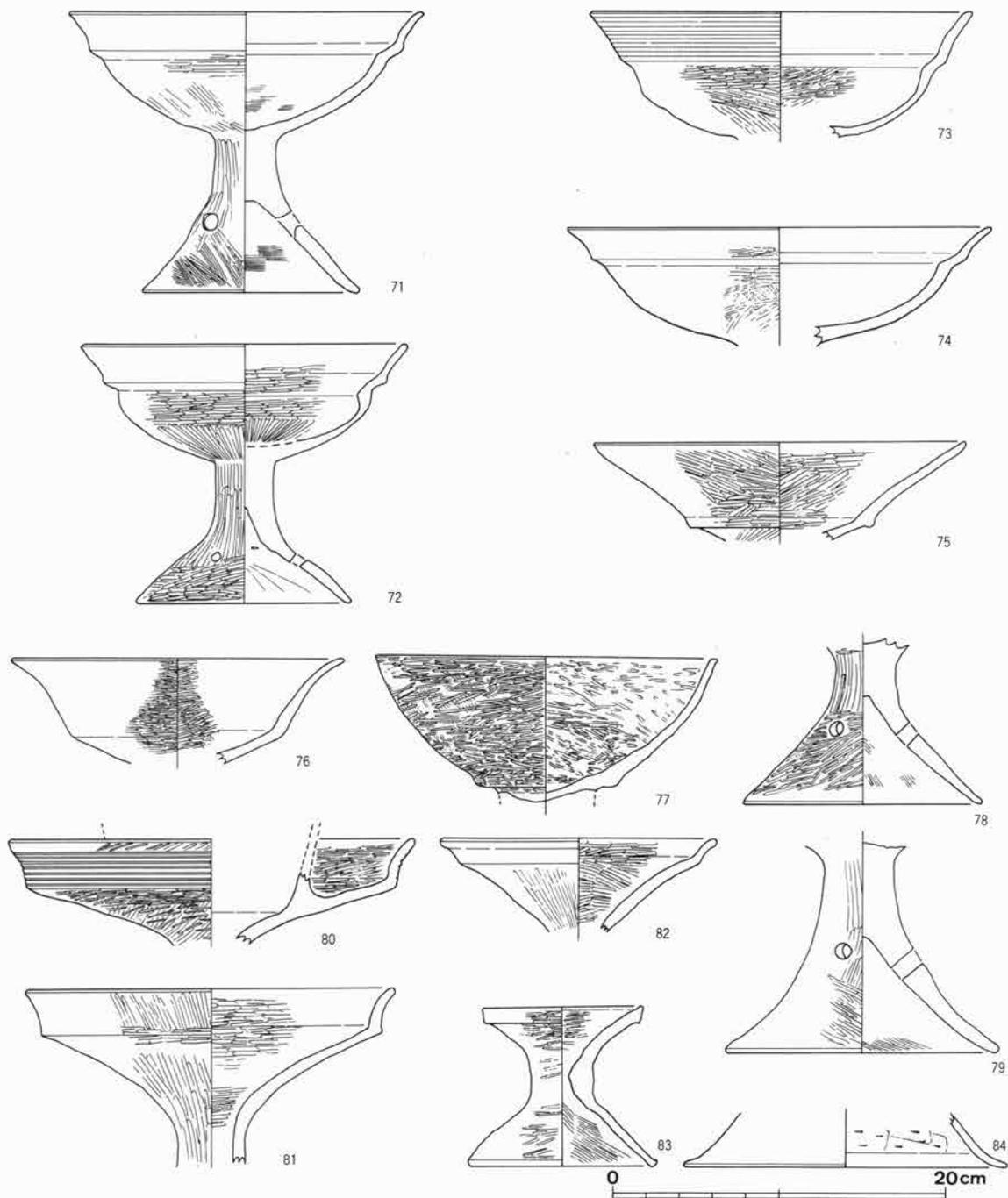
第80図 土器溜まりN出土土器実測図(5)

ケの後ヘラケズリにより仕上げられる。胎土中に高温石英の確認できるものはない。

46～68は「く」の字状口縁を有する甕である。土器溜まりN出土甕全体の6割を占め、圧倒的に多い器種である。この甕についても口縁の形態によっていくつかのタイプに細分ができる。

46・47は直立気味の口縁をもち、体部は長胴傾向を示す。口縁部の厚さはほぼ一定であり、口縁端部を丸く収めている。外面はハケ、内面はヘラケズリにより調整される。

48～52は大きく外反する口縁部をもつ。口縁部の厚さはほぼ一定である。また48・51のように口縁端部が面を形成する個体も認められる。50は体部外面に左下がりのタタキ目を残す。それ以



第81図 土器溜まりN出土土器実測図(6)

外のもものは外面はハケ、内面はヘラケズリにより調整される。

53はやや内湾気味の口縁をもつ。口縁中位がもっとも厚い。体部は長胴傾向を示す。

54～60はわずかに外反する口縁部をもつ。胎土の点では高温石英を含むものが大部分である。54～56の大形品と、57～60の小形品に分けられる。また、58～60は体部最大径が口径を下回る。53はほぼ完形に近い形で復原された台付の甕である。体部は他の「く」の字状口縁をもつものに比べて球形化が進行している。脚台部分は高台状を呈し、底部は厚く作られる。全体に煤が付着しており、実際に煮沸具として使用された個体である。

61～68は短い口縁部をもつものである。肩部の張りがほとんどなく、長胴傾向を示すものと考ええる。外面は縦もしくは斜め方向のハケ、内面はヘラケズリにより調整される。

69は受口状口縁をもつ。器形・胎土の点からも搬入品と判断する。1点のみ確認できた。

70はタタキを外面に残す甕の底部である。平底を呈し、タタキは右下がりである。タタキ目を残す個体で図示できるものは50と70の2点のみと非常に少ない。両者とも高温石英を含まない。

71～79は高杯である。高杯もバリエーションが多い器種である。

71～74は複合口縁をもつ高杯である。口縁側面は大きく拡張され、73は擬凹線紋を施す。71・72の脚柱部は中実であり、脚部は、71では「ハ」の字形に広がり、72ではやや内湾気味に作られる。スカシはいずれも3方向に設けられる。

75は口縁下端部に突出する稜をもつ。内外面ヘラミガキで調整される精製品である。胎土中には高温石英を含まない。

76は外反する口縁をもつ有稜の高杯である。高温石英を含まない。

77は杯部下端面が稜を形成し、杯部が内湾気味に立ち上がる高杯である。東海地方の影響をうかがわせる個体と考える。内外面ともヘラミガキにより調整される。高温石英を含まない。

78・79は高杯脚部である。脚柱部は短く中実である。両者とも「ハ」の字状に広がる脚部もち、スカシは3方向である。

80～84は器台である。器台は個体数は少ないものの、バリエーションは多い。

80は装飾器台である。口縁外面に擬凹線文を施す。口縁下端面は拡張されない。高温石英を胎土に含まず、また、非常に白い色調を呈し、搬入品の可能性がある。

81は外反する口縁をもつ精製の器台である。内外面ともヘラミガキで調整される。

82は弥生的様相を残す器台であるが、口縁下端面を拡張せず、擬凹線文も施されない。

83は小形器台である。内外面ヘラミガキで調整される。

84は鼓形器台の脚部である。

以上、土器溜まりN出土土器について概観した。この土器群の特徴は擬凹線文を施す個体がほとんど見受けられず、他地域からの影響を考えることのできる個体が多く存在する点である。地域的には山陰・北陸・畿内・東海地方などが考えられる。胎土に注目してみると、高杯・器台類に高温石英をもつ個体が少なく、むしろ搬入品と考えられるものが多い。

⑭溝S D 2015

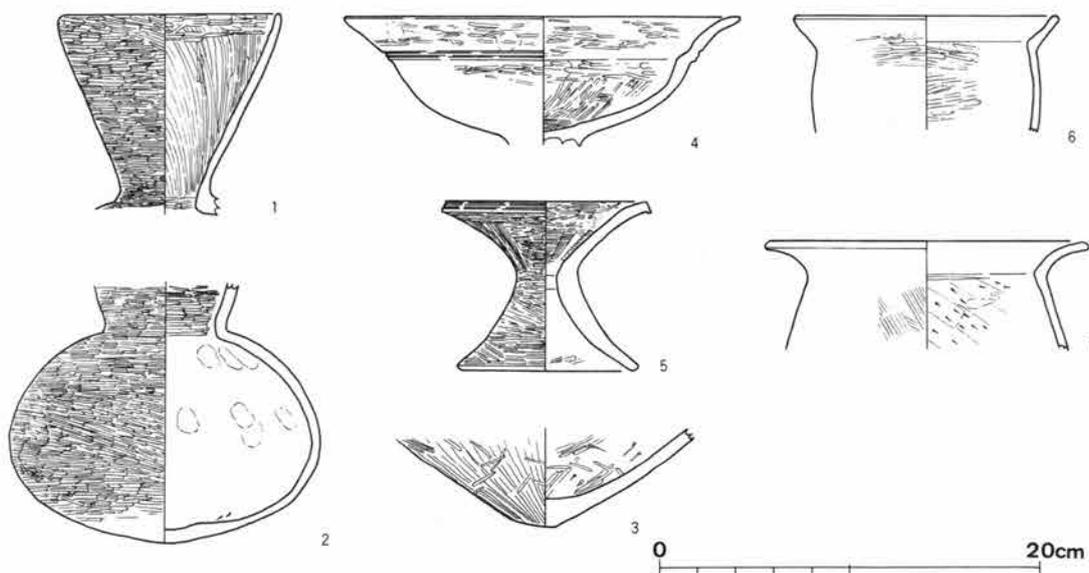
遺構 土坑S K 2003の南側で検出した幅0.8m・深さ0.2mを測る素掘りの溝である。埋土は単層であり、粗砂が堆積していた。あるいは溝S D 2016の最終埋没土かもしれない。

遺物 溝S D 2015出土遺物は量的に少ない。器種には壺・甕・高杯・器台・鉢が認められるが、甕は図示した1点のみで、精製品が大部分であることがこの溝S D 2015出土遺物の特徴である。

1・2はいずれも長頸壺である。微細なヘラミガキによる精製品である。2は丸底気味の底部をもち、体部最大径は体部中位より下半部にもつ。3は大型の壺の底部である。4は複合口縁の鉢状の杯部をもつ高杯であり、擬凹線は施されない。小型器台5は面をなす口縁端面に2状の擬凹線が認められる。6はやや内湾する口縁をもつ鉢である。7は小片ではあるがこの溝出土遺物中1点のみ確認できた甕である。「く」の字に大きく開く口縁をもつ。

第14表 溝S D 2015出土遺物観察表

番号	器種	法量			調整		胎土					色調	残存率	備考
		口径 (cm)	器高 (cm)	最大径 (cm)	内面	外面	高温 石英	石英	長石	雲母	他			
1	壺	11.0			ミガキ	ミガキ	○	○	○			灰褐	50	
2	壺			16.4	ケズリ 後ナデ	ミガキ		○	○			橙褐	60	
3	壺				ケズリ 後ミガキ	ミガキ		○	○			黄褐	100	
4	高杯	20.2			ミガキ	ミガキ	○		○			橙褐	70	
5	器台	10.4	8.85		ハケ後 ミガキ	ハケ後 ミガキ		○	○			橙褐	80	擬凹線 2
6	鉢	13.8			ミガキ	ミガキ		○	○			灰白	15	
7	甕	16.4	10.4		ケズリ	ハケ		○	○			灰褐	10	煤付着



第82図 溝S D 2015出土遺物実測図

⑮溝 S D 2016(新)

遺構 溝 S D 2016(新)は溝 S D 2016(古)埋没後に再掘削された素掘り溝である。上流側の溝幅は狭く、下流の方が広がっている。土坑 S K 2003に切られる。調査区を東から西へ向け流れ、幅 3 m・深さ 0.6 mを測る。堰状施設を 1 か所、護岸施設を 1 か所検出した。

堰状施設は溝を横断する板材と、それを固定するための 2 本の杭により構成される。また、板材の中央部分には水の流れ口が設けられていたが、取り上げ段階で破損してしまった。

護岸施設は 3 枚の板材を重ね合わせるにより形成されるが、杭等による固定は認められず、やや大きめの石を置くことにより固定されている。

遺物 出土遺物には土器・木製品がある。

土器 出土土器は全て土師器である。器種には壺・甕・鉢・蓋・高杯・器台が認められる。

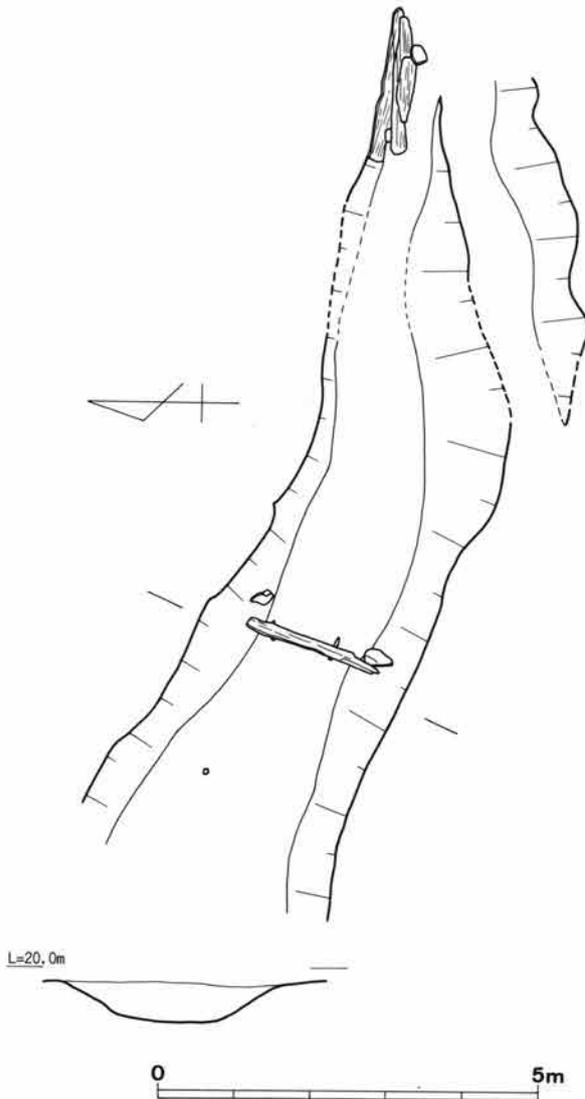
1～5 は壺である。1 は複合口縁をもつ大形の加飾壺である。口縁外面は稚拙な 1 条の波状文、口縁下端面は刻目により装飾される。頸部と体部の間には断面三角形の突帯がめぐり、突帯にも

刻目が施される。2 は小形の複合口縁壺である。3・4 は広口壺である。3 は口縁外面に擬凹線を施す。5 は大形の複合口縁をもつ壺であるが、頸部は太く短い。

6～32 は甕である。甕には複合口縁を呈するものと、「く」の字状口縁を呈するもの、口縁上半を立ち上げるものの 3 タイプが存在する。複合口縁をもつ甕はさらに、擬口縁部が突出する稜をもつものと、擬口縁と口縁下端面が一体化したものの 2 者に細分することができる。

6～13 は擬口縁端部が突出する稜を形成するいわゆる山陰系甕とされるものである。口縁部の立ち上がりは直立気味に長く立ち上がる。7 のように肩部に櫛描波状文を施す個体や、9 のように櫛描直線文を施すもの、11 のように刺突文を施す個体がある。調整は体部上半の横方向のハケメが顕著である。胎土では高温石英を含むものも多く認められる。

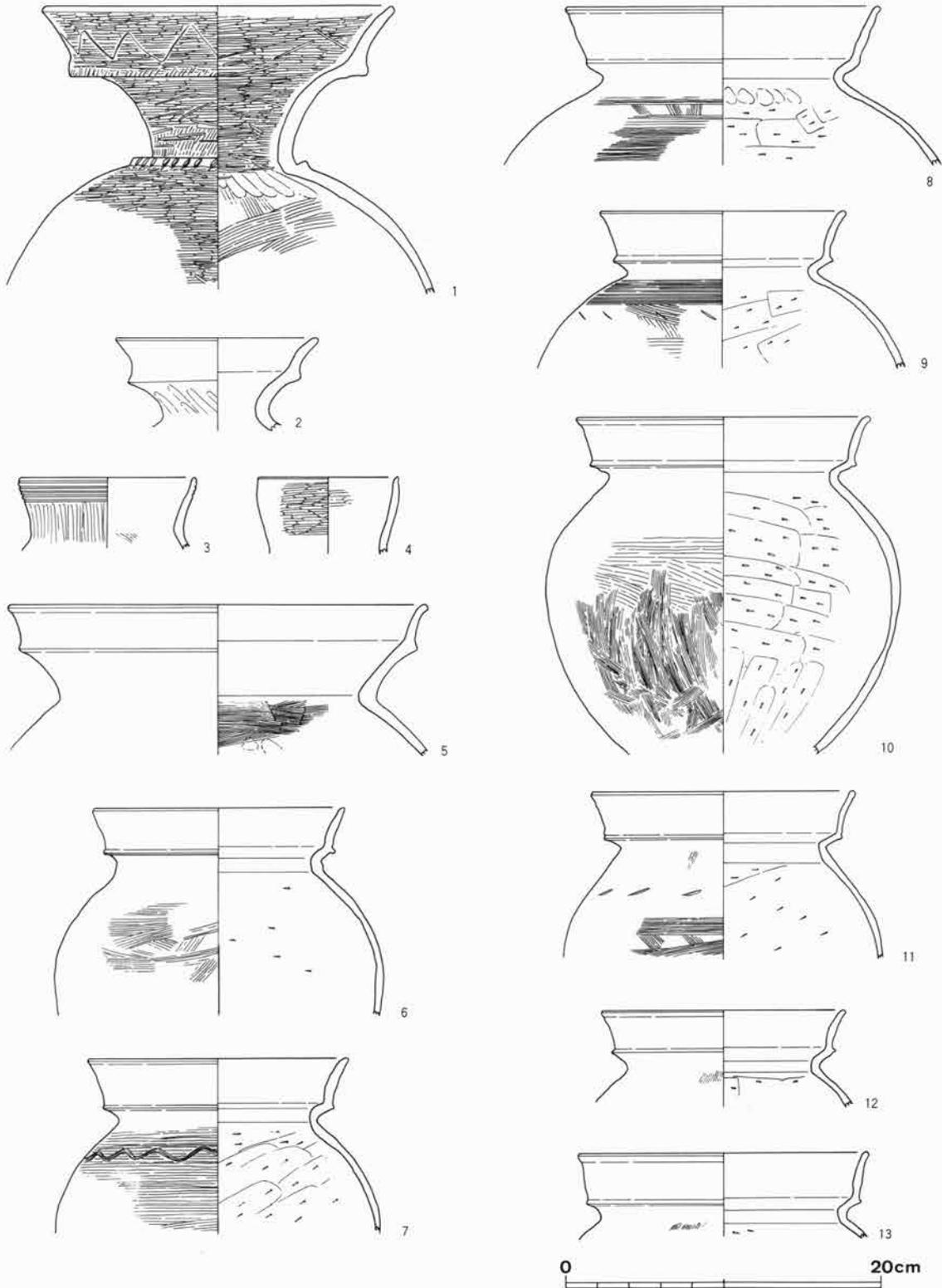
14～16 は擬口縁と口縁下端面が一体化したものであり、14・15 はやや鋭い稜を形成し、16 は丸みを帯びている。外面の調整は



第83図 溝 S D 2016(新)実測図

縦方向もしくは斜めのハケによる個体が多い。胎土では高温石英を含む個体も認められる。

17~19は口縁外面に擬凹線を施す。全体に占める個体数は少ない。胎土の点では高温石英を含むものも認められる。



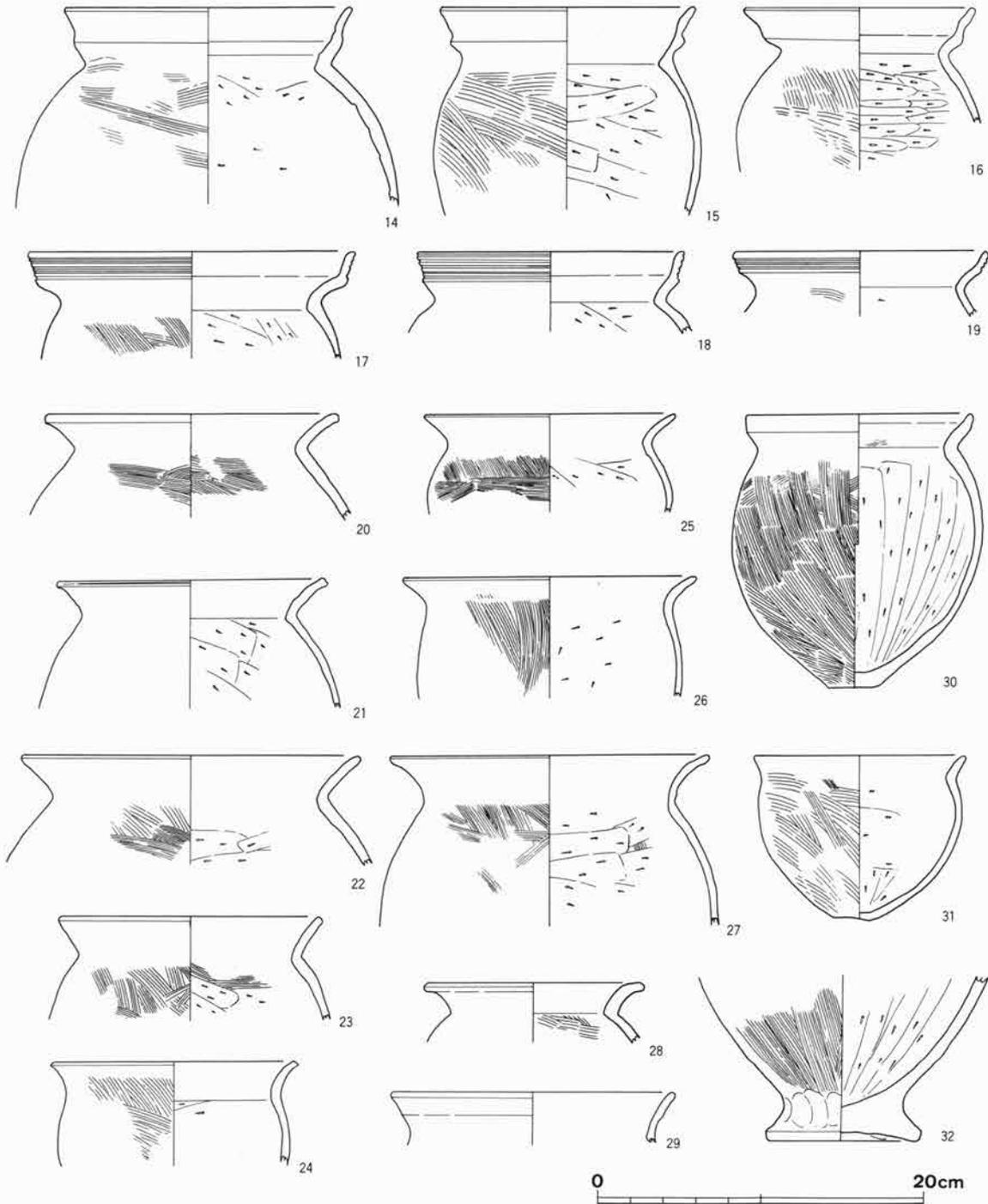
第84図 溝S D2016(新)出土土器実測図(1)

20～29・31は「く」の字状口縁を有する甕であり、S D2016(新)出土甕中で量的に最も多く、主体的な甕と考える。胎土は高温石英を含むものが大部分である。これら「く」の字状口縁をもつ甕は、口縁の形態によりいくつかのタイプに分類することができる。

20・21はわずかに外反する口縁をもち、口縁外端面に面をもつ。

22～23はわずかに外反する口縁をもち、口縁端部を丸く収める。

24～26は外反する短い口縁をもつ。体部は肩の張りが弱い。



第85図 溝S D2016(新)出土土器実測図(2)

27は大きく外反する口縁をもち、端部はわずかに内湾する。

28は大きく外反する口縁をもち、端部は丸く収める。

31は短く厚い口縁をもつ小形の甕である。体部は肩の張りが弱い。底部は平底である。

30は内湾する口縁を有する。口縁上半はナデにより面を形成する。体部のほぼ中位に最大径をもち、肩の張りは弱く底部は平底である。

32は土器溜まりNで確認された台付の甕と考える。高台状の脚台をなし、底部は厚い。

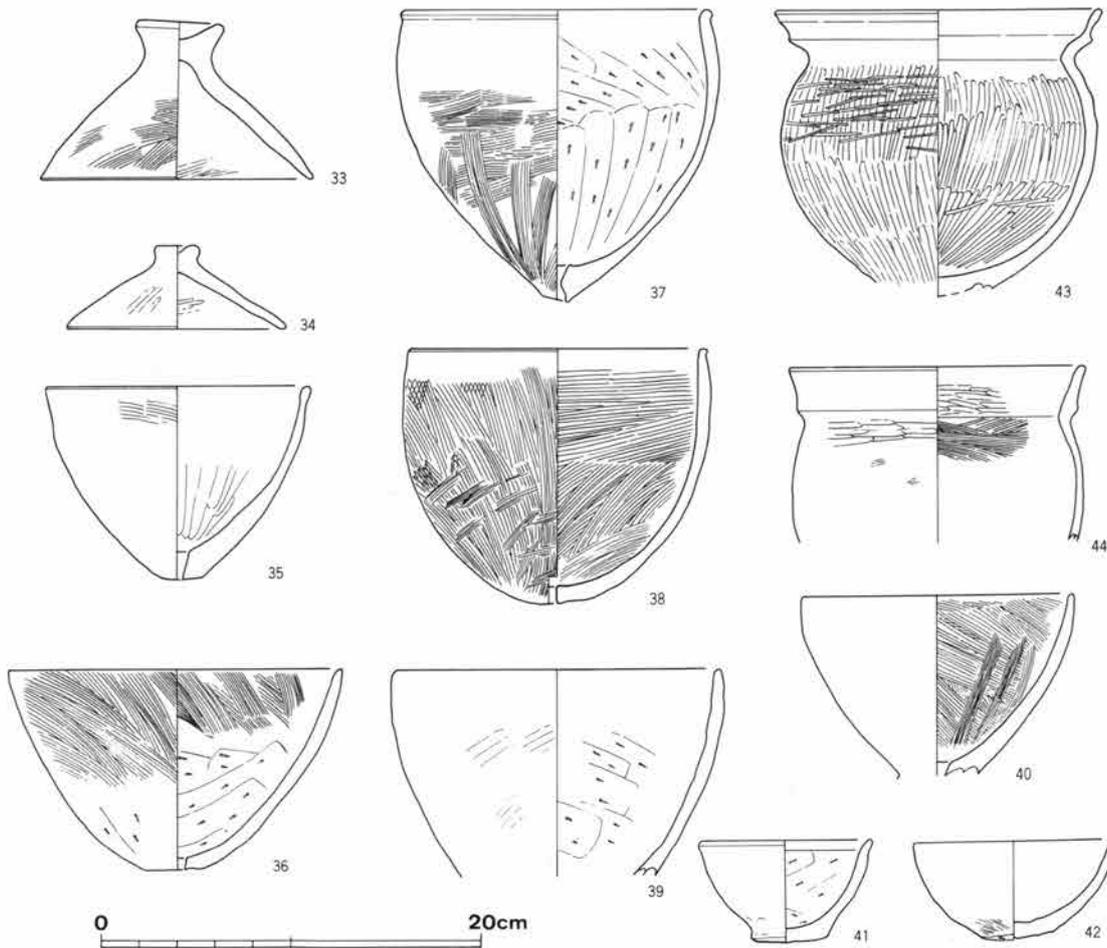
33・34は蓋である。33は器高が高く、しっかりとしたつまみをもつ。34は33に比べて小形で器高の低い形態を示す。

35～44は鉢である。鉢は個体数も多くバリエーションに富む器種である。

35～38は有孔鉢である。35・36は平底、37は尖底、38は丸底を呈する。

41・42は小形鉢である。41は体部の立ち上がりが直線的で、口縁をわずかに外反させる。42は体部が内湾気味に立ち上がり、全体的に椀状のプロポーシオンを呈する。両者とも平底である。

40・43・44は台付鉢と考える。43は口縁下端面に稜をなす複合口縁をもち、内外面はていねいなヘラミガキで仕上げられる精製品である。44は口縁外側面が大きく拡張される口縁をもつ。40は36と同様の体部を示す。底部の剝離痕から脚台をもつ有孔鉢と判断した。



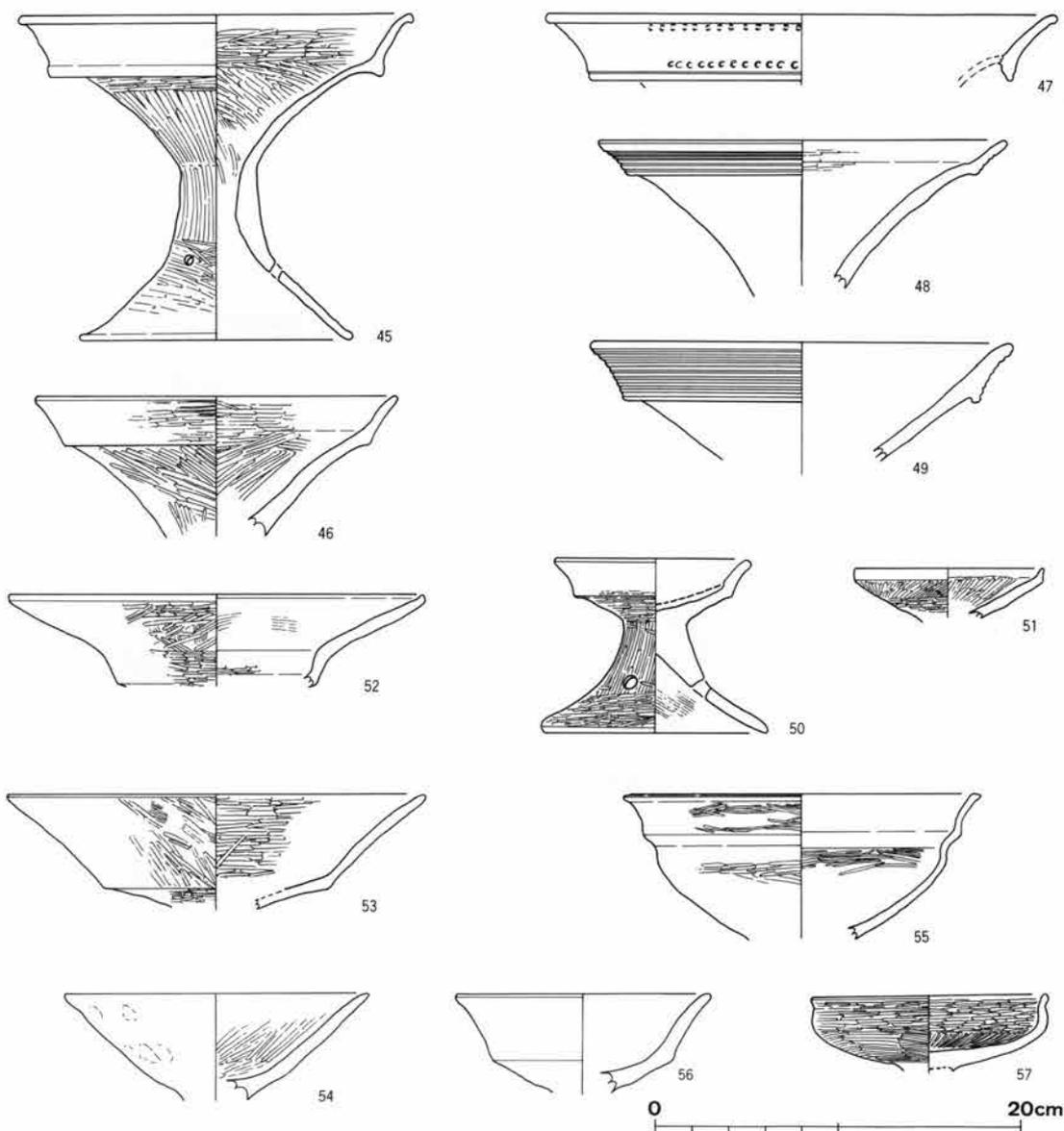
第86図 溝S D2016(新)出土土器実測図(3)

45～51は器台である。45～49の大形品と、50・51の小形品が存在する。45～47・49は口縁外側面を大きく作り出す、45・47・49は口縁下端面をわずかに垂下させる。47は半截竹管文と刺突文で加飾する。48は弥生時代的な器台であるが、口縁下端面は拡張しない。擬凹線を施す。

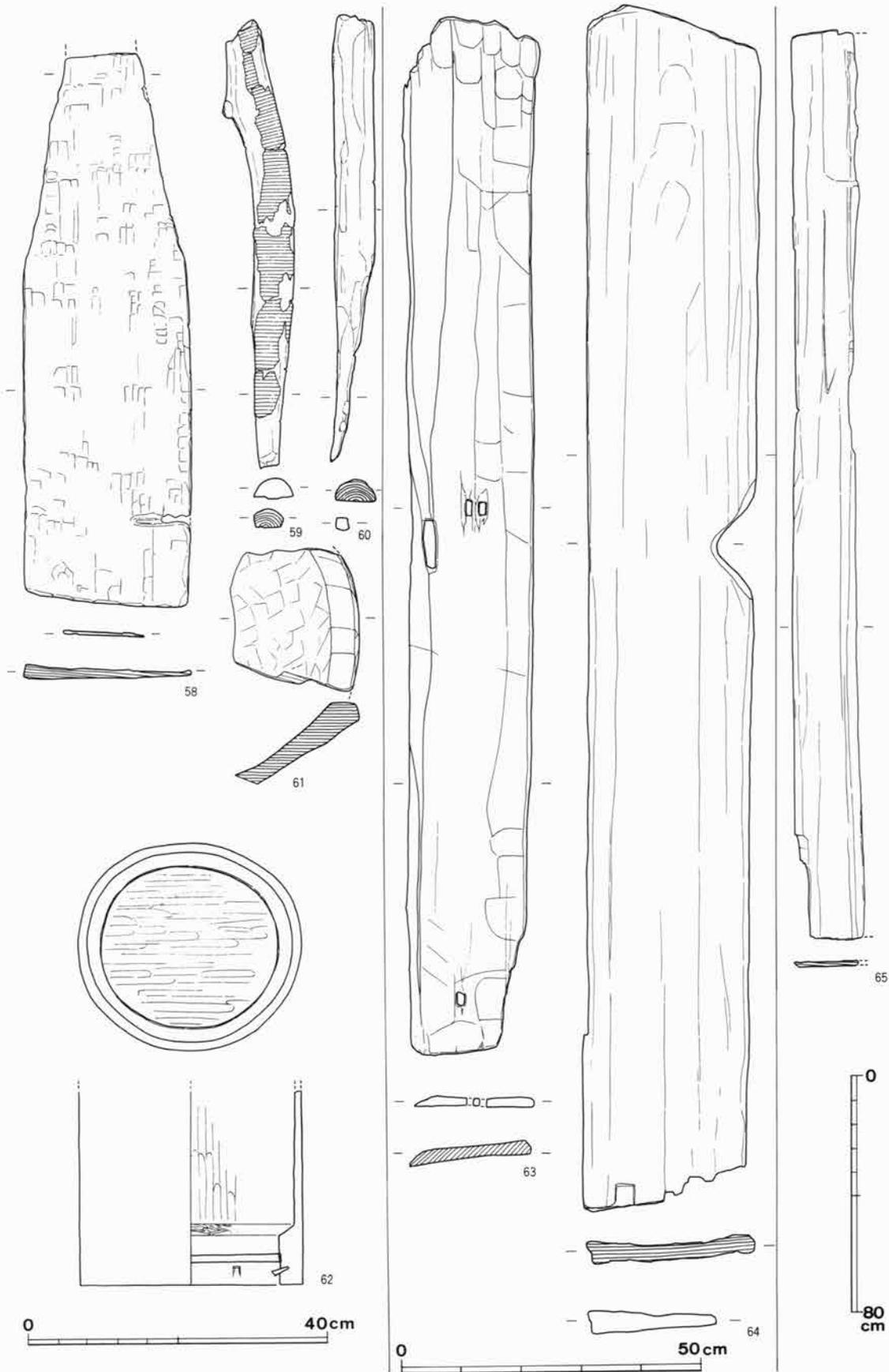
50はわずかに外反する口縁をもつ。口縁下端面は稜を形成する。51は浅い受け部をもち、口縁端部を上方に摘み上げる。両者とも小型精製品と考える。

52～57は高杯である。57はいわゆる庄内系高杯である。口縁端部を上方につまみ上げる。53は有稜系の高杯である。内外面ヘラミガキにより調整される。54は椀状の杯部をもつ。56は有稜系の高杯であるが、53に比して口径が小さい。55は有段口縁を有する高杯である。口縁部は大きく拡張されるが擬凹線は施されない。57は浅い椀状を呈し、口縁端部をわずかに外反させる。

木製品 溝S D 2016(新)出土木製品には護岸材に転用されていた部材群(58・63・64)、堰状施



第87図 溝S D 2016(新)出土土器実測図(4)



第88図 溝 S D 2016(新)出土木製品実測図

設に使用されていた部材(59・60・65)、埋土中出土のもの(61・62)がある。量的には少ない。

58は最大幅23cm・厚さ2.3cm・残存長74.5cmを測る板状の製品である。上部の方が欠損している。先端から約70%はほぼ両端が併行するが、底より上部は徐々に幅を減じていく。鍬などの農具類としては、非常に薄く、その可能性は低いものと思われる。その形態的特色から櫓である可能性を考えておきたい。

61は刳抜式の槽の破片である。護岸材に接して出土した。おそらく長楕円形の大型品になるものと推測される。上端部は水平に整えられ、端部外面は面を構成している。

62は桶である。埋土中から正位で出土した。出土当初は井戸に転用されている可能性も考えられたが、周辺の断ち割りを行った結果、掘形を確認することができなかったため、井戸ではないものと判断した。

出土当初から遺存状況は悪く、取り上げ段階でいくつかの破片に分かれてしまった。そのため図化段階で復元的に実測を行った。一木の丸太を刳り抜き、内面に突帯を削り出し、底側から一枚板により構成される板材をはめ込む構造をとる。板材の固定は5か所の小さな楔を打ち込むことにより行われている。楔は全長約2.5cmを測る。横断面は長楕円形を呈し、長軸30.5cm・短軸28cmを測る。高さについては上端の劣化が著しく不明であるが残存高26.5cmを測る。外面は劣化のため調整など不明であるが、内面はていねいに鉋と考えられる工具で仕上げ、底板は両面とも鉋と考えられる工具で仕上げられている。内面には黒漆かと思われるものが塗布されている。同様の構造をとる桶として、峰山町古殿遺跡第1次調査S E 03井戸枠や網野町松ヶ崎遺跡で井戸枠として転用されていたものをあげることができる。これらの例に比べると本例は小型品といえる。

59・60は堰状施設の板材を固定するために使用されていた杭である。遺存状況は悪い。両者とも小木を半截し、先端を加工して杭にしているが、成形は非常に粗雑である。また59には樹皮が残存している。59は残存長60cm・幅5.7cm・厚さ3cm、5は残存長60.5cm・幅5.6cm・厚さ3.2cmをそれぞれ測る。

63は長さ174cm・幅21cm・厚さ2.5cmを測る板材である。中央部分に2か所方形の柄穴を並べて設けている。また、一方の小口近辺には1か所の方形の柄穴を設けている。本来の用途は不明であるが、建築部材などを転用したのと考えられる。

64は全長2.02m・幅0.28m・厚さ3cmを測る板材の側辺に、幅16cm・長さ6cmの鋭い三角形の掘り込みを設け、水の流れる口を作り出している。護岸材転用以前には堰状施設として用いられていた部材と判断される。

65は堰状施設に用いられていた板材である。遺存状況は非常に悪く、特に上辺に当たる部分は全て欠損している。全長3m・残存幅0.2m・厚さ2.5cmを測る。水の流れ出る部分がどのように加工されていたかは不明である。

⑩溝S D 2016(古)

遺構 溝S D 2016(新)の下層から検出した東から西へ向け流れる溝である。断面はほぼ逆台形状を呈し、底面はほぼ水平に整えられている。土層断面から観察する限りS D 2017を切る。幅

3.5m・深さ1mを測る。1か所の堰状施設を検出した。

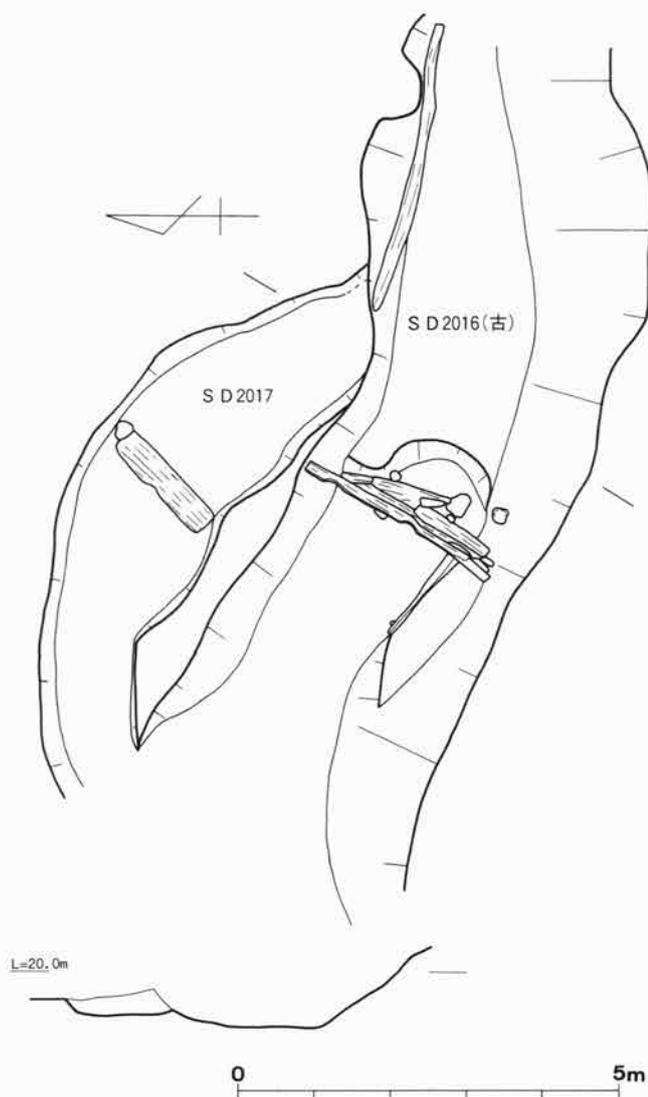
堰状施設は護岸施設と一体化して築かれている(第90図)。堰状施設は4枚の板材を溝に直行させることにより水を堰き止めている。板材の固定は、中央からやや北側に打たれた2本の杭と、南岸に設けられた護岸施設の板材にもたれかけさせることにより行われる。また、堰状施設の上・下流側には複数の大振りな石が配され、板材の固定の補助的な役割を果たすものとする。

板材と板材の間隙には、樹皮をかぶせることにより水が漏れるのを防いでいる。また、この板材には刳り込みをもつものが2枚認められたため、修復を行い浄水施設の高さ自体を高くしているものとする。なお、最終段階での浄水施設の刳り込みは、2か所確認された。

護岸施設は1枚の板材を東側の1本の杭で固定することにより構成される。堰状施設本体から加わる加重と併せて、安定を図ったものと思われる。また、この護岸施設の南岸部分のみ2段掘り形の構造をとり、水を汲む足場として利用されたものと推定される。

遺物 出土遺物には土器・木製品がある。

土器 出土土器は全て土師器である。器種には蓋・壺・甕・鉢・高杯・器台等がある。



第89図 溝 S D 2016(古)・2017実測図

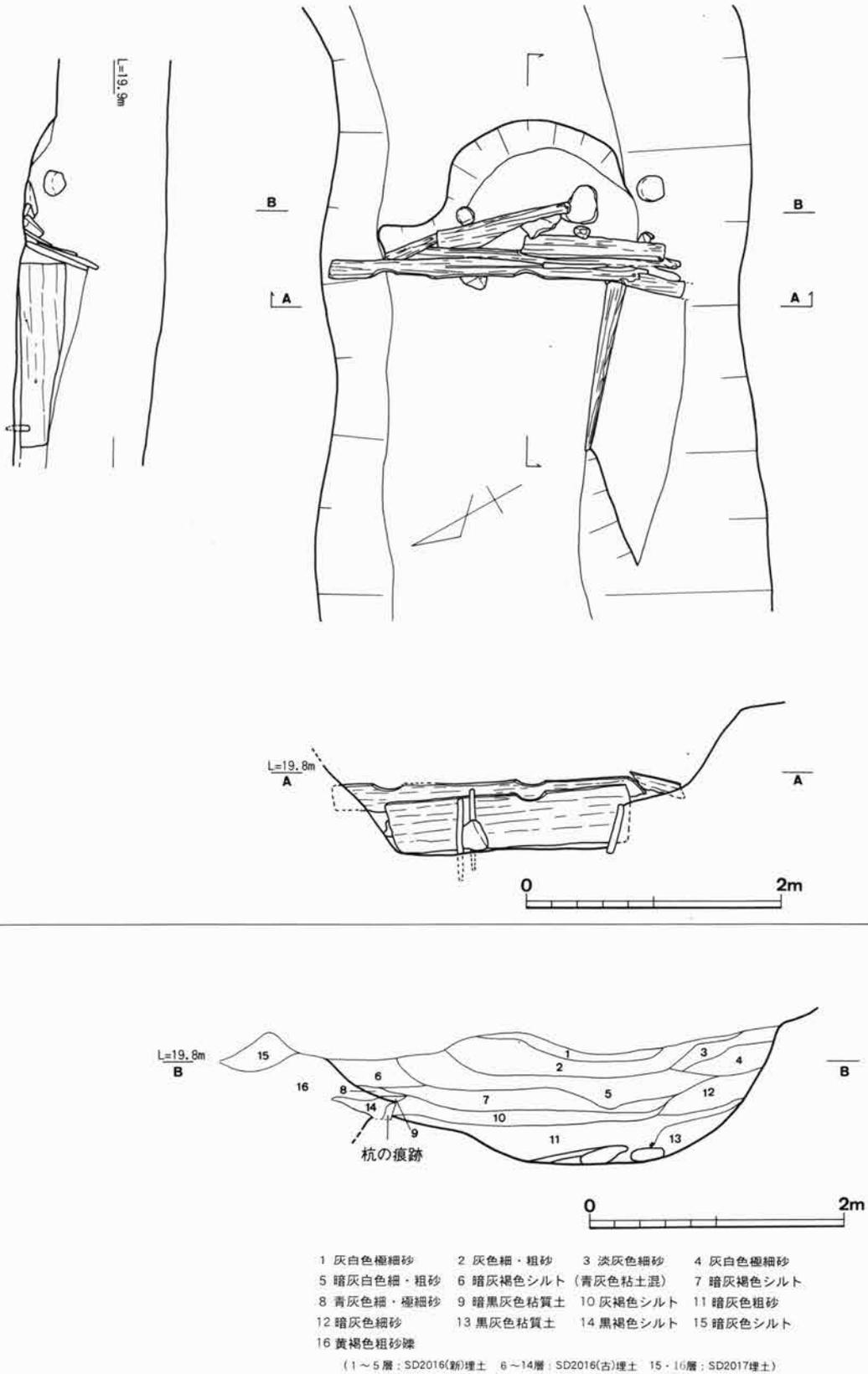
1は蓋である。口径に比して器高はやや高い。量的には極めて少ない。

2～5は壺である。2は内湾気味に立ち上がる口縁部をもつ。いわゆるひさご壺と類似する。3は長く直立する口縁をもち、口縁下端面は鋭い稜を形成している。4は口縁部を上下に拡張し面を形成する。5は受口状の口縁をもつ。

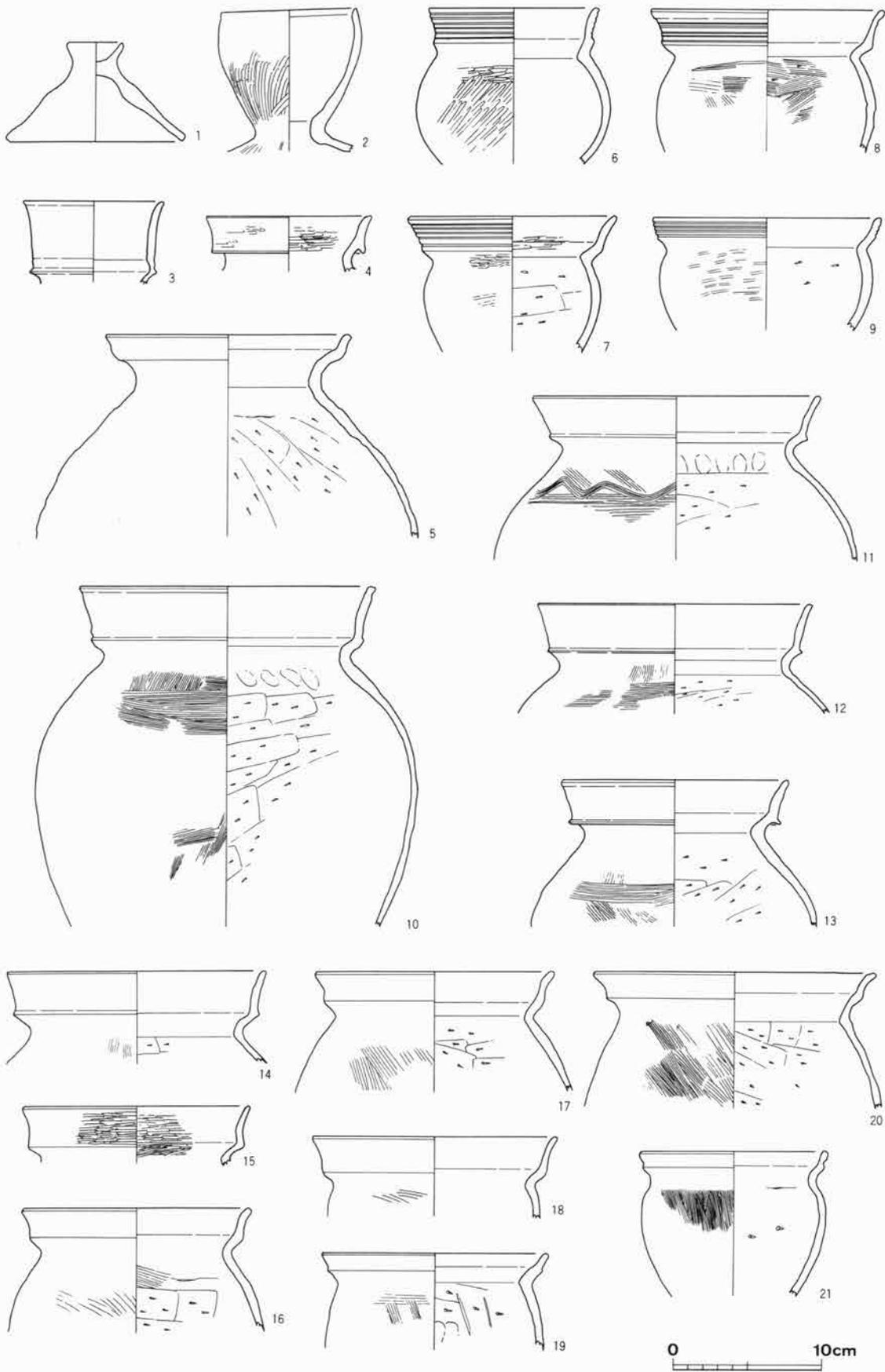
6～9は口縁側面に擬凹線を施す。複合口縁を呈し、鉢の可能性はある。

10～39は甕である。甕には複合口縁を呈するものと「く」の字状口縁を呈するものがある。複合口縁をもつ甕はさらに、擬口縁部が突出する稜をもつものと、擬口縁と口縁下端面が一体化したものの2者に細分することができる。「く」の字状口縁をもつ甕も口縁部の形態により細分することが可能である。

10～14は擬口縁部が突出する稜を形成する、いわゆる山陰系甕である。



第90図 溝SD2016(古)堰状施設実測図および土層断面図



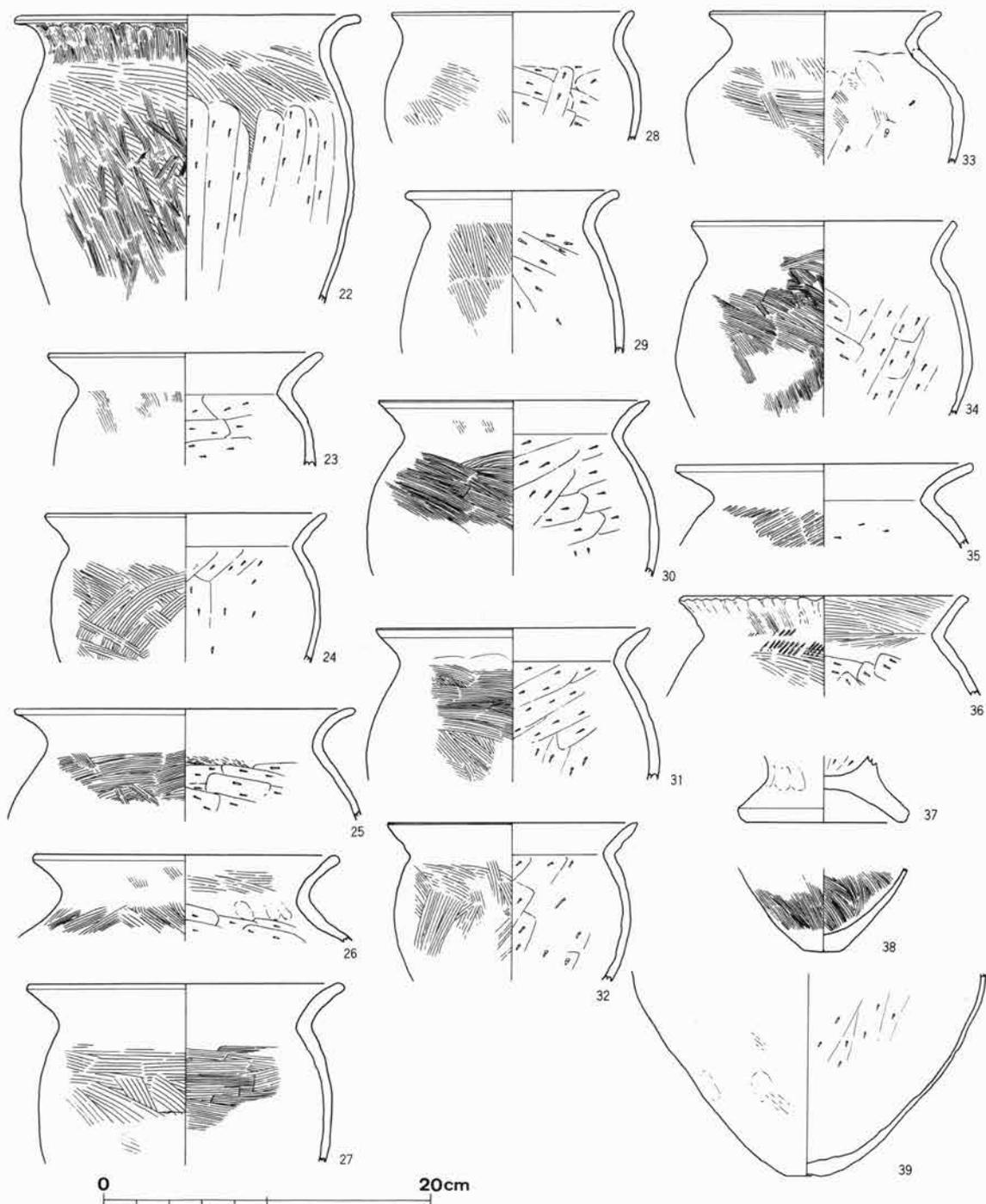
第91図 溝S D2016(古)出土土器実測図(1)

口縁部は長く直立気味である。11は肩部に波状文を施す。また、体部外面の調整は横方向のハケによるものが大部分である。胎土の面では高温石英を含むものも存在する。

15～18は擬口縁と口縁部が一体化した複合口縁甕である。擬口縁と口縁部の接合部が14・15のように鋭い稜を形成するものと、16～18のように丸く収めるものの2タイプが存在する。調整は縦もしくは斜め方向のハケが主体的である。胎土の面では高温石英を含む個体も存在する。

19～21は短い複合口縁をもつものである。口縁部上半はナデによりわずかに外反する。

22～36は「く」の字状口縁を呈する甕である。溝S D 2016(古)出土甕中最も多く、主体的な甕



第92図 溝S D 2016(古)出土土器実測図(2)

と考える。胎土では高温石英を含むものが大部分である。22は長胴傾向を示す。口縁端部を大きく外方に広げる。23～27・33は口縁部を外反させ、端部は丸く収める。28は短く外反する口縁をもつ。29は長胴傾向を示し、端部がわずかに肥厚する。30～32はわずかに外反する口縁をもち、端部を鋭利に仕上げる。体部は丸みを帯びるものが多い。30・31は体部最大径が口径を越えるが、32は口径より体部最大径が小さい。34はわずかに外反する口縁部をもち、端部は面を形成する。35・36は大きく外反する口縁部をもち、端部は面を形成する。35は外面に左下がりのタタキ目を残す。胎土中には高温石英を含んでおり、在地での製品と考える。

37は台付甕の脚台部である。同様の個体が複数存在する。

38・39は甕底部である。底部の確認できるものは全て平底傾向を示す。

40～48は鉢である。鉢は個体数が多い器種である。有孔鉢・直口鉢・台付鉢が存在する。

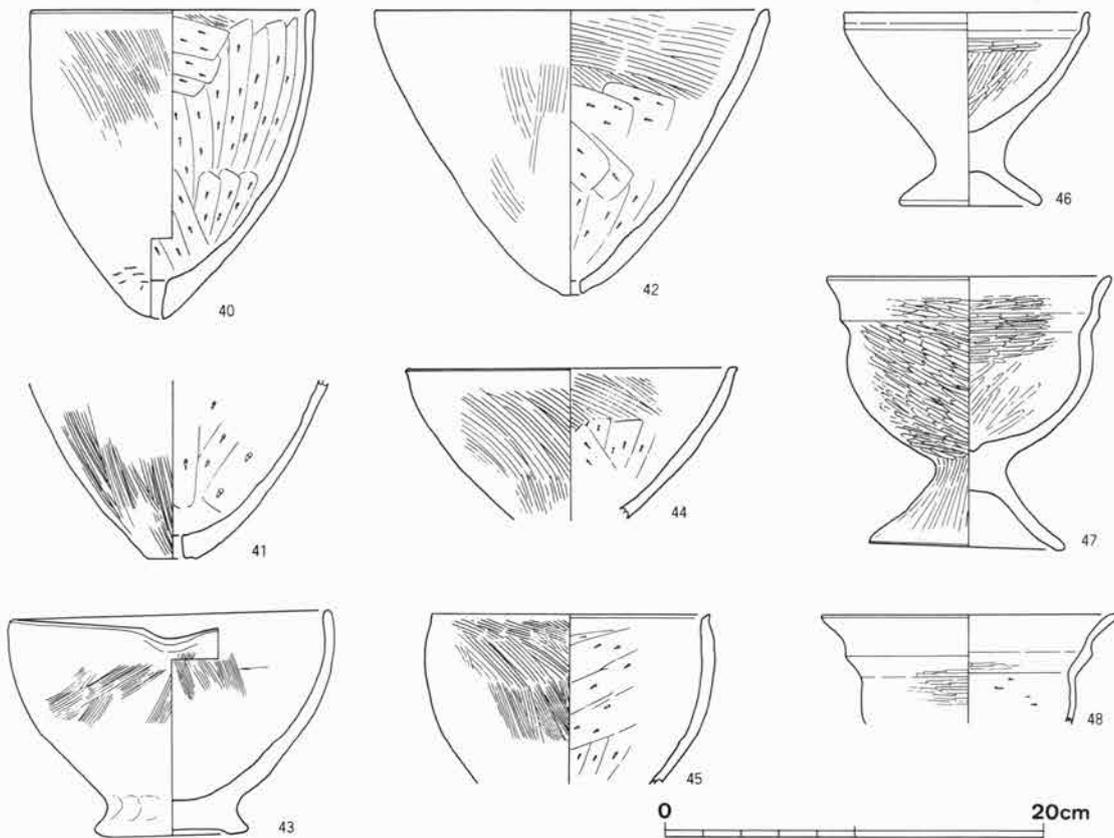
40～42は有孔鉢である。40は堰状施設の水が流れ落ちる部分の直下から出土した。体部上半が直線的に立ち上がる。底部は尖底である。41・42は底部から口縁部にかけてやや内湾気味に大きく開く。底部は41が平底、42は尖底である。

43は直口片口鉢である。厚い脚台を有する。

44は底部から口縁にかけ大きく開く。45は口径を体部最大径が上回るタイプのものである。

46～48は台付鉢である。46は直口鉢、47・48は複合口縁を呈する。精製品である。

49～52は器台である。49・50は口縁部を上下に拡張し、擬凹線を施す。51・52は口縁部を広く



第93図 溝S D2016(古)出土土器実測図(3)

拡張するが、擬凹線は施さない。

53～62は高杯である。53～55は複合口縁をもつ。口縁側面に擬凹線は認められない。56は杯部底面に稜をもつ。57はいわゆる庄内系高杯である。58は杯部底面に突帯を付す。59・60は椀状杯部をもつ。長脚のものと同脚部のものがある。

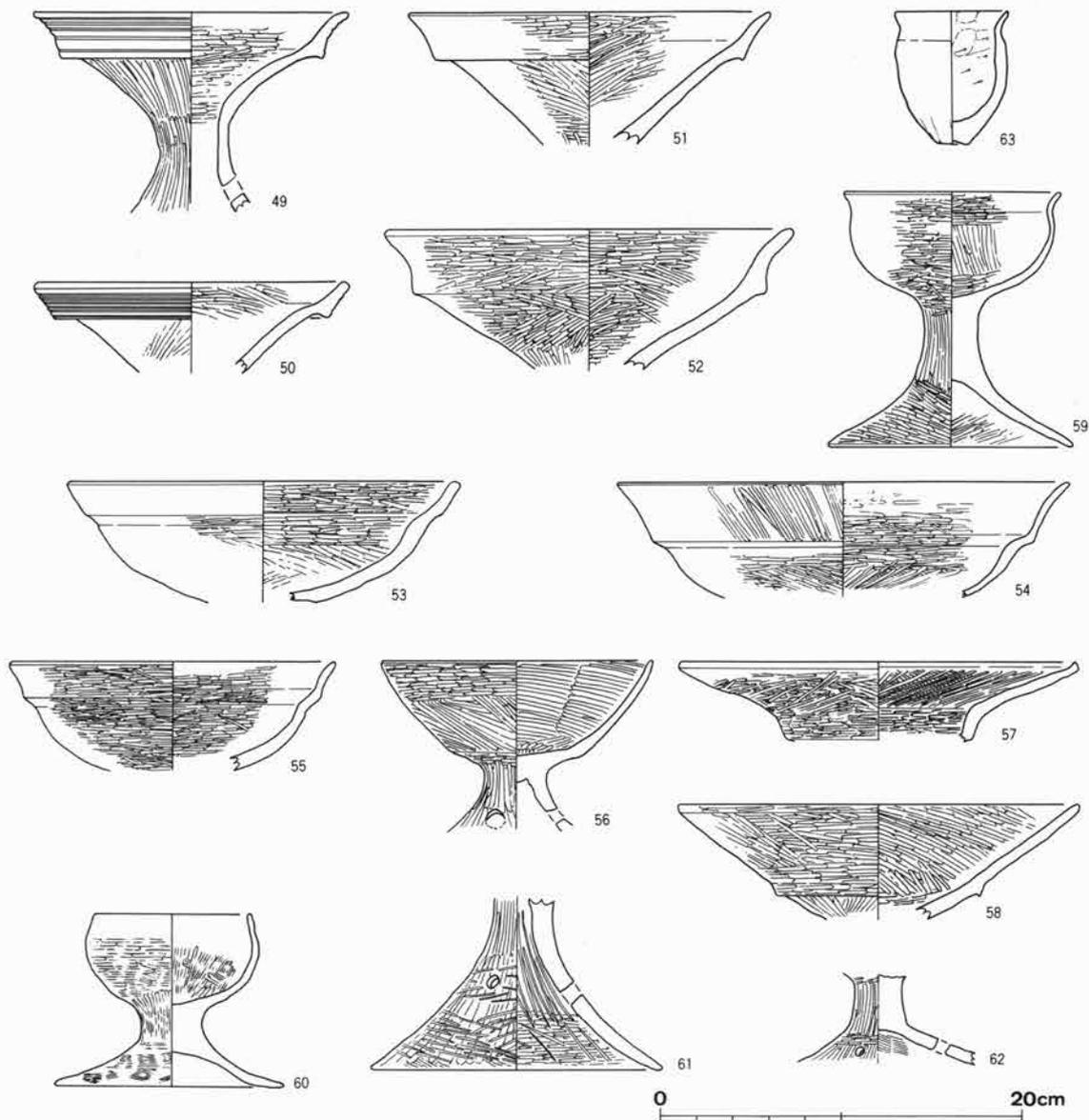
63はミニチュア土器である。甕を精巧に模倣している。

木製品 溝S D2016(古)出土木製品は量的には多くない。

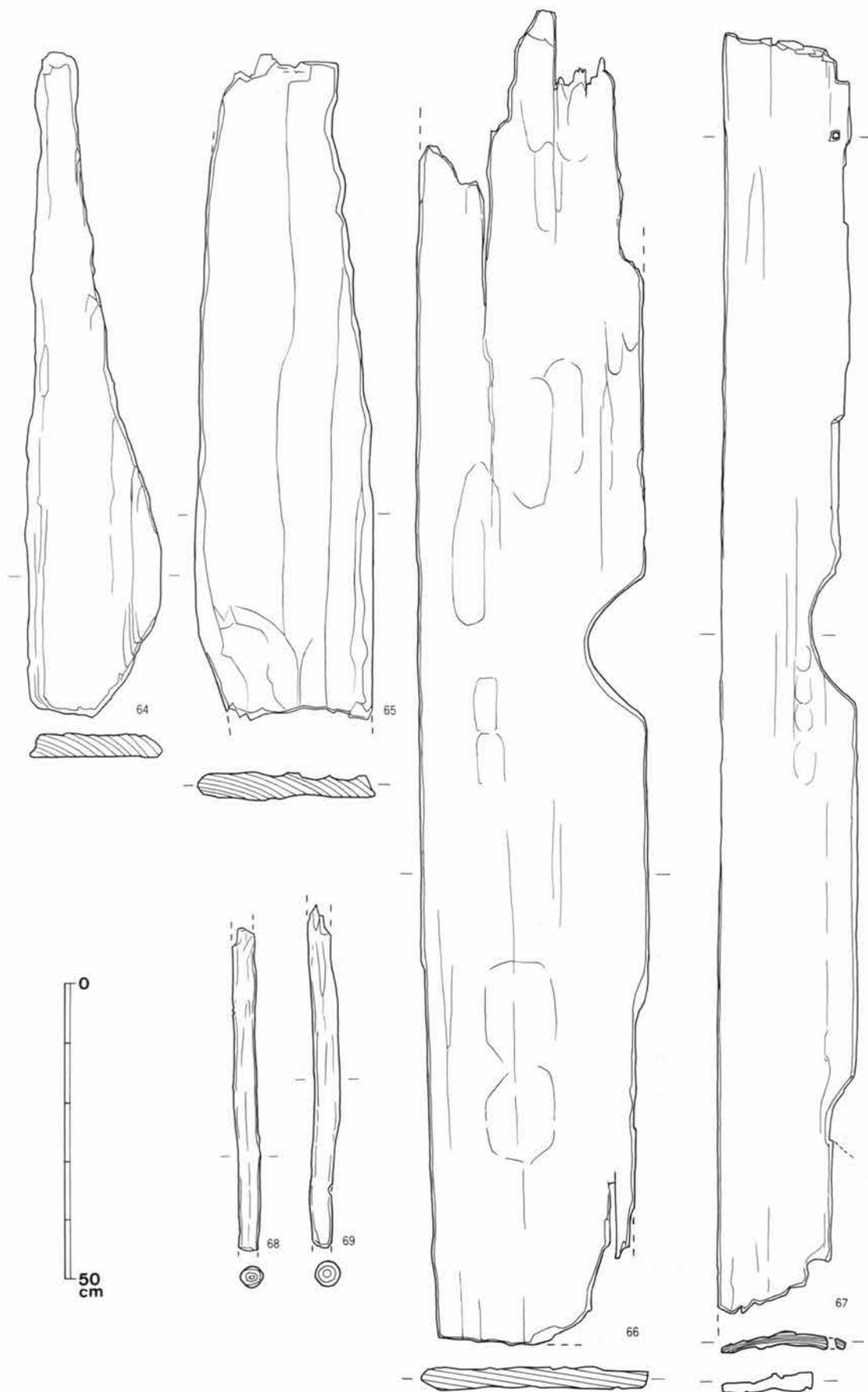
64～69は堰状施設を構成していた部材である。66が古く、67が新しい段階のものである。67は2つの水の流れ口を備えている。また、一端に方形の小孔をもつことから転用部材の可能性もある。68・69の杭材は小木をそのまま一端を削ることによって杭としたものである。

70は護岸材に使用されていた板材である。

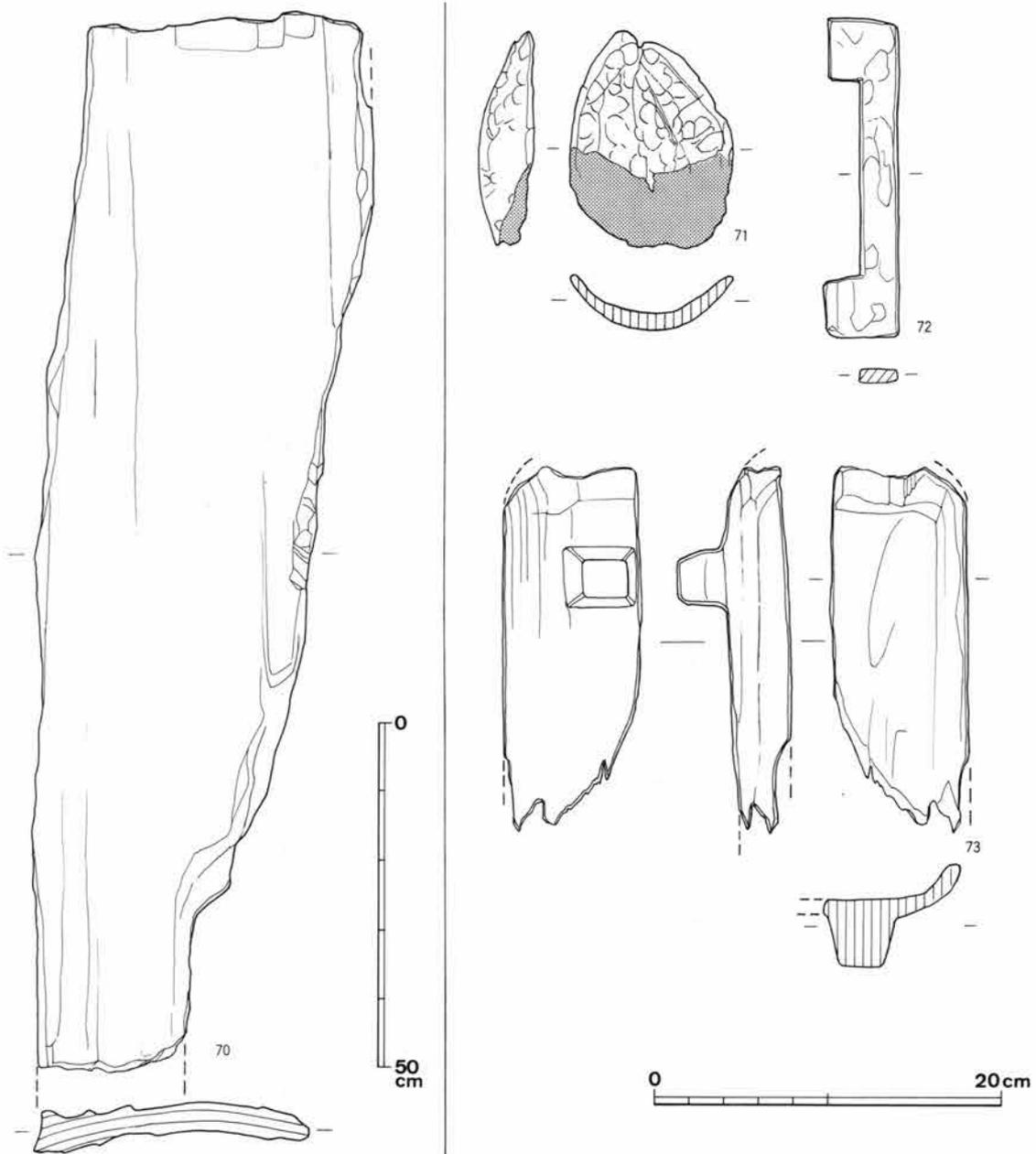
71は柄杓と考える。把手部分がなく、火を受けた痕跡がある。



第94図 溝S D2016(古)出土土器実測図(4)



第95図 溝 S D 2016(古)出土木製品実測図(1)



第96図 溝S D2016(古)出土木製品実測図(2)

72は把手状の木製品であるが、完形品であり、把手として機能していたかどうか疑わしい。

73は脚付の槽である。残存する部分から四脚であったと思われる。側面は丸みを帯びる。

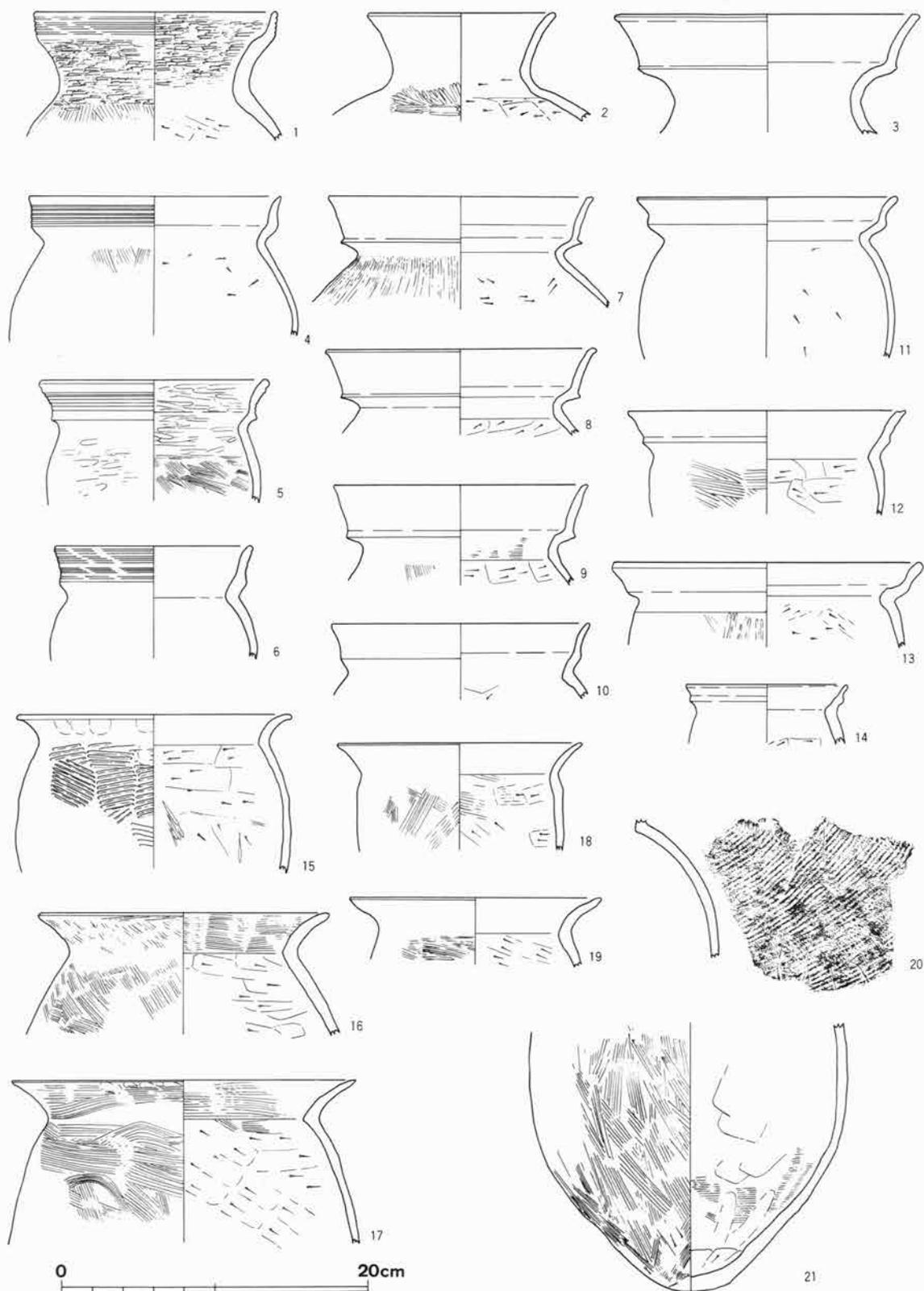
⑰溝S D2017

遺構 溝S D2016の北側で検出した幅2.1mを測る素掘りの溝である。埋土は黄褐色粗砂の単層であり、S D2016(古)より早く埋没していることが確認された。溝に伴う施設として、堰状施設を1か所検出した。堰状施設は1枚の板材を2本の杭により固定する構造をとり、板材の下部からは鉄製品1点が出土している。

出土遺物 溝S D2017出土遺物には土器・木製品がある。

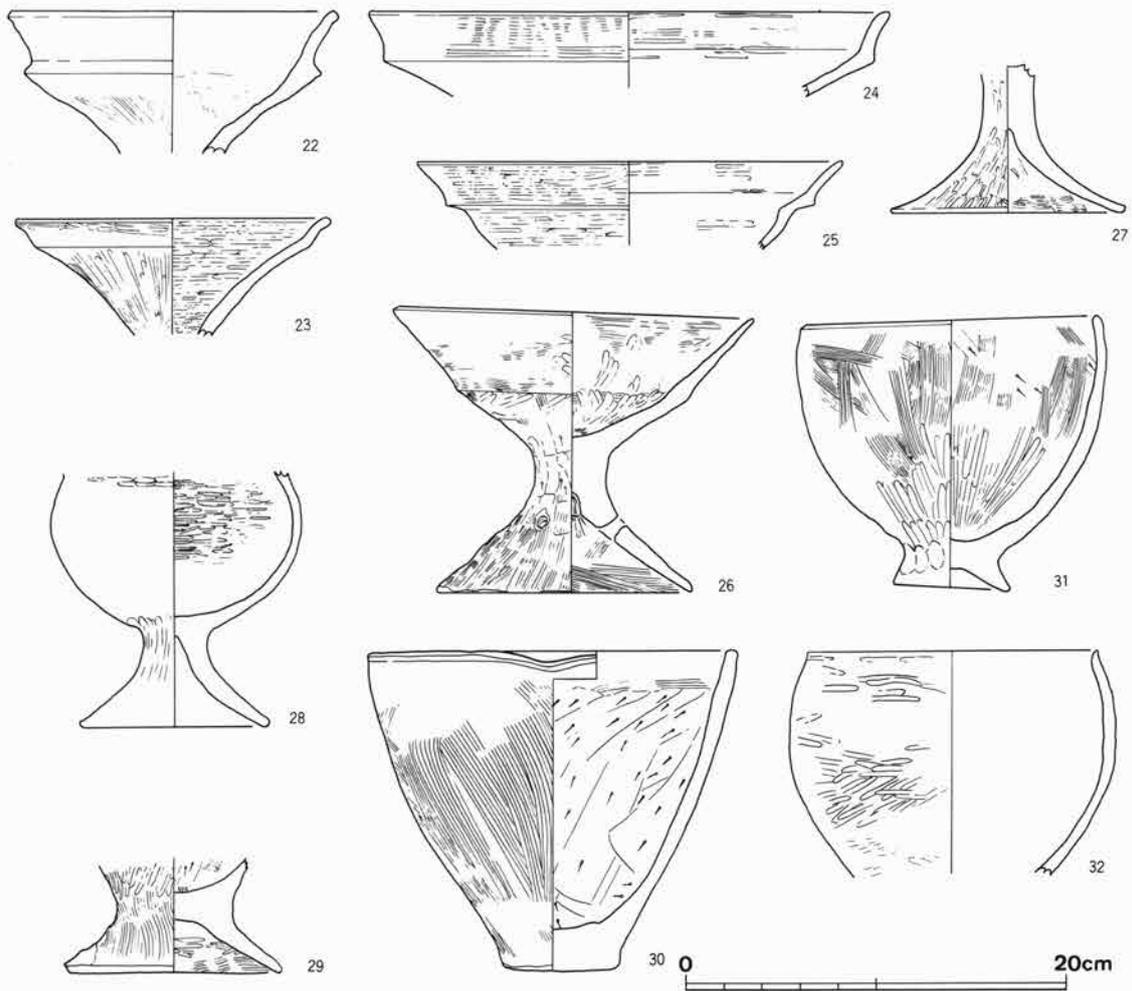
土器 出土土器は全て土師器である。器種には、壺・甕・高杯・器台・鉢がある。

1～3は壺である。1・2は広口壺、3は複合口縁壺である。1は口縁外端面に擬凹線を施す。



第97図 溝S D2017出土土器実測図(1)

4～21は甕である。甕は口縁部の形態から、複合口縁を呈するものと「く」の字口縁を呈するものに分類される。複合口縁をもつものは、擬凹線をもつもの(4～6)、擬口縁が鋭い稜を形成するもの(7～9)、擬口縁と口縁部が一体化し、鈍い稜を形成するもの(10～13)の3タイプに細



第98図 溝S D2017出土土器実測図(2)

分することができる。なお、擬凹線を施すものは鉢の可能性はある。

「く」字状口縁をもつものは、口縁が大きく外反し、端部は丸く収める。器壁の調整は、内面ヘラケズリ、外面縦方向のハケによるものが多いが、15・20のようにタタキを残す個体も存在する。底部の確認できるものは少ないが、21のように平底傾向を示すものが多い。

22・23は器台である。22は口縁下段に稜をもつ。23は弥生時代的な器台であるが、口縁下端面は垂下させず、擬凹線も認められない。

24～27は高杯である。24は外反気味に立ち上がる口縁をもつ。25は複合口縁を呈し、擬凹線は認められない。26は杯部下面に稜を形成する。脚柱部は中実であり、三方スカシをもつ。

28～32は鉢である。28・29・31は台付鉢。通常の鉢には、30のように直線的な体部をもつものと、32のように内湾する体部をもつものが存在する。有孔鉢も図示していないが存在する。底部は平底を呈し、30のタイプの鉢に穿孔を施したものである。

木製品 溝S D2017出土の木製品は少なく、堰状施設に伴う板材、杭および鍬の未製品があるのみである。

33・34は堰状施設で板材を固定するために使用されていた杭である。33が北側、34が南側を固定するために用いられていた。

35は鋏未製品である。平鋏の未製品と考えられ、幅40cm・長さ25cm・厚さ7.6cmを測る。柄装着部まで荒削りされているが、泥除け装着のための装置などはない。全体に調整は粗く、手斧と考えられる工具痕が観察される。材質は広葉樹と考える。

36は堰状施設に使用されていた板材である。全長160cm・幅45cm・厚さ3cm測る板材の長軸側に幅29cm・長さ10cmを測る三角形の鋭い切り込みを入れ、水の流れ出る口を作り出している。図示しているのは裏面であるが、手斧と考えられる工具痕が非常に良く残っている。工具による成形は非常に滑らかであり、鉄製の工具であるものと判断する。材質は針葉樹と思われる。

⑱包含層出土遺物

包含層出土遺物には土器・木製品がある。そのうち、本項では木製品のみを報告する。遺物は溝S D2010(新)上に堆積する腐植土層内から出土しており、堆積時期はS D2010(新)埋没時と考える。また、溝S D2010(新)検出作業段階で出土したのも多数含まれる。

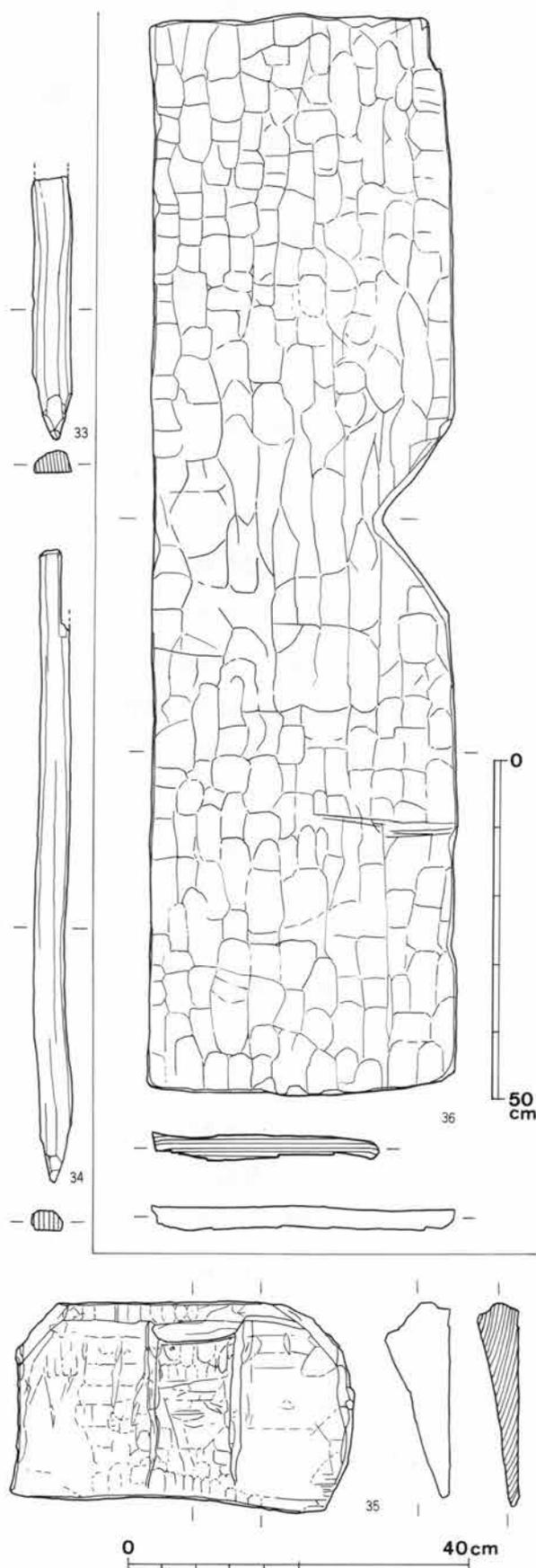
農工具には直柄平鋏未製品・曲柄鋏・鋏柄・田下駄がある。

1・2は直柄平鋏未製品である。1は柄装着部まで粗く削り出され、肩部は直角のままである。2は破片資料である。材質は両者とも広葉樹と思われる。

3は曲柄鋏笠部分の細片である。刃部の形態は不明。材質は広葉樹と思われる。

4・5は直柄鋏の柄と考える。握り部分先端を太く加工する。

6・7は大型枠組式田下駄と考える。



第99図 溝S D2017出土木製品実測図

6は先端部がくびれており、引手として紐が括られていたものと推定される。6・7ともに5か所の方孔が確認できる。

8～19はヘラ状木製品である。8のように頭部と握りの境の明確なものと、不明瞭なもの2者が存在する。また、先端部を丸く仕上げるものと、直線的に仕上げるものの2タイプが存在する。握り部分が焦げているものが多い。最長のものは9であり、全長52cmを測る。

20・21は糸巻き具と考えられる部材である。20は同形態のものが十字に組み合わせられるタイプのもと考えられ、中央に円孔がある。21は棒材に小孔を穿ち、棒材を通すタイプのものであり、現状で4本の棒材が認められる。

容器には槽・箱がある。

22～27・35は刳抜式の槽である。22は全長約41.5cmを測る中型品である。小口部分はゆるやかな弧を描き、立ち上がるが、長側辺は直線的に立ち上がる。23も22同様の中型品になるものと推測され、小口部分に相当する部分と考える。24・25は方形の小型品である。また、26は4本の脚をもつタイプである。27も槽の破片と思われる。側辺がやや丸みを帯びている。

35は大型の舟形槽である。残存長145cm・残存幅26cm・高さ16cmを測る。小口部分には断面楕円形を呈する縄掛け突起が1か所認められる。この縄掛け突起は本来、小口部分に2か所存在していたものと推される。調整はやや粗雑であり、内面に手斧の痕跡が観察される。内面の刳り抜きは直線的に仕上げられ、丸木船状を呈するものではない。

28～34・36～40は箱の部材と考えられる部材である。28～33はいずれも目釘穴を持っており、木釘により他の部材と組み合わせられたものと思われる。完形品である31は中央部分に刳り込みを施し、目釘穴は左右対称に設けられる。32は底板と考えられる部材であり、平面はいびつな半円形を呈する。底面および側面に目釘穴をもつ。

34・36～40は柄・柄穴で組み合わせられるものである。33・34のように大形のものとそれ以外のものに分類することができる。33は一方の小口に方形の刳り込みをもち、側辺には4か所の目釘穴を設け、両者の技法を併用しているものである。34は長辺に2段の掘り込みを施す装飾が施されている。38・40は一方にしか柄をもたず、箱以外の可能性もある。

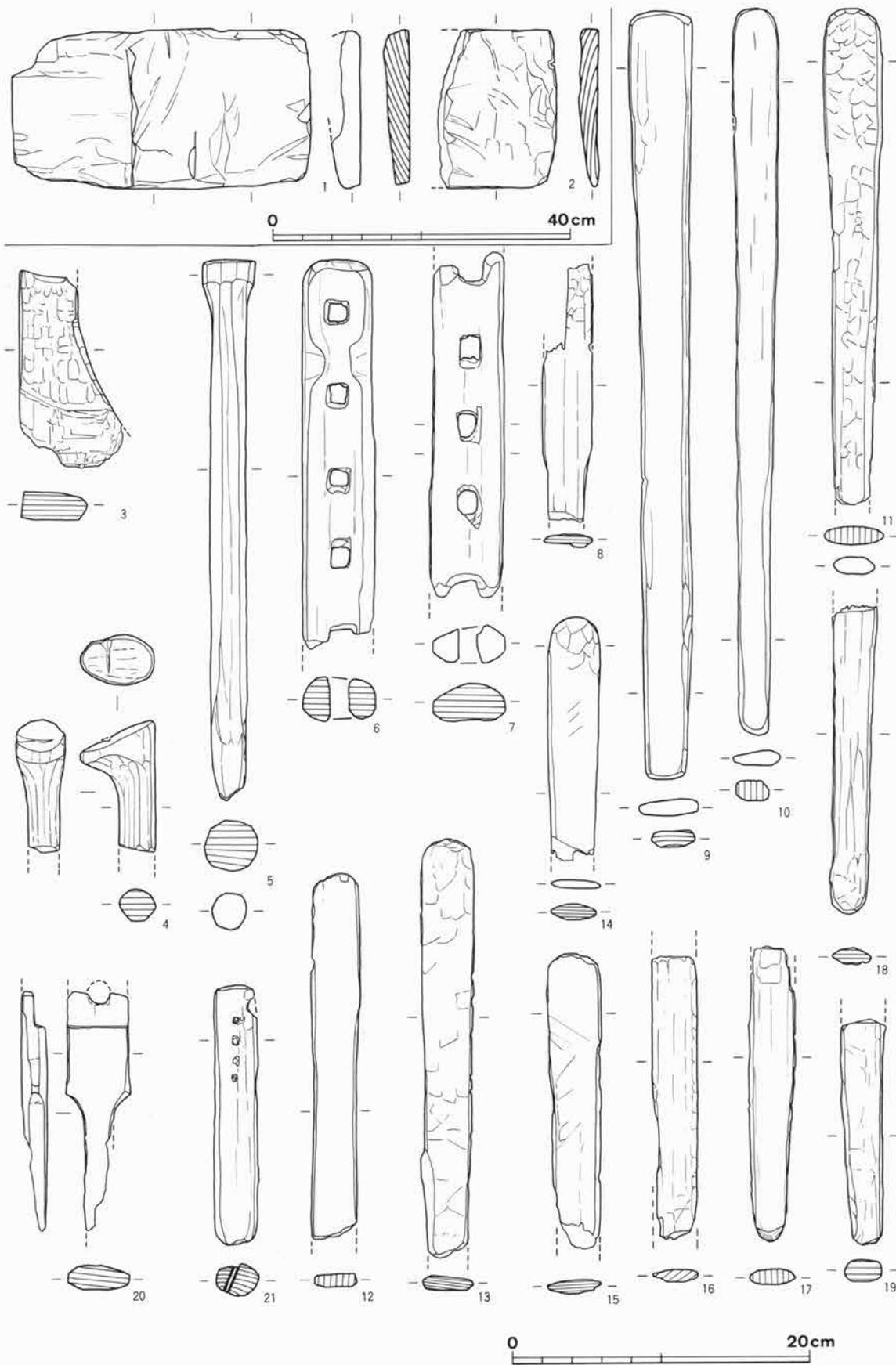
部材には、把手・栓状木製品・柄穴をもつ棒もしくは板材などが認められる。他の部材と分離しているため、用途不明なものが多い。

41は把手である。他の部材と組み合わせるための棒状部分をもち、棒状部分には1か所の柄穴が穿たれる。

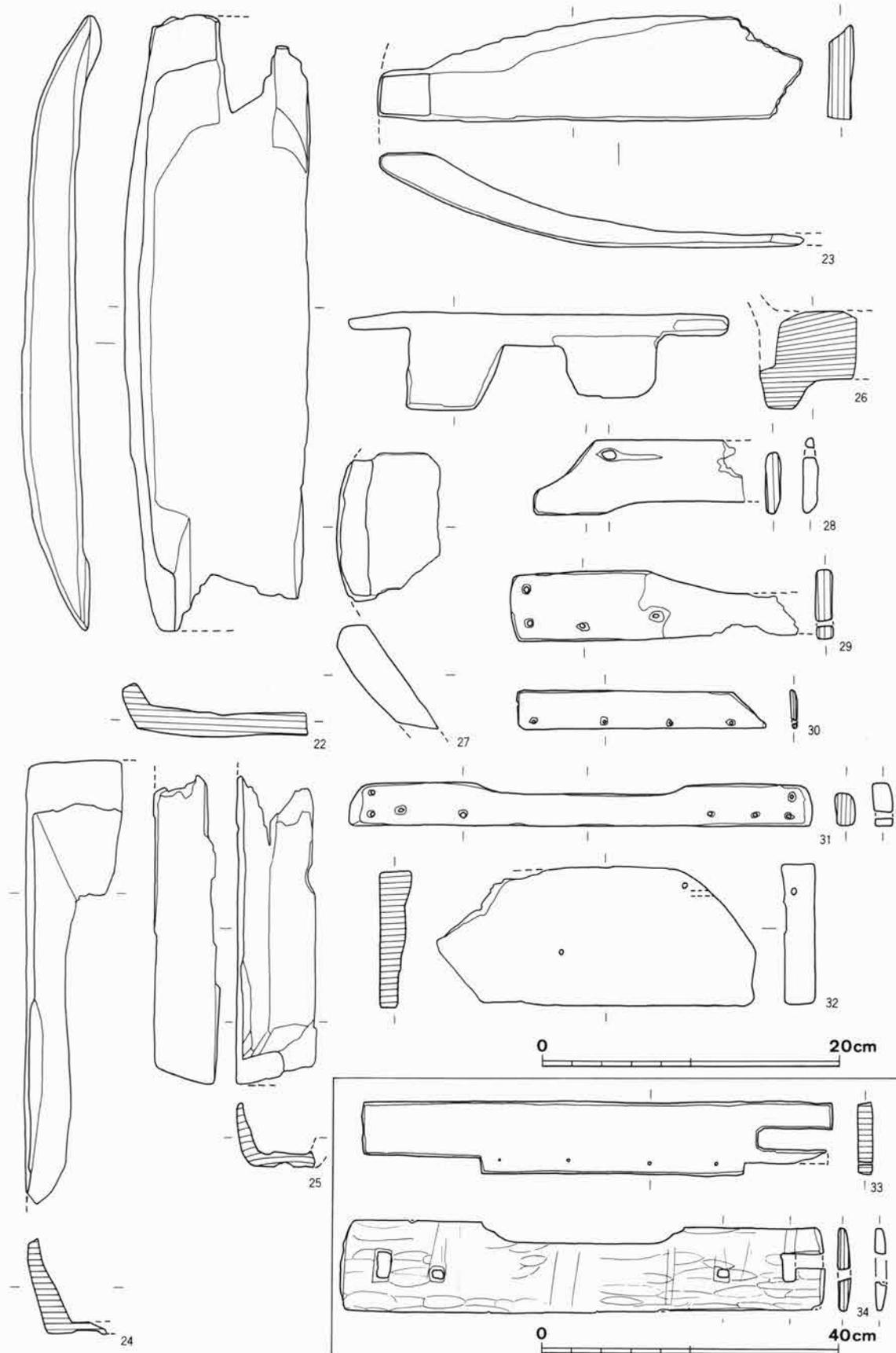
42～45は栓状の木製品である。42は装着部に柄穴をもつ。43・44は頭部を薄く造り、タタキ板の可能性も指摘できる。

46～48は柄穴をもつ棒材である。46は完形個体である。47・48は杵組式田下駄の可能性もある。47は方孔に装着された棒材を固定するための楔が遺存している。

49～51は多数の小孔を穿つ板材である。箱材とするには小孔が多く、性格不明部材としておく。50では小孔内に棒材が遺存している。



第100図 包含層出土木製品実測図(1)



第101図 包含層出土木製品実測図(2)

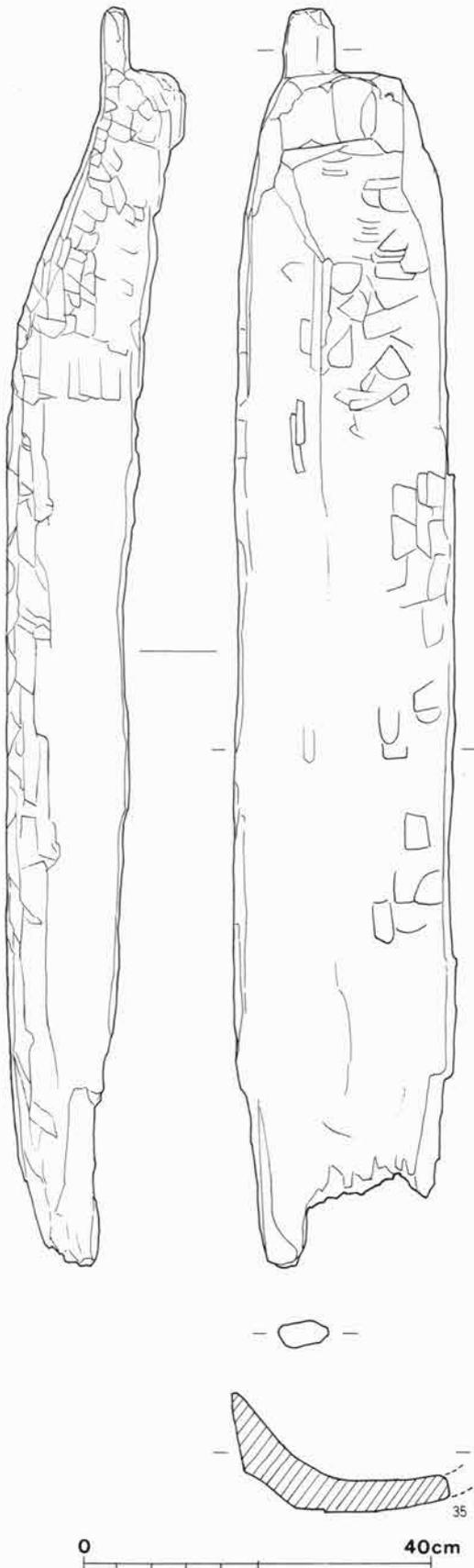
52は平成9年度S D08出土盾状木製品の部材と同形態をとり、サクラの樹皮で他の部材にくくりつけられたものと判断される。

53・54は柄穴をもつ板材であり、一方を鋭利に削り出し、一見すると木鎌のように見えるが、刃部をつくり出していない。

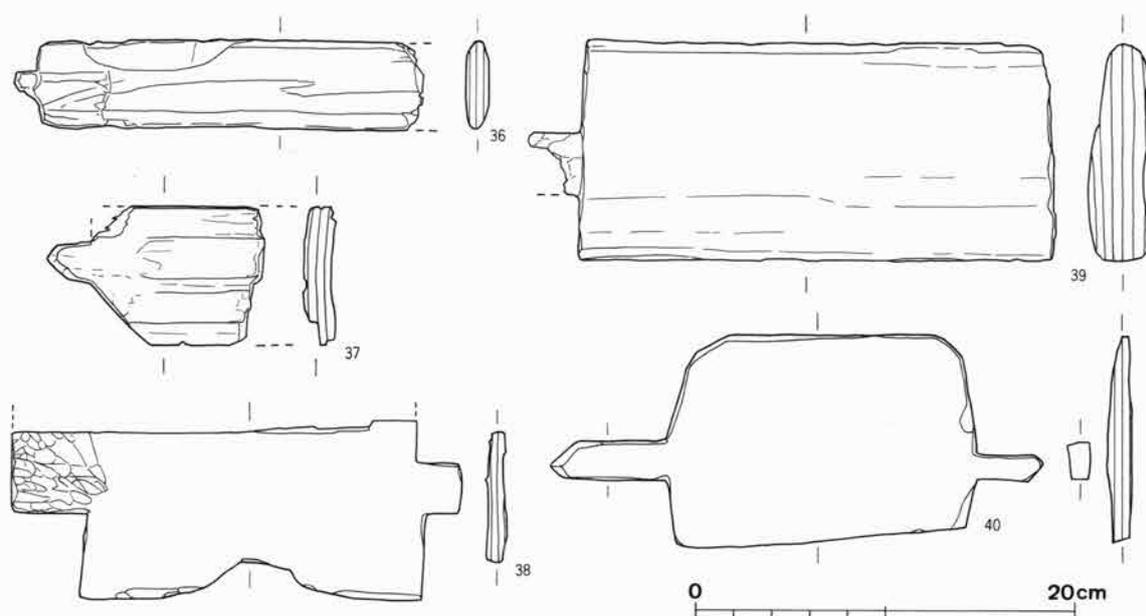
55～67は棒状の部材である。55～57・60は有頭棒である。55のように側面全体を削り、頭部を削り出すものと、一方に浅い彫り込みを設けるものが存在する。58・62は柄穴をもつものである。58は円孔を、62は方孔を穿っている。61は天秤棒状の加工を施している。63は一端を鋭利に削り出す。64は両端を細く加工し、中位を削り残す小形の棒状部材である。65～67は断面円形を呈する棒状部材であり、直径1.5cm前後を測る。

68～71は火鑕白である。68～70は方形の棒材を利用し、71は板材を利用している。いずれも複数の火口をもつが、68では両側辺ともに火口を設けている。

72～80は建築部材と考えられる大形部材群である。建物のどの部分に使用されていたか明確に判断できるものは少ない。72は両端を細く削り出す角柱材である。73は46cmの間隔をあけて方孔を設ける板材である。75は柱頭部に柄を造り出す柱材と思われる。76は一方の小口部分を細く削り出し、反対側には方孔を設ける。また、1か所円孔をもつ板材である。77は2か所の方孔をもつ板材である。78は側辺に三角形の切り込みを2か所設けている。79は2か所の台形の削り込みをもつ棒材であり、屋根を構成する部材の可能性がある。80は壁材を装着するための溝が掘り込まれ、一方には柄穴が設けられていることから、桁材もしくは主柱である可能性が考えられる。これらの建築部材はS D2010(新)



第102図 包含層出土遺物実測図(3)



第103図 包含層出土木製品実測図(4)

出土資料を補うものとする。

81～83は杭材である。柄穴や削り込みをもつため転用部材と考える。

形代類は武器の形代が多い。

84は剣形である。剣身は鑄をもち、刀装具の表現はない。残存長41cmを測る。

85～90は刀形である。柄の表現は多様性に富む。85は屈曲する柄を表現しており、柄尻は三角形に肥厚させる。関は両関である。86は片関の刀を模している。柄は直線的に作られ、柄尻は肥厚させる。87は鞘と柄の間に溝を彫っている点から考えて、さやに収められた状態の刀を模倣しているものとする。柄は短く、鏝に相当する部分が肥厚している。88は峰部分に関をもつ刀を模倣したものと思われる。柄は峰部分を台形に削り残し、刃部側は直線的に仕上げる。柄尻は肥厚させる。89は刀身部分、90は柄部分の細片である。

96は刀子を模したものと考えられる。刀身部分は刃部をやや丸く仕上げる。

97は鏃の形代と考える。棒状部分の先端部分を削り、後ろに逆刺の表現を施す。

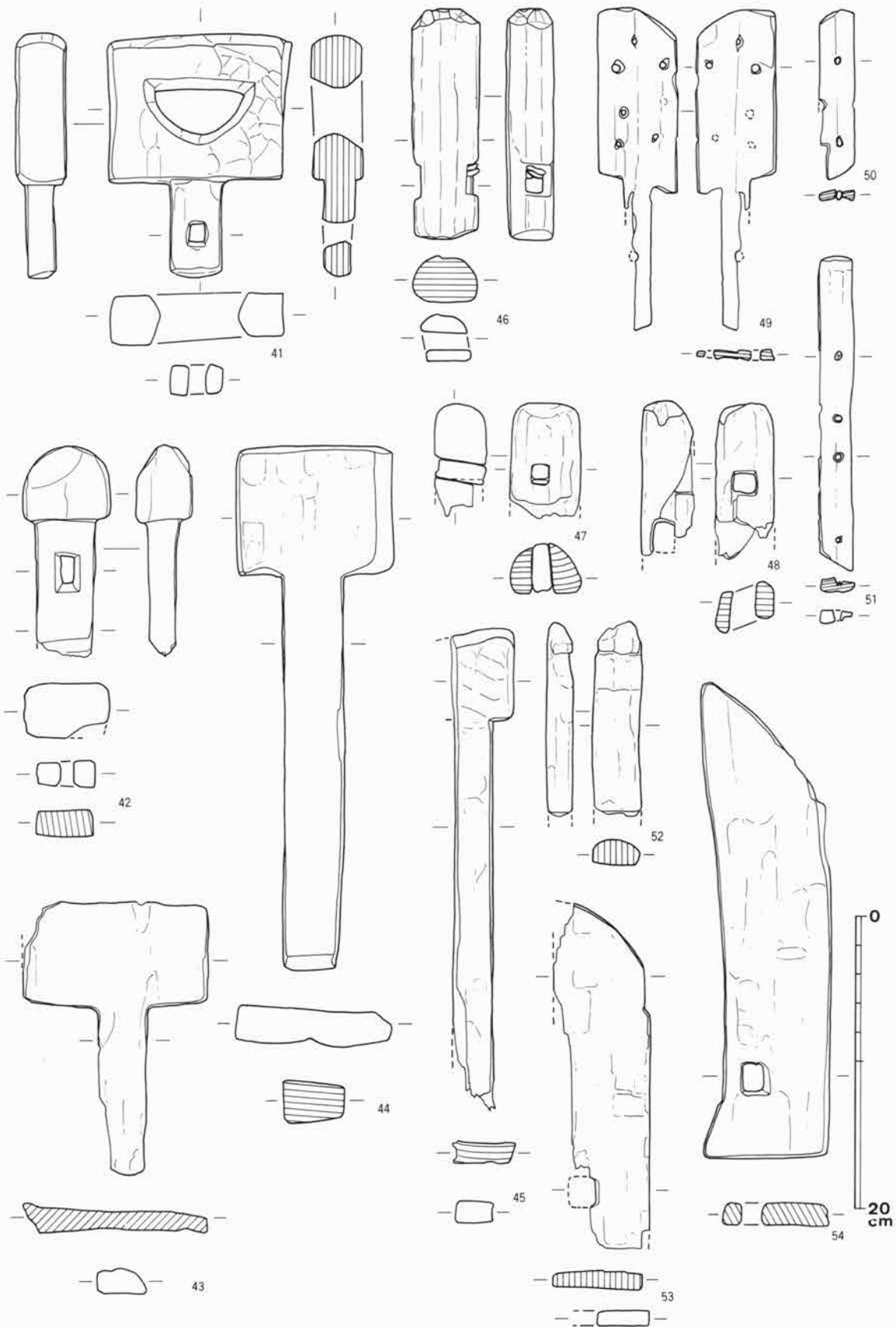
91・92はその形態から鳥形の可能性がある。91は長側辺に溝が設けられており、他の部材をくくりつけていた可能性が考えられる。

93・94は斎串状の木製品である。一方の先端部を鋭く削り出す。93は全長31.6cm、94は残存長28.5cmを測る。

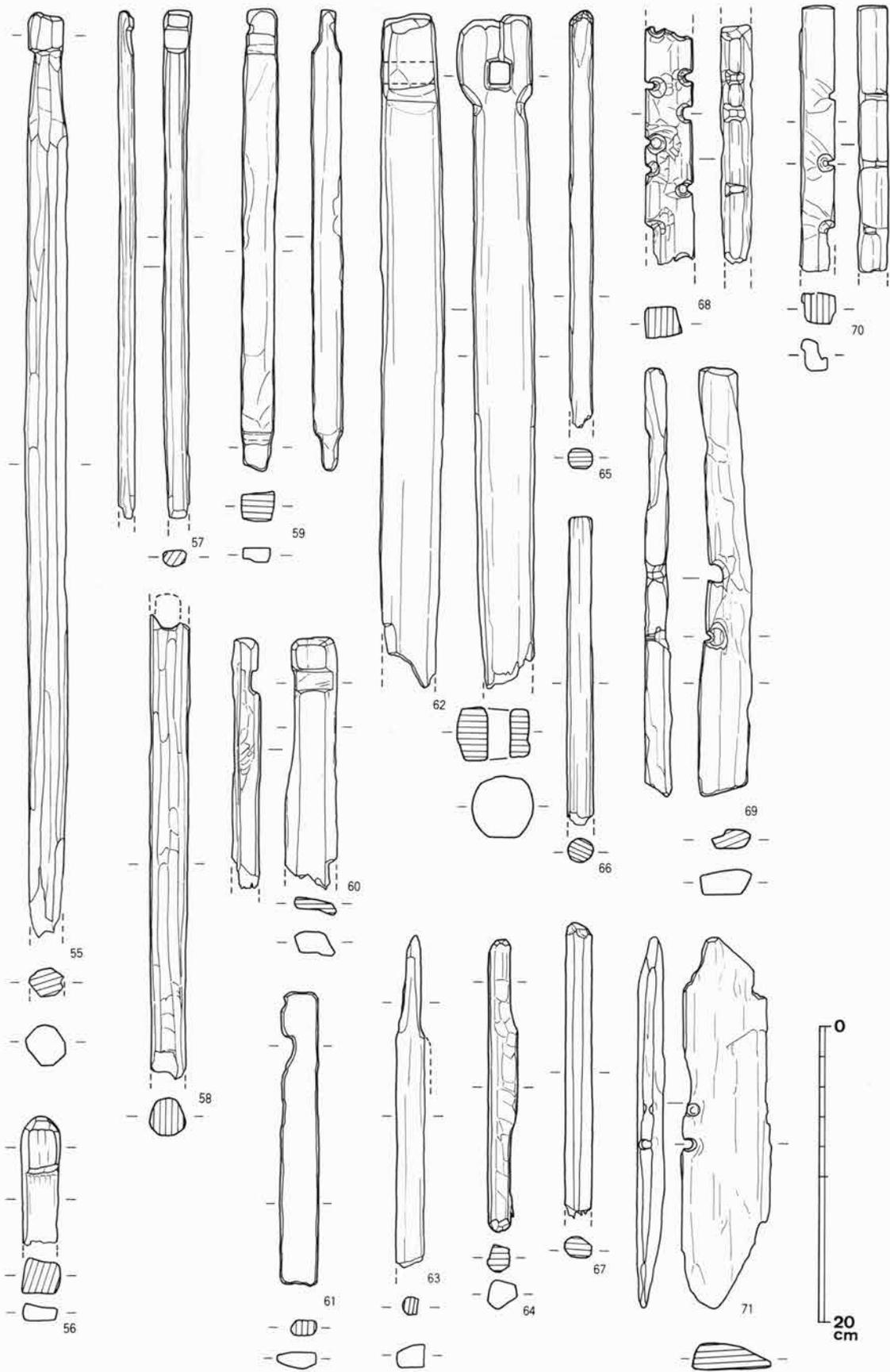
95は全長33cmを測る断面三角形の棒材の各長側辺に、複数の刻目を設けている。また、一方の先端部分を串状に細く削り出す。一応、形代としておくが、性格は不明である。

98は錐状の木製品である。いびつな扁球形を呈する板状部分に直径8mmの棒状部分が取り付け形態をとる。一応、錐の形代としておくが、木釘である可能性も考慮しておきたい。

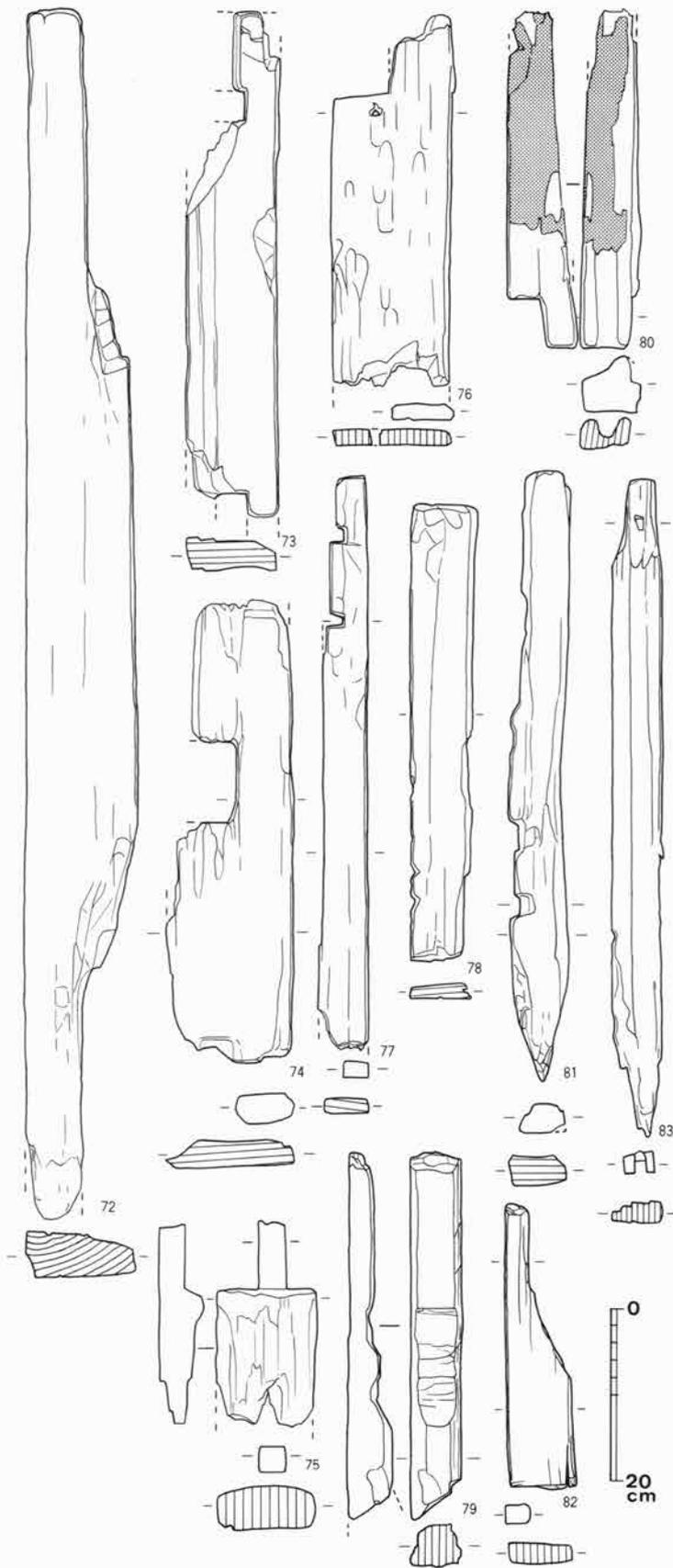
99は弓である。直径2cmを測る棒材を加工している。弓弭部分は刀状に削り出されるが非常に



第104図 包含層出土木製品実測図(5)



第105図 包含層出土木製品実測図(6)



第106図 包含層出土木製品実測図(7)

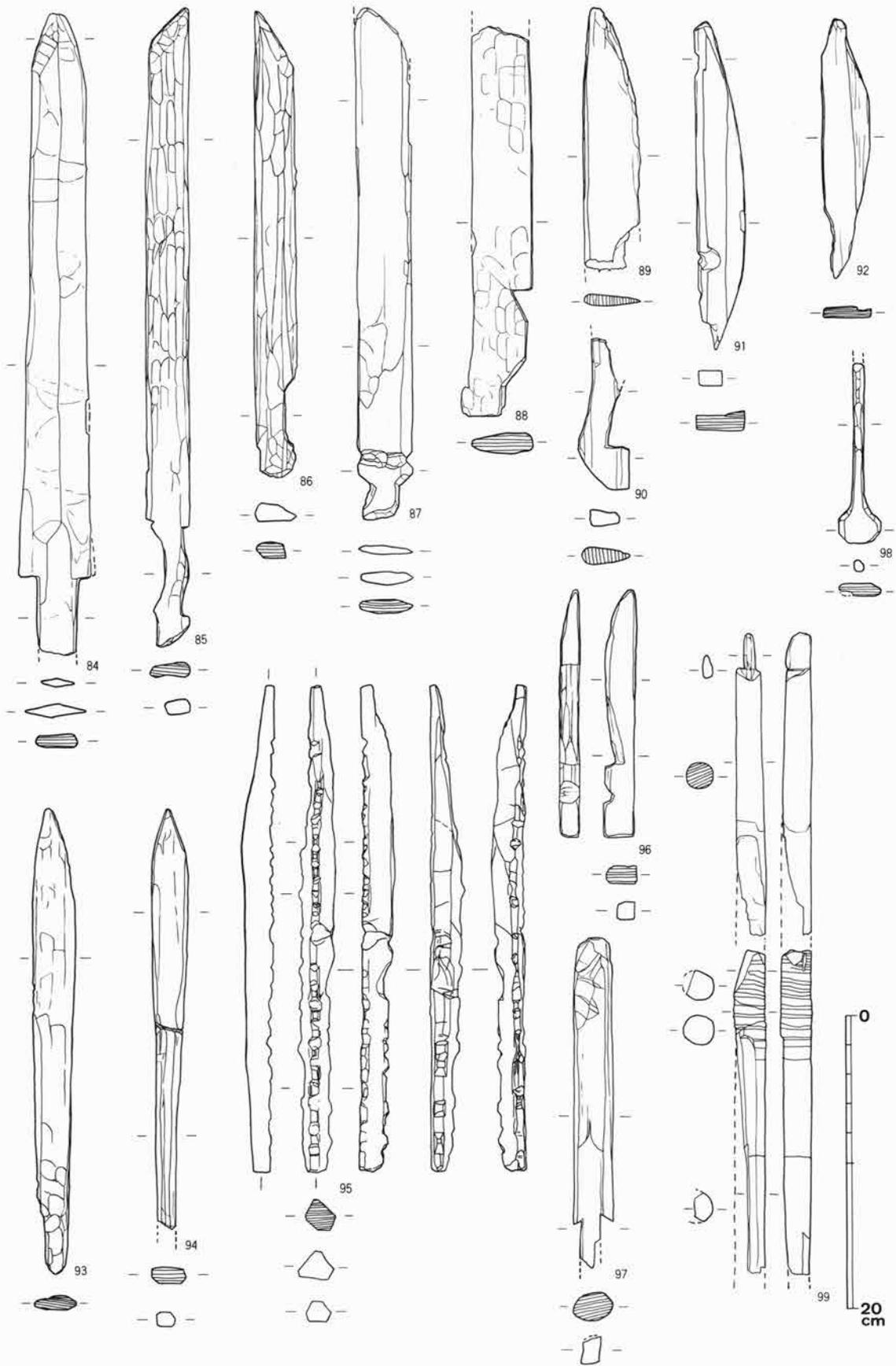
貧弱であり、実用品とみた場合この部分に別造りの弓弭が装着されたものと判断する。中央には蔓の巻かれていた痕跡があり、周辺部には黒漆が塗布されている。総長40cm余りが遺存しているが、長弓であるか、短弓であるか判断できない。

以上、包含層出土の木製品について概観した。これら包含層出土木製品は、溝SD2010(新)や溝SD2011出土木製品を補完するものとして位置付けることができる。注目されるのは武器形代類の多さである。これら武器形代は模擬戦を伴う祭祀行為が行われた後に放棄され、包含層形成時にバックされたものであると推定する。

C. 歴史時代の遺構・遺物

飛鳥時代以降に属する遺構・遺物には、微高地上で検出した掘立柱建物跡群・段状遺構・土坑・ピット群および谷部分で検出した溝群がある。

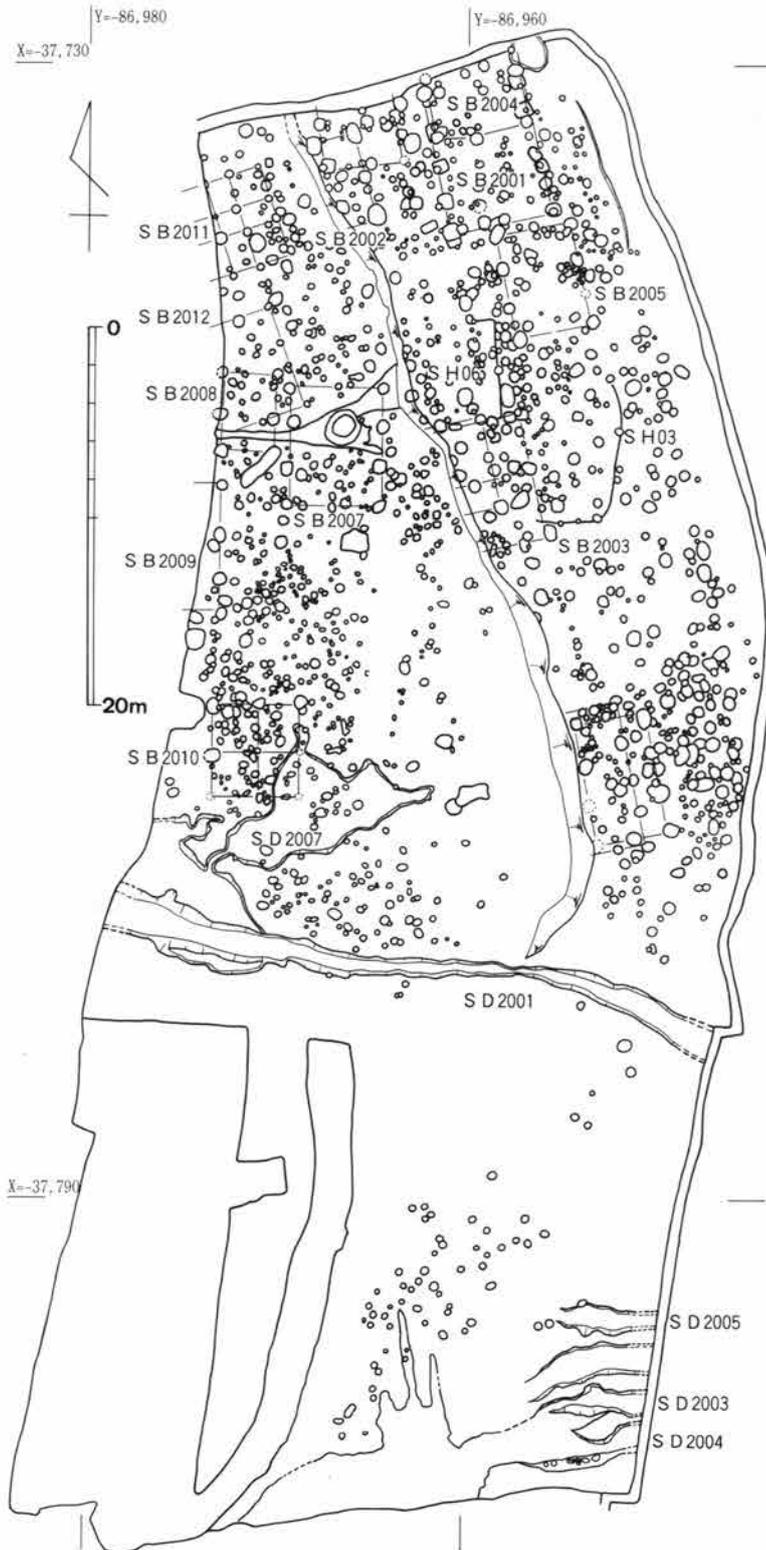
掘立柱建物跡群の復原に関しては、現地で調査段階において確認したもののほかに、調査終了後、図上で下層遺構から柱穴を拾い出し、遺物・埋土の状況などを検討した上で行った。しかしながら、全



第107図 包含層出土木製品実測図(8)

でのピット群について検討を行うことはできず、本概要報告で述べる以上に建物は多かったものと推測する。

また、遺物に関しては、遺構出土の遺物以外に包含層中から多数の土器(須恵器・土師器・施釉陶器・輸入陶磁器類)を得ているが、特殊なものを除いて本概要報告では報告することができ



第108図 上層遺構配置図(1/400)

なかつた。包含層中からは多数の鉄滓も出土しており、鍛冶関連遺構が近隣に存在することも十分考えられるが、これについても整理することができなかつたことを記しておく。

今回の調査で復原された掘立柱建物跡は総数15棟である。段状遺構は2基を確認し、溝は6条を検出することができた。ピット群については約2,000基を数えている。

以下、主要な遺構・遺物について概観する。

①掘立柱建物跡群

A地区で復原した掘立柱建物跡群は総数15棟に及ぶ。これらの建物群は主軸方位により、4群に分類される。またこれらの軸にのらない建物も存在する。今回の報告ではこれら主軸を同じくする建物を中心に概略を述べることにする。なお、便宜上A～D群として報告する。以下各群ごとに概要を説明する。

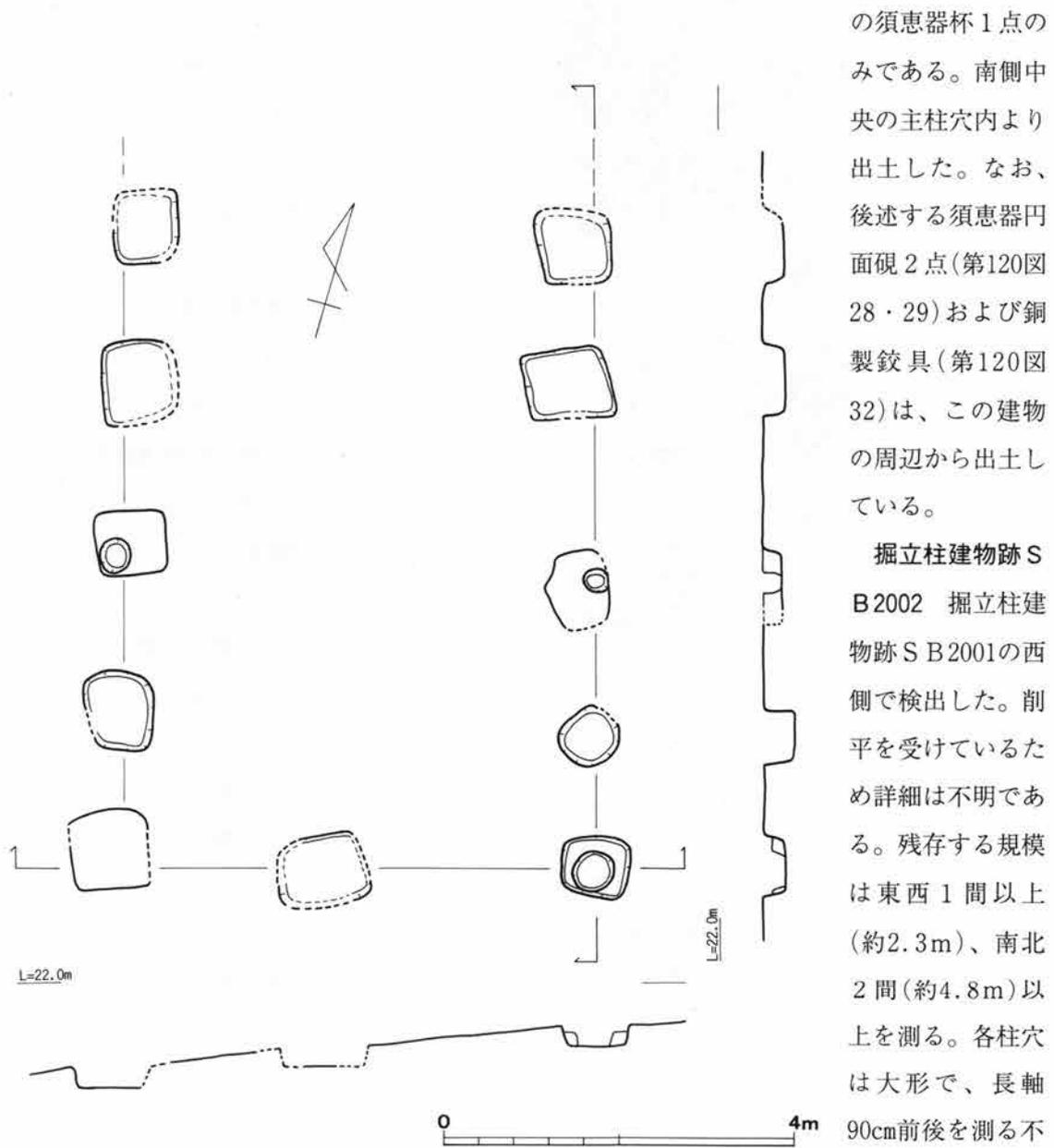
掘立柱建物跡A群 掘立柱建物跡A群は、微高地上北側を中心に検出した。主軸をN17°Wにとる。掘立柱建物跡

S B 2001～2003の3棟が該当する。後述する掘立柱建物跡B群に切られることから、計画的に配置された最初の段階の建物群と考える。

掘立柱建物跡 S B 2001 微高地上北東部で検出した主軸を南北にとる大形の掘立柱建物跡である。規模は東西2間(約5.6m)・南北5間以上(約7.4m)を測る。北側中央の柱穴が確認されなかったため、さらに北側の調査区外へと伸びるものと判断する。柱間はやや不揃いである。また、ベースとなる遺構面が東から西へ傾斜しており、平地式とみるよりは高床式建物と考える方が妥当である。各柱穴は1辺90cm前後の不整形を呈している。

なお、この建物の西側には、わずかに緩斜面をカットし、平坦面を作り出すような造成が認められ、建物構築に際するものと判断された。

出土遺物は柱穴内から土師器・須恵器の細片が出土しているが、図示できるものは第111図1



の須恵器杯1点のみである。南側中央の主柱穴内より出土した。なお、後述する須恵器円面硯2点(第120図28・29)および銅製鉸具(第120図32)は、この建物の周辺から出土している。

掘立柱建物跡 S B 2002 掘立柱建物跡 S B 2001の西側で検出した。削平を受けているため詳細は不明である。残存する規模は東西1間以上(約2.3m)、南北2間(約4.8m)以上を測る。各柱穴は大形で、長軸90cm前後を測る不整形を呈してい

第109図 掘立柱建物跡 S B 2001実測図

る。柱穴は総じて深く掘削されている。

出土遺物は柱穴内から須恵器・土師器の細片が出土したが、図示できるものはない。

掘立柱建物跡 S B 2003 掘立柱建物跡 S B 2001・2002より若干南に離れて位置する。東側は大きく削平されており、全容は不明であるが、残存する部分から総柱建物と考える。規模は東西2間以上(約3.6m)、南北2間(約6.8m)を測る。また、南北軸の主柱穴間には小形で浅い柱穴が認められ、東柱を有していたものとする。柱穴は周辺部のものは方形であるが、東柱と考えられるものは円形を呈する。

遺物は須恵器・土師器の小片が主柱穴内から出土している。図示できるものは第111図2の須恵器杯1点のみである。

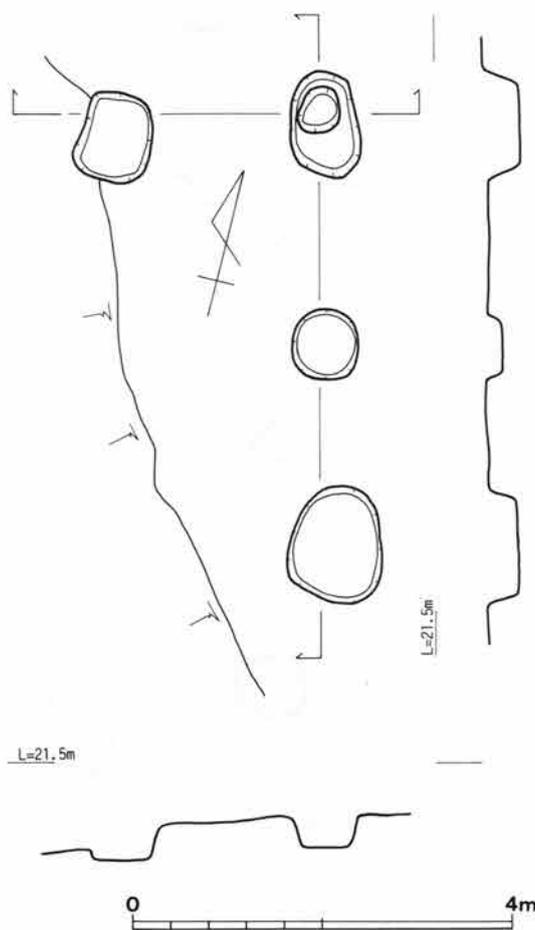
掘立柱建物跡 B 群 掘立柱建物跡 B 群は、ほぼ掘立柱建物跡 A 群と重複するような状態で検出した。また、主軸方位も掘立柱建物跡 A 群とほぼ同一である。各柱穴の切り合い関係からみて、掘立柱建物跡 A 群に後出する建物群と判断される。掘立柱建物跡 S B 2004～2006の3棟が該当する。

掘立柱建物跡 S B 2004 掘立柱建物跡 S B 2001を切る建物である。北側部分は調査区外にのびているため全容は不明である。規模は東西2間(約5m)・南北1間以上(約2.8m)を測る。柱穴は直径70cm前後の円形のものが多い。南側の柱列がやや不揃いであり、柱間も等間隔ではない。

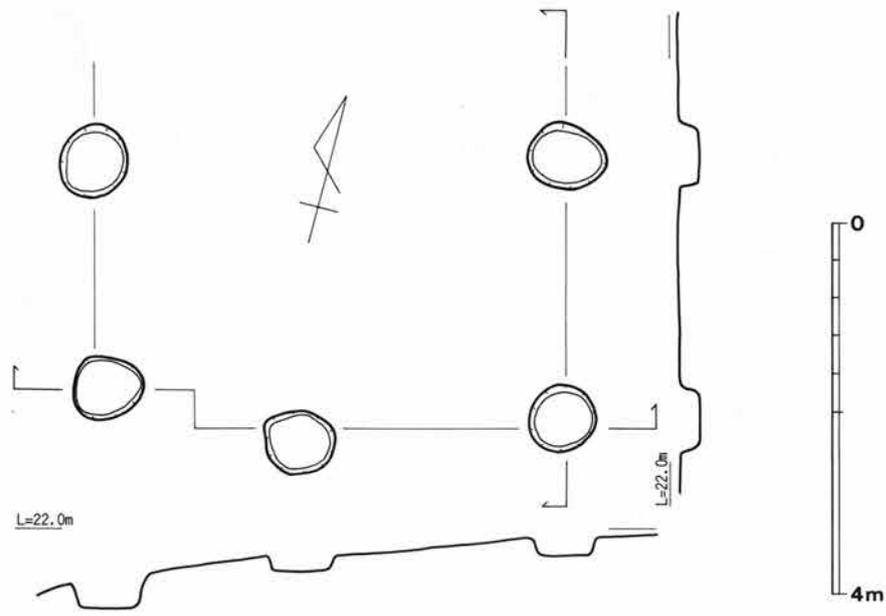
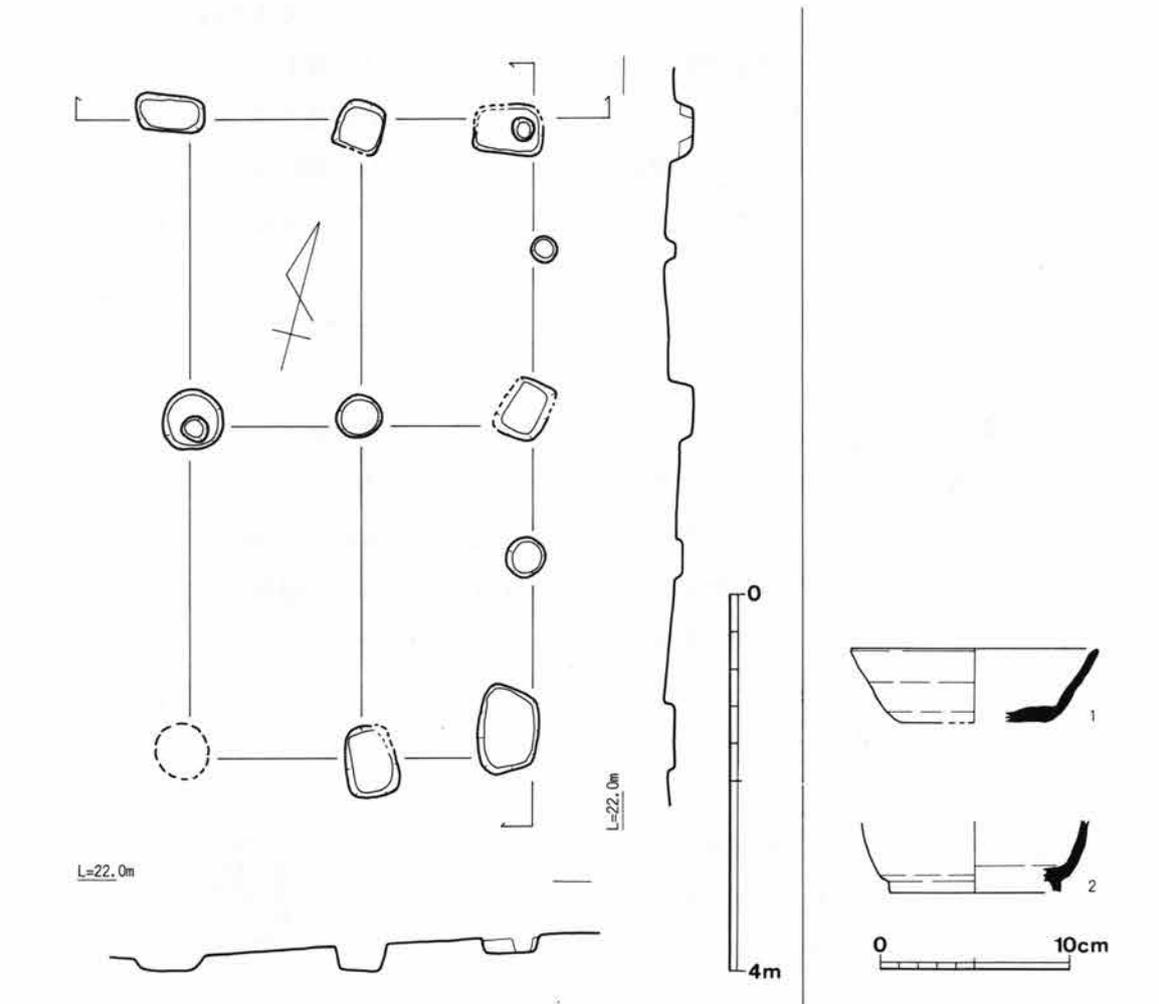
遺物は細片化した土師器・須恵器が出土しているが図示しうるものはない。

掘立柱建物跡 S B 2005 掘立柱建物跡 S B 2002を切る建物である。規模は東西2間(約4m)・南北3間(約5.8m)を測る。柱穴は直径70cm前後の円形のもので構成される。また、各柱穴の底面レベルはほぼ一定である。遺物は各主柱穴から須恵器・土師器片・鉄滓などが出土している。そのうち北東隅主柱穴内から出土した須恵器(第112図1・2)、南西隅主柱穴内から出土した黒色土器(第112図3)・白磁(第112図4)・土師器(第112図5)を図示している。

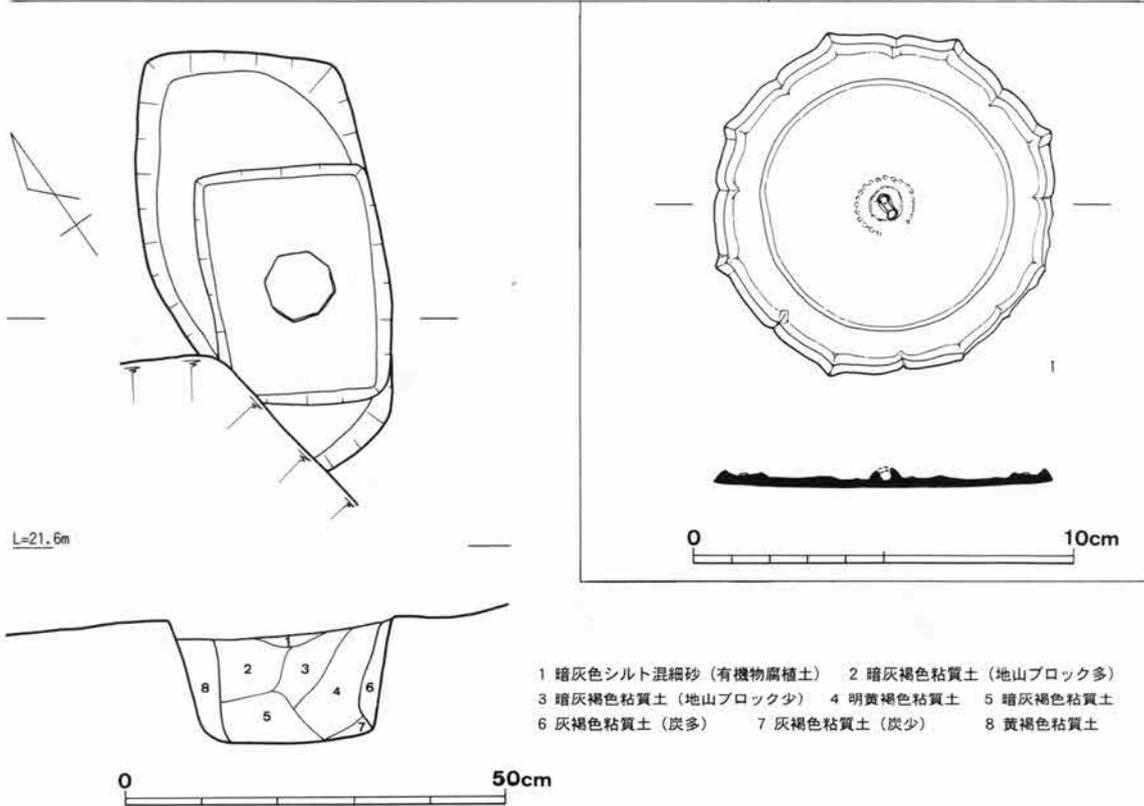
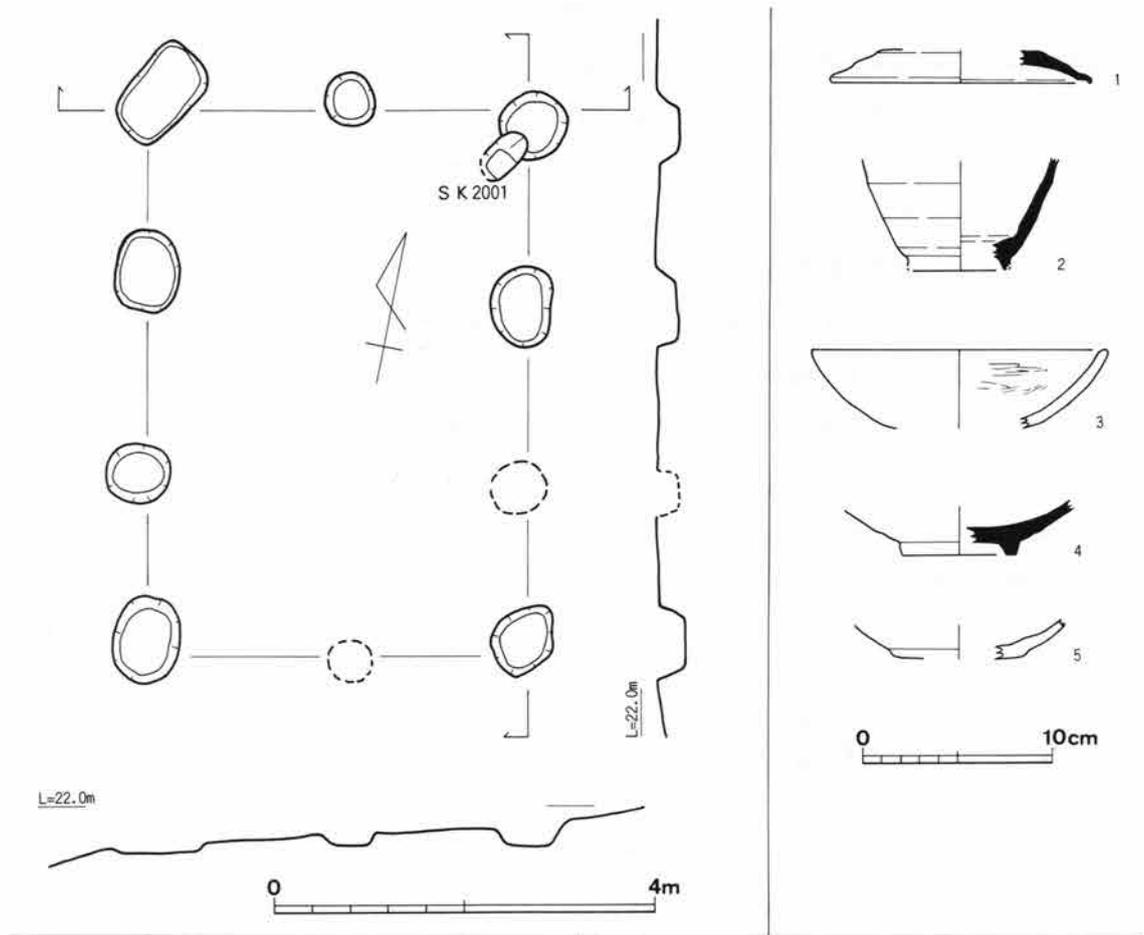
なお、この掘立柱建物跡の北東隅主柱穴を切るかたちで土坑を1基検出した(S K 2001)。土坑は長軸55cm・短軸32cm・深さ16cmを測る不整長方形を呈する。掘形は素掘りの形態をとる。埋土の状況や平面的な調査を行った結果、この土坑には木製の容器が納められていたものと判断した。木製容器の痕跡は、周辺



第110図 掘立柱建物跡 S B 2002実測図



第111図 掘立柱建物跡 S B 2003・2004および掘立柱建物跡 A 群出土遺物実測図



第112図 掘立柱建物跡 S B 2005 および出土遺物・土坑 S K 2001 および出土遺物実測図

部に炭化した木質が確認されたことから容易に識別することができた。容器は平面長方形で、規模は長軸31cm・短軸23cmを測る長方形の箱状のものと考える。この土坑の最上層には、布等の腐食したと考えられる有機質土が認められ、この有機質土にくるまれるような状況で鏡1面が鏡面を上にした状況で検出された。なお、この遺構については墓の可能性も考えられたため、埋土は全て持ち帰り水洗選別を行ったが、火葬骨やその他の遺物は検出されなかった。そのため、この土坑S K 2001は掘立柱建物跡S B 2005に伴う地鎮行為を行ったものとする。

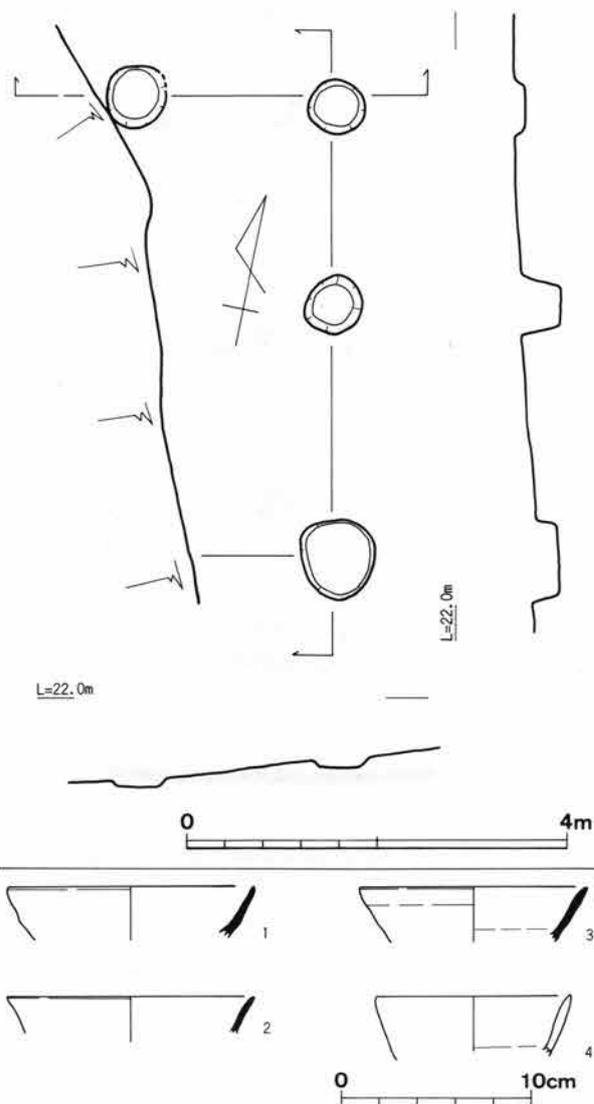
出土した鏡(第112図下段1)は八稜鏡である。面径9.3cmを測り、鏡面はわずかに凸面を形成する。鈕座周辺には複数の珠文様の突起が確認できる。外区と内区の境は一段の段を形成している。鏡背は錆が著しく、文様を読みとることは困難である。X線写真(図版第70)による観察を行った結果、内区には、2匹の鳥および花と考えられる文様が確認できた。鳥は羽を広げた頸の長い鳥であり、鳳凰の可能性が考えられる。

掘立柱建物跡S B 2006 掘立柱建物跡S B 2003を切る。規模は東西1間(約2.1m)以上、南北

2間(約5m)を測る。柱穴は直径60cm前後の円形のもので構成される。

出土遺物は各柱穴から須恵器・土師器細片が出土した。そのうち、北側中央柱穴から出土した須恵器(第113図1・2)、北西側柱穴から出土した須恵器(第113図3)、南東側柱穴から出土した土師器(第114図4)をそれぞれ図示している。これら遺物から見る限り、掘立柱建物跡S B 2006は掘立柱建物跡S B 2005より古く、むしろS B 2001などの掘立柱建物跡A群に近いものと考えられる。おそらく掘立柱建物跡S B 2003を建て替えたものであろう。

掘立柱建物跡C群 C群は主軸を真北にとる建物群である。A地区微高地上下段で検出した4棟の掘立柱建物跡S B 2007～2010が該当する。これら、掘立柱建物跡C群は、緩斜面状を呈する遺跡の東側斜面を大きく削り、西側を平らに整地することにより築造されている。したがって、遺構の状況から見て、A・B群より後出する建物群であるとする。



第113図 掘立柱建物跡S B 2006および出土遺物実測図

掘立柱建物跡S B 2007 掘立柱建物跡C

群の中で最も東より、造成面に近いところに位置する掘立柱建物跡である。主軸を南北方向にとる。規模は南北3間(約6.3m)・東西2間(約4.8m)の規模をもつ。柱穴は直径70cm前後を測る大形の円形を呈するものにより構成される。柱痕の検出されたものでは、径約30cmの柱が使用されていたものとする。

遺物は各柱穴から細片化した土師器・須恵器などが出土しているが、図示できるものはない。

掘立柱建物跡 S B 2008 掘立柱建物跡 S B 2008の西に近接する総柱の掘立柱建物跡である。S B 2008ときわめて近接することから、同時併存していたとは考えにくい。西側部分は調査区外のため詳細不明である。現存する規模は東西2間以上(約2.8m)、南北2間(約4m)を測る。南北の柱間に比して、東西方向の柱間が短い。柱穴は径70cm前後を測る円形のもの主体であるが、中央南北柱列は径40cm前後のやや小ぶりなものである。

遺物は柱穴埋土中から、須恵器・土師器片が出土している。いずれも小片である。そのうち、南西隅柱穴から出土した須恵器を図示している(第115図1・2)。1は鉢。2は杯蓋である。

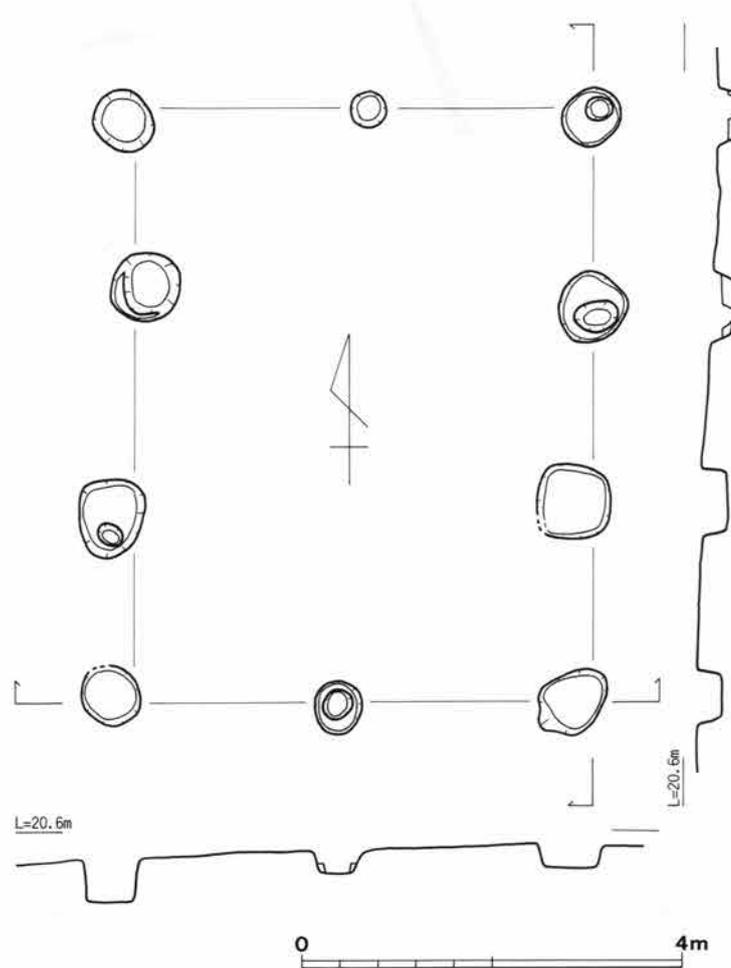
掘立柱建物跡 S B 2009 掘立柱建物跡 S B 2008の南に近接して位置する。西側部分は調査範囲外となっており、南北軸方向の柱穴列のみを確認した。規模は南北3間(約7m)を測り、南北方向に主軸をとるものと推定される。柱穴は直径70cm前後を測る円形のものにより構成される。

遺物は各柱穴埋土から須恵器・土師器片が出土している。図示しうるものはないが、底部を回転糸切りにより、切り離す須恵器杯が存在する。

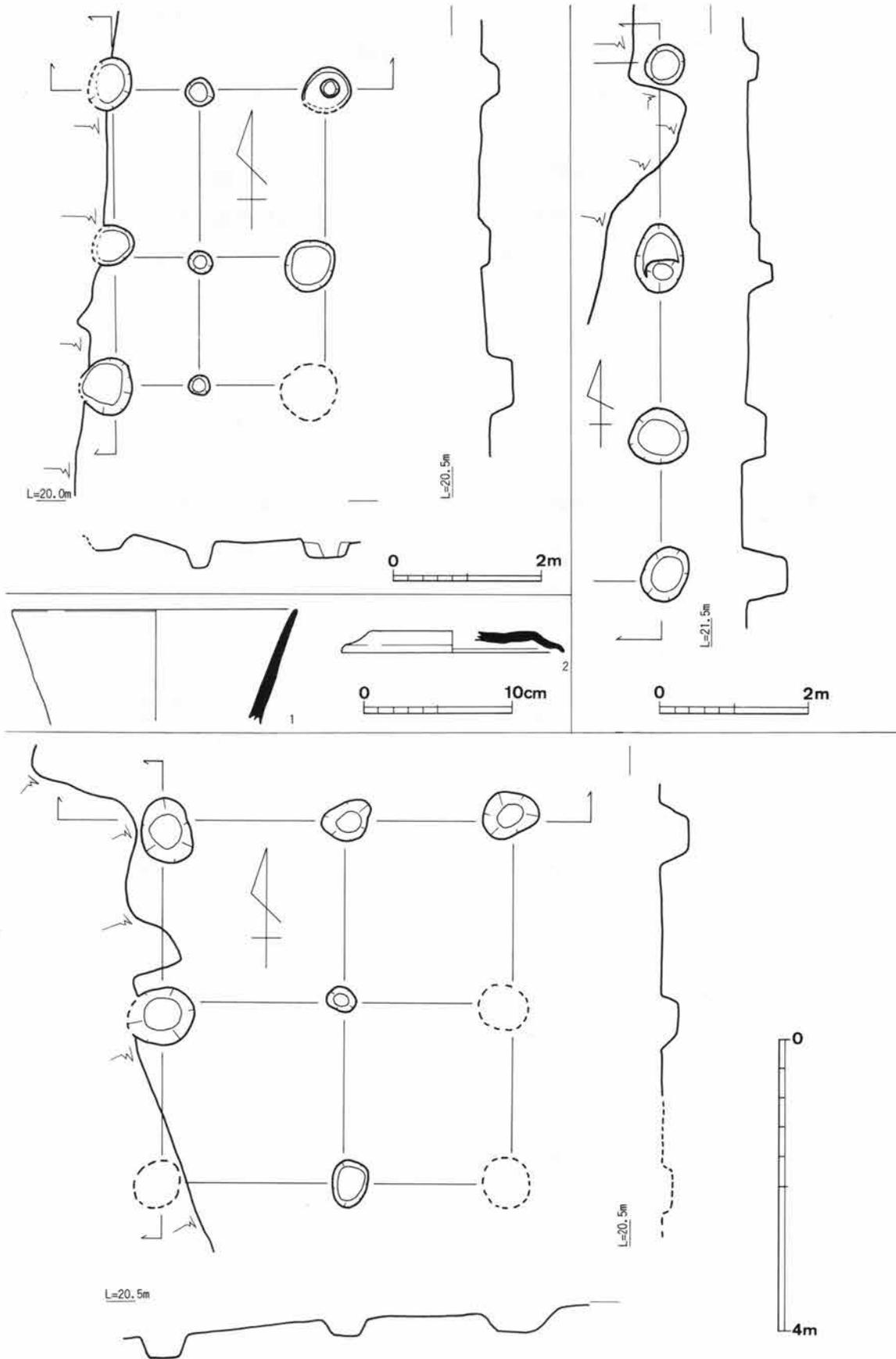
掘立柱建物跡 S B 2010 上記3棟の建物からわずかに南に離れて立地する総柱建物跡である。溝 S D 2007に削平される。規模は南北2間(約5m)・東西2間(約4.8m)を測る。規模・形態から倉庫の可能性はある。

遺物は各柱穴埋土から須恵器・土師器片が出土している。図示しうるものはない。

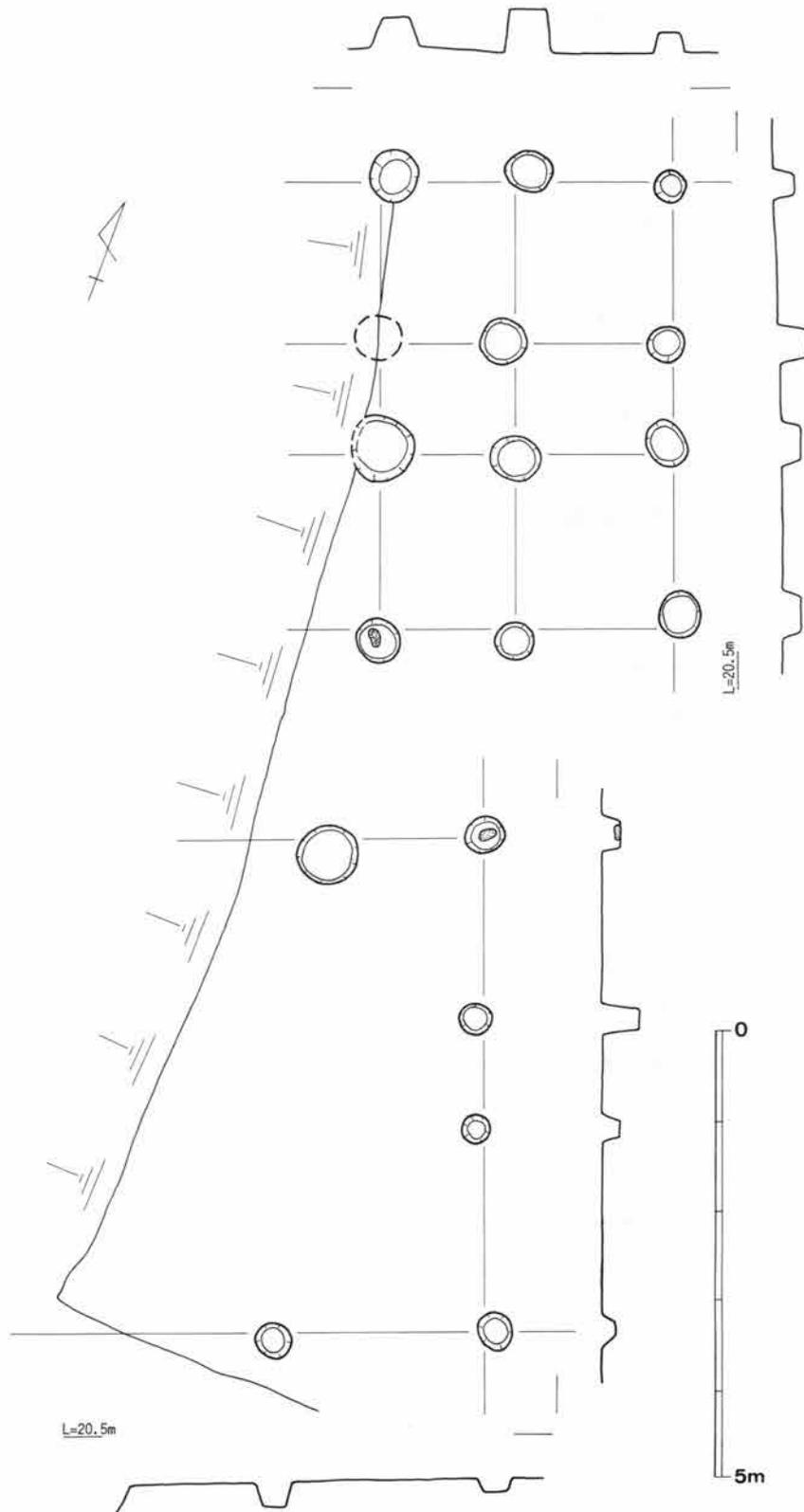
掘立柱建物跡 D 群 主



第114図 掘立柱建物跡 S B 2007実測図



第115図 掘立柱建物跡 S B 2008および出土遺物・掘立柱建物跡 S B 2009・2010実測図



第116図 掘立柱建物跡 S B 2011・2012実測図

軸をN20°Wにとる掘立柱建物跡群である。調査区微高地北西側で2棟分の建物を復原した。掘立柱建物跡S B2011・2012が該当する。

これらの建物群の柱穴は、いずれも径20～40cm前後を測る小形円形のものが多い。また、柱穴埋土は灰色系粘質土混じり粗砂が主体的である。また、根石をもつものや柱痕そのものの遺存しているものも多い。同種の柱穴は調査区全体から検出されており、他の遺構を切るものが多いため、最も新しい時期の建物群と判断される。復原した2棟以外にも、この時期に属する掘立柱建物跡は、さらに増加するものと判断される。

掘立柱建物跡S B2011 掘立柱建物跡D群で北に位置する総柱の掘立柱建物跡である。西側部分は調査区外のため詳細は不明である。現存する規模は南北3間(約5m)・東西2間(約3.3m)を測る。柱間は中央東西方向のものが狭い。柱穴は直径30～40cmの円形のものが多い。また、南西隅の支柱穴には、1辺約25cmを測る断面方形の柱材が遺存していた。

出土遺物は、各柱穴の埋土中から土師器・須恵器・黒色土器片などが出土しているが、図示できるものはない。

掘立柱建物跡S B2012 掘立柱建物跡S B2011の南に位置する掘立柱建物跡である。西側部分は調査区外のため詳細は不明である。現存する規模は南北3間(約5.5m)・東西1間(約2.4m)を測る。柱間は南北中央の2穴間が狭い。柱穴は直径30～40cmの円形のものが多い。また、北東隅の柱穴底部には扁平な石材が根石として置かれていた。

出土遺物は、各柱穴の埋土中から土師器・須恵器・黒色土器片などが出土しているが、図示できるものはない。

②段状遺構

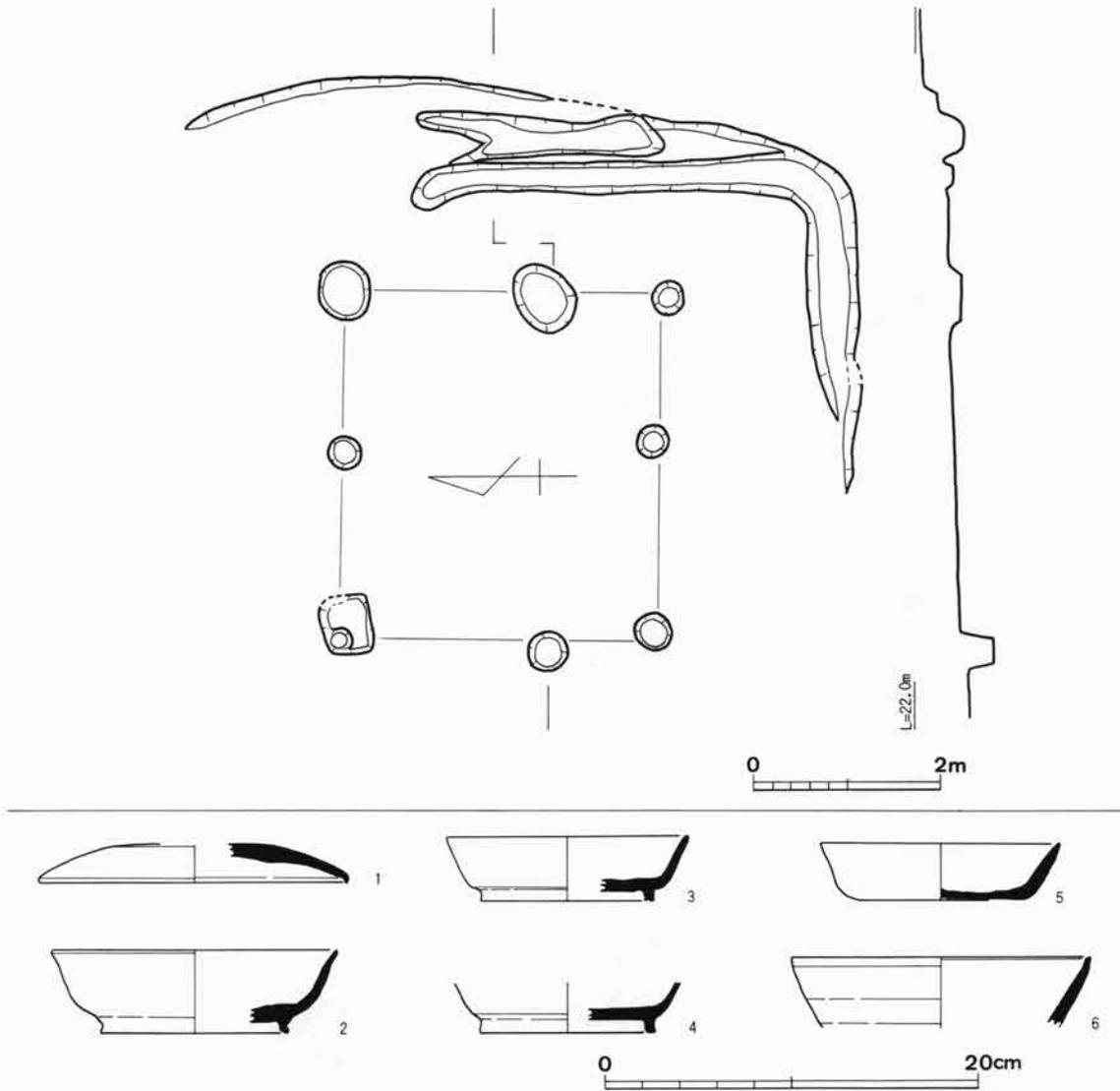
掘立柱建物跡以外に微高地上では竪穴式住居跡状の遺構を検出した。この種の遺構は掘形が完結せず、緩斜面後背側を断面「L」字状にカットし、平坦面を確保し、小規模な建物を造営しているものと判断される。今回の調査では、SH03・08として竪穴式住居跡として調査していたものが該当する。SH03のみ報告する。

段状遺構SH03 調査区微高地上中央に位置する。検出時には古墳時代の竪穴式住居跡と考えていたが、掘削が進むにつれ、奈良時代の遺物が多く認められたため、段状遺構として報告する。

段状遺構SH03は「L」字形にめぐる溝と、溝により区画された平坦面および、平坦面上で復原した掘立柱建物跡により構成される。溝は複雑に切り合っていることから、数回にわたる掘り直しが行われていたものと判断される。床面上には、竈あるいは炉などの施設は認められない。

掘立柱建物跡は、東西2間(約4.8m)・南北2間(約3.2m)の小規模なもので、主軸をほぼ真北にとる。柱穴掘形は浅く、柱間も不揃いである。

遺物は全て埋土中から出土しており、柱穴内からの出土遺物はなかった。図示したのは全て須恵器である。この他に黒色土器細片もあるが、混入遺物と判断し、図示していない。1は蓋である。天井部は低く、端部を下方に折り曲げる。2～3は高台をもつ杯である。高台は底部のやや内側に付く。2は口縁部がやや外反し、3は直線的な立ち上がりを呈する。4は高台を持たない



第117図 段状遺構 S H03および出土遺物実測図

杯である。5はやや深手の杯である。

③溝群

谷部分を中心に溝群を検出した。これらの溝は、いずれも東から西へ向けて流れる。以下、主要な溝とその出土遺物について概観する。

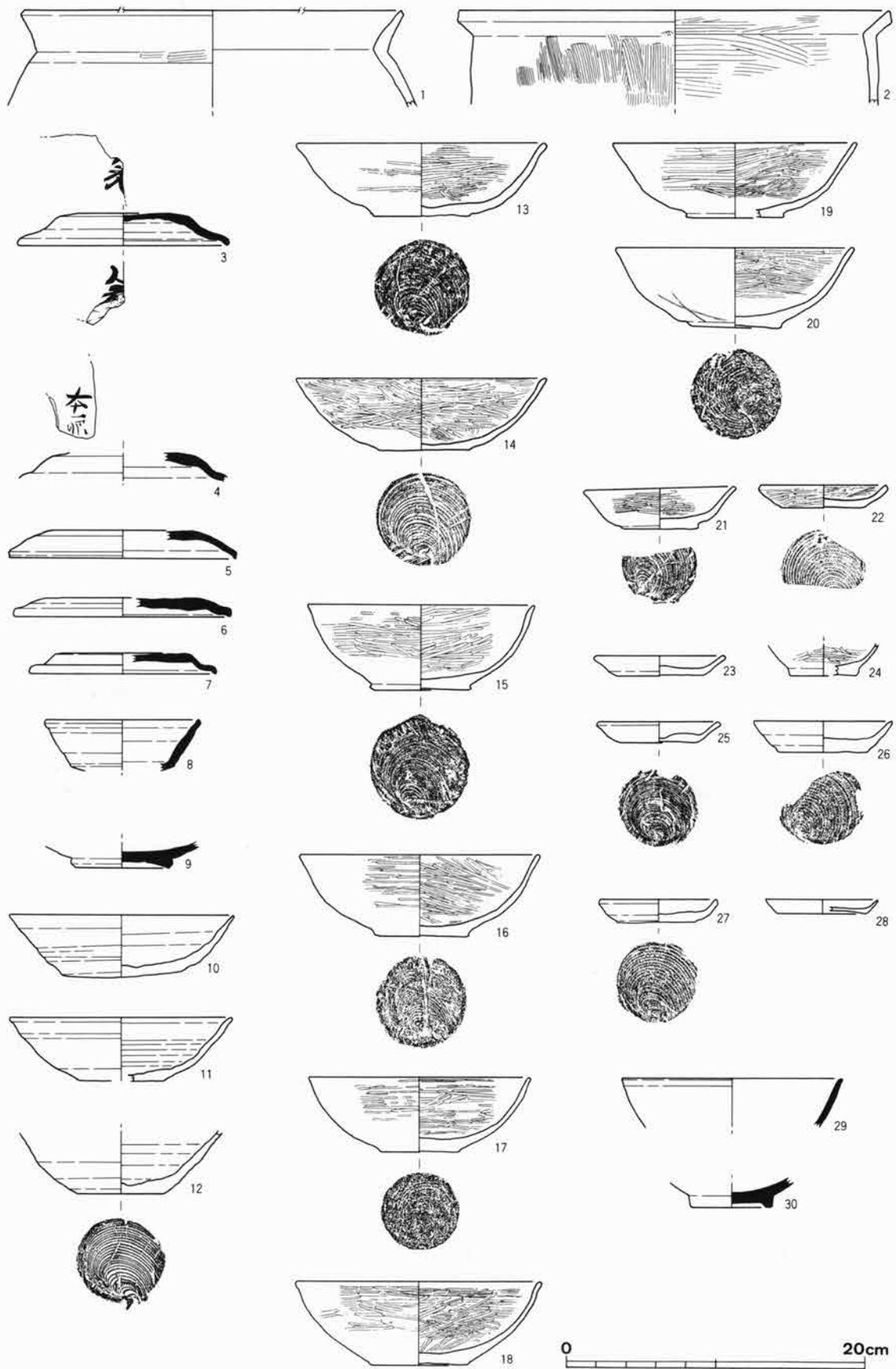
溝 S D 2001 調査区微高地南端と谷地形部分の傾斜変換点に位置する東西方向の溝である。幅1.3m・深さ0.3mを測る素掘りの形態をとる。また、この溝は下流部分で S D 2007 と合流している。合流点付は、近幅・深さを増しており、この近辺での規模は幅約3m・深さ1.3mを測る。この部分から、やや上流にかけて石材の集積が認められた。石材は拳大から人頭大の自然石であり、石材を用いた堰状の施設が崩壊したものと判断された。

出土遺物(第118図)には土器・木器がある。

土器には、須恵器・土師器・黒色土器・白磁がある。摩耗しているものが多い。

1は土師器甕である。口縁の立ち上がりは短く直線的である。

2は鍋である。体部の立ち上がりが直線的で、口径より体部最大径の小さなものである。内外



第118図 溝S D2001出土土器実測図

面に煤が付着しており、実際に使用されたものと判断される。

3～8は須恵器である。須恵器は蓋が圧倒的に多く杯は少ない。蓋は3・4・6・7のように天井部が低く、口縁部を折り曲げるものと、5のように端部のみを内面に折り曲げるものが存在する。3は天井部の内外面に、4は天井部外面に墨書が認められる。解読できない。杯は口径が小さく、体部は直線的に外方に立ち上がる。高台はない。

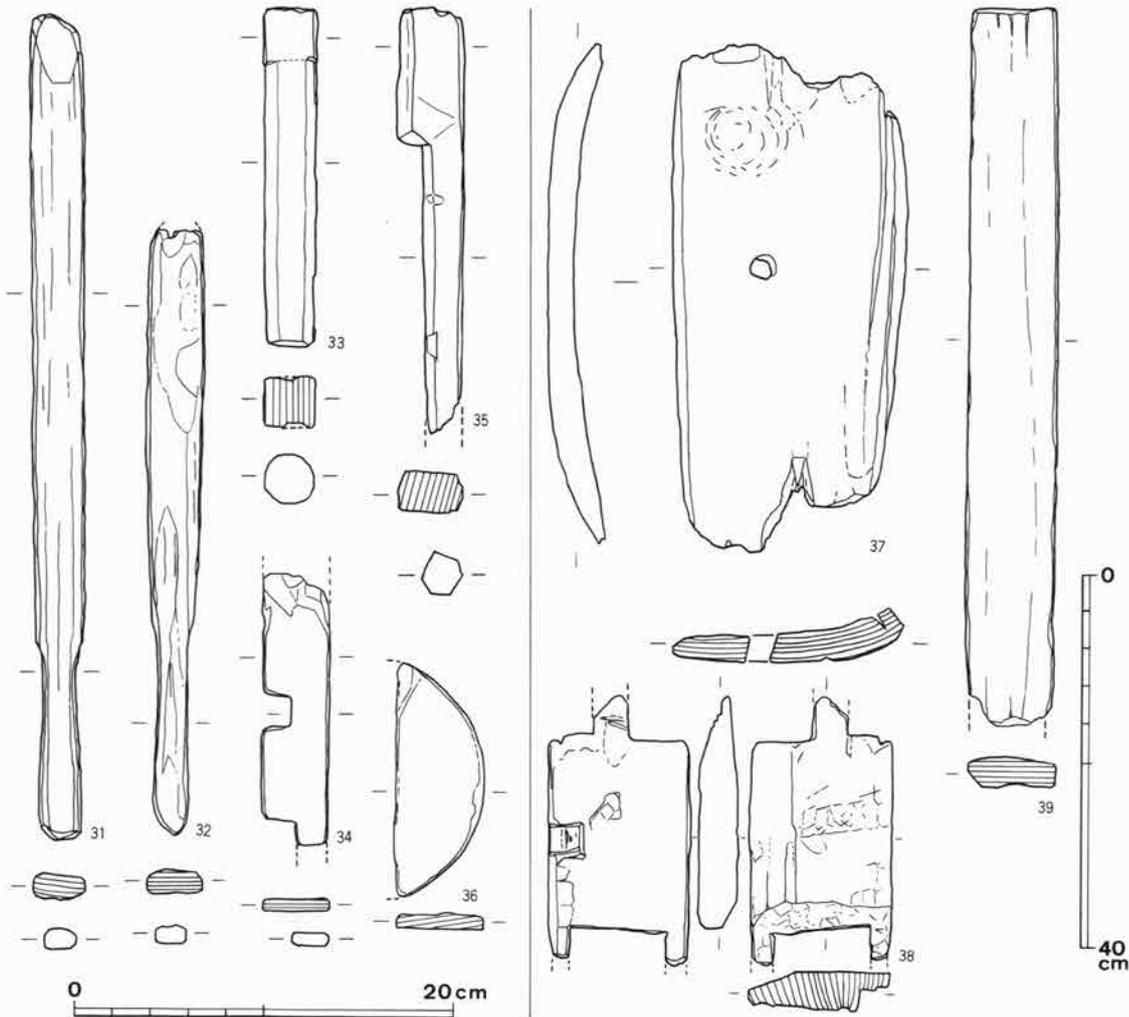
9は無釉陶器としておく。底部のみが遺存する。

10～12は土師器碗である。底部は回転糸切りによって切り離されており、ロクロの使用が窺われる。やや内湾気味に立ち上がる体部をもち、口縁部はわずかに外反する。

13～20は黒色土器碗である。内面のみ黒色処理されている。底部はわずかに突出する平高台を呈し、回転糸切り技法により切り離されている。いずれも、内湾気味に立ち上がる体部とやや外反する口縁をもつ。調整は13～19は内外面ヘラミガキである。20は内面はヘラミガキであるが、外面は回転ナデによる。また、「×」字状のヘラ記号が刻まれる。

21は黒色土器小形碗である。内外面黒色処理され、精緻なヘラミガキで内外面を調整する。

22・23は黒色土器皿である。内外面黒色処理され、22は内外面にヘラミガキが認められる。



第119図 溝S D2001出土木製品実測図

25～28は土師器皿である。法量の小さなもので構成される。いずれも底部に回転糸切り技法が用いられ、内外面はナデにより仕上げられる。

29・30は白磁碗である。29は口縁の、30は高台の破片である。

木製品には形代・部材・容器・建築部材が認められる(119図)。

32・33は刀を模倣した形代と考えられる。刃部の明瞭な表現はなく、切先部分の表現から刀と判断される。柄は刀身と明瞭に区分され、柄尻はわずかに太く作られる。

34は棒状の部材である。頭部を方形に、棒状部分を円形に作り出す。

35は方形の削り込みをもつ板材である。

36は頭部を方形に棒状部分を円形に削り出した棒状部材である。

37は曲物の底部と考えられる。円孔などは認められない。

38は内側を掘り窪める板状の製品である。中央の穴は節穴であり、意図的に穿孔したものではない。用途不明である。

39は一方に柄を、他方に方形の削り込みをもつ部材である。また、側面にも方形の削り込みをもつ。大きさからみて建築部材と思われるが、使用部位などは不明である。

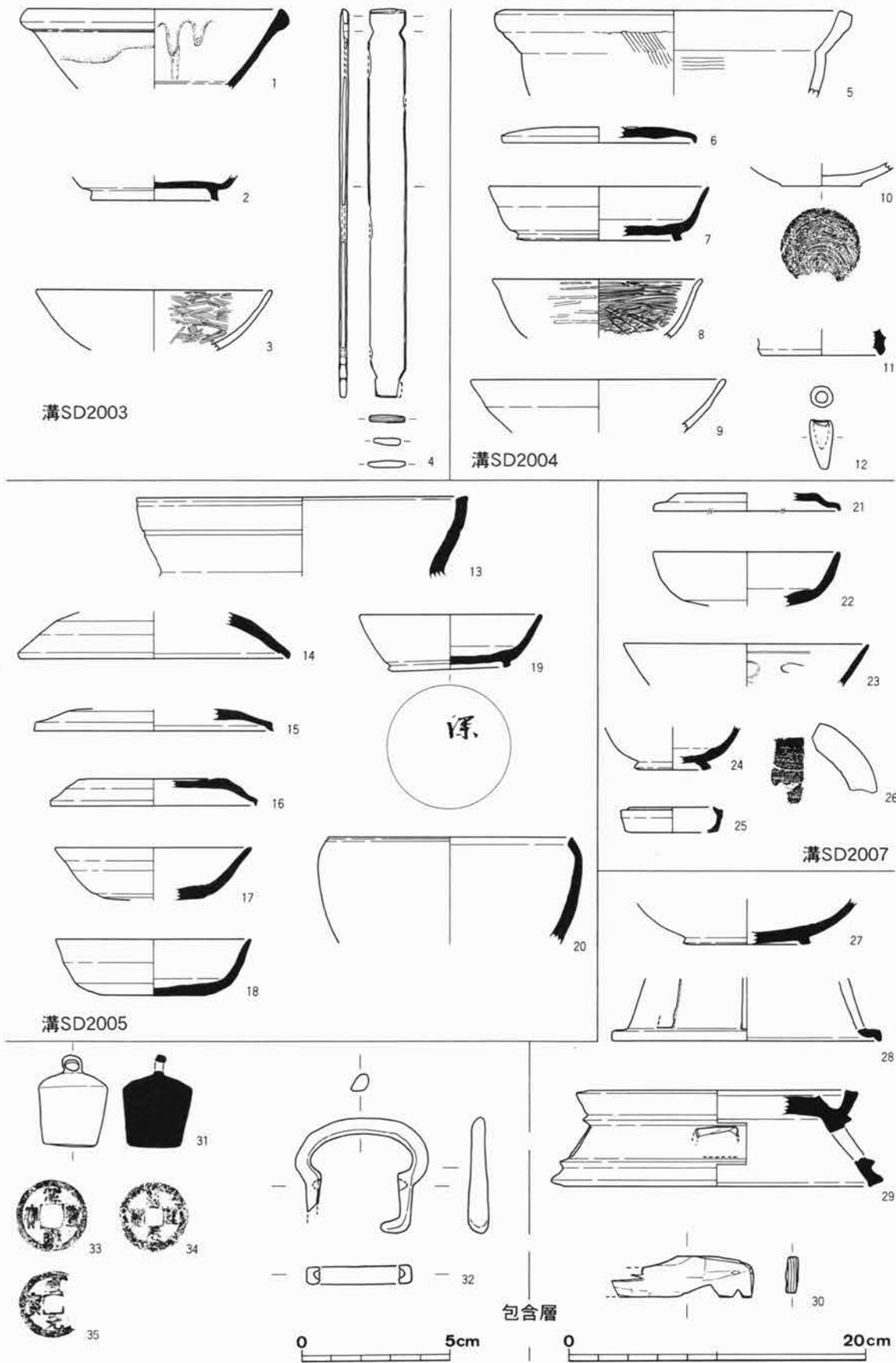
40は板材である。大きさからみて建築部材と思われる。

溝S D 2003 溝S D 2001と谷部を介して検出した。南側微高地に近い場所に位置する。幅0.8m・深さ0.2mを測る素掘りの形態をとる。遺物には土器・木製品がある(第120図)。1は白磁碗である。玉縁状の口縁をもち施釉は口縁から体部上半のみにかけて認められる。2は須恵器杯底部である。3は黒色土器碗である。内面のみ黒色処理を行う。4は荷札木筒状の木製品である。全長26.4cm・幅2.6cmを測る。両端に三角形の削り込みを施す。なお、文字は確認できない。

溝S D 2004 溝S D 2003の南側で確認した。S D 2003を切る。幅15m・深さ0.4mを測る素掘りの形態をとる。遺物には土器がある。5は土師器鍋である。内湾する短い口縁をもつ。6は須恵器杯蓋である。天井部は低く端部のみ折り返す形態をとる。7は須恵器杯である。直線的な立ち上がりをもつ。8～10は黒色土器碗である。摩滅が著しいが、内面のみ黒色処理するタイプである。10の底部は回転糸切り技法により、わずかに平高台状を呈する。11は青磁碗の小片である。12は円筒状の土製品である。貫通しない円孔をもつ。用途は不明である。

溝S D 2005 溝S D 2004の北で検出した。幅1.5m・深さ0.2mを測る素掘りの形態をとる。遺物には須恵器がある(120図)。13は甕である。口縁外面に1条の沈線を施す。14～16は杯蓋である。天井部はやや高く、端部のみを下方に折り返す。17・18は高台をもたない杯である。17は体部から口縁にかけやや大きく開き、18は直立気味である。19は高台をもつ杯である。高台は底部外端に取り付き、体部はやや内湾気味に立ち上がる。底部に墨書が認められるが解読できない。20は鉢である。体部最大径が口径を越える。

溝S D 2007 調査区中央で検出した浅い溝である。S B 2010を切る。S D 2001と合流するが、S D 2001の方が先に埋没している。遺物には土器・瓦がある(120図)。22は須恵器杯蓋である。天井部は低く口縁および口縁端部とも折り返す。23は須恵器杯である。やや丸みを帯びた形態を



第120図 各溝および包含層出土遺物実測図

とる。24は青磁椀である。25は須恵器椀と思われる。26は青白磁合子である。短い立ち上がりを呈する。27は丸瓦片である。内面に布目が確認される。

④包含層出土遺物

包含層出土遺物は非常に多いがほとんど未整理である。そのうち、わずかではあるが、調査段階で拾い出した特殊なものについて報告する。

28は緑釉杯底部である。掘立柱S B 2004付近から出土している。低い高台を有し、体部はやや内湾気味である。釉の色は薄めである。

29・30は須恵器円面硯である。両者とも、掘立柱建物跡S B 2001造成に伴う平坦面から出土した。29はやや小型である。底径に対し、脚はやや高い。30はほぼ全容をうかがうことのできる個体である。脚には2条の突帯が付され、スカシは方形を呈する。スカシの数は4ないし5か所と復原される。海と陸の高低差は大きく、陸の周辺部はわずかに上方に突出する。

31は溝S D 2001検出中に出土した木製の馬形である。口は切り込みにより、目はわずかに彫り窪めることにより表現される。残存長11.8cmを測る。

32は重機掘削時の排土中から見つかった銅製の錘である。下にすぼまる釣鐘状の本体に円形の鈕がつく。重量は62gを測る。

33は銅製鉸具である。掘立柱建物跡S B 2001と掘立柱建物跡S B 2002との間から出土した。断面は不整な楕円形を呈し、内面には心棒を受けるための小孔が認められる。

34～36は銅銭である。溝S D 2001と微高地の間から出土した。34は元豊通宝、35は紹聖通宝、36は咸平元宝(咸平元宝か?)である。いずれも北宋銭である。

D. 小結

以上、A地区の概要について述べてきた。古墳時代ではおおむね前期初頭から中期後半にかけての遺構群を検出することができた。その主なものは溝・竪穴式住居跡である。また、遺物も多量に出土しており、良好な土器資料・木器資料を得ることができた。また、平成9年度S D 08の上流部を調査し、新たな関連施設を検出することもできた。古墳時代の成果については平成9年度の調査成果、B地区の調査成果と併せて後ほど若干の検討を加えたい。

歴史時代の遺構については十分な検討ができたとは言いが、複数の掘立柱建物跡を検出することができた。これら掘立柱建物跡群は、奈良時代から中世にかけて計画的に造営されたものと考えられる。また、溝出土遺物には墨書土器・緑釉陶器・輸入陶磁器・瓦が一定程度認められ、また、包含層出土遺物の円面硯も注目される遺物である。こういった一般集落とは異なる遺物の存在は、大形掘立柱建物跡や八稜鏡を埋納する土坑などの存在と併せ、何らかの公的施設の存在をうかがわせる。包含層出土鉄滓の存在も重要な点である。今回報告は行っていないが、鉄滓を埋納し、多量の土器を供献する土坑なども検出している。この土坑は、出土遺物からみて平安後期と考えられ、鉄・鉄器生産に関与する集団の存在が予測される。

(石崎善久)

5. B地区の調査

a. 調査概要

①基本土層(第121図)

B地区の土層堆積状況は上層から黄褐色砂質シルトの表土、灰黄褐色砂質シルトの耕作土、明黄褐色シルトの床土、灰褐色砂質シルトの遺物包含層の層序で堆積しており、この下部が、明橙褐色の花崗岩のバイラン土の地山となっている。なおトレンチ中央部は、遺物包含層が2層に分かれ、上層を第1遺構面、地山直上を第2遺構面として調査を行った。

②概要

調査区を、2つの丘陵尾根に挟まれた谷地形が福田川が形成した沖積地へ出る地点と、その両脇の緩斜面の内、ほ場整備によって削られる部分に設定した。調査区の面積は、ほぼ1,000m²である。

第1遺構面では古墳時代後期の竪穴式住居跡1棟、各時期の溝3条、各時期の掘立柱建物跡5棟および掘立柱建物跡と思われる柱穴286基、平安時代末から鎌倉時代初頭の土坑6基、古墳時代から鎌倉時代までの旧流路1条およびそれを再掘削した溝2条を検出した。第2遺構面では古墳時代の柱穴多数を検出した。なお、調査中に便宜上付した遺構名が、整理の進行に伴って遺構の性格上不適当なものが出てきたため、以下のように遺構名を変更した。

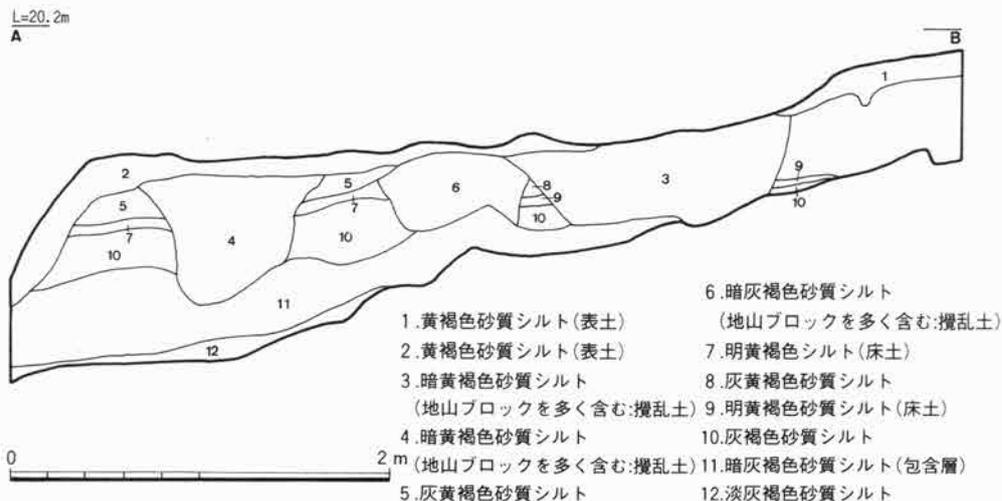
旧S X 01→新S D 08、旧N R 02→新S D 06、旧N R 03→新S D 09。

これにより、空きとなった遺構番号はそのまま欠番とした。遺物の注記は旧遺構名であるため、遺物を実見される際は注意されたい。遺物は自然流路N R 01を中心に出土し、土師器・須恵器・黒色土器・白磁・青磁・緑釉陶器・鉄製品・鞆の羽口・椀形滓を含む鉄滓・各種木器・石器・種子など、整理箱にしておよそ70箱分が出土した。以下に時代の古い順に、その概略を述べる。

b. 古墳時代の遺構と遺物

①竪穴式住居跡S H 01(第123図)

遺構 一辺4mを測る方形の竪穴式住居跡で、西側3/4を削平されている。深さは約10cm残っ



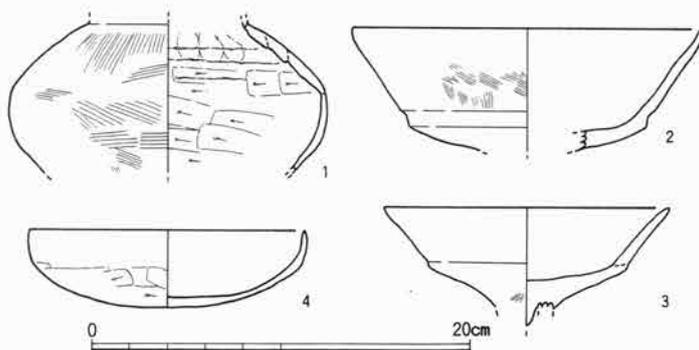
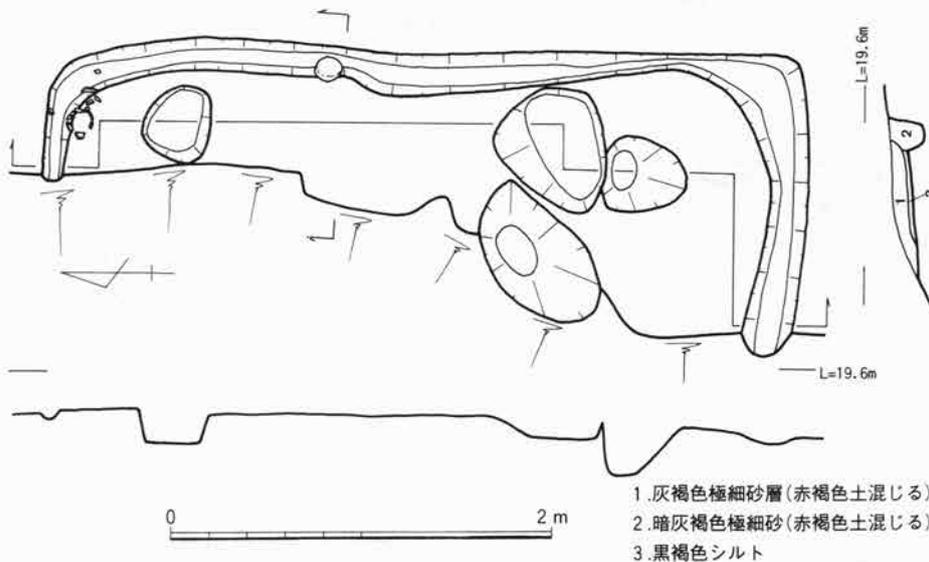
第121図 トレンチ北壁土層断面図



第122図 遺構配置図

ており、埋土は大きく上下2層に分かれている。上層は灰褐色極細砂層(赤褐色土混じる)で、下層は黒褐色シルト層である。周壁に沿って周壁溝がめぐっており、埋土は暗灰褐色極細砂である。支柱穴を2基検出し、北側(P090)は直径40cm・深さ18.6cm、南側(P228)は直径60cm・深さ28.5cmである。床面および周壁溝から土師器が出土した(第123図1~4)。

遺物 第123図はS H01出土の土師器である。1は床面に逆位におかれた直口壺の胴部である。外面をハケ調整した後、ナデ調整を施している。内面は底部付近から胴部中央部までヘラケズリを施している。2は長脚の高杯の口縁部である。杯部と口縁部の境目に段を有し、外面をハケ調整した後ナデ調整を施す。内面はナデ調整を施す。口径18.4cmを測る。3は長脚の高杯の口縁部である。口径14.9cmを測る。円盤充填の痕跡が見られる。摩滅のため内外面調整は不明である。4は浅手の椀である。口径14.4cm・器高4.35cmを測る。内外面は摩滅が激しいが、底部にヘラケズリが見られる。内面に炭化物の付着が見られる。時期は床面出土土師器の中に、浅手の椀が存在することや、高杯の形態が、後述するS D09のものに類似することから5世紀の第4四半期と考えられる。



第123図 S H01平面・断面図、出土遺物実測図

②掘立柱建物跡 S B01(第125図)

トレンチ東側の段差の上(以後上段)で検出した2間×1間以上の総柱の掘立柱建物跡である。心車で桁行き3.0m(1丈)・梁行き1.5m(5尺)以上を測る。東側と西側は削平のため柱穴を検出していない。建物の主軸はほぼ真南北である。柱穴の平面形はおおむね楕円形で、規模は直径40~50cmを測り、埋土は暗灰褐色土である。なお柱穴の埋土には柱痕跡が認められた。柱穴P021・027の埋土から古墳時代後期と見られる土師器が出土している。

③掘立柱建物跡 S B02(第126図)

上段で検出した2間×1間以上の総柱の掘立柱建物跡である。心車で桁行き2.7m(9尺)、梁行き1.2m(4尺)以上を測る。主軸はほぼ真南北を向く。埋土は暗灰褐色細砂である。遺物は出土していない。S B01を切って建てられており、真東に45cm(1尺5寸)ずらしてあることと、主軸が同じであることから、S B01を立て替えたものと考えられる。

④掘立柱建物跡 S B03(第126図)

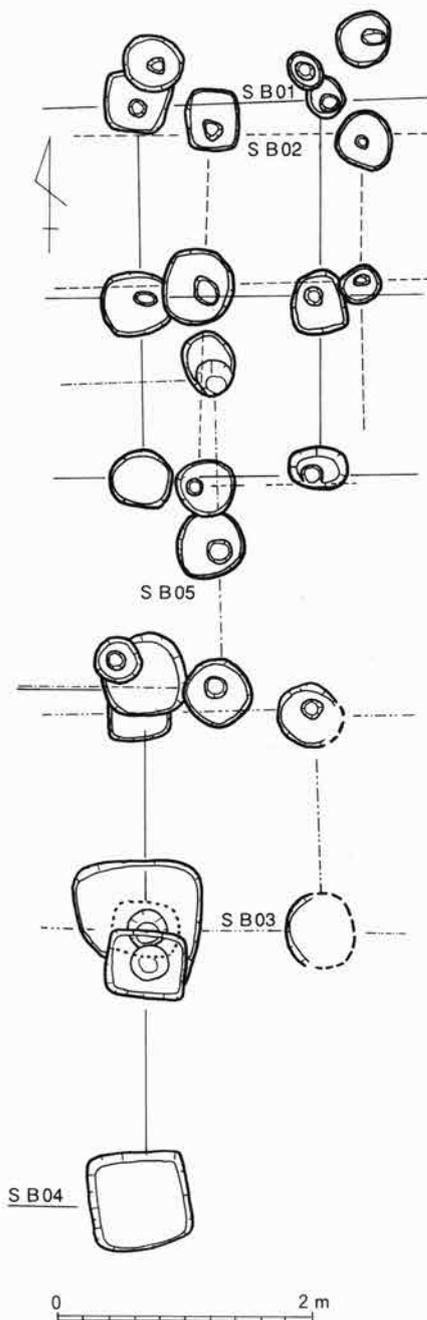
トレンチ中部で検出した1間以上×1間以上の掘立柱建物跡である。心車で桁行き1.5m(5尺)以上・梁行き1.4m以上を測る。埋土は暗灰褐色細砂で、柱穴P034から土師器椀、須恵器片が出土している。この土師器から、古墳時代後期の掘立柱建物跡であると考えられる。

⑤掘立柱建物跡 S B04(第127図)

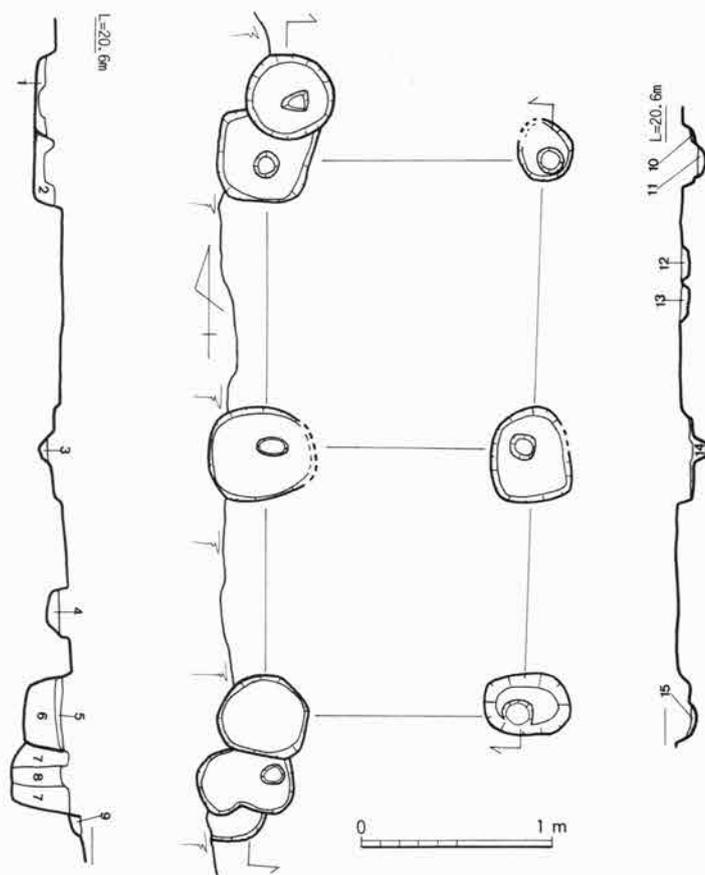
トレンチ東側の上段で検出した2間×1間以上の掘立柱建物跡である。心車で桁行き4.2m(1丈4尺)を測る。柱穴は一辺70~80cmの方形で、埋土は灰褐色細砂である。柱穴P091・092埋土から土師器高杯片、須恵器甕片が出土している。この土師器・須恵器から古墳時代後期の掘立柱建物跡であると考えられる。

⑥掘立柱建物跡 S B05(第127図)

NR01の第3遺構面で検出した1間以上×2間の掘立柱建物跡である。心車で桁行き2.7m(9尺)以上・梁行き2.4m(8尺)を測る。柱穴P324は独立棟持柱になる可能性がある。柱穴P193・195は、それぞれ柱穴P194・196の建て替えである。柱穴は直径30~60cmの円・楕円形で、埋土は黒褐色土である。柱穴P193・194から古墳時代後期の椀が出土している。

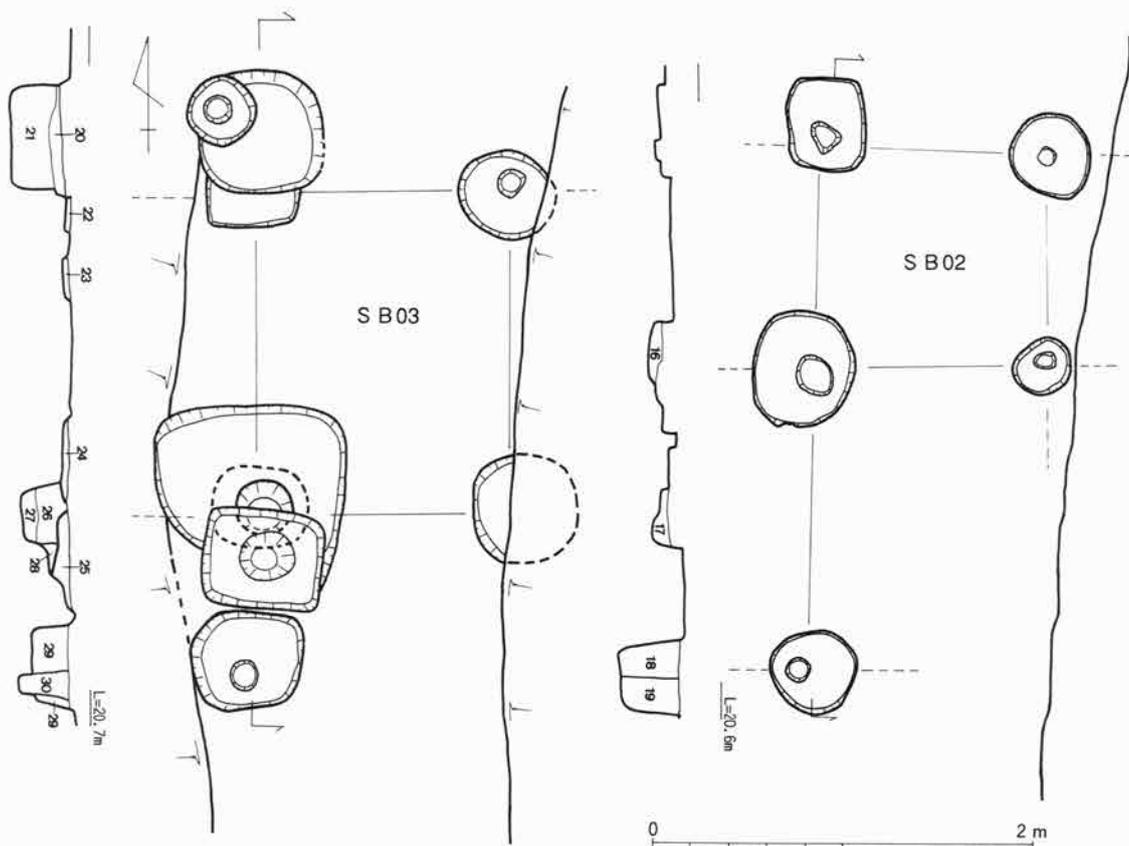


第124図 掘立柱建物跡配置図



第125図 S B01平面・断面図

1. 灰褐色極細砂
2. 暗灰褐色細砂(赤褐色極細砂含む)
3. 灰褐色細砂(赤褐色極細砂含む)
4. 灰褐色細砂
5. 暗灰褐色細砂(赤褐色極細砂を少量含む)
6. 極暗灰褐色細砂
7. 明褐色細砂
8. 褐色細砂
9. 灰褐色細砂
10. 淡褐色細砂
11. 暗灰褐色細砂(赤褐色細砂含む)
12. 灰褐色細砂
13. 灰褐色細砂
14. 灰褐色細砂(赤褐色細砂含む)
15. 淡褐色細砂(赤褐色細砂・炭化物含む)
16. 灰褐色細砂(赤褐色細砂含む)
17. 灰褐色細砂(やや粘質)
18. 灰褐色細砂
19. 褐色細砂(赤褐色細砂含む)
20. 灰褐色細砂(赤褐色細砂含む)
21. 暗灰褐色細砂
22. 灰褐色細砂
23. 灰褐色細砂
24. 灰褐色細砂(赤褐色細砂含む)
25. 灰褐色細砂(赤褐色細砂含む)
26. 暗灰褐色細砂(赤褐色細砂含む)
27. 褐色細砂(赤褐色細砂含む)
28. 黒褐色細砂(赤褐色細砂含む、やや粘質)
29. 灰褐色細砂
30. 褐色細砂



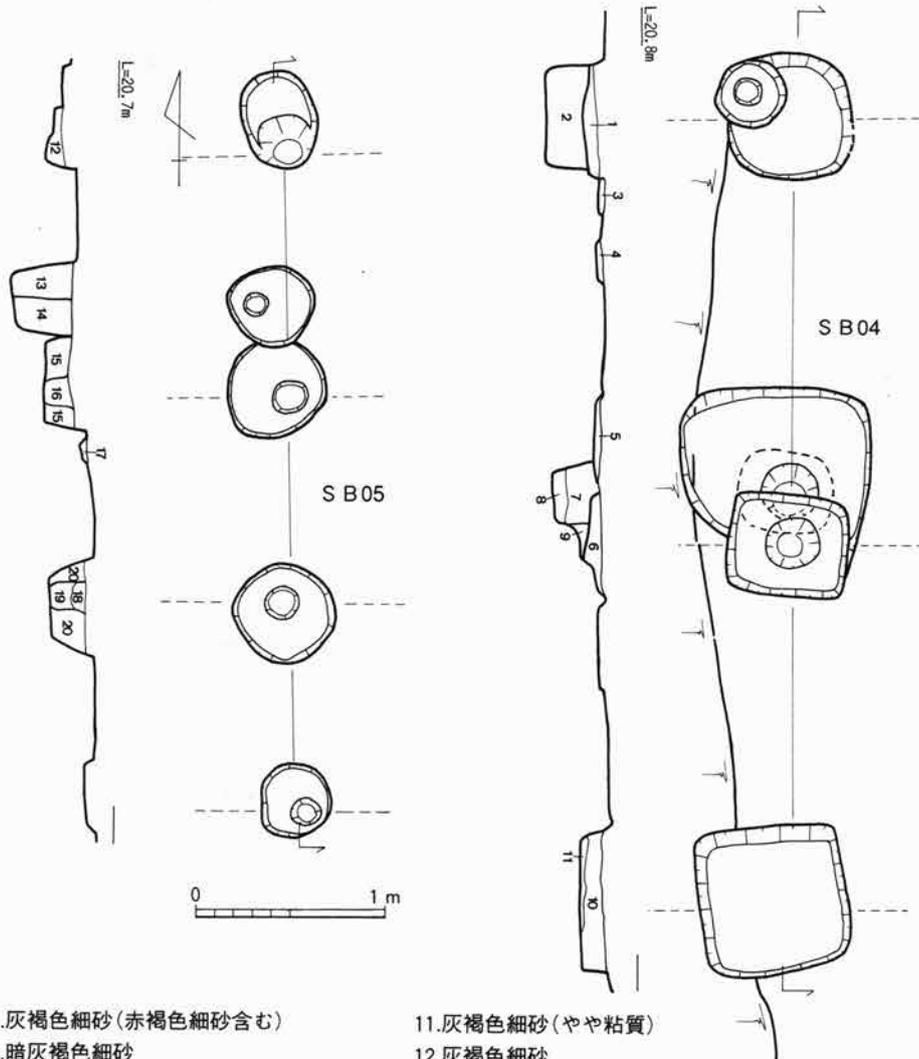
第126図 S B02・03平面・断面図

⑦溝 S D01(第127図)

トレンチ中央部を南流する溝で、幅約1m・深さ約10cmを測る。埋土は黒褐色土で、土師器碗、甑が出土している。これらの遺物からこの溝は古墳時代後期のものと考えられる。

⑧溝 S D02(第128図)

トレンチ中央部を西流する溝で、最大幅1.1m・深さ20cmを測る。大きく削平を受けており、平面形が大きく変更されており、西側は完全に削平されて失われている。埋土は黒褐色砂混じりシルトである。埋土から須恵器・土師器が出土している。これらの遺物から、この溝は古墳時代後期のものと考えられる。この溝の性格は、集落内に何らかの区画を設けるものと考えら



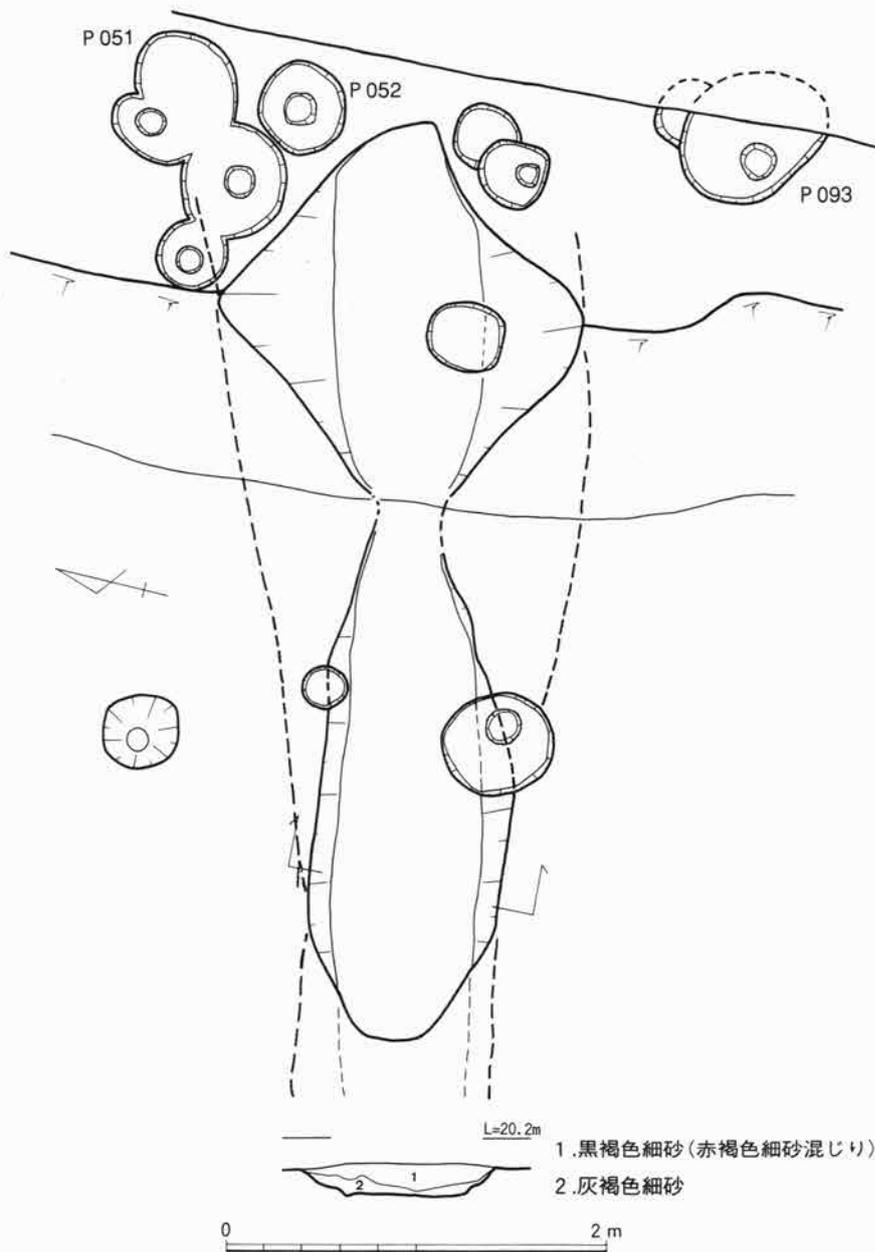
- | | |
|-------------------------|-------------------|
| 1. 灰褐色細砂(赤褐色細砂含む) | 11. 灰褐色細砂(やや粘質) |
| 2. 暗灰褐色細砂 | 12. 灰褐色細砂 |
| 3. 灰褐色細砂 | 13. 褐色細砂(赤褐色細砂含む) |
| 4. 灰褐色細砂 | 14. 褐色細砂(赤褐色細砂含む) |
| 5. 灰褐色細砂(赤褐色細砂含む) | 15. 灰褐色細砂(やや粘質) |
| 6. 黒褐色細砂(赤褐色細砂含む、やや粘質) | 16. 灰褐色細砂 |
| 7. 暗灰褐色細砂(赤褐色細砂含む) | 17. 灰褐色細砂 |
| 8. 褐色細砂(赤褐色細砂含む) | 18. 褐色細砂(やや粘質) |
| 9. 灰褐色細砂(赤褐色細砂含む) | 19. 淡赤褐色細砂 |
| 10. 黒褐色細砂(赤褐色細砂含む、やや粘質) | |

第127図 S B04・05平面・断面図

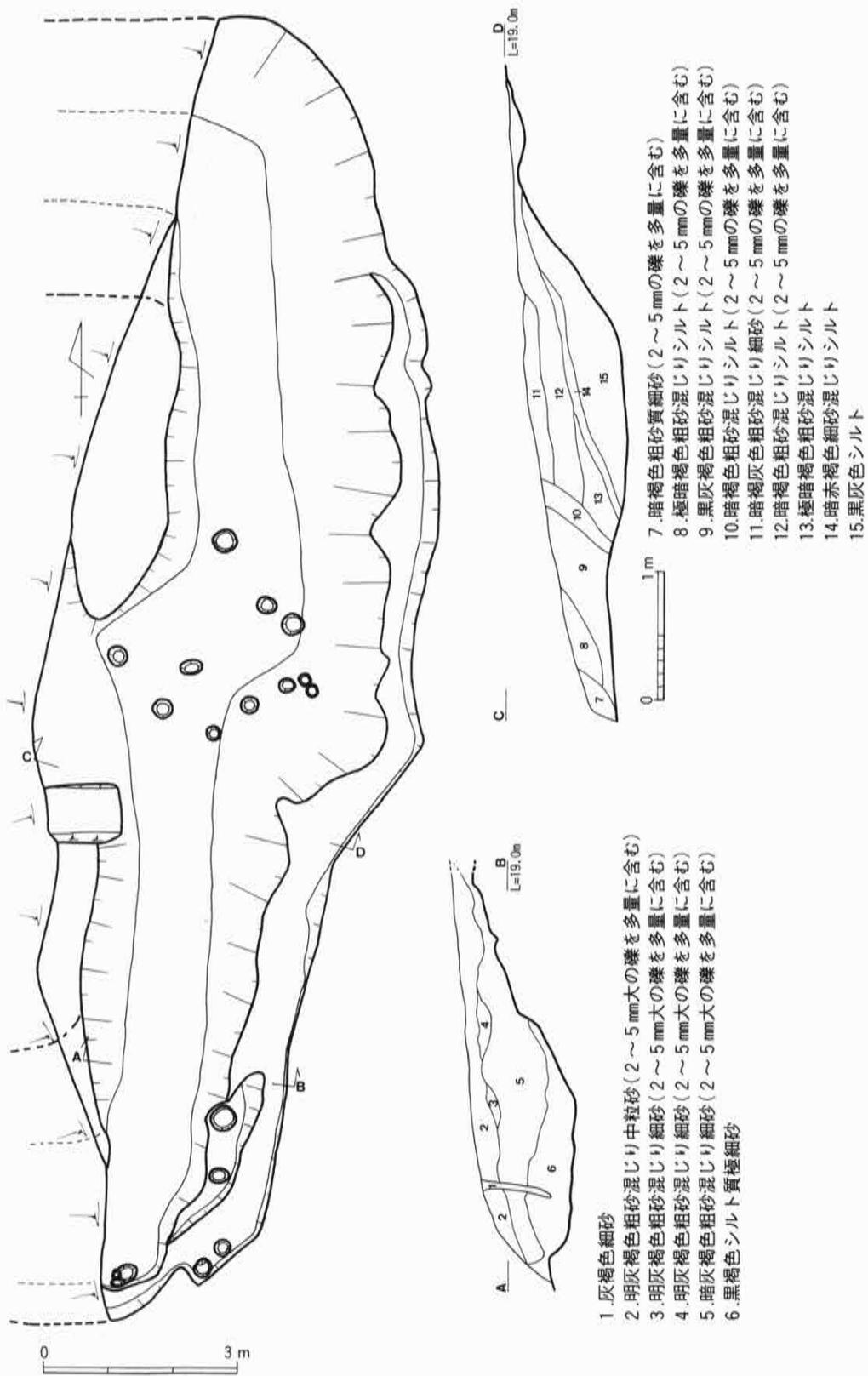
れる。当調査区内において、古墳時代後期の遺構としては前述した竪穴式住居跡S H01と掘立柱建物跡S B01・02・04、後述するTK23型式に属するS D09と、MT15型式に属するS D08とがある。溝S D02は、掘立柱建物跡群と竪穴式住居跡との間に設けられているように見えることから、居住区と倉庫群とを区画するために設けられた可能性がある。なお溝S D01は、S D08が埋没する過程で掘削されており、S D08と一連の溝として集落内の区画溝として機能していた可能性がある。

⑨溝S D08(第129図)

遺構 幅約3m・深さ約80cmを測る、南側と北側でほぼ直角に屈曲し、中央部で鍵形に屈曲する溝である。溝の断面形態は逆台形である。埋土は大きく上中下の3層に分かれており、上層は灰褐色粗砂混じり中粒砂、中層は暗褐色粗砂混じりシルト、下層は黒灰色シルトである。下層の埋土が黒色のシルトであることおよび床面が青灰色にグライ化している状況から、この溝が機能していた時期には滞水していたと考えられる。鍵形に屈曲する部分の床面に柱列(P 339～350)があり、橋状構造物が存在したことを推定させる。遺物は各層から出土しており、合計で整理箱6箱程度出土した。下層から出土した須恵器・土師器(第130図)は、古墳時代後期6世紀前葉のものであり、開削の時期を示すものと考えられ



第128図 S D02平面・断面図



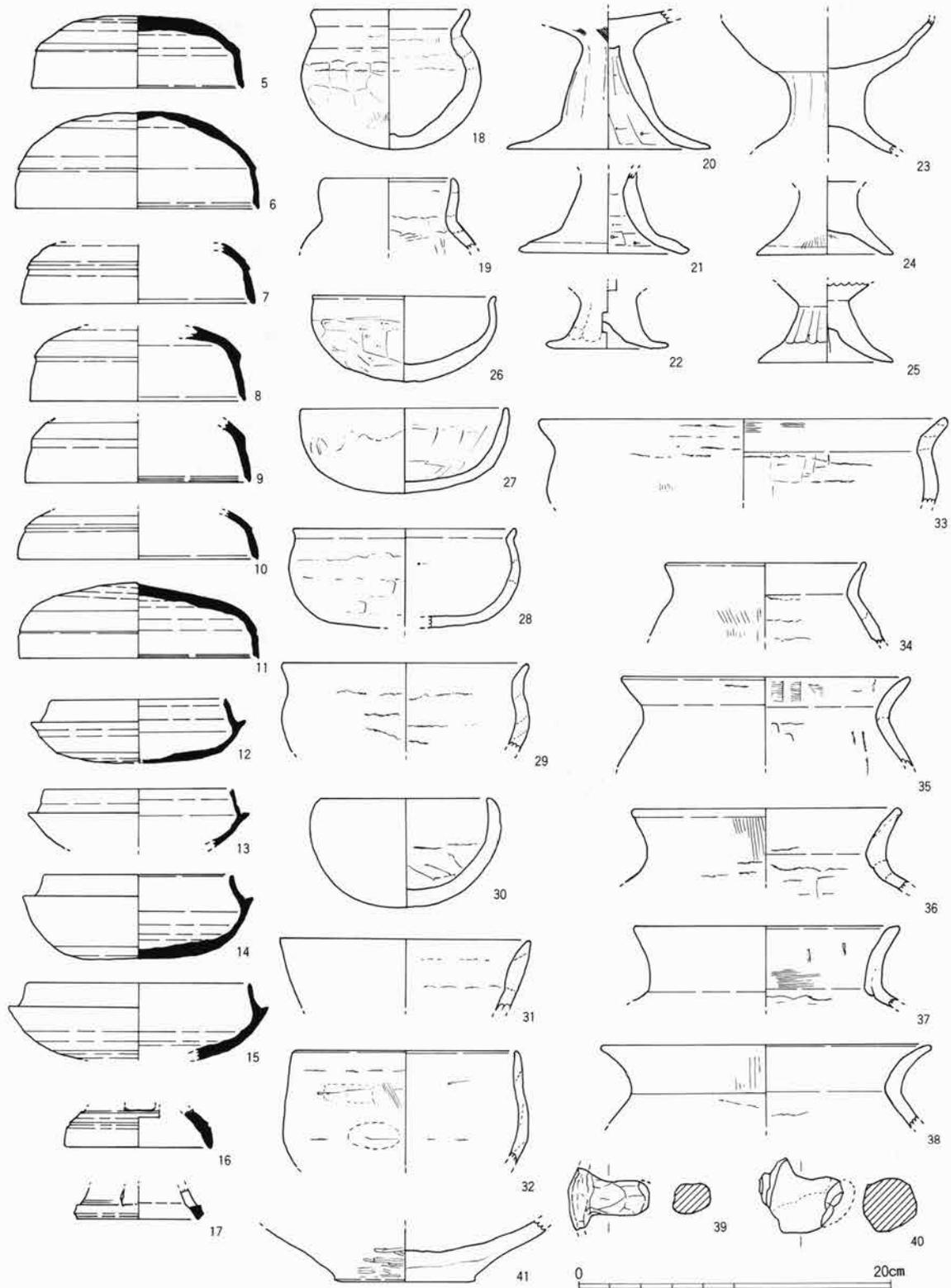
第129図 S D08平面・断面図

る。中層(第132図44～54)は6世紀中葉、上層(第132図55～65)は6世紀後半の土師器・須恵器が出土した。この溝は「コ」の字形に屈曲しており、調査区の西側を圍繞するかのとき形態をしている。このことは、この大溝の西側に圍繞されるべき集落内の中心的な施設が存在したことを示唆している。大溝に囲まれた部分は、方形と仮定した場合、約15m四方となり、内部には大型竪穴式住居跡か掘立柱建物跡が1棟建つのがやっとの広さである。これだけの事実から多くのことは語れないものの、浅後谷南遺跡の中で古墳時代後期に中心的な役割を果たした地点であろうことは推測できる。

遺物 第130図はS D08の下層出土土器である。5～17は須恵器、18～40は土師器、42は弥生土器である。5～11は蓋杯の蓋である。5は口径13.3cm、7～11は口径14.7～15.4cm、6は口径15.0cmを測る。5は天井部と口縁部の境の稜がやや残り、口縁端部の段はあまい。6は天井部が高く、器高は6.1cmを測る。6～10は天井部と口縁部の境の稜があまく、口縁端部の稜もあまい。11は天井部と口縁部の境に沈線を施すものである。これらは陶邑の編年で、5～10はMT151型式、11はTK10型式にあたる。12～15は杯身である。口縁部はやや内傾し、12・13は端部内面に段を持ち、14は端部に面を持たせるが、15は端部を丸く収める。口径は、12～14は11.1～12cm、15は14.1cmを測る。16・17は須恵器高杯の脚部片である。16は底部径9.1cm、17は底部径7.7cmを測る。双方とも方形のスカシを穿つ。18は短く外反する口縁がつく小型丸底の壺である。口径9.95cmを測る。19は短い直口の口縁部がつく壺の口縁である。口径8.2cmを測る。20・21は長脚の高杯である。20は脚柱部が中膨らみで、裾部の屈曲は曖昧である。底径13.0cmを測る。21は短脚化が進行している。底径10.8cmを測る。22～25は短脚の椀形高杯である。脚柱部を縦方向に板ナデまたはヘラケズリを施している。26～30は椀である。26は口縁部に強いナデ調整を施し、見かけ上、口縁部が外反するように調整している。口径11.4cm・器高5.5cmを測る。27は口縁部をまっすぐ上方に仕上げる。調整は粗く、接合痕や1次調整のハケの痕跡が明瞭に見られる。口径13.0cm・器高5.45cmを測る。28・29は口縁部を外反させるもので、外面調整はやはり粗い。28は口径14.0cmを測る。29は口径15.5cmを測る。30は深手の椀である。口径10.75cm・器高5.0cmを測る。31～33は鉢である。31は上外方にのびるもの、32は上方へのびるもの、33は大型で、短く屈曲する口縁部を持つものである。34～38は甕である。口縁部がゆるやかに屈曲し、肩の張らない器形(34・35・38)と口縁部が短く上外方にのび、やや肩の張る器形(36・37)とがある。39は甌の把手である。40も同様のものと考えられる。41は弥生前期の壺の底部である。第131図42は敲石である。両先端に使用痕が見られる他は自然面である。43は砥石である。4面に使用痕が見られる。

第132図44～54はS D08中層出土土器である。44・45は須恵器で、46～54は土師器である。44・45は杯蓋である。双方とも口縁部と天井部との境に沈線をめぐらし、口縁端部には段の痕跡の沈線がめぐっている。TK10型式にあたる。46～48は長脚高杯の口縁部である。調整はやや粗く、一次調整のハケメが部分的に見える箇所がある。49は大型高杯の口縁部である。口縁部は外反し、端部を丸く収める。調整は内外面ともハケ後横ナデだが、2次調整の横ナデはまばらに行

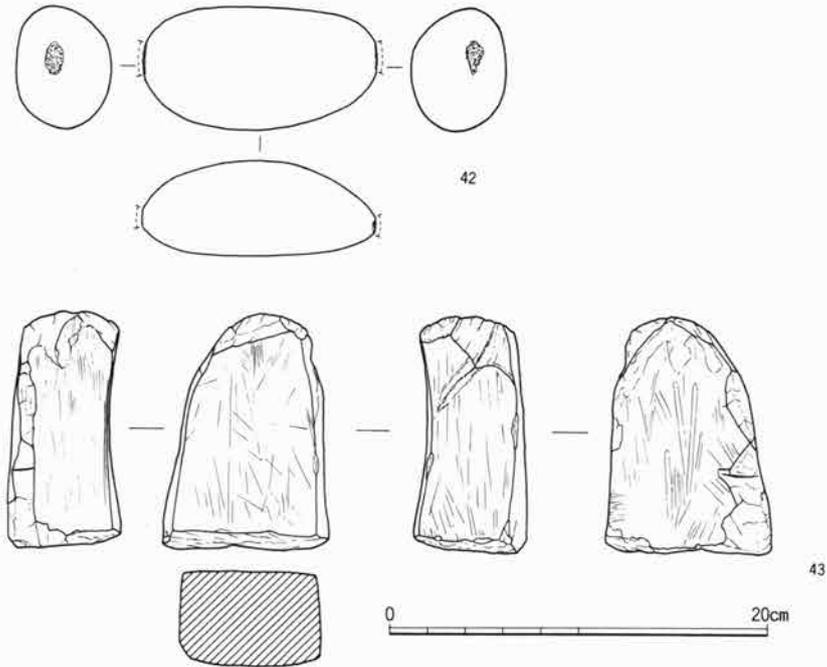
われており1次調整のハケメがほぼ全面に残っている。口径25.6cmを測る。51・52は椀である。51は口縁部を丸く収めるが、52は口縁端部内面に沈線をめぐらす。50・53は短脚の椀形高杯であるが、50は小型のものである。口径10.0cm・器高8.35cmを測る。53は口径14.6cm・器高10.4cmを



第130図 S D08出土遺物実測図(下層)

測る。54は甕の口縁部である。口径19.4cmを測る。

第132図55～65はS D08上層出土の土器である。55～58は須恵器59～65は土師器である。55・56は杯蓋である。すでに沈線も消失しており、法量からTK43型式と考えられる。55は口径15.4cm・器高4.55cmを測る。56は口径14.5cm・器高3.6cmを測る。57・58



第131図 S D08出土遺物実測図(石製品)

は杯身である。口縁部の立ち上がりはやや短く、強く内傾している。57は口径14.9cmを測る。口縁部の特徴や、法量からTK43型式と考えられる。59は口縁が短く上にのびる小型丸底の壺である。口径6.1cm・器高8.35cmを測る。60は長脚高杯の脚部である。61～63は椀である。61は浅手の椀である。口径12.0cmを測る。62は外面に1次調整のハケメが残る。口径12.7cmを測る。64・65は甕である。64は口径14.5cm、65は口径16.6cmを測る。

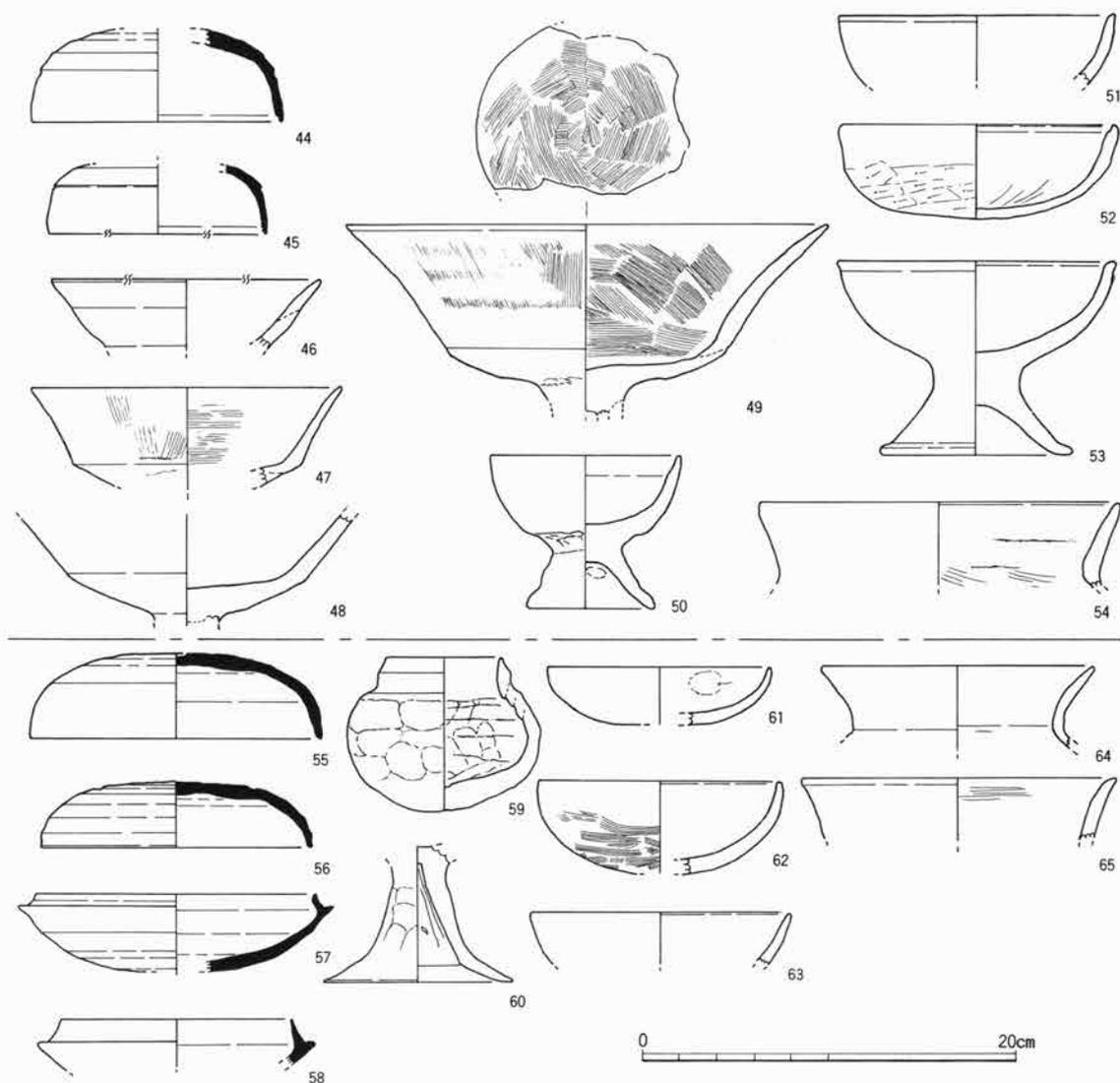
⑩溝S D09(第133図)

遺構 幅約2m・深さ約1mを測る西流する溝で、前述した旧流路NR01の第3遺構面に掘り込まれている。断面形態は「U」字形である。埋土は大きく上・中・下・最下層の4層に分かれ、上層は淡黄灰色中粒砂、黒褐色土、暗灰色土、褐色粗砂などから成り、中層は灰色砂礫、下層は黒色土、最下層は暗灰色砂である。最下層からは完形率の高い土師器がまとまって出土した。最下層が埋没した時点での床面で須恵器の甕(第136図93・94)が大小合わせて2個体、口縁を下向きにして最下層の上面に置かれていた。(第134図)二つの甕は注口を北側の岸へ向けて揃えていた。大型の甕は上流側と下流側を拳大の礫で支えていた。この二つの甕は何らかの祭祀のために人為的に据えられていたと見ることができる。^(注5)またその周囲からは完形率の高い土師器が多量に出土した。最下層・中層からも土師器がまとまって出土した。これらの土器から掘削時期は古墳時代中期末～後期初頭と考えられる。

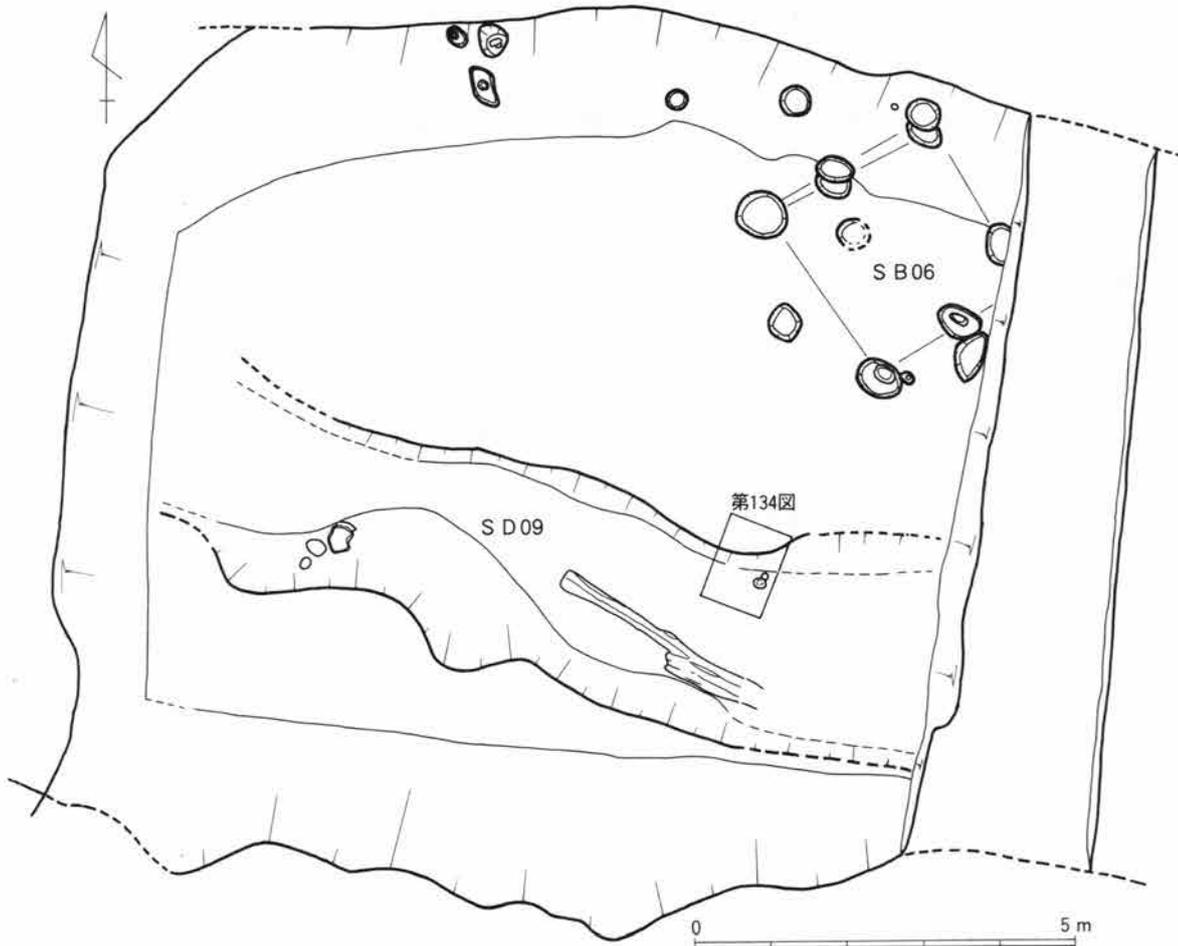
遺物 第135図66～74はS D09最下層から出土した土師器である。66は小型丸底壺である。口径10.3cm・器高10.2cmを測る。口縁部外面は縦ハケ後横ナデ、体部外面は横ナデ後部分的にヘラミガキを施す。67は口縁部が短く上外方にのびる小型丸底の壺である。口径8.2cmを測る。68～71は長脚の高杯である。68・69は柱状の脚柱部から裾部が屈曲してのびる。68は口縁部と杯部の

境目外面に段を設け、口縁部外面と脚部外面にまばらなヘラミガキを施す。口径14.0cm・器高12.0cmを測る。69~71の脚柱部外面は、縦方向の板ナデの後横ナデを施している。70は口径16.0cm・器高11.75cmを測る。72は短脚の高杯である。外面ヘラケズリを施す。73は浅手の碗である。口径13.4cm・器高5.05cmを測る。外面はナデた後底部をヘラケズリし、口縁部に横ナデを施す。内面は2段にヨコハケを施した後、ていねいに横ナデを施す。74は甕である。口径15.0cmを測る。体部から口縁部が「く」の字に屈曲してのび、口縁端部を丸く収める。第136図92は砥石の破片である。3面に使用した面があり、擦痕が見られる。

第135図75~90はS D09下層出土の土師器である。75は直口壺の口縁部である。口径9.75cmを測る。76~80は長脚の高杯である。80の脚部は脚柱部が他のものより太く、裾部が短い。76は脚柱部が長く、裾部の屈曲も明瞭だが、他は比較的短く屈曲も曖昧である。78は杯部と口縁部の境目に段を設け、口縁部が直線的に上外方に広がるが、79は口縁部がわずかに内弯する。78は口径15.2cm、79は口径18.7cm・器高12.5cmを測る。81は短脚の高杯の脚部である。ていねいな横ナデで仕上げている。82~85は碗である。外面はナデた後、口縁部を横ナデし、底部をヘラケズリし

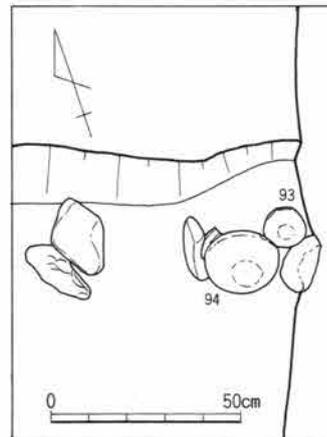


第132図 S D08出土遺物実測図(上段：中層、下段：上層)



第133図 SD09およびNR01第3遺構面遺構配置図

ている。内面は横方向にハケで調整した後、横ナデを施している。82は口縁部外面を強くナデ、口縁部が見かけ上、外反する。口径10.7cmを測る。83は口縁部が内湾し、端部を丸く収める。口径12.3cm・器高4.8cmを測る。84は口縁端部に面を持たせる。口径13.8cm・器高5.85cmを測る。85は口縁部を外反させる。口径15.4cm・器高6.55cmを測る。86は口縁部が「く」の字に屈曲する鉢である。外面ヘラケズリ、内面ナデで調整し、底部に焼成前穿孔を施している。口径17.0cm・器高11.6cmを測る。87~90は甕である。88・89は口縁部が「く」の字に屈曲し、口縁部内面を強くなでることにより、端部内面を肥厚させたかのように作るもの。90は口縁部が外反するものである。87は「く」の字に屈曲し、口縁部を厚手にするものである。91は混入した弥生土器の底部である。

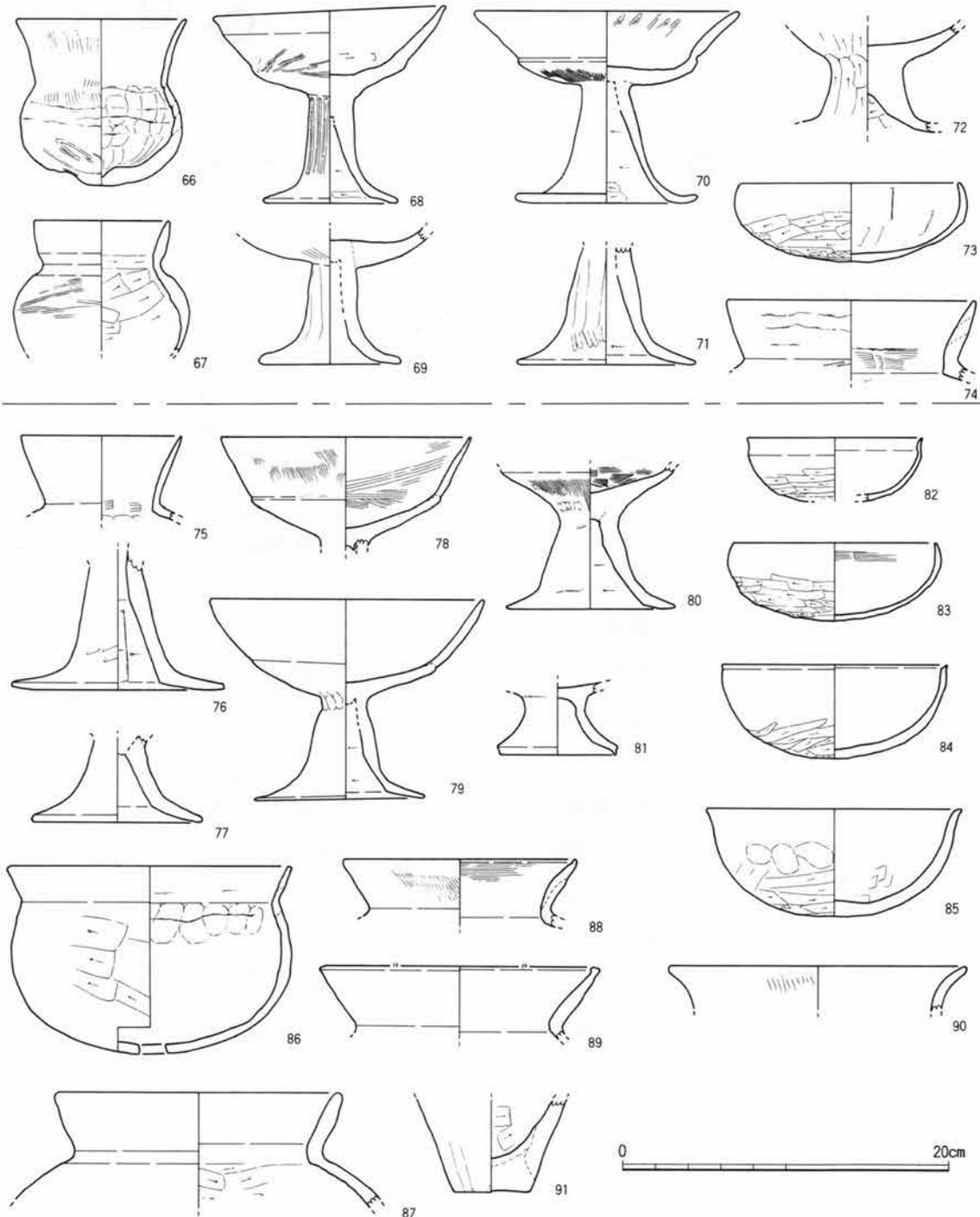


第134図 遺物出土状況図

第136図93・94はSD09下層床面に置かれていた須恵器甕である。93は小型の甕で口径9.5cm・器高10.4cmを測る。胴部最大径は胴部の上位1/3付近にあり、頸部は上方に広がり、段を設けて口縁部がさらに上外方に広がる。胴部下半にはタタキ目が残っている。胴部最大径の部位とその1cmほど下位に沈線をめぐらし、その間に波状紋を巡らす。肩部にはハケ工具による列点文をめぐらし、その間に波状紋を巡らす。肩部にはハケ工具による列点文をめぐらし、その間に波状紋を巡らす。肩部にはハケ工具による列点文をめぐらし、その間に波状紋を巡らす。

ぐらす。頸部、口縁部には波状文をめぐらす。口縁部には意図的に打ち欠かれたと見られる欠損部が多数見られる。94は大型の甕である。口径13.25cm・器高17.15cmを測る。胴部最大径は胴部の上位1/3付近にあり、頸部は上方に広がり、段を設けて口縁部がさらに上外方に広がる。胴部下半にはタタキ目が残っている。口縁部、頸部、胴部最大径部に波状文を施す。口縁部には意図的に打ち欠かれたと見られる欠損部が多数見られる。

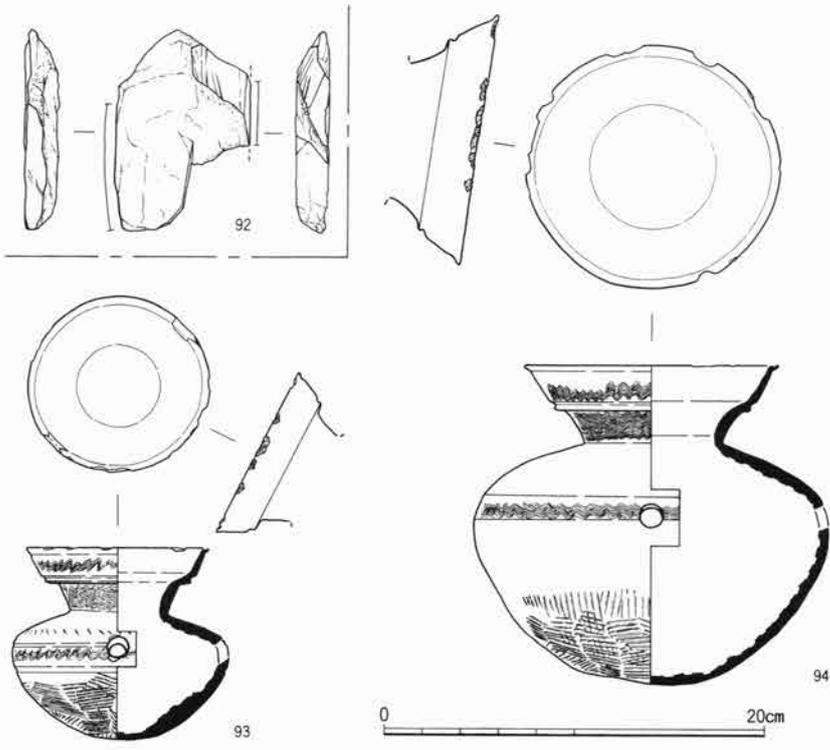
第137図は S D09中層出土土器である。95・96は小型丸底の壺胴部片である。外面ハケ調整の



第135図 S D09出土遺物実測図（上段：最下層、下段：下層）

後ナデ調整を施す。内面にはケズリが見られる。97・98は直口壺である。97は口縁部の破片である。口径10.4cmを測る。外面を横ナデし、内面はヨコハケの後横ナデを施している。98は口径9.9cmを測り、口縁部外面はタテハケの後横ナデ、体部外面はタテハケ後横ナデを施す。内面はナデ調整を施す。99～102は長脚の高杯である。99は口径17.1cm・器高12.8cmを測る。杯部と口縁部の境目に段を設け、直線的にのびる口縁部の先端をわずかに外反させる。内外面をていねいに横ナデ調整を施し、1次調整はほとんど観察できない。脚柱部外面はナデ調整の後横板ナデ調整を施しているのがわかる程度である。口縁端部に意図的に打ち欠いたような欠損部が見られる。100は99と同型式の高杯である。口径15.2cmを測る。内面の杯部と口縁部の接合部にヨコハケの痕跡が見られるが、内外面とも最終調整は横ナデである。口縁部外面に稲初めの圧痕がある。101は椀形高杯の口縁部である。内面はハケ調整の後横ナデ調整を施しているが、ハケ調整の痕跡が明瞭に残る。口径14.3cmを測る。102は口縁部・脚部ともに大きく外反する高杯である。口径16.05cm・器高11.8cmを測る。106は短脚高杯の脚部である。内外面をヘラケズリで調整している。103～105は椀である。103はミニチュアの可能性がある型作りの小型の椀である。口径8.9cmを測る。104・105は口縁部を上方にのばして端部を丸く収める。104は口径10.9cm、105は口径12.4cmを測る。107・108は大型の高杯の口縁部である。107は口縁端部内外面を肥厚している。口径19.2cmを測る。内外面に横ナデ調整を施している。108は口縁端部を丸く収める。口径21.9cmを測る。内外面はハケ調整の後部分的に横ナデを施すが、ハケメはほとんど残っている。109は把手のつく鉢であると考えられる。外面をハケ調整し、内面はケズリで調整している。110・111は甕である。110は口縁端部内面に沈線をめぐらしている。111は口縁部が外反する、肩の張らない甕である。体部外面はハケ調整、内面はヘラケズリ、口縁部外面は横ナデ、内面はヨコハケの後横ナデを施す。内面には炭化物が付着している。口径17.5cmを測る。112は混入の縄文土器片である。破片の中央部に沈線を入れ、その両側に縄文を施している。

ケ調整、内面はヘラケズリ、口縁部外面は横ナデ、内面はヨコハケの後横ナデを施す。内面には炭化物が付着している。口径17.5cmを測る。112は混入の縄文土器片である。破片の中央部に沈線を入れ、その両側に縄文を施している。

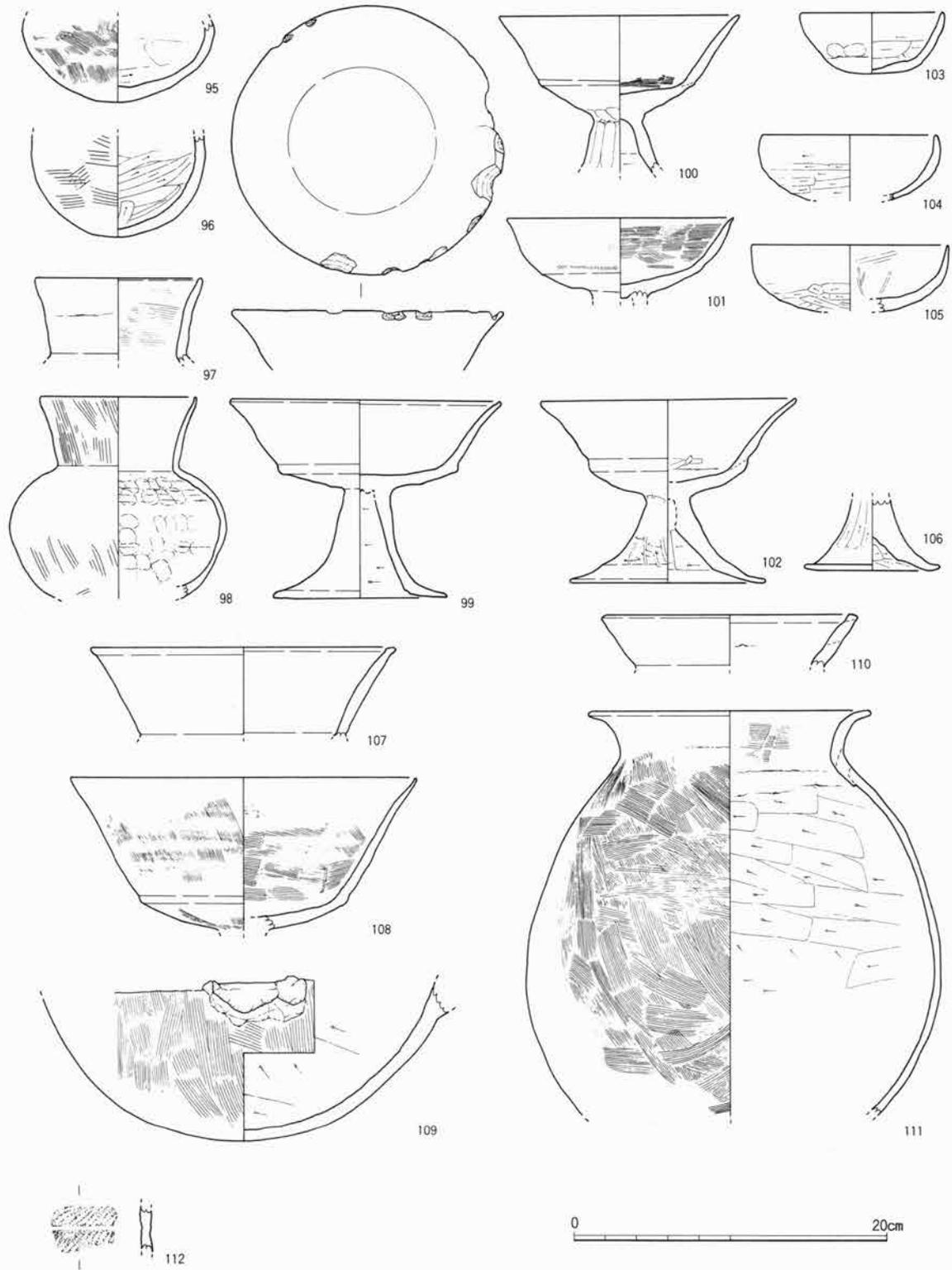


c. 飛鳥～奈良時代の遺構・遺物

① 掘立柱建物跡 S B 05 (第127図)

第136図 S D09出土遺物実測図(石器・須恵器)

トレンチ中部上段で検出した2間×1間以上の掘立柱建物跡である。心いで桁行き3m(1丈)、梁行き1.5m以上を測る。西側は削平のため失われている。柱穴の埋土は灰褐色細砂で、P020の埋土から須恵器杯Bの杯身が出土している。



第137図 S D09出土遺物実測図(中層)

d. 平安～鎌倉時代の遺構・遺物

①旧流路N R 01(第138図)

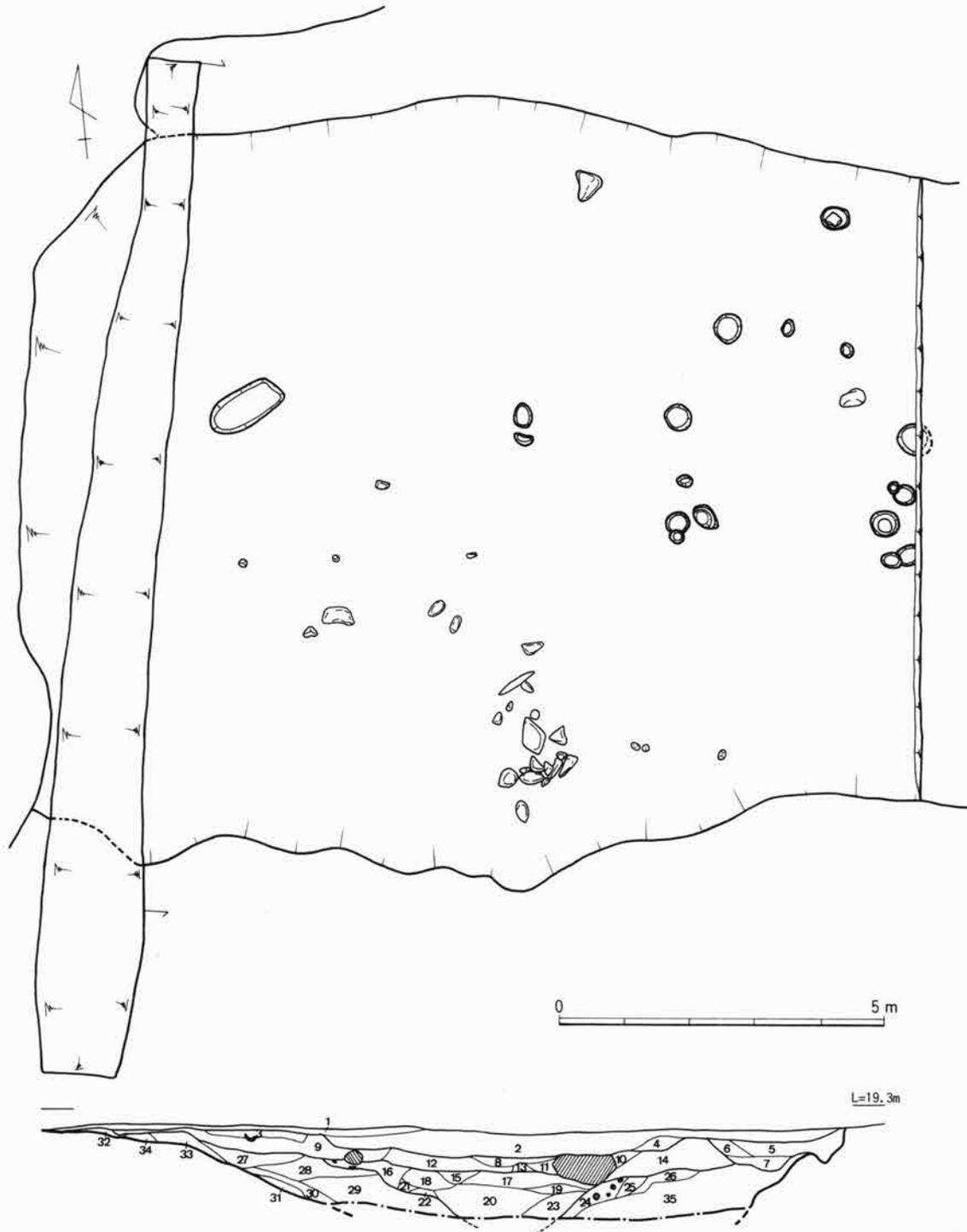
遺構 埋土は上層から極暗灰褐色砂質粘土層、黒褐色土層、黒色砂質粘土層、暗褐色土層、褐色砂混じり土層、青灰色粗砂混じり中粒砂層、黒色粘質土層となっており、青灰色シルトの地山に掘り込まれている。最下層に流木を多く含む褐色シルト層が堆積し、その上に青灰色粗砂混じり中粒砂層が堆積した後にN R 01内第3遺構面が形成され、S D 09、P 193～209が掘り込まれている。黒色土層が堆積した後にN R 01内第2遺構面が形成され、溝S D 06などが掘り込まれている。黒褐色土層が堆積してN R 01が完全に埋没した後に、N R 01内第1遺構面が形成され、柱穴多数が掘り込まれている。

遺物 遺物は、土器・鍛冶関連遺物・木製品などが出土した。まず、土器については、層位ごとに分けて記述したい。

①**暗褐色土層** 第140図113～126はこの層位から出土した土器である。113～123は須恵器、124～126は土師器である。113～115は蓋杯の杯身である。口径9.8～10.5cmを測る。T K 217型式併行。116～119は高台の付く杯、いわゆる杯Bである。底部から口縁部への屈曲は鈍く、高台も屈曲部よりやや内側につき、しっかりとした高台であるため、飛鳥時代のものと考えられる。117の底部外面にはヘラ記号がある。118の口径は14.9cm・器高3.6cm、119の口径は16.0cm、器高は4.2cmを測る。120は壺の底部である。半球形の体部にやや長めの高台を付している。121は盤または鉢の底部と考えられる。底径17.0cmを測る。122は甕の口縁である。口縁端部を内側に肥厚している。口径22.1cmを測る。123は円面硯である。海部は広く、深い。脚部には方形のスカシが穿たれている。124・125は杯の破片である。外面は横方向のミガキ調整、内面は横ナデの後、斜め方向の暗文を施している。126は甕である。内面は縦方向にケズった後タテハケ、外面はタテハケ調整で、口縁部までハケを施した後、口縁部内外面に横ナデを施す。口径19.8cmを測る。

②**黒色砂質粘土層** 第140図127～139はこの層位から出土した土器である。127～134は黒色土器、135は緑釉陶器、137・138は土師器、139は須恵器である。127～129は皿である。糸切りの底部で両黒である。内外面にミガキを施す。129の底部にはヘラ記号がある。130～134は椀である。131のみ輪高台である他は糸切りの底部である。134はロクロ整形の後、内外面を磨いている。口径15.6cm・器高5.2cmを測る。135は緑釉陶器椀の底部と思われる。釉は暗緑色で光沢があり、内外面および底部にかけられている。136・137は糸切り底の土師皿である。136は外面を二段にナデている。口径7.9cm・器高1.5cmを測る。137は外面を一段にナデている。口径8.2cm・器高2.1cmを測る。138は回転台土師器椀である底部は糸切りを行っている。口径18.2cm・器高4.95cmを測る。139は生焼けの須恵質の搦鉢である。口縁端部は内外面を肥厚し、内面に摺り目がある。

③**黒褐色土層** 第141図はこの層位から出土した土器である。140・141は弥生土器、142～144・152・156は土師器、145～151・153～155は須恵器、157～160は黒色土器、161・162は中世の須恵器である。140・141は弥生中期の壺の口縁部である。口径は140は24.0cm、141は23.6cmを測る。頸部外面にタテハケを施す。口縁部内面に突帯が剥離した痕跡が認められる。142は土師器

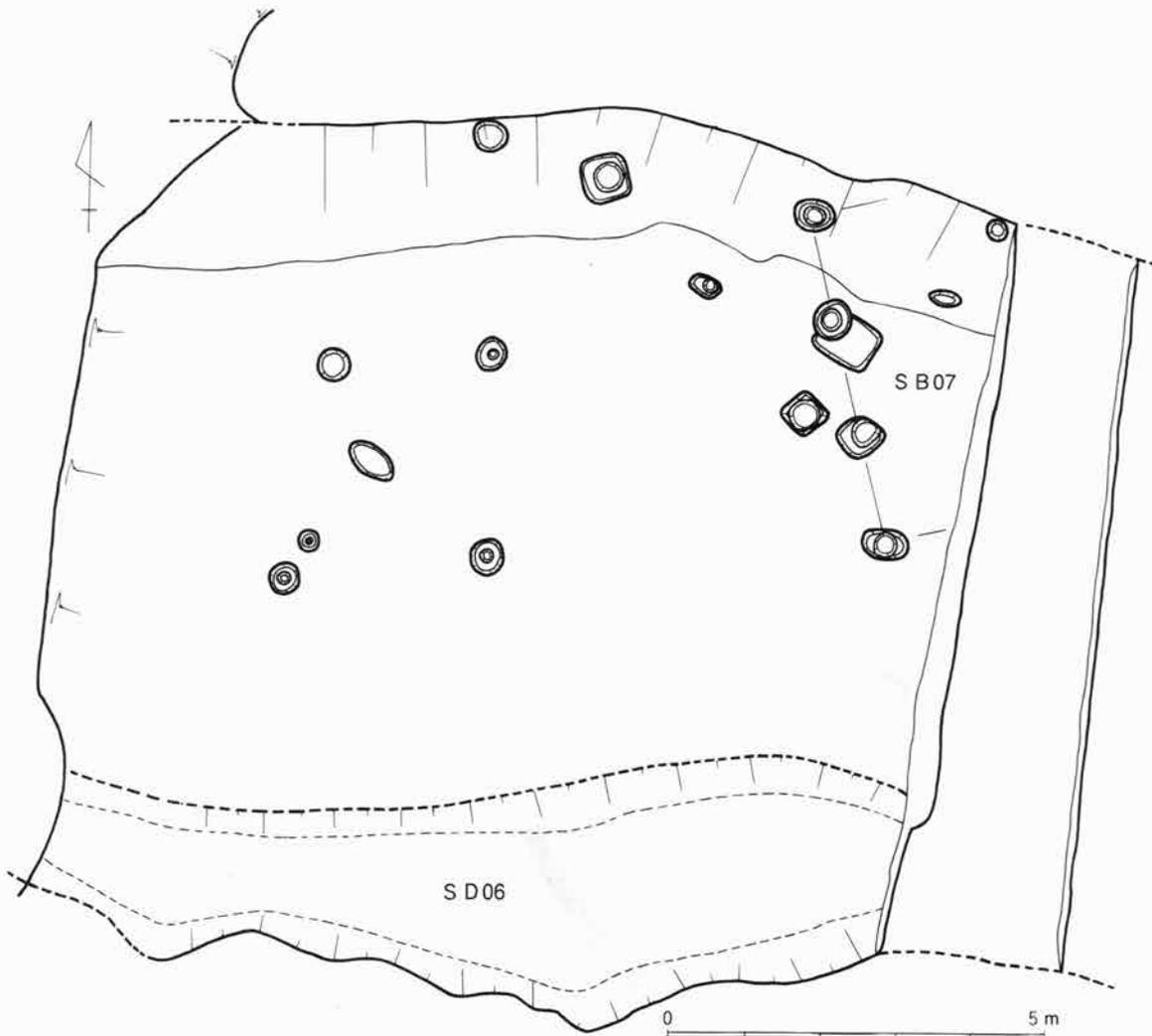


第138図 NR01第1遺構面平面・断面図

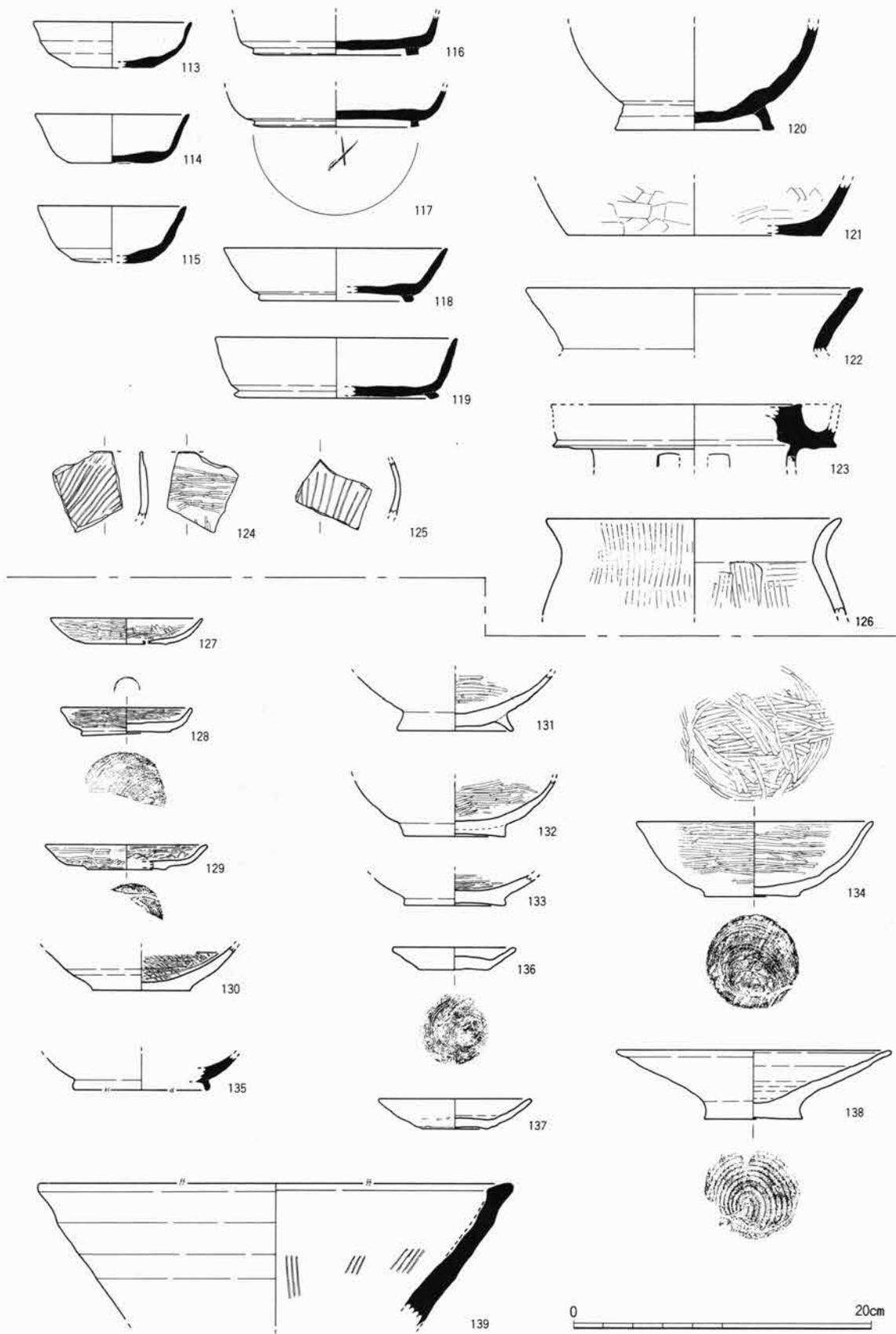
- | | | | |
|----------------|-----------------|---------------|---------------|
| 1. 赤褐色土混じり灰褐色土 | 10. 暗褐色土 | 19. 黒灰色土 | 28. 粗砂混じり褐色土 |
| 2. 赤褐色土混じり黒褐色土 | 11. 黒色粘質土 | 20. 灰色砂礫 | 29. 粗砂混じり青灰色砂 |
| 3. 赤褐色土混じり淡褐色土 | 12. 黒色土(木質多く含む) | 21. 暗灰褐色土 | 30. 黒色粘質土 |
| 4. 黒色土 | 13. 褐色土 | 22. 暗灰色土 | 31. 暗青色粘質土 |
| 5. 粗砂まじり褐色土 | 14. 粗砂混じり褐色土 | 23. 黒色土 | 32. 黄灰色土 |
| 6. 黒褐色土(木質を含む) | 15. 暗灰色土 | 24. 褐色粘土 | 33. 明灰色土 |
| 7. 黄褐色粗砂 | 16. 淡褐色粗砂 | 25. 灰褐色土 | 34. 暗褐色土 |
| 8. 暗褐色土 | 17. 淡黄灰色砂 | 26. 粗砂混じり淡灰褐色 | 35. 粗砂混じり青灰色砂 |
| 9. 赤褐色土混じり黒色土 | 18. 黒褐色土 | 27. 暗褐色土 | |

高杯の脚部である。脚部を中実に作ってからその上端部に円盤を充填するための穴を削り出している。143は低脚高杯の脚部である。144は長脚高杯の脚部である。脚部内面の上端部にナデた痕跡が認められる。152はゆるやかに外反し、肩の張らない甕である。口径20.0cmを測る。内面ヘラケズリ、外面ハケ調整を施す。142～144は古墳時代後期の所産である。145は杯Aである。口径17.5cmを測る。146・147・151は杯Bである。151は底部に高台を貼り付けた際の爪の痕跡が見られる。148～150は杯Bの蓋である。かえりは短く、口縁より下に出ない。153は蓋である。口縁部内面にかえりはなく、口縁端部を下に拡張している。154は壺の底部と思われる。155は蓋である。天井部外面にコンパスでひいたような細かい沈線が認められる。杯A、杯Bは飛鳥時代、153の蓋は奈良時代から平安時代前期の所産と考えられる。157～160は黒色土器の椀である。すべて内黒で、底部は糸切りである。156は回転台土師器の椀と思われる。糸切り別作りの底部を貼り付けている。161は東播系捏鉢の口縁部である。口縁端部を断面三角形にしている。162は椀の底部と思われる。底部は糸切りである。

④極暗灰褐色砂質粘土層 第142図163～180はこの層位から出土した土器である。163～168は土師器、169・170は黒色土器、171は瓦器、172は瓦質の鍋の把手、173～178は白磁、179・180は



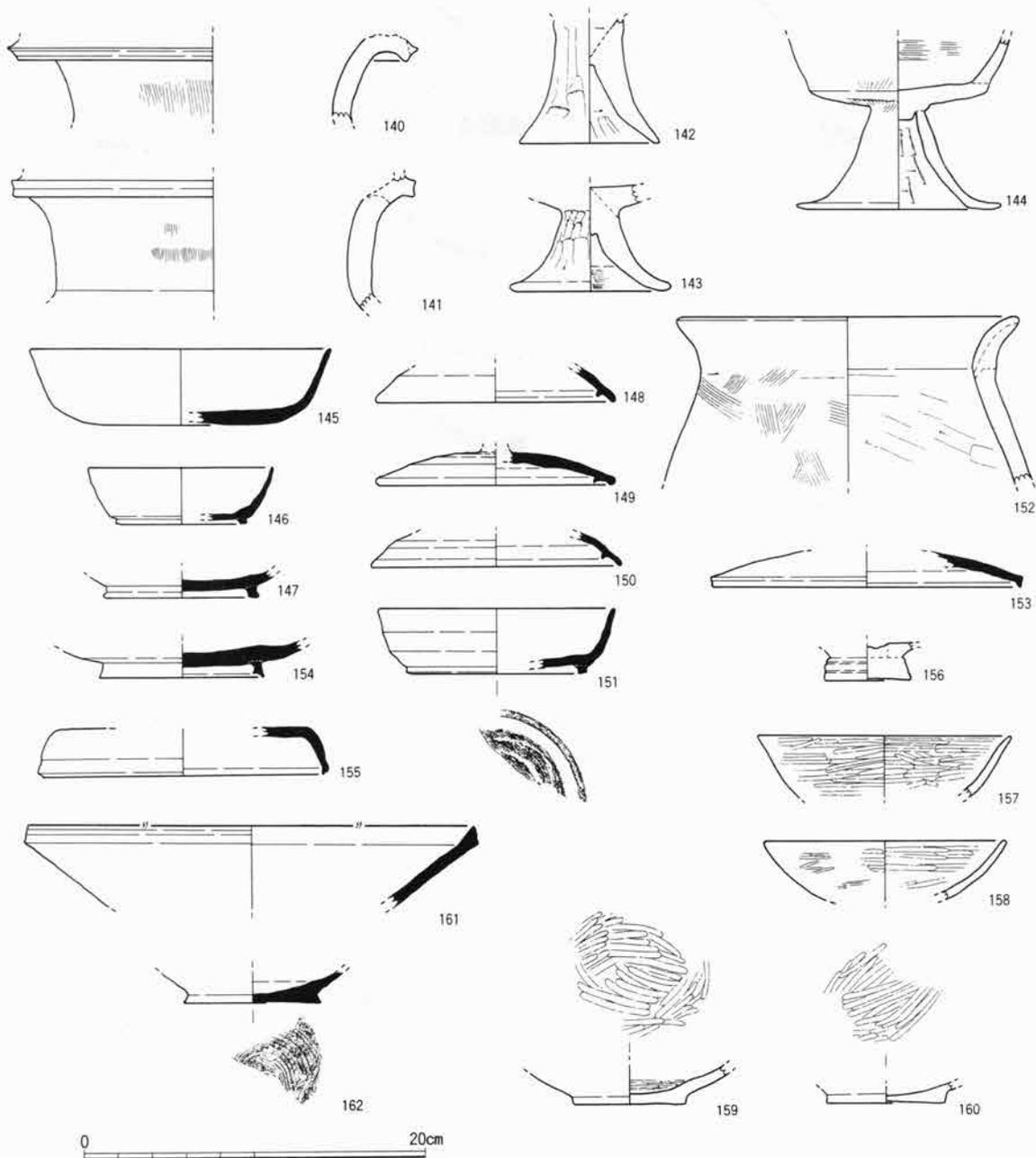
第139図 NR01第2遺構面平面図



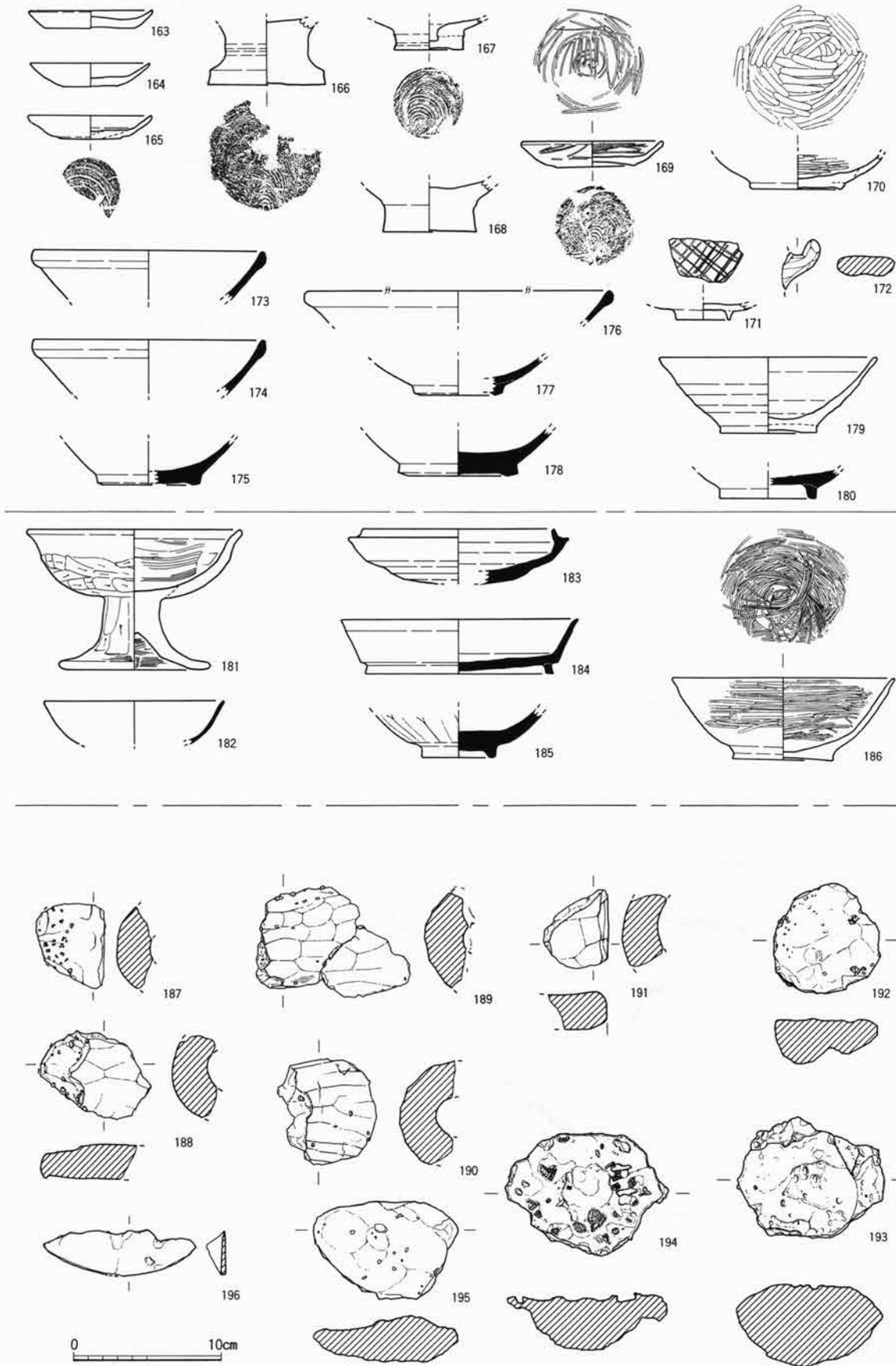
第140図 NR01出土遺物実測図（上段：暗褐色土層、下段黒色土層）

須恵器である。163～165は土師皿である。口径8.2～8.4cmを測る。166～168は回転台土師器と思われる。166は底部が高いもので、底面は糸切りである。167・168はやや底部が低いものである。169は黒色土器の皿である。口径9.4cmを測り、底面は糸切りで、両黒である。170は内黒の黒色土器の椀である。171は瓦器碗の底部である。見込みに格子状の暗文を施す。173・174・176は白磁碗の口縁部である。玉縁状口縁部である。175・177・178は白磁碗の底部である。すべて削り出し高台であると思われる。179は須恵器の碗である。口径14.7cm・器高5.1cmを測る。底面は糸切りを行っている。180は須恵器の底部である。

⑤層位不明の土器 第142図181～186は断ち割りなど、出土層位が不明確な遺物である。181は土師器の高杯である。外面に赤色顔料(ベンガラか)を塗布している。口径14.4cm・器高9.5cmを



第141図 NR01出土遺物実測図(黒褐色土層)



第142図 出土遺物実測図(上段：極暗灰褐色砂質粘土、中段：出土層位不明、下段：鍛冶関係遺物)

測る。182は土師器の碗である。183は須恵器の杯身である。口径12.9cmを測る。184は須恵器の杯Bである。口径16.2cm、器高3.7cmを測る。185は鎬連弁文の青磁碗である。186は黑色土器の碗である。口径14.9cm、器高5.8cmを測る。

鍛冶関係遺物 NR01等から鉄滓など鍛冶関係遺物が出土している(第142図・第16・17表)。

第142図187・188は極暗灰褐色砂質粘土層から出土した鞴の羽口の先端部である。先端が被熱しており、ガラス質の滓が付着している。189・190は鞴の羽口である。190は極暗灰褐色砂質粘土層から出土した。191は黑色砂質粘土層から出土した鞴の羽口の基部である。192は直径約7.8cm、高さ3cmの椀形滓である。長さ約1cm程度の炭化物を多く含んでいる。193は直径約10cm・高さ5.6cmの椀形滓である。194は黑色砂質粘土層から出土した直径約11.2cm・高さ3.7cmの椀形滓である。長さ約1cm程度の炭化物を多く含んでいる。195は直径約10cm・高さ3cmの椀形滓である。長さ約1cm程度の炭化物を多く含んでいる。この他、第16・17表に示すとおり、NR01各層から合計87点、鉄滓、ガラス質滓が出土している。精錬によって鉄の成分を調整する場合、鞴による送風をコントロールするため、炉内の温度が上下し、結果として炭化物が残りやすく、できる滓も均質ではないが、鍛錬を行う際には鞴によって激しく送風し、炉内の温度を上げる。したがって滓には炭が残りにくく、均質な滓となるといわれている。しかし、今回出土した椀形滓はそのどちらの特徴をも持ち合わせている。椀形滓自体は均質であるが、炭を多く含んでいる。また、少量ではあるが、紫色で、磁性のない流動滓が出土している。流動滓は製鉄時によく出る滓だが、近年、鍛冶遺跡でも少量は出土することがあるという。実体は不明であるが、鍛冶、または精錬の過程で少量の流動滓が出る可能性が指摘されている。また結晶の大きな磁性を帯びない滓、は外気に触れ、急速に冷えたものであるといわれている。鍛冶関係遺物の中に、炉壁の一部と見られるものがあるが、これは一部地上に低い壁を積み上げていた可能性を示唆するものである。顕著な炉跡等の遺構は認められなかったが、SK01・02は土坑の壁に被熱による赤変が見られた。特にSK02などはNR01に近いこともあり、これらの遺物と何らかの関係がある可能性がある。

こうした鍛冶関係遺物の時期は、暗褐色土層以前の層から1点も出土していないこと、黑色土層には糸切りの黑色土器碗が多く含まれることから、11～12世紀頃のものと考えられる。^(注6)

木製品 木製品についても、出土層位ごとに分けて記述することにする。

①**黒褐色土層・黑色砂質粘土層** 200は完形の鳥形木製品である。長さ17.0cm・胴部幅1.8cmを測る。201は先端を丸く加工した板材であるが、その形状と大きさから把手の未製品と推定している。残存長12.1cm・幅3.0cmを測る。202～204は刀子または刀の木製把手である。202はほぼ完形の把手である。長さ11.9cm・幅2.4cmを測る。茎を入れる部分は刳り抜かれており、目釘穴に目釘を刺して止める構造になっている。203は残存する部分の厚みは0.9cmを測る。残存長15.3cm・幅2.3cm、鐔の側が欠損しており、縦に半分となっている。内側には茎を受ける穴が細い溝状に彫られているが、実際の茎が入ったと思われる部分は鐔側の一段広くなった部分であると思われる。また目釘穴は認められない。鐔側の残存部から5cmほどが焼けており、表面が炭化

第16表 NR01出土鍛冶関係遺物一覧表(1)

番号	遺構	層位	分類	重量(g)	形状	磁石につくか	夾雑物	その他の特徴	ラベル
1	NR01	極暗灰褐色砂質粘土層	羽口片						b-6-7、NR01極暗灰褐色砂質粘土、980804
2	NR01		羽口片						b-6-7、NR01極暗灰褐色砂質粘土、980804
3	NR01		ガラス質滓	5	塊状	つかない	白色鉱物粒		b-6-7、NR01極暗灰褐色砂質粘土、980804
4	NR01		滓	35	塊状	つかない	白色鉱物粒 炭化物	ガラス質の部分 がある	b-6-7、NR01極暗灰褐色砂質粘土、980804
5	NR01		羽口片						a-b-6、NR01極暗灰褐色砂質粘土、980805
6	NR01		滓	10	塊状	つかない		ガラス質の部分 がある	a-b-6、NR01極暗灰褐色砂質粘土、980805
7	NR01		羽口片						b-6-7、NR01極暗灰褐色砂質粘土、980805
8	NR01		滓	170	塊状	つかない	白色鉱物粒		b-6-7、NR01極暗灰褐色砂質粘土、980805
9	NR01		滓	15	塊状	つかない		ガラス質の部分 がある	b-6-7、NR01極暗灰褐色砂質粘土、980805
10	NR01		滓	40	塊状	つく			b-6-7、NR01極暗灰褐色砂質粘土、980805
11	NR01	黒褐色土層	滓	10	平板	つく			a-b-6-7、NR01黒褐色土980810
12	NR01		滓	10	平板	つく			a-b-6-7、NR01黒褐色土980810
13	NR01		ガラス質滓	5	塊状	つかない			a-b-6-7、NR01黒褐色土980810
14	NR01	黒色砂質粘土層	滓	20	塊状	つく			b-7、NR01黒色砂質粘土、980806
15	NR01		滓	10	塊状	つかない			b-7、NR01黒色砂質粘土、980806
16	NR01		椀形滓	225	椀状	つく	炭化物		b-6-7、NR01黒色砂質粘土、980805
17	NR01		椀形滓片	75	塊状	つく	炭化物		b-6-7、NR01黒色砂質粘土、980805
18	NR01		椀形滓片	18	平板	つく	炭化物		b-6-7、NR01黒色砂質粘土、980805
19	NR01		椀形滓片	85	塊状	つく			b-6-7、NR01黒色砂質粘土、980805
20	NR01		椀形滓片	35	塊状	つく	炭化物		b-6-7、NR01黒色砂質粘土、980805
21	NR01		滓	10	塊状	つく			b-6-7、NR01黒色砂質粘土、980805
22	NR01		滓	25	塊状	つく			b-6-7、NR01黒色砂質粘土、980805
23	NR01		滓	35	塊状	つかない		大型結晶	b-6-7、NR01黒色砂質粘土、980805
24	NR01		滓	20	塊状	つく			b-6-7、NR01黒色砂質粘土、980805
25	NR01		滓	5	塊状	つく	炭化物		b-6-7、NR01黒色砂質粘土、980805
26	NR01		滓	25	塊状	つく	炭化物		b-6-7、NR01黒色砂質粘土、980805
27	NR01		滓	5	塊状	つく	炭化物		b-6-7、NR01黒色砂質粘土、980805
28	NR01		椀形滓	305	椀状	つく	炭化物		b-7、NR01黒色砂質粘土、980806
29	NR01		滓	90	塊状	つく			b-7、NR01黒色砂質粘土、980806
30	NR01		滓	45	塊状	つく	白色塵		b-7、NR01黒色砂質粘土、980806
31	NR01		滓	45	塊状	つく			b-7、NR01黒色砂質粘土、980806
32	NR01		滓	40	塊状	つかない	炭化物	ガラス質の部分 がある	b-7、NR01黒色砂質粘土、980806
33	NR01		滓	20	塊状	つく			b-7、NR01黒色砂質粘土、980806
34	NR01		滓	40	塊状	つく			b-7、NR01黒色砂質粘土、980806
35	NR01		滓	25	平板	つく			b-7、NR01黒色砂質粘土、980806
36	NR01		滓	20	塊状	つかない		大型結晶	b-7、NR01黒色砂質粘土、980806
37	NR01		滓	30	塊状	つく			b-7、NR01黒色砂質粘土、980806
38	NR01		滓	20	塊状	つく			b-7、NR01黒色砂質粘土、980806
39	NR01		滓	15	塊状	つく			b-7、NR01黒色砂質粘土、980806
40	NR01		滓	10	平板	つかない			b-7、NR01黒色砂質粘土、980806
41	NR01		滓	10	塊状	つく	炭化物		b-7、NR01黒色砂質粘土、980806
42	NR01		滓	5	塊状	つく			b-7、NR01黒色砂質粘土、980806
43	NR01		滓	5	塊状	つく	炭化物		b-7、NR01黒色砂質粘土、980806
44	NR01		滓	5	塊状	つく			b-7、NR01黒色砂質粘土、980806
45	NR01		滓	5	塊状	つく			b-7、NR01黒色砂質粘土、980806
46	NR01		滓	35	塊状	つく			b-7、NR01黒色砂質粘土、980806
47	NR01		滓	5	平板	つく			b-7、NR01黒色砂質粘土、980806
48	NR01		羽口片						b-7、NR01黒色砂質粘土、980806
49	NR01	層位不明	流動滓	35	塊状	つかない		紫色	b-6、精査中、980811
50	NR01		滓	25	塊状	つかない		大型結晶	b-6、精査中、980811
51	NR01		滓	60	塊状	つく	炭化物		b-6、精査中、980811
52	NR01		滓	20	塊状	つく			b-6、精査中、980811
53	NR01		滓	15	塊状	つく		暗赤褐色	b-6、精査中、980811
54	NR01		滓	10	塊状	つかない		淡灰褐色	b-6、精査中、980811
55	NR01		羽口片						b-6、精査中、980811
56	NR01		滓	15	塊状	つく			a-6-7、包含層中、980812
57	NR01		滓	10	塊状	つく			a-6-7、包含層中、980812
58	NR01		滓	5	塊状	つく			a-6-7、包含層中、980812
59	NR01		滓	25	平板	つかない	白色鉱物粒		b-6-7、サブトレ、980805
60	NR01		滓	30	塊状	つかない	炭化物	大型結晶	b-6-7、サブトレ、980805
61	NR01		滓	30	平板	つく			b-6-7、サブトレ、980805
62	NR01		滓	5	塊状	つかない			b-6-7、サブトレ、980805

第17表 NR01出土鍛冶関係遺物一覧表(2)

63	NR01	滓	10	塊状	つく			b-6-7、サブトレ、980805
64	NR01	流動滓	20	平板	つかない		紫色	b-6-7、サブトレ、980805
65	NR01	流動滓	25	塊状	つかない		紫色	b-6-7、サブトレ、980805
66	NR01	流動滓	20	塊状	つかない	白色鉱物粒		b-6-7、サブトレ、980805
67	NR01	流動滓	15	塊状	つかない	白色鉱物粒	紫色、大型結晶	b-6-7、サブトレ、980805
68	NR01	羽口片						b-6-7、サブトレ、980805
69	NR01	滓	55	塊状	つく			c-6-7、NR01断削最下層、980805
70	NR01	流動滓	20	塊状	つかない		紫色、ガラス質の部分がある	c-6-7、NR01断削最下層、980805
71	NR01	ガラス質滓	20	塊状	つかない	白色鉱物粒		b-7、NR01精査中、980810
72	NR01	羽口片						b-7、NR01精査中、980810
73	NR01	炉壁						b-7、NR01精査中、980810
74	NR01	羽口片						a-6-7、NR01第1面精査中、980824
75	NR01	滓	25	塊状	つく	白色鉱物粒		a-6-7、NR01第1面精査中、980824
76	NR01	羽口片						b-7、NR01精査中、980810
77	NR01	楕形滓	45	平板	つく			b-7、NR01精査中、980810
78	NR01	融解須恵器片						b-7、NR01精査中、980810
79	SD06	炉壁		塊状				b-7、NR01南カタ精査中、980826
80	P093	滓		塊状				b-5、P093、980826
81	P093	滓		塊状				b-5、P093、980826
82	P093	滓		塊状				b-5、P093、980826

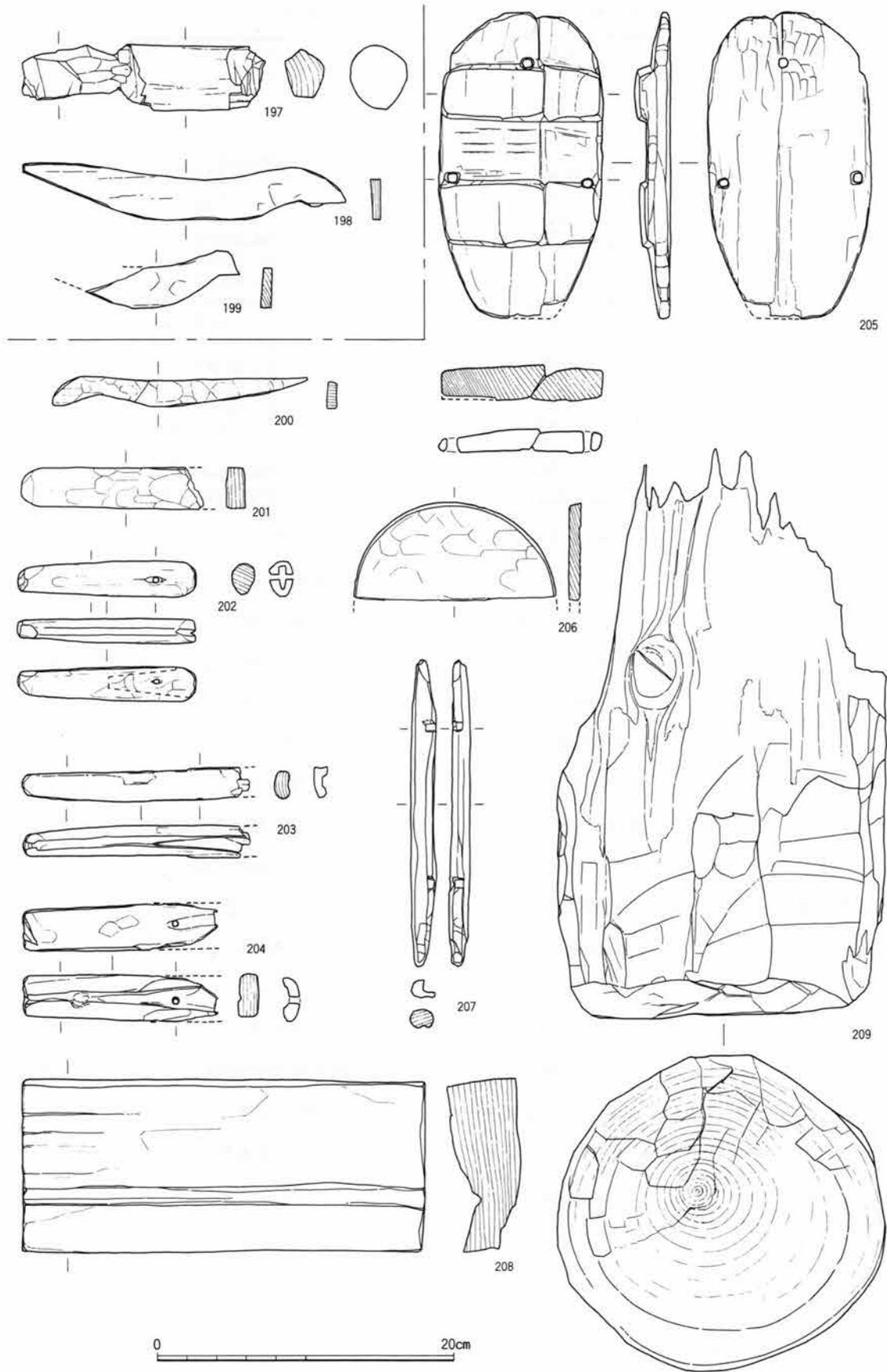
している。204は残存長13.2cm・幅3.2cmを測る。把手の柄尻まで貫通する細い溝が彫られており、鏝の側で広がるのは203と同様であるが、こちらには目釘穴が存在する。210・211は齋串の可能性のある木製品である。210はほぼ完形で、長さ72.8cm・幅3.0cmを測る。211は先端部のみ残存している。残存長13.7cm・最大幅4.3cmを測る。206は、曲物の底板と考えられる半円形の板材である。直径13.5cm・厚さ0.8cmを測る。207は糸車の枠木である。長さ20.7cm・直径1.6cmを測る。両先端を細く削り出しており、先端近くに2か所の方形の削り込みがある。207は木柱の残欠である。直径21.8cm・残存長38.8cmを測る。側面および底面には手斧による加工痕が明瞭に残る。208は礎板状木製品である。これは本来第1遺構面の柱穴の底にあったものであるが、遺構面が黒褐色であり、遺構埋土も黒褐色であるという悪条件の上に、非常に調査期間が短くなっていたため、柱穴を検出できなかったものであると思われる。長さ27.0cm・幅11.8cmを測る。

②極暗灰褐色砂質粘土層 この層からは鳥形木製品2点、下駄1点、横槌状木製品の未製品1点が出土している。197は横槌状木製品の未製品である。長さ16.4cm、槌部の直径4.2cmを測る。198・199は鳥形木製品である。198は頭部の先端が欠損している。長さ21.7cm・胴部幅3.0cmを測る。199は頭部と尾部が欠損している。残存長10.4cm・胴部幅2.8cmを測る。

③断ち割り出土の木製品 NR01を掘削するのに先立って断ち割りを実施し、土層の堆積状況を確認したが、この時、土器とともに木製品も出土した。220は皿形木製品である。217は下駄である。218は不明木製品である。219は刀子形木製品である。213は笏状木製品である。214は把手形木製品である。215・216・220は曲物の底と思われる木製品である。

石製品 222・223は敲石である。222は黒色砂質粘土層から、223は黒褐色土層から出土した。双方とも長軸方向先端部に敲打痕があり、223は側面にも擦痕が見られる。224は自然礫の中央部に浅い溝をつけたもので、石錘ではないかと思われる。225は旧石器時代の石核である。石材は褐色の玉髓で、背面は自然礫面になっている。

果実 NR01・02から果実の種子が出土しているのでその数量を報告しておく。なお樹種判定



第143図 NR01出土木製品実測図

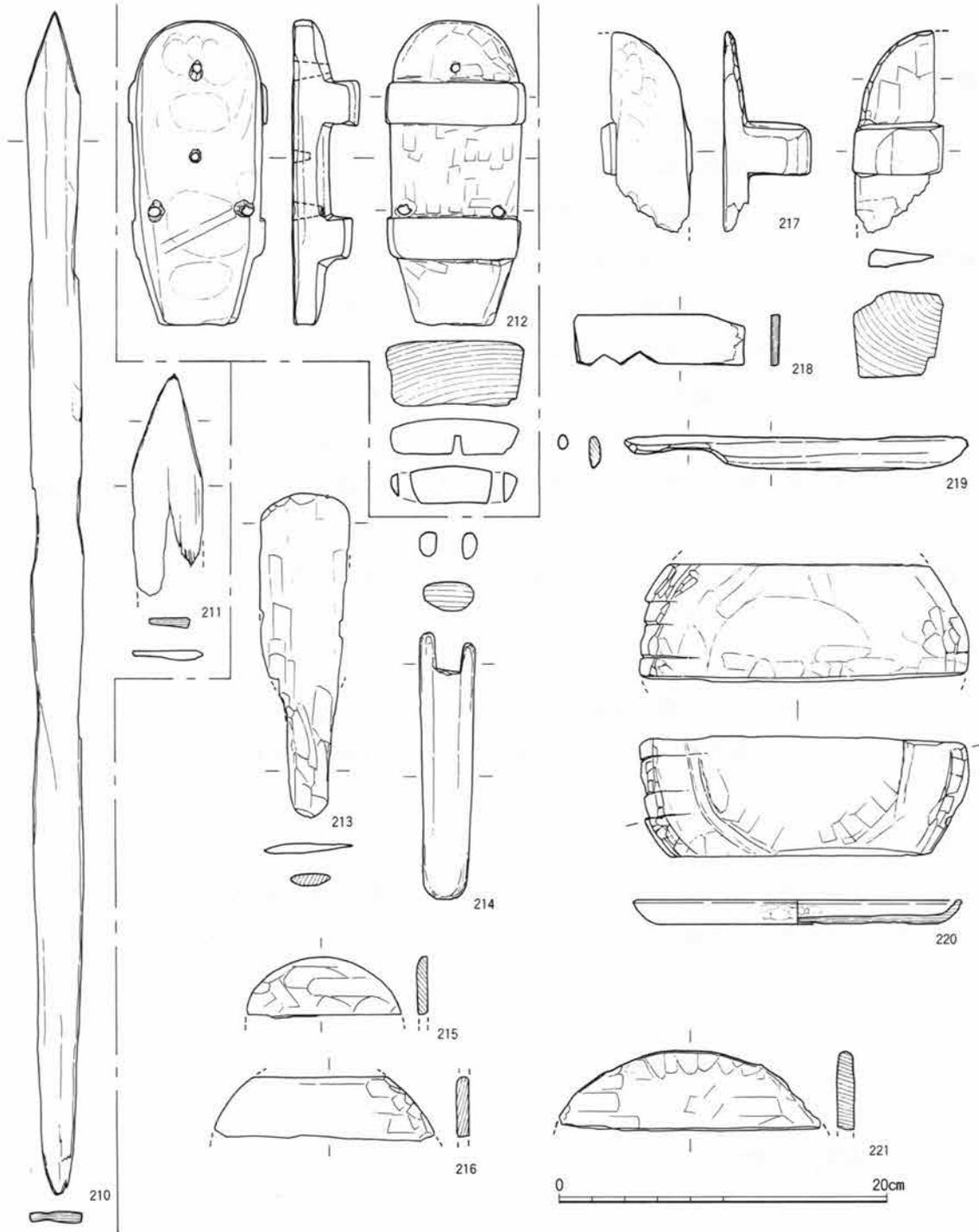
は筆者の肉眼判定によるものである。

(a) NR01 極暗灰褐色砂質粘土層 トチ1点、黒褐色土層 モモ8点、黒色砂質粘土層 クルミ3点・モモ9点。

(b)精査中 モモ171点、クルミ2点、不明1点。

(c) NR02 トチ1点、モモ40点。

モモの実が多く出土しているが、花粉分析の結果、付近にはモモの木が存在しないことが判明



第144図 NR01・02出土木製品実測図

している(巻末分析結果参照)。このことから、モモは「交換」によって遠隔地からもたらされた可能性がある。

②掘立柱建物跡 S B07(第139図)

NR01の第2遺構面で検出した3間×1間以上の掘立柱建物跡または柵である。柱穴は直径40～50cmの掘形に直径25～35cmの柱痕が見られる。柱穴からは顕著な遺物は出土しなかったが、遺構面の時期が包含層中の遺物から平安時代末～鎌倉時代初頭と思われるため、この掘立柱建物跡もこの時期に属すると考えられる。

③溝 S D06(第139図)

遺構 NR01の第2遺構面上で、NR01南岸に沿って西流する溝である。幅2～3m・深さ45cmを測る。埋土は上下2層に分かれ、上層は褐色粗砂混じりシルト、下層は黄褐色粗砂である。中央部付近で人頭大の垂角礫が集中している部分が認められた。埋土からは黒色土器を中心に平安時代末の遺物(第145図)が多数出土し、木製の下駄(第144図212)も出土している。

遺物 遺物には、土器および木器がみられる。

土器 第145図226～228は土師皿である。口径8.2～8.6cmを測る。226は口縁部を外反させる。その他の2点は口縁部を内湾させる。底部は糸切りである。229～233は内黒の黒色土器碗である。底部は糸切りである。229は器高が低く、口縁部が中程から外反する形態である。口径16.0cm・器高4.9cmを測る。230・231は、椀形の体部からわずかに口縁部が外反する。口径は、230は16.1cm、231は16.5cmを測る。232は底部であるが、高台がやや高い。234・235は白磁碗の底部である。

木器 第144図212は下駄である。長さ18.6cm・幅7.8cmを測る。鼻緒を通す円孔が3か所にあけられ、中央部に貫通しない円孔を穿っている。

④土坑 S K01(第146図)

トレンチ中央部で検出した平面砲弾形の土坑で、長軸1.1m・幅90cm・深さ25cmを測る。埋土は上層から黒灰色土、黒褐色土、黒色土(炭化物を含む)がほぼ水平に堆積しており、側壁が赤く被熱している。

⑤土坑 S K02(第146図)

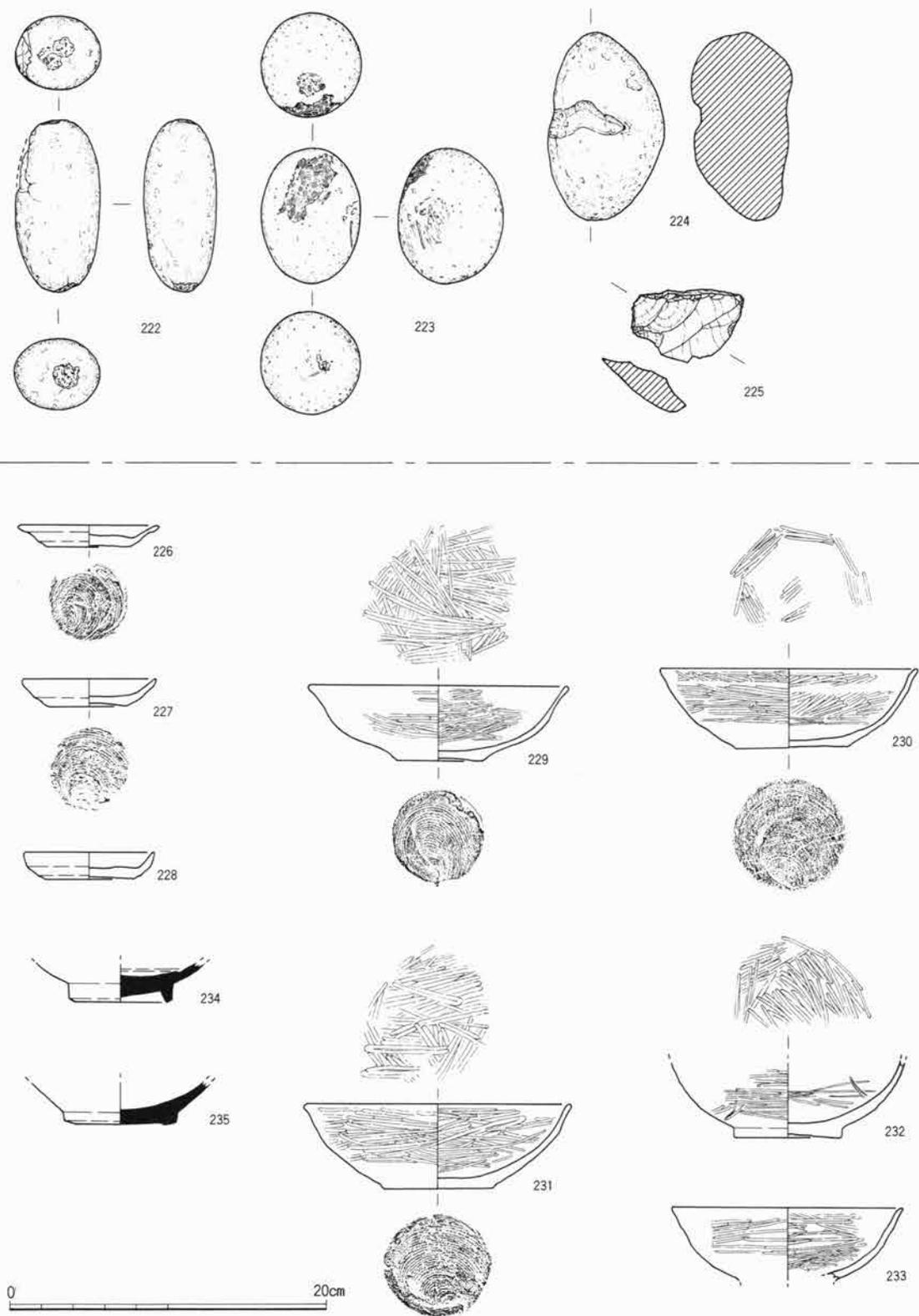
トレンチ中央部で検出した平面隅丸長方形の土坑で、長軸1.0m・幅60cm・深さ18cmを測る。埋土は上層から黒灰色土、黒褐色土、黒色土(炭化物を含む)がほぼ水平に堆積しており、側壁が赤く被熱している。

⑥土坑 S K07(第146図)

トレンチ北部で西半分を削平された長方形の土坑を検出した。検出長1.6m・幅1.6m・深さ32cmを測る。埋土は黒褐色シルト混じり粗砂となっており、黒色土器碗が出土している。

⑦その他の遺構出土遺物

第147図236・248は柱穴P093の掘形埋土から出土した遺物である。236は黒色土器の内黒の椀である。糸切り痕が見られる。248は回転台土師器椀である。口径15.6cm・器高6.6cmを測る。



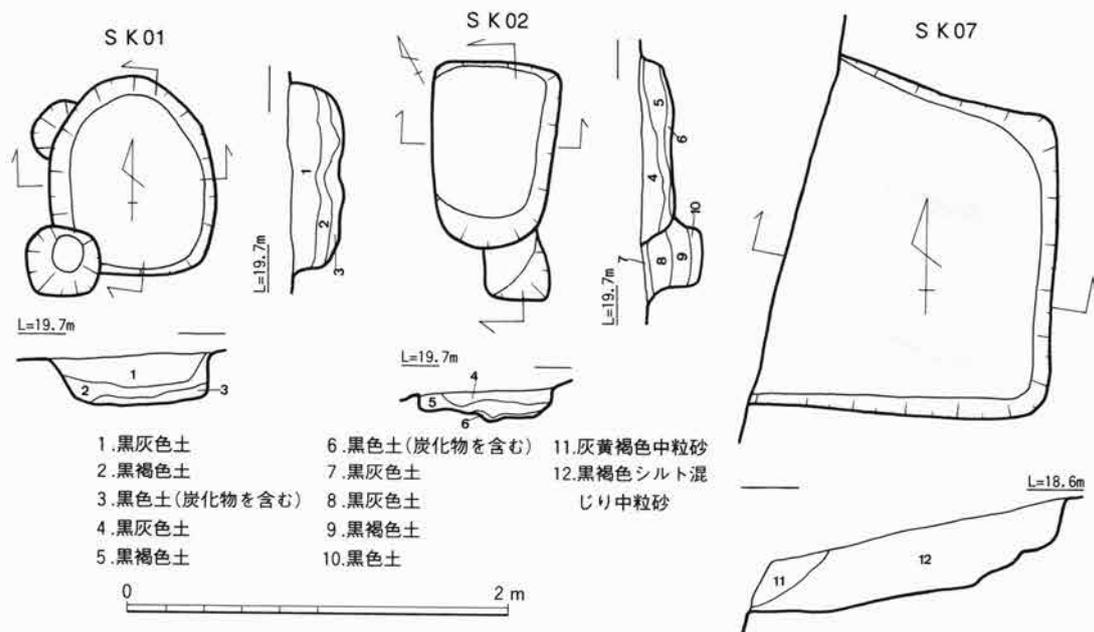
第145図 NR01出土石製品・SD06出土遺物実測図

237は柱穴P020の埋土から出土した須恵器杯Bの底部である。高台は断面方形で、屈曲部よりやや内側に付く。238~244は柱穴P051から出土した遺物である。238は回転台土師器碗である。摩滅のため調整は不明である。239は土師皿である。口径7.8cmを測る。摩滅のため調整は不明である。240は両黒の黒色土器皿である。口径9.5cm・器高2.5cmを測る。内外面にミガキを施し、底面までも糸切りの後、ミガキを行っている。241は内黒の黒色土器碗である。口径14.7cm・器高5.8cmを測る。内外面にミガキを施す。外面はやや暗褐色を呈す。242・243は内黒の黒色土器碗である。摩滅により内外面調整は不明である。244は内黒の黒色土器碗の底部である。底面に糸切り痕が見られる。245は柱穴P052から出土した土師皿である。口径7.5cm・器高1.5cmを測る。底面に糸切り痕が見られる以外は、摩滅のため調整不明である。246は柱穴P093出土の土師皿である。摩滅のため調整不明である。247は柱穴P097出土の土師皿である。口径8.6cm・器高2.5cmを測る。内外面に横ナデ調整を施し、底面に糸切り痕が見られる。249は柱穴P095から出土した須恵器杯Bの蓋である。口径18.8cmを測る。250と251は柱穴P142から出土した須恵器蓋杯である。蓋の屈曲部に沈線が残ることや、口縁端部に段が残ることなどからTK10型式であると考えられる。

e. まとめ

本調査区は、古墳時代から平安時代末まで断続的に営まれた集落遺跡であることが明らかとなった。また、旧石器時代、縄文時代、弥生時代についても、付近に遺構の存在を示す遺物は認められた。しかし量はわずかであるため、それらの時期の遺構は遠くにあるか、定住を示すものではなく、一時的な遺構であった可能性もある。

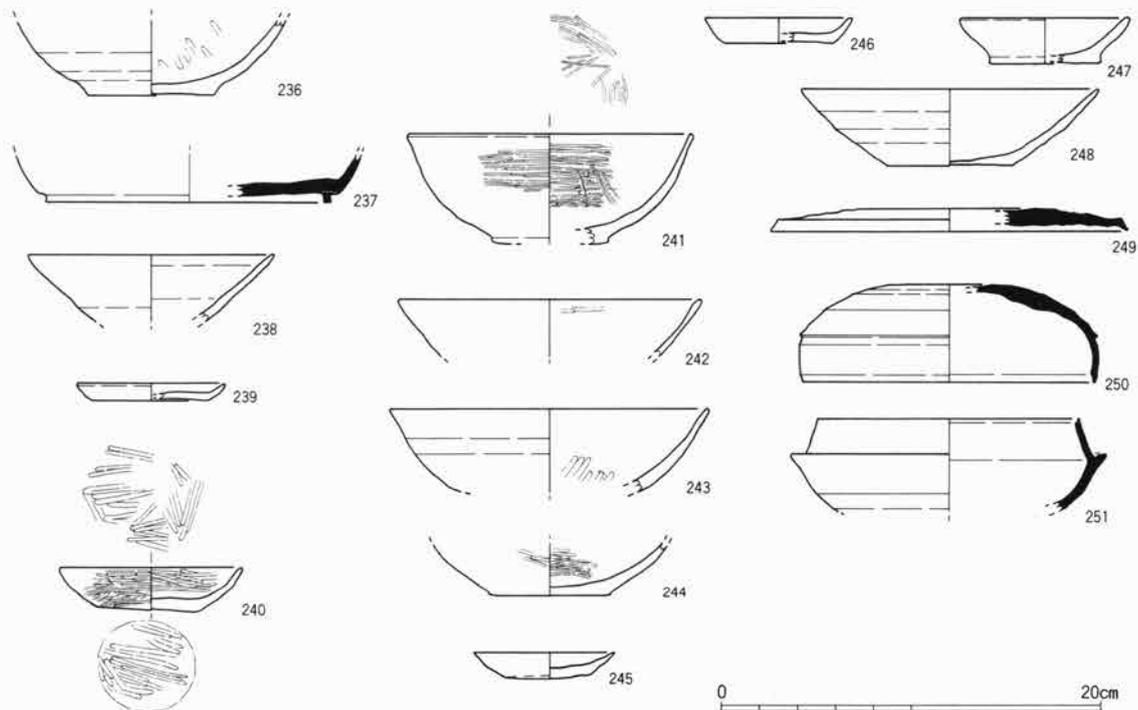
弥生時代終末期の遺物が、平成9年度の試掘調査で、3トレンチのNR01の延長部から出土し



第146図 SK01・02・07平面・断面図

ている。今回の調査区の中からは、この時期の遺構・遺物は1点も出土していないため、3トレンチ周辺に当該期の遺構が展開している可能性がある。そして浅後谷南墳墓の時期と近接し、A地区でもこの時期の遺物が出土しているため、弥生時代後期末から古墳時代初頭にも集落の展開が見られたことが推測できる。ただし、B地区において当該期の遺構が検出されなかったことから、集落は試掘トレンチを含む西側のやや低い位置に展開していたものと推定される。なお、NR01について、この時期に谷地形を利用して掘削したものである可能性がある。それはこの遺構がゆるい「U」字形の断面形を示すのではなく、切り立った断面形態を示しているからである。そうであるとすれば、この遺構は農業用の基幹、用水路として機能していた可能性がある。この時期に続く古墳時代前期、中期の遺構・遺物は認められず、B地区では空白期となる。古墳時代中期末から後期初頭のSD09はこれを再利用し、なおかつ祭祀に用いた溝であった可能性が考えられる。

古墳時代後期においてはわずかではあるが居住域の一部を垣間見ることができた。遺構の検出傾向から見て、居住域は調査区の西側に展開するものと考えられるが、その多くが後世の耕地開発によって削平されている。またSD08は大型の溝であり、東辺が鍵の手に屈曲したり、北端と南端が直角に屈曲することから、集落内を区画する溝である可能性がある。また「古市の大溝」で想定されているような山水を受けて用水を確保する溝とも考えられる。なお、SD09から出土した土師器群は溝資料ではあるが、層位的な取り上げをした結果、ある程度一括性のある資料となっている。また、TK23型式の須恵器との同伴関係を押さえられるため、MT15～TK43型式に併行するSD08の資料とともに、丹後の須恵器併行期の古墳時代土師器の良好な資料となるであろう。なお、この時期の丹後地方におけるは時期については別稿を予定している。SD09に置



第147図 その他の遺構出土遺物

かれていた大小の甕は甕の祭祀を集落内でも行っていることを示した初めての例であり注目される。古墳時代後期の集落の景観を一部想定も含め復原的に叙述すると以下のようなになる。自然流路NR01を南の限りとし、溝SD01・SD08で区画された西側に居住区が展開し、特にSD08に区画された内側には重要な建物の存在が想定され、区画の外側、丘陵際までは掘立柱倉庫群が林立する。西側は福田川の氾濫原が天然の区画となり、また福田川から網野潟・網野湾を通じて海へ通じる交通路の玄関口になる。北側には浅後谷南墳墓との間に入る谷で区画されている。南側の丘陵の南麓にはA地区の竪穴式住居群が展開する。その南はまた谷部で区画されている。そして東側の丘陵の頂部には後期と見られる古墳が存在する。潟湖を臨む位置には網野銚子山古墳が所在するが、B地区ではこの古墳に関係する遺構・遺物は見られず、また、中期古墳や、古墳時代中期の遺構も基本的には見られない。当該地が再び歴史的にクローズアップされるのは、古墳時代後期に入ってからであるといえよう。

飛鳥・奈良時代においては、遺構は掘立柱建物跡のみであるが、NR01内から一定のまとまりがある資料が出土した。中でも円面硯は官衙や、寺院以外で出土することが稀な遺物であり、なおかつ当調査地からは一点の瓦も出土していないという事実から、寺院である可能性が否定され、この時期の官衙の建物が付近に存在していたことをうかがわせる資料となった。当調査地内で可能性があるものをあげれば、掘立柱建物跡SB05しかないが、これについては資料不足で何ともいえない。ただし、眼前に網野の潟湖を望み、天然の良港に面したこの地に海産物や交易品を管掌する官衙があったとしても不思議ではない。なお円面硯はA地区でも出土している。

平安時代前・中期は遺構・遺物ともに認められない。当調査区における空白期である。

平安時代末の遺物群は、丹後における当該期の木器、鉄器の生産に関して重要な資料を提供する結果となった。とりわけ椀形滓、輪の羽口など鍛冶関係の遺物が出土した意味は大きく、鍛錬と精錬という2つの行為について、さまざまな検討すべき課題を提供する資料であるとともに、弥栄町遠所遺跡などで見られた官営での集中的な鉄器生産が、各集落での生産へと変化していく過程を示す資料となる。特に椀形滓が良好な残存状況で出土しているので、この問題の研究に深く寄与する可能性を秘めている。この後に続く時期の遺構・遺物は出土していない。出土した木製品に炭化した部分が多く見られることから、当調査区における集落は火災に見舞われ、以後復興されることがなく、やがて削平を受け、耕地化するものと思われる。

なお、遺構の広がりには東側の谷奥部へと、西側の沖積地へ向けて、そして北西のC地区へ向けて広がっている。この周辺に掘削を伴う開発が及ぶ際には非常に慎重な対応が必要である。

(福島孝行)

4. ま と め

これまでに浅後谷南遺跡の概要について記してきた。諸般の事情により全ての遺構・遺物を紹介することはできなかったが、いくつかの問題点を整理し、まとめに代えておきたい。なお、本概要報告で十分に検討できなかった点については別稿を用意しており、順次、当調査研究センターの『京都府埋蔵文化財情報』などで報告していく予定である。

(1)浅後谷南遺跡の弥生時代から古墳時代の土器編年

この遺跡の発掘調査において、第1の成果といえるのが、丹後地方における土器編年確立のための基準資料が蓄積された点である。当該期の編年作業としては、古殿遺跡の型式分類による編年^(注7)を始め、近年、当調査研究センターの野々口陽子による墳墓出土土器の編年案^(注8)などが提示されているが、前者は遺構の切り合いあるいは層位から押さえられた編年案ではないし、後者は資料が墳墓に限定されているなどの点で問題がある。今回の調査により得られた資料は、遺構の切り合い関係から層位的に前後関係を把握できるものであり、これまで提示されてきた編年案とは異なり、確実に前後関係を押さえることのできる資料群である。

今一度、遺構の切り合い関係を整理し、相対的前後関係を明らかにしておく。谷部分の遺構の変遷は、溝S D2018→溝S D2018包含層→溝S D2017・溝S D2016(古)→溝S D2016(新)→土坑S K2003・溝S D2015→溝S D2012・溝S D2011(古)→溝S D2010(古)・溝S D2013→溝S D2010(新)・溝S D2011となる。

これらから得られた土器資料をもとに編年的な見通しを立てておきたい。

丹後の後期弥生土器は、擬凹線文の盛行によって位置付けられてきた。これは石井清司^(注9)・野々口陽子^(注10)・肥後弘幸が従来指摘したとおり、擬凹線を施す土器群は弥生後期後半を盛行期に多様化・衰退の道をたどる。当遺跡では擬凹線盛行期に属する資料群として、第3トレンチS X01出土土器をあげることができる。同時にS D2018包含層資料も同等のものとして扱うことができるが、残念ながら十分な調査を行うことができず、資料として使用できない。したがって擬凹線盛行段階の土器群として第3トレンチS X01出土土器を提示する。これを浅後谷第1群土器としておく。

後続する資料群は、畿内布留式に代表される布留式甕の出現以前の土器様相を示すものとして扱うことが可能と考える。この段階に属する資料は主要な器種から擬凹線の衰退したS D2017・S D2016(新)・S D2016(古)・土坑S K2003・S D2015・土器溜まりNである。これらの土器群は、遺構の切り合い関係をみる限り前後関係に置くことが可能であるが、土器様式上の画期として設定できる変化はない。各器種は基本的に第1群土器の系譜を引くものが多い。これらを浅後谷2群土器として捉えることとする。第2群土器の特徴は、他地域からの影響のもとに成立する多様な土器様相である。その地域は、畿内・山陰・北陸・東海などが想定できる。また、主体的な甕として「く」の字状口縁をもつものが大部分を占めるという点も重要である。これらの要素は、墳墓には現れない集落遺跡ならではの様相である。

次に設定できる段階として、竪穴状土坑S K2004・溝S D2012に代表される土器群がある。畿

内布留式甕の流入・盛行時期を示すものとする。これを浅後谷3群土器として把握する。3群土器は排他的な状況を示すものとして理解する。在地的な様相がほとんど払拭されるが、肩部に波状文・直線文を施す個体、鼓形器台の存在等は山陰の影響をうかがうことができる。

次の段階は、布留式甕の消滅・須恵器出現による器種構成の変容が起こるまでをひとつのまとまりとして捉える。すなわち、S D2010(古)がこれに相当する。これを浅後谷第4群土器とする。布留式甕・布留系高杯は退化し、在地化した土器へと変容する。

後続する須恵器の定着以前の段階を、浅後谷第5群土器として把握する。須恵器を伴うが出土量はきわめて少ない。溝S D2010(新)が該当する。新たに椀・大形高杯などの新器種が登場する。共伴する須恵器はT K23・47型式併行期である

第6群土器は、須恵器が主要な器種として定着して以降、律令的土器の出現するまでの土器群を当てる。竪穴式住居跡群出土土器がこれに該当する。椀が食膳具の主要な器種として定着する。共伴する須恵器は、MT15・TK10型式併行期のものである。

さて、これまでに土器の画期に即して群として土器群を把握した。これから先、各器種の細分を行い、それぞれの形式変化を整理、各器種の消長・新器種の出現・形式変化を小画期とし、さらに他地域との併行関係を検討し、編年の整合性・精度を高めていく作業が残っている。この点については別稿で記すこととしたい。1～6群の各々の土器群を、あえて編年的視点から見れば、1群土器は弥生時代後期後半、2群土器は弥生時代後期末から古墳時代前期前半、3群土器は古墳時代前期後半、4群土器は古墳時代中期前半、5群土器は古墳時代中期後半、6群は古墳時代後期のものと理解できる。

(2)木製品について

浅後谷南遺跡では農工具をはじめとする多数の木製品を得ることができた。これらは出土遺構から伴出土器が明らかなものが多い。中でも溝S D2010(新)出土木製品は、量的・質的にも充実した資料であり、5世紀後半段階の木器の構成を知る上で重要である。

この中で、注目しておきたいのは建築部材群である。これら建築部材を検討することにより、ほぼ1棟の高床式建物の構造をほぼ明らかにすることができた。これについてもその復原案は別稿に譲ることとし、多方面の方々からの、ご助言・ご教示を期待したい。

(3)浄水施設の評価

今回浄水施設として報告した木樋を伴う堰状遺構の性格は、明確ではないが、やはり祭祀的色彩の濃厚な遺物(鳥形・鏡形)が出土している点から、祭祀の場もしくは祭祀関連施設と考える。おそらく、ここで得られた水を用いた祭祀が行われたものと推測する。一方、浄水施設2の上流部では、トチの集積が認められるなど実用的側面も兼ね備えている。

構造的には浄水施設1・2ともに木樋の槽状部分あるいは大形槽に水をためるという点では共通した構造をもつ。また、類似遺構として知られる滋賀県服部遺跡や、奈良県南郷大東遺跡のものとも、上流部にダム状の施設をもつ点、木樋の上流部に堰状施設をもつ点などの共通項も多々ある。このように地域を越えて共通する構造をもつ特殊な遺構は、集団内部から自然発生的に成

立したものとは考えがたく、外的な影響下に成立したものであろう。あえて言えば、畿内政治集団の関与なくして成立しない祭祀遺構ではないかと考える。

(4) 弥生から古墳時代集落としての浅後谷南遺跡

ここでは先ほど提示した土器群の編年観に基づき遺跡の変遷について概観する。弥生から古墳時代は以下のⅠ～Ⅴ期に整理する。

Ⅰ期以前：弥生時代前・中期に属する。溝S D2018やB地区出土の弥生前期の土器、A・B地区出土の弥生中期の土器がある。遺構・遺物は散漫であり本格的集落と言うよりは、大溝と言ってよい溝S D2018が示すように、農耕に関連した土地利用がなされたものとする。対岸の高橋遺跡がこの段階の集落遺跡の可能性をもつ。

Ⅰ期：第1群土器を出土する第3トレンチS X01・溝S D2018内包含層が該当する。住居などの遺構は確認できない。しかしながら浅後谷南墳墓は同段階に該当し、S X01出土遺物は量的にも多いため、ある程度の規模をもつ集落が周辺部に営まれていたものと判断する。

Ⅱ期：第2群土器を出土する竪穴式住居跡S H19・溝S D2015～S D2017・土坑S K2003・土器溜まりNなどが当該期に該当する。竪穴式住居跡の存在や溝・包含層出土土器の総量を考慮すると、集落の拡大時期とみられる。

Ⅲ期：第3群土器を出土する溝S D2012・竪穴状土坑S K2004が該当するが、遺跡全体では遺物・遺構とも希薄である。遺構の状態から、A地区南側微高地に豪族居館を含む集落の存在が想定される。溝S D2012の性格を考慮すると、拠点集落の縁辺部に該当するものと考えられる。前段階の集落の断絶・再編期とみられる。

Ⅳ期：第4群土器を出土する溝S D2010(古)が該当する。この溝は前段階の溝S D2012を再掘削したものであり、意図的に直角的に曲げられている。区画溝としての機能を併せもつ可能性があり、南側微高地の中心的施設を整備し直したものとする。

Ⅴ期：第5群土器を出土する溝S D2010(新)が該当する。溝S D2010(古)を整備して利用する。護岸材に転用された高床建物は、中心的施設内の1棟と判断する。埋没段階には多量の木製品が廃棄され、集落の断絶・移動が想定される。B地区では溝が整備され土地利用が開始される。

Ⅵ期：第6群土器を出土する遺構群が該当する。A地区では、谷部の土地利用がなされず湿地状に放置される。微高地には複数の竪穴式住居跡が営まれ、居住域としての様相を呈する。一方、B地区では大規模な溝による区画が検出されており、周囲には高床建物と考えられる遺構も配される。前代の中心的施設が移転した可能性がある。

以降も飛鳥・奈良・平安時代にかけての遺物は存在し、集落は継続して営まれているが詳述はできない。

(5) おわりに

以上、今回の調査から提起されるさまざまな問題について不十分ながら記してきた。浅後谷南遺跡は丹後でも拠点的な集落の一つとして理解できるが、古墳・歴史時代を通じてその背景には潟湖の良港、陸路の要衝に位置するという立地環境が影響しているものとする。(石崎 善久)

浅後谷南遺跡 S D 2012 の寄生虫分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

1. 目的

S D 2012の覆土中から寄生虫卵を、抽出・同定することによって、S D 2012がトイレとして利用されていたかどうかを調べる。

2. 資料

資料は、S D 2012から採取された8点である。資料は、黒褐色～黄灰色の淘汰の悪い砂で、礫も含まれている。また、植物遺体も若干含まれる。

3. 方法

資料を一部採取し、水で薄めたあとグリセリンで封入して観察したが、寄生虫卵は検出されなかった。そこで、下記の方法で寄生虫卵を濃集した。資料を15cc量りとり、重さを測定して分析用試料とした。これについて、水酸化カリウムによる泥化・篩別・重液(臭化亜鉛：比重2.2)による有機物の分離・フッ素化水素酸による鉍物質の除去・アセトリシス処理の順に物理・科学的処理を施し、濃集する。残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作製し、光学顕微鏡下でプレパラート全面を操作し、出現する全ての種類について同定、計数する。なお、分析過程の各所で、重量や容積の測定を適宜行い、堆積物1ccあたりの検出個数を求められるようにした。

4. 結果

検出個体数を表1に、これを1ccあたりの個体数に換算した値を図1に示す。分析の結果、寄生虫卵は全く検出されなかった。一方花粉化石はマツ属、スギ属、イネ科を中心に多産している。1ccあたりの個体数は80～3500個とやや開きがあるが、全体的に低い。木本花粉の組成をみると、マツ属とスギ属の産出が目立つが、特に検出量が多いIV・V区間セクション10～12層で顕著である。この試料ではクリ属やタラノキ科も比較的多い。草本花粉では、イネ科が全体的に高いが、IV・V区間セクション10～12層でヨモギ属が多産する。

5. 考察

今回の結果、寄生虫卵は全く検出されていないが、花粉化石は検出されている。花粉化石の1ccあたりの量は一般的な堆積物と比べて低い(たとえば、P.D.Moore&J.A.Webb(1978)の成果では6,000～93,000個/ccとなっている)。これは、堆積物の淘汰が悪いことからわかるように、堆

積速度が速いためであり、化石が取り込まれにくい環境であったと考えられる。このことから、覆土中の堆積物は埋積する時に流入したものであり、遺構が機能していたときの状況を反映していない可能性がある。また、トイレ遺構における寄生虫卵の個数に関しては、これまでいくつかの調査例があるが、5,000個/ccを越えることが多い(金原・金原(1994))。これらのことから考えると、寄生虫分析のみでは遺構の性格を検討することは難しく、他の手法も併用しながら多面的に考えていく必要がある。

一方、花粉分析に着目すると、木本ではマツ属・スギが多い。マツが増加する傾向は全国各地の遺跡において普遍的にみられ、植生破壊にともなうマツの二次林や植林に起因すると考えられている。増加する年代は、各地によりまちまちであるが、琵琶湖北西部の花粉分析成果によれば、約900~700年前であると考えられている(山口ほか(1989))。スギ属に関しては、北陸から若狭沿岸部で多産する傾向が認められており、山口ほか(1989)でも高率に出現している。このことから遺跡周辺でもスギ林が多く分布していたものと考えられる。また、クリ属も多く認められており、周辺で多く分布していたことが考えられる。クリは花粉化石として随伴するコナラ亜属とともに、里山林の主要な構成要素であることから、後背には落葉樹からなる雑木林が存在した可能性もある。草本花粉に関しては、イネ科やヨモギ属などが多産することから、遺跡周辺は、イネ科やヨモギ属などの開けた草地が存在していたものと考えられる。

引用文献

- 金原正明・金原正子(1994)堆積物中の情報の可視化. 可視化情報, 14, p. 9-14
P.D.Moore & J.A.Webb(1978) an illustrated guide to Pollen Analysis, 133p, Hodder and Stoughton
山口浩司・高原 光・竹岡政治(1989)約1,000年前以降の琵琶湖北西部低山地における森林変遷. 京都府立大学農学部演習林報告 別冊, 33, p. 1-6

表1 SD2012の花粉分析結果

種 類	I区北	W-I下			I・II区間	IV・V区間		
	試料番号 トチ集積部	埋土	初期埋土	最終埋土	セクション 3層	セクション 1～3層 7層 10～12層		
木本花粉								
モミ属	3	7	10	8	6	1	7	10
ツガ属	1	1	5	3	-	2	3	1
マツ属	54	78	90	61	87	55	113	103
コウヤマキ属	-	5	-	2	-	2	2	2
スギ属	46	102	63	47	45	52	57	123
イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ	-	2	2	2	1	3	2	-
クルミ属-サワグルミ属	-	2	1	1	-	-	-	-
クマシデ属-アサダ属	2	5	-	3	-	2	-	6
カバノキ属	-	1	1	-	-	3	2	2
ハンノキ属	4	4	4	1	-	4	3	11
ブナ属	1	1	1	1	-	1	3	2
コナラ属コナラ亜属	11	13	13	14	3	3	6	17
コナラ属アカガシ亜属	2	14	6	13	-	3	4	8
クリ属	8	13	3	29	2	29	24	60
シイノキ属	1	8	-	5	-	4	1	4
ニレ属-ケヤキ属	-	3	-	1	2	7	4	7
エノキ属-ムクノキ属	-	2	1	-	-	-	-	-
カラスザンショウ属	-	-	-	9	-	-	2	1
キハダ属	1	4	3	1	-	1	1	-
アカメガシワ属	-	1	-	1	-	1	-	-
シラキ属	-	-	1	-	-	-	-	2
ウルシ属	1	1	-	-	-	-	-	-
モチノキ属	-	1	-	-	-	-	-	-
ニシキギ属	-	1	-	3	-	-	-	2
トチノキ属	-	3	-	1	-	2	4	3
ツタ属	-	-	-	1	-	-	-	-
ノブドウ属	-	-	-	1	-	-	-	-
ツバキ属	-	-	1	-	-	-	1	-
シナノキ属	-	1	-	-	-	-	-	-
タラノキ科	3	-	-	-	-	38	12	24
ミズキ属	-	-	-	1	-	1	-	-
カキノキ属	-	2	-	-	-	-	1	1
エゴノキ属	-	-	-	-	1	1	-	-
タニウツギ属	-	1	3	9	2	-	5	2
草本花粉								
イネ科	17	40	42	37	39	23	18	58
カヤツリグサ科	-	4	11	9	3	9	3	6
クワ科	-	2	2	2	-	-	1	3
ギシギシ属	1	-	-	-	1	-	-	-
サナエタデ節-ウナギツカミ節	7	1	4	2	5	1	9	9
アカザ科	-	2	1	-	2	1	-	-
ナデシコ科	-	1	1	-	-	-	-	1
アブラナ科	4	-	-	1	-	-	-	-
バラ科	1	-	-	-	-	-	-	-
マメ科	2	3	-	-	-	2	-	-
トウダイグサ科	-	1	-	-	-	-	-	2
ツリフネソウ属	-	-	-	2	-	-	-	1
セリ科	-	1	-	-	-	-	-	-
カタバミ属	-	2	1	-	-	-	-	-
ネナシカズラ属	-	-	-	-	-	-	1	-
オオバコ属	-	-	1	1	-	-	-	-
ヨモギ属	4	6	3	8	3	18	22	123
キク亜科	1	5	10	5	2	5	1	2
不明花粉	2	2	3	1	-	-	8	12
シダ類孢子								
シダ類孢子	252	314	184	231	166	178	436	735
合 計								
木本花粉	138	276	208	218	149	215	257	391
草本花粉	37	68	76	67	55	59	55	205
不明花粉	2	2	3	1	0	0	8	12
シダ類孢子	252	314	184	231	166	178	436	735
総計(不明を除く)	427	658	468	516	370	452	748	1331
1ccあたりの総数(単位:千個)	1.42	0.55	0.08	0.41	0.54	0.72	1.00	3.55
1gあたりの総数(単位:千個)	2.14	0.64	0.08	0.47	0.71	0.93	1.28	4.36

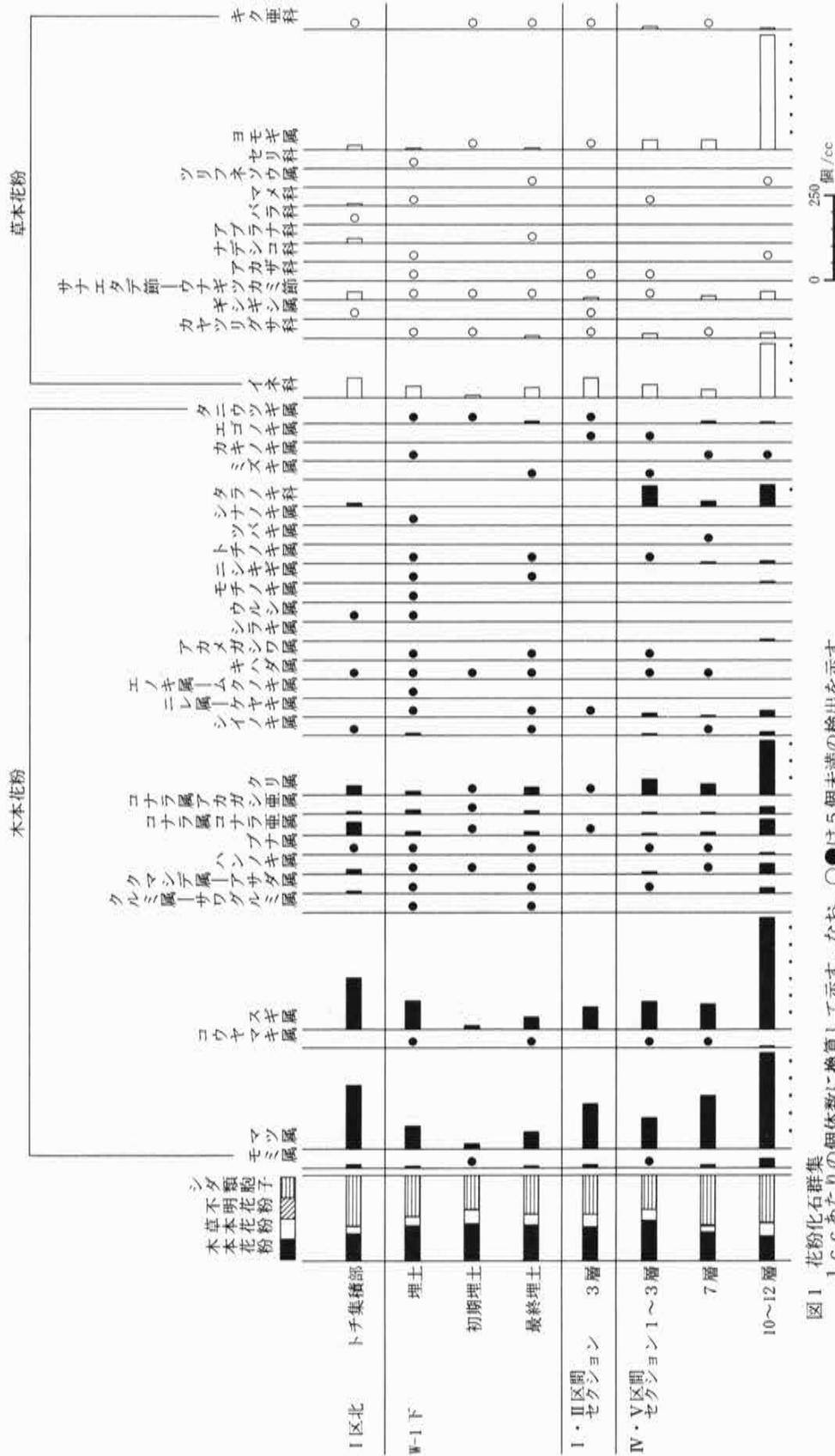
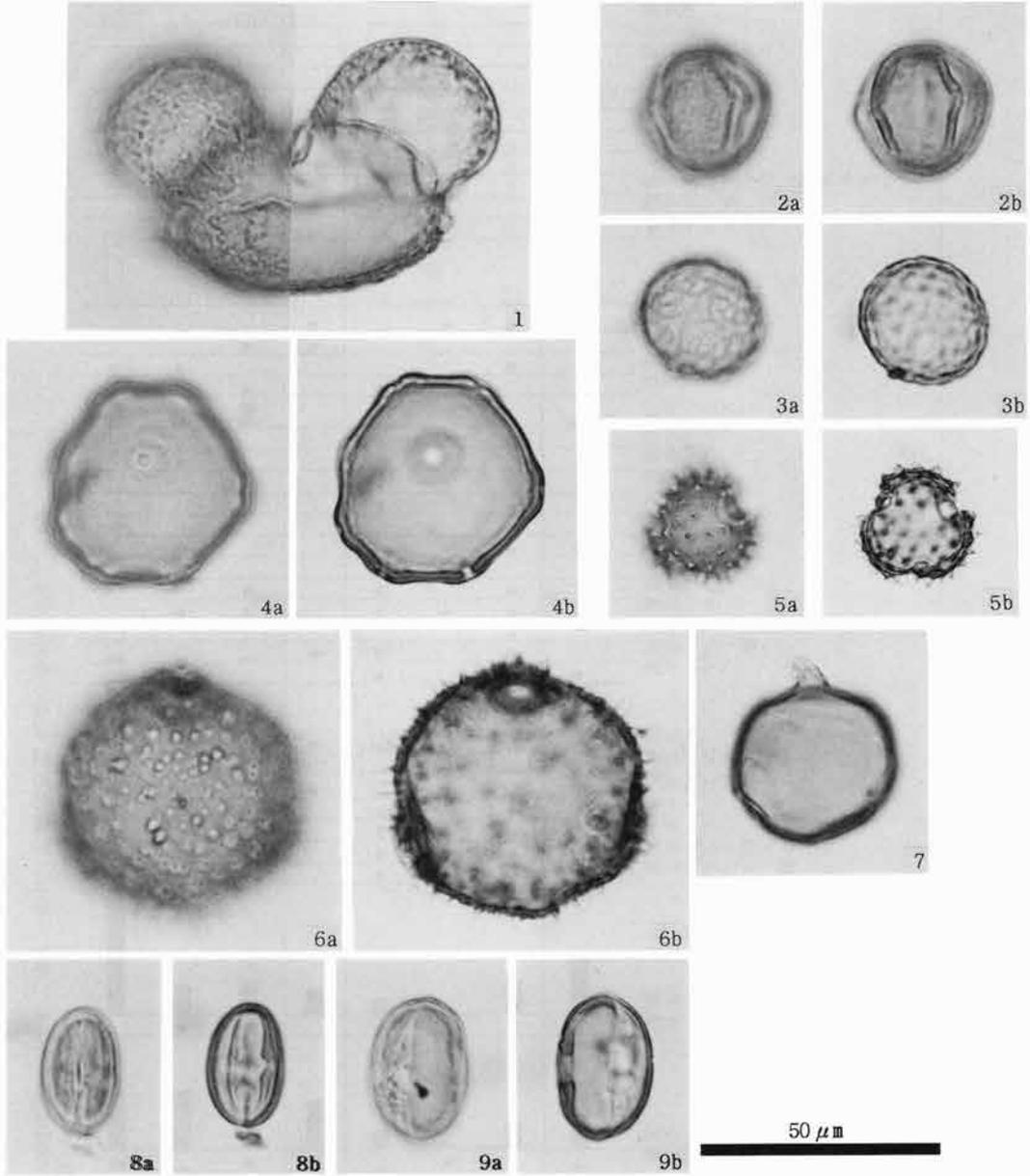


図1 花粉化石群集
1ccあたりの個体数に換算して示す。なお、○は5個未満の検出を示す。

図1 検出花粉化石の個体数

図版1 花粉化石



- | | |
|----------------------|---------------------------|
| 1. マツ属 (W-1下 最終埋土) | 2. コナラ属アカガシ亜属 (W-1下 最終埋土) |
| 3. オオバコ属 (W-1下 最終埋土) | 4. クルミ属 (W-1下 最終埋土) |
| 5. キク亜科 (W-1下 最終埋土) | 6. タニウツギ属 (W-1下 最終埋土) |
| 7. スギ属 (W-1下 最終埋土) | 8. クリ属 (W-1下 最終埋土) |
| 9. トチノキ属 (W-1下 最終埋土) | |

図2 検出した花粉化石写真

(2)墓ノ谷古墳群第2次

1. 調査経過

墓ノ谷古墳群は、京都府竹野郡弥栄町字鳥取小字墓ノ谷に所在する。

弥栄町教育委員会の実施した分布調査により、11基の古墳・古墳状隆起が確認されている。

平成10年度には、このうち3基の古墳状隆起(6～8号墳)を調査し、いずれも自然地形であるとの判断がなされた。今年度は、9・11号墳2基の古墳状隆起が調査対象となり、試掘調査を行った。

2. 調査概要

9号墳 墓ノ谷古墳群の分布する主丘陵から南西方向へ派生する支尾根上、標高74m付近で確認された狭小な平坦面である。幅1.5m×長さ15mのトレンチを設定し、調査を実施した結果、遺構・遺物とも確認することはできず、また、土層、地山の状況からも人為的な整形の行われた痕跡は認められず、自然地形であると判断した。

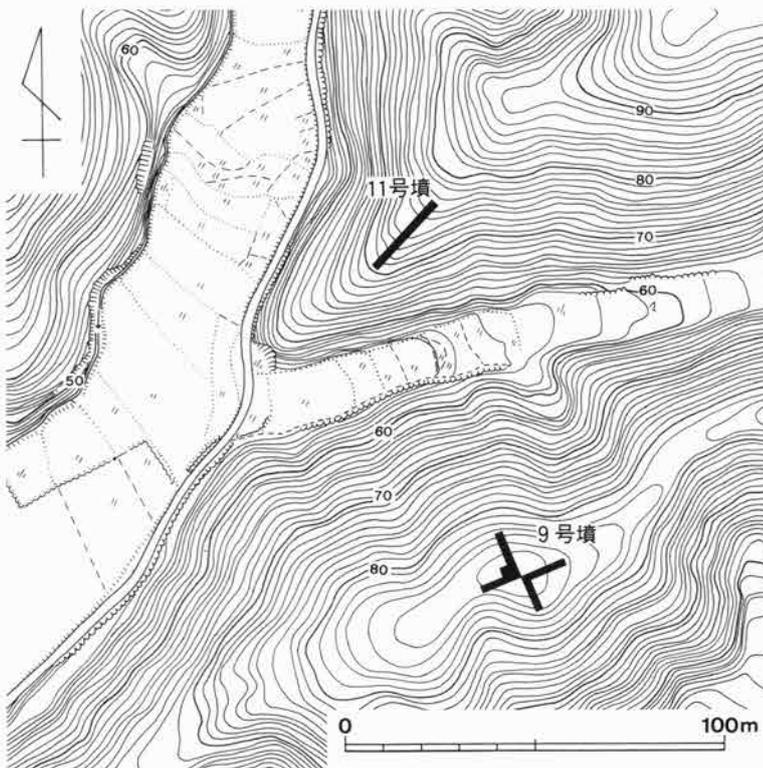
11号墳 墓ノ谷古墳群の分布する主丘陵上、標高87m付近で確認された古墳状隆起である。墳

頂部を中心に「L」字形トレンチを2本設定し、主体部・墳丘裾の検出につとめたが、遺構・遺物とも確認することはできず、また、土層、地山の状況からも人為的な整形の行われた痕跡は認められず、自然地形であると判断した。

3. 小結

今年度は墓ノ谷古墳群内で2か所の古墳状隆起の調査を実施したが、いずれも古墳ではないと判断された。

(石崎善久)



第148図 墓ノ谷古墳群トレンチ配置図

(3)吉沢城跡

1. はじめに

調査対象地は、竹野郡弥栄町字吉沢小字裏ノ谷で、吉沢城跡主郭と推定されている早尾神社境内西側の谷筋を開削した曲輪状地形が連続する場所で、城跡に関連する施設が想定される地域である。調査面積は約800m²である。国営農地吉沢団地の開発中止が調査途中に最終決定したため、調査で検出した遺構の一部分は破壊されないで、途中までしか調査しておらず不明なことも多い。遺構図面も西側平坦地では、地形測量図のみにとどめ、各遺構の図面は揃っていない。現地調査にあたって、弥栄町教育委員会・弥栄町農林課・京都府教育庁指導部文化財保護課・地元吉沢区自治会などの援助があった。また、現地調査には弥栄町有志の方々などの協力があった。

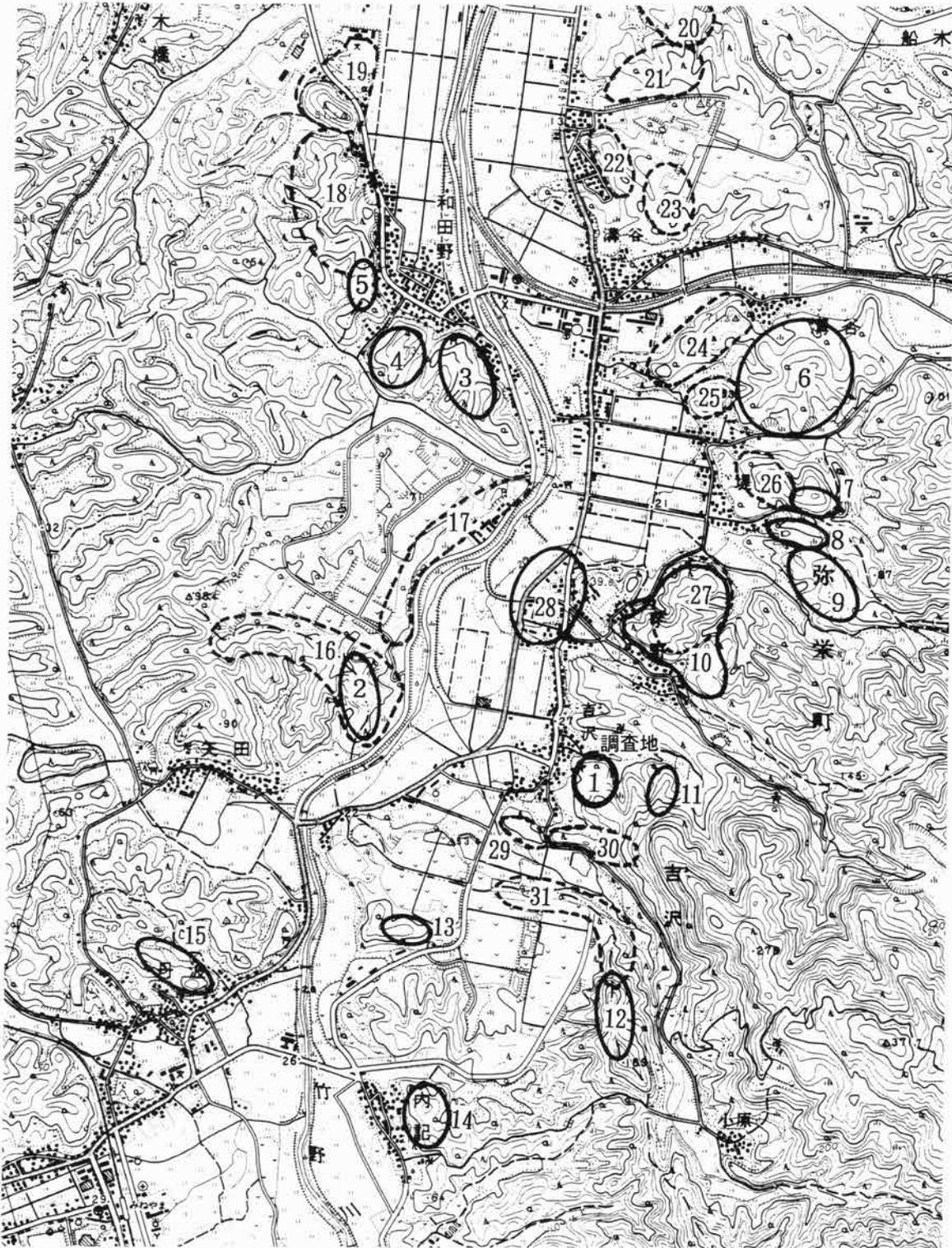
2. 位置と環境

弥栄町は、京都府北部の丹後半島中央部に位置し、竹野川が町の中央部を北流する。竹野川は高尾山を源とし、南流した後反転し、大宮町・峰山町の盆地を北流し、峰山町と弥栄町の境界である狭隘部を抜けると弥栄町で沖積地を形成し、丹後町で日本海にそそぐ。竹野川流域には古墳群をはじめ多数の遺跡が知られている。その中でも、竹野川左岸の峰山町と弥栄町の境界の丘陵上に大田南古墳群があり、鈕に双龍の模様を持つ画文帯環状乳神獸鏡が出土した2号墳、国内最古の紀年銘となる「青龍三年(235年)」が記された方格規矩四神鏡が出土した5号墳が著名である。また、大田南古墳群に重複して矢田城があり、掘立柱建物跡などが検出されている。弥栄町中心部の右岸の丘陵には、弥生時代の集落遺跡である奈具遺跡、玉作り遺跡である奈具岡遺跡などの多くの遺跡や、陶質土器・初期須恵器が多量に出土した奈具岡北1号墳を中心とする奈具岡北古墳群や奈具岡南古墳群などがある。左岸の丘陵にも坂野古墳群をはじめ多くの古墳群や、古墳時代後期から奈良時代にかけての製鉄遺跡として著名な遠所遺跡など多くの遺跡がある。

吉沢城跡周辺には、竹野川右岸に、溝谷城跡・小谷ヶ谷城跡・シミズ谷城跡・堤城跡・芋野城跡・菩提城跡・内記城跡などが、左岸には和田野城跡・矢田城跡・丹波城跡などがある。

吉沢城跡は、弥栄町字吉沢小字城山に所在する早尾神社境内を中心とした戦国時代の城跡である。城跡は神社本殿がある標高68mのやや広い平坦地と、その南に同じ標高の平坦地があり、周囲は急な崖で、それより下にこれらを取り巻く曲輪群が造られている。2か所の平坦地の間には、深い堀割りが設けられ、北側の広い平坦地に主郭(本丸)が推定されている。

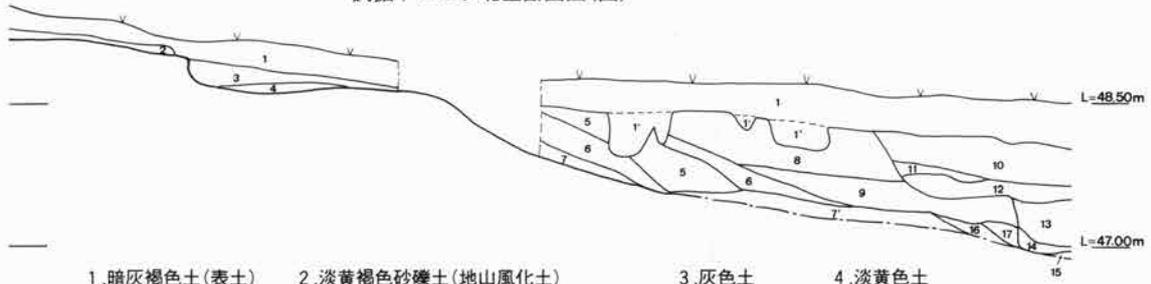
永正13(1516)年から翌年にかけての丹後一色氏と若狭武田氏の争乱は、一色氏が二分した複雑な戦争であった。永正13年9月10日頃に武田元信方の兵が、丹後の奥深く堤城・吉沢城にまで侵入している(三重県白井家文書)。天正10(1582)年に細川氏と一色氏方の攻防で吉沢城に拠ったの



第149図 調査地および周辺遺跡分布図(1/25,000)

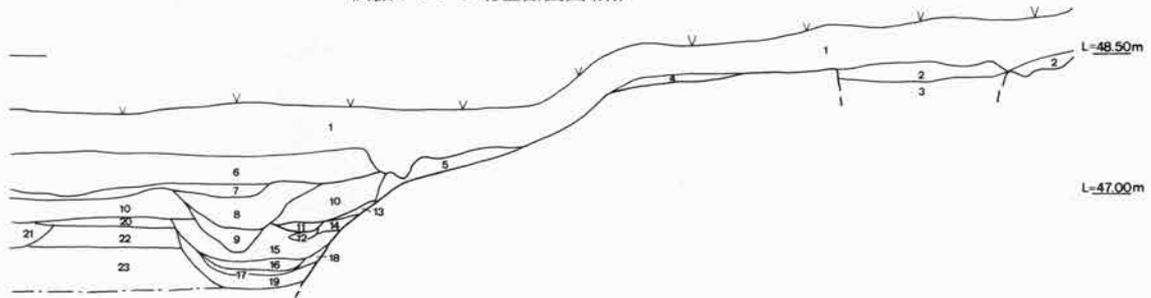
- | | | | | | |
|------------|-----------|------------|--------------|-------------|----------|
| 1. 吉沢城跡 | 2. 矢田城跡 | 3. 和田野東城跡 | 4. 和田野城跡 | 5. 和田野別城跡 | |
| 6. 溝谷城跡 | 7. 小谷ヶ谷城跡 | 8. シミズ谷城跡 | 9. 堤城跡 | 10. 芋野城跡 | 11. 菩提城跡 |
| 12. 高山城跡 | 13. 上野城跡 | 14. 内記城跡 | 15. 丹波城跡 | 16. 大田南古墳群 | |
| 17. 太田古墳群 | 18. 寺谷古墳群 | 19. 坂野古墳群 | 20. 奈具岡北古墳群 | 21. 奈具岡北古墳群 | |
| 22. 久原古墳群 | 23. 溝谷古墳群 | 24. 小田屋古墳群 | 25. 徳昌寺裏山古墳群 | 26. 愛宕神社古墳群 | |
| 27. 最勝寺古墳群 | 28. 芋野遺跡 | 29. 新ヶ尾古墳群 | 30. 新ヶ尾東古墳群 | 31. スクモ塚古墳群 | |

試掘トレンチ北壁断面図(西)



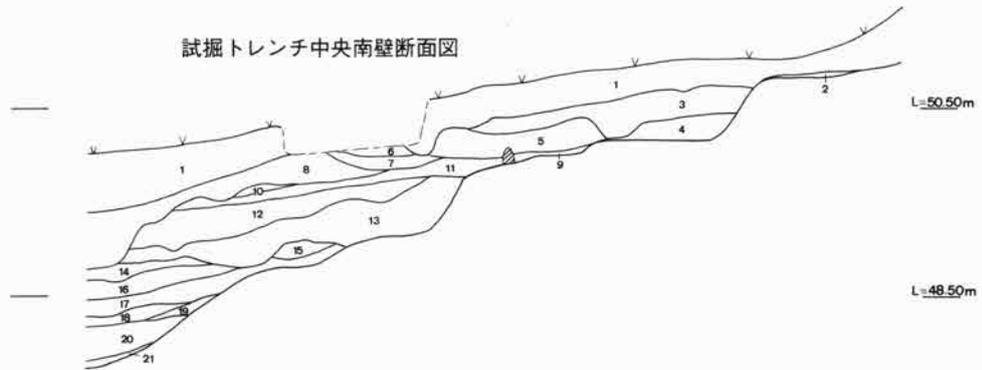
- | | | | |
|--------------|-------------------|------------------|-------------|
| 1. 暗灰褐色土(表土) | 2. 淡黄褐色砂礫土(地山風化土) | 3. 灰色土 | 4. 淡黄色土 |
| 5. 暗黄褐色土 | 6. 淡紫暗褐色土 | 7. 黄褐色砂礫土(地山風化土) | 8. 黄灰色土 |
| 9. 暗黄灰色土 | 10. 淡灰褐色土 | 11. 灰褐色土 | 12. 淡黄褐色土 |
| 13. 暗黄褐色砂質土 | 14. 暗灰色砂質土 | 15. 灰色砂質土 | 16. 淡灰褐色粘質土 |
| | | 17. 灰褐色粘質土 | |

試掘トレンチ北壁断面図(東)



- | | | | |
|--------------|-------------------|-------------|-------------|
| 1. 暗灰褐色土(表土) | 2. 淡黄褐色砂礫土(地山風化土) | 3. 黄灰褐色土 | 4. 橙褐色土 |
| 5. 淡橙褐色土 | 6. 淡灰褐色土 | 7. 暗灰色土(砂質) | 8. 灰色砂質土 |
| 9. 暗青灰色砂質土 | 10. 淡褐色砂質土 | 11. 淡青灰色粘砂土 | 12. 灰色粘砂土 |
| 13. 暗黄灰色粘砂土 | 14. 黄灰色粘砂土 | 15. 黄灰色粘砂土 | 16. 淡黄灰色砂質土 |
| 17. 灰色粘質土 | 18. 暗青灰色粘砂土 | 19. 暗青灰色粘質土 | 20. 灰色砂質土 |
| 21. 青灰色砂質土 | 22. 黄灰色砂質土 | 23. 淡青灰色砂質土 | |

試掘トレンチ中央南壁断面図



- | | | | |
|--------------|-------------------|--------------|-------------|
| 1. 暗灰褐色土(表土) | 2. 淡橙褐色砂礫土(地山風化土) | 3. 暗褐色土 | 4. 暗橙褐色土 |
| 5. 黄褐色土 | 6. 灰色土(砂質) | 7. 黄灰土(砂質) | 8. 黄灰色土 |
| 9. 橙褐色砂礫土 | 10. 黒灰色土 | 11. 暗灰褐色土 | 12. 灰褐色土 |
| 13. 淡褐色土 | 14. 淡褐色砂質土 | 15. 淡紫暗褐色砂質土 | 16. 暗黄灰色砂質土 |
| 17. 暗灰褐色砂質土 | 18. 黄灰色砂質土 | 19. 紫暗褐色粘砂土 | 20. 暗青灰色粘質土 |
| 21. 淡緑灰色粘質土 | | | |



第150図 土層断面図

は、一色氏の武将松田遠江守と後藤下総守であったといわれている(丹後旧事記)。戦いは一色方の敗北に終り、吉沢城は廃城となったと推定されている

3. 調査の概要

今回の調査対象地は、吉沢城跡の東側曲輪の一部と、その東方の谷筋を開削した曲輪状地形が連続する場所で、城跡に関連する施設が想定される地域である。そこは、土地所有者によれば、第2次世界対戦以前には水田や畑として耕作されていたといわれ、地形の改変が予想された。そこで、遺構・遺物の有無を確認するため、試掘トレンチを設定して人力で掘削したところ、西側中央部で畑地に改変した時期の多量の客土層があり、客土層とその下層から瓦質すり鉢・土師器皿などが出土した。客土層・堆積層を取り除くと犬走り状遺構(通路)や平坦地形が検出できた。東側平坦地では、炭が混入した土坑や柱穴群、急斜面(人工的に切り落とした崖)に沿う溝跡(排水溝)を検出した。中央部では、深さ2m前後の流路跡(谷地形)を検出した。

8月18日から遺構が検出できた西側および東側を重機を使い調査範囲を拡張した。遺構は完全に掘り切っていないものがあり、不明な点も多いが、東側平坦地では、円形・隅丸方形の土坑、多数の柱穴、排水溝、円弧状に曲がるテラス状遺構(床面を平坦に削平したもの)を検出した。土坑・テラス状遺構などから、輸入陶磁器・瓦質土器などが出土している。

西側では、曲輪状地形がみられる北東部で、淡紫暗褐色土・黄灰色土などの整地層(16世紀の土器を含む)が確認され、後世に流路を埋めて畑地に改変していることが判明した。整地層に、耕作にともなう溝や柱穴を検出した。また、北西部や南端には柱穴が稀薄なところがあり、後世に削平されたと推測される。北部で、隅丸方形の土坑を合計4か所(北部土坑群)検出した。その南西で、東西方向の柵列と犬走り状遺構を検出した。その南の中央部でテラス状遺構を検出した。南部で長方形・方形の土坑を3か所(南部土坑群)を検出した。その南では急斜面(人工的に切り落とした崖)に沿う溝跡(排水溝)を検出した。

北東部では、整地層に耕作にともなう溝や柱穴を検出したこともあり、柱穴のなかには後世のものを含む可能性もありうる。

4. 検出遺構

西側平坦地および東側平坦地で検出した遺構について記述する。

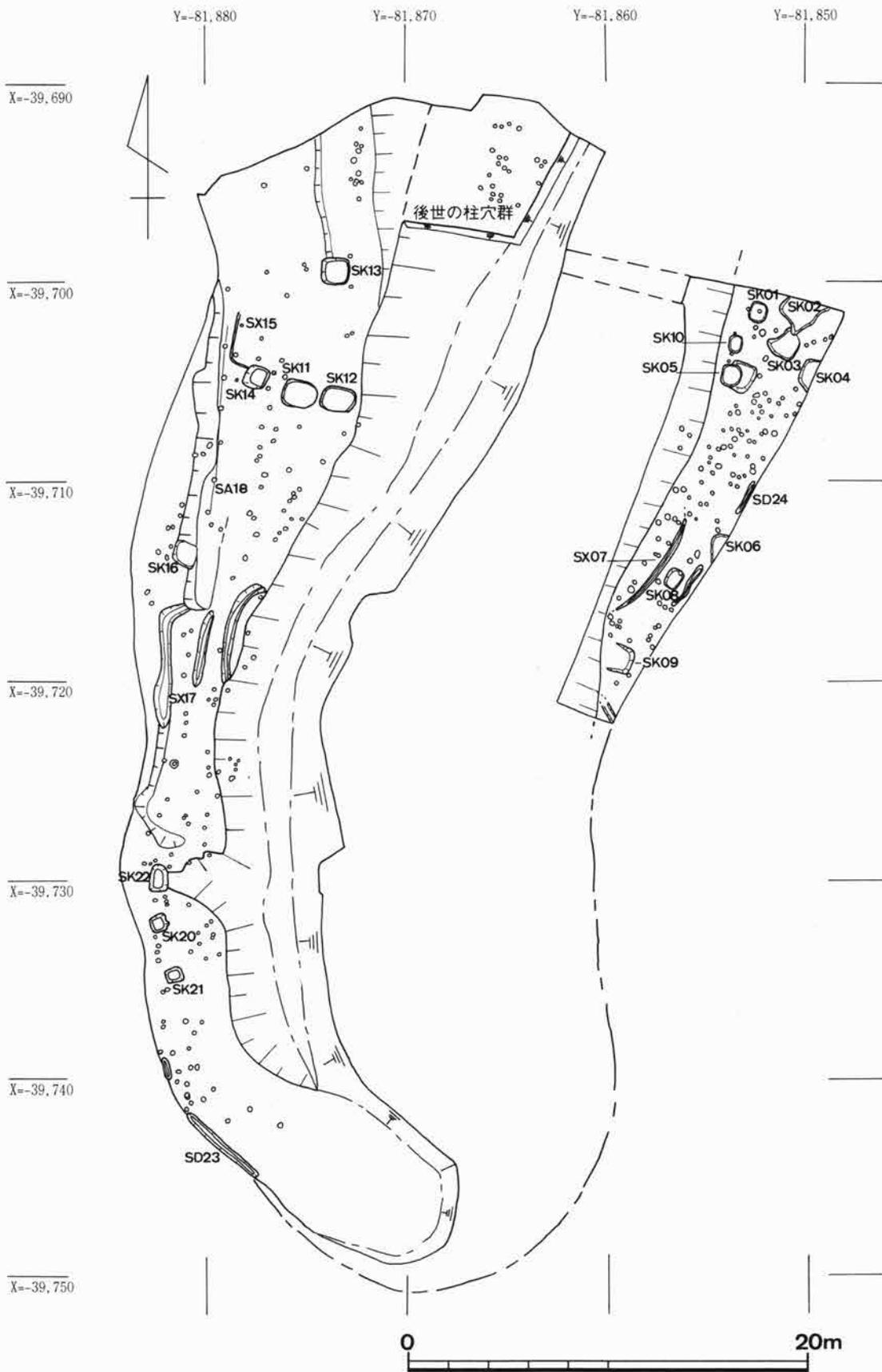
土坑S K 01 長辺約1m・短辺約0.8m・深さ約0.2mを測る隅丸方形の土坑である。炭混じりの黒灰色土で埋まった後、柱穴が掘られている。土器はない。

土坑S K 02 深さ40~50cmを測る不定形土坑である。人頭大の石と青磁椀が出土した。

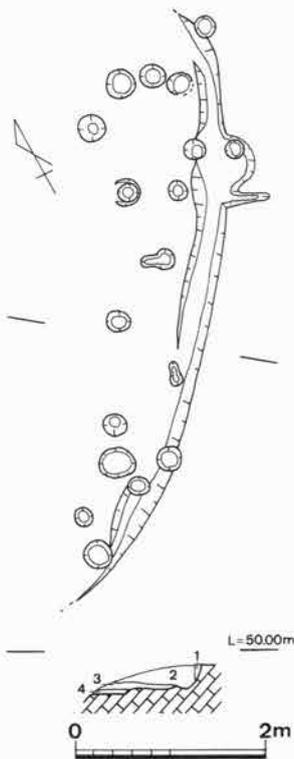
土坑S K 03 深さ20cm前後の不定形土坑である。土器はない。

土坑S K 04 深さ20cm前後の隅丸方形土坑の一部分と推定される。土器はない。

土坑S K 05 直径約1m・深さ約35cmの円形土坑である。拳大の石約10個と瓦質すり鉢・鉄滓が出土した。



第151図 遺構平面図



第152図 テラス状遺構SX07
実測図

1. 暗灰褐色土
2. 淡黄褐色土
3. 黒褐色土(炭混入)
4. 暗黄灰色土

土坑SK06 深さ約40cmの隅丸方形土坑の一部分と推定される。
瓦質すり鉢が出土した

テラス状遺構SX07 床面を平坦に削平した円弧状の遺構である。
東(丘陵)側に幅30cm前後・深さ約50cmの竪穴式住居跡にみられるよ
うな排水溝がめぐる。埋め土下層に炭が見られた。約60cmにわたっ
て検出した。染付椀が出土した。

土坑SK08 長軸1.1m・短軸0.8m・深さ25cmを測る隅丸方形の
土坑である。瓦質すり鉢が出土した。

土坑SK09 一辺1.5m前後・深さ約25cmで方形土坑と推定され
る。土器はない。

土坑SK10 直径1.0m前後の円形土坑で、ほぼ垂直に掘られ、深
さ約1.3mを測る。土器はない。

土坑SK11 長軸1.7m・短軸1.3mを測る隅丸長方形土坑である。
1段掘り下げたところ、北西で鉄鎌が出土した。出土遺物は鎌と土
師器細片である。鎌が出土する同様な調査例から墓の可能性が高い。
廃城後に造られたものであろう。完掘していない。

土坑SK12 SK11の東で検出した長軸1.8m・短軸1.3mを測る
隅丸長方形土坑である。一段掘り下げたところ、鉄製品(小柄)が出
土した。出土遺物は小柄と土師器細片である。これも墓の可能性が
高い。完掘していない。

土坑SK13 SK11の西で検出した一辺1.1~1.2mを測る隅丸方形土坑である。炭が出土した。
完掘していない。

土坑SK14 SK11の北方で検出した一辺1.2~1.4mを測る隅丸方形土坑である。残存状況が
悪く、深さ15cm前後で土器はない。SK11~14を北部土坑群と呼称する。

テラス状遺構SX15 床面を平坦に削平した南西隅がほぼ直角に曲がる遺構である。西(丘陵)
側が、溝状にわずかに窪む。西辺約2.5m・南辺約1.0mを検出した。土器はない。

土坑SK16 一辺1m前後・深さ約40cmを測る方形土坑である。土器はない。

テラス状遺構SX17 床面を平坦に削平した北西隅がほぼ直角に曲がる遺構である。西から北
へ、幅40cm前後・深さ約50cmの竪穴式住居跡にみられるような排水溝がめぐる。西辺約5.5m・
南辺約1.5mを検出した。遺構の構造からみて、斜面にせり出した建物があった可能性がある。
土師器皿が出土した。SX17の東斜面に同様な溝が残存しているので、この付近で造り替えがあ
ったと推定される。

柵列SA18と犬走り状遺構 SX15の西からSX17付近までの間に、斜面を切り落とした西
(丘陵)側に、1.6~2.0m間隔で柱穴が合計6か所並び、その東に幅約1mの削平地が南北に延び
る。これを柵列と犬走り状遺構(通路)と推定した。約12mにわたって検出した。テラス状遺構

をつなぐ通路であ
ろう。

土坑 S K 20 一
辺80~90cm前後・
深さ約50cmを測る
隅丸方形土坑であ
る。土坑から、古
銭10枚が出土し
た。墓の可能性が
ある。

土坑 S K 21 一
辺70~80cm前後・
深さ約35cmを測る

隅丸方形土坑である。土器はない。

土坑 S K 22 長辺約1.3m・短辺約75cm・深さ約40cmを測る隅丸
長方形土坑である。土器はない。S K 20~22を南部土坑群と呼ぶ。

排水溝 S D 23 西側平坦地の南端で検出した、丘陵(切り落とした
崖面)側に沿った、幅約40cm・深さ約50cmを測る素掘り溝である。
長さ4.7mにわたって検出した。その北方でも同様な溝がある。土器
はない。

排水溝 S D 24 東側平坦地で検出した、丘陵(切り落とした崖面)
側に沿った、幅約35cm・深さ約50cmを測る素掘り溝である。

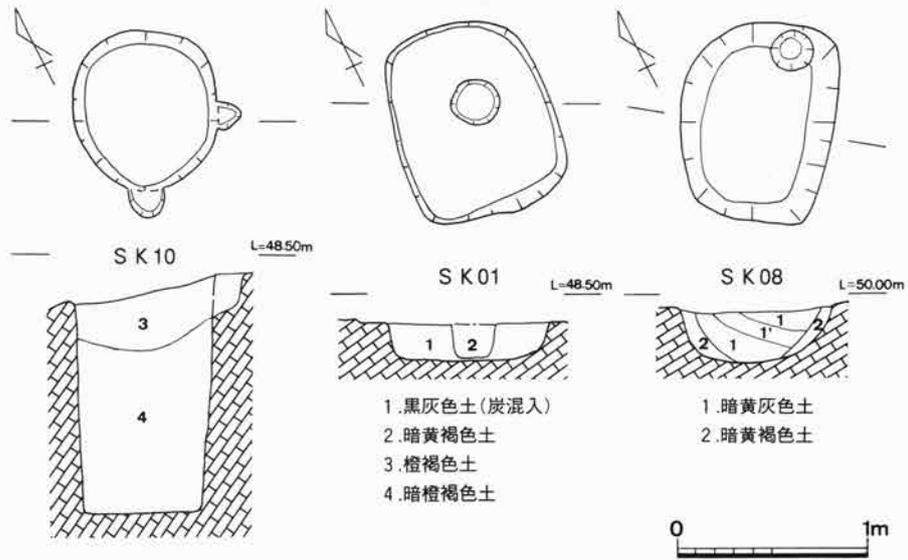
西側平坦地では、北部土坑群と南部溝跡(排水溝)の間に多数の柱
穴を検出しており、建物跡に復原できたものはないが、吉沢城に関
連する建物があったと推測される

5. 出土遺物(第155~158図)

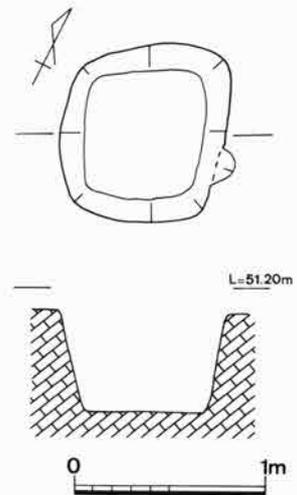
この調査で、土師器皿、土師器蓋、土師器小形壺、土師器甕、瀬戸・美濃焼(天目茶碗含む)、
青磁、染付、瓦質すり鉢、鉄滓、古銭、鉄製品、石製品、木片などがある。

土師器皿(1~9) 底が丸みをおびて口縁が斜め上方に立ち上がるもの(1・2)、底がほぼ平
らで口縁が内湾ぎみに立ち上がるもの(3~5)、底が平らで口縁が斜め上方に直線的に立ち上
がるもの(6~9)がある。6~8は口縁部を強くヨコナデするため底部との境目がわずかに窪む。
6は暗灰色、7は淡乳褐色、8は淡乳灰色を呈し、いわゆる京都系の土器の模倣であり、16世紀
後半のものである。

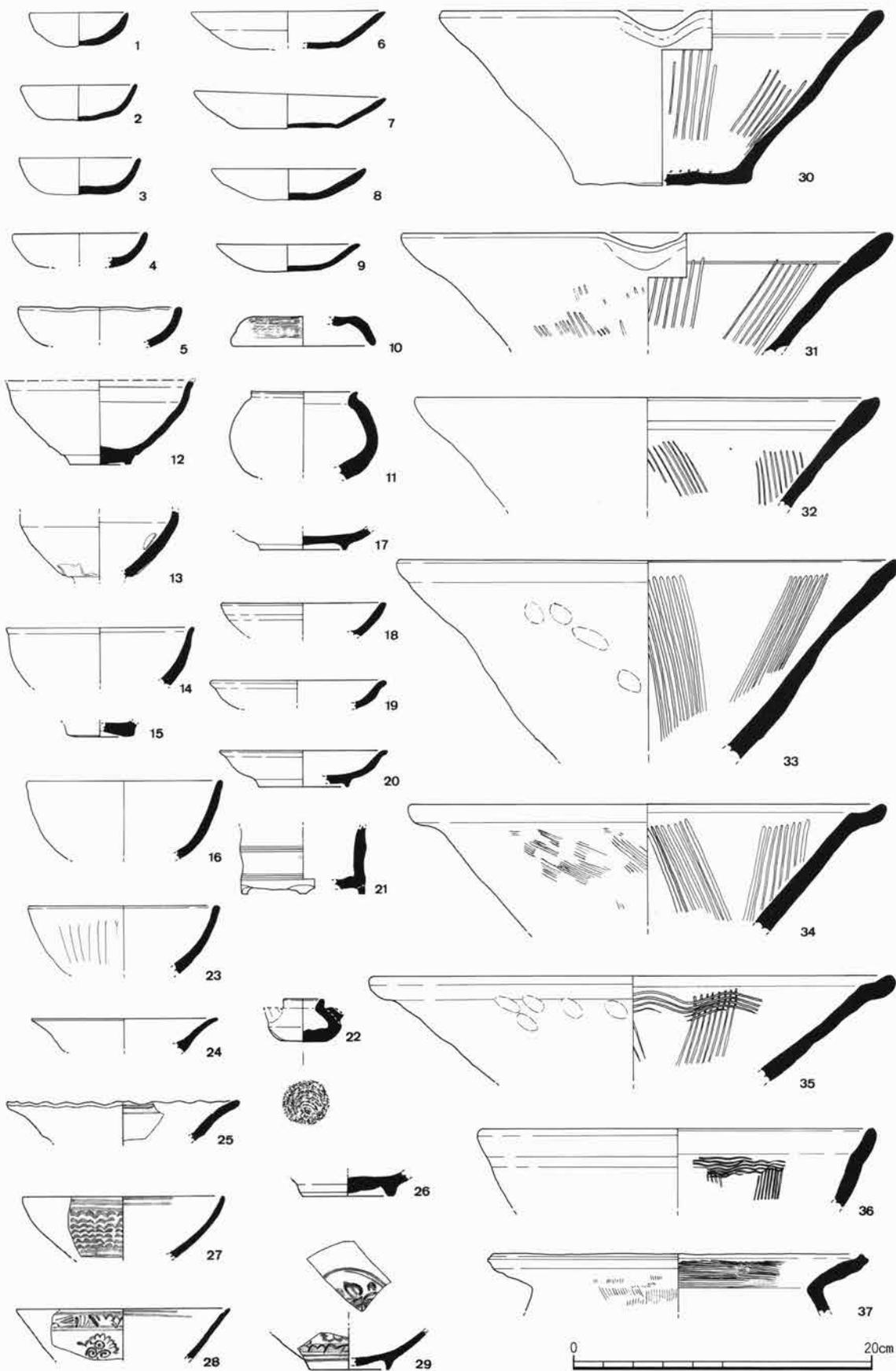
土師器蓋(10) 天井部の上半にヨコハケ痕が残り、下半と内面はヨコナデする。復原径



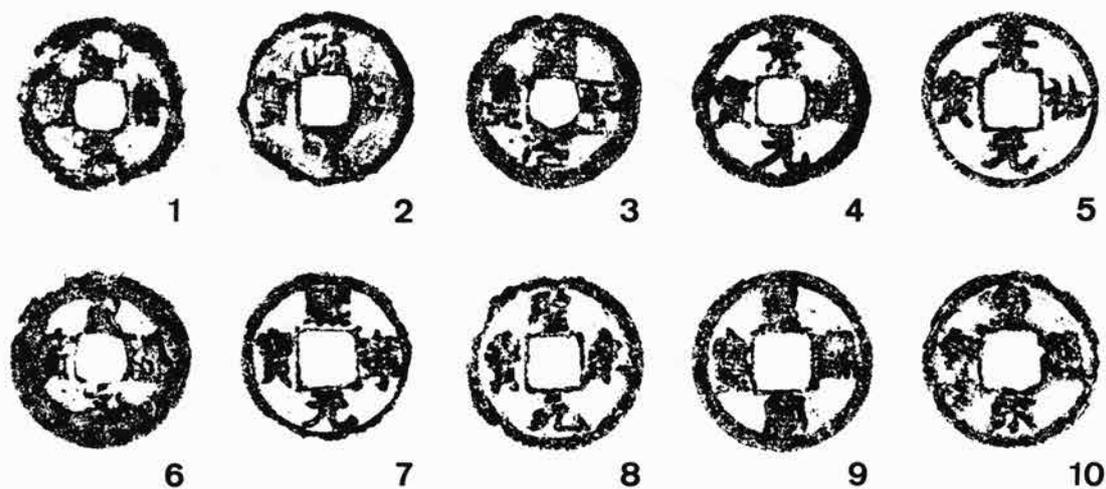
第153図 土坑 S K 10・01・08実測図



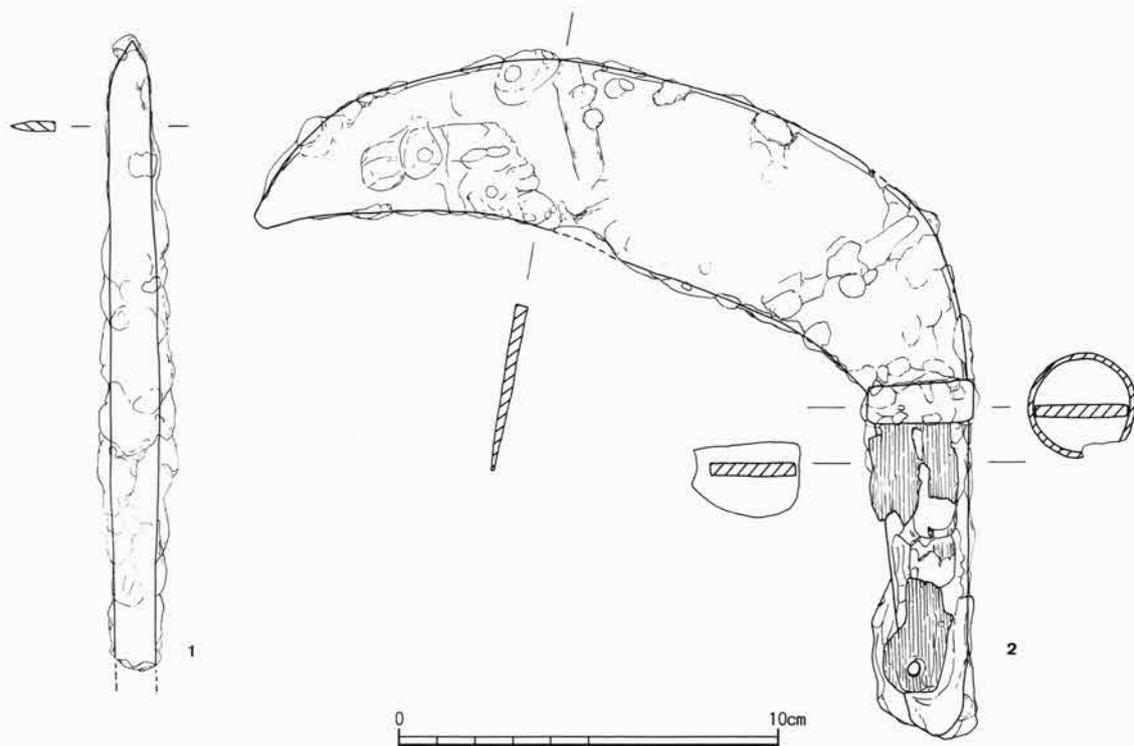
第154図 土坑 S K 20実測図



第155図 出土遺物実測図・土器類



第156図 出土古銭拓影



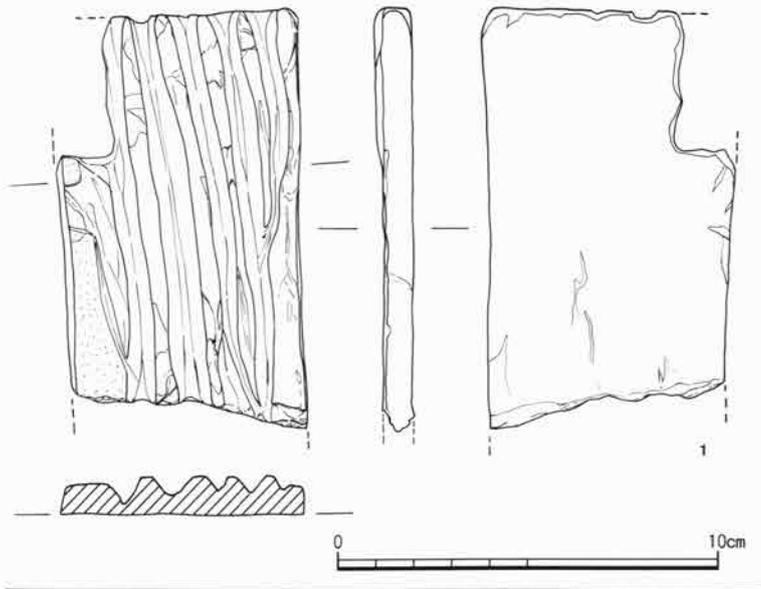
第157図 出土遺物実測図(鉄器)

6.9cm・器高1.9cmを測り、色調は灰褐色を呈する。小形壺の蓋と推定される。

土師器小形壺(11) 体部下半に最大径がある体部に短く直立する頸部が付く小形壺である。被熱して淡橙褐色に変色した部分と淡褐色の部分がある。

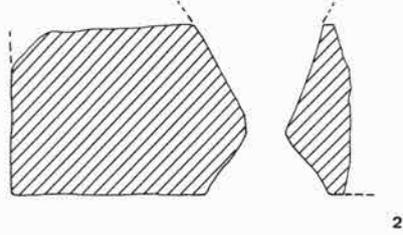
土師器甕(37) 頸部が「く」の字状に外反するもので、焼成は良好で淡橙褐色・淡褐色を呈する。頸部内面・体部外面にハケメが残る。

天目茶碗(12~15) 12・14は暗褐色、13は光沢のある褐色の鉄釉が内・外面にかかる。12・13には露胎部に化粧がけを施す。12は削り出し高台で底径4.1cm、15は内反り削り出し高台で底径

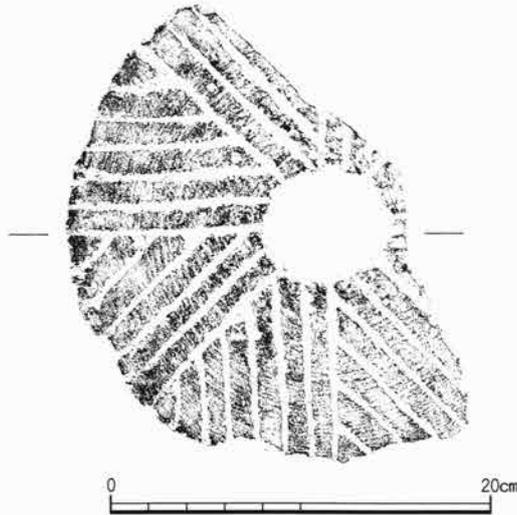


4.4cmを測る。これらは16世紀中頃のものであろう。

瀬戸・美濃焼(16~22) 16は丸椀、17は皿底部、18は丸皿、19・20は折縁皿である。緑灰色の釉薬がかかる。21は4か所の足を推定できる香炉片で体部に横方向の沈線を施し、緑灰色の釉薬が掛かる。復原底径8.2cmを測る。22は器高2.8cm・口径2.4cmを測る水滴である。黒褐色の釉薬がかかり、底部外面は回転糸切りである。



青磁(23~26) 23は龍泉窯系の細い線描きの蓮弁文椀である。24は端反りの皿、24は口縁端部をひだ状に削り取った皿である。26は内・外面に厚く淡緑褐色の釉薬がかかる椀の底部である。23は15世紀後半~16世紀前半のものであろう。



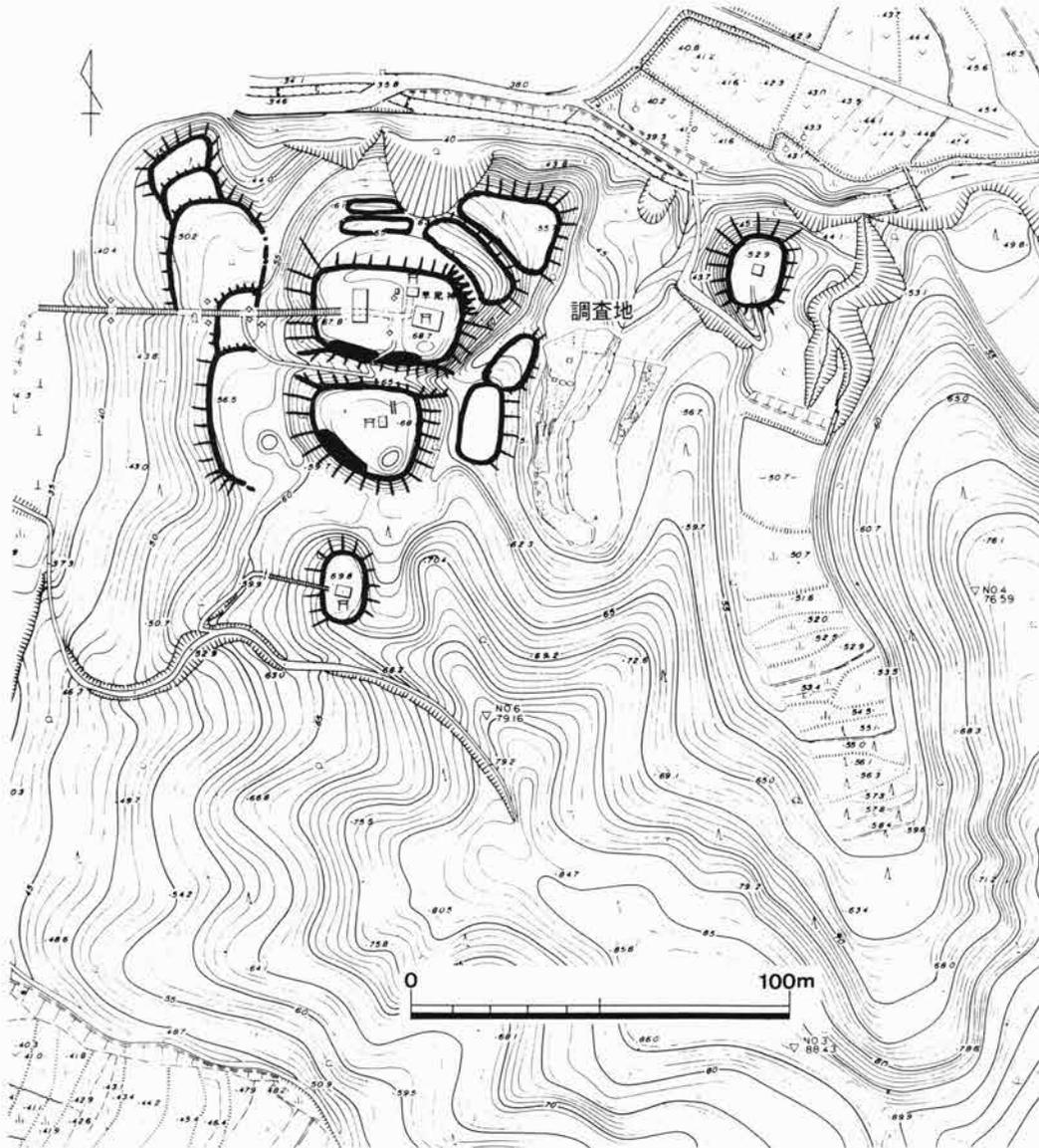
染付(27~29) 27は口縁部が内湾する椀で、口縁部外面に波状文を描き、口縁端部内面に2条の横線を描く。28は口縁部が直線的に伸びる椀で、端部の釉薬が剥がれ(口禿げ)、口縁部外面上半に帯状に文様を描き、下半に華文を描く。29は口縁部が内湾する椀で、見込

第158図 出土遺物実測図(石製品)

みに華文を描き、畳付の釉薬を掻き取っている。

瓦質すり鉢(30~36) 30は片口が付くもので、口径29.4cm・器高11.7cm・底径11.4cmを測る。31も片口が付き、口縁部内面に横方向の沈線がめぐる。33は焼成が堅緻で灰褐色を呈する。34・35は口縁端部が屈曲するもので、35には口縁部内面に波状に沈線がめぐる。36も口縁部内面に波状に沈線がめぐる。口縁部内面に波状に沈線がめぐる35・36は越前焼系のすり鉢を模倣したものであろう。それ以外は在地系のものであろう。出土土器の内、約半分が瓦質すり鉢である。

このうち遺構から出土したものは、4がS X17、23がS K02、27がS X07、18・19が柱穴から



第159図 吉沢城跡縄張り推定図

で、それ以外は堆積土層、整地層・客土層から出土した。また図化してないが、越前焼系の甕体部片や肥前系陶器(椀)片1点などがある。

銅製品(第156図) 土坑SK20から出土した古銭である。このうち6枚が融着していた。このため銭文が潰れ、錆(緑青)が発生している。1は祥符元宝、2は政和通宝、3は治平元宝、4は景德元宝、5は景裕元宝、6は□□元宝、7は熙寧元宝、8は聖宋元宝、9・10は皇宋通宝と判断できる。

いずれも直径2.4cm前後・厚さ1mm前後を測る。

鉄製品(第157図) 1は残存長16.6cm・幅1.1~1.3cm・厚さ3mmを測る小柄と推定される。2は鎌で刃部の長さ16.5cm・幅4.95cm・厚さ3mmを測る。柄の先端に円形の止め金具を着装し、柄の部分に木質が残存する。現代の両刃鎌に酷似する。

石製品(第158図) 1は粘板岩の砥石で、片面に深い溝が5条あり、その裏は平滑に研磨されている。残存長11.1cm・残存幅6.4cm・厚さ1mmを測る。数珠玉を製作したと推測される同様な

砥石が一乗谷から出土している。2は茶臼の上臼である。荒い溝が刻まれている。

6. ま と め

畑地造成に伴う地形改変で消失したものや後世の遺構などがあり、吉沢城に関係するものとして、テラス状遺構・犬走り状遺構・溝跡(排水溝)・土坑・柱穴などが検出できた。出土土器は、瓦質すり鉢・天目茶碗・土師器皿・輸入陶磁器などで、16世紀前半～後半の時期のものがほとんどである。吉沢城はこの時期に拡張・整備されたと推測され、文献に表れた時期とほぼ一致する。

この谷では、山側の斜面を切り落として急な崖と、谷を取り巻く様に平坦地を造成している。平坦地に小規模な建物が配置されていたと推定される。谷の奥からは湧き水があり、その水は貴重な飲料水であり、水車輪がこの付近に有ったと推定される。また、鉄滓や砥石が出土することから、鉄製品なども製作していた可能性がある。

地形観察のため、吉沢集落から早尾神社に向かうと、真っ直ぐに丘陵を上る石段が目につく。最初の石灯籠の左(北)側に南北に長く狭い削平地があるが、これは後世の造作によるものであろう。次の石碑と石灯籠付近は平坦で、その左側に東西南北約28m四方の平坦地(曲輪)があり、その北側にもわずかの段差で2か所の平坦地が観察される。石段から南側にも堀切に連続する平坦地が観察できる。最後の石灯籠から急崖を登ると早尾神社本殿に至る。そこは、東西約34m・南北22m前後の平坦地(主郭)で、堀切側には土塁状の高まりが残存する。主郭から北東に張り出した場所に、2段に造作されたやや広い平坦地(曲輪)が観察できる。北側の急斜面にも幅7m前後の東西に細長い削平地が2段に造作されているのが観察できる。主郭の南には底幅2mの堀切があり、主郭と同じ標高の平坦地(二の丸)との間を区画している。二の丸南側にも土塁状の高まりが残存し、周囲は急崖となる。二の丸南側は丘陵と切り離され、曲輪状の平坦地が観察できる。その南側の丘陵に連続する場所には、狭い削平地に愛宕神社が鎮座する。これより南方では、明瞭な堀切等は見られない。主郭・二の丸の東側、今回の調査地との間に南北に長い平坦地(曲輪)が北に向かって2段に造作されているのが観察できる。そこと主郭急崖の間に通路状のものがみられる。周辺地形観察から吉沢城跡は竹野川を望む西側と北側に急崖を設け、北側に広い谷と小川があり、この小川を外堀として利用していたと推測される。広い谷から南に入り込んだ今回調査地の北東の八幡神社が鎮座する場所に、櫓を想定すると、谷の入り口に大手口(木戸)を想定できる。今回の調査で、城の一部が明らかとなり、丹後の戦国時代の城の解明に貴重な資料が得られた。

なお、遺物整理にあたって鋤柄俊夫(同志社大学)、ならびに当調査研究センター伊野近富・引原茂治・森島康雄の教示を得た。

(石尾政信)

注1 平成11年度調査参加者は以下の通りである(順不同・敬称略)。

(作業員)平林秀夫・石井 清・石井節子・森野 務・岩佐正一・田宮節子・藤原悦子・藤原多津子・石嶋文恵・坪倉愛子・吉岡つや子・田家フミ子・安田正夫・松村 仁・上田辰巳・増田英男・黒川花恵

(整理員・補助員)平林直美・尾崎二三代・森野美智子・谷口勝江・金保真由美・金久真弓・谷辻絹代・吉岡美秋・伊熊佐知子・山本 絹・小笠原順子・山口奈美・山本弥生・丸谷はま子・及川あや子・板東伊吹・三好 玄・浦川真澄

また、現地調査・整理に関しては以下の方々からご指導、ご助言を賜った(順不同・敬称略)。

樋口隆康・都出比呂志・杉本 宏・岸本一宏・吹田直子・鋤柄俊夫・光谷拓美・佐藤晃二・三浦到・小山元孝・加藤晴彦・奈良康正・岡田章一・伊藤 太・黒崎 直

注2 今回、浄水施設という呼称を用いたが、浄水を得るという使用目的を推定して暫定的に使用しているため、今後、同種の遺構の性格が明らかになった場合、変更される可能性のある遺構名称である。また、周辺部の調査で遺構を圍繞する柵等の存在に注意したが、明確な遺構は検出されなかった。ただし、浄水施設2では柵状の施設を1列復原している。

注3 木製品の器種名、各部名称は基本的に「木器集成図録 近畿原始編」(『奈良国立文化財研究所史料』第36冊 奈良国立文化財研究所 1993)に拠った。また、建築部材の名称は宮本長二郎著『日本原始古代の住居建築』(中央公論美術出版 1996)を参考とした。

注4 高温石英を胎土中に多量に含む土器は、大宮町左坂古墳群・弥栄町大田南古墳群・福知山市寺ノ段古墳群・峰山町古殿遺跡など福田川流域以外の地域でも確認できる。他の砂礫組成について検討していないため、明確なことはいえないが、当地域で生産された土器が搬入された可能性は高い。

注5 三好博喜「臙のまつり」『太邇波考古学論集』 両丹考古学研究会 1997

注6 鍛冶関係遺物の記述は当調査研究センターの野島 永と(財)滋賀県文化財保護協会の大道和人氏のご教示に基づいている。

注7 戸原和人・鍋田 勇「古殿遺跡」(『京都府遺跡調査報告書』第9冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター 1988)

注8 高野陽子「近畿北部地域における墳墓供献土器について」(『庄内式土器研究』XV 庄内式土器研究会) 1998・「近畿地方北部における古墳成立期の墳墓(1)」(『京都府埋蔵文化財情報』74 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1999

注9 石井清司「各地域の様式編年 -丹後・丹波地域-」(『弥生土器の様式と編年』 木耳社) 1989

注10 肥後弘幸「丹後地域の弥生時代後期から古墳時代前期の土器編年(上)」(『太邇波考古』第7号 両丹考古学研究会) 1995

追記 写真図版第64に掲載している鉄未製品は、溝S D2016・2017よりも下層の包含層(溝S D2018内の堆積層、第25図A断面9層に相当)から出土したものである。全長63cmを測り、2つの直柄平鋏が接続された状態で削り出されている。図化は実施したものの実測図を掲載することができなかったので写真のみ掲載することとした。

圖 版

図版第1 浅後谷南遺跡



浅後谷南遺跡遠景（上空南から日本海を望む）



試掘トレンチ全景（垂直空中写真、上が北）

図版第3 浅後谷南遺跡



(1) 1 トレンチ掘削状況 (東から)



(2) 2 トレンチ溝S D01検出状況 (南東から)

図版第4 浅後谷南遺跡



(1) 2 トレンチ溝S D01検出状況
(南西から)



(2) 2 トレンチ下層板材出土状況
(南西から)



(3) 2 トレンチ下層矢板杭出土状況
(南西から)

図版第5 浅後谷南遺跡



(1) 3 トレンチ溝 S D01 検出状況 (北から)



(2) 3 トレンチ土器溜り検出状況 (北東から)

図版第6 浅後谷南遺跡



(1) 4 トレンチ全景 (南から)



(2) 4 トレンチ溝・柱穴痕検出状況 (南東から)

図版第7 浅後谷南遺跡

(1) 7 トレンチ全景 (南から)

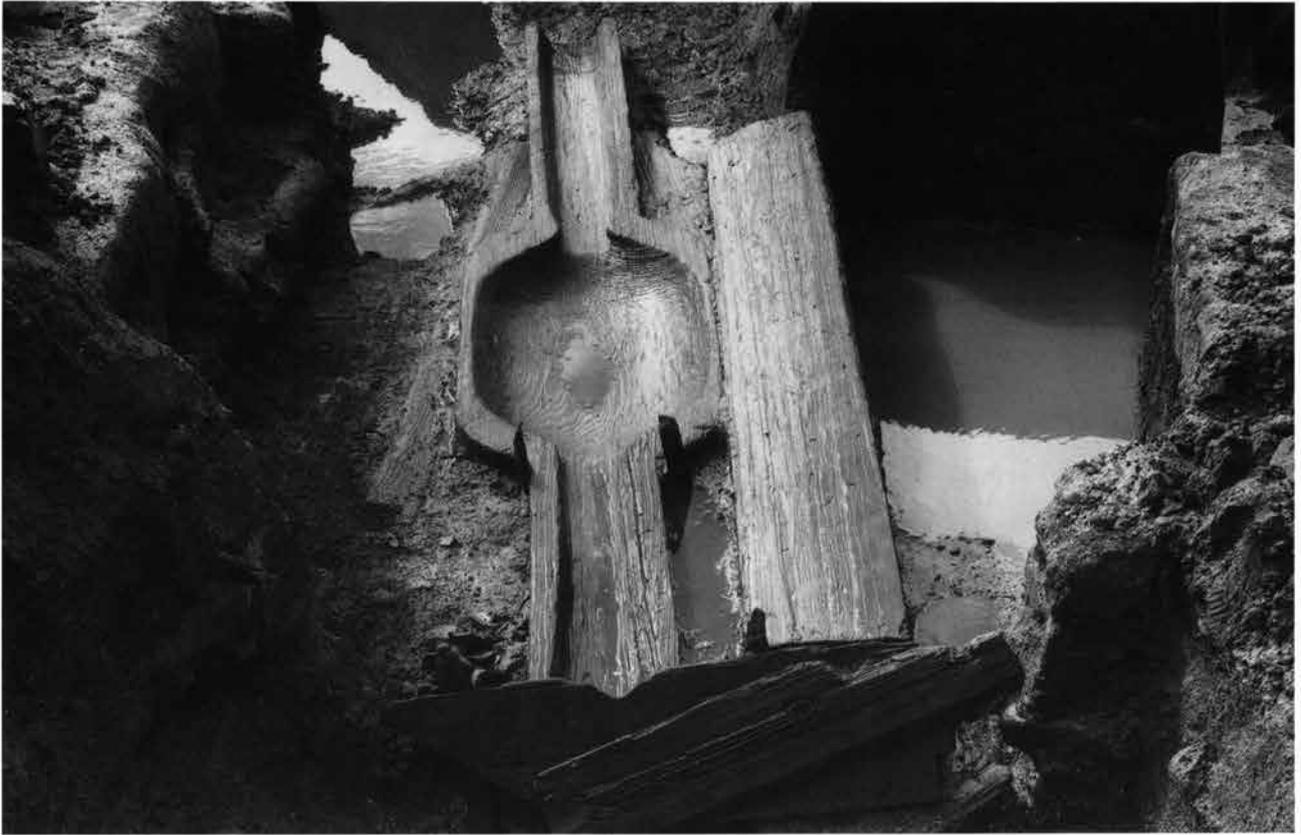


(2) 7 トレンチ作業風景 (南から)



(3) 7 トレンチ浄水施設1 (東から)





(1)浄水施設1 検出状況 (7トレンチ、東から)



(2)浄水施設1 堰状施設 (東から)



(1)導水管出水部（北東から）



(2)導水管入水部（北から）



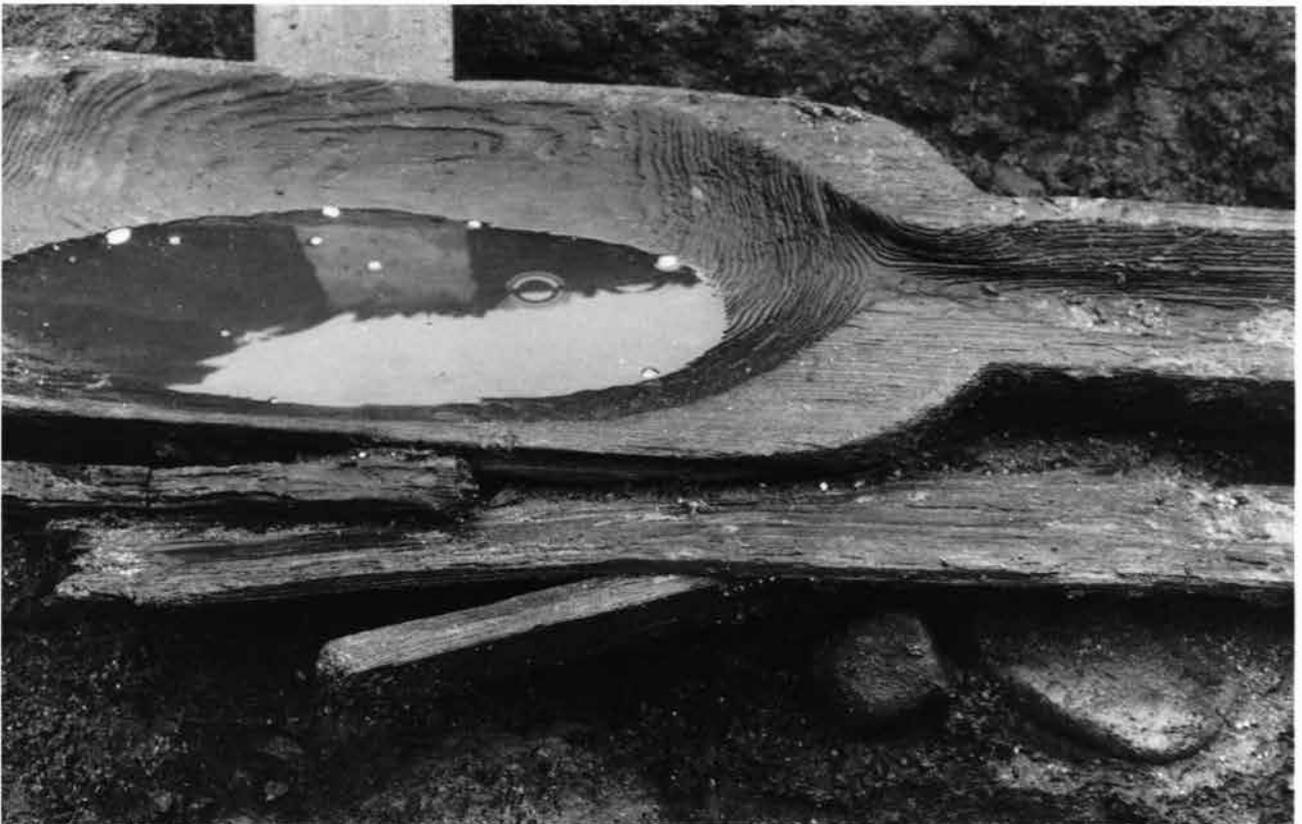
(1)導水管入水部付近（北西から）



(2)導水管入水部付近（西から）



(1)導水管槽状部（南から）



(2)導水管設置用部材（北から）



22-8

22-9



21-2

21-3

20-10

20-11



22-2



22-1



22-3



22-4



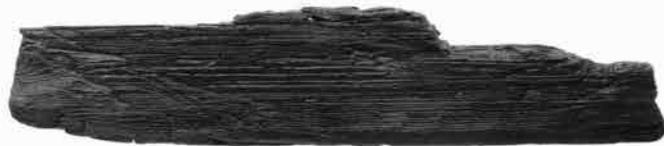
22-6



22-7



22-5



22-10





22-11



22-12



20-1



7-3



7-4



7-9



8-21



9-16



9-4

図版第15 浅後谷南遺跡



10-1



10-4



10-11



10-14



10-9



10-13



11-1



10-19



(1)A 地区上層遺構全景（上空から・上が東）



(2)A 地区下層遺構全景（上空から・上が東）

図版第17 浅後谷南遺跡

(1)浅後谷南遺跡遠景（東から）



(2)A地区谷部土層断面（西から）



(3)A地区谷部土層断面（北西から）



図版第18 浅後谷南遺跡



(1) A地区谷部土層断面
(溝S D2010 (古・新) 西から)



(2) A地区谷部土層断面
(溝S D2012 西から)



(3) A地区北壁土層断面 (南から)

(1)溝 S D 2018完掘状況 (南西から)



(2)溝 S D 2018作業風景 (南西から)



(3)竪穴式住居跡 S H01・02全景 (南西から)





(1) 竪穴式住居跡SH06全景
(南西から)



(2) 竪穴式住居跡SH08・09全景
(南西から)



(3) 竪穴式住居跡SH10・11全景
(南から)



(1) 竖穴状土坑 S K 2004 全景 (西から)



(2) 竖穴状土坑上面土器検出状況
(南から)



(3) 溝 S D 2010 (新) 検出状況
(南東から)



(1)溝S D2010(新)上層木製品検出
状況全景(西から)



(2)溝S D2010(新)上層木製品検出
状況全景(北西から)



(3)溝S D2010(新)・S D2011木製品
検出状況(北西から)

(1)溝S D2010 (新) 上層木製品検出
状況細部1 (西から)



(2)溝S D201 (新) 上層木製品検出
状況細部2 (北西から)



(3)溝S D2010 (新) 上層木製品検出
状況細部3 (北西から)



図版第24 浅後谷南遺跡



(1)溝 S D 2010 (新) 上層木製品検出
状況細部 4 (北から)



(2)溝 S D 2010 (新) 上層木製品検出
状況細部 5 (北から)



(3)溝 S D 2010 (新) 鋤検出状況
(南から)

(1)溝S D2010 (新) 木錘検出状況
(西から)



(2)溝S D2010 (新) 杵未製品・木槌
検出状況 (北から)



(3)溝S D2010 (新) 把手付槽検出状況
(南から)





(1)溝 S D 2010 (新) 鋤未製品検出状況
1 (東から)



(2)溝 S D 2010 (新) 鋤未製品検出状況
2 (北東から)



(3)溝 S D 2010 (新) 竪櫛検出状況
(西から)

(1)溝 S D2010 (新) 完掘状況
(北西から)



(2)溝 S D2010 (新) 堰状施設 1 検出
状況 (南東から)



(3)溝 S D2010 (新) 堰状施設 2 検出
状況 1 (南から)





(1)溝 S D 2010 (新) 堰状施設 2 検出
状況 2 (西から)



(2)溝 S D 2010 (新) 堰状施設 2 細部 1
(南から)



(3)溝 S D 2010 (新) 堰状施設 2 細部 2
(東から)

(1)溝S D2010 (新) 護岸施設1 検出
状況 (北西から)



(2)溝S D2010 (新) 護岸施設1 線刻板
検出状況 (南西から)



(3)溝S D2010 (新・古) 土層断面
(西から)





(1)溝 S D 2010 (古) 土師器検出状況
(北西から)



(2)溝 S D 2012 全景 (西から)



(3)溝 S D 2012 浄水施設 2 付近全景
(西から)

図版第31 浅後谷南遺跡

(1)溝 S D 2012浄水施設 2 近景 1
(西から)



(2)溝 S D 2012浄水施設 2 近景 2
(南東から)



(3)溝 S D 2012浄水施設 2 細部 1
(北から)



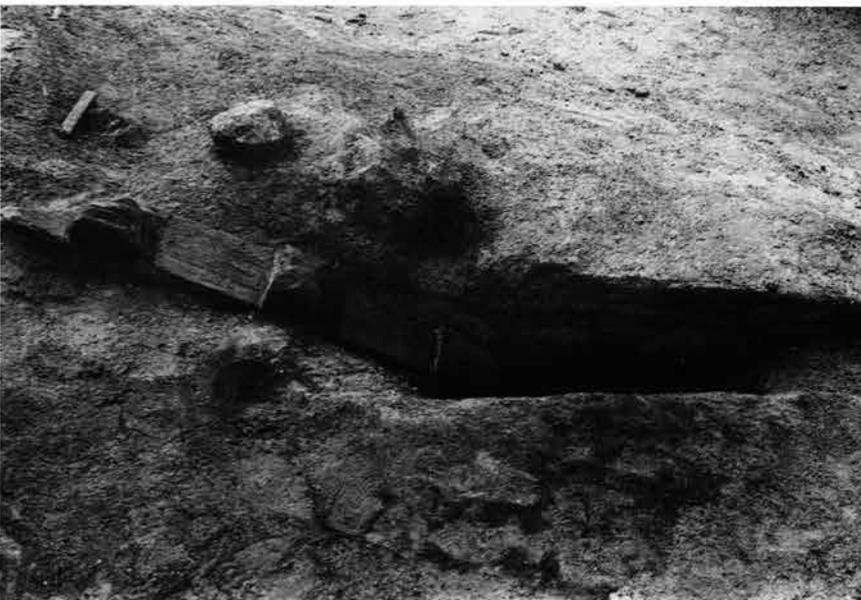
図版第32 浅後谷南遺跡



(1)溝 S D2012浄水施設 2 細部 2
(北から)



(2)溝 S D2012浄水施設 2 細部 3
(東から)



(3)溝 S D2012浄水施設 2 梯子検出状況
(西から)

(1)溝 S D2012浄水施設 2 付近遺物検出
状況 (南から)



(2)溝 S D2012浄水施設 2 付近大形槽
検出状況 (西から)



(3)溝 S D2012浄水施設 2 付近円盤状
木製品検出状況 (南から)





(1)溝 S D2012浄水施設 2 復原状況
(西から)



(2)溝 S D2012土層断面
(B断面 西から)



(3)溝 S D2012土層断面
(A断面 西から)



(1)溝 S D 2013 全景 (北西から)



(2)溝 S D 2013 遺物検出状況 (南から)



(3)溝 S D 2015 全景 (東から)



(1)土坑S K2003検出状況1 (東から)



(2)土坑S K2003検出状況2 (西から)



(3)土坑S K2003土師器検出状況細部1 (東から)

(1)土坑S K2003土師器検出状況細部2
(西から)



(2)土坑S K2003下部土師器検出状況
(東から)



(3)土坑S K2003土層断面 (東から)





(1)土坑 S K 2003完掘状況 (東から)



(2)溝 S D 2016 (新) 堰状施設検出状況 (東から)



(3)溝 S D 2016 (新) 護岸施設検出状況 (南から)

(1)溝 S D2016 (新) 桶検出状況
(東から)



(2)溝 S D2016 (古)・溝 S D2017
検出状況 (東から)



(3)溝 S D2016 (古) 堰状施設検出状況
1 (東から)





(1)溝 S D2016 (古) 堰状施設検出状況
2 (西から)



(2)溝 S D2016 (古) 堰状施設落水部
下部遺物検出状況 (東から)



(3)溝 S D2016 (新・古) 土層断面
(西から)

(1)溝 S D2017堰状施設検出状況 1
(東から)



(2)溝 S D2017堰状施設検出状況 2
(北東から)



(3)溝 S D2017鍬末製品検出状況
(北から)



図版第42 浅後谷南遺跡



(1)包含層木製品検出状況（東から）



(2)包含層弓検出状況（西から）



(3)包含層剣形木製品検出状況（西から）

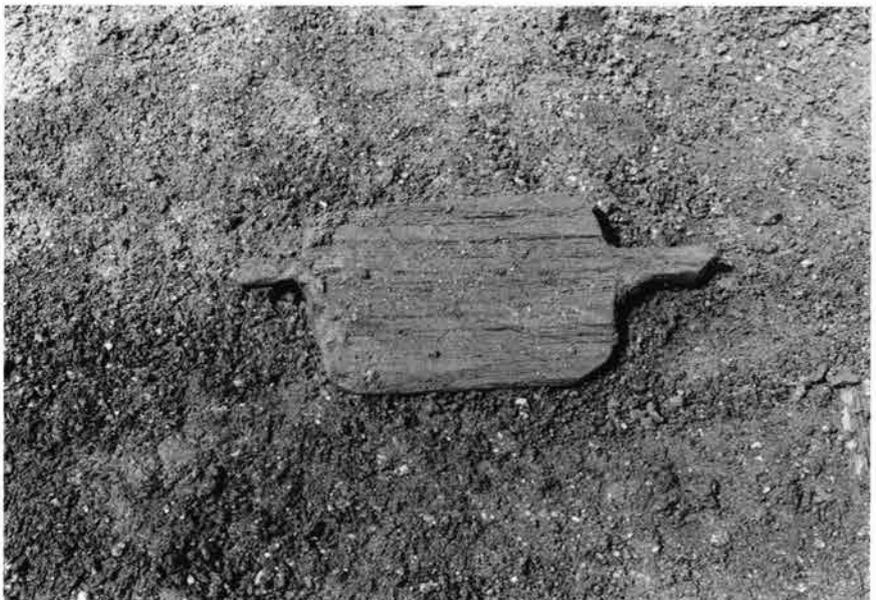
(1)包含層舟形槽検出状況（西から）



(2)包含層部材検出状況（西から）



(3)包含層箱材検出状況（西から）





(1)上層柱穴群検出状況 1 (南から)



(2)上層柱穴群検出状況 2 (北東から)



(3)上層柱穴群検出状況 3 (南東から)

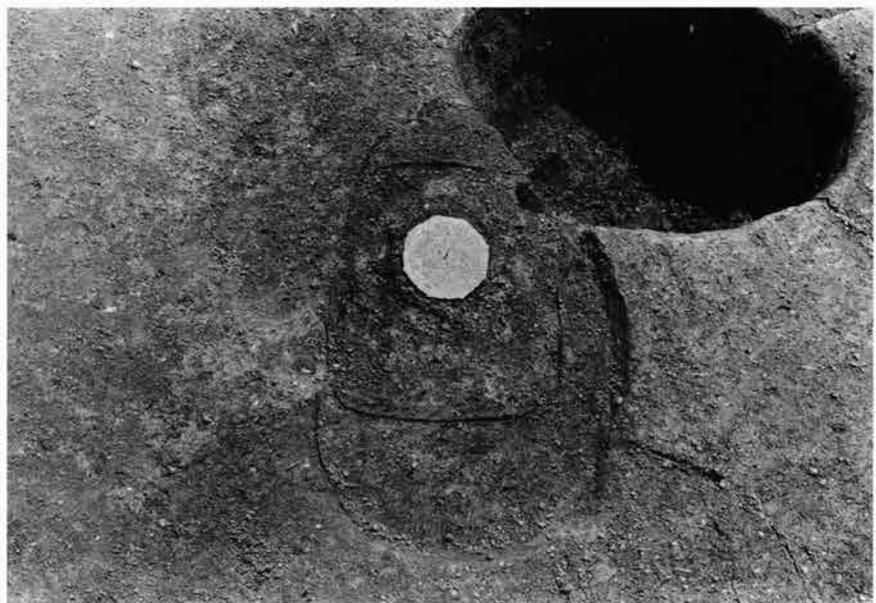
(1)掘立柱建物跡 S B 2001 検出状況
(北から)



(2)段状遺構 S H 03 検出状況 (南西から)



(3)土坑 S K 2001 鏡および木箱痕跡検出
状況 (北から)





(1)土坑S K 2001木箱内土層断面
(南から)



(2)土坑S K 2001木箱完掘状況
(南から)



(3)土坑S K 2001完掘状況 (南から)

(1)溝 S D2001全景 (西から)

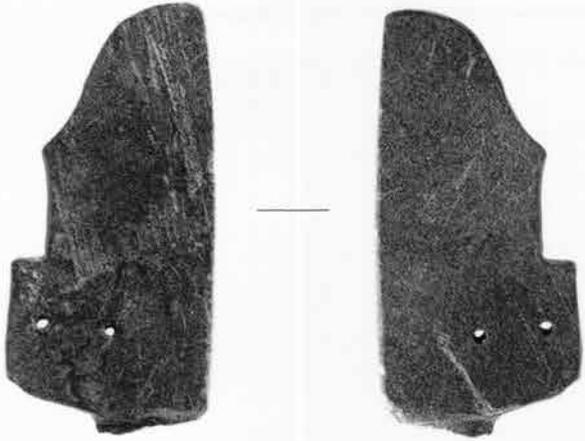


(2)溝 S D2001集石検出状況 (南西から)



(3)溝 S D2001刀形木製品検出状況 (南から)





27-1



27-7



27-2



27-3



27-4



27-5



36-46



56-3



56-8



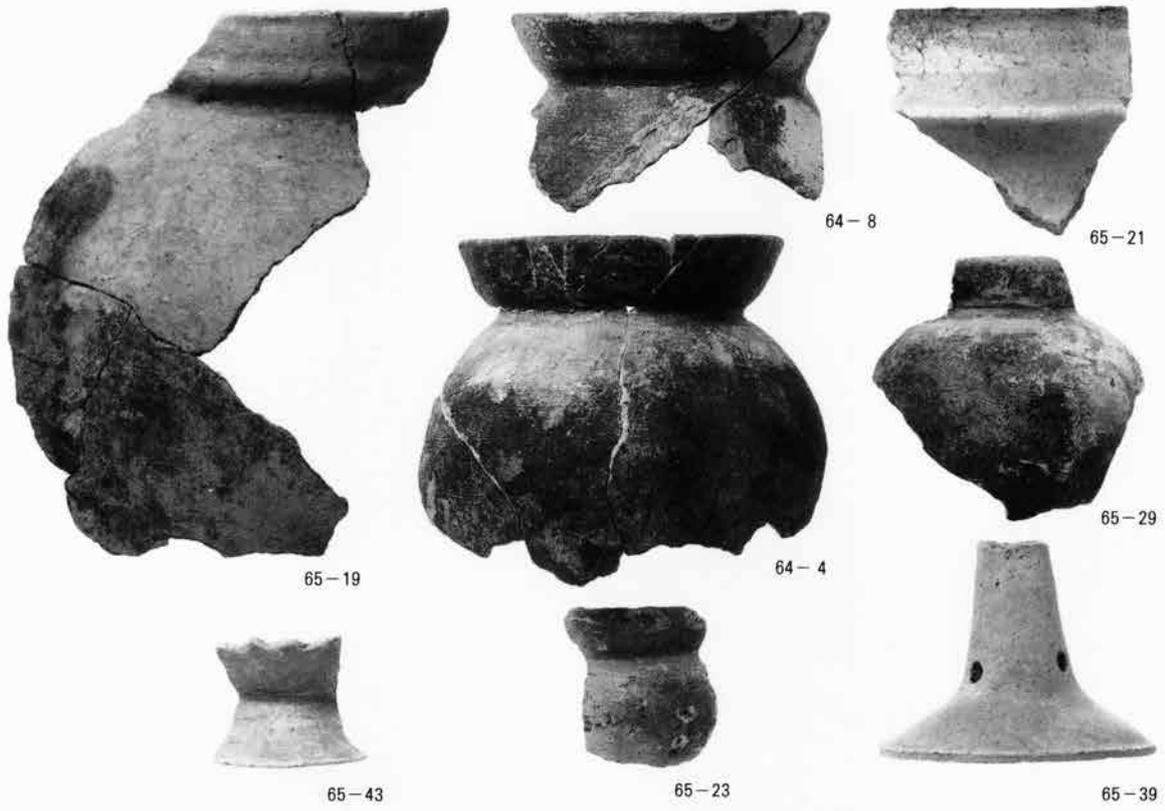
61-7



56-7



61-9



65-31

65-22



71-1



72-6



71-2



72-19



71-3



73-40



73-51



73-52



75-69



75-70



75-82



73-47



74-54



74-59



74-57



74-60



74-58



74-61



74-64



76-7



76-11



76-8



76-15



76-10



78-45



81-71



81-83



82-5



84-1



87-45



87-50



85-31



85-30



93-43



93-47



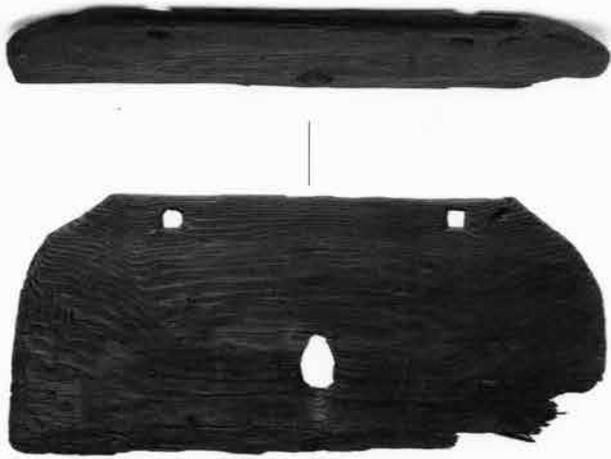
94-61



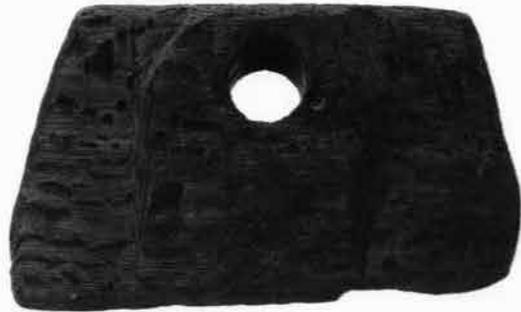
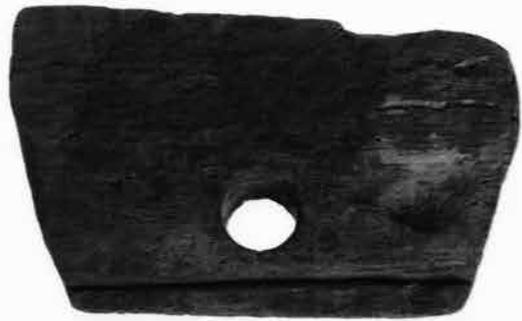
98-30



98-26



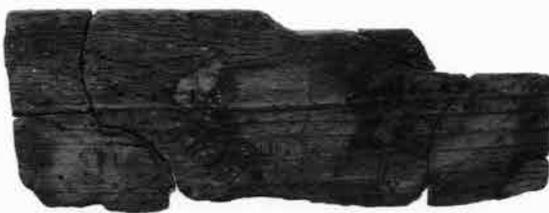
38-74



38-76



38-75



38-77



38-80



43-142



39-83



39-86



39-87



39-95



39-96



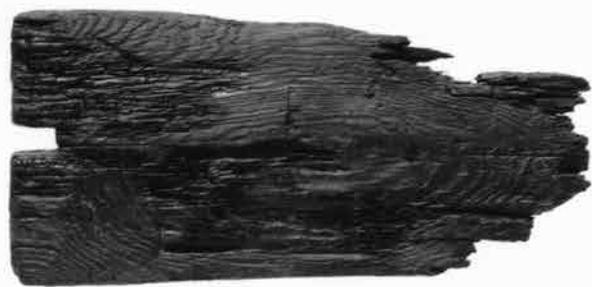
39-94



39-92



44-150



40-97



40-110



40-111



46-188



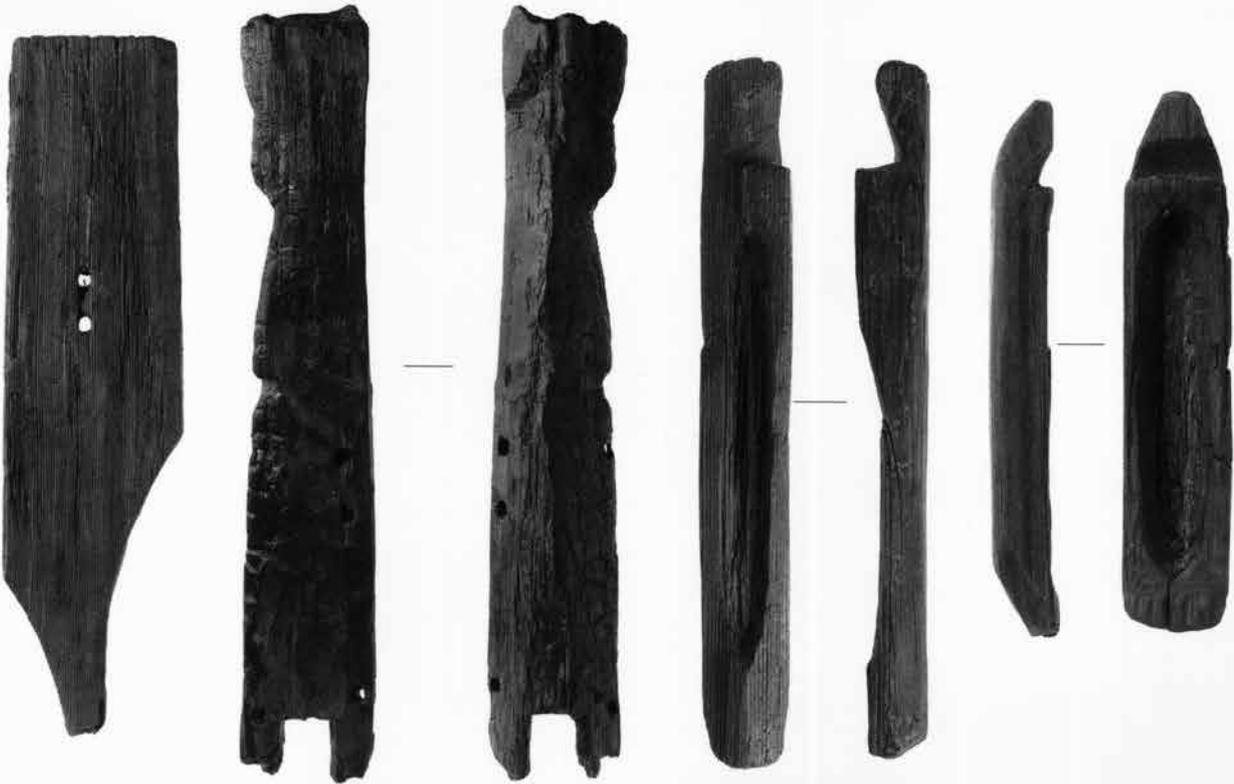
54-279



44-161



46-190



47-200

50-222

53-262

53-263



51-229



57-24



57-15



57-20



58-9



58-10



58-11



68-60

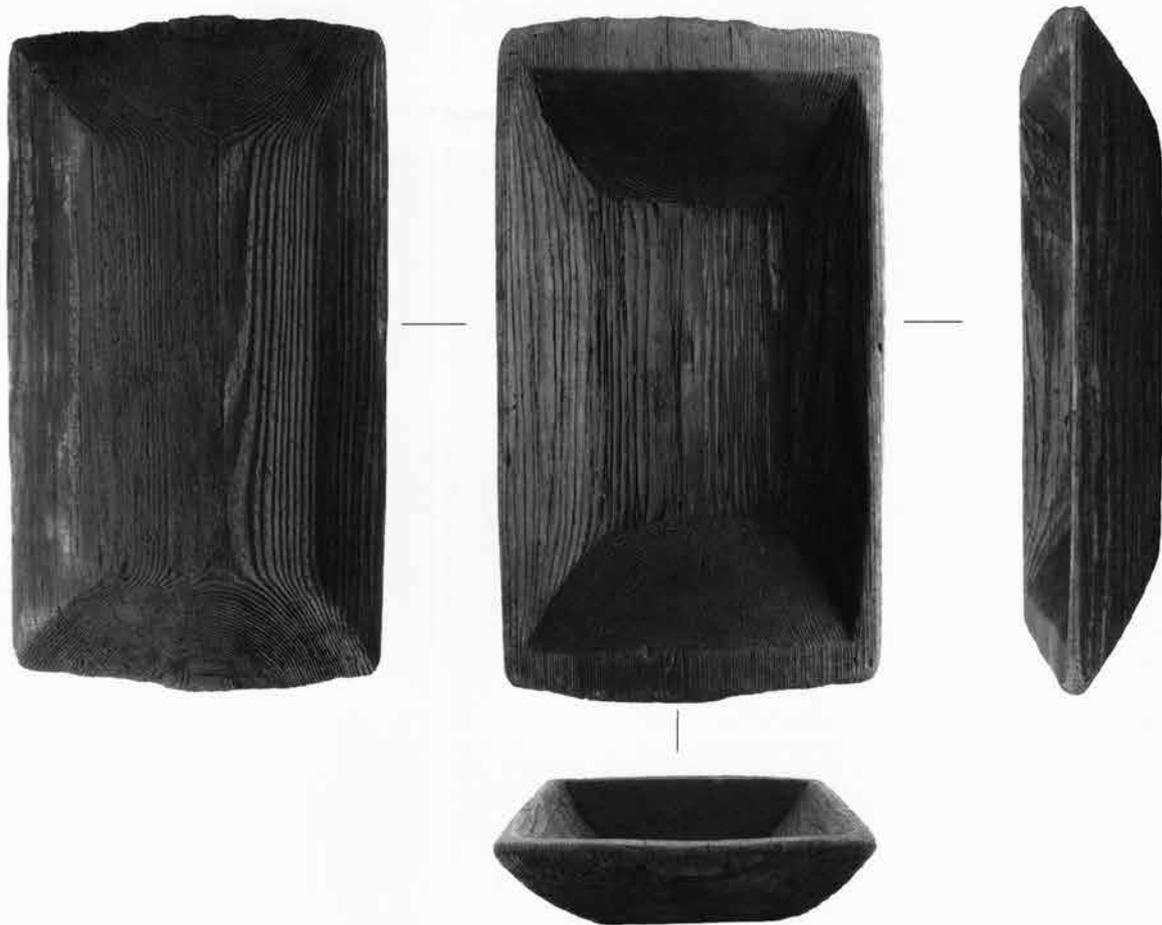


66-52



67-57





67-56



66-44

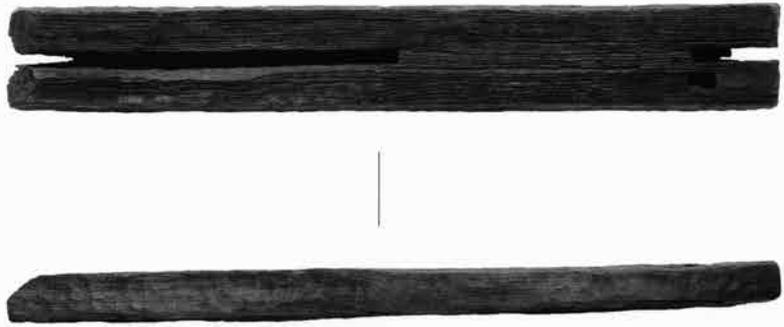


68-63

66-46



66-45



67-58



96-73

101-24



99-35



104-41



101-33



101-34



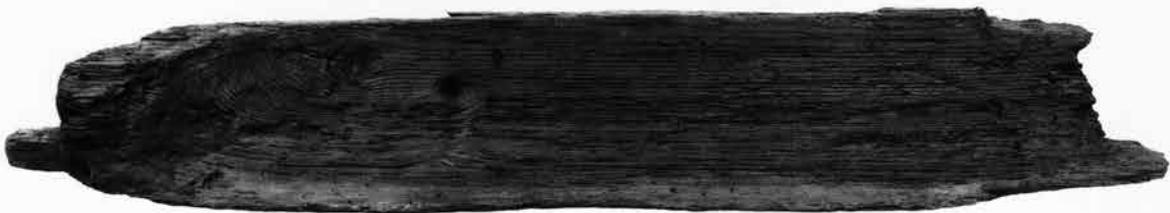
9層出土



100-21

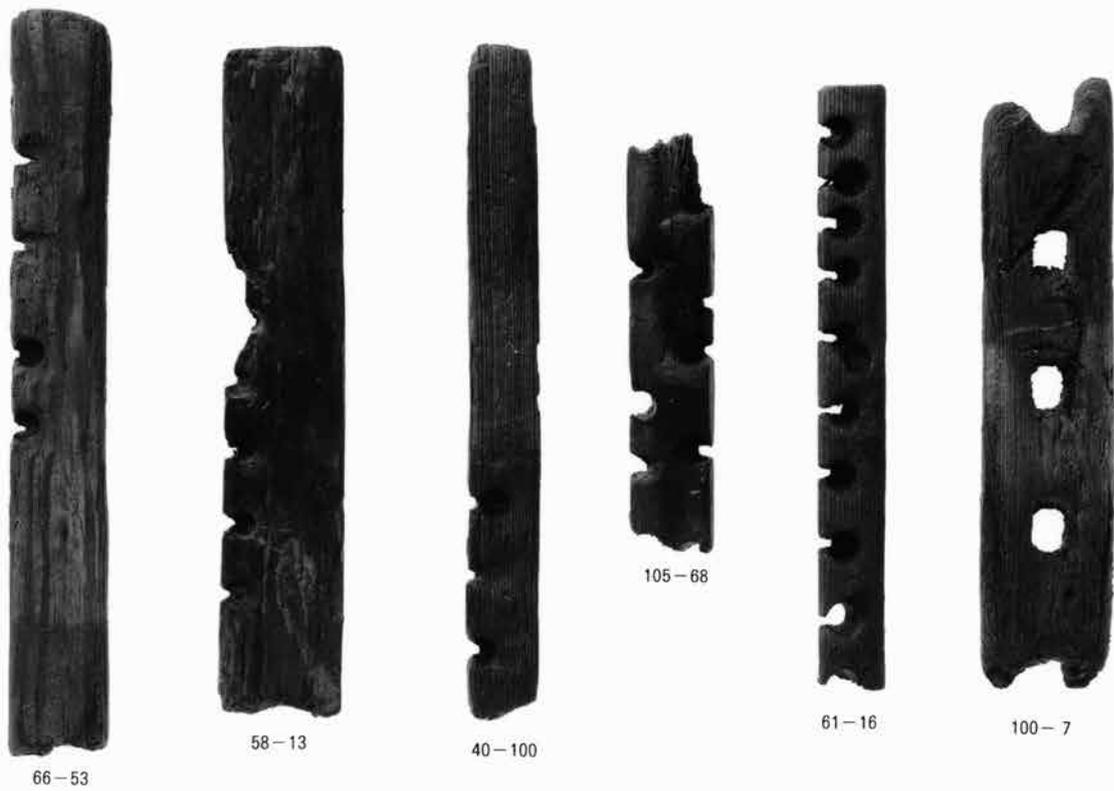
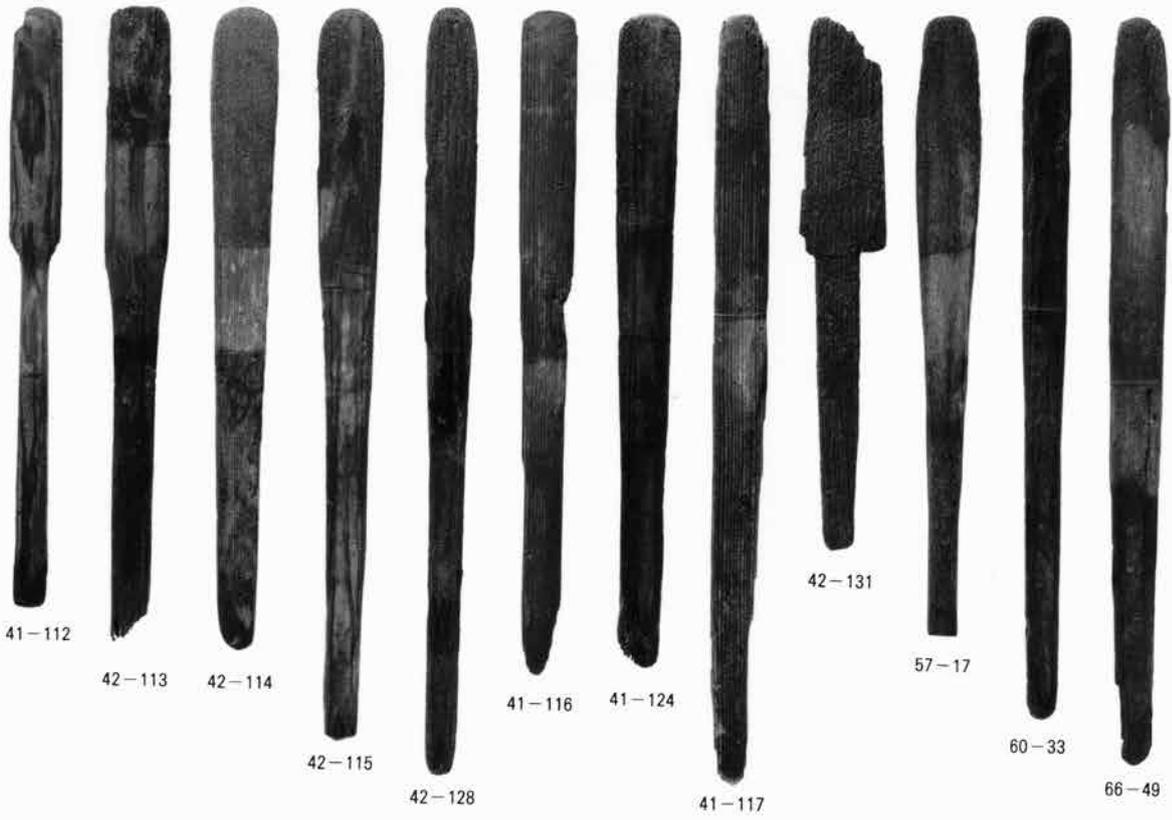


107-95



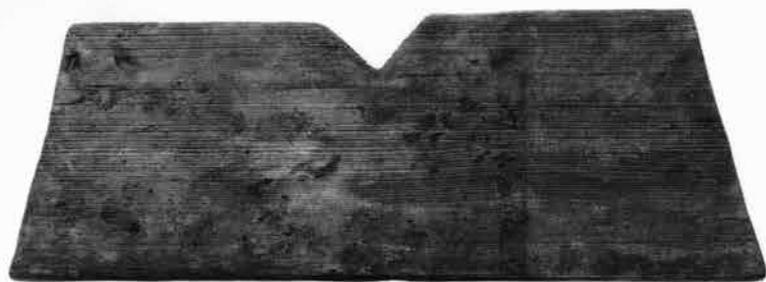
102-35

図版第65 浅後谷南遺跡



図版第66 浅後谷南遺跡





58-6



58-1



58-2



103-40



103-36



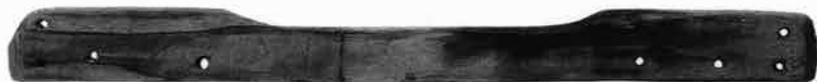
43-146



43-148



101-29



101-31



101-28



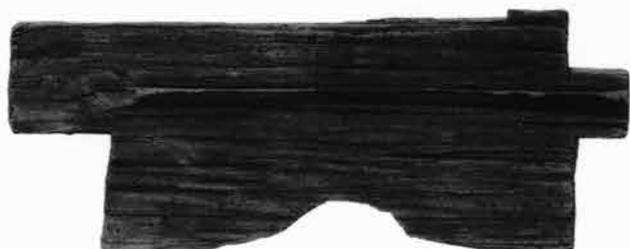
43-149



58-4



43-147



103-38



43-143

図版第68 浅後谷南遺跡



60-31



107-92



53-270



107-91



107-84



107-85



107-86



107-87



53-267



107-97



53-273



107-88



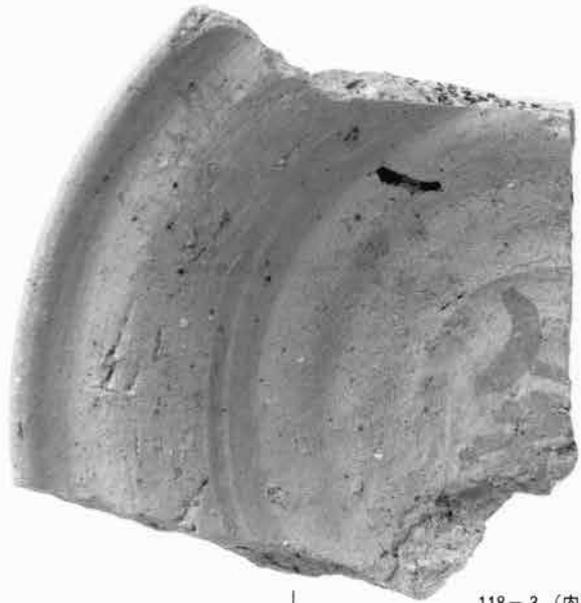
53-265



107-98



120-19



118-3 (内面)



120-19



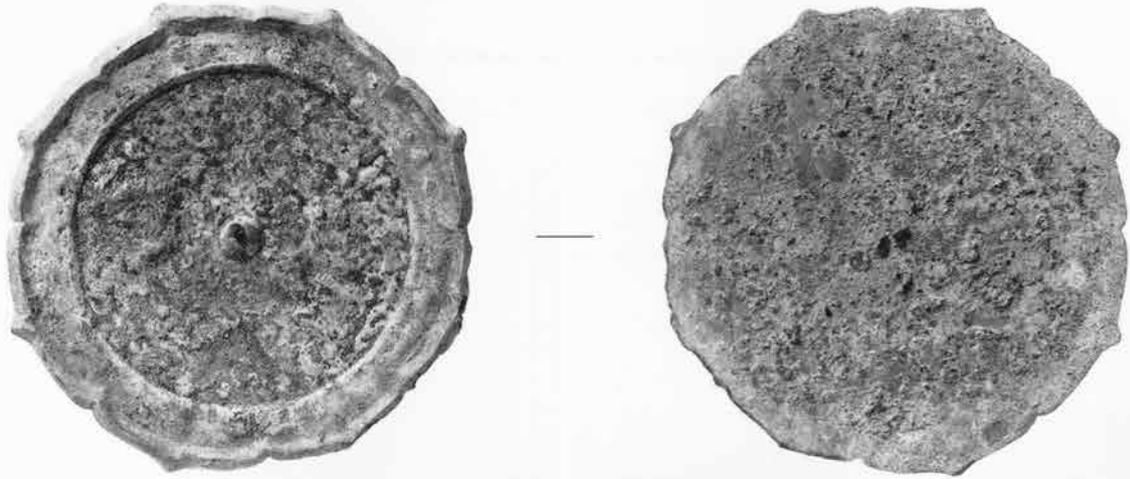
118-3 (外面)



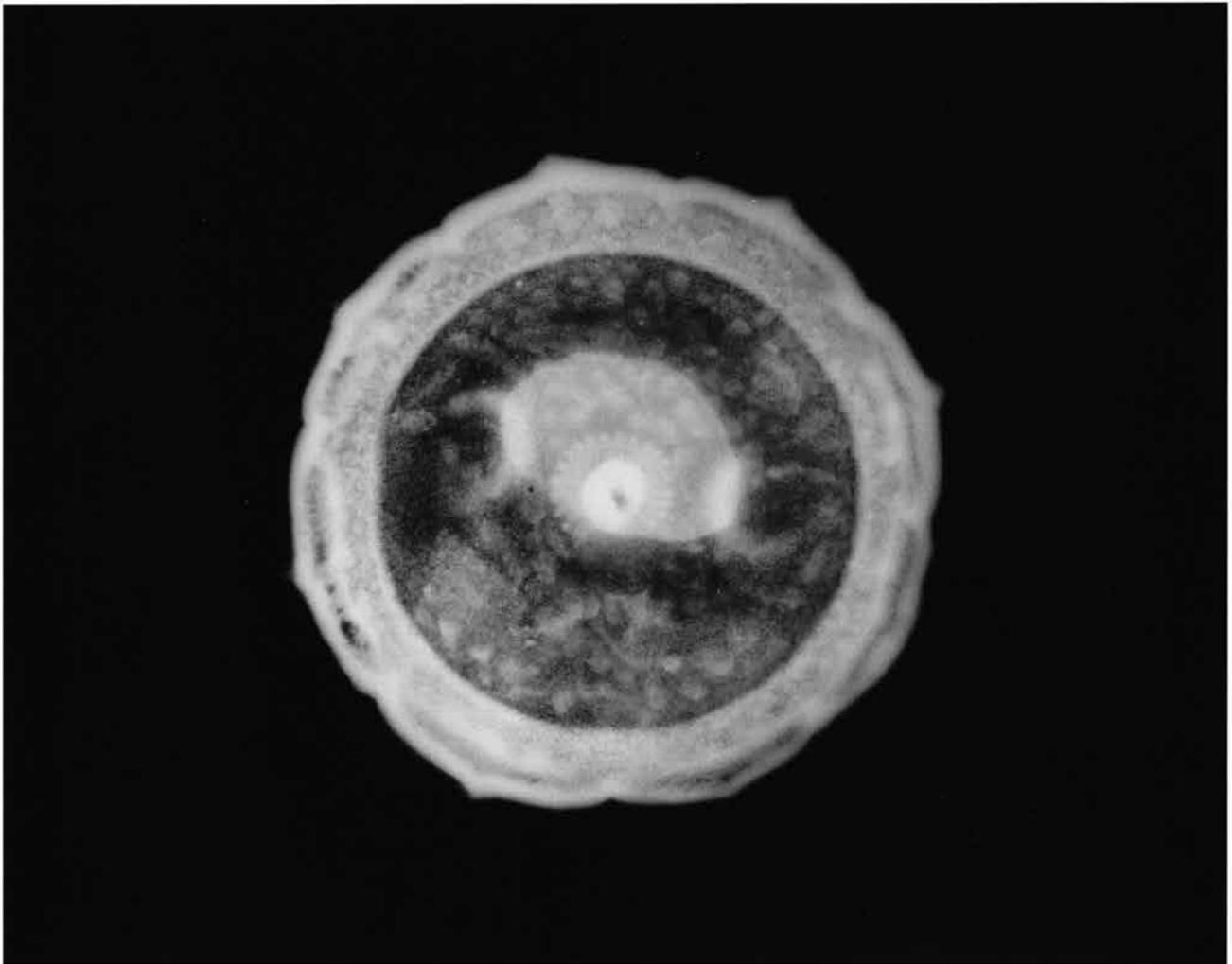
118-4



120-32



112-1



A地区出土遺物②3



(1)土層断面 (南から)



(2)トレンチ全景 (南から)



(3)S D08完掘状況 (南から)

図版第72 浅後谷南遺跡



(1) S H01完掘状況 (南から)



(2) S D09盛出土状況 (西から)



(3) S K07完掘状況 (北から)

図版第73 浅後谷南遺跡

(1)NR01土層断面 (北部・西から)



(2)NR01土層断面
(中央部・西から)



(3)NR01土層断面 (南部・西から)





(1)NR01第1遺構面完掘状況
(東から)



(2)NR01第2遺構面完掘状況
(東から)



(3)NR01第3遺構面完掘状況
(東から)



4



50



18



59



27



66



30



68



52



73



83



70



84



79



86



102



99



103



111



123



230



93



43



222



94



194



227



240



146



197



198



199



201



200



202



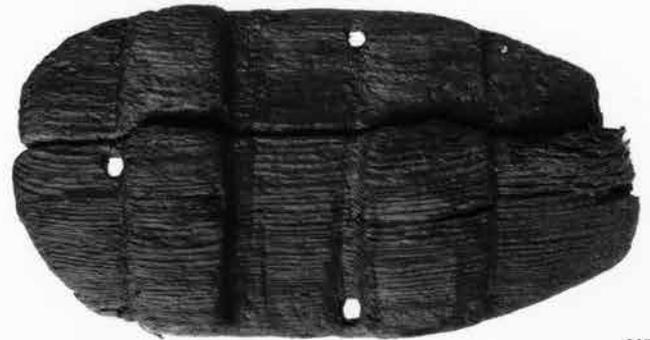
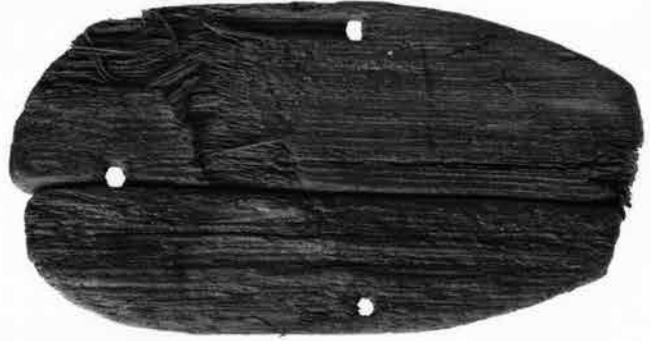
203



204



208



205



206



207



209



210



212



217



211



219



214



218



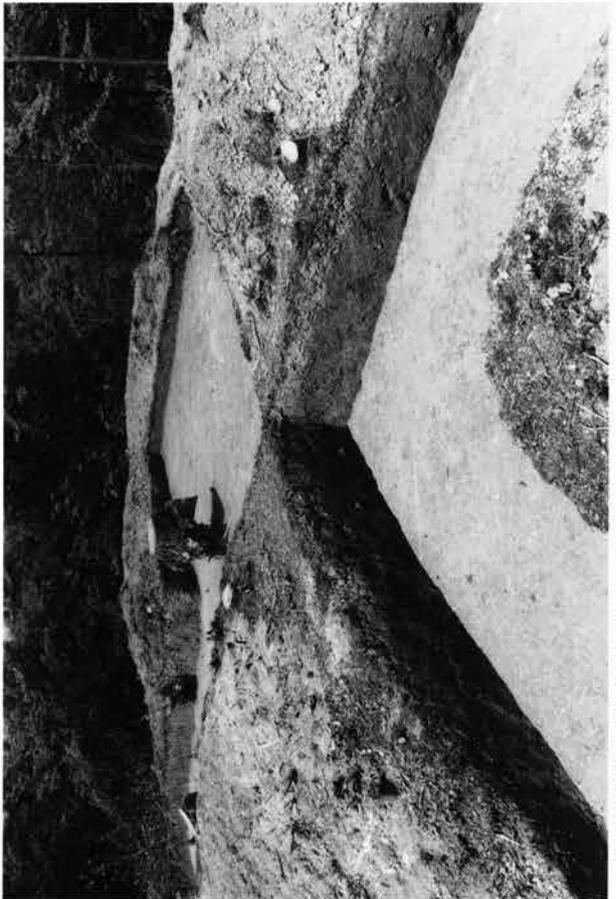
(3)11号墳調査前全景(北東から)



(4)11号墳調査後全景(北東から)



(1)9号墳調査前全景(南から)



(2)9号墳調査後全景(南から)

(1)調査前風景(北から)

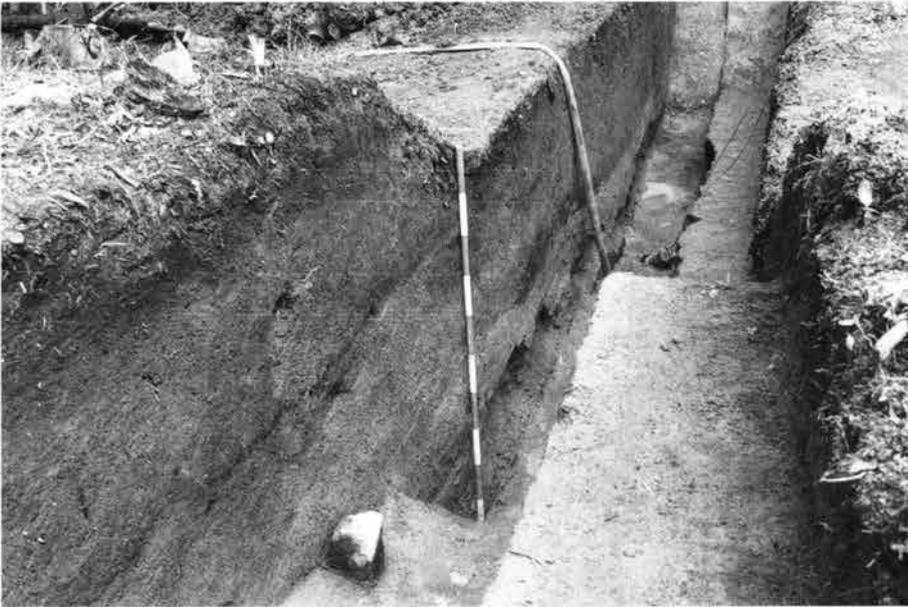


(2)調査前風景(東から)



(3)試掘調査風景(南東から)





(1) 試掘トレンチ谷筋流路跡北壁
土層断面 (南西から)



(2) 試掘トレンチ谷筋流路跡北壁
土層断面 (南東から)



(3) 試掘トレンチ中央部南壁土層
断面 (北西から)

(1)東側平坦地全景（南から）



(2)東側平坦地全景（北方から）



(3)東側平坦地テラス状遺構 S X 07
（西から）





(1)西側平坦地全景（北から）



(2)西側平坦地北部全景柵列S A18
ほか（南東から）



(3)西側平坦地中央部テラス状遺構
S X17ほか（東から）

(1)西側平坦地テラス状遺構 S X17
(北から)

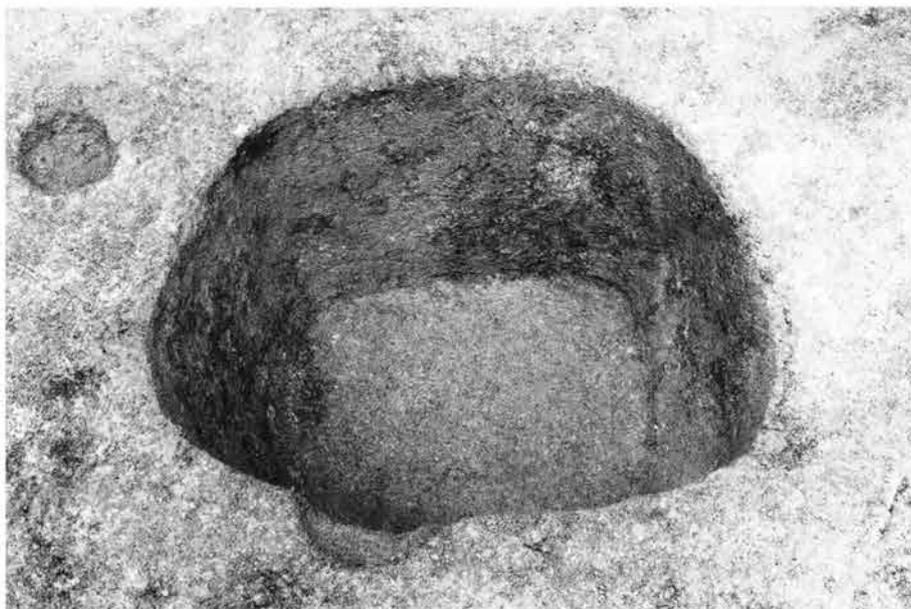


(2)西側平坦地排水溝 S D23と
柱穴群 (北から)



(3)西側平坦地南部土坑群
(S K20~22) (北から)





(1)土坑S K20完掘状況（東から）

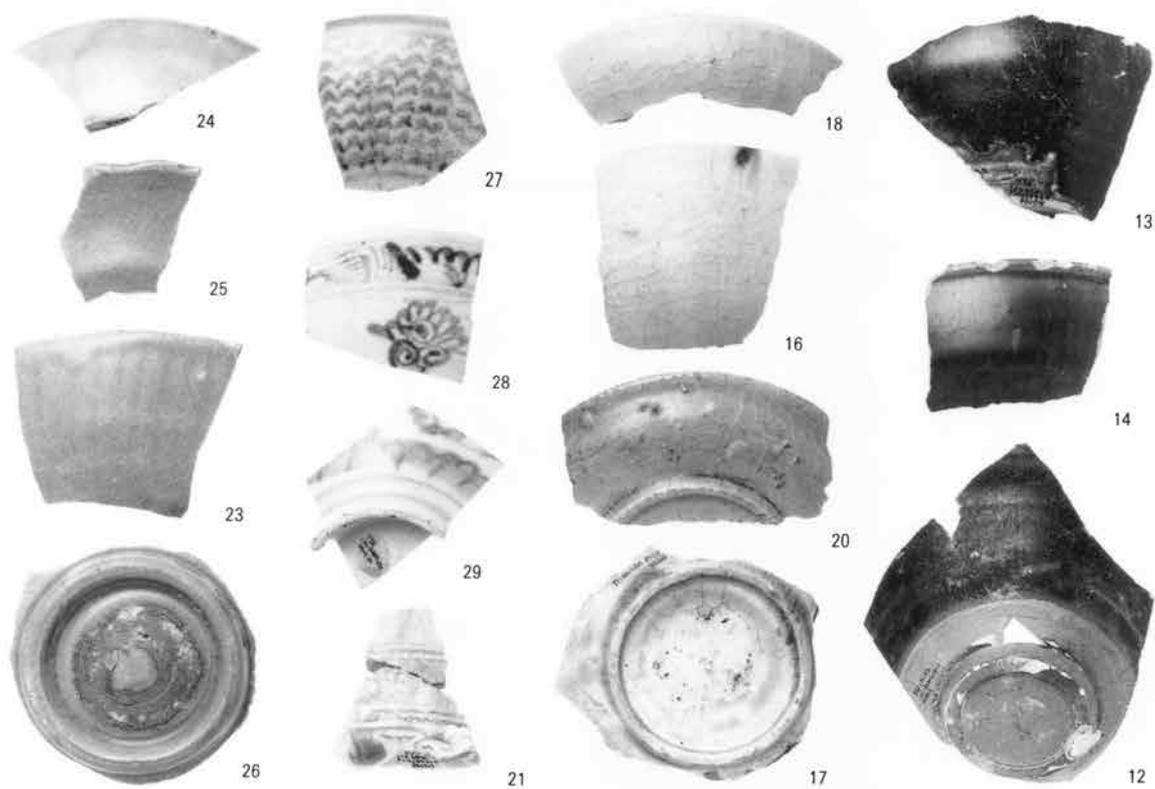


(2)土坑S K10完掘状況（北から）

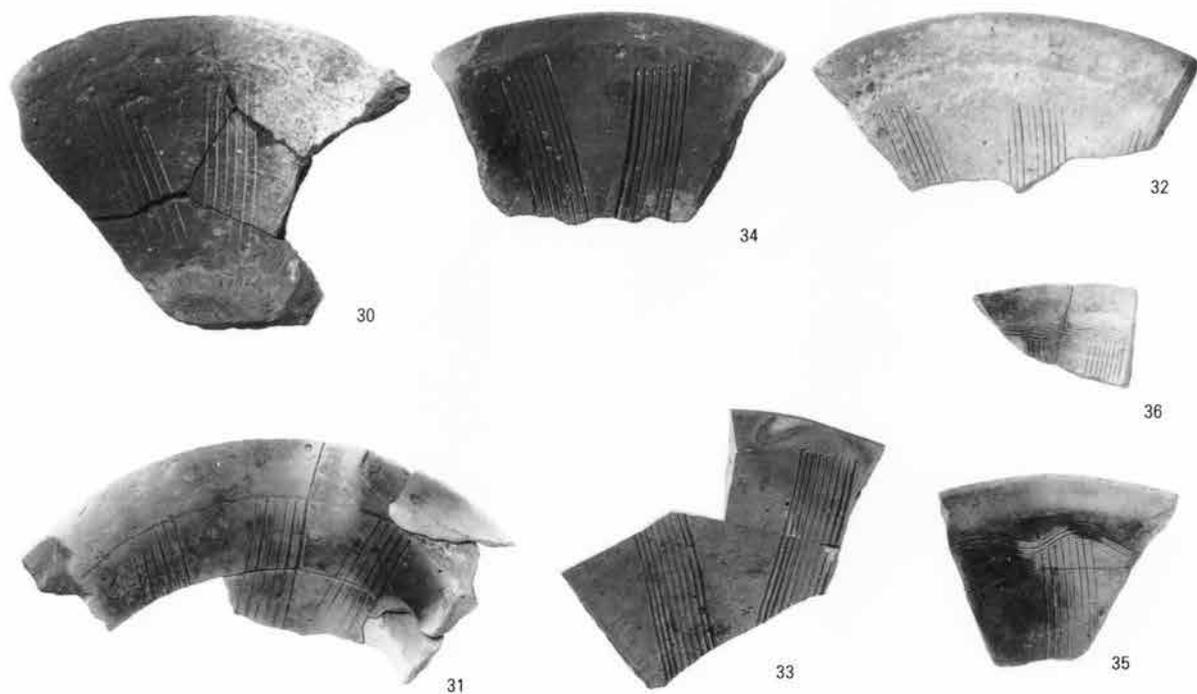


(3)土坑S K11鉄鎌出土状況（東から）

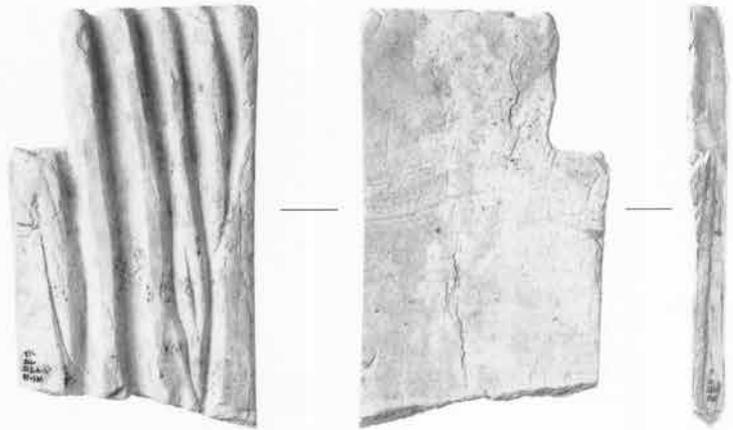
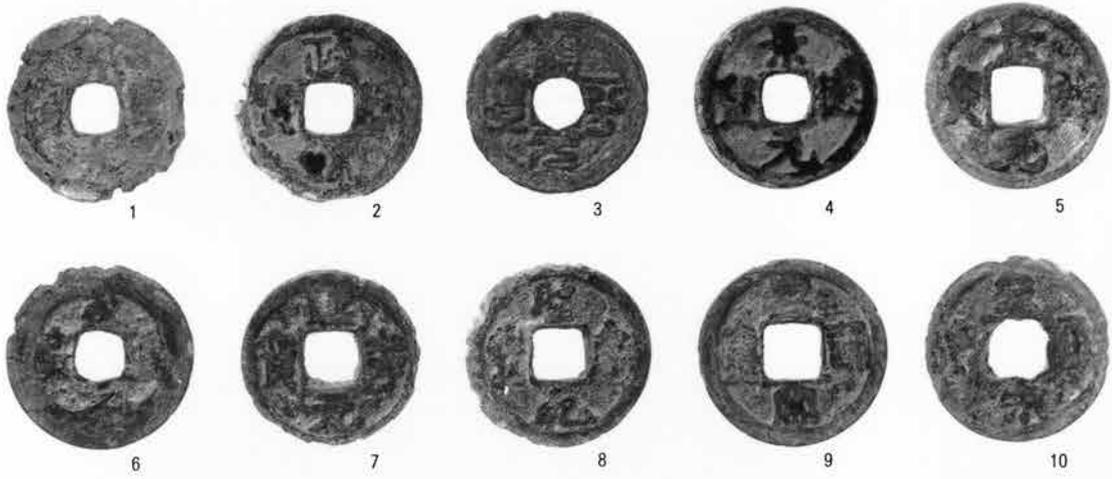
図版第87 吉沢城跡



(1)出土遺物(1)〈輸入陶磁器(青磁・染付)・瀬戸美濃焼・天目茶碗〉



(2)出土遺物(2)〈瓦質すり鉢〉



報告書抄録

ふりがな								
書名								
副書名								
巻次								
シリーズ名	京都府遺跡調査概報							
シリーズ番号	第93冊							
編著者名	石崎善久・黒坪一樹・福島孝行・石尾政信							
編集機関	(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター							
所在地	〒617-0002 京都府向日市寺戸町南垣内40-3				Phone	075(933)3877		
発行年月日	西暦 2000 年		3 月		26 日			
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	° ' "	° ' "		-	
あさごたにみ なみいせき	たけのぐんあみの ちょうくじょう							
浅後谷南遺跡	竹野郡網野町公庄	501		35° 39' 26"	135° 02' 21"	19971002 ~ 19980226 19980426 ~ 19981106	3,740	農地造成
はかのたにこ ふんぐん								
墓の谷古墳群	竹野郡弥栄町鳥取	503				19980511 ~ 19980528	140	農地造成
よっさわじょ うあと	たけのぐんやさか ちょうあざよっさわ こあざはかのたに							
吉沢城跡	竹野郡弥栄町字吉 沢小字墓ノ谷	503	67	35° 38' 19"	135° 05' 45"	19980518 ~ 19980929	800	農地造成
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
浅後谷南遺跡	集落	奈良・平安 古墳 弥生		掘立柱建物 竪穴住居・溝・導水施設 溝		須恵器・銅鏡 土器・木製品 弥生土器		
墓の谷古墳群	散布地							自然地形
吉沢城跡	山城	戦国		土坑・柱穴・溝 テラス状遺構		天目茶碗・土師皿・ 中国陶磁・銅製品・ 石製品		

京都府遺跡調査概報 第93冊

平成12年3月26日

発行 (財)京都府埋蔵文化財調査研究
センター

〒617-0002 向日市寺戸町南垣内40番の3
Phone (075)933-3877 (代)

印刷 三星商事印刷株式会社

〒604-0093 京都市中京区新町通竹屋町下ル
Phone (075)256-0961 (代)

『京都府遺跡調査概報』第93冊正誤表

頁	場所	誤	正
目次			
Ⅱ	表	墓の谷古墳群	墓ノ谷古墳群
Ⅱ	表	小字墓ノ谷	小字裏ノ谷
XⅢ	9行	墓の谷古墳群	墓ノ谷古墳群
1. 浅後谷南遺跡			
P 3	15行目	網野駅まで、は	網野駅までは
P 97	1行目	溝S D F 2017	溝S D 2017
P 102	43行目	搬品	搬入品
P 108	6行目	57は	52は
P 111	7行目	浄水施設	堰状施設
P 111	8行目	浄水施設	堰状施設
P 125	1行目	S D 08	S D 05
P 146	24行目	S D 08	S D 05
P 147	12行目	溝3条	溝5条
P 155	12行目	M T 151型式	M T 15型式
P 177	8行目	基幹、用水路	基幹用水路
P 177	20行目	は時期	土師器
3. 吉沢城跡			
P 197	5行目	折縁皿	端反皿
P 197	16行目	削り取った皿	削り取った稜花皿
P 197	23・24行目	横線	圈線

なお、P 91第75図80の高杯は下層からの混入品であることが脱稿後の検討により明らかとなった。ここで訂正させていただきたい